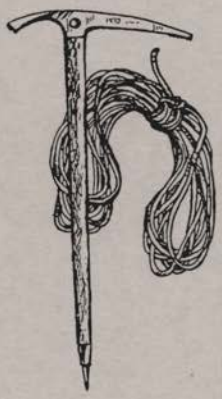
山岳



Vol.93／1998

KAMOSHIKA



'98年春、チョモランマ、8人登頂を導いたエスパース。

1970年カモシカのオリジナルテントとして開発されたエスパース。
現在ではスリーシーズン用から厳冬期遠征仕様まで7機種がラインナップされ、数多くの登山者や冒険家に愛用されています。

日本勤労者山岳連盟チョモランマ隊'98
チョモランマ・C6（8,200m）後方はチャンツェ（7,583m） 撮影・近藤和美
※写真の登山隊で使用されたエスパース4〜5人用は、登山隊の要望でインナーフレームを取り付けた改造モデルです。

カモシカスポーツは登山家の信頼に応えます。





カモシカスポーツ

山の店・本　店 ☎03(3371)4333
〒169-0075
東京都新宿区高田馬場3-3-3

山の店・横浜店 ☎045(212)2044
〒231-0062
神奈川県横浜市中区桜木町3-11

●AM10:30〜PM8:00（月〜金）
AM10:30〜PM7:00（土・日・祝）
●定休日／日曜日
（6月・7月・8月・12月は定休日なし。他の月は最初と最後の日曜日は営業します）

※駐車場はありませんので、車でのご来店はお避けください。

第九十三年(通巻一五一号)

山岳

一九九八年

山岳　一九九八年　目次

田部重治の登山と英文学（上）……五十嶋一晃……7
佐藤久一朗――山岳会への偉大な貢献
――名クライマー、芸術家、友情厚き小柄な巨人の生涯――……山田二郎……41
登山史上稀有の人　ラインホルト・メスナー
――「山と人が出会うとき、偉大なことが生じる」ウィリアム・ブレイク――……田口二郎……55
アルバータ峰のピッケル……田島守……64

ミニヤ・コンカの輝く微笑み
――札幌山岳会貢嘎山登山隊一九九七……芳賀正志……71
勇あるのみ
――ダウラギリⅠ峰、ガッシャーブルムⅠ峰そしてマナスル……小西浩文……80
ナムナニ峰登頂
――日本山岳会福岡支部納木那尼峰登山隊……太田五雄……86
ガッシャーブルムⅠ峰、Ⅱ峰、ブロード・ピーク登頂
――群馬県カラコルム登山隊一九九七……名塚秀二……94
K2西稜から未到の西壁へ
――日本山岳会東海支部K2学術登山隊一九九七……田辺治……102

グルグルムスターグ初登頂
——静岡大学天山登山隊一九九七……大石　惇……110
全員二十歳代でアマダブラムに登頂
——一九九七年福岡アマダブラム登山隊遠征記録……上田恵爾……117
白き山からの生還
——日本山岳会青年部ダウラギリⅠ峰登山隊一九九七の記録……松原尚之……122
マナスル北東面初登ルートよりの登頂
——明治大学マナスル登山隊一九九七年の記録……三谷統一郎……129
カンチェンジュンガ主峰登頂（北面より）
——一九九八年、日本山岳会青年部カンチェンジュンガ登山隊……谷川太郎……136
憧れのマッキンリー・冬……栗林正寿……144

図書紹介

『マカール東稜』（高橋和弘）、『日本のクラシックルート』（松本龍雄）、『多雨林と火山—インドネシアの自然と人々—』（中村太郎）、『槍ヶ岳開山　播隆』（大森久雄）、『空へ』（渡邉玉枝）、『フラム号北極海横断記—北の果て—』（渡辺興亜）、『ミニヤコンカ初登頂』（山森欣一）、『串田孫一集3「岩の沈黙　山行」』（粕谷俊矩）、『水越武写真集「森林列島」』（杉本　誠）、『能海寛遺稿』（泉　久恵）、『熱き心』（田邊壽）、『エベレスト遥かなり』（渡辺兵力）……151

*

追　悼……191
中澤眞二氏（松田雄一）、吉沢一郎氏（中島　寛）、伊藤紀克氏（相川　修）、那須川浩氏（堀田弥一・中村太郎）、片山英一氏（桑田　結）、今井友之助氏（村木潤次郎）、田村嗣一氏（長尾悌夫）、大屋悌二氏（村木潤次郎）、尹宮炳氏（南山金一）、原田達也氏（神崎忠男）、広島三朗氏（重廣恒夫）、佐々木豊喜氏（柴崎　徹）、高見和成氏（鹿野勝彦）、盧周孝氏（太田五雄）、会報「山」訃報・追悼文一覧

＊

支部だより……231
会務報告（一九九七年六月～一九九八年五月）……251

山岳図書目録……A92
田部重治略年表……A73
南アルプス林道の現状と課題……岡　澤　修　一……A55
英文梗概……A28
Reinhoid Messner; a unique figure in mountaineering history ……Jiro TAGUCHI……A27
HIMALAYAN HEIGHTS ……Ram Kumar Panday……A19

写　真

海外登山の記録……80～81
追　悼……192～193

表紙挿絵・本文中カット　佐藤知恵子

田部重治の登山と英文学（上）

五十嶋　一　晃

一、はじめに

田部重治は英文学者であるとともに日本における近代登山の先駆者でもあり、探検時代のパイオニアの一人であった。同時に今日の誰でもが容易に登れる登山の普及に絶大な役割を果たした人である。

一九一九年に『日本アルプスと秩父巡禮』を刊行し、それを改定増補して一九二九年に発刊した『山と溪谷』は、山の魅力をあますところなく描き、当時の青少年はそれを読んだことによって山登りの虜になったというくらい、大正から昭和初期の登山活動を啓発させた。したがって山登りの紀行文集を刊行した頃より一九五〇年ころまでは、登山家の中でも最も多くの人々に親しまれていたといえよう。

田部自身は「山が自分に与えた影響の大きさに驚く。自分の人生観、学問に対する見方、仕方すらそれによって影響されていることの深いことを知る。山と云う存在がなかったら、自分の生活は何と云う寂しいものであったろうと感ぜざるを得ない」（一九六八年『忘れえぬ山旅』自序）あるいは「生きることの幸福は最も多く登山にあるように

思われた。今から考えるとその頃が一生の内で最も、楽しかったような気がする」（一九六四年『わが山旅五十年』）など、田部の著書の随所に登山によって田部自身が自己生成したこと、登山によって培われた積極的な姿勢が、一時疑問視していた学問の分野における自信の回復につながったことを重ねて吐露している。

私が田部の小伝をまとめたいと考えた動機は、一つには、田部が私の出身母体である法大山岳部の初代部長であった。二つ目には、田部が北アルプスの大多和峠から太郎兵衛平に至るまでの雄大な森林美にうたれ、この森林の美を最初に見出し発表した。この道を一九五五年に、私たちが太郎小屋建設のために廃道を整備し、大多和の集落から太郎兵衛平までの資材の荷揚げをした思い出深い経験がある。三つ目に、田部は富山県上新川郡の出身であるが、私も同じ上新川郡に生まれ育った。高校へ通学していた頃は、通学の途中に田部の生地山室を通っていたので親しみがあった。以上の三点から常々田部の著書を買い求めて読んだり、田部の阿佐ヶ谷の自宅や法大山岳部およびそのOB会である山想会の会合で、田部から山の話を聞いて感動していたことによる。

なお、この稿は当初法大山岳部の機関誌『山想』に掲載する予定で起草していたが、日本山岳会の織内信彦名誉会員はじめ『山岳』編集関係者の方々から『山岳』への掲載を薦められ、再度内容の点検と推敲を加えた小論である。

田部の登山観や日本の山々を隈なく歩いた真髄は、田部の著書を熟読することによってよく理解できるので、著書からの引用はかなり多いものになる。その方が田部の山に対する心象が誤りなく伝えられ、より力強く具現化されると思うので極力私見を控えた。

引用文は、わずかではあるが旧漢字を現在の表記に替え、人名、山名、書名などは時代的背景をもたせるため、著者または訳者の著述時点での表記にしたがった。

一面、著書は版を重ねるごとに加筆推敲を施しているので、同じ題目の文章でも版によって部分的に差異がみられる。ここではできうるかぎり初出あるいはそれに近い文章を引用した。

田部の生い立ちなどは田部の著書に折に触れて書き残されているので、ここでは登山と英文学の研究領域に集約し、

それ以外のことは若干触れてはいるが、巻末の「田部重治　略年譜」に登山以外のことを挿入したので、参照いただきたい。

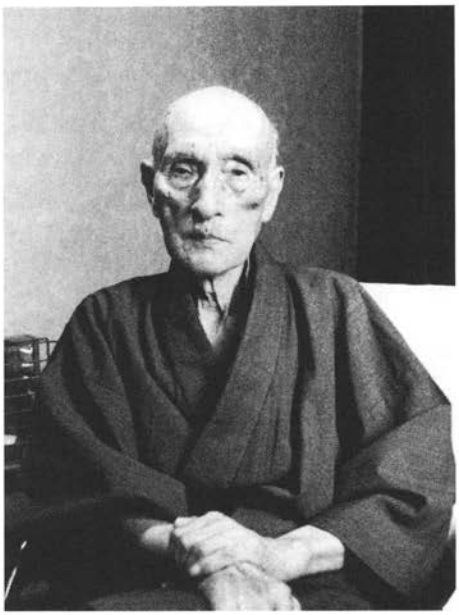
二、田部登山の一般的とらえ方

田部重治の登山活動は幅の広い、個性的なものであり、特定の主張や固定観念でとらえてはならない。しかし、現実には田部の登山は静観的といわれるイメージで受け止められている。そこで、まず、田部の登山のごく一般的な見方を著書から抽出してみよう。

田部の登山観を一語で表現する「山旅」という言葉について、『わが山旅五十年』の自序にこう書いている。

「山旅という言葉は、日本の登山を表わすに好適な表現だと、私は前から信じている。ヒマラヤやアルプスの登山を山旅と称することは、決して適切な表現とは思われない。しかし日本に於ては、登山の旅は、単に山頂だけでなく、峠、高原、山湖、渓谷、森林、時には山村などをも対象とする、山岳地方の旅を含み、且つこれ等のものは、山頂に劣らず、それぞれ独立の価値をもって、登山者を誘引する魅力をもっているので、山頂およびこれ等一切のものを含む登山の旅を、山旅という言葉をもって表現することは極めて適切であると思う」と現し、田部のいう〝山旅〟という言葉の定義づけを行っている。

晩年とくに囲炉裏を囲んで村人と親しく語り合い、



田部重治（東京・阿佐ヶ谷の田部宅にて、死去の２カ月前に富山支部井上晃会員撮影）

伝説に耳を傾ける山村や古跡、温泉をも含めた情緒ある山旅を好んだことも、田部の登山を象徴しているようであるが、登山を好んだ日本人としては当然の帰結であろう。

田部は普段の生活が何事にも関心をもち、何事にも感動する姿勢であった。これが新しいものの発見につながり、森林、渓谷など当時の日本の登山者が感じていなかったものを見出す原動力になっていた。

後述する一九一九年の慶應義塾山岳會の講演において「私の山に對する感情を大體三段にまとめることが出來るかと思ひます。第一は山をあこがれながら山に恐怖を感じた時、第二は山が自己であり自己が山であると感じて其の自己と云ふものゝ考へ方がごく狭い小さな自己を考へて居た時、第三には自己は狭い自己を超越した自己であると云ふことを考ふるやうになつた時であります」と語っているように田部の登山は段階的に変化していることを心得たうえで、その登山観を展開しよう。

㈠　深林と渓谷の美

田部重治が深林と渓谷の美を見出したこと、日本的な山登りの一端としてそれを位置づけた功績は非常に大きい。物静かな原始林の中や、清冽な水が流れる谷のほとりで一夜を過ごす、その潤いと親しみこそが、日本の山登りの真髄であることを強調した。

田部の登山を代表する深林と渓谷についてその一部にふれよう。

「絶頂よりも渓谷、雪よりも深林と云ふ風な變化が、著しく私の山に對する嗜好の上に現はれるやうになつて來た。峯より峯へと傳はる様な、如何にも面白さうに考へられて、而も事實變化に乏しい山あるきよりも、渓谷を深く深く登りつめ、深林に分け入つて、絶頂に攀づることが、最もよく山に對する嗜好を總括してゐるやうに想はれる。そして、それのみが、最も印象の生々とした多様の變化を感享せしむることが出來る。

絶頂に達して目ざめる様な四圍の山々の偉觀に接する時の亢奮を慕ふ心持よりも、寧ろ斯うして變化を分けて行くまにまに變り行く心持が、又、其登中の林相の美が、すき透る水の深さが、山の中では夏も尚ほ若々しい闊葉樹の翠

色が、幽寂を破りて、竹筒を吹き鳴らすやうな梟の聲が、永遠の彼方へ消えて行く時鳥の二三聲が、すべて怒號するものゝひゞきよりも、静かに幽かな中に聞ゆる意義あるものゝひゞきが、盛んに動く姿よりも、吾々を靜かに深く包んで行くあたりの深い色彩の方が、遙かに深い感興に吾々を誘ふ。

溪谷と深林と、これを抜け出て居る雪と絶頂と云ふ順序に、私の感興が動きつゝあるのである」（一九一八年「深林と溪谷」）と、田部は当時の登山者があまり関心を示さなかった深林と溪谷を求めそれを讃美しているが、田部の登山の態度とその心境の変化がよく現れている。このように田部の著書にはいたるところに深林と溪谷の讃歌が聞こえてくる。

次の一文もそうだ。

「溪谷美は山を背景とし、山と共に作る美であることが第一の條件である。さうしたものの美は山が秀麗であると共に、流れが澄徹し、岩石が麗はしく樹林が豊富で、それらが渾然として一體をなす自然の藝術品であることが必要だ。さうした條件を悉く備へるものは日本の溪谷である。……アルプスと日本の中部山岳とを比較して、日本の山の麗はしさは山腹を取巻く樹林と溪谷とにあると言つたウェストンの言葉は至言である」（一九四一年「日本の自然美」）と日本の溪谷美をうたいあげている。

(二) 峠と高原の山旅

田部重治は峠を求めた経緯をこう説明している。

「峠を求めたのは、私の氣持から言へば最後であった。これも山を歩くためには除外して考へることが出來なかつた。しかし後には峠に興味を見出し、それを獨立して求めるやうになつた。峠を行くことにより、私は今迄とは全然異なれるものを體驗するやうになつた。つまり人間世界に接觸をもつ山の一角に感與（ママ）をもつやうになつたのである。それは純悴な登山精　から言へば、一種の外道的なのかも知れない。しかし登山の綜合的な體驗を味はんとするものに取つては、それは除外することの出來ないものである」（一九三九年「登山趣味の發展」）と、登山は総合的な体験

によってなし遂げられることを強調している。

さらに田部は「峠を行く心理には、雑多な要素が含まれている。雑然たる動機、要求が織り合せられて、峠行きの心理を形作っていると言っていい」という登山を行う場合の峠と、峠の通行者は、それが出来うる限り低くあらんと欲する心理を分析しながら、「峠に関心をもつものにとっては、峠を行くことが最も純粋だからである。……登山家も常に必ずしも絶頂のみを志すものではない。彼も人間なるが故に、そして人間は文化と自然との両界に跨がる動物であるが故に、これらの両界に跨がる峠に多大の関心をもつことも、新しい傾向として認むべきであろう」（一九三五年「山の心理と峠の心理」）と結んでいる。

そして峠の条件として「第一に高山に於けると同じやうに雄大な眺望をもつてゐなければならない。……第二にそれは高山と同じやうな山容をもつことは出來ないにしても、少なくも高山的な印象を與へるものでなければならない。……第三、それはただならぬ感じを引き起させつつも、實現されることのない、そして不安を起こしつつも、現實となつて現はれない平和な威嚇感を與へなければならない。……以上のやうな原因が形作る峠の趣致を一層高揚するものは何であらうか。それは歴史から來る聯想だ。即ち歴史は峠の美を高める」（一九三一年「峠」）と、峠に対して品格を与えている。

次に高原について田部は、「山岳は絶えず自からを超越しようとする努力の、また、闘ひの氣分の象徴であるとすれば、高原はそれを、一歩、静観的ならしめると共に、人間世界のじめじめした現實界を想像の世界に引き上げて、瞑想的な世界を想像する氣分のそれだ。ある意味に於て、高原は現實と理想との最もよく調和された現實世界の緑地でもある。……登山の價値は必ずしも肉體的な闘ひや動くことのみ存するのではない。もし高原に於て登山に於けると同じ歓喜を體驗し、同じく無我の境地に入ることが出來れば、そこにはその内容的價値に於て、何等の上下はないわけだ」（一九三一年「高原」）と述べて、日本の高原を具体的に挙げ、それぞれの特徴を余すところなく優美な文体で描いて、誰でもが容易に登れる高原を登山と位置づけ、その普及に大きな貢献を成した。

田部が一九四九年六十五歳の時に、秋田県より招かれて八幡平に行った紀行文で「八幡平の特長がどこにあるかと問われるかも知れない。それのよさは単に高原としての雄大さにあるのではない。山としてのよさにあるのでもない。それは渾沌として一切を包容する雄大さであり、大地が出来上がって未だ整頓されていないかの如き風貌をもつ偉大性であるといいたい。あの雄大な高原、そしてその間に点在する凄惨な温泉、斯うしたものの中にあって、われわれはどこにも見出すことのできない宇宙的なものを体得する」（一九四九年「八幡平」）と高原については宇宙的なものまでに眼を開いている。

この節の結びとして、次の一文を掲げよう。

「晴れ行く雲間に光る殘雪の山々が、黒々と茂る山を壓して聳える姿、深林の彼方にそれがそばたつ憧憬的な氣高さ、また、緑の葉や花の色が、岩や流れと共に作る美、緑の色うるわしく敷きつめた間に散在する白樺や落葉松の作る牧歌的な情調、そして太陽の光がそれ等の自然に働らく或る刹那の作用、これ等は何れも山と高原と渓谷との美を形作るもの、私達を引きつけずにはおかない。さうしたものの何れをも除外して山を考へることは、山を味ふ全一性の缺陥を意味する」（一九三〇年「山を憶ふ」）と総合的に形づくられた山容の美しさを讃えている。

㈢ 自然と人との融合

法大山岳部の機関誌『山想』創刊号（一九二七年発行）の「山想發刊について」と題するなかに「山を憧憬、其の姿に自らを空しうすることの出來る心に眞純ならざるものがない。山を求むる心は、此の偉大なる自然の藝術を通じて自然の魂と融け合ひ、其が最も活ける力であることを感ずる。山の姿に憧憬がれる心の淨化は、斯くの如くして絶へず行はれて行く。……自然を眞に愛する人には、山を究め渓谷を探り終へると云ふことは、彼の自然に對するよろこびの一小部分に過ぎない。彼の喜悦の大部分は、彼が之等の自然に對して抱きうる無限の主觀的な情緒に存する。いつまでもいつまでも同一の山、同一の渓谷に對して湧出する無限の感情に存する。山に對する憧憬は斯くして絶へず向上し進展する。それは毎も無限に自己を超越する感情である。……山に憧憬する人の抱く心は、いつも自然との

一致融合でなければならない。最もよい意味に於て、自然を征服することは、自然を最もよく理解し、自然と融合することでなければならない」と述べているが、自然と人との融合を強く主張した一文である。そして田部は、文学においては浪漫派や象徴派の詩人の態度のように、あくまで自己を謳わんがために自然を題材とする態度が必要であるという考えから離れて、「一時無鑑賞的態度で讀んで居たウォーズウォースの詩にあらはれたような、静かに奥まつて行く態度を喜ぶやうになりました。此の態度のみが最もよく山と云ふものゝ心持がなだらかに胸にしみ込んで來るやうに覺えて來たのであります」（一九一九年「慶應義塾山岳會の講演」）と語り、英国の自然詩人ワーズワースからの影響があったことを吐露している。

端的に自然との融合を説いた言葉として「山に憧憬する人の抱く考えは、いつも自然との一致融合でなければならない。最もよい意味に於いて、登山することは、山を最もよく理解し、また、山と融合することでなければならない」（一九二七年「登山の意義」）と訴えている。

この節の結語として次の一文を引用しよう。

「山に入る心は先ず廣く自然を愛する心から出立したい。自然を愛する心、そして山といふ特殊なものによつて條件づけられた自然を愛することは、ひろく藝術的精　を愛する心と、個々の藝術を愛好するそれとに異ならない。さうした意味に於て、私達は廣く自然といふ偉大な藝術に對して心を開くと共に、また、山によつて條件づけられた自然の藝術に對して心を開き、それに融合を求めたい」（「山を憶ふ」）と語っているが、その融合の心を存分に汲み取りたい。

(四)　静観的登山

田部重治は一九一九年六月七日に慶應義塾山岳會の第五回大会に招かれて講演を行った。田部が山登りを始めてから十一年目、三十五歳の時である。この講演は慶應義塾山岳會の機関誌『登高行』の第一年第一號（一九一九年七月発行）および慶應義塾體育會山岳部十週年記念號『登高行』第五年（二五年十二月発行）に講演記録の全文が載って

いるので、その一部を紹介しよう。この講演は当時近代的登山を行っていた人々、特に若い学生山岳部の部員に大きな影響を与えている。

演題は「山は如何に予を影響しつゝあるか」というもので「山岳が私に何う云ふ風に影響を及ぼしたか、又、今日何う云ふ風にそれが私の思想の上に變化をもたらしつゝあるかと云ふことは、實は登山と云ふことに就て未熟な且つ經驗の途中にある私のやうなものゝ口にすべきことではないのであります」と断りながら、その中枢部分を取り上げると「山に登ると云ふことは絶對に山に寢ることでなければならない。山から出たばかりの水を飲まなければならない。成るべく山の物を喰はなければならない。其の山を嵐をきゝながら、其間に焚火をしながら、そこに一夜を經なければならない。そして山その物と自分と云ふものゝ存在が根底に於てしつくり融け合はなければならないと。さうなつて來ると山と云ふものゝ威壓は段々親しいものと變つて來て、山に對して今迄抱いた自己の弱小又は恐怖が、山が自分の一部であり、自分が又山の一部であると云ふ風な心持になりかはつたのであります。……

私は山によつて最も多く自然に還ることを教へられたのであります。そして私は今更ながら今迄氣が付かなかつた自然と云ふものゝ内容に於て、又人生と云ふものゝ内容に於て豐富なものを認めることが出來るやうになつたのであります。又北國の平原から遠望して居た私の自然觀の何と貧弱なものであつたか、又私のそれまで考へて居た人生と云ふものが何と表面的なものであつたかを笑はずには居られなかつたのであります。……登山に經驗する内容をもつと静かに味はひたいと云ふ要求が非常に勝つて來たのであります。今迄は谷を行き深林を通ることが只頂上あるが故に止むを得ずでありましたが、今日は溪谷は溪谷として深林は深林として、價値の對象となつてあらはれて來ました」と語っている。かなり長文を引用したが、田部が語った山と人生に対する見方・考え方が、山からの影響を強く受け、その心の変化を理解するうえで大変貴重な講演である。

そしてこの講演を再掲した『登高行』十週年記念號の前言には「田部氏のこの『山は如何に予を影響しつゝあるか』は山登りに關する文献のうちでは、我國に於ては數少い特異なものとすべき心理的見地よりみられたる自叙傳的な寄

與であつて……いまこの一文を讀んでゐると、直ちに今日われらの胸にアツピールする多くのものがある。またいきなり顔を打つて來る筆者その人の精神の風を感じる。先づあらゆる行間に、その裏になつてゐる心の深さに觸れる。われら山に登るものの心を目ざましめずには置かないいくたのフアクトーがある。われらは我國に於てはかように一人の登山者から親しく山登りについてのひとつの心の深い動きを示されたことはない」と、田部から深い感銘を受けた心境が率直に語られている。

この田部の山に対したときの思索と体験を「自然は、私の静思的な観照的な態度にふさわしい対象となつて私に対立している」といい、この姿勢を伊藤秀五郎氏はじめ山岳界では一般的に「静観的登山」と称している。

この節の締めとして田部の次の一文を掲げる。これは慶應義塾山岳會の講演を、二九年に発刊した『山と渓谷』において一部補ったものであり、この感激が田部の登山観を形成する基本になったともいえよう。自筆で書いた色紙が北アルプス薬師岳の太郎平小屋（一九六五年に太郎小屋を改称）にあり、私が最も感動し、私に最も影響のあった文節である。

「全く太郎兵衛平に立つた時の私は、北國の一部がうづたかまつてゐると云ふよりも、私達人類の住んでゐる大地其物が大きくうづたかまつてゐると云ふ感じを抱いた。つまり、私は何となく永遠と云ふものゝ一角に足を踏み入れたやうな歓喜を感じたのである」。

ただ、この感動を現した山道である有峰より小畑尾峠を経て太郎兵衛平に至る道が現在廃道になっている。残念でならない。

三、幅広い登山活動

田部重治の登山に対する一般的なとらえ方の特徴を列挙したが、ここでは視点をかえ、一般論的にとらえている田部のイメージとは少々異なる面から迫ってみよう。

結論的にいえば、田部は《峠や高原の山歩き》から《より高い、より困難な登山》に至るまでの幅の広い個性的な登山活動を求め、特に山登りの方法や思考を規制しない登山観であった。そして幅広い登山の中でも、今まで述べたように登山する人があまり感じていなかった深林・渓谷・高原・峠の魅力、それに加え山村、街道なども山旅の対象として世に紹介したととらえるべきであろう。

しかし、田部の山登りは静観的登山の代表的なもののみとしてとらえられ、『山と渓谷』を刊行した一九二九年頃から先駆的な登山は影をひそめたとみられている。例えば『登山家素描』（一九八三年発行）の「田部重治と秩父巡礼」や一九九六年発行の平凡社ライブラリー『わが山旅五十年』の解説において、水野勉氏は「登山界の先頭に立つとか、新しい山登りの方法を切り拓いていくという意気込みはなかった。そのような、どちらかといえば外側からの見方には無関係に、自分の心を見つめて、その動きに忠実に従っていったのである」あるいは「木暮は新しい開拓者的精神の持主で、日本的な山旅を愛する一方では、晩年になってヒマラヤ、中央アジアに対して関心を持ち、日本におけるそれらの研究の先蹤者となった。しかし、田部はあくまでも日本の自然の中に没入する方法をかたくなに守って、晩年になればなるほど、古い峠道や昔の街道を歩くようになり、新しい世界に入っていかなかった」と説き「田部の山旅が登山ではないという認識が、有力であるのは事実である。特に、登山をスポーツとして見れば、それは当然である」などと田部の気持ちを汲んでの見解であろうが、詩人としての観照的な心境を強くとらえて、美的な側面にのみ押し込んでいるような感じを受ける。

このような見方とは異なっている登山者田部重治の活動的な一面を取り上げよう。

㈠　登山は個性的なもの

田部重治自身も静観的な登山を強調する著書は多い。しかし、それは田部の山登りとその思考の一面に過ぎない。「私の登山熱は、……最も高潮していたように思われ、如何なる解熱剤もそれを低下させることが出来ないほど私のエネルギーがそれに注がれていた」（『わが山旅五十年』）と回想しているが、その気持ちの実行を継続させなかった

病妻の長い臥床と死があった。

前述した慶應義塾山岳會講演において田部の山登りが最も乱暴であった時の表明として「私は登山の眞意義は非常な劇しい動的な多少冒險的な運動を以て行はれなければならない。登山は絕頂に登ることに意義があるのである。もうこれで登るところが無いところまで來たと云ふことに滿足があるのである。雨が降つても、風が吹いても、行くと決心すれば頂上まで行かなければならない。從つて途中は頂上の附屬物である。頂上があつて意義があるのであると思ひました」と語っているが、田部のいう第二段階の山に対する感情であり、同一人物でも、その登山の進展、自己の生成によって変化することを物語っている。

田部は「私の登山の態度は模倣的なものではなくして、あくまで個性的なものであった。そして私が今まで五十年間に登って来た好きな山に対してふるさとの山の如き親しみを抱いているのも当然のことである。……今も夢を見れば主に山の夢であり、旅の夢である」（一九六八年『ふるさとの山々』の序文）や「登山に就いての考え方は、ここ数年間統制され、それを無理にも一つのものにして仕舞うとする傾向があった。それの誤っていることは言うまでもない。人間は個性をもつものであり、個性が人間により異なっている以上、よしんば山という対象が一つであるにしても、各人の山に対する見方の異なるのは当然のことである。それは各人の登山の目的により、登山を経験する人の山の取り入れ方により異なる。山は沈黙せる大なる存在であり、無限のものを包容せる存在であるだけに、それから引き来るものも無限でなければならない。それを一つのものに統制することは出来ない」（一九四六年「登山と個性」）との基本的な考え方に立って、登山する人の目的によって四つに区分し、「登山を単にそれが興味ある故にやる」という場合を「登山の最も正しい目的」とし、その楽しみ方が百人百色であるという観点から、登山と個性の問題を展開している。結語として「それぞれの異なる個性により、山の取り入れ方が異なり、生み出すものが異なって来るのは結局、登山者の創造的精神の働らきによるということになって来る。それは丁度、同じ素材も芸術家の異なる個性を通じて異なる作品となって現れると同じである。その意味に於て登山者も芸術家と異なるところがない」と述べ、

登山というもののとらえ方を規制しない、むしろ異なる感じ方や登り方が当然であると主張している。

『山想』五・六合併号（一九五二年発行）に「近頃感じたこと」と題して、「今日の登山者の考え方は餘りにも狭い範圍に捉われているのではなかろうかと思われ、創造的な行き方に乏しいように思われ、如何にも狭い範圍に於て功名を爭つているかのように見える。それは餘りにも日本の國土を知らなさすぎるように考えられる」と述べて、登山と言えば北アルプスの計画であり山行であるという、まるで競争であるかのような印象について「日本人の何かに偏り易く、流行を追う傾向が山に於ても行われているのではないかの感を與えた」と指摘し、日本の山の創造的な開拓と楽しさを説いている。

(二) 登山活動の一切の体験を望む

田部重治は一九三五年五十一歳の時に「私は出來うべくんば、一層のこともつと積極的に登山したいと思つてゐる。若い人にも劣らず、若い人達に伍して登山しなければならない。私は其意味に於て、出來うべくんば、登山に關する一切を體驗したいと思つてゐる。そして決して登山に關する抽象的な概念によつて滿足しようとは思はない。以前にやつた二三度の登山により登山の一切が分り切つてゐると解釋したり、それを基礎として山に關する議論をたてたりすることの錯誤をやらうとは思はない。じりじり繰り返す登山によつて得られる内面性の向上、體驗の充實を顧み、其が如何に人間性を培つてゐるかを認識しないことこそ、救ふべからざる誤まれる態度であろう」（一九三五年「菱野の一夜」）との自己の意志と登山観を開陳している。これは後に述べるヒマラヤプランを具体化しようとした年でもあり、その心境の一部を語っているのではなかろうか。

『スキーの山旅』（一九三〇年大村書店発行）は田部と山想会会員十三名が執筆した記録・紀行集であるが、その「序」において「自然との斯くの如き眞劍なる融合は、多くは山の旅に於て、しかも一層多く冬の山旅に於て體驗さるものであることは、登山者の等しく感ずるところである。其の意味に於て、吾々は最も登山を讃美し、特に冬の山旅を渇仰する」あるいは「スキーによる登山の記録も斷片的には可なり多く公けにされてゐる。しかし一つのまとま

つたスキーの山旅に關する文獻のあることをきかない。茲に集められたものは、法政大學山岳部出身者により組織された山想會員のスキーの山旅の記録であつて、一部は既に世に知れ渡つた地方の山旅のそれであるが、多くは未だ記録なき方面の冬の登山記である。編者は是等の記録により多大の興味と感激とを感じた」と述べ、冬山を渇望し、スキーを利用した登山方法で積雪期の山々の開拓を奨励している。

そして「スキーによる山の登攀……つまりそれは幻滅を感ずることのない理想の具現である。幻滅的な人生におけるもつとも理想的な刹那である。……私達はそれにおいて凡てをただ現実の刹那に集中せしめて何等の後悔を感じない」（一九二七年「冬山」）との見解を示し、冬山における無想の境地に没入している。

他面、登山界に著名なウェストンの『日本アルプス　登山と探検』（一九三三年梓書房発行）は岡本精一訳、田部重治校閲、田部重治・小島烏水・槇有恒の三氏が「跋」（あとがき）を書いている。このウェストンの書の閲覧を行うとともに、その跋には「ウェストンの『日本アルプス』は日本の山岳に關する著述の内で最も興味深いものの一つである。それは未だ登山が日本に於て顧みられない、交通が極めて不便な時代の登山の記録である。……著者の登山に關する趣味の如何に執念深いものであつたかを知り、著者が槍ケ岳、……立山等の山々を如何に大きな憧憬をもつて、多くの困難に打勝つて登攀したかを知ることが出來る。……著者が日本の自然の特に優れたるものに渓谷に見出せるが如き、又、平湯　泉から安房峠を越えて白骨　泉に至る峠道を嘆美せるが如き、何れも其の自然觀の非凡なることを示してゐる」と記し、ウェストンの登山と探検に大きな関心を持つとともに、積極的にその登山の記録を世に紹介している。このことはとりも直さずウェストンの開拓的登山の行動様式に最も賛意を示したことの傍証であって、一面では田部が近代登山による山々の開拓を目指している姿勢がみられる。

㈢　先駆的登山の足跡

田部重治は一九〇八年七月、東京帝国大学英文学科卒業後、富山へ帰る途次に妙高山へ登った。これが初めての登山であり、二十四歳であった。それまでは「初めは海洋の歎美者であつたが、十年前から趣味が一轉して、山岳及び

それに附属する深林、溪谷に多大の關心を持つやうになつた」（『日本アルプスと秩父巡禮』自序）と書いているように、山よりも海に関心を持っていたころもあった。しかし、「夏が近づいてくると、私と同じ年ごろの村の少年たちは勇ましい姿をして立山に向かうのであったが、私だけは子供のときから弱い身体をもっているときかされ、自分でもそう思っていたので、登山などは思いもよらなかった」（『わが山旅五十年』）とその心境を静かに回想している。「私の郷里では二十歳前後にして立山へ登らないものは殆んど男の仲間入りが出來ないのであります」（前掲慶應義塾講演會）とも語っているが、身体が弱いといわれていたのでこれを果たせなかったことが、母親からははげしい気性であったといわれていた田部にとっては、それがどれだけ引け目に感じていたことか。私の知る限りでは、越中の青年は十七歳（十六歳とも言われていた）になれば立山へ登拝し「おやまかけ」を行う習わしが長く続いていた。私自身は一九四八年十三歳の時に立山、劔岳に登ったが、当時私の家は立山・劔岳の登山口である粟巣野（立山線の延長で現在は廃駅）で、登山土産品や雑貨などの販売と登山案内所を併設していたので、立山ガイドの村芦峅寺の人たちの詰め所にもなっていた。そのような環境であったので一人前の青年になった儀式がおこなわれた。それは立山登拝を終えたことを祝って父母が餅をついてくれたことにすぎないが、芦峅寺のガイドたちも手伝ってかなり多くをつき終えた。この時は山岳仏教の修験者の一人になったような経験がある。

田部は妙高山へ登ったあと日本の登山の探検期である一九〇九年から一九一〇年代（明治の末から大正前期）に多くの足跡を残している。当時の山登りはきちんとした道もなく、途中の山小屋もなく、しかも地元の山に精通した猟師や岩魚釣りを案内人として同行していた時代である。

「案内なしの登山」が西欧から輸入され、新しい登山思想として提唱されたのは田部と木暮が槍ヶ岳から日本海への大縦走のあと十年もたってからである。すなわち登山とはいえ現在とはとても同一次元では考えられない時代であった。田部はこのような時期にかなり意欲的な山行を行っている。特に「大正二年目となった。この年に計画した山旅は二つあった。一つは金峰山から雁坂峠までの縦走であり、もう一つは槍ガ岳から立山、劔岳へのそれであった。何

れも案内なしであった。この二つは私の一生の山旅のうちでももっとも忘れられない楽しい、かつ張り切ったものであったと覚えている。当時、これだけを案内なしで歩くことは、無鉄砲だと思われるほどだった」（『わが山旅五十年』）と回想しているが、これらの特記すべき山行を列挙しよう。

①一九〇九年五月、木暮理太郎と甲武信国境山脈を経て多摩川に下り、川野から雲取山を往復し、氷川から青梅へ出る。

国境山脈に初めての野営経験をし、鳥が夜明けにいっせいに鳴くことに自然界の神秘を感ずる。

②一九〇九年七月、二人の弟と三人の甥と二人の案内人で、早月川より立山へ登り、弥陀ヶ原から立山温泉に下り、再び弥陀ヶ原に戻って称名滝を眺め藤橋へ下山した。

早月川をつめ室堂峠にたどり着くと、眼前に広がっている光景に恍惚となり、空想が現実よりも劣っていることを痛感する。

③一九〇九年八月、一人の弟と三人の甥を連れて、富山より飛騨の高山へ向かう街道から大多和峠を経て有峰に入り、森林の美にうたれながら小畑尾峠に至り、真川へ下って再び森林帯を通り太郎兵衛平から薬師岳を往復した。

高山地帯へ第一歩をふみだすと同時に、当時日本の登山者が感じていなかった森林美を見いだす。

④一九〇九年十月、木暮と案内人の猟師油井安十郎の三人で、栃本より十文字峠を越え、梓山へ下り、甲武信岳に登り、すぐ北側に三宝山がそびえていたので、藪を漕いでその頂上に立ち、つづいて川端下から金峰山に登って黒平鉱泉へ下山し、御岳、昇仙峡、和田峠を経て甲府に着く。

秩父の核心地帯を突破し、登山者が秩父に足跡を印した記念碑的山旅であるとともに荒川、千曲川、笛吹川の水源地帯を巡る山旅で、四囲の山々の樹林は燦然と色とりどりに紅葉しており、その美しさにうたれる。

⑤一九一〇年七月、前年薬師岳に登ったメンバーと、上滝より水須を経て東笠山を越えて有峰に入り、薬師岳に登る。山頂で針ノ木峠からきた中村清太郎、三枝威之助と会う。有峰から立山温泉に着き、その後山崎吉次郎を案内人

として奥大日岳、立山に登る。さらに宇治長次郎を案内人としてザラ峠から平へ行き、針ノ木峠を越え大町に至る。つづいて丸山広太郎を案内人として白馬尻より白馬岳へ登り、鑓ヶ岳を往復し、蓮華温泉へ下り、糸魚川を経て富山へ帰る。念願の越中から信州への旅を成し遂げる。

⑥一九一〇年八月、二人の弟と案内人谷口弥八郎で、奥平沢村から片貝川東又、アブキ谷を遡って、毛勝山に登った。剱岳北方の開拓を行う。

⑦一九一一年七月、岩波茂雄、安倍能成、市河三喜、藤村操の弟の作（のちに東洋大学学長）と案内人大西又吉、勝野玉作、遠山作十郎、他一名で、大町から入山し、高瀬川から烏帽子岳、野口五郎岳、黒岳（水晶岳）を経て赤牛岳を往復し、東沢を下り、平からザラ峠を越え立山温泉に着く。信州から越中への旅であった。

⑧一九一二年三・四月、中村と案内人の三人で、丹波山村から飛竜山へ登り、翌日大菩薩峠で柳沢峠へ抜けるコースを案内人に聞いて案内人を下山させた。三月三十一日二人で大菩薩嶺から柳沢峠へ向かっている途中、大黒茂谷に迷いこみ雪中洞穴で一夜をあかし、翌日洞穴を出て歩きだしたが、田部は空腹に耐えきれず、中村の持っていた練歯磨を甘いと思ってなめてしまい、まもなく人事不省に陥る。同行の中村が青梅街道にたどり着き、馬子からこの上の炭焼小屋へ行って救助を頼むよう教えられ、そこへかけつけた。炭焼小屋の芦沢伴作がまず救出に出向き、つづいて四人の男が救援に出かけた。この芦沢伴作という猟師で炭焼きを兼ねている機敏な男により、積雪の中に昏睡状態であった田部が九死に一生を得た。

⑨一九一二年七・八月、木暮と笛吹川に沿って未踏の尾根伝いを雁坂峠へ登り、破風山、木賊山、甲武信岳への初縦走に成功し梓山へ下った。つづいて単身にて八ヶ岳の本沢温泉から硫黄岳、横岳、赤岳に登り茅野へ下る。さらに汽車に乗って上松へ行き、寝覚ノ床から王滝口を経て御嶽へ登り、黒沢口から木暮福島へ下る。その足で八月に入っていたが松本より徳本峠を越え神河内（上高地）に滞在して、槍ヶ岳や焼岳に登る。

⑩一九一三年五月、木暮、中村と案内者なしで甲府から昇仙峡、黒平、御室川を経て金峰山、朝日岳、国師岳、甲

武信岳に至ったが、雨のため一旦梓山へ下り、再び十文字峠より三宝山、甲武信岳に登り木賊山、破風山、雁坂峠を経て栃本へ下る。

金峰山より雁坂峠へのガイドレス縦走に成功した。

⑪一九一三年八月、木暮と案内者なしで徳本峠から上高地に入り、槍ヶ岳から双六岳、三俣蓮華岳、黒部五郎岳、薬師岳、越中沢岳を経て五色ヶ原までガイドレスの大縦走に成功し、五色ヶ原で合流した中村とともに立山温泉へ下る。つづいて三人は長次郎、佐伯春蔵を案内人として立山温泉から別山、立山、龍王を回ったあと、十一日に別山下（雷鳥沢）から尾根伝いに剱岳の趣味登山としての四登に成功した。それ以前の三登までは長次郎谷から登っているので別山尾根伝いに登ったのは初登であった。ただし、田部、木暮、中村が尾根伝いに登った直前の七月二十五日にこの尾根を剱岳二登の近藤茂吉が、案内人の平蔵と下っている。田部たちはその後大雨であったが早月川を下る。

ところで剱岳二登の近藤は別山尾根を初下降し、途中長次郎とほか一人が写真機を背負って尾根の左の谷を下ったが、長次郎はカンジキをはいていなかったので足がふるえたという。この谷を近藤は平蔵の名誉のため「平蔵谷」と命名した。田部は「長次郎がはじめて下った谷なので、平蔵谷の名称を与えたことは大きな誤解を後世に招くのではなかろうかと思う。平蔵が初めて別山尾根を案内して通ったので、それに平蔵尾根という名称を与えることは極めて妥当であるが、彼が通りもしない谷に彼の名を与えることは、大きな誤解を招く恐れが多分にある」（『わが山旅五十年』）といっている。

この縦走をおこなった時代はまだ槍ヶ岳への道すらなかった頃で、槍から立山までの間に小屋もなければ道もない。その上案内人が同行しないので破天荒なものではあったが、計画は綿密に行い、築地の片桐で、支柱を杖がわりにし重さを一貫目ぐらいにした二人用の特製軽テントを作ったり、登山靴がまだ日本にはなく、砲兵工廠の付近に理想的な草鞋を売っている店で各自六足を調達したりした。それに寝袋のない時代で、二枚続きの毛布、着物は夏の洋服、メリヤスの下着などといたって簡素なもの。副食には重い缶詰をやめて辛い味噌や鰹節の削ったもの、ワカメ、奈良

漬、ウイスキー一瓶に氷砂糖とし、主食の米は一人三升ときめ、荷重の点では装備とともに食糧にも工夫をこらしている。そして背負い上げた荷物を兎に食べられないよう岩の間に入れて露営するなど、今までの経験を生かした創造的で冒険的な縦走であった。

⑫一九一五年五月、木暮、中村と塩山より笛吹川東沢からホラノ貝で野営し、信州沢を遡り、尾根の頂上へ出て梓山へ下る。笛吹川東沢の初遡行に成功した。

⑬一九一五年七・八月、木暮、甥の南日実（第四高等学校生）と長次郎、長次郎の義兄弟である宮本金作、片貝の沢崎源次郎を案内人として片貝川南又から釜谷を遡って最高点（釜谷山と名付ける）に登り、毛勝山を往復したあと猫又山、赤谷山を経て、大窓で食糧不足のため小黒部鉱山事務所に下り、米五升を分けてもらう。大窓から剱岳頂上まで一日で行こうとしたが失敗し、池の平から三ノ窓の雪渓をつめて七月三十日頂上に立った。剱頂上より長次郎谷を経て、立山から浄土山に至り野営した。八月に入って御山谷を下り黒部の東沢を遡って赤牛岳、黒岳、野口五郎岳、烏帽子岳から高瀬川を下る。剱岳北方からのルート開拓に成功した。この山行も飛騨山脈における探検登山史上を飾るものであった。

⑭一九一六年五月、木暮と笛吹川東沢の釜ノ沢をめざしたが途中より尾根へ逃げ、国境尾根から甲武信岳へ登り真ノ沢を下る。

⑮一九一七年五月、木暮と再度笛吹川東沢の釜ノ沢を試み、初遡行に成功して、甲武信岳に登り、真ノ沢から栃本へ下る。

笛吹川東沢釜ノ沢の初遡行を記録し、一五年の信州沢初遡行と合わせ東沢の開拓を完結した。

⑯一九一七年七・八月、木暮、森喬と案内人長次郎、長次郎の義弟、山本岩次郎で、泊町から小川谷、イブリ谷を遡り、朝日岳、白馬岳から鹿島槍などを経て針ノ木峠まで縦走する。後立山縦走においては五龍岳を越え、鹿島槍に至る間の八峰の稜線伝いは当時の登山界で一つの課題となっていたが、ここは黒部側をまいている。これも探検登山

を代表する記録であった。

一応私なりにピックアップしたが、いずれもパイオニアワークにふさわしいものであった。それらは飛騨山脈における探検登山史上に燦然と輝いていると同時に、一方一九〇九年から概ね十年間に秩父の開拓を行い、特に笛吹川東沢の開拓を行って、秩父の山峡を世に紹介したことは日本の登山史上多大な貢献を果たした業績といえよう。

なお、これらの山行以外は巻末の略年譜を参照願いたい。

㈣　ヒマラヤプランにみるパイオニア精神

田部重治は海外にも目を向け、ヒマラヤ登山の計画を立てたこともあった。山想会発行の『山想會々報』NO．3（一九三七年）に井上銓次氏は「『ヒマラヤ征服の日を語る』が大毎紙上の新春を飾つて居ます。曾ては私達のグループの間にもこれと同じ様な計畫があり、田部部長や角田、田中の間にも種々プランが進められてゐた、忘れもしない一昨年（一九三五年）の暮十二月五日赤坂幸樂で母校山岳部十周年記念晩餐會の折、諸兄に二・三年振りでお會ひした節、極く親しい者の間にこの計畫のある事を内々お聞きして氣早やの私は有頂天に喜んだ」と載っており、田部を中心としたメンバーがガルワルヒマラヤ遠征の計画を立てていたことがうかがえる。日本人として初めてヒマラヤ山群の登頂に成功した立教大学隊は、一九三六年ガルワルヒマラヤのナンダコット（六八六七㍍）であり、その前年に田部がヒマラヤ登山の計画を立てていた。田部五十歳である。

この計画はおそらく木暮理太郎の影響があったと推測される。田部のヒマラヤ計画が立てられていた時と呼応して、木暮は『山』第二巻　第四号（一九三五年四月　梓書房発行）において「ヒマーラヤのことども」と題して、「ヒマーラヤの中でも比較的入り易い所は、シッキムとガアワルであろう。シッキムにはカンチェンジュンガの大山塊があり、六一〇〇米以上の高峯は二十座を超えてゐる。ガアワルはシッキムより面積が三倍程も廣い為に、六一〇〇米以上の高峰八十餘座を數ふ可く、唯山群の王座を占むるクマオン・ヒマーラヤのナンダ・デヴィ山塊がカンチェンジュンガに比して劣るのみである。シッキムの高峰は可なり多數登頂されてゐるが、其點になるとガアワルの山は二三を除く

の外、盡く人跡未踏の峰のみである」と解説し、ガルワルヒマラヤ登山を推奨していることがうかがえる。田部は山友のうち最も親しい木暮のこの視点からのヒマラヤを考えていたのであろう。

田部は「幼いころから特別に感情がはげしく、ほっておいたらどうなるかと思わせるような性格の持主だった」（『わが山旅五十年』）と告白しているが、この本性が日本の山のみではなくヒマラヤへ向かわせようとしたのではなかろうか。

もっとも田部が五十七歳の一九四一年に発刊した『青葉の旅・落葉の旅』の「序」において「世間も變り私の心境も變つて來た。山に對する私の嗜好は外部的にも内部的にも多大の變化を經驗した……かうした趣味の廣い展開は山に對する趣味の失はれつつある證左であると見られるかも知れない。しかし事實に於て私の山に對する嗜好が、益〻、高まりつつあることを感じてゐる。若し時間と事情さへ許したら、シナの奥地へでも印度へでも這入つて見たいと思つてゐる。もつと頻繁に山に登れなかつた大きな原因は、病妻の永い臥床や死亡が、私の度々の外出を許さなかつたことによる」と、インドや中国の山々、すなわちヒマラヤ行の思いを内に秘め、それを継続して持ち続けていた心情がうかがえる。妻の死という失意にもかかわらず、というよりは、失意を体験したがゆえに、さらに新しい登山を求める姿勢があった。五十七歳で深く秘められた一種の沈潜した情熱が漂っていたものと解してよいだろう。

海軍経理学校の山岳部梓会の創立時に二学年の生徒で、戦後の梓会復活世話人の一人である稲岡新氏との一問一答で、「稲岡―世界のアルピニストの中で一番印象に深い人は。田部―それはマロリーです。彼は世界最高峰エベレストの最初の登頂者ヒラリーよりも早く頂上近く迄登ったようであるが、途中友人を探しに行き行方不明になったと言う。茶谷（元梓会会長）君の言う通り、福井丸船上で杉野兵曹長を探しに行き戦死した広瀬武夫中佐の友情に似ていますね」と答えている。これは一九六三年八月、田部が七十八歳の誕生日直後に、田部、茶谷、稲岡の会話を茶谷氏が書き留めたメモである。田部はマロリーのヒューマンな面の印象を語ってはいるが、やはり世界最高峰のエベレストにも密かな関心があったのだろう。

法政大学山岳部の部歌、一般的には「エーデルワイスの歌」として親しまれているが、この部歌の順序を作詩者の菅沼達太郎は「吹雪は叫び、黄昏迫る……」という出だしで始まる「冬」を一番とした（一九二七年発行『山想』創刊号に発表）。一九六一年に部歌を日本音楽著作権協会と信託契約を結ぶ手続きの過程で、この順番の根拠を私自身が菅沼に確認している。冬を一番にしたのは部長の田部がかなりパイオニア精神に富んでいたからに他ならないと作詞者が話していた。通常は日本の季節の順番を表す春夏秋冬の春か、一般的には登山が多く行われる夏が最初にくる。それをあえて冬から始めたのは、創作関係者はかなり田部の気持ちを汲んだようだ。田部に内在していた積雪期の登山観をかいま見たような感じだ。

日本山岳会入会の推薦者が田部である元日本山岳会会長藤平正夫氏は、会長であった一九九四年に「田部先生は単に自然観照という形にどうもとらえられがちでございますけれども、私は実はそうではないと解しております。北アルプスにおける大縦走の記録を拝見しておりましても、あるいは奥秩父の開拓にしましても、ものすごいパイオニア精神の持ち主ではなかったかと思うわけでございます。おだやかな風貌とか文章にごまかされてはいけない。本質的には大変なパイオニアであったのではないかと、私は感じております」（「法大山岳部七十周年記念祝賀会」の挨拶）という見解を明記しておこう。

この節で述べた田部の山に対する取り組みは、非常に幅の広い個性的なものであり、この姿勢が田部の登山観であると解することが妥当であろう。

四、日本山岳会の名誉会員

日本山岳会は一九〇五年十月に発足しているが、田部重治は一九〇九年十二月、二十五歳の時に入会しており、会員番号は二四三番である。入会十年後の一九一九年六月より幹事になって十二年間就任し、引きつづいて一九三一年六月より一九四六年六月の六十一歳まで評議員として十五年間、通算二十七年間の役員を担っている。

(一) 入会のきっかけと名誉会員推薦

田部重治は一九〇九年八月に辻本満丸氏の邸宅を訪れたことが、日本山岳会へ入会するきっかけとなる。日本山岳会幹事辻本氏に面会した状況を喜びを交えてこう述べている。

「私は日本山岳会の幹事辻本満丸さんに会って見たい気持になった。薬師岳頂上に氏の名刺を見出したことも、その理由の一つではあったが、そればかりではなく、氏の『山岳』に書いている山旅の叙述は、当時の若い者にもっとも魅力あるものだったからだ。私は目白の女子大学のそばにあった氏の宅へ或る日の夕方行って恐る恐る名刺を通じた。ちょうど、いま工業試験所から帰ったところだといって、喜んで私を居間に通された。私は薬師岳の頂上で氏の名刺を見たこと、氏の『山岳』の記事に感激したこと、先輩の木暮君のことなどを話し、氏は有峰や薬師岳の写真を見せ、山に対する態度についての意見をのべ、帰ろうとするともっと話して行けという調子で話が容易につきず、そのうちに日本山岳会の幹部の連中をよんで会合したいと思うから、その節はぜひ木暮君といっしょに来てほしいということで、かなり遅くまで話して引き上げた。……私はひとかたならぬ喜びを抱いて家に帰った」(『わが山旅五十年』)とその時の感激を素直に表明している。

その年の暮れに辻本氏からの招待に応じて、木暮とともに再び辻本邸を訪れ、そこで辻本氏以外の日本山岳会幹事小島烏水、中村清太郎、三枝威之助、高野鷹蔵、辻村伊助の五氏に会ったのが、その後の木暮と田部が日本山岳会で活動するきっかけとなる。

木暮理太郎は一九三五年十二月より一九四四年五月までの八年六カ月間にわたって日本山岳会会長に就任し、日本山岳会歴代会長のなかでも一番長く会長を担った人であるが、「木暮君はそれ以降、日本山岳会の中心人物となるに至ったのは、この会に端を発している。顧みると、かって登山者であることをすら沈黙して語らなかった木暮君をひろく日本山岳会に紹介し、同君をこの会の中心的人間とするに到った動機は、私にあったと今も堅く信じている。辻本さんのお宅へはその後たびたび伺い、そこで梅沢親光君とも知り合うようになった。当時、日本山岳会の本部は横

浜の高野鷹蔵君の家にあったが、東京の中心は辻本さんの家であった」（『わが山旅五十年』）と結び、木暮を日本山岳会入会に勧誘したことを相当自慢している。

田部が山登りに関する書物を初めて刊行したのは、日本山岳会の幹事に就任した一九一九年六月の『日本アルプスと秩父巡禮』である。その序に木暮は「私達が山に登るのは、つまり山が好きだから登るのである、登らないでは居られないから登るのである、……勿論登山に伴ふ困難や稀に危險は、時として甚だ大なる者があるに相違ないが、山に登らないでゐる苦痛に比較すれば、遙に小さいと稱して憚らない。なぜ山に登るのか、好きだから登る。答は簡單である、しかし夫で充分ではあるまいか。……友人田部君は、また私のやうに山が好きで登る方の人である。山に登るということだけで滿足してゐる人である。……然しながら、自然の大舞臺としての山を觀察する用意に於て、決して君は人後に落つる者ではない、慥に君は自家獨得の觀察力を有する登山家である、他人の糟粕を嘗めて、其不消化な滓を更に我物顔して他に羞むる人ではない、一言にして盡せば、山に對して具眼の士である」と田部評を載せている。田部はその自序において「山岳及びそれに附屬する深林、溪谷に多大な關心をもつやうになつた。それによつて得た健康、それによつて得たる一種の人生觀は、それ以來作者の個性の内に深く根づけられてゐることを感ずる」と著し、この記述が二人の関係と二人の登山の神髄を現す最も適切な言葉であろう。

一九五〇年五月発行の日本山岳会『會報』一五〇号には「新名譽會員」と題して次のように書かれている。「會は四月十九日の役員總會に於て長老會員十餘名の候補者中から三枝守博・鳥山悌成・加賀正太郎・中村清太郎・田部重治・近藤茂吉・槇有恆の七氏を名譽會員に推薦した。よつて會の名譽會員は現在の高頭仁兵衛・高野鷹蔵・武田久吉・山川默の四氏（何れも發起人）に加へ十一名となつた。本會の名譽會員は長く會に對して多大の貢献をされ且本邦登山界に顯著な業績を残した長老會員中から推薦されるもので、故人ではウエストン・志賀重昂・太平晟・白井光太郎・小島久太・辻本滿丸の六氏がこの名譽を擔つたに過ぎない」と説明され、七氏の日本山岳会に於ける経歴と主な登山歴が掲げられている。ただし、日本山岳会発行『山岳』第四十五年（一九五一年六月発行）には八人の名誉会員を推

薦決定したとして秩父宮殿下が加わり、十二名になったと記述されている。名誉会員の推薦は久しく途絶えていたことで、戦後は勿論はじめてのことであった。

田部の紹介には、「田部重治（舊姓南日）氏。一九〇九年十二月入會・一九一九年六月から一九四六年六月まで評議員（當初幹事兼任）。前後二七年の長き間役員として會に貢献された。またその流麗な文章は『山岳』の諸號を飾り後『山と溪谷』にまとめられて多くの讀者をもつた。その他山に關する著書が少なくない。氏はまた多年法政大學山岳部長として後進を指導された」とし、主な山歴が列挙されている。

一九五〇年十一月二十四日神田のＹＭＣＡに於いて新名誉会員を招いて晩餐会を開いている。この晩餐会が『山』三一二号望月達夫氏の「年次晩餐会覚え書」および『山岳』第八十一年織内信彦氏の「年次晩餐会あれこれ」によると今日の日本山岳会最大の行事「年次晩餐会」のきっかけになっているようだ。七氏が出席し、この時に撮影された記念写真をみると、近代登山の開拓者七人衆という印象を強く感じる。

㈡ 機関誌『山岳』への寄稿

一九〇九年田部重治が二十五歳頃に『山岳』を愛読しはじめた。機関誌『山岳』については「登山文学をして今日あらしめるに至った『山岳』の功績は大きい。明治時代の山の文学は、事実、『山岳』により培われたものである」と評している。

田部が寄稿した文章は

- 越中毛勝山（地圖に所謂瀧倉岳）　南日（田部）重治　第五年第三号（一九一〇年）
- 十文字峠を越え信州梓山より甲武信、三寶、金峰の三山に登る記　南日（田部）重治　第六年第一号（一九一一年）
- 秩父の旅　南日（田部）重治　第十一年第一号（一九一六年）
- 秩父の印象　南日（田部）重治　第十一年第一号（一九一六年）
- 秩父旅行の思ひ出　南日（田部）重治　第十一年第一号（一九一六年）

・槍ヶ岳から日本海まで　田部重治　第十一年第二号（一九一六年）
・秩父行　田部重治　第十五年第二号（一九二〇年）
・山岳文學に就いて　田部重治　第二十八年第一号（一九三三年）
・追悼　文藝批評家としての小島君　田部重治　第四十四年第一号（一九四九年）
・追悼　林並木氏　田部重治、沼井鉄太郎、壱岐一郎　第五十四年（一九五九年）
田部重治著の図書紹介として
・田部重治著『峠と高原』　浦松佐美太郎　第二十六年第三号（一九三一年）
・図書紹介　田部重治著『紀行と随筆』　浦松佐美太郎　第三十年第一号（一九三五年）
・図書紹介　田部重治著『わが山旅五十年』　深田久彌　第五十九年（一九六四年）
その他の関係掲載文として
・新名誉会員（田部重治）　第四十五年（一九五〇年）
・追悼　田部重治氏　茶谷東海　第六十八年（一九七三年）
そして写真は
名誉会員　田部重治氏　第六十八年（一九七三年）
以上である。

㈢　山岳会活動の一断面

一九一二年三月、中村清太郎と秩父行きを計画した。田部もそれまでは雲取山、十文字峠、甲武信岳、金峰山以外の秩父に行って見たいと思っていたところであるが「少なくとも雲取山よりも高い大洞山にはぜひ登ってみたいと思った。それにあのあたりの山に関する知識は日本山岳会の連中にはほとんどなかったので、いっそう行って見たいと思った」（『わが山旅五十年』）と語っているが、秩父の山域は田部自身が開拓したいという気持ちが強く働いていたので

あろう。開拓者の魂があからさまに表れている。

海軍経理学校の山岳部梓会を創立した一九一六年のころ、梓会資料に「私は山の旅人である。大学山岳部出身の連中は私達の山旅を理解しようとしなかった。大島亮吉君だけは別だ。彼は近代アルピニズムの代表的存在だったが、又同時に私のような山の旅人でもあった」とある。この考えは当時の日本山岳会の風潮に対する一つの提言であったと受け止める人もあったが、この辺りに田部の反骨精神の一面をみることができる。大島亮吉氏は一九二八年三月二十五日前穂高北尾根四峰の上りで涸沢側へ転落死したが、大正中期から慶應義塾の山岳部に所属し、ヨーロッパから導入したアルピニズムを実践するかたわら、田部のいう深林、渓谷、峠、高原などを含めた日本の山歩きと山の特徴をよく理解していた。『山岳』第十一年第一号（一九一六年十月発行）は「秩父號」として田部も三篇載せているが、大島氏は遺稿「秩父の山村と山路と山小屋と」（『山岳』第二十七年第三号、一九三二年十二月発行）において「田部氏に於てはこの秩父なる日本の一山脈の懐抱するものがいかに氏の心底をあるときは力づよくゆり動かしたかは（現在でもなほさうであるかも知れないが）氏の秩父號に書かれたものに依っても、また氏のある時の講演會に語られたところのものに依っても明らかに知れることだ。そしてわたくしがまたいかに深い共鳴をもってそれらの山についての文献を當時耽讀し、そうしてこの山脈に對しての未知のつよいあこがれと深い愛着を感じたかは實にわたくしのこゝに明白に言って置きたいことである」と田部に心酔した気持を率直に語っている。

大島氏はまた、登山法、登山形式が大きく変わっていることについて「一九世紀末から今世紀にかけての歐洲アルプス登山界の眞の影響は、この現代日本の登山界のうへにもあたらしい山岳と人間との觸媒作用をし、登山の實質をある點では改造した。（大きく言へば、若き日本の登山界は歐洲アルプス登山界にある點では大いに感謝すべきであろう。たゞし現在の混亂はその過渡時代の峠であるといふことに盡きてゐる。明瞭な正當な方向はすでにやって來てゐる。）しかるにわたくしらは舊代日本の登山界にそれ以上に多くを無意識的に教へられてゐるのを忘れてゐる。いや、忘れているのではなくて、氣がつかなかったのだ」と述べ田部ら先縦者の山登りに嘆賞すべきものを突き止めて

いる。

慶應義塾体育会山岳部創立八十周年記念講演で稲門山岳会会員・日本山岳会前会長の村木潤次郎氏は「早稲田の山と慶応の山」と題して講演を行っている。その中に「大正十一年、冬山にスキーで登る、自分たちの目ざすところは槍、穂高である、というふうなことを考えておりました。……日本山岳会の木暮理太郎さんの所へ挨拶をしにまいりまして、スキーを主にして冬山を登りたいという仁義を切ったようでございます。そしたら木暮さんいわく、お前らまだちょっと早いんじゃないの、そんな所へ行って遭難でもしたら大変だから、まあ、もう少し慎重にやれ、と非常に冷淡にやられたらしいです。その後、武田久吉さん、田部重治さん、この辺のところから連名で攻撃がまいりまして、日本の冬山というのはスキーなどというもので遊んで登れるものではない、『かんじき』をつけて登るんだ、と大変叱られたようです」と語っている。田部がスキーを始めたのは一九二五年一月であり、それ以降であればこの見解も変わっていたであろう。早稲田の登行方法が一歩進んでいた。それは次の一文が証している。

スキーを始めた後の田部は「滑降の快感は何と云つても、スキー登山の最もスポーツ的な快感に屬する。深林を分けつつ、また、大きな雪の斜面を雪烟をあげつつ滑走することには、他の季節に經驗することの出來ない張りきつた、氣息もつきあへぬ、緊張せる快感がある。それは悠々たる鑑賞的な氣持とは異なり、寸分の隙をもたない緊張を以つて、刻々、變化して行く自然に對して取る態度から來る快感である。それには危險がないとはいへない。それは最も注意深い、合理的な刻々の一擧一動により遁れることが出來、さうすることに最も深い快感がある」（一九三〇年「スキーの旅」）あるいは「無我的な全人的な活動、それはスポーツのもっとも芸術的な点である。それは色々のスポーツにおいて等しく体験される。然し大自然の舞台において、また時には大自然を対象として、それがもっとも理想的に行われるのは、スキー登山においてのみである」（一九三二年「冬山」）と述べ、スキー登山を礼讃している。

浦松佐美太郎氏は田部の登山の本質および登山の態度を批判している。一九三一年に刊行した『峠と高原』については肯定的な見解を示していた。それについて浦松氏は「著者の山に對する態度なり、山を通じて自らに反省して得

た諸々の思索なりが、しつかりと表現されてゐるのが何より嬉しい。……日本山岳界の爲めに喜ばしい事だと思ふ。……其處には少しの疑ふべき變轉もない。滑らかに靜かに、著者の山への思索は此處へ進み來つてゐる。此處には、日本に於ける登山思想の發達史が、極く自然に表現されてゐる」（『山岳』第二十六年第三號、一九三一年発行の新刊圖書紹介）と評しているが、一九三四年に発行された『紀行と随筆』の図書紹介として「登山の本質論に就てこそ、此の本は、相當批判されるべきものだと思ふけれども、新刊批評欄で簡單な言葉で之に觸れる場合は、或は著者に對し禮を失する嫌もあるので、之等の論述に對しては、他の機會に稍〻詳しく思ふ所を述べるつもりである」（『山岳』第三十年第一号・一九三五年七月発行）と述べ、次号の『山岳』第三十年第二号（一九三五年十二月発行）において「登山の本質及び登山の態度―田部氏の所論を中心に―」と題して浦松氏の論陣を展開している。それを要約すれば、田部の登山の本質論は独断論の著しい一例である。何時も、限られた自分の経験の範囲だけで物を考え、もっと多くの経験が世の中にあることを理解しようとする推量を示していない。登山という概念を勝手に製造して、これをすべての登山の態度に当てはめようとするものである。田部の登山に対する考え方の一つの重大な錯誤は、登山それ自体を、一つの独立した行為とせずに登山と登山なるざる行為とを一つにして登山を論じていることであるなどと評し、浦松氏の見解として登山者にとって大事なことは、ある山が面白い山登りを提供しているか否かである。新しい山の見方は、技術の進歩によってはじめて統一されたのである。美の観賞が登山の内容を決定するよりも、技術の進歩が登山の内容を決定する力の方が、比べものにならないほど強いのである。事実技術の進歩によって登山の内容がどれだけの変革を受けてきたかは、登山史が現実に物語っている。といい、田部はそれにもかかわらず技術を出来るだけ軽視しようとしている、と解釈している。そして、田部は登山の技術ないしはより困難なる登山へ向かおうとする登山の態度に対し偏見を抱いており、これを理解しようとする推量と努力とを持っていないことであるなどと批判している。この時期は田部が前に述べたヒマラヤプランを計画していた時でもある。

たしかに田部の文章のなかでは思い切ってずばずばと断定しているところがある。私も田部の文章で矛盾している

ところがあると思う。例えばスキーをやったことによって登山観が拡大されたことも確かであるし、経験の積み重ねによって視野が広がり、それに伴って世界観も広がってくる。当初の登山観よりも、その広がりが出てきてもそれは必然的なことであろう。こういったことは、矛盾ではなく拡大である。浦松氏はヨーロッパアルプスを登り、ヒマラヤ研究をしていた経験からすれば、田部の登山はそれにふれていないことは確かではあるが、田部の論理の一断面のみを捉えた評価ではなかろうか。技術の進歩が登山の態度を決定するという見解も登山の一つの態度にほかならない。

五、海軍経理学校に山岳部「梓会」創立

田部重治と海軍経理学校山岳部梓会とのかかわりはかなり深いものであった。

海軍経理学校は一八七四年十月、海軍省に海軍会計学舎を創設したことに始まる。七六年海軍主計学舎、八六年に海軍主計学校と改称されて海軍大臣の直属になった。その後、一九〇九年四月に海軍経理学校が開校され、海軍主計官となるべき生徒の教育を行うこととなる。第二次世界大戦終戦前年の四四年まで、五十六年間にわたって東京の旧市内に校舎が置かれていたことから、江田島海軍兵学校、舞鶴海軍機関学校に対して築地海軍経理学校と呼称されるようになっていた。東京に学校が置かれていたため、東大や商大（現一橋大）の教授で、各分野の権威ある人々を兼務教授の文官教官または講師として迎えていた。海軍経理学校は東京に置かれていたことと、一流学者を教授に迎えていたことから、とりわけ自由主義的色彩が濃厚で、戦時体制下では左翼的雑誌として各校で禁止されていた『改造』『中央公論』や『マルクス全集』などが図書室に備えてあった。築地時代の訓練および行事の特色の一つとして毎年八月に全校生徒が軍艦旗を先頭にして、槍、燕、常念へ登る登山訓練があった。終戦の年四五年九月三十日を以て、七十一年間の歴史と一〇〇四名の主計科士官が巣立った海軍経理学校は廃校された（以上「海軍経理学校の歴史」の要約）。

海軍経理学校のＯＢ会は浴恩会（よくおんかい）といい、現在も親睦会などを行っている。なお、海軍兵学校を中心に海軍関係学校

のOB会である水交会が、東郷神社に事務所を置いている。このような学校に田部は山岳部を創設した。

(一) 山岳部「梓会」創立秘話

田部重治は海軍経理学校に一九一二年十一月、二十八歳の時に英語教師として就任した。教科は英語の他心理学や論理学も講じていた。一六年に山岳部「梓会」を創設することになるが、その創設秘話を、八五年梓会会長を退任するにあたって書き留めた故茶谷東海氏（一九二一年八月入校、山岳部梓会に入会。二四年七月卒業、第十三期生徒。日本山岳会会員。会員番号五一五二番）のメモが、その経緯を生々しく表している。メモのうちの一部は日本山岳会の機関誌『山』（五九・十一月号）に発表されている。

その梓会創立秘話の一部をピックアップすると、校長と田部重治（英語担当教官）の問答の一部に「大正五年初夏の一日、海軍経理学校の校長室では、田部重治が、昨日教官会議で賛成を得られなかった山岳部設置問題について懇談のため、校長相良主計総監（中将）と向い合っていた。『校長―では、教官会議で山岳部設置に賛成を得られなかった主な理由は何でしょうか。田部―兵学校、機関学校には山岳部がない。危険の恐れがある、経費を補助する訳にはゆかぬ、などのようです。校長―危険のおそれはありませんか。田部―私は常々生徒に対して山で死んだら犬死である。生徒は法制上、準軍人であるから死所は戦場でなければならないと話しています。また教官有志の同行を勧めています。校長―本校生徒の教育上、何故登山が適当か一言で言うと。田部―本校生徒は兵学校や機関学校の生徒同様、旺盛な愛国心を持っています。しかしその愛国心たるや概ね概念的で具体的に日本の国土を殆ど知っていません。国土の七割は山です。山に登って日本の国土を知れば愛国心は一層強固なものになるでしょう。校長―先生は何故山へ登られるのですか。田部―それは山が好きで登られずにおられないからです。山へ入って静かに自分を見つめると山と自分が一体となります。何か思案に餘るときは必らず山に入ります。すると何となく問題が解決してくるのです」。

このような問答から、その翌日、海軍省教育局の主務局員から山岳部設置了承の電話があった、と記されている。

創立打ち合わせ会は一九一六年七月に行われ五期の稲岡新、六期の茶松農夫蔵など八期までの有志十一名で、九月

十六日に創立宣言を行っている。

梓会と命名したのは、田部と七月下旬槍ヶ岳登山に行った生徒六名が、清冽な梓川に感動し全員一致した意見として提案したもので、田部がその提案通りに決めた。この六名が槍ヶ岳登山を行った七月二十四日は、「午前零時に起き出して提灯の光で一行七名は田部教授を先頭に出発した」と記録されているが、この生徒たちが発起人となって他の生徒一般に向けての真の山岳愛好者を募り、それに応じた五名、合わせて十一名が梓会の成立を告げたのである。

日本山岳会機関誌『山岳』第十一年第三号「梓會の成立まで」と題する記載の中に「忘れもしない大正四年三月三十日の事であった。キングレークのデザートを丁度田部教授（南日）が講義してゐられたが其の時『砂漠の上を天幕かついで駱駝を走らせる光景が眼に見るやうですね』と言われ『私はかう見えても夏になるとよく方々の山に上るのです』といろいろ山岳に關するお話をせられた時は一様に駭いて教授一流の人を索きつける話に或る者は『是非私を今年の夏連れて行って下さい』と飛び出したものさへあった。これがわが梓會の成立する遠い原因の一つである」と創立のきっかけが書かれており、また、「我々は眞の山岳崇拝者である。自然讃美者である。吾々は海の人なるが故に山の人たらんと欲するのである。澎湃たる怒濤汪洋たる大海は吾人の終生の住宅である。海洋美『海のロマンス』は一生を通じていやでもつき纏ふのであらう。だから吾々は今のうちに陸土の權威山岳美をあく程に飽滿したいのである」と山岳部設立主旨が載っている。

田部はこのことを次のように書いている。

「大正元年の十一月から私は築地の海軍経理学校の英語教師を兼任していて、なにかのついでに教室で山の話をしたところ、学生たちは自分らは学校を出れば軍艦に乗組んで、日本の国土のよさを知ることなく若いころを過ごすことになりそうだ。ぜひ、山の会を作ろうということになり、学校当局に公けの団体として認めて貰うよう頼み、当局も要求を容れてくれることになり、大正五年に神河内から槍ヶ岳へ往復したのも、大正六年に白馬岳に登ったのもそのためであった」（『わが山旅五十年』）と、穏やかな表現に留めている。

なお、一九三五年、梓会としては初めての槍から穂高への縦走計画にあたって、その計画をチェックするため法政大学山岳部の角田吉夫にやってもらっているなど、梓会は田部を通じて法大山岳部とも関係があった。

(二) 梓会の流れと田部祭への参加

梓会は一九四五年十一月、GHQ（日本が占領下にあった当時の連合国軍総司令部）の指令によらず、自発的に解散した。復活は六二年八月、稲岡新、茶谷東海氏の提案によって発起人会を開いて再開したが、復活にともない田部は名誉会長に推薦され、記念品として落葉松画入りのクリスタルガラスが贈られている。このようにいつまでも旧師を大切にするのは海軍のよき伝統でもあった。その後田部は六三年八芳園、六四年清澄公園、高尾山の湖畔亭、六五年六義園、御岳神社橋本神宮宅、六六年、六七年氷川の三河屋、六九年東京後楽園の会合に出席した。

梓会はその後七九年四月にできた海軍関係学校出身者による水交ハイキングクラブと八八年十二月九日に合併し、「水交梓会」として現在でも活動しており、会報も発刊している。

田部が死去する前年に梓会の会員が東京医科大学病院に入院中の田部を見舞い、その時の会話として田部は「梓会がこれほど永く発展するとは夢にも思っていなかった。殊に経理学校出身者以外の人が多くなったことも結構なことです。組織とか規則とかあまりやかましい事を言わず、和やかな楽しい会にして下さい。私も出来るだけ会合に出席して諸君と懇談するのを老後の大きな楽しみにしています」と語っていた。

梓会は創立七十周年記念山行として一九八六年八月一日より三日まで上高地に行っている。四コースに別れ西穂高独標コースや徳本峠コースが計画された。参加メンバーは防衛大学を卒業したばかりという青年もまじる大部隊の八十五名であるが、平均年齢六十一・二歳。最高年者女性八十四歳、男性八十二歳。最年少者男性九歳、女性二十八歳である。これは一例ではあるが、田部の念願であった「和やかで楽しい会」が継続され益々発展していることを示している。

会長の東海林正治氏は梓川の岸辺に立って「梓会の創立時以来の指導者であった故田部重治先生が、生前よく云わ

れた『日本の国土を愛し、山を愛し、人生を考える』という言葉を改めて思い浮べ、深く心にかみしめたのである」と、梓会における「田部マインド」の感想を記念誌に書いている。このマインドが現在に至っても田部祭に継承されていた。

秩父・雲取山の田部のレリーフ前で、毎年六月第三土曜日の夕方より田部祭が行われている。田部が死去した翌年の七三年が第一回目で、雲取山荘の所有者でありレリーフの建立者でもある秩父鉄道が当初主催した。現在は新井信太郎氏（日本山岳会会員。四三六七番）が雲取山荘を委託管理していることからそれを主催し、三峰神社より神主を招いて神事を行い、神事のあとは参加者の懇親会を行っている。九八年が二十六回目にあたり私も参加したが、「一年に一回神様がおりてくる」と山荘の人である司会者の説明があり、祝詞では「はるか彼方から田部重治が参ります」などとあまりにも神格化している感じがした。そして行事そのものは営業的な感じを拭えない。この行事には毎年一〇〇人ぐらいが参加し、常に出席する人は二〜三割のようだ。

梓会のメンバーはその田部祭に継続して参加していたが、水交梓会は海軍経理学校出身者よりも、海軍兵学校出身者が多くなり、田部を知らない者が多くなったために参加する程度になったようだ。戦後二代目の梓会事務局長で八五年に副会長にもなった緒方順行氏は、梓会を代表してかなり多く田部祭に出席し、田部を偲んで毎回参加者に挨拶を行っていた。しかし、一九九二年六月二十日に行われた第二十回までは山荘の出席記録として残っているが、あとの参加は不明である。

また、梓会では八四年十一月には田部重治十三回忌にあたり、田部と縁の深かった檜原村数馬の周辺でその足跡をたどりながら田部を偲んでいる。

なお、会員との山行は略年譜を参照願いたい。

佐藤久一朗—山岳会への偉大な貢献

名クライマー、芸術家、友情厚き小柄な巨人の生涯

山田二郎



はじめに

佐藤久一朗さんでまず思い浮かぶのは、その類い稀な才能—というよりは異才ぶりだ。

世の中には体制の中心にあって華々しい存在感を放つタイプの人物と、佐藤さんのように、あまり目立った存在にならないように、体制からは一歩距離をおいて自在な姿勢を保ちながら、グループにとって掛け替えのない貢献をして、周りの人に影響を与え自ら存在感を示す人物がいるように思われる。

交際範囲は広く、その影響は山の世界だけに止まらないが、登山でも名クライマーと呼ばれるのにふさわしい実績を残しており、老年期に入ってからも精



畏友　槙さん（左）と佐藤さん　Yuko Maki 27 April 1963 のサインがある

進を怠らなかったことと、また人柄が醸し出す雰囲気から先鋭的な若手からも慕われた。

日本山岳会も戦前、戦後の長期間にわたって、数多くの恩恵を頂いている。

生い立ち

令夫人および長男の久朔さんによる佐藤久一朗さんの生い立ちは次のようである。

佐藤さんは一九〇一年（明治三十四年）に山形の旧家の長男として生まれた。父君は江戸時代から続いた紅花卸商「紅久」、山形銀行などを経営されていた佐藤久太郎氏。

山形市内の小、中学校を終えてから、慶應義塾に進み、一九二五年（大正十四年）に経済学部を卒業、早川種三が創立した「紀屋」に入社、ペンキの輸入、塗装工事などが仕事で、大正天皇陵の内装、神宮野球場などの塗装を請負った。その後、早川さん達がアルバータ遠征で出かけたときも、留守居役を引き受けている。

一九三一年（昭和六年）に、黒井（悌次郎）海軍大将の紹介（註1）で、北白川宮様のご用係（秘書官）を務

めることになり、宮家の高輪御殿で、最初のウェストンのレリーフを作られたという。その後、一九三七年（昭和十二年）に宮様が満洲（現中国東北部）に勤務されたために退職し、大倉家の番頭役だった義兄の招きで、満洲・本渓湖にあった大倉系列の特殊鋼会社に入社、終戦まで新京（現長春）の出張所長として勤務し、終戦一年後の一九四六年（昭和二十一年）に引き揚げ帰国された。

帰国後は本郷森川町にあった理研の倶楽部の管理人をされ、三年か四年の間、料理屋の真似事をしておられた。そして一九四九年（昭和二十四年）に槇さんの佐倉飼料が設立され、役員（非常勤?）に就任、後で述べる飼料袋の鶏のデザインをされた。

一九五四年（昭和二十九年）に山晴社（現キャラバン社）を創立し、キャラバンシューズを発売、なお、この前年頃に銀座大倉別館内にあった双葉産業を手伝い、丸善で売っていたビブラム底の短靴製造に携わった。この二種類の靴は、いま流行の軽登山靴、ウォーキングシューズの先駆けをなすものであった、といえよう。

一九七九年（昭和五十四年）日本山岳会名誉会員に推薦、一九八四年（昭和五十九年）六月二十一日逝去、享年八十三歳であった。

（註1）秩父宮様が立山に登られたとき、北白川宮様、竹田宮様が同行、黒井大将と登高会の槇、三田、早川さん等もご一緒した。その縁で佐藤さんの北白川宮邸勤務が決まった。

小槍登攀と屏風岩の初登攀が光る山行歴

佐藤さんが、当時山岳会と称していた慶応山岳部に入ったのは、一九二〇年（大正九年）で、最初の山行は七月の白馬から白馬鑓であった。そして同年十二月には五色温泉のスキー講習。旧い仲間の証言によると、さすがに山形出身だけあってスキーの腕も抜群で、無理のないフォームがきれいだったという。慶応山岳部での活躍を年次ごとに述べると、

＊一九二一年（大正十年）　四月　御坂山塊、五月　磐梯山、六月　甲武信岳、七月　北岳縦走、十月　甲斐駒、十二月　関温泉スキー講習。

＊一九二二年（大正十一年）　一月　吾妻スキー練習、七月　烏帽子―槍縦走、十二月　関温泉（リーダーの一人として）スキー講習、続いて白馬岳スキー登山。

＊一九二三年（大正十二年）　二月　五色温泉スキー練習、五月　新緑天幕行、七月　立山、剣、穂高、槍、小槍（第三登）、十二月　関温泉スキー合宿。

＊一九二四年（大正十三年）　一月　五色温泉スキー練習、蔵王スキー登山、富士山、七月　屏風岩（初登攀）。

＊一九二五年（大正十四年）　一月　剣岳。

卒業後の登山で「登高行」にのっているものでは、一九二九年（昭和四年）二月に槙さんをリーダーとして学生五名を含めＯＢでは佐藤さんのほか、早川種三、青木　勝、本郷常幸、他校のＯＢは松方三郎、和田周平、伊集院俔一といった顔ぶれで厳冬期の富士山に登った記録がある。

しかし、佐藤さんの学生時代の記録では、何といっても小槍（パートナーは青木　勝、波多野正信）と屏風岩の初登攀（同青木　勝、大賀道昺）を挙げることができる。見かけは小柄だし、そのようなチャレンジングな名クライマーには見えないのだが「登高行」の記録では、器用で体重も軽く悪場では服のフリクションを使って切り抜けている。「登高行」第五年に載った小槍登攀の記事は、執筆の少ない佐藤さんご自身の貴重な一編と思われるので、その一部を抜粋する。登攀後一年以上たってからの執筆であるが、岩の様相、攀じるときの手足、身体の動作の描写は正確で、若き日の登攀の歓び、緊張が伝わってくる。佐藤さんが芸術的要素とともに、後年いろいろな発明をした理の人でもあることをうかがわせる名文である。

「名も高き槍ヶ岳の西側に、耳の様にくっついたピナクル型の岩塊がある。小槍と呼ぶ。岩は槍ヶ岳と同質である。余程前に中山某がこの小槍に登ったということ、また大正十一年夏ザイルを用いて登った人のあったことを聞いた。

自分たちの登攀したのは大正十二年七月二十五日のことである。一年余りの日月を送った今、微細な点は忘れかけている。けれども内臓の隅々にまでピリピリこたえるような登攀の喜びは、消え失せるものではない。そして小槍へ登った時の喜びは、自分にとって新たな年を迎える度に大きく伸び、また肥えて行くようにさえ思われる。一条のザイルに結びつけられたクライミングパーティは互いの総ての危険と安全とを平等に分担し、そして始めて彼らは人間として又友達としてお互いを知り、自己を認むるのである。自分は可なりはっきりこの気持ちを味わい得る事が出来た。有り難いこと事だと感謝している」。

以下を要約すると、七月の半ばから曇りと雨が続いたが、二十五日の朝ようやく雲が切れて、佐藤、青木、波多野の三人はミッチー・ランガー・カウバー製の二十五メートルのザイルを背負って、槍の肩から右へ進み、左のガレを下り大槍と小槍のギャップに着いたのが九時三十分。東端の稜は傾斜が鋭く不利。ギャップから少し登り四、五メートルのスラブをトラバースしてチムニーを登ることにし、トップの佐藤とミドルの青木はミッチー・ランガー製の八本爪のアイゼン、ラストの波多野はトリコニー鋲を打った靴で登る。ピッケルなど荷物を残し、セーターと写真機をいれたザック一つを青木が背負い、苦闘の末十一時五十分に三人は頂上に着く。頂上に三尺（九〇センチ）のケルンがあった。岩間に鈴蘭と思われる可愛い花が咲いていた。青木のアイゼンの歯が二本、佐藤のアイゼンの歯が一本折れていた。一時間ほど素晴らしい休憩をとり、佐藤、青木、トリコニーがよく引っかかる波多野の順で下りた。四十五分かかった。上高地に帰ると、森の中の小屋に木暮さんと槙さんがおられ、頂上にあった鈴蘭と思われる花をお目にかけたら岩桜で「鈴蘭と岩桜の区別も出来ないようでは……」と笑われたそうだ。

屏風岩の初登攀は青木、大賀との三人で一九二四年（大正十三年）七月の輝かしい記録である。「登高行」へは青木さんが書いた。

登山記録は「七月七日（晴れ）午前三時起床、五時三分に露営地を出発、七時三十分バットレス上、八時二十分テラース（食事）、十一時五分アレート上、午後五時三分ギャリー出口、五時三十分ザイルを解く、八時十五分頂上、

（二六〇〇㍍）」とある。

携行品は「ザイル三〇㍍、ピッケル、リュックザック、シュタイグアイゼン、靴はトリコニィナーゲル打ち、手袋、写真機、冬シャツ、チョッキ、飯盒、水筒、コーンビーフ、チョコレート、乾パン、乾鱈、マッチ」（マウエルハーケンとハンマーは重いので野営地に残す）とあり、あの屏風岩をハーケンなしでよく登った、と感嘆せざるを得ない。また、屏風の岩は全部が完全な逆層で、ここでもオーバーハングでは身の軽い佐藤さんが青木さんの肩に乗って突破している。

途中、前途の見えない不安や、指二本とネール一本に支えられてのトラバース、いくつかのオーバーハングなど、ザイルを解くまで十二時間近い苦闘で、さらに薮漕ぎが続き、岩稜上で何度か睡気を催した、という。また登攀中に腕が疲れて指を休めたことが幾度かあり、五、六度食事をとったが、一人で飯盒の半分しか食べられなかったのは、不思議であった、と振り返っている。

その後、終戦までは満洲（現中国東北部）の本渓湖にいたためか、これといった登山記録は見当たらないが、交流のあった小西政継さんによると「佐藤さんが六十七歳のときにいっしょに屏風岩を登攀したが、柔らかくてバランスがよく、巧かった」といっている。

古稀のマッターホルン登攀と先鋭登山家との交流

佐藤さんの戦後の特筆すべき登山は、何といっても一九七〇年のアイガー東山稜の登攀、一九七二年のモンブラン、マッターホルン登攀であろう。この登山のために、早朝マラソンをしたり、庭の木に登って、腰を伸ばしたり、足を伸縮して柔軟性を養う、折れやすい柿の枝にアブミをかけて、それにのってバランス感覚を養う、などのトレーニングを続けていた成果であろう。

アイガーに一緒に登った小西さんによると「佐藤さんが登るというので、シャモニー、ツエルマットにいた日本人、

近藤　等、大倉大八、奥山　章らの諸氏が集まり、十人以上の大パーテイーになった」という。モンブラン、マッターホルンには小西さん、植村直巳さんという当時の名クライマーが同行しているが、これらの登山について佐藤さんは「山岳」第六十八年に「アルプスのあの日あの時」と題して執筆されている。また「毎日グラフ」などでも取り上げられているが、登攀の正確な記録というより、パートナーとなった小西、植村両氏のエピソードを交えて彼らの人柄を述べ、また彼らのサポートで困難なクライムを楽しむことができた、と書かれ、おおぎょうな表現でないところが如何にも佐藤さんらしい。

近年、大学山岳部出身者の通弊といおうか、社会人登山家とはとかく疎遠で、あまり親しく付き合おうとしない傾向がある。私などもあまり大きなことは言えないと自覚しているが、槙さんや佐藤さんの時代、少なくとも大正時代はもっとおおらかで、古い「登高行」を見ると松方、板倉、伊集院、波多野、和田といった他校の方々との登山記録がのっているし、松方さんは登高会の会員だった。また山岳部の部員で競争部やボート部と掛け持ちの人もいた。私が入部した頃には他の部との掛け持ちなどは論外、「山をとるか、勉強をとるかはっきりしろ」といった風潮が支配的で、この方が異常であったというべきであろう。

だから佐藤さんにしてみれば、山岳部出身以外の方々との付き合いになんの違和感もなかったのだろうし、山行歴でも判るとおり槙さんがヨーロッパから持ち帰ったアルプス的登山の影響を直に受けた佐藤さんにしてみれば、ヒマラヤ、極地法一辺倒の大学山岳部よりもアルプス的なクライミング中心の小西、植村、山田　昇ら社会人登山家により親近感を持っておられたかもしれない。また日本山岳会を愛するがゆえに、将来を見据えて彼ら名クライマーと交流を深めていたのであろう。

巧みの業、キャラバン・シューズなど

以上は登山者としての佐藤さんの、その足跡のほんの一面に触れたに過ぎない。もう一つ優れた〝巧み〟の達人の

面を述べたい。

佐藤さんの三年後輩にあたる内田勇三さんは「その才能は学生時代からのもので、馴鹿（となかい）の毛皮を買い入れシュラーフザックや上衣を作ったとき、手本は佐藤さんが作り、ラシャ生地の二本指の手袋も見本を作った」と語っている。

マナスル登山のときも、登山靴を見て「こんなスキー靴みたいな真平らな底では駄目だ。登山靴の底は前後左右に少し円味を帯びた卵型をしていなければ、疲れて仕様がないだろう」と教えられて、なるほどとおもった。外国隊のキャラバン姿を真似てバスケットシューズを用意したのだが、平地はともかく、下りでは踵のないバスケットシューズは滑って苦労した。帰国してそのことをお話すると「靴の踵は何のためについているのかも知らないで準備するなど論外」と厳しく指摘されたのを懐かしく思い出す。

またマナスル第一次隊では、ビブラム底の上等な革靴をキャラバン用に自作して、二、三の隊員に提供、これがその後のキャラバン・シューズの原形となった。これをモデルに第二次、第三次隊用の布製、ビブラム底の軽登山靴が開発され、隊員、シェルパに大いに喜ばれた。ここでも隊員が帰国すると、直ちに使い具合などを聞かれ、次の隊にはそれらの意見を反映した改良品を用意された。これが今日、広く愛用されている軽登山靴の起源となったことを知る人も少なくなった。

私事で恐縮だが、私も正統派のキスリングザックを結婚記念にいただいた。その作りは真に入念、サイドタッシェのふたの留め革にまで裏革が施してあり、キャンバスに麻布の裏打ちまでしてあって、少々重いのが今の私の体力には適当とはいえないが、いまだに健在で、道具箱に納まっている。

ウェストン、烏水、木暮、藤木さん等のレリーフ

我々山岳会員が最も親しんでいる上高地・梓川右岸にあるウェストンのレリーフだが、このレリーフの生い立ちや、

今日までにたどった歴史は、会報その他に多くの記録があるが、漏れているところもあるので、要約すると次のようなことである。

現在の丸いレリーフは戦後に佐藤さんが作りなおした三代目である。初代は一九三二年（昭和七年）北白川宮邸で製作したが、所在不明、二代目は一九三七年（昭和十二年）製作で、縦位置の長方形だった。一九三七年（昭和十二年）七月二十六日、槙、佐藤両氏が石工・金子父子を伴い現在地に設置した（会報六十八号）。寸法は縦一尺二寸（六六・五㌢）横一尺七寸（五一・五㌢）、梓川右岸の岩に石工が寸法に合わせ刻み終わるのを待ちかねたように、佐藤さんがセメントを塗り嵌め込んだ、という。

レリーフの設置については、槙、黒田、中司、佐藤の各氏が、大正池から徳沢までの五個所の候補地を選定、最善の場所として現在地に落ち着いた。また、レリーフ設置費用の一部にあてるためレプリカを四十点作成、会員に十円で配布した（会報七十号）。このレリーフは戦争激化に伴い、金属不足などで没収されるおそれが出てきたため、浜野正男さん等が暮夜ひそかに取り外し虎ノ門の山岳会ルームに持ち帰ったが、一九四五年三月の空襲に遭い損傷、佐藤さんは中国東北部におられたため、ほかの人が修復し、現在は四番町のルームにある。戦災にあった二代目は周りをカットして像だけを保存したものである。

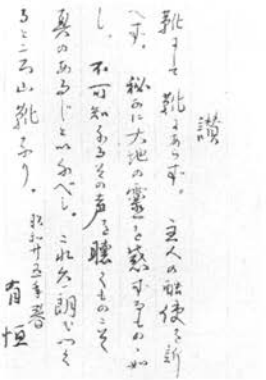
現在の丸いレリーフは前述のとおり三代目、佐藤さんが日本に帰られて新しく作り直したもので、一九四七年（昭和二十二年）六月十四日に、同じ場所に嵌め込み、槙さん、松方さん等が出席して、除幕式が行われた。関係者は小梨平にテントを張って泊まり込みで設置した（会報一四〇号）とある。

佐藤さんが作られたレリーフは十一面ほどあるといわれているが、山岳会関係を製作順にあげると、小島烏水（山岳会所蔵）、木暮理太郎（金山平）、藤木九三（六甲山麓、穂高滝谷の二面）の各氏で、いずれも依頼を受けて製作したものである。これらについては「山岳」「会報」などに一部記されているが、纏まったものが見当たらないので、年代など、その歴史を簡単に記しておく。



ウェストン像のレプリカ





アマハー手作りの山靴をモデルにしたブロンズと槇さんの讃（佐藤さん筆）

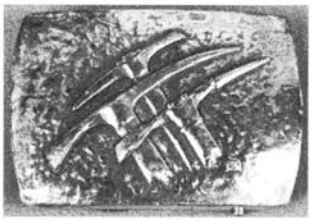
まず小島烏水像は、歿後に山岳会に寄贈された資金で記念像を作ることになり、依頼を受けた佐藤さんは六ヶ月間製作に没頭、一九五〇年（昭和二十五年）六月十日に山岳会図書室（お茶の水）南面の外壁に飾られた（会報一五一号）。現在も山岳会が所蔵している。木暮理太郎像は一九五一年四月に完成、クラブ・ルームで披露式を行った後、金峰山西麓の金山平に四月十四、十五日に取り付け、五月六日に除幕式を行った（会報一五六号）。

木暮翁碑前懇親会の世話役をしている山梨支部の山村正光氏によると、碑は現在地より三十分ほど南の尾根に登ったところにあって、一九五七年（昭和三十二年）七月十三日に松方三郎さんが碑文を書き設置した。そして深田久弥さんが『ヒマラヤ―山と人』（中央公論社刊）の扉にある通り、ヒマラヤ研究の先駆者であった木暮さんの碑前に、初版本を捧げた。

レリーフが有井館裏山の現在地に移転したのは一九六〇年（昭和三十五年）で、台石の立派な大谷石は渡辺宏之氏が寄贈し、三井松男山梨支部長（当時）の総指揮のもと大八車で運び、九月十日、十一日に起工式、十月八、九日に完成式、この年から木暮祭が始まった。現在の碑前懇親会になったのは一九六三年（昭和三十八年）からである。

藤木九三氏のレリーフは、関西支部五十年史によると、六甲山高座の滝そばの像は一九六三年（昭和三十八年）五月十二日に除幕式、穂高岳滝谷入口の像は一九六五年（昭和四十年）六月四日に除幕式を行った、とある。

この他にも慶応山岳部二十周年記念品（ランターンをデザインしたペンダン



三本のピッケルをデザインした
銀製バックル（筆者蔵）



ザック、ピッケルとククリを配したブロンズ
（以上三部作は織内信彦氏蔵）

ト、五四ページのカット、太田敬氏蔵）、同じく七十周年記念に配られたピッケルをデザインしたバックルは、昭和初期に作られたシェンク、ベント、フリッツ三本のピッケルをデザインした銀製のバックルが原形となっている。なかでも槙さんが愛用した登山靴―名人アマハー手作りの登山靴（アイガー東山稜も登った）をモデルにしたブロンズは傑作中の傑作で、槙さんが讃を書いて佐藤さんに贈られた。このほかマナスル初登頂を記念して、リュックザック、ピッケルにククリを配したブロンズも製作されており、ウェストンさんのレリーフのレプリカとともに会員の間では「佐藤さんの三部作」として愛蔵されている。

木彫りの山岳会の看板など

千代田区四番町サンビュウハイツの山岳会入口にある木彫りの看板を佐藤さんが彫ったことを知らない会員が多くなった。あの看板はお茶の水駅近くの利根川ビルの借家から自前のクラブルームを持ったことを記念して佐藤さんが製作し、引越と同時にたてられた。あの日本山岳会の文字は槙さんの筆跡で、またユニークな矢印は佐藤さんのデザインによる。当初は白木のままで十年以上にわたり雨曝しだったので、そのままでは朽ち果てるおそれが出てきたため、三年ほど前に資料委員の遠藤光男さんが、防水ラッカーでコーティングし、支柱を新しく、土台をコンクリートで固めた。遠藤さんは、ルームのピッケルやマナスルの石の台座など殆どのディスプレイを作られており、佐藤さんの後継者にふさわしい人が手直しした、といえよう。

上高地の前の山岳研究所のドアに取り付けてあった楕円形の立派な木彫りの会章も佐藤さんが彫ったものである。時期は一九七二年か七三年（昭和四十七年、四十八年）のことと思われる。山岳会が上高地の案内人組合の小屋を譲り受け、しばらく使用した後、山岳研究所として、新しい小屋を建てたのは一九七二年から七三年（昭和四十七年、四十八年）開所は翌年の五月のことである。木彫りの会章は初代研究所の木の扉に取り付けるために彫られたもので、この会章は現在の二代目山研入口の右側に飾られている（見出し上部のカット）。

この他に吾妻にある慶応の山荘の看板も、槙さんの書を佐藤さんが彫刻されたものだ。また前にも触れたが、佐倉飼料の製品をいれる紙袋に印刷した鶏のマークは、元気いっぱいの雄鶏が〝トキ〟をつげているデザインで、まことに芸術的で中身より袋が評判になった。

還暦会の赤い手編みのセーター

佐藤さんが、会員の功労者の還暦祝いに手編みの赤いセーターを編んでおられたことは確かだが、何着編まれ、誰に贈られたかなどの記録は、散逸して正確なことは分からない。佐藤さんの手編みのセーターを現在お持ちの名誉会員・織内信彦さんによると「成瀬岩雄さんが、三田さんの還暦祝いに赤いセーターを贈ろう、ということで、佐藤さんがフランスからふわふわの毛糸を取り寄せ、編まれたのがきっかけだ」という。セーターの贈呈は国際文化会館で、三田さんの還暦は一九六〇年（昭和三十五年）、「贈呈式の当日に三田さんにお孫さんが生まれ、二重の慶びに、ご満悦だったことを覚えている」という。その後、成瀬岩雄さんが世話役となって、還暦会と称し、当日の出席者を中心に有志が還暦を迎えたときに佐藤さん手編みの赤いセーターを贈ろう、ということになった、ということのようだ。

三田さんのセーターにはＪＡＣのマークも年数も入っていなかった、という人もいる。年一回開かれた還暦会は、出席者だけが会費を払い、その一部がセーター代に当てられたが、欠席が多く会費が少ないからセーターはもらえない、などという仕組みではなく、おおらかな会であった。

世話役が佐藤さんに「今年は誰と誰で合計何着」とお願いし、佐藤さんは毛糸選びから始められた。凝り性で、ある時はパステル調の渋い色、ある時は銀のラメ糸が混じる、など年毎に色調を少しずつ変えられた。途中から世話役が折井健一さんに交代し、山崎安治さんもお手伝いしていた。メンバーには四十代、五十代の人もいて、フォスコ・マライニさんも会員で、「私がもらえるのは先の話」と笑っていたのを覚えている人もいる。

還暦会は佐藤さんも、世話役の折井さんも亡くなられ、自然消滅して、貴重なセーターをもらえない残念なメンバーが残ったが、二十年以上にわたって、黙々とセーターを編み続けた佐藤さんの友情と奉仕の偉大さは、今更ながら驚くばかりである。

このほか、上高地のウェストン祭に頒布された手拭いのデザインを毎年されていた。お持ちの方も多いと思われる。また、あまり知られていないことだが、戦後の一時期、本郷で料亭のようなものを経営されたことがある。私もご馳走になった。鮭の頭で〝だし〟をとった味噌汁も有名だったが、私は豚の角煮の美味しさが、いまだに忘れられない。

芸大出身でもなく、靴屋で修行したわけでもなく、まして板前の腕を何処で会得したのか、今もって全く解らない。登山道具の製作、彫刻、各種デザイン、それぞれの道で長年にわたり修行を積んだとも思われない。こういった才能は、おそらく天賦のものであろう。並々ならぬ才能、資質、運動神経の持ち主でありながら、山岳会、登高会の中では、その存在は、まことに地味である。全く不思議な先輩というべきである。

先にも触れたが、〝紀屋〟にいたとき、開業早々に早川さんたちは、会社を放り出してアルバータに行ってしまい、岩登りに抜群の腕前を持っている佐藤さんが留守を引き受けているのも、いかにも佐藤さんらしい。

佐藤さんと酒

酒となると、数多くの逸話を持っておられる会員もおられようが、久朔さんによると「水筒の中味は水ではなく、

常に酒がはいっていた」そうだ。

私の知る逸話は、佐倉飼料に勤められていた頃、佐倉の工場に出張の帰り、佐倉駅から京成電車に乗ったが、酒酔いが醒めて見ると電車はまだ佐倉をでたばかりである。ずいぶん遅い電車だなー、と思ったのは誤りで、とっくに浅草について、さらに成田まで引き返し、もう一度佐倉駅を通り越したところ、だった、そうな。

あとがき

「山岳」編集者から「佐藤さんの伝記風の記事を書いてほしい」と依頼をされたとき、断わればよかったが、安易に引き受けたのが間違い、何しろ親父ほどの歳の大先輩であり、並々ならぬ特異な才能の全貌をご存知の先輩の殆どが亡くなられ、正確な記録を記述するには苦労があった。ご遺族のご助力、日本山岳会では織内信彦名誉会員、石橋正美さん、山梨支部の山村正光さん、登高会では小室雅夫、内田勇三、太田　敬、河野之保の諸氏のご協力を得て、ようやく完成に漕ぎつけた。厚くお礼申しあげる。

また、執筆にあたって、もう一つの難関は、佐藤さんご自身による執筆が極めて少ないことであった。これも佐藤さんの特筆すべきご性格といえるのであろう。

最後に、ご自身のご遺体を慶応医学部に献体されたことも、佐藤さんらしく見事な生涯と言えよう。



登山史上の稀有の人―ラインホルト・メスナー

「山と人が出会うとき、偉大なことが生じる」ウィリアム・ブレイク

田口二郎（遺稿）

先日、ＪＡＣ高所登山研究委員会の伊丹紹泰君から、高所登山についてなにか考えを述べよという質問をいただきまして、そのとき僕はとっさに、深く考えることもなく、ラインホルト・メスナーの登山を勉強したらどうだろうか、と答えました。

どうしてそう答えたかというと、そのとき僕は『山岳』の最新号（第九十二年・一九九七年号）の、戸高雅史氏が書いた「思考が消え、時間が消えた頂――Ｋ２単独無酸素登頂」という非常にいい文章を読んだばかりでしたが、これがメスナーの登山のいろいろな場面とじつによく似ていることに驚いたんです。ほかの人からみれば似ていないというご意見もあるかもしれませんが、少なくとも僕はそう思った。その連想から、伊丹君の質問にたいして、メスナーを勉強してみたらと、思わず答えたわけです。

僕はメスナーの書いたものをいちいち詳しく調べたわけではなく、かつて僕が訳したイギリスの登山家クリス・ボニントンの著書『現代の冒険』の「山」の項（後にこれだけを別の一書にして『ヒマラヤ冒険物語』という題で岩波書店の「同時代ライブラリー」に収録された）が、とくにメスナーの登山について一章を割いていて、その印象から

言うわけですが、なかでもナンガ・パルバットの山行が、戸高さんのK2無酸素単独行とたいへんよく似ていると思ったんです。

*

そういう連想を僕のなかに呼びおこしたのは、まず、二人とも単独行ではあるけれども、山にとりかかる前のベース・キャンプまで女性を同伴していることです。戸高さんの場合は夫人がついてきて、この奥さんと登攀中も頂上に着いてからもしばしば交信して、文章のなかに何度も奥さんの名前が出てきます。なにやら奥さんが孤独な厳しい山行のなかで、心のささえになっているような感じがする。

メスナーの場合も、最初のナンガ・パルバット登頂で死んだ弟の遺体さがしに夫人を連れていっているし、ディアミール壁の単独登攀のときや、エヴェレストの無酸素単独行でもガールフレンドらしい女性がついてきて、前進キャンプまで同行しています。これが登攀中のメスナーの心を大いに癒しているらしい。

それから、戸高さんは悪天候のため一度はひきあげる決心をして、BCから氷河を上ってC2を撤収しに行くんですが、そのとき一人で歩きながら涙がとまらなくなったと書いています。状況からみればこれはくやし涙かもしれませんが、僕はここでもメスナーを連想しました。

メスナーも山に一人でいるときによく泣くんですよ。それも奥さんを思いだしては、離れているのがつらくてつらくて慟哭する。メスナーの奥さんのウシーという人は元男爵夫人で、その男爵の世話になっていたメスナーと熱烈な恋におちて、夫と三人の子供を捨ててメスナーのもとに走ったというドラマがある女性です。巨大な山の過酷な環境のなかに一人でいるときの孤独感、寂寥感、悲壮感が、愛する女性との惜別感と重なるというか、そういう感情に圧倒されて、激しく泣き続けるんです。メスナーはナンガ・パルバットの単独登攀を二回こころみて、最初はすぐに撤退し、二度目に成功していますが、二回とも奥さんを思いだして泣いている。

このメスナーの嗚咽と慟哭が、BCの奥さんと別れて一人で歩いているときの戸高さんの涙と、僕のイメージのな

かでいっしょになりましてね。この二人は性格的にどこか似ているんじゃないかと想像したわけです。そうして、酸素なしで単独で高所にいるときの心理を考えるうえでも、これはなにかのヒントになるのではないかと思いました。

*

それから、やはり僕にある連想を呼びおこしたのは、戸高さんがK2を一人で登っていって、八四〇〇㍍地点にたどり着いたころの場面です。胸までもぐるような大きなラッセルを一人でやらなければならない。このあたりは帰りに事故が多いところだ。非常に緊張するし、肉体的にもつらくなる。おそらくそのとき戸高さんは、そうは書いてないけれども、一種の呼吸法をしたと感じられるんだな。その言い方として、心身をすっかり開いて、閉じることなく大きく開いて、自然のエネルギーを思うぞんぶん吸収する、宇宙の力と融合する、というふうなことが書いてある。そういう言い方が戸高さんの文章のあちこちにでてきます。

これは戸高さんが無酸素高所登山に対処する姿勢というものを書いているわけで、いわばノウハウを述べていると読むこともできると思うんですよ。

そこで僕がすぐさま連想したのは、メスナーがヒマラヤの、どの山かはっきりしないけれども、八〇〇〇㍍峰を登ったあとで京都に行ったときの話です。そのときメスナーは竜安寺の石庭で、ヨガをやったのか座禅を組んだのか、ともかく瞑想しているんですが、そのときの心境が、ナンガ・パルバットの頂上に無酸素単独で立ったときの気分と同じだったと言っている。これは『死の地帯』という本の一章に書いてあって、そこには「涅槃」とか「悟り」とか「没我」とか「無」とかいう、きわめて仏教的、東洋的な言葉がしきりにでてきます。つまり、八〇〇〇㍍を無酸素で登るというのは、禅でいう悟りの境地に入りこむということではないか、そう僕は考えたわけです。

これは戸高さんの、自分の全存在を開ききって、宇宙と融合し、そのエネルギーを吸収するという言い方と非常によく似ているのではないか。メスナーと戸高さんの山登りの姿勢には、どこか通じるものがある。この姿勢は高所で酸素をぞんぶんに摂り入れるための心身のあり方であり、そこには高所を無酸素で登るときのノウハウの秘密がある

のではないか。そんなことを想像して、この関連からも二人の登山家の近似性を面白く読むことができました。

僕は戸高さんとは面識がありませんが、お目にかかってお話をうかがいたいし、いまでは大勢おられる八〇〇〇㍍無酸素登山をやった方々からも、それについて聞いてみたいと思っています。

*

メスナーというのは山登りだけでなく、商売も非常にうまい人だから、たびたびの八〇〇〇㍍無酸素登山でみずから手に入れたノウハウを、なかなか進んで公開しないんですね。トレーニングをやったとか、八〇〇〇㍍に上がる前に順応のための登山をしたというようなことは書いても、いざ高所に登ってからの記述は文学的というか哲学的というか、ノウハウを具体的に開示していないところがメスナーのメスナーらしいところです。そのノウハウを暗示するもの、高所無酸素登山の身の置き方というか、生理や心理のあり方を示唆するものが、K2を酸素なしに一人で登った戸高さんの文章のなかにあるんじゃないかと、そう僕は読んだんですよ。

そんなことを考えていたときに、高所委員会の伊丹君から質問があったものだから、メスナーの登山を勉強することが、これからの高所登山の役に立つんじゃないかと答えたわけです。あまり深く考えることもなく、頭のなかにあったことを説明もなしに答えたので、伊丹君はいささか面食らったかもしれませんが、僕が言いたかったのは、ノウハウの視角からメスナーを読んでみたら、ということだったんです。

その点で、たとえば原真君たちの勉強ぶり、あのグループの人たちが書いたものや、僕の若い友人である山本正壽君の運動生理学の研究などは、メスナーに近づくための大きな手がかりになると思いますね。

それに関連して、戸高さんの文章を読んでふと思いだしたのは、なにかの雑誌でみた、地中海で流行っている酸素器なしの素潜り競技です。たしかコンスタンスといったかな。写真をみると、海に潜る前の準備行動として、鎮座して深呼吸しながら腹をたたいているんですね。酸素を体いっぱいに摂り入れて、赤血球にどんどん酸素を送りこむ方法らしいのですけれども、これなども高所無酸素登山のノウハウとの通有性があるんじゃないでしょうか。

＊

それにしてもメスナーというのはまさに超人で、僕らの世代の山登りからみれば怪物ですよ。あの登山は究極のアルピニズムというか、アルピニズムはメスナーにおいて行き着くところに行き着いたと言えると思います。

では、どうしてメスナーのような怪物があらわれたのか。アルピニズムの究極にあらわれたメスナーの登山には、どのような歴史的な意味があるのか。僕は近ごろ目が悪くなって、読み書きが思うようにまかせないので、暗闇の頭のなかで暇にまかせて考えごとばかりしているのですが、そこで考えたことをお話しさせてもらいます。

メスナーの登山にたどり着くためには、ちょっと話が長くなりますが、僕の考えの順序として、アルピニズムの始原からはじめたいのですよ。それについて、ボニントンが『現代の冒険』のまえがきのなかで「アルピニズムは産業革命の背に乗ってやってきた」という名言を吐いている。この名言は、あの本を訳したときから僕の頭にこびりついていました。そこには、アルピニズムと産業革命はどのように関連しているのか、なにが共通しているのか、それはどこへ行くのか、という問題が含まれています。

ボニントンの名言をもっとくだいて、わかりやすく言えば、アルピニズムは産業革命の魂を積んでやってきた、ということじゃないかと思います。つまり、産業革命の魂とアルピニズムの魂とは同じだ、と言えるわけですよ。

それについては、やはりイギリスの偉大な登山家で碩学であるウィンスロープ・ヤングが、アルパイン・クラブ百年史のなかで「黄金時代の登山者の精神は、イギリス帝国建設者の精神である」という意味のことを書いているんです。僕はこの言葉に強烈な印象を受けまして、はたと膝をたたいたものでした。このイギリス帝国の建設の時代とは、とりもなおさず産業革命がもたらした時代のことでしょう。つまり、その時代の精神が登山に乗り移った、とヤングは言っているわけです。

＊

ところで、産業革命が生みだした資本主義というものは、市場の拡大、資源の獲得をめざして、いっときも休みま

せん。自分の版図を一センチでも拡げたいという、大拡張主義に発展します。これが帝国主義ですね。レーニンは帝国主義を資本主義の最終段階、つまり産業革命が行き着いた終極のかたちだと喝破していますが、市場と資源をもとめて世界のすみずみまで進出する。その精神はきわめてアクティブで、きわめてオッフェンシブなものです。イギリス帝国の最盛期には七つの海を支配したと言われるように、そこには征服欲の強烈な衝動がみられるのですが、この政治的動向の根底には経済的要因がある。

したがって、そういう社会と時代を形成している人間の気質も非常にアクティブで攻撃的、争覇的になります。これが産業革命の魂であり、帝国建設者の精神だった。

ときあたかも世界に先駆けて産業革命を完了したイギリス人は、世界に先駆けてアルプスに進出した民族でした。その登山の姿勢も征服欲にみちていて、たいへんアグレッシブで、競争的です。この攻撃性、争覇性は資本主義、帝国主義に特有なもので、それがアルピニズムにもつながっている。僕の高等学校の後輩の平井吉夫君が先年ウィーンで出版された『アルピニズム』という分厚い本（ライナー・アムシュテッター著）を紹介してくれたんですが、そこにも「黄金時代のイギリス登山家によるアルプス諸峰の征服は、同時代にインドを直轄植民地にしたイギリス帝国主義の一部とみなすことができるし、アルプスもいわば植民地と見られていた」という意味の論述があります。

平井君とは一九世紀末に設立されたドイツ語圏の労働者階級の登山団体「自然の友」の歴史もいっしょに勉強しています。初期の「自然の友」はブルジョア登山に対抗するプロレタリア登山の理念を立てるために、アルピニズムをあれこれ分析しておりまして、そのなかにこんな考察がありました。アルピニズムの第一段階はもっぱら高みに達しようとする「高所アルピニズム」で、これは新天地の征服をめざす帝国主義であり、第二段階の「困難アルピニズム」は高所にできるだけ困難なルートで到達しようとするもので、これは自由競争に通じており、いずれも資本主義の原理がもたらしたものである、と。

*

「自然の友」はドイツのアルピニズムの歴史のなかで特殊な位置を占めているんですが、ドイツのアルピニズムの主流となった登山のやり方は、イギリスよりももっと激しく、もっと攻撃的です。これはイギリスに半世紀も遅れて産業革命を達成したドイツ資本主義の性格と関係していると、僕は思うんですよ。

ドイツ帝国主義が市場と資源の獲得競争にのりだしたとき、獲得すべき対象はずっと小さく、少なくなっていた。対象が小さくなると競争は激しさを増します。追いつき追いこせで、相手の領分に強引に割りこんでいくしかない。過去の大きな遺産があるイギリス帝国主義に比べて、遅れてきたドイツ帝国主義の獲得欲と征服の衝動ははるかに激烈になる。第一次世界大戦も第二次大戦も、このドイツ帝国主義の市場再分割をもとめる激しい衝動が引き金になり、いずれの戦争でも潰滅的な敗北をこうむった。

この激しさはドイツ人の気質となって、それがアルピニズムにも乗り移ります。比較的おだやかなイギリス登山の精神と、激烈なドイツ登山の精神は、両帝国主義の性格がかもしだした国民性の反映と言えるでしょうね。ドイツ帝国主義の過激さはヒトラーの第三帝国の建設で頂点に達するわけですが、ドイツ特有の戦闘的アルピニズムもナチス・イデオロギーに感染して、山で死ぬことをゲルマン神話の英雄の死になぞらえたりする。あの時代にはドイツの登山家がやたらに死んでいますが、ほかの国のアルピニストはドイツのアルピニズムを「あれは登山ではなくて戦争だ」と批判したものでした。

*

このドイツ帝国主義の特色からくるドイツ人の気質、戦闘精神は、第二次大戦に敗北して第三帝国が瓦解しても、ドイツ人の意識の底に抜きがたく残ります。戦後の全面的な崩壊からいちはやく復興をなしとげて、いまやヨーロッパ随一の経済大国になったのも、この精神の発露でしょうね。しかし、いわゆる帝国主義的な拡張の対象、征服すべき版図はドイツの前から消えていたし、敗北した帝国主義として、そのような争闘戦は許されない状況になりました。もっとも、この事情は勝利した帝国主義にとっても言えることで、第二次大戦後の世界では、さまざまな要因によっ

て、もはや古典的な帝国主義の政策がとれなくなっていた。とびぬけて強大になったアメリカ帝国主義が、戦後もあちこちで戦争をやっているとはいえ、それでも従来のような帝国主義の争覇戦は、地上の視界には見えなくなります。

ここで僕の連想はいささか飛躍するんですが、産業革命によって駆動した拡張のエンジン、帝国主義の精神の発露は、地上を離れて宇宙に向かったんじゃないか。スターリニズムのソ連が最初に人工衛星スプートニクを打ち上げれば、アメリカ帝国主義は最初に月に到着して星条旗を立てる。かつて地上の視界のなかで展開された争覇戦、前人未踏の版図をもとめる競争が、地球の境をこえて宇宙で展開されます。

さて、宇宙に飛びだすために不可欠なロケット技術は、アメリカとソ連が敗戦国ドイツから技術者もろともまっさきに持ち去ったものです。米ソの人工衛星が宇宙で出会ったときに、ドイツ語で再会の挨拶をかわしたという笑い話がありますが、この最も貴重な財産を奪われたドイツ人は、無限の宇宙に向かう争覇戦を指をくわえて見ているしかない。

しかし、ドイツ帝国主義が百年にわたって培ってきた心情、戦闘精神というものは、敗戦国という制約のなかでも残っているし、宇宙からは締めだされても、無限の対象に命がけで挑むという、ドイツ人の身に染みついた気質は消えることなく燃えつづけている。そうして、勝利した帝国主義がやっているように無限の宇宙に飛びだしたいという心情が、登山においては無限の高みに、死と隣り合わせの世界に、無限の困難を克服して登っていこう、という姿勢となってあらわれる。ヒマラヤの八〇〇〇メートルの高峰にたった一人で酸素なしに挑戦するという、前代未聞のメスナーの激しい登山は、これまで話してきたような歴史がつくりだした社会的精神的バックグラウンドから生まれたもので、メスナーはいわば疑似的なアストロナウト、地上の宇宙飛行士ではないか。

ロシアに最初の宇宙飛行士ガガーリンが、アメリカに最初の月面歩行者アームストロングがいるならば、ドイツにはメスナーがいる。ラインホルト・メスナーはドイツ的アストロナウトである、というのが僕の歴史的解釈というか、いささか飛躍した連想がたどりついた結論なんですが、いかがなものでしょうか。

＊

たしかに国籍からいえばメスナーはイタリア人です。しかしメスナーが生まれ育った南チロルは第一次大戦後にオーストリア領からイタリア領になったところで、住民の大部分はドイツ人です。それだけにドイツ民族主義の感情も激しくて、歴史的にも僕の考えにぴったりの土壌があるんです。

また、メスナー個人の思想や人生観は、僕の解釈するものとは当然違っているでしょう。僕はメスナーの登山という現象を、メスナーの主観とはかかわりなく、いわば社会科学的に考えてみたんですよ。そうしてボニントンの「アルピニズムは産業革命の背に乗ってやってきた」という名言に触発され、ヤングの「黄金時代の登山者の精神は、イギリス帝国建設者の精神と同じである」という言葉を媒介に、遅れてきた帝国主義という概念をキーワードにして、ドイツの登山をあれこれ考えているうちに、メスナーはドイツ的な宇宙飛行士であるという結論に達したわけです。この僕の妄想にたいして、皆さんの忌憚のないご意見をお聞きしたいと思っています。（談）

〈付記〉

誠に突然九月二十三日、田口さんの訃報に接しました。山岳九十二号の各務良幸編に引き続き九十三号にメスナー編の原稿を頂いていた私としては誠に残念な悲しい知らせでありました。

田口さんの語る文章としては、このメスナー編が田口さんの絶筆となりました。ここに会員の皆さんに「登山史上稀有の人―ラインホルト・メスナー」をお届けし、亡くなられるまで鋭い感性で山のことを思い続けられた田口さんのご冥福を心よりお祈り致します。

（田辺　寿）

アルバータ峰のピッケル

田島　守

七十二年ぶりに元の姿に―記念のピッケル―

一九九七年十二月六日午後六時過ぎ、東京・品川の新高輪プリンスホテル国際館大会場では、日本山岳会の年次晩餐会が開かれていた。明るい照明の下、正面ステージ右からカナダ山岳会長 Mike Mortimer 氏が、左からは長野高校ＯＢ山岳会長原謙一が歩み寄って行った。それぞれピッケルの本体と石突きの一部を手にしていた。司会者の合図で両方を合わせると、ピッタリ合体し、見事な一本のピッケルが出現した。

会場から大きな拍手が沸き上がり鳴り響き、この歴史的な瞬間を祝った。二つに折れて別々のところに保存されてきた一本のピッケルが四十九年振りに合体した記念すべき時であった。少し錆色のある石突き、それを支える木のシャフト部分（力で折ったため、切れ目は不揃いになっている）は不十分な姿から、ピッケル本来の姿に蘇り、一瞬きらめきこの世で最も尊いもののように思われた。

出席者の目の前で高く掲げられたピッケルは、まさに岳人の友情の象徴として、七百五十名に及ぶ国内外の出席者



アルバータ峰（東面から。登頂ルートは中央よりやや左。頂上は中央よりやや右）

の注目を浴びていた。拍手とどよめきの中、私の脳裏にこの石突きを持った故下平和範の姿が見えた。正ちゃん帽の彼はニコット笑ったようだった——はっと気づくと、壇上の二人は黙礼をして左右に下りかけていた。会は余韻を残しながら先へと進んでいった。私は進行係の声を聞きながらも、頭は先刻の夢の続きにあった。

アルバータ峰の第五登—持ち帰ったピッケルの石突き—

一九六五年七月二十九日午後三時四〇分、私達長野高校OB山岳会カナディアン・ロッキーズ遠征隊の田島、渡辺、下平の三名は十数時間に及ぶ氷壁と岩稜の登攀の後、憧れのアルバータ峰の頂に立った。コンテニアスで頂を目指していたトップ下平の「頂上だ」の叫び、続いて渡辺の声、思わず駆け寄ると紛れもなく頂を示すケルンが雪の中に姿を見せていた。下平はピッケルの石突きの部分の木部を持ってこんなものがあったと差し出した。渡辺も私も手にした後、二登のオバーリン隊が置いていったんだろうと話し合った。頂から数メートル先はもう北壁へのゆるやかな下りになっていた。トランシーバーで下のテントの中村、原と交信し登頂の喜びを分かち合った。

雲間から青空の覗いていた天候は、次第に高曇りとなってき、

主稜に立った頃からは、霧が立ち込めていた。頂からの眺望はほとんどない。時折霧の切れ間から山稜の一部が見えかくれするが、南稜だろうか。小雪が舞ったり止んだりする。西の遥か下にアサバスカ川の流れが光る。目も眩むような高度感だが、東側には雪が付いており雪庇になっている。霧も恐怖感を和らげているようだ。

ケルンの下にあった錆びた缶の中にはびっしょりと濡れてぼろぼろになった二枚の紙片と茶色に濡れた一枚の名刺が入っていた。なんとか記録を判読し、我々は五登目だということを知った。この記録の紙をこのまま頂上に留めて置くことは、記録の消滅となろう。持ち帰る事にした。頂での二十数分はまたたく間に去った。書かれてあった記録を写し、さらに自分達の記録を記した紙を用意してきた新しい缶に入れると、下山の準備にかかった。記念にとピッケルの石突きを下平のザックに、缶を渡辺のザックに、丁寧にノートの間に挟んだ記録の紙と小石を田島のザックに入れた。雪を掘り新しい石をケルンに積むと、「さあ、下ろう」と声をかけた。四時一〇分、頬がピクピク痙攣したように感じた。登りのあの苦しさを思うと、下りの厳しさがどんなものか十分過ぎるほど想像できた。慎重に、慎重にと声をかけながら進む。ザイル固定で乗り越えたギャップでザイルを撤収すると、主稜のゆるやかなナイフリッジを南へ進み岩壁への降り口に達した。ここからはアップザイレンの連続で下った。苦しい下山だったが、登頂できた喜びが疲れを感じさせなかったように思われた。ツエルト地点に着く前にさしも日の長いロッキーも暗くなり、狭い岩棚で二泊目のビバークとなった。翌三十日一二時四〇分、岩壁途中迄の原の迎えを受け、中村の待つテントに帰った。

下山後の八月三日、入山許可をとった国立公園監視員のウインクラー氏の事務所を訪ね、アルバータ峰など四峰の登頂の報告をすると共に多くの便宜を図ってくれたことへの礼を述べた。そして、アルバータ峰の頂から記念に持ってきたピッケルの一部と記録の入った缶を日本へ持ち帰ることの可否を問うた。彼は前例（二登のオバーリン隊が初登の槙隊が残したピッケルを持ち帰った）もあるので良いと答えた。さらに、自然保護の上で、生木などは一切傷つけなかったこと、ルートの目印に赤い絶縁テープを岩に張り帰りに剥がしてきたが、見落としがあったら許していただきたいことを述べ、万が一の誤解を防ぐ意味でその趣旨を書いた文書を渡した。彼は熊の行動など危険防止の面か

ら我々がとったベースキャンプ付近のルートを実際に歩いたようで、私達の行為は充分納得できるものだと言ってくれた。

私達はこの石突きは二登のオバーリン隊が残したものだと思い込んでいたので、帰国後周囲や報道陣にもそのように発表した。そして、いずれ展示し公開できる所に寄贈しようと相談し、他の品々と一緒に長野高校ＯＢ山岳会清水栄一会長宅の書庫に納めた。

遠征前、私達は一九二五年初登頂された三田幸夫氏から、（長野高校山岳部ＯＢで慶応大学山岳部ＯＢの西沢與志英氏の紹介により）数々のご指導ご助言をいただいていた。帰国後、写真などを持ってお礼と報告に参上した。その折もアルバータ峰にまつわる話をお聞きしたが、この石突きのことは全く話題に上らなかったと記憶している。

忘れられていった石突き―公開展示の場を持たぬまま―

二年後の一九六七年三月、金沢大学山岳部のリーダーとなっていたアルバータ登頂隊員の下平和範の、北アルプス大天井岳で滑落遭難死という悲劇が私達を襲った。捜索、遺体収容、葬儀という辛い日々の中で、だれからともなく、アルバータのあの石突きを写真等と共に下平と一緒に埋葬してはどうかという話が出た。彼一人で旅立たせるのはあまりにも辛かったからだった。しかし、石突きはそのまま保存された。そして、この石突きのことはだんだん話題に上らなくなっていった。いずれ、どこかに展示しなければと頭の隅で思いつつ。

その後、アルバータ峰を目指す幾つかの山岳会から問い合わせがあり、出来る限りの資料の提供をしてきたが、登頂の知らせはなかった。また、毎年、カナダの国内外の幾つかのパーティーが登頂を目指したようだが、登頂の記録を目にできないまま過ぎていた。

一九七五年日本山岳会主催によるアルバータ登頂五十周年の祝賀会が東京で催された。一九六四年、アルバータ峰を目指した川口市山岳連盟の池田氏と、日本人として第二登となった我々長野高校ＯＢ山岳会隊の田島も招かれた。

そこで、初登頂された槙、三田、早川氏ら大先輩と親しく話をする機会を持てたが、ピッケルの石突きのことは全く話題にならなかった。

写真やスライドは度々利用されたが、この石突きは特に確認することもなく、他の資料などと共に清水会長宅の書庫に納められたままになっていた。

カナダに戻っていた記念のピッケル―石突きを失ったまま―

一九九七年三月日本山岳会の会報「山」六二二号に、一九二五年初登頂された槙隊が登頂記念にアルバータ峰の頂に残したピッケルのことが載っていた。一九四八年二登を果たしたアメリカのオバーリンとアイレスがこのピッケルを持ち帰った後、ニューヨークのアメリカ山岳博物館に展示されていたが、カナダの要請でジャスパー博物館に展示されているという記事であった。筆者の芳賀氏はそのピッケルと対面した。氏がかつてニューヨークで見た時と同様石突きの部分を失っていた。

帰国後、初登頂隊の写真等の送付を依頼された芳賀氏が岳父三田幸夫氏の残された資料を探しているうちに、私達長野隊の写真を見つけた。その写真の中に折れた石突きが写っていたのである。その石突きが今どこにあるか、記念のピッケルを元の姿に戻してやりたいという願いが述べられていたのである。

日本山岳会の本部委員を経験していた原長野高校ＯＢ会長がこの記事を読み、すぐに当時の隊員に連絡した。この記事を読んだ私は、我々がアメリカ隊のものと思い込んでいたピッケルの石突きは槙隊が記念に残されたものに間違いないと思った。そして、日本人とアルバータ峰の因縁の深さに驚くと共に言い知れぬ感動を覚えた。早速、元ＯＢ会長の清水氏の家に走った。石突きは缶と一緒に書庫に保存されていた。すぐ芳賀氏にその旨を知らせた。

芳賀氏ご夫婦のご努力もあり、一九九七年五月、日本山岳会のルームでアルバータ峰のピッケルの集いが開かれた。長野からは原と登頂隊員の渡辺一が参加した（当時の隊長田島はやむを得ない所用で出席できなかった）。主賓の石

突きを囲み、関係者十八名による楽しい語らいが続いた。この集いから日本山岳会の海外連絡委員会の企画による年次晩餐会における合体セレモニーが持たれたのだった。

しかしこの間我々は、この石突きが日本隊のものと確信すればするほど、万一これが全く関係ない物であったら……との思いが頭の一部に過った。そこで資料委員会のオーソリティ・遠藤光男氏にこのレプリカを作ってもらい、それをカナダに送って確信を深めた、という今だから明かす舞台裏の話もあった。

永久に完全な姿に甦る日を願いつつ—安らかな安住の地に—

二〇〇〇年にはカナダ山岳会と共催でアルバータ峰登頂七十五周年を祝う企画が始まっている。一方、長野高校は一年前の一九九九年に学校創立百周年を迎える。その記念にアルバータ峰から持ち帰った石突きをカナダのジャスパー博物館に寄贈しようという希望もあったが、日本山岳会の計画に合わせることとした。従って石突きは晩餐会で合体後ＯＢ会へ持ち帰り、再びカナダで合体させるまで保管することとした。

初登頂は、日本山岳会員による始めての海外遠征であったこと、槇有恒隊長率いる慶応と学習院の山岳部のメンバーにより構成された隊にスイスの山岳ガイド三名が加わった合同隊であったこと、この遠征隊の後援者細川護立氏から託された細川氏のイニシャルＭ・Ｔ・Ｈが金で象眼されたスイス製ピッケルを頂に記念として残して来たことなど山岳関係者にはよく知られていることである。また、アルバータ山頂には、日本の天皇陛下から与えられた「黄金のピッケル」が残っているという伝説があったことも知られていることである。この経緯については芳賀氏が「アルバータ峰のピッケル物語」で詳しく述べられている。また、石突きの状態や記録の入った缶及び記録が書かれた紙とその内容については日本山岳会会報六二七号に原が書いている。

私達の遠征は多くの方々の支えや援助で実現に至ったのだった。一九六五年七月九日初めてアルバータ峰を仰いだ印象を田島は「ウーレーから無名峰に続く尾根の最低鞍部に出た。目の前には素晴らしい光景が広がっていた。雄大

な眺めだった。二つの大きな氷河が連なり、手前の末端からは、黒い衝立のような大岩壁がそそり立っていた。その正面には紛れもなくアルバータが不気味な風貌でどっしりと聳えていた。素晴らしさの驚嘆よりは畏れにも似た威圧感を受け、背筋に走る戦慄をおさえることができなかった」と記録している。ウーレー峰、無名峰、スタットフィールド峰の登頂を果たしながら、アルバータ峰へのルートを探した。初登頂のルートを調べると共に、出来るだけ速く主稜に出たい、そう考え南主稜側からの登攀の見通しを探った。スタットフィールドから望んだ南面はその可能性を持たせた。七月二十五日、原・下平のサポートを受け、田島・渡辺は南稜からの登頂を目指した。しかし、オーバーハングが連続する上部の大岸壁に行く手を阻まれて引き返した。結論は槙隊のルートにより登頂を目指そうということだった。日程的にほとんど余裕の無くなった七月二十八日朝、雨の止むのを見て出発した。八時間の行動の後、小雪の舞う中段のテラスで落石、雪の崩落を避けツエルトを張った。そして、翌二十九日頂に立てたのだった。

四十九年間はなればなれになっていた記念のピッケルの本体と石突きが完全な姿に甦る日は近い。多くの方々の力や願いが国を越えて、山に登る人の心をさらに深く結び付けてくれたように思えてならない。

そういえば、下山後ジョナスクリークのキャンプサイトで荷物の整理をしていたとき、年老いた一人のカナダ人が私達を日本人と聞いて訪れてくれた。キザミたばこを紙で包み唇で器用に巻いて吸いながら、若いころ、日本人の槙隊にコックとして雇われて一緒に山に入ったと、ひどいなまりのある英語でなつかしそうに話してくれた。私は十分聞き取れなかったが、学生の下平はよく理解し、我々もアルバータ峰の頂に立てたと話すと、嬉しそうに手を差し出した。握手をした彼の堅い手の感触が忘れられない。槙さんたちはアルバータの遠征に参加したどの人にもこんなにも慕われていたのかと、感慨を深くしたことであった。

私達がこのピッケルに関われたことの幸せに改めて感動し、関係された方々に心からの敬意を表したい。日本の登山界にとって真に記念すべきピッケルが、元の姿となってアルバータ峰の麓ジャスパー博物館に安住することを願いつつ。

（一九六五年長野高校ＯＢ山岳会カナディアンロッキーズ遠征隊長）

ミニヤ・コンカの輝く微笑み

——札幌山岳会貢嘎山登山隊一九九七

芳賀正志

一、はじめに

一九八一年の初夏、北海道の登山界に衝撃的なニュースが飛び込んだ。

「中国四川省のミニヤ・コンカにて北海道山岳連盟隊の八人が滑落死！」

関係者は躍起になって情報の収集にあたったが、当時の中国奥地の情報網はきわめて未整備で、イライラが募るばかりであっただろう。また、事の次第がつまびらかになるにつれて、事後処理やマスコミへの対応に忙殺されたのはいうまでもない。

当会においても、金子春雄総隊長、川越昭夫隊長、島田昌明隊員を参加させ、そのうちの島田が遭難者の一人とあっては、会の運営も混乱をきわめていた。他の道内山岳会においても有望な若い隊員を失った痛手は大きく、その後の道山岳界全体に落とした底なしの影はいつまでも吹き払われることはなかった。残された家族の深い悲しみと無念の思いを私ごときが語るには、適当な言葉が見つからず、ましてやその資格もない。

中国登山には未知の要素が多いため、幾度にもわたる関係者の調査・踏査が繰り返され、日中友好の架け橋という大義の下に二十数人の隊員が、解禁直後のミニヤ・コンカに勇躍に旅立ったにもかかわらず、あまりにも悲しすぎる結果となったのである。

世の常として、結果に対してのみ容赦のない厳しい評価を下すものであり、その矢面に立たされた当人たちは、大きな力に

翻弄されざるを得ない。さまざまな事後処理が終わろうとも、重い十字架が取り除かれることはなく、出口の見つからない迷路に入り込んだ気持ちであっただろう。そうした重い年月を経て、「再登ミニヤ・コンカ道岳連隊」が組織されたのは事故から実に九年後であった。当会から再び金子と川越そして山本健司の三人が加わったが、連日の雪との戦いの末、北西稜六五〇〇㍍を最高到達点とするにとどまった。

しかしながら、この遠征隊の成果は実に心強い伏線となり、今回の計画を牽引していってくれた。「再登ミニヤ・コンカ隊」がなければ「札幌山岳会ミニヤ・コンカ隊」の成功はあり得なかったといってもよい。隊員としての参加はかなわなかったが、実行委員としての山本の献身的な協力には、隊員の誰もが頭の下がる思いであり、また二度の経験を持つ川越の参加は、若い隊員を力強く後押ししてくれた。

その他にも過去の外国隊の記録や、市川山岳会隊、日本ヒマラヤ協会隊など多くの岳人の経験の蓄積により、長い年月を経てようやくのことヒマラヤン・ブルーに映えるコンカの微笑みに接し、氷河に眠る多くの御霊に恩返しすることができたのである。謝謝。

二、計画実現への経緯

一九九四年二月の当会の年度総会において、若い会員より海外登山の話が出てきた。当会単独の海外登山は、一九八五年のナンガ・パルバットを最後に途絶えていたが、若いエネルギーの発露をもって時代は繰り返すものである。

会の運営を預かるもののひとり（理事長）として複雑な心境であったことは否めないが、全会一致で可決し、まずは「研究会」が発足した。

月一回の会議には十数人の会員の参加があり、目標の山域、山を決めるための検討が始まった。その選考基準は、高度・難易度・所要日数・費用など多岐にわたり、その都度資料を持ち寄っての活発な討議がなされた。

私個人としては、無意識ながらも頭の片隅に「ミニヤ・コンカ」があり、会議の方向性が絞られてくるにつれて、その存在感を意識するようになった。しかし過去の忌まわしい数々の事故がその夢を萎えさせようとし、「どうして今さら……」いう意見があったのも偽りのない事実であった。

「日本人初登に色気はなかった」といえば嘘になるが、「北海道の岳人が決着をつけなければならない命題」という認識の方が勝り、前述の山本の

「美しい山だ。条件さえ揃えば絶対に登れる！」という言葉が皆の気持ちを決定づけたといっても過言ではない。

ただ、目標に決まってから、すべての行動や考え方の根幹として申し合わせたことは「絶対に事故を起こしてはならない。

過去の出来事に惑わされることなく、純粋な気持ちでコンカに向かおう。大切なことは過去の轍を踏まぬよう、基本に忠実に最大限の努力をすること」であり、結果はともあれ恥ずかしくない山登りをすることが「ミニヤ・コンカへの礼儀」でもあった。

一九九五年二月の総会でミニヤ・コンカという目標が承認され、研究会は「実行委員会」へと移行した。その中で大きな課題は、派遣時期と登山ルートの選定であった。

派遣時期に関しては、現有勢力をどこまでレベルアップできるかということと密接にかかわってくる。外部に助っ人を頼むという方法も考えられたが、それは我々の意に反することだった。また、プレかポストかという点では、プレに軍配が上がった。結果的には一九九七春に決定。

ルートに関しては、未登だが風下側の雪の多い「北東稜」と、成功したいずれの隊も使っている「北西稜」の二つが候補であったが、安全性と可能性を最優先として北西稜と決定した。

「中国登山の手引き」（日本ヒマラヤ協会）を頼りとした準備作業と、山本を主体とした北西稜の研究とが同時進行するが、「厳冬期の日高山脈や利尻で培った登山力をもってすれば、想定される範囲の問題についてはクリアできるであろう」という思いとは裏腹に「それでことが済むなら、そんな簡単なことはない。ヒマラヤの単独峰を目標にしたのは、果たして正しかったのか？」という思いも脳裏をかすめる。

一九九六年二月の総会において「札幌山岳会ミニヤ・コンカ登山隊一九九七」の計画が全会一致で承認され、作業に拍車がかかった。

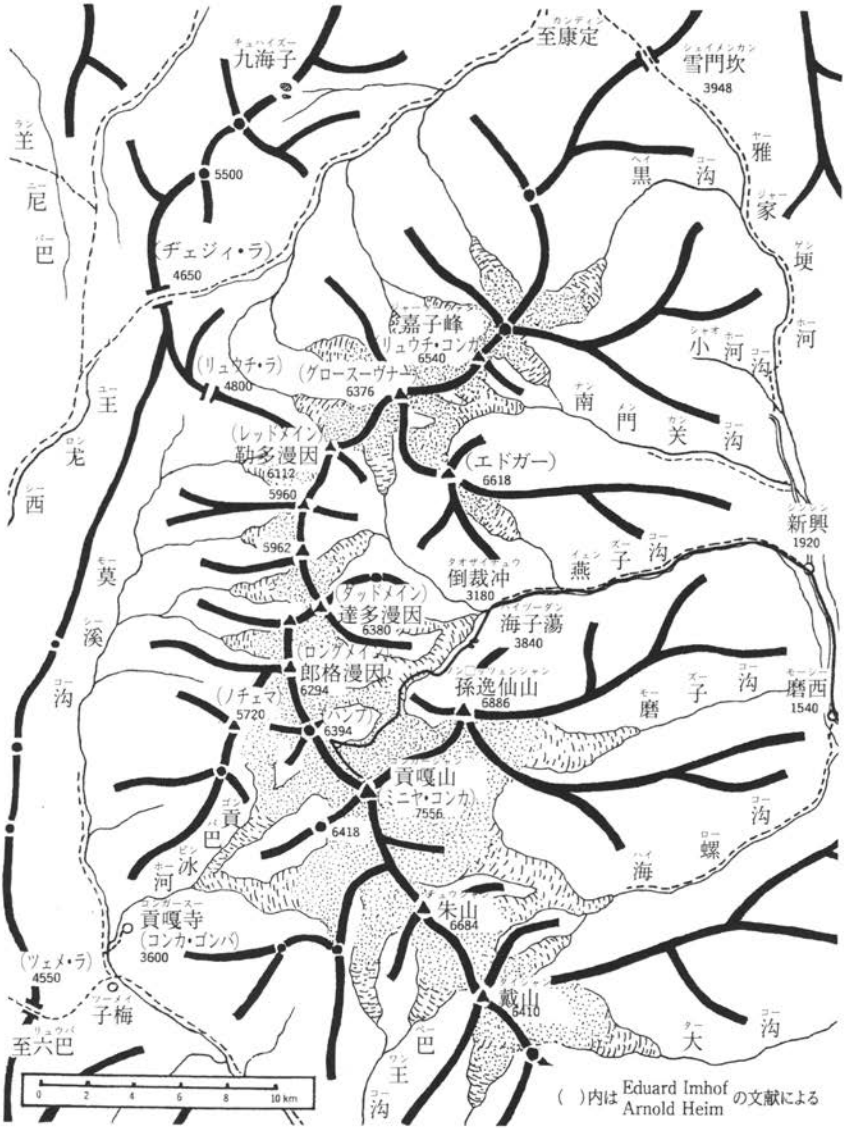
七月、登山申請に合わせて隊長を決める時期が迫った。その時点で参加の意志表示をしている者は、家庭の事情で保留になっている横山を除く六名であった。経験者である二名の先輩と入会五年に満たない三名の後輩。ヒマラヤ未経験の私にとって「非常にやばい状況」が現実のものとなるには、隊員である佐々木ドクターの「鶴の一声」で十分過ぎた。

家族の了解を得、職場の休暇を取りつけてほっとした矢先の隊長要請は、まさに青天の霹靂であり、本人は「雑用係」と割り切ったつもりでも、女房の心労に思い及ぶと、彼女には一生頭が上がらない気持ちだ。

八月、議定書に調印（郵送で処理）し、準備も熱を帯びてくる。十一月には横山の参加が決まり、チームワークはより一層強固になった。

四川省登山協会には、北海道との深い関わりを差し引いても非常に好意的な対応で各種の事務手続きを処理していただき、感謝に堪えない。

三、記録



貢嘎山（ミニヤ・コンカ）周辺概念図

三月二十日、千歳空港に向かう車窓からは快晴の恵庭岳や漁岳が望見された。再びこの地に戻ることを心に誓いつつ、大勢の見送りを受ける。彼らの激励に力がみなぎるのを感じるが、笑顔にはほど遠い女房の顔、三人の子供の顔には戸惑いを禁じ得ない。

上海経由で夜の八時に着いた成都は小雨のそぼ降る天気ではあったが、中国側要員の出迎えの中に、「好リエゾンオフィサー」の噂の高い高敏の姿を見つけたときは、心が晴れる思いがした。他に通訳の李彪、管理官の陳軍、リエゾンの王華山。

二十二日、前日に四川省登山協会とのブリーフィングを終え、早速ミニバスとワゴン車に分乗し、磨西へ向けて出発した。菜の花（油菜）畑の黄色が鮮やかな農村地帯に心が和む。

石棉まで行く予定が、泥巴山峠の土砂崩れのため茅経で足止めを喰らう。開通の見込みが立たず、翌日雪道の二郎山峠を迂回する。夏タイヤでの峠越えに肝を冷やすが、それ以上に運転手の王さん、陳さんは必死だったであろう。夜中になって峠下のドライブインでまずは辛苦了。白酒で乾杯。

二十四日、磨西での準備にとりかかるが、個人装備や買い出し品の荷作りをほぼ半日で終える。翌日は薬王廟の合同慰霊碑（道岳連、ＨＡＪ）で安全祈願をする。

二十六日、大型トラックの荷台に隊荷と共に乗り込んだ隊員を横目に、隊長は助手席に乗せて貰うが、振動の凄さは荷台と大差ない。私の隣に座る公安の腰には、オモチャのようなピストルが、今にも暴発しそうに不気味な光を放っている。

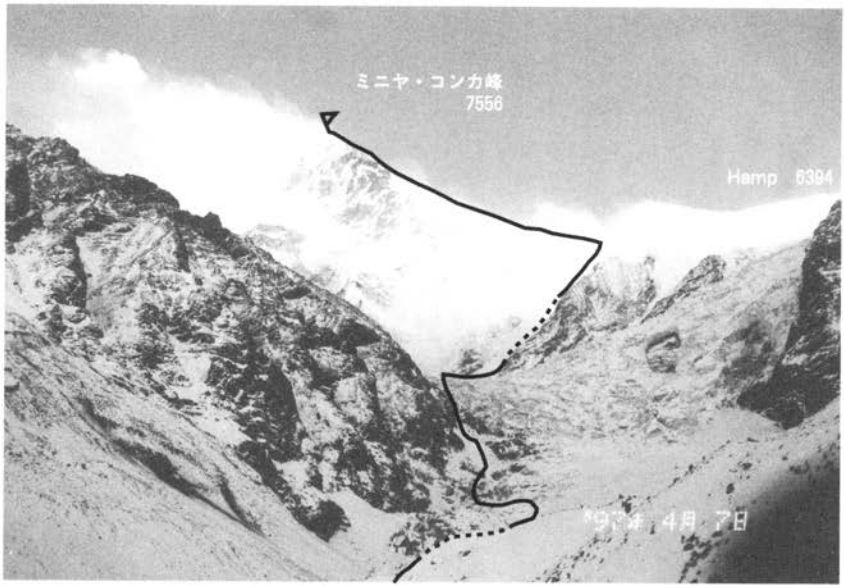
前日の薬王廟より五分ほどさらに進んで車道終点。約七十個の荷物を高敏と公安が荷分けする。ボックスナンバーとポーターの名前を公安がすべてチェックしてくれるので、私たちはなにもすることがない。雇用する側とされる側とのギスギスした雰囲気は微塵もない。何度もこの山域に足を運んでいる高敏と彼らとの信頼関係が見事である。

昼過ぎ、三〇〇〇㍍を過ぎるあたりから雪の世界となる。隊員が雪道のラッセルを請け負い、ズック靴のポーターが後に続く。十七時ごろ、倒栽沖の林道上で初日のキャンプ。

二十七日、雪のためポーターたちは海子蕩ベースへのサイドモレーンの急登が上がれない。彼らの食料も今日で尽きるので一度新興に下ろし、二、三日後に再荷揚げに来ることとなる。その間、隊員による荷揚げを行い、ちょうど良いトレーニングとなる。

三十日、再開されたポーターによる荷揚げが終わり、最後の荷と共にリエゾンたちが揃い、ささやかなベース開き。

四月二日、右岸のサイドモレーンを十分も行くと、吸い込まれそうな碧空に屹立するコンカの本峰が顔を覗かせる。燕子溝氷河の本流に降り立ち、氷河湖のほとり四一五〇㍍にＣ１。スコープで北西稜を仔細に見ることができるが、ここまで入り込



C１より見たミニヤ・コンカ峰

んでしまうと正確な斜面の勾配を把握することはままならず、甘い錯覚に陥ってしまう。ここまでは二名のポーターにも荷揚げを頼む。

C２へのルートは、左に見える孫逸仙側壁下部の「ヤッチャン街道」を行くが、ところどころ岩が露出しており、九〇年当時よりはるかに雪面が後退しているそうだ。右手のアイスフォール帯も、心なしか荒れているように見える。

川越と芳賀とで三日のアルバイトを要し、北壁の全貌を見渡せる雪原に辿り着く。雪原とはいっても、写真で見たイメージとは異なり、クレバスでズタズタという感じがする。北西稜に上がるハンプのルンゼも、セラックの状態が悪い印象を受ける。

十一日、ようやくC２（四八五〇㍍）を設営するが、川越は体の不調を理由に佐々木と共にC１に残り、C２への荷揚げに専念してもらうこととなる。

ヒドンクレバスを探りながら、広い雪原をハンプ北東稜に向かって突き進むと、五〇〇㍍の下部岩壁。これを右から回り込んで岩壁上部を左にトラバースする。

北壁との間の「ハンプのルンゼ」は予想通り荒れており、林立するセラック帯と岩稜との間をジクザグに進む。ラッセルも深い。にもかかわらず、横山と萩原の奮闘により、たった二日半でC３予定地の氷のピナクル上の広場（五七五〇㍍）に達することができた。全行程中最も長く、落石・雪崩など最も危険

の多いルートの荷揚げは、連日フル稼働だ。十八日、C3設営。

この後、強い紫外線の下、深いラッセルのルート工作に長原と吉田が力を発揮し、二十五日には、ゴンパ氷河を挟んで、遙かなるチベットを見渡すハンプのコルにC4を建設。初登頂のアメリカ隊が世話になったゴンパ寺も、かすかに視認できる。真に登高欲をそそる恐竜の背のような南西稜、取り付く術のない擂り鉢のような西壁、ただただ見とれてしまう。

頂上も射程内に入った気がするが、チベットから吹き上げる風は我々の軽々しい気持ちを押さえつけ、稜線の厳しさをまざまざと見せつける。

C4では、収容能力不足（当初は最大三人を想定していたが実際は五人）を補うため雪洞を掘る。C3～C4間は荷上げよりもラッセルに労力を使うので、上と下からのダブルボッカで乗り切る。疲労も不平不満もピークに達しつつあるが、十分な食料と『駆け込み寺』的な隊長の役割発揮で事なきを得た。

北西稜の烈風はしばしば行動を鈍らせはしたが、横山と長原が確実にルートを延ばし、三十日にC5（六八〇〇㍍）を建設。日程にはまだ一週間の余裕があり、食糧にも問題はない。数名に軽い頭痛があるが、気合いをそぐほどではない。唯一頂上との高度差七〇〇㍍が気にかかる。

まずはルート工作に横山と長原を送り出し、五月一日に七二〇〇㍍に達する。その晩、翌二日にはあわよくば頂上を狙おうとするC4の三名とC5の二名に、C1の佐々木と川越より、「強い意志を持って臨み、チャンスを逃がすな！」と檄が飛ぶ。

早朝は強風と低温でスタート時間が遅れること、フィックスの残りが六〇㍍なのでスカット登攀に時間を費やすことなどを考慮すると、過去の事故例とオーバーラップせざるを得ない。初体験の隊長は大いに悩むが、隊としての意思統一が図られたのは二十時近かった。

二日の一時過ぎ、いつもと違う不思議な静寂に目を覚ました。C5の横山と長原は、準備に取りかかる。強烈な寒気に耐え、朝陽が昇らんとする六時ごろ、七三〇〇㍍地点手前のフィックス終点に到達する。そこからは気の遠くなるようなスタカットの連続だ。壁に行く手を遮られては北壁側を回り込み、いくつもの氷壁をダブルアックスで越える。午後からガスることを予想し、標識づけを徹底する。一番若い長原と経験豊富な横山の強いパートナーシップが着実な歩みを刻み、十二時五十分、横山の一言一言噛みしめる声がコンカの時間を止めた！

「エー道内の岳人の多くを失ったコンカ山のこの頂上に、私と長原の二人は、皆様の暖かい御支援によって、ただいま五月二日十二時五十分、頂上に立つことができました。ありがとうございます。中国の皆様ありがとうございました。芳賀隊長聞こえますか！」

四、成功の要因と問題点

隊長を含めた若い順に四名がヒマラヤ未経験とあって、世間の下馬評は極めて低かったに違いないが、そんな弱小隊をまさに神憑り的な成功へと導いてくれた要因を簡単に列挙するとともに今後に向けての問題点を述べる。

①チームワークの良さ

単独山岳会での編成だからこそ、ということは当然であっても、それは経験の有無を抜きにして皆が自分の任務をまっとうしたことにつきる。

②中国側スタッフの協力

雪道の夜中の峠越えといい、深雪でのポーターの荷揚げといい、我々の心配に彼らは誠意あふれる対応をし、本格的な登山活動前のアクシデントを最小限に食い止めてくれた。

③順調な高所順応

高所登山の基本を忠実に守った結果、戦線を離脱する隊員はひとりもいなかった。パルスオキシメーターによる数値管理ときめ細かなドクターへの報告とで障害を未然に防ぐことができた。また個人の我よりも隊の成功を最優先した結果、無理をする者もいなかった。

④恵まれた天候

登山期間中の天候は極めて安定しており、その変化も規則正しいものであった。降雪による雪崩の危険から停滞したのがたったの二日間であったことが、如実にそれを物語っている。ただし、五月四日あたりからは下降線をたどり始めたようで、結果的には最初で最後のワンチャンスだったのかもしれない。

以下は反省点。

⑤テイクアウトの不徹底

焼却可能なゴミは各キャンプで処分したが、下山ルートが落石とセラックの崩壊の危険に曝され、下山時の事故に遭遇してしまう可能性を最小限にするため、荷下げ回数が限られてしまった。

⑥過大な荷揚げ量とその質

未経験者が多いという悲しさか、安全を見込みすぎて食糧・燃料ともに結構な余剰ができた。高度による食欲の減退が皆無であったことは幸いといえなくもないが、少ない食料でも動ける体を作ることも大切である。

⑦フィックスロープは、下部ルートでの使用が多過ぎて、最後は六ミリの補助ロープが頼りであった。使用目的に応じて使い分けすることが、よりスピーディーな行動につながるであろうと思われる。

五、最後に

今回の登山活動中、何度もひやりとする場面があったが、そ

の都度大事に至らずにすんだ。結果、誰もが多かれ少なかれ感じたのは、「亡き岳友に見守られている。コンカ山に試され、ようやく許され、そして生かされている」ということだったのではなかろうか。「幸運」という言葉だけでは片づけられない強い何かが、この山にはあった。

『ミニヤ・コンカからのチベットの眺め』は、この成功に至るまでの長い長い道のりに歩みを記したすべての人々、この登山に有形無形の手を差し伸べていただいたすべての人々の共有の財産となることを願って止まない。

（本稿は「山と溪谷」一九九七年七月号に寄せた投稿文を大幅に加筆修正したものである）

〈記録概要〉

隊の名称　札幌山岳会貢嘎山登山隊一九九七

活動期間　一九九七年三月二十日～五月十三日

目　的　中国四川省横断山脈大雪山山系主峰のミニヤ・コンカ山（七五五六㍍）に北西稜より登頂

隊の構成　隊長＝芳賀正志（39）、隊員＝佐々木孝雄（68）、川越昭夫（59）、横山英雄（55）、長原孝友（29）、吉田理恵子（31）、萩原豊（41）、四川省登山協会リエゾンオフィサー＝高敏（34）、管理官＝陳軍（33）、通訳＝李彪（27）

行動概要　三月二十日成都入り、三月二十六日キャラバン開始、三月三十日BC建設、四月二日C1建設、四月十一日C2建設、四月十八日C3建設、四月二十五日C4建設、四月三十日C5建設、五月二日横山・長原の二名が登頂、五月三日C3までを撤収C2へ、五月四日C1へ、五月五日BCへ、五月六日磨西へ戻る。五月十三日千歳空港到着。

報告書　『一九九七貢嘎山』一九九七・十二札幌山岳会　電話・ファックス〇一二六―二三―五〇八五）

勇あるのみ

——ダウラギリⅠ峰、ガッシャーブルムⅠ峰そしてマナスル

小西浩文

九六年秋、ローツェ・フェース、七五〇〇㍍地点。その日、私は強風の中サウスコルを目指し登っていた。私の一〇㍍ほど上にはフランス人と韓国隊のシェルパ、そして私の唯一のパートナー、ロブサン・ザンブーが登っている。上からの風に下を向きがちに登っていた私は、突然「ピーッ！」というシェルパ独特の指笛の音を聞いた。上を見るとロブサンが猛烈なスピードで空身で五〜六㍍走り、ジェネバスパーへのトラバース開始地点に戻っている。その数百㍍上からは、大きな雪崩が出ている。そしてそれはこちらに向かってくる。

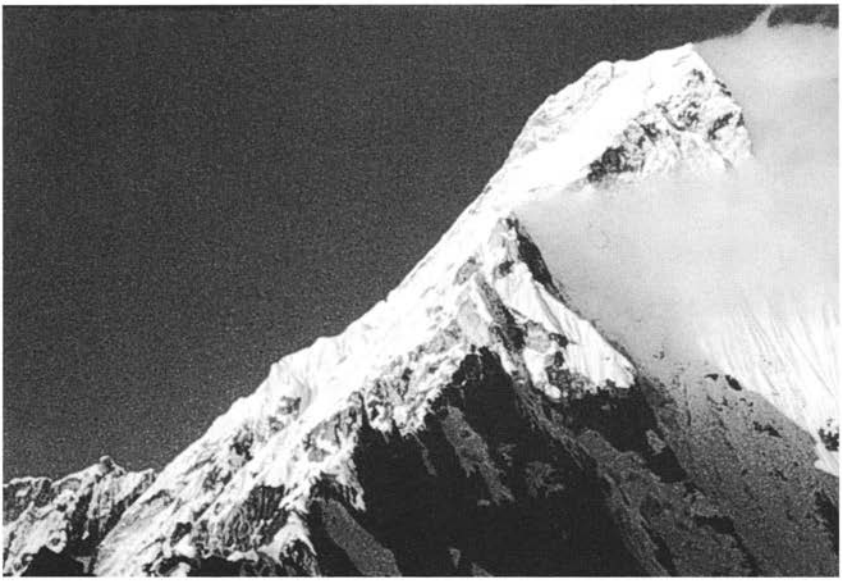
一瞬でそれを悟った私は三㍍ほど上の右側にある氷壁の出っ張りの下にかけ登った。

登りながら、「オマー、オマー」とお経を唱え、氷壁にへばりつく。これがこの世で出す最後の声になるかもしれないと思いながら……。

猛烈な雪崩が私の側を落ちていく。爆風で窒息しそうになりながらも、ただひたすら、かぶり気味の氷壁にしがみついていなければならなかった。雪崩が収まって上を覗いた私は、三人が消えたことを知った。雪崩は私の弟のようなパートナー、「シェルパのカリスマ」といわれたロブサンを連れ去り、私のエベレスト無酸素登攀の計画を打ち砕いた。深い悲しみの中、日々が過ぎ去っていく。自分が、現在、在るこの世と、彼らがいるあの世とは、一体何が違うのだろう。

この世とあの世の境目がはっきりわからなくなる。だが月日は少しずつ私を癒してくれる。自分の生きる目的が甦ってくる。

海外登山の記録



▲アマダブラム山頂――「全員二十歳代でアマダブラムに登頂」
The summit of Ama Dablam.

▼C 4 よりダッドメイン、グロスヴナー、リュウチ・コンカ、エドガーを望む――「ミニヤ・コンカの輝く微笑み」
View of Daddmain, Grosvenor, Riuchi konka, Edgar seen from C 4.

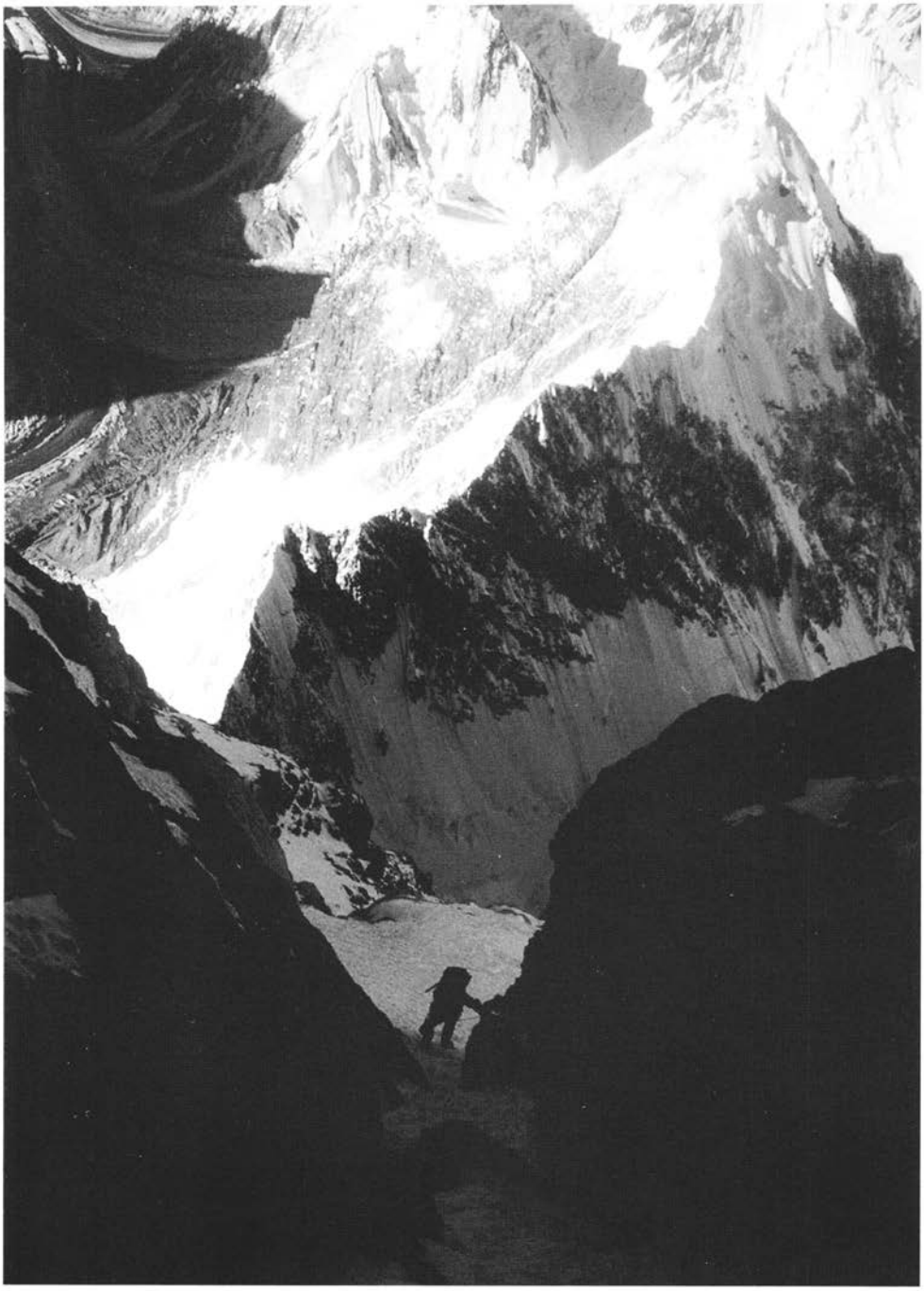




▲BC よりガッシャーブルムⅠ峰を望む――「ガッシャーブルムⅠ峰・Ⅱ峰、ブロードピーク登頂」
Gasherbrum I seen from BC.

▼ナムナニ峰と BC――「ナムナニ峰登頂」
Namunani and BC.





▲C 4〜C 5 のエンゼルピーク——「K 2 西稜から未踏の西壁へ」
Ascent at 7800 m, Angel Peak.



▲C３とマナスル北峰――「マナスル北東初登ルートよりの登頂」
Manaslu North and C 3.

▼ダウラギリⅠ峰の北壁――「山王山からの生還」
Northern side of Dhaulagiri I



生きるには、登らなければならない。自分のために、ロブサンのために。ひたすら登り続けなければ。

自分のすべてを信じて。

ダウラギリI峰

九七年春にダウラギリI峰（八一六七㍍）に行くことに決める。夏はガッシャーブルムI峰（八〇六八㍍）へ。秋はマナスル（八一六三㍍）へ。ダウラギリとガッシャーブルムのパートナーには、北村俊之を。マナスルのパートナーには、山本正嘉を選ぶ。出発二ヵ月前ぐらいから、連日の睡眠不足の中、準備を進める。

三月二十八日、ポカラからダウラギリベースキャンプまでヘリで一気に入る。北村はキッチンボーイと共に順応トレーニングのため、後からフレンチパスを越えてくることになる。春浅いベースキャンプ、一面、銀世界の中、私たちのささやかなテントを張る。翌日から二週間、降雪、吹雪となる。北村が苦労してフレンチパスを乗り越えてきた四月十日過ぎから本格的な登山活動を始める。

C1（五八〇〇㍍）、C2（六六〇〇㍍）と進め、通常のC3である七三五〇㍍地点に四月二十七日に私とシェルパが到達する。だが北村の調子が今ひとつで七〇〇〇㍍以上になかなか到達できず、アタックに入れない。非常に焦る。そのうち天候が悪くなりだし、結局アタックは五月三十一日となる。午前四時四十五分、七六〇〇㍍地点に設けたC3を、私、北村、アン・ギャルツェンの三人でスタートする。雪が深く難渋する。急な雪面をトラバース気味に登り頂上雪田に入る。頂上稜線に出る雪壁はラッセルが深く、抜けたのが午後六時。過去の隊の記録ではここから頂上まで一時間から一時間半かかっているが、たのめらわずに頂上に向かう。

午後七時過ぎに登頂する。日没後の頂上からの景色は美しかったが、喜びは一瞬で、下りが気にかかりすぐ下降を開始する。

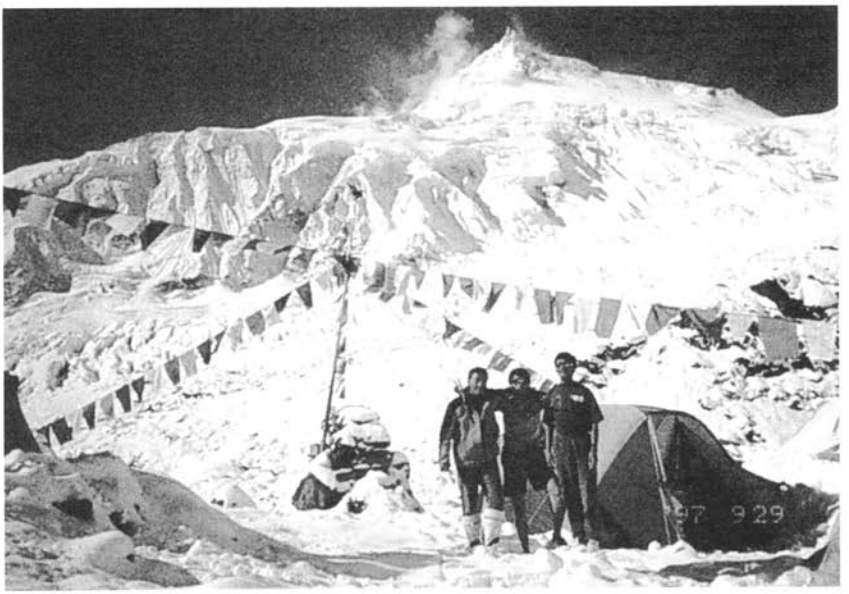
最終キャンプに戻ったのは夜中の午前二時半であった。翌日、BC近くのアイスフォール取り付きまでコックが迎えにきて抱きしめてくれる。BCは霧がかかっている。霧の中を陽が射し、幻想的な雰囲気の中、タルチョー（ラマ教の五色の祈祷旗）の下にブルーシートを敷いて皆で座る。どの顔もニコニコしている。

まさに至福のとき。ありがとう神様。

ガッシャーブルムI峰

日本で束の間の休息をとり、パキスタンに向かう。早くガッシャーブルムに行かなければ……。

九六年十二月、常陸民生氏を隊長とするJFMA隊にコンタクトをとり、独立メンバーとして隊に加えてもらえないかと頼



BC から見たマナスル峰

んだ私と北村俊之を、彼らは快く迎え入れてくれた。

六月二十三日、イスラマバードに入る。

八〇〇〇メートル峰をめざすほかの登山隊は、みな、すでに出発しており、非常に焦りを感じる。バルトロのベストシーズンは六月から七月なのだ。

準備を終え、スカルドに出発しようと、ナジール・サビール・エクスペディションの事務所を出ようとした私に、マネージャーのスルタンが言う。

「小西さん、悪いニュースだ」

「何？」

「レディースフィンガーで日本人が遭難したようだ」

——松岡清司だ。そう悟った私はすぐに彼の使っているエージェントに電話して事態を確認した。私たちはその場でレディースフィンガーの麓の町、フンザを経由してスカルドゥに向かうことにした。だがフンザでは悪天候続きで、搬出作業ができないようであった。

早くガッシャーブルムに行かなければならないのに、後ろ髪を引かれている私を救ったのは、国際電話で話した妻のひと言だった。

「あなた、なにをしているのよ。あなたの仕事はどこへいったのよ。とっくにキャラバンをはじめていると思ったのに」

そう、万難を排してガッシャーブルムに行かなければ。自分

のために、自分を応援してくれる人たちのために。

私は、知り合いのチベット仏教の高僧に松岡の供養をお願いして、すぐスカルドゥに向かった。

最近、私よりずっと年下の友人たちが山で死ぬことに心が痛む。ロブサンは二十六歳。松岡は二十五歳。それが運命なのであろうか……。

二十年以上山に登ってきた多くの仲間、先輩を失って私の心は、かなり痛んでいるのであろうか。泣くな。泣くとストロングハートがなくなるぞ。自分のすべてを信じるしかない。

一日で準備を終え、七月三日、アスコーレをスタートする。ガッシャーブルムBCまでは通常十日間かかるが、五日間で行ってもらうことにする。毎日、十時間以上歩くため、ポーターから不平が続出する。しかし我らが軍曹上がりのポーター頭は、一切ひるまず毎朝出発時に怒鳴る。「グズグズ言ってるとケツの穴に一番、からいトウガラシをブチ込むぞ」

七月七日にBCに到着し、九日早朝、BCをスタートする。キャラバンの疲労で体が重く、あちこちが痛む。

スピードも出ないが、体の中の〝内なる力〟を確信して、BCのコックに伝える。

「このまま一回も下りずに頂上をめざすぞ」

C1では、数ヵ月ぶりに常陸さんたちと再会する。彼らも順調に進んでいるようだ。

夕食をとった後、韓国隊からレスキューの要請が入り現場に急行する。クレバスに転落した女性の搬送をして、再びC1に戻ったのは、夜中の午前1時過ぎであった。

翌日は休養とする。天候は比較的安定している。過去の私のバルトロの経験では、七月中旬から悪天候の方が多い周期となるが、今年のバルトロは、終始ハッピーウェザーのようだった。七二〇〇㍍地点にC3を設営して、七月十六日午前三時出発する。

初めはクラストしていたが、頂上斜面に入るころから雪が安定しない登りとなる。

かなりの強風だが、登るのみだ。十六日午後一時十五分、私と北村、ハイポーターのロゼは山頂に立った。

何かにつき動かされるように進み、アスコーレを出てから十四日目の登頂であった。

兵は、巧遅を嫌い拙速を尊ぶという。その言葉が私の胸の中にあった。

マナスル

眼下に草原が果てしなく広がる。たくさんの人が集まっているのがよくわかる。爆音とともにロシア製ヘリコプターは、サマのお花畑に降り立った。小西政継さんの奥さんたちと束の間の再会を喜び、ヘリは彼らを乗せて飛び立って行った。あとに

は山本正嘉と私、シェルパたちのみが残る。

翌日、四九〇〇㍍のBCに一気に上がる。残照のマナスルが美しい。

九月六日から登山を開始する。

二十一日には、七六〇〇㍍のC3に入ったが、二日間待機したにもかかわらず強風のためBCに一旦戻る。

十月六日、再びC3に入る。翌日は霧のため出発できず、八日午前五時半スタートする。風と寒気が厳しい。

「小西ダイ（兄さん）、サクセスよりライフの方が重要だよ！」

寒気が厳しく、それ以上の登高を迷った私にシェルパが叫ぶ。同じセリフを春のダウラギリでも登頂を諦めたヨーロッパのクライマーから聞いたな。でも、それは違うぞ。絶対、違うぞ。八〇〇〇㍍峰を登りに来て、そのセリフはないぞ。

だが、最終キャンプで計四泊したものの、マナスルの神様から私に登頂のパーミッションは出なかった。

「なんで突っ込まなかったんだろう」

「無酸素で登った七人のうち、二人が死に、三人が重度の凍傷になっているんだぞ。突っ込まなくて正解だよ」

「そうかな？　ほんとうにそうかな？　残り二人は無事だったんだし、可能性はあったんじゃないのか？」

十月九日、山本正嘉が時間切れで去ったBCのテントの中で、ひとり自問自答を続ける。なんとしてももう一回、アタックをかけたい。私の強烈な願いを、その後四日間降り続いた大雪が打ち砕いた。

BCを去る前日の夜、雪で濡れた自分のシュラフに入る気がせず、山本が置いていってくれた彼のシュラフに入ろうとした。ヘッドランプに照らされたシュラフの内側には、彼の奥さんと二人の愛娘たちの寄せ書きが書いてあった。

「お父さん、離れていても心はいつも一緒です」

こんなのを毎晩読んでいては、ストロングハートが出てくるわけないじゃないか。

苦笑いしながら、私はシュラフに潜りこんだ。

帰りの長い長いキャラバン。シェルパたちは家に帰れるので、やはりうれしそうだ。

私はときどき、ひとりで歩く。三月からはじまったこの八〇〇〇㍍から八〇〇〇㍍への旅も、終わってしまえばすべては夢にしか過ぎないと思いつつ……。

「小西、お前、ウィスキーなんか飲むな。これからもずっと登り続けるんだろう。そんなもん飲むな」

カトマンズに戻り、レストランでウィスキーの水割りを飲もうとした私を、芳野満彦さんが止めた。

そう、その通り。俺は酒に酔う必要はない。お前の生きる道は山に登ることだろう。胸の中でそうつぶやきグラスを置いた。

デオダ

ネパールでは、神のことを「デオダ」と呼ぶ。シェルパたちは九死に一生を得る経験を何回も重ねて生き抜いてきているストロング・クライマーのことを、「彼のデオダが強い」という。「守護神が強い」と言えばよいか。

八〇〇〇㍍峰十四座の完登者は、世界で五人。

そのうち、完全な無酸素での完登者は、R・メスナー、ロレタンの二人だけ。体力、技術、精神力が一流なのは当たり前。その上に、彼の「デオダ」が超一流の強さを持ち、死んでも消えない執着心、闘争心を持つヒマラヤン・クライマーだけが、無酸素で十四座に到達する。

今回、気づいたことがある。八〇〇〇㍍峰を無酸素で十四座登る人間というのは、やはり神に選ばれた者ではないかということだ。ほとんどすべてのクライマーが、それを狙っても到達できない。ふつうのヒマラヤン・クライマーは、八〇〇〇㍍峰を数座登ったら打ち止めになる。理由はさまざまでも、実際は燃え尽きるといっていい。

昔、剣豪と呼ばれた武芸者たちがいた。

塚原卜伝、小野次郎右衛門、宮本武蔵たち。彼らは、真剣勝負を何十回と繰り返し、何百人も斬り倒し、生き抜いて初めて剣豪と呼ばれている。

武士は潔く闘って、死ぬことを最上の美徳としているが、武芸者は勝って生き抜くことをもってよしとする。

十四座を登ろうとする人たちも、それに似ているといえようか。

今年、ダウラギリ、ガッシャーブルムで一緒だった韓国の朴英碩はこう言った。

「皆、わかっていないんだ。無酸素で十四座登って生きて還ってくるということは、とてつもなく困難で、神に選ばれた者でなければ、できないということを……」その朴は、一年で八〇〇〇㍍峰を五座登り、マナスルへ向かう。

実際に八〇〇〇㍍峰を登るということは、たいへんなリスクを伴う。そして無酸素、少人数等と、グレードを上げ、かつ、毎年連続的に行くということは、やっている本人たちでも気づかないほどのリスクがあるかもしれない。しかし、やる奴はやる。たとえ何があったとしても……。

バスクのホニトウは、マナスルで十一座目を狙った。前年秋、雪崩で肩を骨折し、パートナー一人を失いながらも、今年は春、夏、秋と私と一緒だった。並のクライマーなら精神的、肉体的問題でやめてしまうようなシリアスな事故の後であったが、彼もまた、燃え尽きていない。

私の強いデオダを信じ、これからも登り続けていく。

ナムナニ峰登頂

――日本山岳会福岡支部納木那尼峰登山隊

太田五雄

登山隊の編成と計画

中華人民共和国・チベット自治区、いわゆる西チベットの最高峰である納木那尼峰（ナムナニ峰＝七六九四㍍）を登ろうと計画したのは一九九六年のことであった。以来ネパールの旅行会社を介してチベット登山協会との交渉を重ね、二年の歳月を経て許可を取得するに至った。

当計画は当初気心の知れた個人的山行と考えていたが、参加メンバー全員が日本山岳会福岡支部に所属し、福岡支部ではちょうど発足四十周年に当たることから、記念事業として取り上げられることになり、「日本山岳会福岡支部納木那尼峰登山隊」として発足した。隊員は以下の編成で計画は進められた。

隊長・記録　太田五雄　五十七歳
渉外・装備　浦　一美　五十一歳
医　療　中山　健　六十六歳
食　料　徳永哲哉　四十二歳

平均年齢五十四歳。ヒマラヤや中央アジアに夢を抱いた中高年登山隊である。しかし、全員が長年海外登山や国内の厳しい登山を現役として実行しているメンバーであり、技術的にはいささかの不安もなかった。

目標の山の選択として、探検的辺境の地にあること、その地域の衛星峰ではなく最高峰であること、中高年でも登頂する可能性があることを条件としてナムナニ峰を選んだ。

ナムナニ峰について

ナムナニ峰はヒマラヤ山脈の一角、チベット自治区阿里地区に

属し、インド、ネパール、中国（チベット）の三国国境の北東五〇キロにあり、カシュガルから一四〇〇キロ、チベットの首都ラサから一三〇〇キロ離れた辺境の地にある。

インド、ネパールのサンスクリット語圏ではグルラマンダータと呼ばれ、チベット語圏ではナムナニ峰と呼ばれている。ナムナニ峰の北方五〇キロには聖山カン・リンポチェ峰（六六五四㍍）があり、両峰の間には聖母の湖マバム・ユムツォ、鬼の湖ランガク・ツォがある。いわゆるこの一帯はチベット仏教、ネパール仏教、ヒンドゥー経等の聖地であり、今なお多くの巡礼者が訪れている地域である。

この辺境の地には日本人として一九〇〇年に河口慧海師、一九二七年には長谷川伝次郎氏が巡礼を行っている。

一方ナムナニ峰を目指した登山隊としては一九〇五年ロングスタッフ隊、一九三六年ヘルベルト・ティッヒー隊があり、西の山稜から登頂を狙ったが、いずれも七〇〇〇㍍強に達したに過ぎなかった。

一九七八年日中友好条約が締結され、一九八五年京都大学、同志社大学を中心とする日中友好登山隊が編成され、北西のザロンマロバ氷河から中国隊十三名、日本隊四名により初登頂がなされた。

その後一九九〇年にスイス隊が登頂し、我々の隊は同じくザロンマロバ氷河からではあったが、新しいルートからの第三登を果たすことができた。

チベット南路を経てベースハウスへ

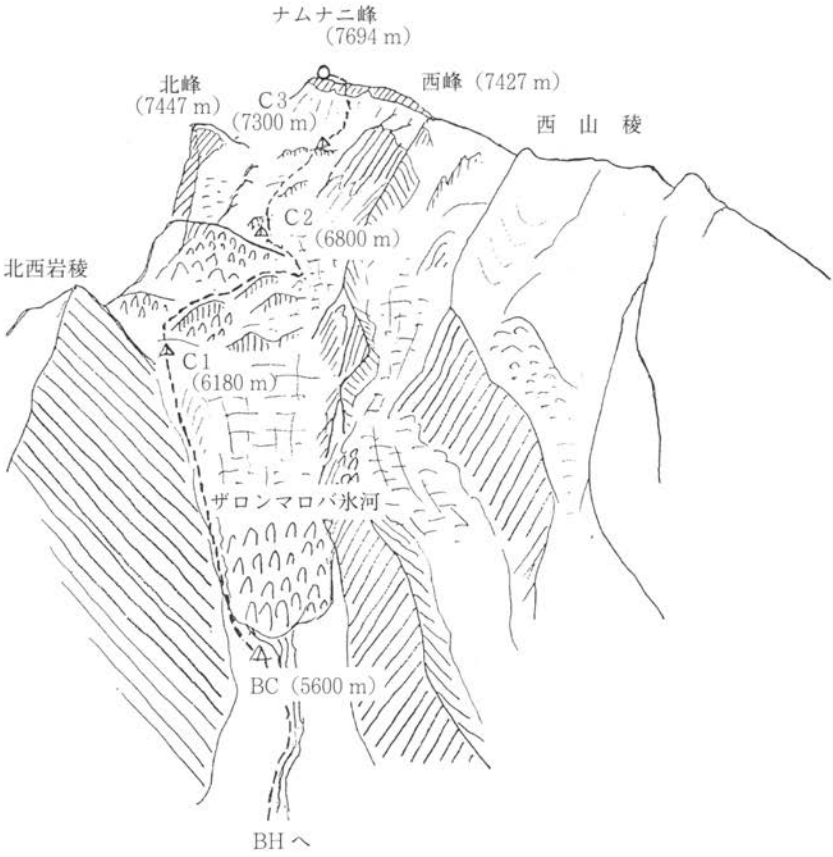
隊員四名は五月六日関西空港を発ちネパールのカトマンズに入る。小登山隊であることから、装備はレンタル品、食料は高所食を除いてすべてカトマンズで調達する。シェルパはサーダーとしてパサン・ツェリン、シェルパはアン・テンバ、デンドゥシェルパの計三名、コックはニマ・タシ、キッチンボーイはアン・サンを雇用する。

五月九日準備を整えカトマンズを出発、中尼友好道路を経てコダリ、ザンムーで通関を終えチベットに入った。リエゾンオフィサーのドルジェ、モモ、三人のドライバーの出迎えを受けいよいよチベットの旅が始まった。

十日、ラズェ、サガ、トンバ、マユム・ラ、バルガを経由する南路にルートをとり、五月十六日にスーカンのベースハウス（BH）に入る予定で進められた。しかし、途中高所順応、トラックの故障やトンバの砂漠、ナフコー河の渡河、湿原地でのスタック等で六日も遅れ、標高四七〇〇㍍にBHを設営したのは二十二日であった。

当初登山活動を一か月と予定していたが、この遅れで登山活動の短縮を余儀なくされ、ラッシュアタクティクスに切り換えざるをえなくなった。

BHでは高所で使用する装備、食料の梱包、荷上げのためのヤクの手配等行う。



ナムナニ峰登頂ルート

ルート工作と前進キャンプの設営

五月二十五日、リエゾンオフィサー、ドライバーを残しヤク十七頭、ヤク工六名、シェルパでベースキャンプ（BC）への荷揚げを行う。標高五〇〇〇㍍の北西支尾根を越え、不安定な瓦礫と雪渓が残る峡谷を登ってザロンマロバ氷河の末端標高五六〇〇㍍にBCを設営した。BCでは休養を兼ねて登山の準備、ラマ経にのっとって、登頂と安全祈願を行う。

五月二十八日、C1へのルート選定と荷上げを行う。ルートはザロンマロバ氷河のセラックやクレバスを避け、日中友好隊と同じ北西岩稜との間の崩壊著しい瓦礫との境界に沿って登り、標高六一八〇㍍の氷原にC1を設営した。

翌日、C2へのルートについてシェルパと相談し、我々は日中友好隊のたどった北西岩稜沿いのクーロワールと異なり、氷河中段の中央部を横断して右の氷河に出ることにした。

C1のすぐ上には八〇㍍の氷壁があり、

上部に小さなクレバスが無数にあるため一〇〇㍍のロープをフィックスし、氷河の中央部を遮断する薙刀の形をしたアイスフォールの上に出た。

上部は大きなセラック帯が頭上を圧し、その間の右の氷河に通じる傾斜角三〇～四〇度の雪原をたどり、セラック帯と右の氷河の間にあるコルに出る。

このセラックのコルからはランガク・ツォやカン・リンポチェ峰、チベットの高原が望まれた。右の氷河は大小様々なクレバスが無数にあり、ルートとしては取れない。クレバスのある青氷の垂直に近い一五㍍の氷壁をピッケルとアイゼンのツァッケをたよりに越える。

上部は右の氷河と左のセラック帯の間に二〇～三〇度の雪原が続いており、小さなクレバスを避けて二〇〇㍍のフィックスを行う。技術的には何ら難しいところはないのだが、ヒドンクレバスを危惧してのことである。

雪原を登り切り、右へカーブした氷河の斜面を横断して、標高六八〇〇㍍の安定したセラックの中にC2を設営する。

五月三十一日、C2の上はさらに同様の雪原が続いた。このところ雪が降らなかったためか雪面は氷化し、シュカブラがそのまま凍った状態にあった。午後になるときまって西からの風が強くなり、ブリザードが足元を洗う。傾斜は次第に増し、高度の影響もあって登高は遅々としたものになる。

小さなセラックを越え、さらに雪原を登って標高七三〇〇㍍にC3を設けた。C3から初めて頂上に続く西山稜の帯状岩壁を仰ぎ見た。頂上まで高度差四〇〇㍍、天候さえよければ山頂は手中に納めたも同然である。前進キャンプの設営、装備、食料の荷上げも終えてアタック態勢はすべて整った。

山頂に立つ

BCへ一旦下り、二日間の休養の後いよいよ山頂を目指す。第一次登頂を太田、パサン、デンドゥの三人とし、第二次登頂を徳永、テンバの二人と決定する。

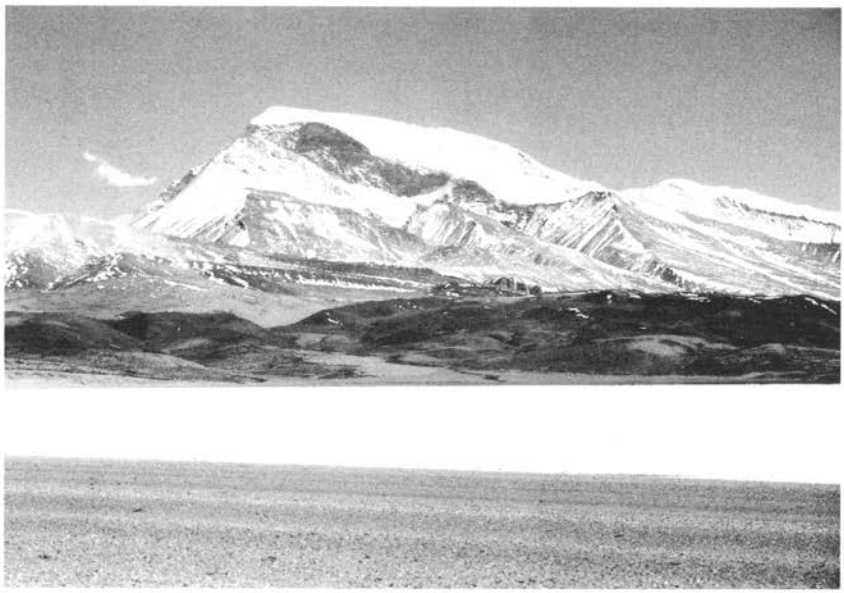
六月三日、一次隊の太田がC1に入る。パサンとデンドゥはもう一日休養し、一気にC2まで登って太田と合流することになった。

六月四日、一次隊の三人がC2に入る。休養の間に風雪があったらしく、テントは半ば埋まっていた。周囲の除雪を行い、張り綱の補強をする。

この日二次隊の徳永とサポートの中山がC1に入る。浦はBCで待機、状況の把握をすることになった。

六月五日、一次隊の三名がC3に入り、二次隊の徳永とテンバがC2に入る予定であった。しかし、徳永の体調が優れず、トランシーバーを通して登頂を断念する旨の連絡が入った。

当初の計画では全員登頂を目指していたが、太田を除いて高所の影響と体力の消耗のため、徳永がC2に一度登っただけであった。結局登頂は太田と二人のシェルパに委ねられた。



ランガク・ツオから見たナムナニ峰

この日も天候はよかったが、午後の風は相変わらずおさまらず、C3のテントは風に揺れた。この地域の天候を想定し、明日は午前中に登らねばならないと考え、できる限り早く出発することにした。

六月六日、五時にモーニングティーで起こされる。昨夜は三度辛いトイレに立ったが、睡眠は十分とれていた。雑炊を流し込みテントを出た。凍てつく寒気が頬を刺し、ピッケルを握る手も凍えた。

七時三十分アンザイレンをしC3を出発する。三〇～四〇度の傾斜を成す雪の斜面を登る。風のため雪面はシュカブラの状態にあり、風紋が屋根の瓦のように波うち氷化している。高度の影響と次第に増す傾斜に一歩一歩が重くなる。

十時過ぎに高度差一〇〇㍍の西山稜帯状岩壁の下に着く。傾斜角六〇度、時々吹く強い風が岩壁を洗いブリザードの状態になる。岩は脆く逆層だが、さして難しくはない。要所には昨夜作ったペグでロープを固定し、相互確保しながらスタカットで高度を上げた。

下りに備えて一〇〇㍍のロープをフィックスし稜線に出る。山稜は一㍍の幅で煉瓦が堆積し、風で岩が露出している。南面は一〇〇〇㍍、北面は二〇〇〇㍍の岩壁となって左右に落ちている。山頂とおぼしきピークに立つともうひとつ高いピークが吊り尾根の先に現れた。

十三時十五分、真の山頂に立つ。南面は見渡す限りヒマラヤの

山々が帯状に連なり、目を返せばガンディセの山なみが黄色に染まり、その中にカン・リンポチェ峰が一際高く眺められた。眼下には聖なる湖がトルコ珠のように青く輝き、チベット高原は黄砂に煙っていた。

凍える手も厭わず、ピッケルやアイスバイルに日中の国旗、日本山岳会の会旗を結わえ、記念撮影とビデオを回して登頂の証しとする。シェルパは一〇㍍のルンダルを張り、ラマ経を唱えている。BCの浦に登頂の状況をトランシーバーで報告し、四十五分滞在した後、強い風に追われるように山頂を後にした。

下山ではC3を撤収し、C2は二次隊のテンバによって撤収されていた。

C1で徳永、中山の感動の出迎えを受け、二人のサポートによって嫌な瓦礫を下りBCに戻った。浦、コック、キッチンボーイの手厚い出迎えを受ける。

この日は七三〇〇㍍から無酸素で頂上に立ち、標高差二〇〇〇㍍を一気に下った。

カン・リンポチェ峰の巡礼

六月八日、BCを撤収し、BHに着くと、ドルジェが明日タルチェンで年に一度の満月祭があるので今日中に下りたいと言う。ゆっくりする間もなく、撤収した装備をそのまま車に積み込みBHも撤収してタルチェンへ向かった。

この日は特に風が強く、車の砂塵が空を黄色に染めた。三時間半かかって二十一時にカン・リンポチェ峰巡礼の起点ともいうべきタルチェンに着いた。

タルチェンは小さな集落であるが、お祭りを前にして、数百張りのテント村ができていた。遠くはインド、ネパールからの巡礼者やラマ僧、チベット人等で賑わっていた。

六月十日、全員でカン・リンポチェ峰の巡礼に向かった。我々もラマ経と同じ右回りで巡る。カン・リンポチェ峰の西を流れるラ・チューに出るとセルシュンという広場があり、数千人の群衆で埋まっていた。中央にはタルボチェという二〇㍍ほどの柱が立てられるところであった。ルンダルが四方に張られ、ラマ僧による祈祷、笛、太鼓、鐘の音が雑踏の中に響いていた。

しばらくこの祭に参加した後巡礼に向かう。ラ・チューに沿って岩羊やヒマラヤマーモット、クチグロナキウサギ等の動物や高山植物を観察しながら北面に回る。天候は最悪で、猛吹雪の巡礼になる。標高五六〇〇㍍のドルマ・ラに着いたときには前から吹きつける吹雪に難儀した。驚くべきことにこうした悪天候をついて多くのチベット人が巡礼していたことであった。

カン・リンポチェ峰の巡礼は全行程五十六キロ、五体投地で回れば二十日以上、歩けば元気な人で一日、通常は二〜三日を要する。我々は二日で回りタルチェンに戻る。

チベット北路を経てラサ、カトマンズに帰る

六月十二日、悪天候のためカン・リンポチェ峰を間近に見るこ



ナムナニ峰山頂

となくタルチェンを後にし、高原の真っ直中を西進。ジェルコ・ラを越え、インダス河の左岸に沿って砂塵の中を疾走する。河を渡り峠を越えてシーツァンホに出る。この町は一九八五年以降に新たに建設された近代的な要塞の町である。

シーツァンホで二日滞在しチベット北路に出た。センゲザンポの河に沿い、ゲガイからヤンフーに出る。大地は乾燥し、往来する車の砂塵が容赦なく降りかかる。ホアンヤンやチベットノロバ、チベットオオカミ、ハゲワシ等の野性動物が車窓に展開し、山間の草原には高山植物がお花畑を呈する。

道は軍事用道路も兼ねていることから、南路よりははるかによい。左右に展開する大きな湖はそのほとんどが塩湖で、周囲では小さな龍巻が頻繁に発生していた。

六月十六日、ドンツォ、ツォチンを経て再び南路に出る。本来北路をたどってアムドからナチュー経由でラサにでる予定であったが、政府、軍部の許可が下りてなく、やむなく南路をたどらざるを得なかった。

六月十七日、ラズェでカトマンズへ帰るシェルパたちと別れ、隊員はシガツェを経由して翌日ラサに入った。チベット登山協会へ表敬訪問と、費用を支払っているにもかかわらずアムドツァーができなったことを質すことが目的であった。結局はカトマンズの旅行会社と登山協会の間の問題であった。ラサで二日間滞在し、登山協会の接待を受け、ポダラ宮、チョカン寺を見学、翌日はシガツェのタシルンポ寺を見学して帰路についた。

中尼道路のヒマラヤ越えはちょうどモンスーンにかかり、岩壁をくり抜いた道は降り注ぐ雨で滝と化し、恐怖の悪路をザンムーに出た。

六月二十二日リエゾンオフィサー、ドライバーと別れ、ナワンヨンデンシェルパの出迎えを受けてカトマンズへ帰った。カトマンズでは後始末と帰国準備で五日間滞在し、二十八日、およそ二か月、三〇〇〇キロに及ぶ感動の旅を終え帰国についた。

〈記録概要〉

隊の名称　日本山岳会福岡支部納木那尼峰登山隊

活動期間　一九九八年五月六日～六月二十八日

目　的　納木那尼峰登頂とチベット高原の踏査

隊の構成　隊長＝太田五雄（57）、隊員＝浦一美（51）、中山健（66）、徳永哲哉（42）
サーダー＝パサン・ツエリン、シェルパ＝アン・テンバ、テンドウ・シェルパ、コック＝ニマ・タシ、キッチンボーイ＝アン・サン
リエゾンオフィサー＝ドルジェ、モモ、ドライバー＝チョンダゼ、ターチン、ペンバ

行動概要　五月六日カトマンズ、五月九日ザンムー入り、五月十日～十六日ニャラム、ニャムタンゲで高所順応、五月十七日サガ、五月二十一日スーカンBH（四七〇〇㍍）設営、五月二十五日BC（五六〇〇㍍）建設、五月二十八日C1（六一八〇㍍）建設、五月二十九日C2（六八〇〇㍍）建設、五月三十一日C3（七三〇〇㍍）建設、六月一～二日休養、六月五日登頂隊C3入り、六月六日隊長一名、シェルパ二名登頂後BCへ下降、六月八日BC、BH撤収タルチェンへ、六月十～十一日カン・リンポチェ峰巡礼、六月十三日シーツァンホ、六月十五日ツォチン、六月十七日シガツェ、途中ラズェでシェルパはカトマンズへ、六月十八日ラサ、六月二十一日ザンムー、六月二十二日カトマンズ、六月二十八日帰国

報告　報告書「ナムナニ峰登頂と三〇〇〇キロ辺境の旅」、「岳人」六一五号（一九九八年九月号）

ガッシャーブルムⅠ峰、Ⅱ峰、ブロード・ピーク登頂

――群馬県カラコルム登山隊一九九七

名塚秀二

冬期サガルマータ南西壁を終え、次のヒマラヤ登山の立案にあたって、群馬県山岳連盟は、いままで行ってきた流れから「八〇〇〇㍍峰。バリエーションルート。冬期」を条件に山を決めることにしていた。

八四年のアンナプルナⅠ峰南壁を皮切りとした過去四回の冬期遠征を踏まえ、冬期登山を行うなら、カレンダーウインターである十二月一日からの登山活動ではなく、厳冬期に入る一月一日から登山活動を開始して頂上へ立つことを念頭に、マナスル西壁、マカルー北西壁、ダウラギリⅠ峰南壁を候補として資料を集めだした。しかし、マナスルは八七年二月初旬に北西壁から登られており、マカルーとダウラギリⅠ峰は、ネパール政府の突然の人数制限で上限七人のメンバーしか参加することができなくなってしまっていた。

七二年のダウラギリⅣ峰の遠征からの方針として、常に何人かのヒマラヤ初見参者をメンバーに入れ、次の世代を見据えた登山隊を組織することを行ってきた。しかし、九三～九四年のサガルマータは、一度失敗しているだけに失敗は許されず、経験もあり、ルート工作ができるメンバーをそろえざるを得なくなって、新人を入れる余地がなくなってしまっていた。今残っている当時のメンバーを主力に新人を加えたとしても、厳冬期の八〇〇〇㍍峰に今の力ではとても立ち向かうことができなかった。

そんなときに、スポーツニッポン新聞東京本社から、創立五〇周年事業の一環として「群馬岳連でヒマラヤ登山をやってみ

ませんか」と星野岳連会長へ話しがきた。願ってもない話しで、さっそく山の選定と計画を推し進めた。

私としては冬期にこだわりたかったので、海外登山研究会では冬のK2をやろうということにし、星野岳連会長へ確認を取りに行った。だが、冬のK2ともなれば、ある程度の事故や失敗も覚悟しなければいけない。まして今回のスポニチからの申し入れは、五〇周年の記念事業ということもあって、事故もなく、新聞に発表できるような登山であってほしいと言われた。

そうであれば、今回の遠征登山は冬にこだわることなく、若手ヒマラヤニストの養成を目的に、全員が八〇〇〇㍍の頂きに立ち、ヒマラヤの楽しさを体験し得る山を登ろうと決めた。そしてひとつの山だけでは、高度順応への対応、体調不良、天候などの影響で新人が頂を踏めないこともあるので、ガッシャーブルムⅠ峰、ガッシャーブルムⅡ峰、ブロード・ピークの三峰を選び、ひとつの登山隊で三つの山を登る計画を立て、隊を三つに分けた。

A隊＝ガッシャーブルムⅠ峰
　ガッシャーブルムⅡ峰
B隊＝ガッシャーブルムⅠ峰
　ブロード・ピーク
C隊＝ガッシャーブルムⅡ峰
　ブロード・ピーク

とし、もしいずれかの隊が二つのうちのひとつを逃したとしても、他の一隊がフォローする体制をとった。

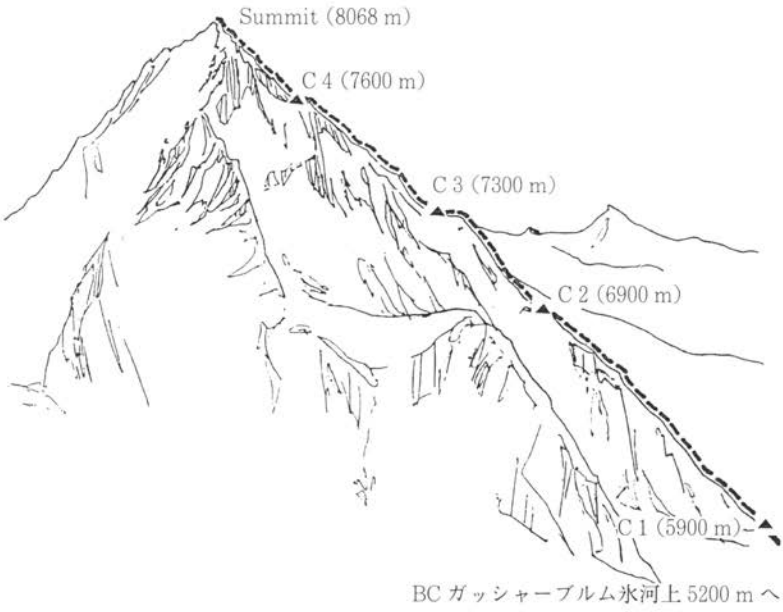
隊員構成は、星野光総隊長他二十名。ヒマラヤ初めての者は七名で、隊を三つに分けると、ひとつの隊が約七名。その中には初見参者が二〜三名含まれているので、決して楽観できる登山隊ではない。

それを補うために、A隊には、今日の群馬のヒマラヤ登山を築き上げ、国内でも有数の戦略家と言われる宮崎勉、B隊には、その宮崎から戦略すべてを引き継いだ佐藤光由を隊長とし、補佐として信州大学で技術を磨き、群馬の山女と結婚した後、群馬に移り住んだ吉田秀樹を入れ、C隊は今後の群馬のヒマラヤ登山を引っ張っていく後藤文明を隊長に、九一〜九二年のサガルマータ南西壁のときから参加し、いまでは、日本登山界の至宝とまでいわれる、日本ヒマラヤ協会の尾形好雄に補佐をお願いした。尾形はスポニチの特派員でもある。そのほかに、日本ヒマラヤ協会から今後、日本のヒマラヤ登山を引っ張っていくであろう、岩崎洋と野沢井渉に参加してもらい補強を行った。

パキスタン政府からは、八〇〇〇㍍、一シーズン、一人二山の特別許可を取得した。

コンコルディアへ

ゴールデンウィーク中にすべての梱包と発送を済ませ、カト



ガッシャーブルム I 峰 西稜ルート

マンズにデポしてある登攀具、幕営具を回収し、パキスタンへ送る。カトマンズへの先発隊は五月十八日に出発し、パキスタンへの先発隊は二十三日、本隊は三十日に出発した。星野総隊長には登山隊がイスラマバードでの準備がすべて整い、カラコルムの登山基地スカルドに出発するころを見計らってイスラマバードに入ってもらった。

スカルドで食料、装備の買い出しを終え、六月八日にトンガルにジープで移動。途中、橋が流されているところもあり、ジープは川に嵌まってしまって、ロープで引っ張り出したりと、悪路の中を走り、やっとのことでキャラバンの出発地トンガルに到着した。

九日、キャラバンのスタート。

十一日のディモルド川の渡しでは、先に行ったポーター数名がワイヤーの渡しを嫌い、渡渉しようとしたが流れが強く、濁流に呑み込まれるところだった。

このワイヤーの渡しでは一回に一人しか渡すことができないので、もう一本ワイヤーを張ってもらった。それでも遅々として進まず、登山隊のロープで荷物を別送りにしたが、朝の八時ごろから渡り出したにもかかわらず、夜の九時ごろまでやってもすべてを渡し切れなかった。

十二日、パイユではポーターの荷物を入れ替えた。隊員は高度順応のために裏山へ出掛けたが、上は切り立った壁になって

おり、とても高度順応訓練とまではいかなかった。

これより先はバルトロ氷河上を行くのだが、途中のウルドカスが唯一緑のあるところで、ここで高度順応が出来ると聞いてきていた。しかし、約四〇〇〇㍍までの高度しか獲得することができず、結局、高度順応は各々のBCに入るキャラバンのルート上で行うしかなく、初めての参加者には苦しかったようだ。進むにつれ不調を言ってくる隊員が増えてきたが、ここは踏ん張って進んでもらうしかなかった。

静岡市登山隊の事故

十六日にコンコルディア。この日、先にブロード・ピークに取りついている静岡市山岳連盟登山隊と連絡を取ろうと、トランシーバーの周波数を合わせると、突然、遭難の報が入ってきた。C3へのルート工作を終え、C2へ戻る途中で雪崩に巻き込まれ、一人は自力で脱出したが二人が行方不明とのこと。すぐにでも現場に行って救助活動を支援したかったが、いかんせん私たち全員、高度順応ができていない。

翌日、私たちの高度順応を兼ね、ブロード・ピークBCへ向かい、現場での手伝いはできないが、何かできることがあれば、とテントを訪れたが、依然、行方不明で何もできず、これから登山活動を開始するB隊にできる限りの手伝いをするように指示してコンコルディアへ引き返した。

行方不明の二人は、K2に来ていた日本山岳会東海支部登山隊も加わって捜索活動を行い、十八日にBC～C1間で遺体で発見された。

ガッシャーブルムⅠ峰登頂

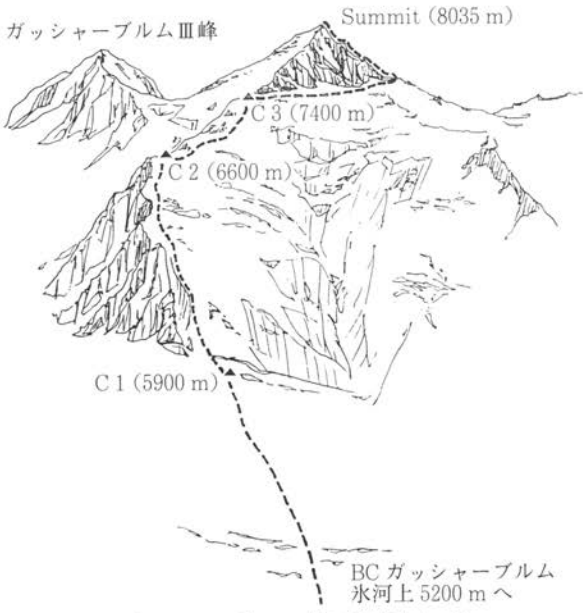
A隊、C隊は十九日にガッシャーブルムBCへ到着。GⅠ、GⅡにはすでに数隊が入山しており、登山活動を行っていたが、まだ、C1までしか建設できていなくて、南ガッシャーブルム氷河のアイスフォール、上部プラトー出口のクレバス帯のルート確保も出来ていない状態で、改めてルートを作り、整備し直した。

私たちが登山を開始してからも、続々と各国の登山隊が到着し、登山活動を開始していた。パキスタン観光省の、〝年間一山六隊〟の規制はどこにいってしまったのか、連絡官に確認すると、今年は建国五〇周年の年なので、今年の三月までに申請を出した隊には全て許可を出しているとのこと。ネパールの人数制限が一年でなし崩しになったが、パキスタンも同じになってしまうのではないだろうか。

二十二日から登山活動を開始した当初は天候も安定し、ルートも延びたが、二十七日より悪天候となり、全員BCへ引き上げた。七月一日より再開したが、その後は晴天続きで、登頂までの間は、四日と十日の二日間だけが崩れただけだった。過去

の天候の周期はこうも続かず、三〜四日晴れて、二〜三日崩れるというパターンが多く、登頂日が七月の下旬もしくは八月にずれ込む記録もあった。

A隊は、二日にC2（六四〇〇㍍）を建設。翌三日からGIの核心部であるジャパニーズ・クーロワールへのルート工作を開始。晴天続きのせいか、地球温暖化の影響が出てきているのか、岩が露出しているところが多く、残置ロープが二〜三㍍も上にあった。星野龍史隊員がすべてのルート工作を行い、二日間でC3地点に到達。本来であれば一度下に降り、休養してから後、アタックとなるのだが、今後の天候が読めないこともあって、休養なしで六日にC3（七三〇〇㍍）を建設し、そのまま一気にアタックをする。



ガッシャーブルムⅡ峰 南西稜ルート

七日、名塚、江塚、星野、品川が三時半に出発。頂上直下の斜面は見た目より傾斜が強く、四本のロープをセットして、十四時二十六分に頂上に立つ。下山は頂上より二六ピッチをスタカットで下降したので、C3へ帰幕したのは二十時近くなっていた。一日おいて二次の宮崎が二名のシェルパと共に頂上に立ち、馬場、岩崎（栄）は、高度順応の遅れもあって、GIはあきらめてもらい、GⅡに力を注いでもらうことにした。

GⅡとブロード・ピーク登頂

GⅡに向かったC隊は、不調者が続出し、ルート工作ができる隊員は後藤と尾形しかいなくなってしまったが、それでも二人は四日にC2（五八〇〇㍍）を建設し、七日にC3（七四〇〇㍍）を建設、C隊も一気にアタックに向かい、八日、三時五十分にC3を出発し、十一時三十二分にはシェルパ一名と頂上に立った。

C隊で順応が遅れていた綿貫、田島は、A隊と共に十四日頂

上に立った。田島は、二十歳五ヵ月の八〇〇〇㍍峰登頂者として国内最年少記録となる。

B隊は静岡隊のルートを使って、六月二十一日にC1（五四五〇㍍）を建設。二十三日にC2（六二〇〇㍍）を建設し、さらに上部のルート工作を行おうとしたが、天候が崩れBCへ下降する。

七月四日に上部へ移動しようとしたが、再び悪天につかまりBCに下山。静岡隊の事故もあり、完全に雪が落ち着くのを待っていたので、十日間もBCに閉じこめられてしまう。この十日間が、後々B隊に影響を及ぼしてくる。

十五日に、吉田、吉田（文）、福本がC4に入り、佐藤、梁瀬、岩崎（洋）もC2から一気にC4入りした。翌十六日、順応が遅れている中島を残し、シェルパ二人を加えた八人でアタックを開始。この日は風が強かった。先行している佐藤が中央峰に到着したころが最も強く、遅れているほかの隊員を待った。一度立ち止まると、気持ちはどうしても、下へ戻ろう、下山しようとなってしまいがちになる。しかし、幸いにも風は徐々にではあるが弱まってきていた。相変わらずの強風ではあったが、気持ちを切り替え、すぐそこに見えている頂上へ向け足を踏み出し、佐藤を先頭に、十一時三十分から十三時三十分にかけて、アタッカー全員が頂上に立った。

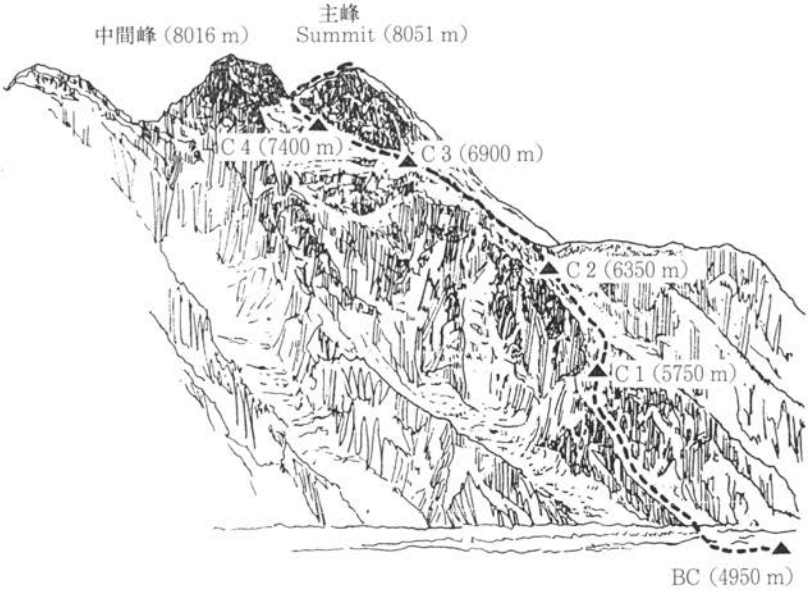
GⅡを終えたC隊は、十七日、十八日に分けて、ブロード・ピークBCへ移動し、二十日にシェルパ一人を含めてC4を三時に出発。九時二十六分には頂上に立った。

順応が遅れていた野沢井が復帰し、寺田とB隊の中島三人で、二次アタックに出たが、天候が悪化しBCへ引き返す。遅れてBCに入った綿貫、田島、シェルパら六人のうち、撤退のときに足を痛めてしまった寺田は登山を断念し、野沢井だけでは若い二人をフォローできず、すべての登山を修了して、二十八日にBCを撤収した。

B隊もようやく二十日にガッシャーブルムBCへ移動を終え、二十二日にGⅠへの登山を開始しようとしたが、朝からの雪でこの日の行動を中止。二十三日にC1へ移動。二十四日に一気にアタックを行うために必要最小限の装備、食料を持ってC2に上り、二十五日にジャパニーズ・クーロワールに入って行った。しかし、小規模ではあったが二、三回雪崩に襲われ、核心部を抜けた六九〇〇㍍付近で撤退してC1へ下降した。

このころになると、七月に入っての連続した好天のためか、雪が腐り始め、日中ともなると雪崩がどこから出ても不思議でないくらい雪が緩み、クレバスも大きく広がる。一方でBC～C1間のアイスフォール帯のルート確保もおぼつかなくなっていた。これ以上の登山続行は危険と判断し、二十六日全員がBCへ下降した。

七月に入って悪天になったのは、四、十、二十二日の三日間



ブロードピーク 西稜ルート

だけだったが、B隊は、ことごとくこの三日間が、アタック日、移動日と絡んでしまった。

二十人の隊員で、一人二座、延べ四十人の登頂者を作らねばならなかったのだが、結果は延べ二十四人、二座の頂上へ立てなかったのが三人と、あまり良い結果ではなかった。

今回の最大の目的は次世代を担っていく若い力の台頭を期待したことだった。八〇〇〇㍍の頂に立った自信で、その力を国内ではもちろんのこと、ぜひ次の遠征で見せてもらいたい。

△記録概要▽

隊の名称　群馬県カラコルム登山隊一九九七

主　催　群馬県山岳連盟・スポーツニッポン新聞東京本社

行動期間　一九九七年六月～八月

目　的　ガッシャーブルムⅠ峰、ガッシャーブルムⅡ峰、ブロード・ピークの三座登頂

隊の編成

総隊長　星野光（64）

隊　長　名塚秀二（43）（A隊隊長）

副隊長　佐藤光由（36）（B隊隊長）、後藤文明（32）（C隊隊長）

隊員　A隊／宮崎勉（49）、馬場保男（48）、岩崎栄（37）、江塚進介（38）、星野龍史（29）、品川幸彦（29）、B隊／吉田秀樹（44）、吉田文江（42）、梁瀬

佐市（40）、岩崎　洋（38）、中島剛二（37）、福本誠志（32）、C隊／尾形好雄（48）、野沢井歩（33）、寺田勉（29）、綿貫剛（25）、田島崇行（20）

リエゾン・オフィサー　A隊／アムジャット・ウォリ、B隊／シャヘッド・マスードゥ、C隊／アプラール・マハーマット、シェルパ七名、キッチンボーイ二名

行動概要

五月二十三日先発日本発、五月三十日本隊日本発、六月九日キャラバン開始、六月十六日B隊ブロードピークBC建設、六月十九日A、C隊ガッシャーブルムBC建設。

A隊／六月二十二日登山活動開始、六月二十四日C1建設、七月二日C2建設、七月六日C3建設、七月七日第一次アタック、十四時二十六分四名登頂、七月九日第二次アタック、十時三十分一名登頂、七月十四日ガッシャーブルムⅡ峰七名全員登頂。

B隊／六月二十一日登山活動開始、C1建設、六月二十三日C2建設、七月八日C3建設、七月八日C4建設、七月十日第一次アタック悪天のため六九〇〇メートルで断念、七月十六日十一時三十分六名登頂、七月二十日ブロード・ピークBCよりガッシャーブルムBCへ移動、七月二十四日六九〇〇メートル付近で雪崩の危険があるためC1へ下る、七月二十五日C登山を断念BCへ下山。

C隊／六月二十二日登山活動開始、六月二十五日C1建設、七月四日C2建設、七月七日C3建設、七月八日第一次アタック、十一時三十二分二名登頂、七月十日第二次アタック、悪天のため七五〇〇メートル付近で断念、七月十四日A隊と一緒に二名登頂、七月十六日ブロード・ピークBCへ移動、七月二十日九時二十六分二名登頂、七月二十一日二名がC2に入ったが、翌日悪天のためBCへ下山、七月二十八日C隊BCを撤収。

七月二十九日A、B隊BCを撤収。各隊共にゴンドコロ・ラ経由、七月三十日～八月一日全員スカルドへ帰着、八月十七日日本帰国。

K2西稜から未踏の西壁へ

——日本山岳会東海支部K2学術登山隊一九九七

田辺　治

日本山岳会東海支部では、新ルートからK2へ登ることを目標に、一九九四年から研究を行ってきた。その結果、一九八一年の早稲田大学隊の西稜ルートを標高七八〇〇㍍までたどり、ここから左上して約八〇〇〇㍍地点で西壁に回り込むことにした。この回り込む地点の突破が最大のポイントと思われた。西壁上部に入れば雪壁から雪壁をつないで、山頂直下で北稜に出られそうだ。新ルートとなる部分は七八〇〇㍍より上部、標高差にして約八〇〇㍍である。ルートの困難度と隊の実力を考え、タクティクスは古典的であるが、固定ロープ、酸素、シェルパを使った極地法をとった。

ところが、出発を十日後にひかえた五月五日、徳島和男隊長が穂高岳涸沢で雪崩に巻き込まれ死亡してしまった。そのため急遽田辺が隊長を務めることになった。

登山隊は五月十六日、日本を出発し、六月四日、トンガルよりキャラバンをスタートした。途中、パイユにて、ヒマラヤングリーンクラブとの共催事業である植林活動に従事した。BCは、サボイア氷河の標高五五〇〇㍍の地点に設ける予定であったが、ポータートラブルのため、六月十日K2ノーマルルートのベースキャンプ地点五一五〇㍍に建設した。一方学術隊は、バルトロ地域の環境調査のため、水、空気、木の年輪などの試料の採取を行った。

登山は五五〇〇㍍地点をABCとして、六月十四日よりルート工作を始めた。取り付きは西稜に突き上げる側稜の末端である。雪崩を避けるため、岩場を選びながら七ピッチ（一ピッチ

五〇㍍）登ると、早稲田隊のC1に着いた。しかしここは落石と雪崩の危険があるので、我々はとばすことにした。さらに雪崩の通り道になりそうなルンゼをトラバースして側稜岩壁と雪壁とのコンタクトラインに入る。このコンタクトラインどうしに、合計二〇ピッチルートをのばした。

六月十六日、三角岩の基部を回り込んで合計一〇ピッチで終了した。この日、ブロードピークで雪崩が発生し、静岡隊の横田川氏とジェフリーボブ氏の二名が、行方不明となった。

六月十七日、静岡隊より救助の要請を受け、登山活動を一時中断し、十八日全員で捜索にあたった結果、二遺体を発見し収容することができた。

翌六月十九日は、全員BCでレストにする。天候は悪天期に入り、十九日から二十三日と二十八日から三十日は、雪が降った。そして、隊の行動も伸び悩むことになった。

六月二十日、滝根、山田、中島、鈴木、中川、三好とシェルパ七名はBCからABCへ移動し、明日からの荷上げに備える。

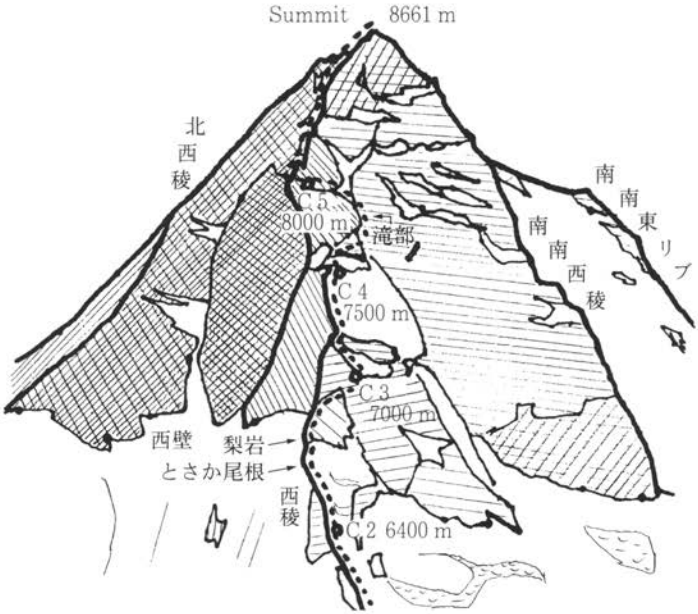
二十一日、滝根パーティーは悪天の中、ABCよりC2への荷上げに向かうが、二一ピッチ目でデポして帰ってきた。一方BCからは田辺、小林、シェルパ四名がABCへむかった。

今日、ABCからC2まで荷上げができなかったことを受けて、様々な議論がなされた。シェルパたちはデポキャンプを作ることを希望したが、日本メンバーは、雪崩の危険のあるC1に、キャンプを作りたくなかった。すると百戦錬磨のサーダー、ナワンヨンデンがC2の位置を、三六ピッチ目から、二六ピッチ目に下げることを提案してくれた。これは最も現実的な意見だったので、即採用した。そして我々のC2は西稜上（六六〇〇㍍）から三角岩の基部（六四〇〇㍍）へ下がることになった。

六月二十二日、日本メンバー八人、シェルパ十人の全実働部隊で、ABCからC2への荷上げに向かうが、悪天候のため、すぐに引き返した。この悪天候はしばらく続きそうだった。これをやり過ごすため、守りのタクティクスに入ることを考える。すなわち、半分はBCに帰って休養し、半分はABCにとどまって天候回復のチャンスを待つのである。

ところが、十五時頃、ABCの隣で、タルチョー（シェルパ族の宗教的な旗）を立てていたダワタシが、クレバスに二〇㍍も転落する事故が発生した。頭を強く打ち、肋骨も痛めている。鈴木が定期的に脳神経系のチェックをして、万一の場合はレスキューヘリを呼ぶことにした。

六月二十三日、小雪の中、ダワタシをABCからBCへ下ろす。彼はゆっくり自力で歩くことが出来た。二〇㍍転落してこの程度のケガで済んだのは奇跡的だ。ダワタシの容態は安定していたため、そのままBCで治療を続けた。そして一ヵ月後には、K2に登頂できるほどまでに回復したのであった。十三人のシェルパのうち登攀要員は十名だったが、一名欠けて、隊と



K 2 西稜

しては痛い損失であった。この日ABCには山田、中川とシェルパ二人が残り、他はBCへ付き添った。

六月二十四日、天候は少し回復したが、BC、ABCともレストにする。

二十五日、ABCの山田、中川はC2まで、ラッセルとルート整備を行った。BCで休養した隊員とシェルパはABC入りする。

六月二十六日、昨日働いた山田、中川はABCでレストし、他のメンバー全員で、六四〇〇㍍のC2まで荷上げを行った。

二十七日、K2は山頂部分に巨大な笠雲がかかった。いかにも険悪な様相で、「インディペンデンスディ」か「ラピュタ」を思いおこさせた。南南西稜の向こうの東面は、次々に雲が湧き起こっていたが、幸い我々の登る西面は、七〇〇〇㍍ぐらいまでは晴れていた。

この日、天気の先行きに不安があるものの、ルート工作隊(山田パーティ＝山田、鈴木、中川、ギャルブー、ミンマ)はC2に入り、ルートの終了点から、二ピッチルートを延ばした。他のメンバーはABCからC2への荷上げにあたった。

六月二十八日、雪の中、山田パーティーは早稲田隊が「とさか尾根」と名づけた、岩と雪のミックスした細い稜線を、七ピッチ登った。ABCからシェルパ五人がC2へ荷上げし、他はレストした。その夜C2では、三角岩からのチリ雪崩でテントを

埋められそうになった。

二十九日、雪の中、山田パーティーはABCへ下り、さらに、鈴木、中川はBCへ下った。

三十日、大雪のため、オールレストとする。

七月一日、天候は回復したが、雪崩を怖れてレストする。せめて、取り付きまで皆でトレースをつけにいった。

七月二日、BCで二日間の休養をとった鈴木と中川はABCへもどり、田辺、小林、ニマテンバ、ペンバドルジェのルート工作隊はC2へ入った。山田、中島、滝根、三好とシェルパ七名は、ABCからC2への荷上げを行う。

七月三日、田辺パーティーはとさか尾根から早稲田隊の名づけた「梨岩」を越えて、七ピッチルート工作した。鈴木・中川・ギャルブー・ミンマ・パサンキタールの五名は、C3からC4のルート工作に備えて、今日はABCでレストする。滝根、三好は二日間休養のためBCへ下り、山田、中島、シェルパ四名は昨日に続き七月五日まで四日間ABCからC2への荷上げ行ってくれた。

七月四日、田辺パーティーは、早稲田隊の最初の核心部、ルートグレード五級、長さ四〇㍍のクーロワールが見えるところまで来た。垂直の岩壁にワイヤー梯子が残され、彼らの苦闘が偲ばれる。今後の荷上げを考え、我々はここを避けて右へトラバースした。小ルンゼを越えて、四〇㍍のミックス壁を登り、早稲田ルートのひとつ下のバンドを右に辿って、C3をめざした。これならば、五級のクライミングはわずか三㍍で済む。ここには荷上げのためにアブミを一台設置した。合計七ピッチでC3(七〇〇〇㍍)に達する。遙か下には、バルトロ氷河がハイウェイのようにのび、その先に白くチョゴリザの姿があった。

この日、鈴木、中川、ギャルブー、ミンマ、パサンキタールは、C2入りした。

七月五日、昨日C2入りした鈴木パーティーは、C3への荷上げと、ルート整備を行った。田辺パーティーはC2からBCへ下り、四日間連続でABC、C2間の荷上げをやってくれた山田パーティーもまた、二日間の休養のためBCへ下った。

七月六日、鈴木パーティーはC2からC3へ移動した上、第一雪田の左端を八ピッチ登り、第二雪田への道を拓いた。BCからは休養を終えた滝根と三好がABCへ入った。

七月七日、鈴木パーティーは第二雪田の左端を登りきってC4(七五〇〇㍍)に達し、C2まで下りてきた。第一雪田、第二雪田とも雪が降れば雪崩が発生しそうだ。そこでフィックスロープの支点は、必ずロックハーケンでとった。

この日、滝根、三好はABC、C2間の荷上げをした。

七月八日、大役を果たした鈴木パーティーはC2からBCへ下りて、二日間の休養に入った。かわりにBCからABCへ、田辺、小林、山田、中島とシェルパ六名が移動した。ABCで

今後の荷上げを相談する。現在C4までルートは延び、ここが未知の西壁を攻撃する前線基地となる。しかし有酸素の極地法登山では、攻撃のための大量の物資をC4まで荷上げしなくてはならない。七月一日より晴天が続いていたが、この晴天期が終わる前に、スピーディーに荷上げを済ませたかった。そこで、C2からC4へダイレクトに荷上げすることにした。ここは標高差一一〇〇㍍だが、五三ピッチの距離がある。できるかできないか、十日に田辺、小林、ペンバドルジェ、ニマゴンブー、タムティンの五人が試してみることにした。

その夜二十時頃、ABCに、ゴーという腹にこもる轟音がした後、爆風がやってきた。シュラフの中でもがいているうちに止んだが、テント一張りが壊された。スキルブルムの懸垂氷河より雪崩が発生し、その爆風が襲ってきたのであった。

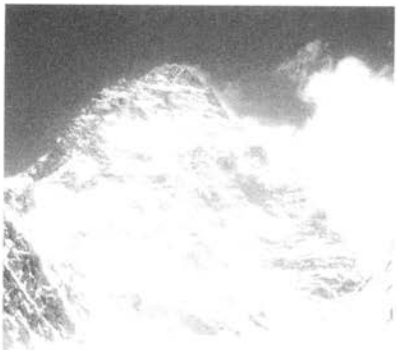
七月九日、田辺、小林、ペンバドルジェ、ニマゴンブー、タムティン五人はABCからC2へ移動した。途中で小林が肩に落石を受け、ひやりとしたが、幸い軽傷で済んだ。一方、山田、中島、滝根、三好、シェルパ三名はABC、C2間に荷上げをした。

七月十日、田辺パーティーはC2～C4間のダイレクト荷上げに向かった。途中で雪が降ってきたが、約八時間でC4に達することが出来た。

七月十一日、山田、中島は、昨日の雪で消えたトレースをC3までラッセルしてC2へ帰ってきた。滝根と三好は、C2～C3間の荷上げを二日かけて行うことを選び、C3へ移動した。

七月十二日、C3から滝根がC4までラッセルし、C2からは田辺、小林、山田、中島、ペンバドルジェ、ニマゴンブー、タムティンの計七名のC4ダイレクト荷上げ隊が後を追った。そしてこの日、鈴木、中川、ギャルブー、ミンマ、パサンキタールの五名がC2へ上がってきた。

七月十三日、鈴木パーティーはC2～C4ダイレクト荷上げをした。ペンバドルジェ、ニマゴンブー、タムティンの三名は二日間続けてダイレクト荷上げをしてくれ、さらに休養のため



ABCよりK2西壁を望む

ABCへ下っていった。田辺、小林、山田、中島、滝根、三好の六名はここでレストである。

ここでC4以上の今後の行動を考える。ローテーションからいくと、田辺、小林を中心とするパーティーをC4からC5のルート工作にあて、鈴木、中川を中心とするパーティーに一次アタックを任すことになる。しかし小林に「隊長は一次アタックしないとダメですよ」と言われ、考え直す。何といっても隊員のやりくりが苦しい。熟慮の末、田辺、鈴木、ギャルブー、ミンマの四人を揃えて、C5までのルート工作と登頂を一気に行ってしまう案が浮かんだ。そして、C2の全員で協議して、最終案が固まった。

七月十四日、小林、山田、中島、三好およびシェルパ二名はC2～C4のダイレクト荷上げをし、田辺、鈴木、中川、ギャルブー、ミンマはC2でレストした。

七月十五日、田辺、鈴木、ギャルブー、ミンマの一次アタック隊はC4へ移動した。テントを張るスペースを作るために、固い氷をくだかなくてはならない。大変な労力だったが、シェルパ達は強かった。もし日本メンバーだけでやっていたら、テントの三分の一は空中に飛び出していただろう。しかし彼らのお陰で快適なテントサイトになった。さらに時間があるので田辺、ギャルブーでルート工作に行く。C4から小さなルンゼを四〇〇㍍登り、岩壁上の広いバンドに出る。このバンドを右にトラバースした後、ゆるやかな雪壁を登って、滝部へ続く岩壁帯の下まで、六ピッチルートを延ばした。遠く西方に、ラトックとバインダーブラック（七二八五㍍）の鋭峰が聳え、その手前に山崎率いる岐阜大隊が初登頂したチリン（七〇九〇㍍）があった。その山は小林が横浜山岳会隊で二度まで苦汁をなめた山でもある。さらに遠くにはカンジュトサール（七七八〇㍍）が浮かんでいた。C4では睡眠用酸素を使ったため、快適に寝ることができた。この日、中川はC2～C4のダイレクト荷上げを行い、滝根、三好はC3へ入った。

七月十六日、田辺パーティーはC4からC5へのルート工作に向かう。今日から日本メンバーは行動用酸素を使用した。昨日の終了点から鈴木がトップで、下り気味にトラバースする。途中、岩小屋があり酸素ボンベが残置されていた。そして三ピッチ目を終了すると、早稲田隊の記録どおり、幅五〇㌢もないトンネルのルンゼがあり、岩壁帯の上部への道となっていた。早稲田隊はよくぞこのルートを見つけたと、尊敬の念を新たにした。ルンゼは五〇㍍ほど登ると広くなる。標高七八〇〇㍍、ここから早稲田のルートと分かれ、未知の世界へ入っていった。広島三朗氏から譲り受けた航空写真と照らし合わせ、三ピッチ左上する。トップは田辺に替わり、合計二一ピッチで西稜肩のピナクルの下に絶好のテントサイトを発見した。時間があるので、さらに西壁への攻略点を目指す。このルートが登れるかど

うか、この一点で決まる。心臓がドキドキして破裂しそうだ。そして、西壁を覗き込んだ瞬間、我々は勝利を確信した。懸垂下降二ピッチで西壁の第一雪田に下りられる。

この日、C2から山田、中島、小林がC4へのダイレクト荷上げを行い、C3からは滝根、三好がC4への荷上げを行い、C2へ戻った。

七月十七日は、C4で酸素を吸いながらレストする。ここにきて、ギャルブーとミンマが、「C5への荷上げには協力するが、一次アタックは辞退したい」と言ってきた。どうやら、西壁を覗き込んだとき、彼らは我々と逆の感想を持ったようだ。彼らのラッセルパワーとボッカパワーに期待していただけに残念であったが、行きたくないものを無理に行かせることはできない。若い中川隊員のパワーにかけて、彼に一次アタック隊に入ってもらうことにした。さらにこの日、追いうちをかけるように、松岡清司君のレディースフィンガーでの遭難のニュースが伝えられた。鈴木は号泣し、田辺は隊長として、この遠征中、一番苦しいときを送った。

七月十八日、田辺、鈴木、中川の一次アタック隊は、シェルパ四人のサポートを受けてC5を建設し、さらに西壁を一〇ピッチルート工作した。第一と第二の雪田を分けるロックバンドは、中川が不安定な雪壁を右からまいて、突破した。ナンガパルバットの方面から、着実に悪天雲が近づきつつあった。もう余り時間がない

七月十九日、一次アタック隊の田辺、鈴木、中川は山頂を目指した。昨日の終了点から田辺トップで第二雪田をトラバースしていく。ここは雪が降ったら雪崩れそうだ。第三雪田に入ると表面がブレーカブルアイスとなってラッセルが大変だった。田辺は急速に体力を失っていった。酸素も残り少ない。一〇ピッチ目、このままのペースでは山頂にとどかないことを悟り、若い鈴木にトップを交替してもらった。彼も苦しそうに、しかし着実に高度を上げて行った。我々は一四ピッチ目に北西稜に飛び出した。ここから、頂上を右手にみながら二〇〇〇メートルほどガラ場を登る。そして北壁の最上部に達し、二〇〇メートルほど岩場を慎重にトラバースした。足もとからスッパリと北壁が切れおち、四〇〇〇メートル下のチョゴリ氷河が見えた。トラバースを終えると、こんもりとした雪のドームが目の前にあった。山頂はさらにひとつ先であったが、もう我々の前進を妨げるものは何もない。十四時三十分我々は歓喜の叫びを上げながら、肩を組んでK2の山頂に立ったのであった。

山頂には誰よりもここに立ちたかったであろう、徳島隊長と山崎の遺骨、そして墓標がわりのスノーバーが残された。下降は雪の中だった。非常に疲労を感じていたが、無事C5に帰りついた。

二十日間続いた晴天もついに終わり、二十一日の二次アタッ

クは悪天につかまって敗退した。しかし、二十八日、滝根、中島、山田、小林、ダワタシ、ギャルブー、ミンマ、ペンバドルジェの八名が二次アタックに成功し、今回のK2登山の幕を閉じることができた。

今回私たちは、私たちに可能な方法で、ぎりぎり可能なルートを登ることが出来た。しかし、K2西壁の真に困難な部分は、手つかずのまま残されている。将来西壁を下部から完登するクライマーが現われることを期待している。

〈記録概要〉

隊の名称　日本山岳会東海支部K2学術登山隊一九九七

隊の構成　総隊長＝尾上昇、隊長＝田辺治、ベースキャンプマネージャー＝金田博秋、隊員＝滝根正幹、中島明、山田良二、小林正巳、三好学、鈴木幹夫、中川邦仁
高所シェルパ　十名（ネパールより）

行動概要　BC（五一五〇㍍）六月十日建設
前進BC（五五〇〇㍍）六月十四日建設
C2（六四〇〇㍍）六月二十七日建設
C3（七〇〇〇㍍）七月六日建設
C4（七五〇〇㍍）七月十五日建設
C5（八〇〇〇㍍）七月十八日建設
一次登頂七月十九日
二次登頂七月二十八日
C1は雪崩と落石の危険があるため建設せず。

［註：本登山は日本山岳会海外登山基金からの一九九七年度助成金を受けて実施された］

グルグルムスターグ初登頂
——静岡大学天山登山隊一九九七

大石惇

はじめに

静岡大学山岳会は、一九八七年に新疆の皇冠峰（クラウン峰）に隊を送り、頂上まであと三五〇㍍を残して敗退してから、二、三の企画がなされたが実現には至らなかった。この大きな原因は、若手OBの減少と隊員候補者の高齢化が上げられよう。一九六七年の南米コロンビアアンデス、一九七〇年のチューレンヒマール、一九七五年のテラムカンリの初登頂の後、一九八七年の皇冠峰の遠征まで十二年間の空白がみられる。そして、それからさらに一九九五年のこの計画が生まれるまで八年の歳月が経過している。

会全体のエネルギーの蓄積いかんにもよるが、単発的な遠征の出し方は、情報の把握も遅れ、若手の育成にもつながらないマイナス面が多い。一〜二年に一回程度の遠征が出て、五〜七年置きに七〜八〇〇〇㍍級の山を目指せることが、理想と考えられる。

会のなかで種々議論の末、高度が低くても回数多く出かけ、未知の山域を広く活動しようという結論に達した。その端緒として、交通の便がよくなったのに、低いが故に人が入らず情報も少ない、天山山脈東部（ウルムチ以西のイーリャンハビルガ山群）の山々に目標を定めた。ウルムチに近く、日数も短く、現役の山岳部の国内合宿の少し大規模なものということで、一九九五年の夏にグルグルムスターグ（格熱格尔慕孜塔格、五二五〇㍍）に隊を送ることになった。

この山は、北緯四三度二八分三〇秒、東経八五度四八分に位置している。若手の育成とOBの融合を前提に、現役の参加をメインに置いた。

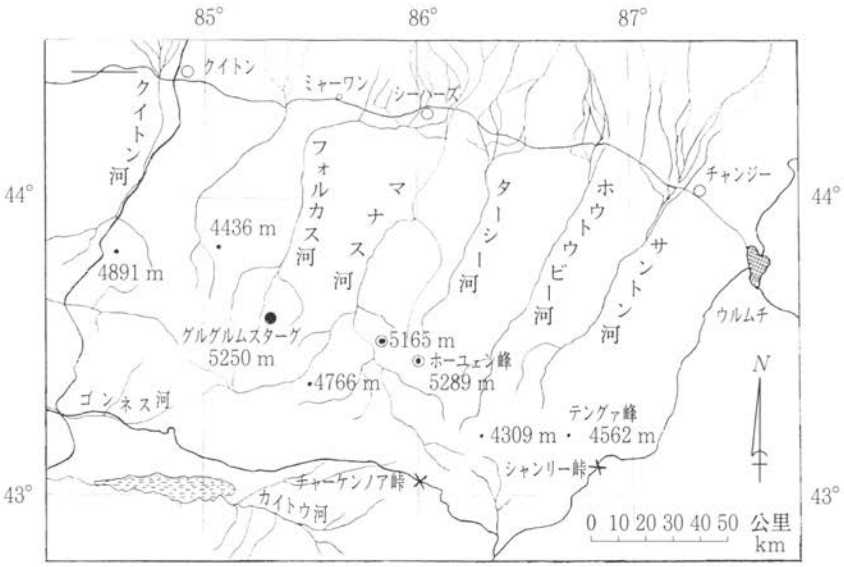
第一次隊は、偵察を兼ねた隊であり、現役部員二名が参加し、日数は全部で十四日間であった。キャラバンに要する日数は一〜二日程度で、マナス河を真直ぐに遡行してBCに入れるものと予想していた。しかし、富士山級の高さの大きな峠を二つ越えなければ、BCには到達出来ないことがわかった。往復六日のキャラバンは、登山期間を極度に短くし、目的の山を確認するに留まり、ルートの発見すら出来なかった。

翌一九九六年は、例年にない悪天候に見舞われ、道路は寸断、出発も危ぶまれたが、やれるところまでやってみようと再び五人の隊を送った。荒れた道路と増水した川の徒渉で苦労したが、登頂可能な二本のルートを試登して帰国した。一九九七年は、この経験を生かして二十日間の登山期間をかけることで、万全の体制で出発することになった。

登山活動

八月二日、成田から北京経由で、その日のうちにウルムチ入りした。ウルムチ到着は、二十一時だったが、まだ明るい。新疆登山協会の任連貴連絡官、通訳の阿達来提・沙吾提の出迎えを受け、市内のホテルへ。翌日、食料、炊事用具の一部を調達し梱包した。

八月四日、新疆登山協会の新しい移転先を表敬訪問後、ジープ三台とトラック一台で雨の中を出発。天山山脈に沿って西へ向かう。沙湾から幹線道路を離れ南に折れる。天山の山間のキャラバンの出発地点であるボルトン牧場（標高二〇八〇㍍）に到着。カザフ族のパオが点在する大草原である。おそらく二〜三〇〇人の集落と思われる。連絡官の任さんは早速、馬と馬方の手配に牧場の長と打ち合わせを行っている。馬方頭は、一昨年の馬方頭であったカウフエンが勤めることになった。カザフ族の馬方五人に、荷馬として十三頭、隊員用に五頭の計十八頭を雇った。アルトンゴル川を左右に徒渉を繰り返しながら、草原に咲く花々と針葉樹林の美しい風景のなかを、馬に揺られて登りつめる。リンゲンチタッシュ（二九六〇㍍）まで来ると、針葉樹はほとんど見られなくなり、それから上は、背丈の低いイネ科の草と礫の荒涼とした山岳地帯に入り込む。高度をぐんぐん上げ、細くなって跨いで渡れる川を離れ、急な斜面をおよそ三十分登ると、標高三六七〇㍍のクムクチュム峠である。峠からは雪を戴いた五〇〇〇㍍級の山々が、目に飛び込んでくる。テングア山群の河源峰の山々である。峠を越え急峻な斜面を七〇〇㍍下ると、タワウドウルック（二九〇〇㍍）でここが第一日目の幕営地である。十一時間の行程で、ボルトン牧場から標高約一六〇〇㍍の峠越えは、馬に乗らずに歩き通した隊員には



イーリァンハビルガ山群およびテングァー山群位置図

辛かったであろう。

翌八月六日は、ボルンウルゴン川に下り、再び対岸のシュラプサル峠（三七一〇㍍）を目指して登る。昇り降りの激しい道のりであるが、五〇〇〇㍍級の雪をいただいた山々と高山植物の花々が、目を楽しませて疲れを癒してくれる。天気は上々で一時の休憩はまさに天国である。サルトッシュ川でキャラバン二日目の幕営となる。幕営地では、BCのすぐ左手にそびえる、標高五〇一五㍍峰に初登頂を終えた、鳥取岳同人の村上義春隊長以下四名と一緒になり、情報を得、ウイスキーでお祝いをして、我々の登頂への意欲を高めた。第一回遠征の時の連絡官のヌルさんや馬方たちとの再開を喜び合う。

八月七日は、BCに向けての最後のキャラバンである。幕営地から約一時間下るとラーグア川の出合いに着く。広々とした谷で上流に向かって草原が広がり、両岸に雪をいただいた山々が連なり、夏の格好の放牧地になっている。下流は滝こそ見えないがかなりの急流となって北へ流れ落ちている。フォルカス河の上流であるが、とても馬などで遡行しては来られないところである。流れの速い川を馬の腹まで水につかり、徒渉を繰り返しながら、谷を遡り高度を上げて行く。増水の激しい年には、上流に向かうのはかなり困難であろう。

馬方頭が岸壁の上にいたゴーラル（野生の山羊）を見つけライフルで一頭射止めた。彼らは喜んですぐに解体を始めた。我々

が登山活動している間にも二頭射止めたらしい。自然保護の立場から考えると、複雑な気持ちにさせられた。われわれの登山隊が入ってこなかったら、三頭は殺されずにすんだかもしれない。

日本出発のときから、BCをグルグル氷河の舌端近くまで上げることを目標にしていた。そして、氷河の舌端まで歩いて約四十分のところ（三二六〇㍍）にBCを設置した。グルグルムスターグが氷河の最奥にどっしりとそびえていた。

カザフ語でグルグルとは、雪崩や風の音がゴウゴウ音を立てている意味で、絶えまなく荒れている山ということになるらしい。BCではまだその感じはつかめなかったが、登山を開始して氷河を奥に登るにつれて、その意味を思い知らされることになる。

八月八日、いよいよC1建設に向けて全員で荷上げをする。二頭の馬に荷を積んで、馬が行けるところまで運んで貰う。氷河右岸の五〇一五㍍峰から絶えまなく落ちる落石に気を配りながら、モレーンの上の浮き石に神経を使い、這うように高度を上げる。C1をモレーンの中の三九〇〇㍍に設置した。

八月九日は、氷河舌端のデポ地からC1への荷上げと、さらに上部の内院を偵察してC2を建設する偵察隊に二分し、それぞれ四人ずつに分けて行動した。天候は今日も快晴で、八月五日のボルトン牧場から連続五日の快晴である。鳥取隊に同行していたヌルさんの話しでは、このあたりの天候の周期は、『五晴三荒』だという。そろそろ荒れる時期に入るかも知れない。

内院の偵察隊は、C1から約一時間登ったところに、仮C2（三九五〇㍍）を置き、空身で偵察を行う。この地点は、グルグルムスターグの頂上直下のプラトー部から、北西に一気に落ちている広いルンゼの下で、このルンゼをひとつの登頂ルートとして考えていた。今日はこのルートを途中まで試登して、雪質やルートの安全性を確かめることにした。氷壁の状態、ブロックの崩壊の危険性をみて、明日さらに上部を偵察してから登頂ルートを決めても遅くはない。上部に適当なルートが見つからない場合、ここにC2を置き登攀することにした。夜、雷が鳴り、雨が霰になって天候の悪化の兆しが見られる。また、C1のすぐ下で大きな岩盤の崩壊があり、その砂塵は氷河を覆いしばらく視界がきかなかった。幸いテントの方向に落ちずに、やや下流に向いていたためことなきをえた。

翌八月十日は、周囲の山の山頂部に雲がかかるも、氷河上は見とおしがよく行動可能であった。仮C2から吉田、桜庭、堂馬の三人が上部の偵察に向かった。内院に入った桜庭、堂馬から、頂上から西に向かって落ちるクレバスの多い谷氷河をつめるルートも候補のひとつであるが、かなりのフィックスが必要で、工作にも時間がかかりそうなので、吉田がさらに上部を偵察しているとの報告が入った。しばらくして、吉田からさらに



BC よりグルグルムスターグ峰を望む

奥の谷氷河に回り込み、頂上と五一二〇㍍峰とのコルから、内院側に派生する尾根の中腹に出て主峻線のコルに出るルートが、最も安全かつ成功率が高いと思われるとの連絡が入り、これを登頂ルートに採用することに決定した。派生する尾根の下、四一二〇㍍にC2を設置するために、仮C2からの荷上げを行い、その日のうちに全員C2に集結した。氷河の内院は、ところどころにクレバスがはしり、日中は表面を水が流れ、昼間だけの氷河湖があちこちに出来ている。天候は曇天でガスも混じるが視界は良好であった。夜、内院を風が巻いているのだろう、呼吸をするような風が一晩中テントを激しく揺らし続けた。山名の由来が、なるほどとうなずけた。

八月十一日も薄曇りで風は相変わらず強かったが行動は可能だった。正午、四人が天候のおさまりを見てルート工作に出かける。派生する尾根を回り込み、急な斜面を登るとだだっ広い雪原になっていて、ヒドンクレバスが幾重にも走っていて緊張させられる。アンザイレンして工作する。急斜面の約三〇㍍と大きなクレバスの乗越しに、それぞれ約三〇㍍のフィックスを張った。雪原の上部に到着したところで、あと約五時間のアルバイトで主稜線のコルまで出られる見とおしが立ち、C2に帰還した。夜、吉田始、佐藤峰志、桜庭祐輔、深沢久和、平木栄治の五人の登頂隊員を発表した。明日の好天を祈るばかりであった。

登頂記録（登頂者・桜庭祐輔の手記から）

八月十二日、今日は頂上アタックの日である。朝食をとると、とても気持ちが落ち着いてきた。視界がきくようになった七時五分、まず僕が出発した。一足先に行ってフィックスを張り直したいと思っていたからである。フィックスの張り直しが終わるころ、他の四人のメンバーも登ってきた。フィックスをたよりにクレバスを越え、雪原に出てアンザイレンする。順調に登攀を重ね派生する尾根の中腹に出る。九時十五分。

ここから主稜線のコルまで直登するが、傾斜が次第にきつくなり、大きなクレバスが何本もあって回り込むのに苦労する。クラストしていてアイゼンは気持ちよく効く。主稜線に近づくと傾斜も緩くなり、クラストとしていた雪面も膝下のラッセルに変わる。僕はザイルをほどいて先頭に立ちコルに出た。十一時三十五分。立ち止まって後続メンバーに手招きするも、皆肩で息をしており、疲れが大きいとみえる。天候は一点の雲もない日本晴れであり、頂上へのルートも緩やかな傾斜が続き、安全そのものに思えた。是が非でも登頂したいという気持ちから、頂上に向けてラッセルを始めた。ペースの上がらない後続メンバーを持つことをやめて、単独で頂上を目指す。ラッセルは深いところで膝上程度。たまに立ち止まり息を整える。まるで日本の春山にいるような錯覚に陥る。

主稜線のコルに出てから約一時間、長く続いた緩い雪面が雪庇の盛り上がりとともに絶壁に変わって途切れた。十二時三十分、これが頂上だった。まわりを見てもここ以上高いところはない。三六〇度の大パノラマである。なんと穏やかな頂上であろう。僕は頂上にピッケルを立てて写真におさめた。来た道を少し引き返して後続のメンバーの位置を確認する。順調に歩いているが、まだ時間はかかりそうである。頂上で昼寝と洒落こむことにした。五二五〇㍍の高度、しかも、未踏峰の上で昼寝なんて、何人の人が経験しているだろうか。一時間ほどうとうとしていると人の声が聞こえてきた。皆笑顔で登ってくる。十三時三十四分、残りの四人が登頂した。ザイルをほどき、肩を組んで写真を撮る。

C2へ連絡をとろうとしたが、電波が届かないようで応答がない。頂上を十三時五十分に離れ、コル近くまで戻って来て、ようやく交信することができた。隊長が非常に喜んでいるのがわかる。さらに下降を続け、クラストした急な斜面を、アンザイレンはせずに慎重に下る。無事に急斜面を下りきり、C2と再び交信する。往きと同様にクレバスの連続する雪原をアンザイレンしてファックスを回収しながら降りて行った。内院まで降りると皆疲れたのか、安心したのか歩くのが非常に遅くなった。C2がみるみる近づいてきた。そこはオアシスだった。僕は登攀用具を投げ出し、温かいお茶をたらふく飲み、かつてな

い解放感に酔った。グルグルムスターグの初登頂は幕を閉じた。

△記録概要▽

隊の名称　静岡大学天山登山隊一九九七

行動期間　一九九七年八月二日～八月二十二日

目　的　グルグルムスターグ（五二五〇㍍）の初登頂

隊の編成　隊長　大石　惇（58）、副隊長　福田　明（52）
登攀隊長　堂馬英二（50）、隊員　吉田　始（48）、
佐藤峰志（21）、桜庭祐輔（20）、深澤久和（19）、
平木栄治（19）
連絡官　任連貴（42）　通訳　阿達来提・沙吾提（29）
コック　尓哈提・吐尓遜（32）

行動概要

八月二日　成田→北京→ウルムチ
八月四日　ウルムチ→ボルトン牧場（二〇八〇㍍）
八月五日　クルクチュム峠（三六七〇㍍）→ボルンウルゴン川（二八七〇㍍）
八月六日　シュラプサル峠（三七一〇㍍）→サルトッシュ川（二九二〇㍍）
八月七日　ラーグア川出合（二七三〇㍍）→BC（三二六〇㍍）
八月八日　C1（三九〇〇㍍）建設
八月九日　仮C2建設および偵察
八月十日　C2（四一二〇㍍）建設
八月十二日　グルグルムスターグ（五二五〇㍍）初登頂
八月十四日　C2→BC
八月十五日　BC→サルトッシュ川
八月十六日　ボルンウルゴン川
八月十七日　ボルトン牧場
八月十八日　ウルムチ
八月十九日　トルファン
八月二十日　トルファン
八月二十一日　ウルムチ
八月二十二日　ウルムチ→北京→成田

全員二十歳代でアマダブラムに登頂

――一九九七年福岡アマダブラム登山隊遠征記録

上田恵爾

はじめに

アマダブラム峰はアプローチのたやすさ、手頃な高さ、そしてその見事ともいえる優美なかたちで国籍を選ばず誰もが魅かれる秀峰である。ヒマラヤのなかでもとくに人気の高い山であり、かつての困難なルートというイメージもどこへやら、いまや冬期単独や八〇〇〇㍍峰を目指すための高所順応を目的とするなどさまざまなかたちで登られている。ましてやノーマルルートの南西稜ともなれば一シーズン十隊以上もの登山隊が足跡を残す。そのような登山事情ではあるが、九七年のポストモンスーンに福岡アマダブラム登山隊が南西稜からアマダブラムに挑み登頂したことは、九州・福岡に新しい風を起こさせたのではないか。ひとつの事実として残しておきたい。

隊集結のもともとは九六年の福岡チョモランマ峰登山隊がきっかけだった。九州の絶滅しかけた若者クライマーの一部がそこで出会い意気投合した。「若者同士で何かをやろう」と自分たちの思いを形にすることで絶滅にマッタをかけることになったのである。コンセプトは九州の若いクライマー同士、会派を越えた横のつながりを作り、同年代においてすべて独力で計画、運営すること。隊の方針として隊員は二十代のみで構成され、シンプルで経済的な登山、遠征を実行することとした。もちろん全員登頂が原則。

メンバーは隊長、関剛（26）、上田恵爾（25）、重川英介（23）、小沢美樹（26）隊員の四人。それに飛び入りではあるがBCま



アマダブラム南西稜ルート概念図

でのサポート隊として中村真臣（22）隊員が加わった。ヒマラヤに魅力を感じる若者はまだたくさんいるはずなのだが残念ながら今回集まったのは五名。このような若者だけで遠征隊員を構成した例を我々は知らなかったし、自分たちの遠征を作るという観点からも知る必要はなかった。とにかく経験が豊富とはお世辞にもいえないメンツで、それを自覚しいかに的確な判断をとり、お互いの意識を高めるかが成功へのカギと思われた。その点からもアマダブラムという山は九州の田舎山小僧には文句なしであり、ノーマルルート以外の困難なバリエーションには目もくれなかった。

出発まで

一年以上も前から行くことを疑わなかった関、上田の二人が中心となって計画を進めていた。といってもほぼ登山の許可を取るための手続きが大きな仕事だった。ひとつのまとまった山岳会で申請をするわけではなく、率直にいえば行きたいもの同士ダダをこねていくわけで、このような山岳会を介さない遠征隊というのは日本では（少なくとも九州では）例を見なかった。

まず『日本山岳協会からネパール政府への推薦状』をどう取得するかが問題だった。それまでのいきさつは省くが、結局、福岡山の会の主管（事故連絡本部など）ということで最終的にはネパール政府への推薦状がおりた。これはひとえに福岡山の

会の岡崎献之氏が積極的に応援・協力してくださったおかげだ。登山期間は遭難保険の関係上、九月二十日から十月二十日までを限度とした。登攀スタイルはアルパインとポーラーの中間的なものを採用。二つの上部キャンプを数度の荷上げによって建設するが、フィックスロープは部分的にしか用いないというものである。また、荷上げを減らすために二隊に分かれて行動することにした。しかし実際分からないことが多くあらゆる状況を想定していた。

実際の行動は出発前月の八月の盆休みを利用して食料や装備を梱包した。それ以前は電話やFAXで水掛け論をやっていただけだ。食料については前年のチョモランマ峰登山隊で大量に余ったものをいただき、カトマンズにデポジットしておいたためにほぼ高所用の行動食のみを用意すればよかった。また装備についても同じく、ハーケンやスノーバーなど共同装備も現地に置いた。さらに装備としては、北九州歯科大学の中村修一氏からBC用の炊飯具、宮崎大学山岳会からフィックスロープ等登攀具、ベルグスピンネから高所用テントをそれぞれお借りした。おかげで揃える共同装備は予定通りわずかなものだった。それから医療については福岡大学山岳部OBの高須俊昭氏から医療具一式をいただいた。

こういったさまざまな支援・協力を受けながら九月に福岡より出発した。またトレッキング目的で途中参加した中村真臣君には、現地での荷造り準備等で大事な時間を割いて手伝ってもらって大いに助かった。

1997 FUKUOKA AMADABLAM EXP

BC入りはモンスーンの影響が残る九月二十二日。他隊に先んじてルート工作をするために早い時期を選んだのだが、ロシア隊が一足違いで先行した。BCはだだっ広い草地で小川もあり条件の整ったロケーションだった。カトマンズで購入した大型キッチン兼リビングテントに各個人テント。腕ききコックとしてやとった顔なじみのシェルパと常夏気分のビーチパラソル。それに大量に購入した食料のおかげでBCは快適そのものだった。〝シンプル・経済的〟を唱える若者隊であったがBC食をけちる考えは誰一人持ち合わせていなかったことがここで判明した。おかげでストレスも少なくクライミング自体に実に集中できたのではないかと思う。

登山日数は二十五日間。モンスーンはずれ込むことなく終わりを告げた。期間を大きく三つに分けると、第一期は高所順応とC1までの荷上げを行った。BCにはロシア隊と我々のみ。BC〜C1間は高度差一〇〇〇㍍以上もあるので確実な順応のためにも五〇五〇㍍付近にDC（デポキャンプ）を設営した。C1地点は稜線に沿って点在するせまいテラスで、多いときは（かなり無理して）七〜八張りのテントが設置された。荷上げ



アマダブラムのBC

は各人十三～十五キロを担いだ。C1建設はロシア隊と同日であったがC2までのルート工作は彼らが先行した。

第二期はアタックを予定して上田・重川がC2建設と上部の工作に向かった。C1～C2間はⅢ～Ⅴ級の岩稜で、その核心はレッドタワーといわれる岸壁だ。例年ならこの時期、ルート上に雪はほとんどついていないらしいが、今年はミックス稜になっていた。ルート工作にはハーケンが有効である。前日C2より氷雪壁を五ピッチフィックスし、十月六日、上田・重川は五時前にC2を出発。天気は快晴。フィックス終了点からはスタカットで進んだが、頂上まで残り四ピッチというところで時間切れになり十四時半過ぎに下降決定の交信をBCに告げた。この日のロシア隊はマッシュルームリッジ先のプラトーにC4を作って、翌日アルパインスタイルで頂上を往復した。

アタック失敗の反省からC3建設を決め、関・小沢がまず出発。C2入りした翌日、関がマッシュルームリッジに二ピッチルートをのばした。小沢は多少体調を崩していた。十二日、後発もC2入りして全員集結。十三日C2を撤収しC3を建設した。この日ドイツ隊、第二のロシア隊もテントを設置した。翌十四日、ドイツ隊のロープをかりて懸垂氷河の上部まで六ピッチをのばし明日のアタックに備えた。翌朝五時半アタック開始。天候は今日に限って高雲りで風が吹いた。上田・重川が二ピッチのばしたあとはドイツ隊が頂上までの五ピッチを張って、九

時登頂。この日ドイツ隊のほかにもロシア隊、アメリカ隊など、二十人近くが登頂したことになる。

下降時は、荷上げしたものを（フィックスロープ以外）すべて担いで下った。BC撤収時は十以上もの隊が入山していてキャンプ村さながらであった。キャラバンを終えるまで好天続きで今回は天候に恵まれた時期であった。

アマダブラムを越えて

遠征が無事に終わり事故もトラブルもなく帰国できたことは出発前からあった少しばかりの不安を確信にかえてくれたのではないかと考える。登攀にいたっては一回目のアタックで頂上こそ落とせなかったものの、高所においても状況判断ができることを示せた。失敗というよりむしろ大きな成果ではないか。フィックスロープは当初部分的にしか用いないことにしていたが、結果的に他隊と共同で頂上までオールフィックスしてしまった。そのせいで登頂までかなりの日数を費やしてしまったが、全員登頂のためには避けられない選択であった。今後、よりシンプルなスタイルを目指すにあたって、技術、体力のさらなる向上はもちろん、軽量化や危険に対する考え方を、これからの経験で学んでいかなければならないだろう。とはいえ今回、隊員それぞれが一〇〇パーセント力量を出し切ったとはいえないまでも、計画・実行とすべて独力でまっとうできたことは、満足な結果だったと思う。

本隊は最初に記したとおりひとつの山岳会に属しているわけではなくそれぞれ別の山岳会の二十代同士が集まっただけなので、遠征後は必然的にそれぞれはバラバラに活動を続けることになった。しかし遠征というかけがえのない時間を過ごしたことでこれがなにか出発点となるような大きなものをひとつ残せることができたのではないだろうか。今後もこういった新しい風が起こるのなら応援していきたいものである。

△記録概要▽

隊の構成　隊長＝関剛（26歳）
隊員＝上田恵爾（25歳）、重川英介（22歳）、小沢美樹（26歳）、S隊員＝中村真臣（22歳）

行動記録　九月十日福岡出発。カトマンズ到着（現地にて小沢合流）、十六日カトマンズ出発ルクラ到着。キャラバン開始、二十三日中村BC下山、二十四日BC開き、二十八日C1建設、十月四日C2建設、六日工作隊（上田・重川）アタック失敗、十五日登頂、十八日BC撤収、二十日カトマンズ着、二十三日カトマンズにて現地解散

白き山からの生還

――日本山岳会青年部ダウラギリⅠ峰登山隊一九九七の記録

松原尚之

「ゴーッ」。かすかに聞こえてくるその不穏な音に気づいたのは、板谷も私もほぼ同時だった。標高六〇〇〇㍍。C2のテントの中。その音は確かに、数秒前から聞こえていたのだ。

「来てますよ!!」。そう叫ぶやいなや板谷が外に飛び出し、続いて私もテントの入り口に向かって這い出す。瞬間、ものすごい雪の重圧が背中、そして顔に襲いかかる。

「間にあわなかった……」

容赦なくのしかかる雪に、私は必死で顔を覆う。

一

カラコルム・スキルブルム峰での日本の登山隊の雪崩遭難が大きく報道された一九九七年八月二十一日の朝、私たちは成田を出発した。

日本山岳会青年部を母体とする八名（登攀メンバー七名、BCマネージャー一名）は、昨年の青年部のK2隊同様、平均年齢二十歳台の若いチームである。学生も二人参加している。

昨夏、南南東リブルートから大量十二名の登頂、全員無事下山という成果を挙げることのできた「日本山岳会青年部K2登山隊一九九六」は、近年日本山岳会で行われてきた海外登山とは異なり、青年部の若いメンバーの自発的な計画かつ主体的な実施であった点に大きな意義があったと、私は考える。今回のダウラギリは、K2隊で副隊長であった私が隊長となり、K2登山の流れを引き継いで、「主体的な」登山を実施しようという試みである。

目指すはダウラギリⅠ峰（八一六七メートル）北壁の「洋梨」ルート。一九八二年に日本のカモシカ同人隊が初登攀に成功するまで九隊の挑戦をはねのけ、その後も再登を許していない難ルートである。K2は酸素ボンベを使用しての登山であったが、今回は無酸素で試みるつもりでいる。自分たちの現在のレベルを正当に認識し、はるかに先をゆく世界のアルピニストのレベルに一歩ずつでも近づいていきたい、というのが私の願いである。

準備のかたわら、K2隊でも行った富士山速登りトレーニングをさらに徹底して行うことにした。K2隊のときは月に一回だったが、今回は週に一度富士山に通うのを目標にする。春、関西から唯一参加する奥田は御殿場市の富士山の麓にアパートを借りた。準備のためだけに東京に引っ越すくらいなら、ひたすら富士山に登れる御殿場の方がいい、という私の勧めである。出発直前の夏、副隊長の棚橋は、隊員間のベストタイムである。御殿場口新二合目から頂上剣が峰までを二時間四〇分で駆け上がった。

二

九月十日、いよいよ登山を開始する。氷河の上に設けられたBCの標高は四七〇〇メートル。正面に仰ぎ見るダウラギリのなんと大きなことだろう。純白の北壁は朝の陽を浴び、神々しく輝いている。

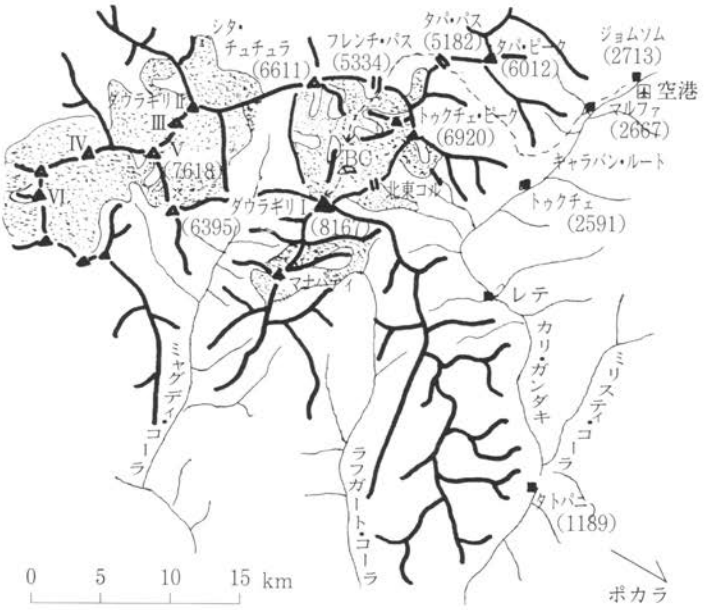
氷河を横断し北壁から派生する小さな尾根に取りつく。砂礫と浮き石のみで構成されたひどいヤセ尾根で、極度に危うい。支点はすべて浮き石でとらなければならない。

なんとかルートを作り、九月十五日、五四五〇メートルにC1を建設する。C1の先でセラック帯に突き当たる。覆いおぶさるように林立する二階建てほどのアイス・ビルディングや、今にも落ちてきそうな巨大なつららを避けるように、ひたすら右へトラバース。セラック帯を一〇数ピッチで抜け、ようやく広大なプラトーに出る。これから先は、雪崩から絶対に安全と言えるような場所はない。C2は標高六〇〇〇メートル、「洋梨」の岩壁から続く、小さな尾根上に設ける。

毎日午前中は天気が良く、午後には必ず雲が湧き雪が降る。それでも九月中はおおむね天気は安定していた。北壁の広大な雪の斜面にルートを伸ばし、「洋梨」の基部六七〇〇メートルにC3を建設する。きわめて急峻な雪壁を削り、かろうじて二人用の小さなテント一張りを建てる。小用を足すのにもロープに体を確保しておかなければならない。

九月下旬から十月の第一週、本来ならモンスーンも完全に終わりを告げ、素晴らしい好天期が訪れるはずなのに、度重なる強い低気圧の襲来で雪の日が続く。

十月七日朝、前日から降り続く雪のため、ひとつのテントにC2の五人が集まり、BCに下山するかどうかのミーティング



ダウラギリⅠ峰山域概念図

を行う。と、そのとき、「ドン」という音が外から聞こえ、その数秒後、雪崩がテントを襲ってきた。半壊したテントから脱出すると、私と板谷が先ほどまでいた上のテントは雪につぶされている。悠長にミーティングをしている積雪状況ではないことを知らされ、すぐに下山の支度にかかる。ウエアや登山靴を身につけるため、倒壊したテントをなんとか建て直し、私と板谷が中に入る。今もう一度来たら終わりだなと思い、斜面の方向に向かい私は軽く手をあわせた。

一発目の雪崩で神経が過敏になっていたためだろう。テントの中で私と板谷は、かすかなその音に気づいた。「来てますよ！」。叫ぶと同時に板谷が外に飛び出し、私も続けてテントの入り口に這い出そうとするその刹那、ものすごい雪の重圧が、背中にのしかかる。うつぶせになった私は、必死で手で顔を覆う以外、何もすることができない。

すでにテントの外にいた棚橋と川高、必死で飛び出した板谷の三名は雪崩に襲われ、一〇〇㍍ほど流される。

雪崩がおさまり、頭の上の雪を手で払うと、幸い私の顔と手は外に出た。下を見ると、必死の形相をした棚橋がいる。背中の雪の重圧は強く、体を動かすことができない。棚橋、川高、板谷がラッセルをして上がってくる。下のテントでやはり半分埋められた椎名を、続けて雪まみれの私を掘り出す。

「もう、やめて帰りたい」。そんな気持ちも心に芽吹く。他のメンバーはまだまだやる気十分のようだ。もちろん、まだやめるわけにはいかない。新しいテントをC2（前回のC2の一〇〇メートルほど下）に張り直し、再び上部を目指すことにする。

晴れたすばらしい天気の下での登高が、衰えかけた頂への気持ちを甦らせる。薄い空気の中、広漠とした雪の斜面を登りながら、私は死んでしまった仲間たちのことを考える。雪崩で死んだ者もたくさんいる。私よりも能力の高い者たちが何人も死に、私は今まだ生き残っている。いや、私だけでなく、今回の隊のメンバーのほとんどが、似たような境遇にあるのだ。彼らが死に、私たちが生きているのはなぜだろう？　今、言えるのは、とにかく私は登り続けなければいけない、ということだけだ。

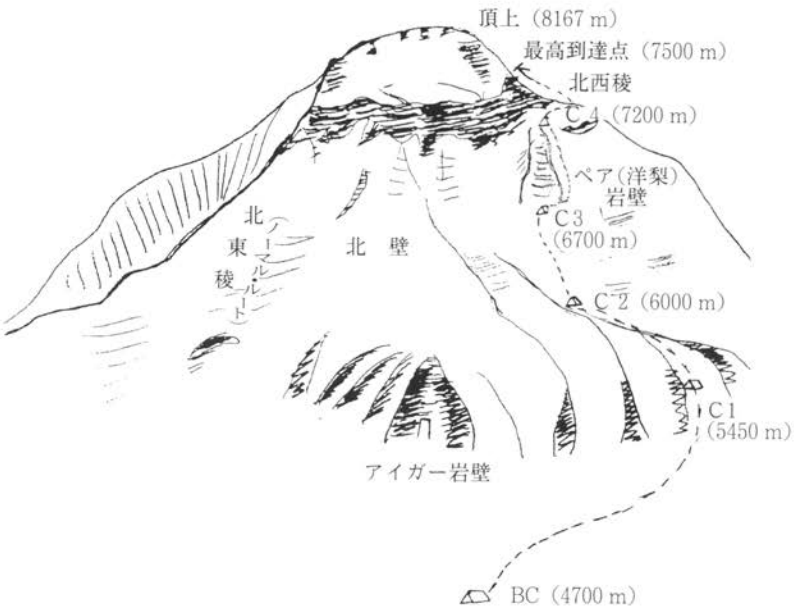
日程的にも、もうあまり余裕はない。アタック体制が整うまで、BCには下りずにルートを伸ばすことにしよう。幸い、これまでで最高の好天期が訪れた。「洋梨」の上部七〇五〇メートルにC4を建設。C3と同じように、普通ならテントを張ることなど考えもしない急な雪壁の中である。「洋梨」最上部から北西稜までは支点の取りにくいやらしいミックス帯だ。

十月十八日、雪のつながったバンド状を右にトラバース気味に登り、ついに北壁を抜けて北西稜に出た。これまで見えなかった稜線の向こう側が初めて見渡せ、見慣れていた風景がドラマチックに変化する。北西稜上を七五〇〇メートルまでルートを伸ばす。初めて核心部の岩稜を間近に眺めることができる。ようやく登頂への足掛かりができた。少しでも先へルートを伸ばしたい自分たちの気持ちをなだめ、下山にかかる。翌十九日、長く続いた好天期もついに終わりを告げた。本当ならもう一日、棚橋パーティーが交替でC4に上がりルートを伸ばす予定だったが仕方がない。十日ぶりに全員でBCに下山する。

松原、松本、奥田、板谷は先に上部に上がり、七七五〇メートルまでの核心部岩稜のルート工作を行う。棚橋、椎名、川高の三名はあとから上がって七五〇〇メートルにACを作り、翌日頂上アタックを行う。それが、私たちの立てぎりぎりのアタック計画である。日程もぎりぎり、食糧も底をつきかけている。でも、まだかすかに残っているチャンスに何とか賭けてみたい。三日間のBC休養で、アタック・ステージに入ろう。上部での連続行動により疲労感はあるが、順応は全員うまくいっている。

十月二十三日、午後から静かに雪が降りだした。まるで冬が訪れたようだ。翌二十四日、降雪はさらに強まり、一日中降り続ける。C2で雪崩に遭ったときの大雪ですら、BCでは一〇センチ程度しか積もらなかった。しかし、今回はなんと一メートルである。除雪をしなければテントは完全に埋まってしまう。上部ではいったい何メートル積もったのだろう？

この時期にきてこれだけの降雪に見舞われたら、もう登頂は



ダウラギリⅠ峰北面クライミング・ルート図

厳しいだろう。それは皆が理解してはいる。でも、ここまでがっばってきたのだから、最後までやりつくそう。

十月二十六日、最後の望みをかけてBCを後にする。BCからとてつもないラッセル。通常なら四時間程度で上がれるC1に、なんと一日で辿り着かない。翌二十七日、なんとかC1に到着し、午後から雪が降る中、C1上部のラッセルに向かう。「雪の降る中、トレースをつけに上がるなんて普通じゃないよ」。二十八日の朝も降雪が続いている。昨日苦労してつけたトレースも完全に消えた。BCでも再び五〇㌢くらい積もったとのことだ。C1のテントの中で、私はついに登頂の断念を皆に伝えることにした。

「雪崩!!」

前を歩く松本の声にハッと顔を上げると、これまでに見たこともない巨大な雪煙が空一面を覆おうとしている。驚きのあまり声も出ない。

フィックスの支点の所にうずくまると、雪煙が吹きつけ、一〇㍍前にいるはずの松本の姿も見えなくなる。

「全滅か。どうして、最後の最後にきて……」

十一月一日、C2の荷物の回収に上がってBCに下り、長かった登山のすべてが終わるというその最後の日、それまでの二ヵ月間の登山中にも見たこともない大雪崩が北壁から発生したの



BCから見たダウラギリⅠ峰

である。

雪煙の中、しばらく必死にうずくまっているが、その雪煙の後には何も来ない。「松原、感度ありますか？」先にC2に着いている棚橋たちから安否を問う切迫した交信が入ってくる。

雪崩本体はだいぶ上で止まったのであった。雪煙が晴れ、すべての隊員の姿が確認できる。

C2で雪崩に埋められたときですら、死ぬということは考えなかった。しかし今回だけは、生まれて初めて、ほんとうにやられた、と思った。あの信じられない大きさの雪煙を見たとき、それは私には世界の終わりに思えた。

再度の雪崩の恐怖におびえながらも無事C2に上がり、荷物を回収してBCへ下山を開始する。振り仰ぐダウラギリの頂上稜線は、ゴーゴーとすさまじい強風が雪煙を上げて吹き荒れ、その真冬のジェットストリームの到来を感じさせる非情な姿が、私たちの登山の終焉に納得感をもたらしてくれる。

ダウラギリは最後の最後まで私たちに死の恐怖という試練を与え続け、そしてどうやら全員を、生きて帰してくれたのだった。

BCに全隊員が帰還する。すべてが終わった。私はすべての隊員に一人一人手を差し出す。ふだんあまり大げさな感情表現をしない棚橋が、心からうれしそうに、わざわざ手袋をはずして手を差しだしてくれたとき、心の中のもやもやとした思いが

スーッと晴れていき、「ああ、この遠征はいい終わり方をしたな」と思った。

〈記録概要〉

隊の名称　日本山岳会青年部ダウラギリⅠ峰登山隊一九九七

主　催　日本山岳会青年部

活動期間　一九九七年八月下旬～十一月上旬

目　的　ダウラギリⅠ峰北壁「洋梨」ルートからの無酸素登頂

隊の構成　隊長＝松原尚之（32）、副隊長＝棚橋靖（34）
隊員＝松本伸夫（32）、奥田仁一（31）、椎名厚史（27）、川高雄（23）、板谷耕介（22）
BCマネージャー＝松本恵（32）
リエゾンオフィサー＝サッティヤ・ラジャ・ティミルシナ、コック＝カイラ・タマン、キッチンボーイ＝ナルバハドゥール・タマン、メイル・ランナー＝キルキン・シェルパ

行動概要　八月二十一日　日本出発、カトマンズ着
二十八日　カトマンズから陸路でポカラへ
三十　日　ポカラからジョムソムへフライト後、マルファへ
九月三　日　マルファよりキャラバン開始
八　日　BC（四七〇〇㍍）建設
十　日　登山活動開始。五二〇〇㍍まで往復
十五　日　C1（五四四〇㍍）建設
二十　日　C2（六〇〇〇㍍）建設
二十八日　C3（六七〇〇㍍）建設
十月七　日　雪崩のためC2倒壊
十三　日　C2（五九五〇㍍）再建設
十六　日　C4（七二〇〇㍍）建設
十八　日　北西稜上七五五〇㍍地点到達
二十八日　登頂断念決定
十一月一　日　登山活動終了
四　日　BC撤収、ヘリコプターでカトマンズへ

マナスル北東面初登ルートよりの登頂

——明治大学マナスル登山隊一九九七年の記録

三谷統一郎

はじめに

ネパール・ヒマラヤにあるマナスル（八一六三㍍）は、一九五六年に日本山岳会によって、北東面より初登頂された。マナスル氷河から北東稜のナイケコル、ノースコル下を経由して頂上に立った。このルートは現在は通常ルートになっている。

私が初めてマナスルを近くに見たのは、一九七七年春、マナスル三山のひとつであるヒマルチュリ（七八九三㍍）東尾根からだった。初めての海外登山で、東尾根を登って主稜線に立ち、しばらく登って断念したときだ。

そのときは、いつかマナスルの南東壁に挑戦できればと思っていた。そしてその後、エベレスト（サガルマータ）や他の八〇〇〇㍍峰などに登っていたが、クラブの海外登山からは八一年の明治大学エベレスト登山以来、遠ざかっていた。

九五年秋に、カトマンズクラブのパーティーの一員として、通常ルートの七三五〇㍍付近まで登った。若いシェルパと自分とのアタックで、雪のコンディションと下降に自信が持てず、アタックを中止して敗退した。

九六年秋に、K2登山より戻って来た、日本山岳会青年部の山本篤の誘いがあった。「来年（九七年）秋、マナスルを炉辺会でやろう」。今回の海外登山の始まりであった。炉辺会の会員は、故植村会員他、何人かの会員が日本山岳会などの海外登山で、八〇〇〇㍍峰の登頂をしていた。しかし、炉辺会のパーティーとしては、ネパール・ヒマラヤの七〇〇〇㍍峰への初登

頂・初登攀をしていたが、八一年のエベレスト西稜も、九一年のエベレスト（チョモランマ）のカンシュン氷河側からも失敗に終わっていた。

九六年十二月八日、第一回の打ち合わせ会を持ち、北東面の初登ルートより登頂を目指すことになった。

隊の構成として、隊長は三谷統一郎、登攀隊長は山本篤ということで決まった。その後、総隊長を大塚先輩にお願いすることになった。

明治大学山岳部炉辺会のパーティーとして、八〇〇〇㍍峰に確実に登るということを第一の目標とした。雪崩の危険もあり、ロープを固定し、シェルパも荷上げに使用し、アタック時は酸素を使用することにした。そして、山岳部の学生も参加させたいと思っていた。これは次の海外登山を考える上でも、人材育成上必要と思われた。結局、実際の登山活動するのは、OB六名、学生二名、計八名となった。

タクティックス

包囲法を採用し、九月下旬から十月上旬にかけて登頂することにした。

カトマンズよりケルモカルカ（三八〇〇㍍）まではヘリコプターで隊員、隊荷とも輸送する。隊員はケルモカルカで、四〇〇〇㍍台の高所順応を行う。隊荷はケルモカルカよりBCまでの一日行程を、サマ部落のポーターによって行うことにした。

BCより頂上までは四つのキャンプを作ることにした。

登攀隊長により実動三十二日、食料・燃料などの予備は十六日間。隊員八名全員とシェルパ三名が頂上に立つという計画であった。

実際の行動

（一）アプローチ

八月三十一日と九月一日、カトマンズよりロシア製大型ヘリコプター三機で、マナスル東面、ブリガンダキ上流のケルモカルカへ。隊員八名、シェルパ八名（ただし、コック一名、キッチンボーイ一名を含む）と全隊荷は四十五分で到着。グルカから歩けば約十日間ほどかかるキャラバンを省略できたことになる。

九五年秋に来たときは、同じくらいの人数で二機のヘリコプターだったが、予備をかなり用意しているためか、一機増えてしまった。

ケルモカルカはモンスーンが明けていないため、まだ高山植物が咲いている草原だった。

ケルモカルカからBC（五〇〇〇㍍）までは、サマ部落のポーターを雇用した。九五年は日当五百ルピーだったが、今回は九百ルピーになっていた（下山時は千ルピー）。

約百三十五個の荷物はポーターによりBCに集結された。その間、隊員は近くの山の斜面を登ったり、BC予定地を往復して高所順応を行う。BCには先行している国際隊や他の日本隊が入っていた。九月四日、五日に分かれて、高山植物の咲いている道を、隊員はBCに入る。

(2) BC以上

サイドモレーン上に他隊がBCを建設していたため、ナイケピーク側に少し下ったところにBCを建設した。

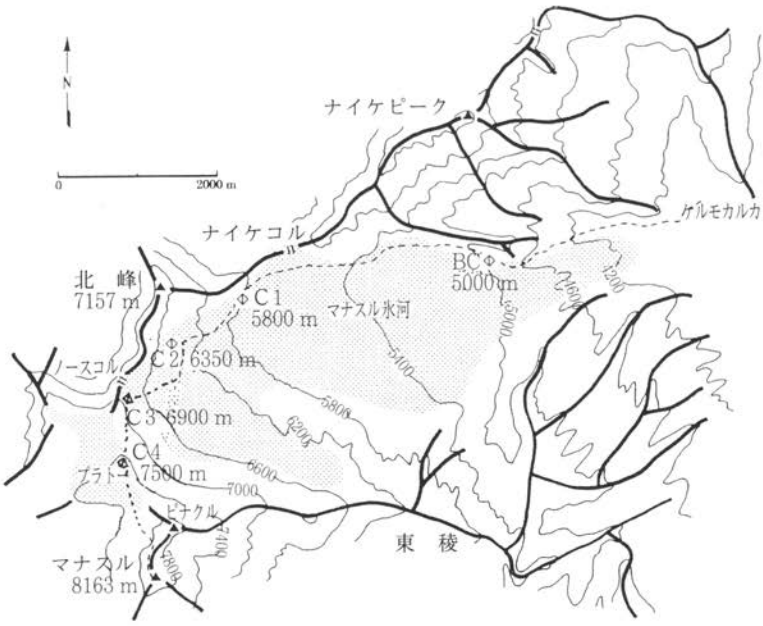
九月八日、BC開きのセレモニーを行う。翌日より行動する予定だったが、あいにく天気が悪く停滞。

十日C1（五八〇〇㍍）に向けて行動開始。しばらくガラガラしたモレーンの尾根を行き、氷がでてくるところでアイゼンをつけ、アンザイレンする。クレバスに注意して、雪原を登っていく。ナイケコルより、C1予定地の黒岩が正面に望める。岩が露出しているところの前後に、ロープ一二〇㍍を固定し、C1予定地とした。雪崩にも安全な良いキャンプサイトである。茶褐色の岩壁を持つラルキャ・ピーク（六四二七㍍）が北に望め、南東方面には、ガネシュ・ヒマール（七四二九㍍）が望める。ここより雪原に出るまでは、雪崩の危険があるアイスフォールを登っていく。ここに四五〇㍍のロープを固定する。

十九日には広い雪原に出たところにC2を建設。大雪が降ったときには、雪崩が怖いキャンプサイトである。我々はそこで一泊か二泊した後は、荷上げのデポキャンプとして使用した。

ここから先はマナスル北峰（七一五七㍍）のすそに沿って、ノースコルに向けて登る。この間にロープ一〇〇㍍ほどを固定。他のパーティは、コル直下にテントを張っていたが、我々はコル上に、テントを上げた。九月二十三日、ノースコルの風がよく抜けているところに、C3（六九〇〇㍍）を建設。クジラの背の方ではなく、上部プラトーの北端に向けて登って行くことにする。二日間で、上部プラトーまで九五〇㍍のロープを固定し、北端の平坦地にでる。ここをC4（七五〇〇㍍）予定地とする。この時点では、プラトー上のラッセルはあまりないようだった。ここより頂上へは、十分届く距離であると思われた。その後、BCに下山し、全員休養を取る。

九月三十日、三日～四日間の休養で第一次アタック隊（三谷、山本、高橋、豊嶋、加藤そしてサーダー・パルテンバ）は、C1に入った。サーダーはBCまでの予定であったが、アタックしたいと言うので、一次アタックに入れることになった。しかし、二十八日、二十九日と雪が降っており、三十日も降雪が続き、C2へのルートに雪崩の危険を感じ、十月一日再度BCに戻った。二日、三日も降雪が続いた。BCより少し下り、サマ部落方面を見下ろすと、斜面も畑も緑色より茶褐色に変わって、秋の気配を感じる。そろそろマナスルとも決着をつけなくてはと思う。



マナスル概念図

マルチュリ（七八九三㍍）が望める。アンナプルナ山群、ダウラギリ山群も望め、振り返ると一条のトレースがずっと望めた。少し登り、風のある最後の頂稜に二本のロープを固定し、九時五十分マナスル頂上（八一六三㍍）に六人が立った。最後の雪稜は左右スッパリ切れ落ち、東には雪庇が出ている。寒気が厳しく、記念撮影もそこそこにコルまで下る。コルで、登頂の報告を無線で入れる。休憩後、各自マイペースで、登って来たトレースに従いC4へ下る。途中、登って来るバスク人四名とスロバキア人三名のパーティーとすれ違う。かなり遅いペースである（その後スロバキア人のひとりは頂上直下のコルにザックだけ残し行方不明になった）。十一時二十分C4に戻り、個人装備を回収し、下山の準備をする。そのうち、第二次アタック隊（隊員三名とシェルパ二名）も、フィクスロープを掘り出しながら、C4に上がって来た。第一次アタック隊は、C3でシェルパの出迎えを受け、お茶など飲み、C1へ下降する。ラッセルがかなりあり、C2下の斜面はフィクスロープを掘りおこしながら下りていく。雪崩の危険を少し感じながら、C1に日没後、十八時三十分到着。あと一日の好天を祈る。

九日、第二次アタック隊は、五時C4を出発し、九時十五分頂上へ。登頂後、C4に戻りテントを撤収する。十三時ごろC3に向けて下る。途中、前日アタックしたスロバキアパーティーのひとりがフィックスロープにつながった状態で死亡している

のを発見した（これで三名中一名死亡、一名行方不明）。天気が悪くなって来て、結局C3泊まりとなる。

十日、第二次アタック隊はC3よりBCに戻り、全員BCに集合した。十一日シェルパ四名でC1を撤収し、BC以上の行動を終えた。BC以上の行動は、約一ヵ月間だった。BCは大雪で、残っていた他隊は全パーティー登山を中止し、下山となる。

帰路

十三日、サマのポーターによりBCを撤収し、秋の景色に変わったケルモカルカに下る。

十四日、隊員と一部シェルパはラルキャ・ラ（五一〇五㍍）を越えて、マナスル西面のマルシャンディに向けて、キャラバン開始。隊荷はシェルパとともにブリガンダキを下っていった。個人的には、登山が終わった後のトレッキングのような、帰路のキャラバンが好きだ。六日間でマナスル東面、北面、西面と眺め、ベシサールへ下った。ここからチャーターしたバスでカトマンズに戻り、登山を終了した。

最後に

今回、明治大学山岳部炉辺会として、八〇〇〇㍍峰を登るという目標を達成できた。これでまた自由な発想で海外登山ができるようになると思う。計画通り隊員八名とシェルパ三名が登頂できたことは好運にも恵まれていた。隊員一名、シェルパ一名の凍傷という事故もあったが、大きな事故がなかったのは幸いであった。

一九五六年の初登頂以来の先人たちの記録、そして隊員各自のヒマラヤ経験で登った山であったと思う。

〈記録概要〉

隊の名称 明治大学マナスル登山隊一九九七

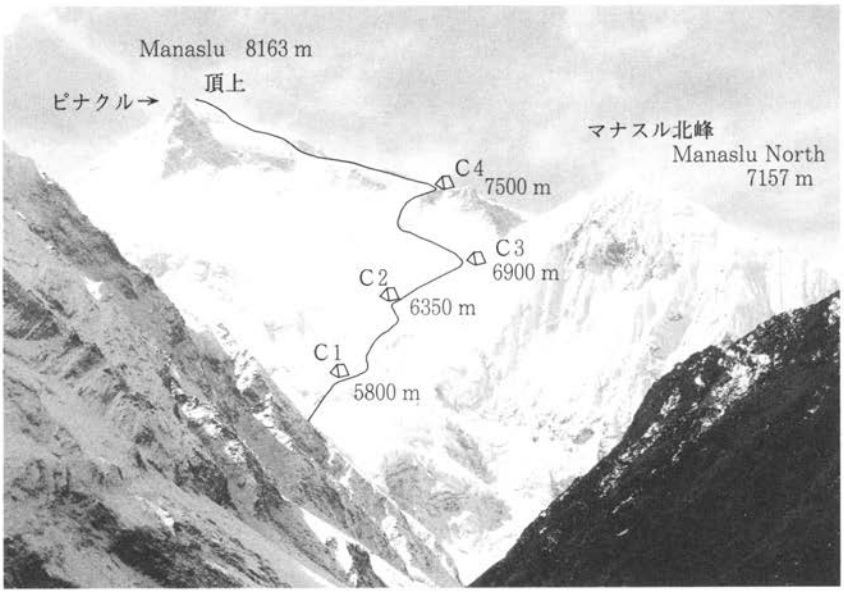
派遣母体 明治大学山岳部炉辺会

活動期間 一九九七年八月二十三日～十月二十九日

目　的 炉辺会のパーティとして八〇〇〇㍍峰・マナスルの登頂

隊の構成 総隊長＝大塚博美（72）、隊長＝三谷統一郎（41）、登攀隊長＝山本篤（34）、隊員＝原田暁之（32）、廣瀬学（30）、高橋和弘（23）、豊嶋匡明（22）、加藤慶信（21）、関裕一（22）
サーダー、パルテンバ（49）、H・A・P五名、コック一名、キッチンボーイ一名

行動概要 八月二十三日、日本発ネパール着。
二十四日～三十日、カトマンズでBCに向けて出発準備。



サムドゥよりラルキャラに向かう途中で見たマナスル北東面

三十一日、九月一日の両日、ヘリコプターでケルモカルカ（三八〇〇㍍）へ。

二日、三日BC予定地（五〇〇〇㍍）へ。隊員各自一回往復。高所順応。

四日隊員二名と一部シェルパがBC入り。

五日隊員六名と残りシェルパがBC入り。

八日BC開きのセレモニーを行う。

十日登山開始。黒岩上C1（五八〇〇㍍）予定地往復。

十四日C1建設。

十九日C2（六三五〇㍍）建設。

二十三日C3（六九〇〇㍍）建設。

三十日BCよりC1へアタックのため出発。

十月一日、降雪のためBCへ下る。

四日第1次アタック隊（隊員五名、サーダー）BCを出発。

五日第2次隊（隊員三名、シェルパ二名）BCを出発。

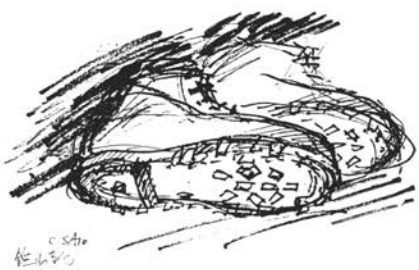
六日頂上プラトーの一角にC4（七五〇〇㍍）建設。

七日視界が悪いため、アタック中止、停滞。

八日第1次アタック隊、C4を五時五分出発し、九時五十分マナスル（八一六三㍍）頂上へ。C4を経

報告

由し、C1まで下る。九日第2次アタック隊C4を五時出発。九時十五分頂上へ。その後C4を撤収し、C3へ下る。
十一日C1を撤収、BCより上での行動を終える。
十三日BCを撤収し、帰路キャラバンを開始。
十五日ラルキャ・ラ（五一〇五㍍）越え、十九日ベシサールに到着。キャラバンを終える。
二十日バスでカトマンズに戻り、総隊長と合流。
十月二十九日最終の隊員帰国。
「ヒマラヤン・ジャーナル」Vol.54（一九九八）



カンチェンジュンガ主峰登頂（北面より）

――一九九八年、日本山岳会青年部カンチェンジュンガ登山隊

谷川太郎

発端

この計画は、一九九七年の日本山岳会青年部の新年会での酒飲み話から始まった。そこには、世界最難関の山ともうたわれるK2を前年に守備よく登った面々が集まっていた。久しぶりに顔を会わせた懐かしさも手伝っておおいに盛り上がり、「もう一丁、でかい奴をやってやろうじゃないか」というところまで一気に加熱した。

数日後、冷静になった頭で再度連絡を取り合ったところ、やはりそれぞれにはそれぞれの事情があり、皆が皆、酒の勢いのまま現実へなだれ込むというわけにはいかず、一人減り二人減りしていき最終的に谷川、赤坂、長久保、椎名の四名が残った。K2の頂から持ち帰った密かな自信と、日増しに肥大していく欲求に抗えない四人である。あるいは、新しい道を模索しながらも、ヒマラヤという舞台こそ自分たちが何事かを成し遂げる可能性があると希望を捨て切れない四人でもあった。

最年長という理由で隊長に祭り上げられた私が大まかな計画を作り、三人に相談しながら骨子を組み立てていった。

計画

私たちがヒマラヤに憧れるのはそのスケールの大きさ故である。どうせならなるべく高い山に登りたい、という単純な意図から次なる標的を世界第三位のカンチェンジュンガに定めた。

ルートは迷わずカンチェンジュンガ氷河からの北面を選んだ。

九三年の秋と九五年の春にネパールとインドのシッキム州との国境線上にあるトゥインズに挑んだ私は、その南隣に傲然と立ちはだかるカンチの巨大な北壁を首が痛くなるほど眺めつづけ、圧倒されながらも「次はこれだ」と一人熱くなっていたのだった。そのときの胸のすくような強烈な記憶から、私にとっては北面こそがカンチでありノーマルルートのある南面はまったく別の山といえた。

細かいラインの選択は現地に行って実際に見て判断するとし、とりあえずは北面の中では比較的に再登者が多く、最も可能性が高いと思われる八二年のラインホルト・メスナーらのルートを登る前提で計画を進めた。

基本計画としてシェルパレスで全員登頂を掲げた。別に崇高な理想を追い求めたわけではないし、頑固なこだわりがあったわけでもない。大学山岳部出身の私たちが国内での普段の山行の延長線上でヒマラヤをとらえると自然とこのような形になる。荷物を背負ってただ歩くことは私たちにとってはそれほど苦になることではないし、資金と時間を負担し合う全員が可能な限り頂上を目指すのはしごく当然のことと思った。いつもどおりの登山こそが私たちにとってもっとも気軽でやりやすく、充実感もあり、かつ成功率も高いのではないかと考えた。

九六年のやはりシェルパレスで臨んだK2登山では酸素の力を有効に活用した登山であったが、そのために計画当初からアタックできる人数は制限され、何名かの力量あるメンバーがサポートに回らざるを得なかった。全員登頂をめざすのであれば、人工酸素の使用は制限する必要がある。荷上げ要員としてのシェルパを雇用しない私たちは、七〇〇〇㍍を超えるハイキャンプへ一本六キロ弱の酸素ボンベを大量に荷上げすることはできない。テント、食糧、燃料などを差し引くと最終キャンプへ持ち上げられる酸素ボンベは一人一本としてもかなり厳しい計算になる。いっそのこと無酸素でやってみようかとも考えたが、隊長である私自身がそこまでの経験もなく、まして八〇〇〇㍍峰登山が二回目、三回目の赤坂らにはやれるともやれないとも判断する材料に欠け、空をつかむようなあまりに冒険的に思えた。結論として、登頂の可能性と安全性を少しでも高めるために、最終キャンプでの睡眠用と、緊急時のための必要最低限の酸素ボンベを用意することにした。酸素の使い方にこだわったのではなく、全員登頂のための戦略に重きをおいた結果である。

ルート上の悪場にロープを固定しながら前進キャンプを順次設営していく、いわゆる包囲法登山を展開するのであれば、四人では足りない。さらに人数の問題以前に私たちは新しい仲間を必要としてもいた。ヒマラヤ遠征の長い時間をかけて醸成される新しい人間関係は、たとえ一回限りの登山のなかであったとしても、とかく閉鎖的でありがちな山岳部育ちの私たちには新鮮で刺激的な魅力があった。



カンチェンジュンガ北面ルート概要

春先頃からつてを頼って四方八方に声をかけてメンバーを募った。自己責任の意識と常識程度の協調性を持ち、その上で、どうしても行きたい、登りたいという情熱があれば、高所登山の経験の有無は問わなかった。逆に有望と思われる人材を口説き落とすようなことはもちろんせず、また、自己責任という点で現役学生の参加は断わった。

そうしたなかで、新たに奥田仁一、山本茂久、広瀬健太、大橋隆平、中村和貞、そして東海支部隊を率いてK2を登ってきたばかりの田辺治の六人の参加が決まり、計十人で登山隊を編成することになった。大学山岳部出身者に限定するつもりはなかったが、私たちの交際範囲の狭小さも手伝ってか結果的にそうなってしまった。

全員登頂が目標ではあるが、力の及ばないものを無理矢理に頂上まで引き上げることはできない。シェルパレス登山であればなおさらである。山本、大橋、中村の三名は初めての高所登山であった。彼らにとってきわめて厳しい登山になるであろうことと、登頂の可能性は高くはない、ありていに言えば非常に難しいということを、参加を決意する前と出発前に念を押した。

K2登頂の実績のある、谷川、赤坂、長久保、椎名に加え、高所クライマーの田辺と、それぞれ七〇〇〇メートル以上での滞在経験があり戦力としてある程度計算できる奥田と広瀬が参加したことによって、登山隊としての総力はぐんと厚みを増し、少々

酷ではあるが一人や二人潰れても大勢に影響はない。

皆で頂上に立ちたいという気持に偽りはなく、不可能なことではないと思った。しかし、ある一線を超えてしまえば友情や組織力などでは補いきれない不条理な世界がそこにはある。八五〇〇メートルの高さを超えた場所での登行がいかに厳しいものか、過去の記録が饒舌に物語っている。実力なき者は情け容赦なく切り捨てる、それもまた安全性を高めるひとつの方法であるというヒマラヤ登山の常識を忘れるわけにはいかなかった。

六月の中旬、かなり迷った末に、青年部担当理事の宇田川芳伸氏、海外・高所担当理事の伊丹紹泰氏に相談し、日本山岳会青年部登山隊としたい旨をお願いした。

日本山岳会という組織が総体として登山隊を出す意志があるかどうか私のような若輩の末端会員にはまったく見当がつかなかったし、そもそも山岳会という名称をそのまま一般的な意味合いで解釈していいものか戸惑いを覚えていた。しかし、登山隊を企画し立ち上げた四人のうち、大学の先輩後輩である私と長久保は別としても、他の二人はそれぞれK2以前ではまったく面識がなく、共有する媒体は日本山岳会以外の何物でもなかった。また、K2登山に際し、あれほど多くの方々に応援され支援してもらいながら、何事もなかったかのように別の組織を作り出かけて行くことは多少気が引ける感があった。

少々面倒な手続きを経なくてはならなくても、さらに、何人かの人たちの手を煩わせることになっても（その方たちには心から感謝し、申しわけなく思っている）、日本山岳会の登山隊とさせてもらうのが自然ではないかと勝手ながら思った。

もちろん私たちなりの計算もあった。日本山岳会と名がつくことによって、大勢の人たちに認知され、声援を受け、誇らしい気持ちで登山に臨むことができるのであれば、仕事を辞めたり、家族の反対を押し切ったりと、何かを犠牲にし少々後ろめたい気持ちを捨てき切れずに参加する者たちにとって、精神的に非常に大きな支えとなってくれる。甘えた発想とも受け取られかねないが、ヒマラヤ登山者が単なる物好きや変わり者以上の評価を受けない現実の世の中にあっては、無視できない。

そしてまた、隊として、あるいは個人としての資金集めや、装備、食糧の調達がより円滑に運ぶであろうことも予想できた。経済力のない若い隊員ばかりで構成する登山隊の隊長の立場から正直に告白すると、そこにこそ日本山岳会の最も大きな存在価値があるとさえ思うこともあった。

そして前記宇田川青年部担当理事の取り計らいにより、七月の理事会で正式に日本山岳会青年部カンチェンジュンガ登山隊として承認を受け、九八年の春に向けて計画をスタートさせることとなった。

実行



C 2～C 3 間の北稜上 7300 m 付近

ヘリコプターで入った最奥の村グンサ（三四〇〇㍍）で季節外れの大雪に見舞われて六日間の停滞をした後、三日間のキャラバンと一日の休養日を経た三月二十九日、四〇センチ近くの積雪が残る厳冬期さながらのベースキャンプ（四九六〇㍍）に到着。二日間の準備と休養ののち、四月一日、カンチェンジュンガ氷河の偵察を皮切りに登山活動を開始した。

ベースキャンプから五六〇〇㍍のC1までは技術的な問題はほとんどなく、ピッケル、アイゼンも必要ないほどであるが、非常に遠い。平坦な氷河歩きがその大部分を占めるため、行き帰りともに時間がかかり、太陽の光がさんさんと照りつける下での単調な荷揚げ作業は、予想はしていたもののやはり楽なものではなかった。しかし、この長い行程を何度も往復することによって、五〇〇〇㍍台の高度順化を確実に獲得し、標高差約一五〇〇㍍を四日間で走破するという少し急ぎ過ぎたBC入りの無理を補うことができた。

四月七日、谷川、赤坂、町田がC1に入り、上部ヘルートを伸ばす。C1上部のアイスフォール帯をトゥインズ側に回り込んで難なく突破し、その先に広がる大雪原をカンチ北壁の取り付きに向かってまっすぐ突き進んでいたとき、先頭を進んでいた谷川がヒドンクレバスを踏み抜き約一〇㍍転落。セカンドを歩いていた赤坂が引きずられながら止め、大事には至らなかったが、以後の活動の気を引き締めるに充分すぎる影響を残した。

三人はそのままルート工作を続け、八、九日の二日間をかけて北壁取り付きにあるアイスビルディングと呼ばれる高さ約一〇〇〇メートルのセラックを突破、翌十日、約六五〇〇メートル地点にC2を建設した。

四月十七日、田辺、広瀬、椎名の三名が、C2入り、その日のうちにロープを九ピッチ伸ばし、北稜下に広がる氷壁に達する。十八日、傾斜五〇度程のガラスのようなきわめて硬い氷壁をじわじわと粘り強く六ピッチ伸ばし、翌十九日にはやや傾斜の緩くなったミックス壁を三ピッチ伸ばしてネパールとインドのシッキム州との国境線をなす北稜上に飛び出した。田辺ら三名はその日のうちにクレバスが複雑に交錯する稜線上を七ピッチ伸ばして七四〇〇メートル地点にC3を建設した。

今シーズンの東ネパールは四月に入ってから奇妙なほどに好天が続き、私たちの登山活動も面白いほど順調に進んだ。心配していたヒマラヤ初見参の三人も、安定した天候のもとで無理のない行動をとることによって、好不調の波はあるものの何とか流れに乗りきり、経験のある他の七名はそれぞれの役割を確実にこなし、頂上への意欲を日ごと募らせていった。

二十七日、田辺、広瀬、椎名の三名はC3より八ピッチの登攀でキャッスル（城塞）と呼ばれる岩場を乗り越す。部分的に難易度五級を含む難しいミックスクライミングであったが、ルートは明瞭で一日で突破することができた。この先はグレートスクリーテラスと呼ばれる第三雪田を西へ進み、頂上ピラミッドの基部（七九〇〇メートル）にアタックキャンプとなるC4を設営する。

計画当初から、このC4への行動がアタックへの試金石になるだろうと考えていた。七四〇〇メートルのC3に宿泊し、約八〇〇〇メートルの高さまで十キロ弱の荷物を運び上げるのである。これは通常の八〇〇〇メートル峰登山のアタック、もしくはそれ以上の厳しさがあると考えられた。しかし、それぐらいのことをこなさなくては八五〇〇メートルのカンチは落とせない、逆にそれができる者であれば頂上までも十分に行けるのではないかと思った。リスクを少しでも減らすための自分たちで設けたハードルである。

何人かの脱落もやむをえないと思っていたが、案に相違して皆みごとにやりぬき、全員登頂への期待はいやがうえにも高まった。そして隊員を一次と二次に五人ずつ振り分けて、登山開始から四十五日目の五月十五日、満を持して第一次アタックを敢行したのだった。

アタック

谷川、赤坂、奥田、広瀬、椎名の五名は三時四十分にC4を出発。前夜、睡眠時に各自毎分〇・五リットルの酸素を吸ったおかげで、熟睡とはいかなくてもそれなりに眠ることができ、朝食もしっかりとることができた。

ヘッドランプの明かりの中を順調に進み、明るくなるころク

ロワールの入り口に着く。このクーロワールに下降時のために下部に二ピッチ、上部に三ピッチのロープを張る。

天候は晴れてはいるが雲も多く、時折雪がちらつき、アタック日和とは言い難い。

クーロワールを抜け出た雪田は平坦なものではなく、さらに所々氷化していて気をゆるめることはできない。思わずロープを出したくなるようなところもあったが、かまわず先を急ぐ。

十時十五分、不安定な雪壁を越えウエストコルに抜ける。このあたりまでくるとさすがに息が苦しく体は鉛のように重いが、予想より早く着き時間的な余裕がある。

長い休憩を取った後、先に着いた谷川、椎名の二人でルート工作をする。初めて見るヤルン氷河側の急峻なミックス壁を弱点を探しながら左上して行く。不安定な雪質とルートファインディングに苦労しながら、疲れた体を引きずるように登る。

十三時三十分、五〇㍍のダイニーマロープ三ピッチで先頭の谷川が頂上に着き、十四時二十分に最後尾の広瀬が登頂。一次アタックの五人全員が頂上に着いた。あたりに雲が点在するものの頭上には青空が広がり、風もなく、穏やかな頂であった。しばし喜びを分かち合い、お決まりの写真撮影を済ませ、十五時に下山にかかる。C4まではおよそ四時間、ヘッドランプが必要になる前に何とかテントに潜り込みたいなどと考えていた。

下山にかかった直後、全隊員中最強の体力を誇った椎名が極度の衰弱状態に陥り、歩行速度が極端に遅くなる。天候は徐々に悪化し、夕暮れも押し迫り、ルートが判然としなくなったため五人でロープを結び合い行動する。

二十二時頃、椎名が意識不明の昏睡状態になり、覚醒を試みるも果たせず、谷川が付き添ってヒバーグする。赤坂以下三名はそのままC4へ向け下山。

翌十六日、三時頃、谷川が椎名の死亡を確認。下山中の三名はルートに迷い、バラバラになり、広瀬のみC4に帰着する。

五時頃、谷川はビバーク地を離れ、赤坂と合流。赤坂はどこかで滑落でもしたのか外傷を負い、激しく消耗していた。奥田は高度障害のため目が見えず、現在地不明のまま一人待機中とトランシーバー交信が入る。

九時三十分、谷川、赤坂とC3から救援に駆けつけた田辺が合流した直後、赤坂が力尽き死亡する。引き続き田辺、広瀬、山本、長久保は奥田の救助に向かう。

十六時、奥田を無事救出。山本、長久保はC3へ、谷川、田辺、奥田、広瀬はC4泊。

五月十九日、凍傷を負った谷川、奥田、広瀬はC1でヘリコプターにピックアップされカトマンズへ。その日の晩の関西空港行きのダイレクトフライトで帰国した。

五月二十三日、留守本部の判断により、BCに残った田辺以下四名とネパール人スタッフもヘリコプターでカトマンズへ下

山、登山活動を打ち切った。

終わりに

事故発生後、現地ネパール人スタッフ、エージェントのコスモトレック、在ネパール日本大使館、留守本部、その他多くの方々のご協力と、迅速で適切な処置により、凍傷を負った三名は登頂後五日間という短時間で帰国し、身体の損傷を最小限に抑えることができた。この場をお借りして感謝申し上げます。

現在隊員どうしで今回の登山について何度か話し合っている。性急な判断を避けるため、事故の原因究明、あるいは登山隊全体の総括についての言及は避けた。もう少し時間をかけて報告書という形でまとめたいと思っている。

〈記録概要〉

隊の名称　日本山岳会青年部カンチェンジュンガ登山隊一九九八

活動期間　一九九八年三月～五月

目　的　カンチェンジュンガ主峰の北面からの登頂

隊の構成　隊長　谷川太郎（30）　副隊長　赤坂謙三（30）
隊員　奥田仁一（31）、田辺治（37）、山本茂久（29）、長久保浩司（29）、広瀬健太（28）、椎名厚史（27）、大橋隆平（24）、中村和貞（24）

行動概要

三月八日　先発隊カトマンズ入り
三月十五日　先発隊バスにてカトマンズ出発
三月二十日　本隊カトマンズ入り
本隊ヘリコペターにてカトマンズ出発タプレジュンで先発隊と合流後、グンサ入り
三月二十九日　BC（四九四〇㍍）建設
四月二日　C1（五六〇〇㍍）建設
四月十日　C2（六五〇〇㍍）建設
四月十九日　C3（七四〇〇㍍）建設
五月五日　C4（七九〇〇㍍）建設
五月十五日　一次アタック隊登頂
五月十九日　レスキューヘリにて四名カトマンズへ下山
凍傷の三名帰国
五月二十三日　BC撤収、ヘリにて全員下山
五月三十一日　残りの五名帰国

報　告

「山と溪谷」七五七号（一九九八年八月）
「岳人」六一四号（一九九八年八月）

［註：本登山は日本山岳会海外登山基金からの一九九八年度助成金を受けて実施された］

憧れのマッキンリー・冬

栗秋正寿

一九九八年二月十三日、私はひとり、暗いカヒルトナ氷河に立っている。短い日照時間で太陽が低いため、冬のカヒルトナBC（二一三〇㍍）は、終日陽が当たらない。快晴、南西の弱風、気温マイナス二〇度。フォレイカー北東壁で起きた雪崩の轟音が、あたりに響きわたる。

昨年に引き続き、二回目となる冬季マッキンリーの山旅。懐かしい思いでマッキンリー南峰（六一九四㍍）を見上げている。

昨年の反省から、登山期間を約二か月間に延長。そのため、食糧、燃料、装備合わせて一〇〇キロの重量となる。頑強な雪ブロックを積み上げ、その内側にテントを張る。純白の雪をコッフェルに掬い、お湯を沸かす。甘い紅茶を飲みながら、耳を澄ます。風の音だけが聞こえる。山に向かって「またここに戻ってきました。昨年同様、風雪やブリザードで行く手を阻むことでしょうが、どうぞお手柔らかにお願いします」と心の中で呟く。大型ザックに腰を下ろし、周囲の景色を堪能しながら、これまでのアラスカ登山を顧みていた。

すべては、夏のマッキンリーから始まった

一九九八年七月二十四日、友人の河原畑健さんとマッキンリー南峰に登頂。あいにくその日は曇り空であった。そのために、アーチディコンズ・タワー（五九九〇㍍）を南峰と間違えて登るというハプニングも起こった。

この初の海外遠征が、いまだに強烈な印象として残っている。氷河を見るのも初めて。アラスカ山脈のスケールの大きさに、

ただただ呆然と立ちすくむだけであった。その遠征が無事に終わった理由として、天候に恵まれたことが上げられる。悪いときでも、北極圏特有の暴風雪にまでならなかった。しかしながら、夏季でさえ国内の冬山の気象条件に匹敵するマッキンリー。冬季のアラスカ山脈は、いったいどのような気象条件になるのか。この時点から、冬のマッキンリーに興味を抱き始めた。

ハンター峰、フォレイカー峰へ

翌年の一九九六年四月、再び私はアラスカに飛んだ。アラスカ山脈にあるハンター峰（四四四三㍍・東稜）フォレイカー峰（五三〇五㍍・南東稜）を登山するためである。過去に二週間の単独縦走は経験しているが、約二か月間に及ぶ長期の単独行はこのときが初めて。不安と興奮が交錯するなか、トコシトナ氷河に降り立った。

四月二十七日の登山日誌にこうある。

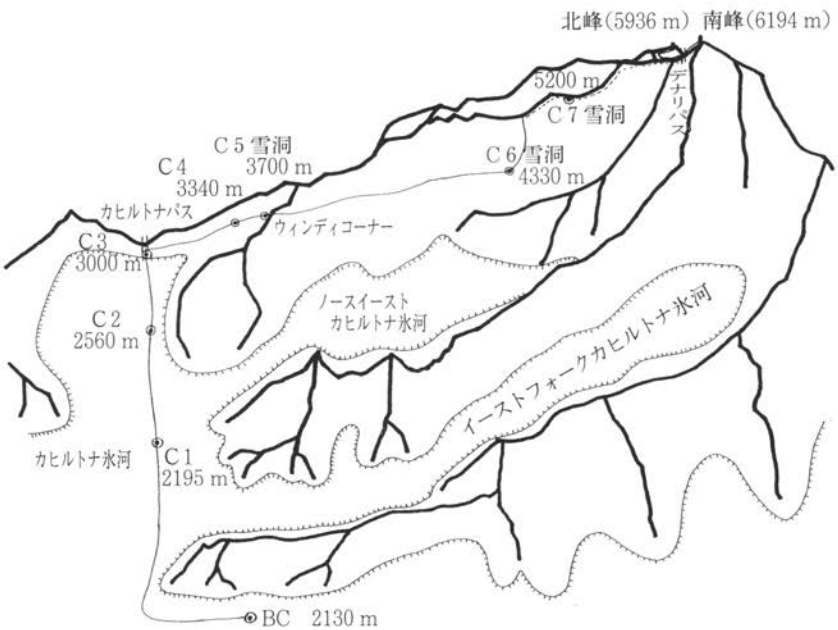
「ベースキャンプで気温マイナス二四度、そして大風雪。今日も停滞を余儀なくされる。小規模な雪崩の音を、テント周辺で頻繁に聞く。時折起きるすさまじい大規模雪崩の轟音で、冬の名残のアラスカ山脈にいることを実感させられる」

両峰とも、頂上までには到達しなかった。要因として天候不順、険悪な雪氷の状態、ルートの変更による日程の遅れ、そして私が持っている単独登攀技術の限界などが挙げられる。しかし、この山旅でも多くのことを学んだ。孤独な時間の過ごし方。引き返すときの勇気。単独登山の厳しさや危険性、逆にその素晴らしさ。そして一番の成果は、四月から六月のアラスカ山脈の気候を経験したことだった。

冬のアラスカ山脈初体験

一九九七年二月、私はマッキンリー、フォレイカー、ハンターに囲まれた絶景の真っ只中に一人でいた。アラスカ山脈の春から夏を知った私は、次第に冬に魅了されていく。冬のマッキンリー登山に向けて、準備を進めていった。冬季の気象について大蔵喜福さん、野口健さんから情報をいただく。また、冬季登山の実態を知るうえで多賀谷治さん、内藤智子さん、八木原圀明さんにお世話になった。そして冬のネパール・ヒマラヤ六〇〇〇㍍峰で高所順応、耐寒訓練を行った。

そのときの山行で得たことは非常に多い。一旦吹雪になると、約一週間は続くこと。冬季のブリザードは、高さ一㍍ほどもの雪面を短時間に削り去ることがある。極度の低温と乾燥のため、スノーブリッジの強度の判断が困難。標高四三〇〇㍍で気温マイナス五五度を記録。同時期の頂上付近は、気温マイナス七〇度程度と容易に予測できる。三十七日間の登山期間中、アタック可能な天候と予測できたのは、二、三日だけである。最高到達点は五二〇〇㍍にとどまった。



マッキンリー山概念図

冬場の気候を初めて体験した私は、さらに冬季の厳しさと美しさにひかれていく。登山中に一日二回、定時に気温、気圧、風速を記録する。記録したデータをグラフ化していたとき、大蔵喜福さんの指摘どおりにブリザードが起きた。その現象とは「気温、気圧が最低値を記録直後に急激に上昇→烈風の吹き始め」というものである。この猛烈な風を私は、標高四三〇〇、四九〇〇メートル両地点で八日間連続して経験した。

このような実体験から、日本気象協会の吉竹顕彰さんの協力で当時の高層天気図を解析した。

・強風の原因は、ほぼブロッキング高気圧の発生に伴って起こる。

・ブロッキング高気圧による強風は、二つのパターンが考えられる。

※Aパターン——アラスカ山脈の西側に低気圧、東側にブロッキング高気圧が発生→南からの強風（吹雪、高温）。

※Bパターン——アラスカ山脈の東側に低気圧、西側にブロッキング高気圧が発生→北からの強風（ブリザード、低温）。

・一回目の冬季登山では、両方のパターンによる強風を経験。

・Aパターンの発生率がBパターンよりも高い。

・ブロッキング高気圧が発生する周期は、二週間から三週間。

・一旦ブロッキング高気圧が発達すると、一週間程度持続。

以上のように、ブロッキング高気圧の発生を予測することが、

かなり重要になってくる。したがって登山中に風向、気温、気圧の変動を把握することは、烈風を回避する有効な方法だといえる。

このような経過を経て、二度目となる冬季マッキンリー登山が始まった。

再びのマッキンリー・冬

二月十五日、午後八時。C1（二二〇〇㍍）。快晴、東北東の弱風、気温マイナス二五度。

テントから顔を出し夜空を見上げる。白夜の夏とは異なる冬のマッキンリー。期待していたオーロラは見えないものの、瞬く星、流星の宝庫となる。

C1へ向けてカヒルトナ氷河を遡行中、雪、氷、岩、空、風、雲、すべてのものの魂を感じる。身体が震えてしまう。

二月二十一日、午後九時。C3（三〇〇〇㍍）。晴れ、東南東の中風、気温マイナス二二度。

C4（三三四〇㍍）へ荷上げをする。行動中、マイナス二五度の寒気と向かい風に悩まされる。十分おきに手足を暖めながらの登高となる。マッキンリーとフォレイカーの上部に雪煙が上がっている。南東の強風が吹いているものと思われる。

世界の中で一番近くにオーロラが見える場所。それが、冬のマッキンリーが持つ魅力のひとつ。凍てついた極北の夜空に、優美なひだを揺らめかせ、その色と形を変幻自在に変えていく。崇高な光のシンフォニー、オーロラ。マッキンリーからのオーロラが最高に美しいのでは。オーロラを見た経験が一度もない私の純粋な願いである。今夜もまだオーロラは現れてこない。

「マッキンリー　オーロラ舞うや　夢うつつ」

二月二十六日、午後七時。C4（三三四〇㍍）。小雪とガス、西南西の中風、気温マイナス三三度。

視界が芳しくなく、停滞四日目となる。C4直上には、三、四本のヒドンクレバスが予想される。ホワイトアウトでは、うかつに行動できない。昨年も一度天気が崩れると五日間は停滞を余儀なくされた。気長に待つのみ。今朝のラジオで、アンカレッジの天候は回復に向かっていることを知る。

入山後、左下の奥歯が痛みだす。温かいものが虫歯に染みるので、酷寒の世界ではさらに辛い。出発前の歯科検診を怠ったことについて反省するが、後悔先に立たず。

三月一日、午後八時。C5（雪洞、三七〇〇㍍）。快晴、東南東の中風、気温マイナス二八度。

天気良好、C6（雪洞、四三〇〇㍍）へ荷上げをする。ウィンディーコーナー（四〇〇〇㍍）直下にある二本のクレバス帯は、昨年とほぼ同位置で難なくクリア。それらの場所に目印の赤旗を残置。そこからC6の間には、無数のクレバス、ヒドンクレバスが存在。往路で一度ヒドンクレバスに片足がはまり、



ウエスト・バットレス 4500 m 地点にて，筆者

肝を冷やす。四〇キロの重荷と膝までのラッセルで四苦八苦。

夕方、雪洞から外の光景に見とれている。夕焼けが美しすぎて、言葉にならない。ハーモニカを取り出し、感慨にふける。「デナリの夕焼け」を自作して奏でる。

「雪洞に　ハーモニカの音　谺する」

三月三日、午後七時。C6（雪洞、四三〇〇㍍）。曇り、風向定まらず、気温マイナス二六度。

無事にC6へ移動。昨日の強風でほとんどのトレースが消失、再び苦しいラッセルとなる。途中からガス、小雪となり、C6手前でブリザードに見舞われる。マッキンリー五〇〇〇㍍以上はガスで見えない。三時間半かけて、深さ二㍍の頑丈な雪洞を掘る。左足の指がひどい霜焼けである。相変わらず、左の奥歯が痛む。

三月五日、午後八時。C6（雪洞、四三〇〇㍍）。晴れ、北の弱風、気温マイナス二六度。

ウエストバットレスを登り、西稜五〇五〇㍍地点へ荷上げをする。アタックにもってこいの天気である。西稜上も風弱し。ウエストバットレスの肩（四九〇〇㍍）直下の氷壁は、セルフビレイをしながらダブルアックスで登る。稜線上を行動中、ワタリガラスのつがいを目撃、これには心底驚く。下降時、埋まっている固定ロープの一部を掘り出し、AC入りに備える。

本日のような天気があと三、四日続けばと、ただただ祈る思

いである。

三月六日、午後十一時。C7（雪洞、五二〇〇㍍）。曇り、南東の中風、気温マイナス三〇度。ついに、AC（C7）までたどり着く。朝のうちは好天であったが、午前九時ごろから頂上付近に雲がかかり始める。上部のガスと激しい気流は、西稜上まで下りてこず、安全に高度を稼ぐ。もし、アタック中にこのような天候急変が起きたら、と考えるとぞっとする。

氷壁下部のクレバス帯に、直径八ミリ　長さ四〇㍍のロープを固定する。そのままデポ地点を通過し、C7に上がる。そこで雪洞が掘れる場所を探し、それからデポ地点へ荷物を取りに下る。無事に荷を取り、C7に戻る。

雪洞掘りにとりかかる。雪、氷が堅く容易でない。おまけに、堅い氷にスコップが跳ね返り、眼鏡の右フレームを折ってしまう。予備の眼鏡をC6に置いてきているため、ガムテープかテーピングテープで補修するしかない。三時間かかって、ようやく雪洞らしくなる。しかし、床の部分の氷が堅く水平に掘れず、床が入口へ傾いた雪洞となる。横に寝ると入口までずれ出して、外にいるのとあまり変わらない。

横になりながら、ヘッドランプで外を照らす。雪洞入口に立てた一本の赤旗が、暗闇の中で静かに揺れていた。

「雪壁に　赤旗の花　風にゆれ」

三月八日、午前七時五十分、C7を出発。晴れ、南の微風、気温マイナス二七度。

入山して二十四日目を迎える。アタック出発時、気になった点がいくつかある。朝焼け、西の空のブロッケン現象、頂上から南側にある薄い雲。どれも、天候悪化の兆しである。デナリパス（五五五〇㍍）へトラバースを開始。途中、三か所もあるヒドンクレバスに気づき、冷や汗をかく。キャンプを出発して一時間四十分でデナリパスを通過。順調なペースである。南の風が次第に強まり、頂上の南側にあった雲のことが気にかかる。

AC（C7）を発ってすでに四時間が経過しようとしていた。標高五九〇〇㍍の大プラトーから南峰へ続く最後の登りにさしかかった。南側からの不気味な風が灰色の雲を運び、頂上付近やその南側だけでなく、マッキンリー北峰までもが白いベールに包まれつつあった。天候悪化と容易に判断できる。進むべきなのか、それとも戻るべきか。このときすでに、もう一人の私との葛藤が始まっていた。「急げ！　山頂はもう目と鼻の先にある」と自身に言い聞かせるが。「落ち着け！　大雪原でガスに巻かれれば、死のビバークを余儀なくされるのを忘れたのか」と別の私が叫んでいる。登高スピード、天候悪化の度合い、また帰路においての視界確保について考えた。

「前進」と決定。あとは時間との闘いである。雪洞掘りの最中に壊した右の眼鏡が曇ったまま凍ってしまう。左目だけで頂稜直下のヒドンクレバス帯をなんとか越える。最後の大きな雪

庇を通過した途端、マッキンリー南峰（六一九四㍍）が視界に飛び込んできた。

午後一時六分、登頂。

ガス、南からの疾風、気温マイナス三七度、気圧四六六㍱という気象条件であった。

頂上での滞在時間、わずか一分。写真を数枚撮りながら、考えていたこと――。

登頂していったい何が変わるというのか。山が変わるわけでもない。それではなぜ、私は今こうして立っているのか。山頂は何も答えてはくれない。もし仮に、何かが少しだけ変化するのであれば、登山者の心の奥深くにあるものであろう。山頂には登山者の夢がある。その頂に立って夢が実現するのと同時にそれが消え、そして新たな夢がまたひとつ生まれる。うれしいという気持ちと悲しいという気持ちが交錯していた。そういう思考を繰り返すことにより、登山者の心が少しずつ深められていくのであろう。

アタックキャンプへ下降しながら、今回の山行で最も印象に残った光景を回想していた。今から一週間前、C5（三七〇〇㍍）の雪洞から眺めた夕焼けの美しかったこと。感慨無量を替え歌にした――。

夕焼けこやけで日が暮れて　デナリに冷たい風が鳴る～
暖かい雪洞の中入ろ　寒気と一緒に入りましょう～

食事が終わった後からは　空には無数の流れ星～
シュラフでガタガタする頃は　天にはゆらゆらオーロラよ～

〈記録概要〉

行動概要

二月十三日　タルキートナ→カヒルトナ氷河BC（二一三〇㍍）
二月十五日　BC→C1（二一九五㍍）
二月十七日　C1→C2（二五六〇㍍）
二月二十日　C2→C3（三〇〇〇㍍）
二月二十二日　C3→C4（三三四〇㍍）
二月二十八日　C4→C5、ウィンディーコーナー手前（雪洞、三七〇〇㍍）
三月三日　C5→C6（雪洞、四三三〇㍍）
三月六日　C6→C7AC（雪洞、五二〇〇㍍）
三月八日　C7（七時五十分）→マッキンリー南峰登頂（六一九四㍍）（十三時六分）→C7（十五時五十分）
三月九日　C7→C6へ下山（雪洞）
三月十一日　C6→C4へ下山
三月十二日　C4→C1へ下山
三月十三日　C1→BC→タルキートナ

報告

「山と溪谷」一九九八年十月号
「岳人」一九九八年十月号

図書紹介

日本山岳会マカルー登山隊一九九五報告書『マカルー東稜』



山と溪谷社・刊
1997年9月20日発行
定価：本体4,000円
A4変形／128ページ

日本山岳会は、一九五六年マナスル初登頂以来、九二年のナムチャ・バルワ初登頂に至るまで、登山史に残るいくつかのビッグクライムを実践し、見事な成果をおさめてきた。そして一九九五年、日本山岳会創立九〇周年記念登山として、世界第五の高峰マカルーに、未踏の東稜から挑んだ。本書はその未知への挑戦を綴った記録である。

マカルー東稜を目にした者は、その美しさと長大さに心奪われ、登山意欲をそそられるようだ。重廣恒夫隊長は、一九八七年一二月、翌年のチョモランマ交差縦走の偵察時に、この尾根を目にし、その様子を次のように記している。「カンシュン川からそそり立つ岩壁に続く細く長く複雑な雪稜は、いくつかの氷のジャンダルムに守られて行く手を遮る。さらにチョモ・レンゾに続く雪田とのコンタクトからは、恐竜のような荒々しい岩稜が八四六三メートルの頂稜を形成している。それはいままで体験したどのルートよりも長大で複雑な様相を見せていた」。また山本宗彦登攀隊長は、彼がまだ大学生の時にマカルー東稜の写真を見て、「八〇〇〇メートルを超える高度の岩稜であれだけの美しさをもったものを知らない」と感じたほどの強烈な印象を受けている。本書にも冒頭に、朝日に映える東稜の全景が掲載されているが、やはりその美しさに息を飲む。

しかし美しいバラには刺がある、ではないが登頂への道程は困難を極め、雪崩、アイスビルディングの崩壊等の危険に満ちた壮絶な登攀であった。さらに登攀以前、ベースキャンプへの行程でも困難が待ち受けていたのである。

先発隊は二月二一日にラサを出発するが、大雪のため道路が閉ざされ、隊員自らが荷物を背負ってBCへのルート偵察に向かう。しかし途中のショウ・ラがどこにあるかすらも判らない状態で、遅々として進まず、三月三〇日に、予定を一〇日以上も遅れてBCに到着、全員がBCに到着したのは四月一一日の

ことであった。このあたりのことは、簡潔、明瞭に記されているが、未知の地域にわずかな手がかりを頼りに、迷いながらも前進していくあたり、アンナプルナⅠ峰に初登頂したフランス隊が、まさに探検しながらベースキャンプに向かったことを彷彿させるものがある。アンナプルナ初登頂から四五年、実に多くの高峰が様々なルートから登られた現在においてなお、このような探検的要素の強い登山が実践されたことに対して、深い羨望の念を抱かずにはいられない。

登山活動については、日々の行動はBCまでと同様簡潔に述べられているが、ルートの核心部であるC3～C5にかけての状況は詳細に記されている。この凄惨極まりないルートは、巻頭のC3～C4間の写真によく表されている。垂直に近いヒマラヤひだを登り切ると、「手の切れようなナイフエッジにキノコ雪が張り出し、さらに稜上にはアイス・モンスターが林立」し、写真で見る分にはきれいだが、実際にその場にいたら尻込みしてしまいそうな稜が続く。このルート工作は困難を極め、一日に一ピッチしか進まない日が四日も続いたという。その後もアイスブロックの崩壊によるルートの破壊等により、登山活動が予定より大きく遅れ、上部岩稜帯からの完登は諦め、迂回ルートへの変更を余儀なくされる。それにしても驚かされるのは、C2～頂上にかけてのルート図の詳細さである。フィックスされたロープの一ピッチ毎に、ルートの状態が細かく記載されており、この図を見ているだけでルートの情景が目に浮かんでくるようだ。その後登山隊は一気にC6、C7を建設し、五月二一日、翌二二日の二度にわたって8名の隊員が登頂している。登頂隊員の個人行動表が、全体の行動表のあとに記載されているが、これを見てさらに驚かされることがある。C6建設前の休養（上部キャンプでの一日）から、アタックそしてBCに帰着するまでのあいだ、一日も休まず行動しているのである。山本登攀隊長と谷川隊員にいたっては、十日間にも及ぶ連続行動である。これまでの激戦で、疲労がたまっているところにきて、いくら最終ステージとはいえ、これだけのハードな日程を完遂するには並大抵の体力、精神力では不可能である。このあたりからも、各隊員の能力の高さ、モチベーションを持続する強靱な精神力がうかがえる。

「私にとってのマカルー」の項では、登頂した隊員、残念ながら登頂のならなかった隊員、それぞれがそれぞれの思いを綴っている。登山活動の報告が非常に客観的に記されているのに対し、こちらのほうは各隊員の事情、感想が直接伝わってきて興味深く読むことができる。

係報告では、装備や食糧といった、いわばどの登山隊でも報告している内容は簡潔に報告されていて読みやすい。一方、地域的、時期的な特色の出る気象については、大変詳しく、かつ専門的に分析、報告がされている。同時期にチョモランマに入

山していた日大隊、チョー・オユーにいた小西浩文・山本正嘉隊から気象記録を得て、周囲の山の気象状況との比較から、マカルー東面の気象の特性を考察している。登山活動の報告のみではないことが、本書の内容を一層濃いものにしている。

この登山は、極地法、シェルパ雇用、フィックスロープ及び酸素器具を使用した、いわゆる重量登山である。最近もてはやされている（？）少人数、無酸素、アルパインスタイルでなければ意味がないと考えている人に、本書を一読していただきたい。登山方法についてこれが絶対というものはなく、未知の長大で複雑な尾根に、知恵と勇気、創造力をふりしぼって長期間にわたって挑む登山も、これからの高所登山の新しい展望として残っているのではないか。このような性質のルートにアルパインスタイルをあてはめること自体、自然ではない。万全を期して挑んだこの隊でさえ、上部を割愛した。つまりマカルー東稜の完登がならなかったのだから、このスタイルに、さらに発展の余地は十分残されていると言ってよい。逆にアルパインスタイル至上主義は、これから高所登山をしていこうという者たちへの門戸を狭めるとともに、今回のような登山を表面的なものだけで判断して否定するという、つまりは高所登山の新たな試みも否定してしまうことになりはしないか。アルパインスタイルとともに、今回のような登山が、高所登山の発展に寄与するものとして、もっと評価されてよいと感じる。それ以上に、ある隊員が記している「今まで生きてきた人生の中で一番嬉しかった。―中略―一つの大きな夢がかない、人生が輝かしく光をはなった」という、この瞬間を感じることが重要なのであって、そこに登山の本質があるのではないか。ともあれ今後のヒマラヤ登山における。一つの展望を示した報告書として、これからヒマラヤに挑む者にとって、大変参考になる一冊である。

（高橋和弘）

山と溪谷社／編
『日本のクラシックルート』



山と溪谷社・刊
1997年11月20日発行
定価：本体2,600円
B5判／190ページ

クラシックルートの楽しさは――人変れば山日々に新し――を実感させてくれることにあるのだろう。人間に人格があるように、山には山格があると謂ったのは深田久弥氏であったが、優れた登攀者の踏跡がクラシックと呼称するにふさわしい

ルートを残してくれた。本書はCLASSICS IN JAPANのアルパインクライミングルート集として一九九七年山と溪谷社から刊行された。

内容は、雑誌「山と溪谷」'93年四月～'94年三月まで連載された日本のクラシックルート12本をベースに新たに5ルートを加えたスペシャルカラーガイド17本を巻頭とし、日本の主要ルートを12のエリア、穂高7、剣7、谷川岳12、北岳2、甲斐駒3、鹿島槍3、錫杖岳2、明星3、黒部丸山東壁3、唐沢岳幕岩4、黒部奥鐘西壁5、八ヶ岳6、合計74本。ルートが持つ歴史的背景や、いまも色褪せない人気ルート、そのエリアを代表する好ルートであることなどを考慮したスタンダードなものであるとしている。また遠藤甲太、福島功夫、保科雅則氏らの執筆によるコラムは、ルートにまつわるエピソードや歴史が誌され、ガイドブックとしてだけでなく読んで楽しく回想を唆るものがあり、多くのカラー写真や簡明なルート図に加え本書の使い方から巻末の日本のアルパインクライミング（エリア一覧）やアルパインルートを楽しむための手引と解説まで、いわば二十世紀日本アルパインクライムの集大成といえるかも知れないが、それにしては物足り無さも感じる。

それは本格的な氷河、氷壁を持たず、厳冬の短い期間のみアルプス並みの擬似体験が可能なわが国の山々にアルパインルートを求める困難さが表現されておらず、ルートガイドの大半が天候の安定する四～五月の残雪期又は夏山に集中し、冬期ルートは僅かに17本でその多くは積雪期以外は全く魅力に欠けるルートとなっていることで明らかなように、初心者向けのガイドブックの範疇を超えるものではないし、編者らも入門書的意図を持ったと思われるからである。

私は日本の岩壁や雪稜におけるクラシックルートの誕生は、かならずしもそれ自体を目標として開拓されたものだけでなく、本来の登山では日本で求められない困難さを意図的に追求するなかで自然発生的に登攀され続けられて残り得た存在である気がするからである。

例えば、SPECIAL COLOR GUIDE [4]の槍ヶ岳北鎌尾根が'20年初登の夏の槍ヶ岳上から独標までの往復や、厳冬期であっても加藤文太郎氏らの山頂から独標まで標高差三百メートル弱や'60年代の極地法による登攀で終わっていたら、いまある程の魅力は誰れも感じはしないであろう。しかしこの北鎌に蘆れた〝風雪のビバーク〟の松濤明氏は、戦後間もない'49年二人きりのパーティで荷上げもサポート隊も持たずにアルパインスタイルで一ヶ月間の予定で末端から槍～穂高～焼岳までの縦走を試み、槍頂上直下といえる北鎌平付近で季節はずれの豪雨とそれに続く大風雪に阻まれてしまっているが、このような登攀が北鎌尾根の存在をより輝しいものとしたことに疑いは無い。

私も'71年十二月二十五日から翌一月五日まで、五人の仲間と

アルパインスタイルで豪雨の大町、葛温泉。北鎌尾根の末端から取付き、途中P3・4のコルを北鎌平にサレワの小型テントを張り、三十日に槍肩の小屋、翌三十一日から元旦には松濤氏が'44年冬期初登攀した滝谷第一尾根を悪天候を冒して攀り風雪の北穂高頂上から奥穂、前穂、明神主稜を最南峯までたどり上高地で本隊と合流したがこれは松濤氏らの登攀の完成をめざすと共にクラブの若手を海外登山に耐え得るレベルまで鍛えることを目標としたものであった。'60年一月の屏風岩中央カンテから北尾根四峯正面甲南ルートを経て前穂高への登攀も、その後の屏風岩東壁雲稜ルートから前穂、奥穂、西穂への厳冬期縦走も滝谷の冬期登攀も、いずれもより長大なルートを得るためクラシックルートを利用した記憶がある。勿論極地法登山が行われていた頃は前穂高北尾根すら一ヶ月を要するルートであり得たし、いまでも剣岳八ッ峰の末端から源治郎尾根や小窓尾根を経て剣岳から早月尾根の下降などは充分長大なルートではあるが日本海から北方稜線を経て剣岳など、よりアルパイン的登山を可能とするルートも多く存在する筈である。

もう一つ本書が気になるのは、谷川岳衝立岩正面雲稜ルートやコップ状壁のフリー化についてふれられているが、壁の乾いた状態でフラットソール、チョークを使用し、プロテクションの多用と滑車等による荷上げを当然とするいわゆるフリークライムと相当の装備を背負い登山靴、アイゼンの着用を想定するアルパインスタイルでは同じルートであっても全く異なった質の登攀となるのであるからこの集に加えるのではなくそれのみで一冊にまとめるべきだと考える。

本書に収録されたクラシックルートの多くは優れた初登攀者達によってハーケン等の人工的補助手段の利用は自制され自然の節理を生かした合理的でナチュラルなルートである。それは麻、綿、革、鉄などを主材料とする旧式の登山用具を貴重品として扱った先蹤者の足跡でもある。いまではナイロン、羽毛、チタン、アルミなどの使用が一般化し軽量化と安全性と快適性の向上があり、岩壁における宇宙航空学の技術者でもあるL・ジャーダイン氏の革命的ギャーであるフレンド・カムロックとその改良品であるエイリアン、キャメロットなど、氷壁、氷瀑でのより機能的なピッケル、アイスバイル、スクリュウハーケンによるピオレトラクションなどが、過去の登攀を比較できぬ程易しく安全なものとし、さらにクラシックルートの宿命として多くのクライマーの反復登攀がもたらすおびただしいハーケン、ボルト類の残置がその価値を著しく低下させている。そうした現代であるからこそグレードやルート図だけを読むのではなく、本書に記されている初登攀年号にも着目し、半世紀もまえに乏しい装備と高みへの情熱だけで開拓されたルートがたとえ小さくてもどんなに輝いていたか想像して欲しいのである。

'31年生まれの私は素足わらじに手づくりの埋込みボルト、麻

ザイルをメインとし米軍放出の茶色のナイロン36㍍といった今では信じられない組合せで当時のディフィカルトヴァリエーションであったコップ状岩壁正面を初登攀し、その冬には神田の古道具屋でみつけた戦前もののフリツ社製10本爪のチビた中古アイゼンをヤスリでノミの刃形に削り、ガタのある耳の部分にはテープを巻いて革靴にくくりつけ、氷化したオーバーハングとその上部のガラスのような壁を攀っている。

このようなおそまつな日本の山の体験だけで中年以降の海外登山、コーカサス、ディフタウのアイスルートや岩稜、パミールやカラコラムの高峰でも技術的困難さでとまどうことはなかった、充分通用するのである。

このルート集におさめられたそれぞれのルートはより厳しい季節に、よりきびしい登り方をすることによってはじめてアルピニズムの探求が可能であるといえる。『山岳92』で図書紹介された会員宮下啓三氏著『日本アルプス――見立ての文化史』が示唆しているように、日本のルートを本場のアルプスやコーカサスに見立てることによって〝それらしく登攀〟し実力をつけてゆける。しかし新しい用具に頼り、安易な登り方でルートをトレースするだけなら日本百名山ならぬ日本百ルートに終わってしまう。

極言すれば季節によってはアルパインルートをハイキングスタイルで登れるのが日本の山岳なのだ。しかし小学生でも登れる富士山も厳冬期には強風と寒気でヒマラヤ等高山の主稜線なみの体験をあたえてくれる程日本の四季は豊かであり、〝山自ずと日々に新し〟である。

アルパインルートは、ルートそのものにあるのではなく登攀者の内部にある。どこを攀ったかではない。どのように登攀したか、するかが課題である。本書をこのように活用することで、ここにしるされた今西錦司、西堀栄三郎、大島亮吉、小谷部全助、松濤明、北条理一氏ら日本登山史上不朽の人々の業績と意図を汲みとることができると思う。

（松本龍雄）

児玉　茂／著
『多雨林と火山――インドネシアの自然と人々――』



古今書院・刊
1997年８月25日発行
定価：本体9,500円
菊判／471ページ

著者は既にカラコルム、テンシャン、ペルーアンデスなど広い領域にわたって豊富な登山活動を行ってきているが、登山と

いう行為の持つ未来への憧れを突き詰めて、もっと広く大きく自然としての山を捉えようとする。

著者は一九八〇年からインドネシアの地域を歩き始め、一九九〇年にはインドネシア語で書いた『ジャワ登山案内』を出版している。この地域の一周と、その集大成としての意味をこめて「インドネシア三六〇」というプロジェクトを考え、一九九二年五月から一年間に亙り赤道直下のスマトラ、ジャワ、スラウェシ、マルク、ヌサトゥンガラを集中的に歩いた。その間、山地多雨林に覆われた山から、山頂部に氷期の痕跡を残す山まで三〇座以上の山々に登っている。まだあまり知られていないこの地域の自然と人の生活を、山登りという手段と豊富な資料を駆使しながら、地域と人に対する深い愛情で描いた優れた著作である。

いわゆる熱帯多雨林の伐採と、それによる深刻な影響が地球的な問題として関心を持たれているが、その中心地域であるインドネシアの各地域に関する情報は依然としてほとんど無い。「肝心の自然が失われていく現状にあっては、具体的な場所の自然、あるいは環境変容の情報が次の行動の指針になる」と考えて著者は現地へ直接入って地域を記述する事を試みた。初めて聞く地名や動植物名が頻出する中で、私が興味を覚えた登山のいくつかを以下に抄出しておく。

「ランテマリオ登山」（スラウェシ島最高峰）登山口の村はカラガン。若い村長に案内してもらってコケの深い細い道を辿り、雄大な展望の頂上に至る。高度計の表示は二〇〇〇㍍も低く標高の再調査が必要のようだ。

「ビナイヤ登山」（セーラム島）このあたりでも今ではめったに弓矢を使う狩猟はしないが、獲物はシカと二種の有袋類、クスクスと「マバヤ」である。「マバヤ」は地上に棲んでいて、口と足は豚、尾はネズミに似たケモノである。三〇〇〇㍍を越える頂上には木生シダが「純林」を作っていた。

「ソプータン登山」（スラウェシ北半島）ソープタン山は今にも噴火しそうな火山である。インドネシアには一三〇近い火山があり、その中の八〇の山が現在活動している。

「タンブシシ登山」（スラウェシ東半島）このあたりは地理的空白部として残っている。鳥を吹矢で射る為の狩場の跡があり人の気配がする。移動耕作民のワナ人に道案内を頼んで山頂を目指した。現在位置も定かでない「地理的空白部」にいることがなんとも落ち着かない。頂上らしき所に着き、タンブシシ東峰（二四二二㍍）の登頂とした。

「ルセール登山」（北部スマトラ最高峰）ルセール山周辺はインドネシア最大の国立公園であり、オランウータンを始め動物達の宝庫で、ウンピョウやトラを今でも見ることが出来る。二等三角点のあるルセール山と、ファン・スティーニス隊が初登頂した最高峰に二週間かかって登った。バンダービルト隊以来

五十三年振りの登頂となる。一緒に登ったのは北スマトラ大学の登山クラブの学生である。

山登りの部分ばかりを紹介したが、山々を取り巻く自然・人・街・村の記述も豊かで楽しく、豊富な資料（十六ページにわたる項目別の参考文献と、詳細をきわめた索引）が付けられており、文献としての価値も高い。また付録として、最新・最良の「インドネシアの主要山岳標高一覧」が載せられている。

（中村太郎）

穂苅三寿雄・穂苅貞雄／著
『槍ケ岳開山　播隆』〔増訂版〕



大修館書店・刊
1997年９月発行
定価：本体3,800円
A5判／315ページ

穂苅三寿雄・貞雄の親子二代にわたる播隆伝記の三冊目である。最初のものは『槍岳開祖　播隆』（穂苅三寿雄）で、昭和三十八年（一九六三）に「槍岳山荘創立四十周年記念」の私家版として関係者にくばられた。その後、「播隆生誕二百年」にあたる昭和五十七年（一九八二）に「新資料を加え、全面的に書き改め」て『槍ケ岳開山　播隆』（穂苅三寿雄・穂苅貞雄）が、大修館書店から、こんどは一般販売として刊行された。そしてこれを母体として、その後に発見、確認された資料を加えてまとめられたのが、今回のものである。これは、以前のものを凌駕する、豊かで多彩な内容をもつものとなった。

もっとも大きい変化は、播隆生年の変更である。従来は天明二年（一七八二）とされていて、各種登山史もそうなっていた。こんどの第三冊では、それが天明六年（一七八六）となった。先ほど「生誕二百年」に刊行と、かっこでくくったのはそのためである。播隆の生年については、すでに前回の本で天明五年説もあることに触れられていたが、同じ播隆研究者の新しい資料発掘によって訂正されることになった。

生年が変更されると、影響はあちこちに及んでくるが、南裔が天明二年に笠ガ岳に登っていて、播隆がちょうどこの年に生まれていることから、「二人の間になにか因縁を思わずにはいられない」という前回の記述も、当然書き改められることになった。

播隆が槍ガ岳に登ったのは文政八年（一八二八）。南裔の笠ガ岳登拝の四十六年後である。モン・ブランが、宗教とは関係なく科学の衣装をまとって初登頂されたのが天明六年（一七八六）、ウィンパーのマッターホルンが慶応元年（一八六五）で

あることを思えば、播隆の槍ガ岳が世界の登山史のなかで占める位置も自ずと明らかになってくる。

こうした偉大な足跡をもつ先人への対応は、長い間、決して満足のゆくものではなかった。代表的な辞（事）典である『広辞苑』や『大辞林』でさえ、ウェストンは見つけられても播隆を探し出すことはできない。そのことは、一冊目の私家版のときから引き続いて「序にかえて」として引用されている柳宗悦の一文が鋭く指摘している。

「日本の登山者で幾人が彼の名を知っているか。いわんや何人がその行跡を解しているのか。／ウェストンの名を称揚して記念碑を建てても、播隆上人にはそれを捧げぬ。／もしウェストンが播隆上人を知っていたら大いなる先駆者として、偉大な賛辞と敬意とを上人に捧げたであろう。ウェストンを認めるのはよいが、播隆上人を忘れる日本人の浅さを想う。」

穂苅三寿雄・貞雄両氏による播隆の生涯追跡は、この三冊目でいよいよ円熟してきたといえる。特に、穂苅貞雄氏の執念とでも呼べるような資料探索とその経過は、今回およそ五十ページの《増補》として加えられた。愛知、岐阜の各地に播隆の足跡を尋ね歩き、この念仏僧の姿、形が具体的になってくるさまは、適切な比較ではないかもしれないが、推理小説を読むよりもはるかに興味をつないでくれる。たとえ前回の本を購入済みであっても、その重要な内容の改変から、今回のものを避けて通ることはできない。

いまでは新田次郎の小説もあるし、折りにふれてその名が聞かれるから一時よりはましかもしれないが、それでも、播隆って、だれ？　という人のほうがまだまだ多い。そしてなにがしかの知識を持っている人でも、小説から仕入れた程度の範囲を出ない。穂苅貞雄氏はこの《増補》で、小説と史実の違いを具体的に説きあかしてくれる。歴史小説は虚実皮膜の間を書くものであって、すべてが事実ではないのに、百科事典までもが小説の虚の部分を事実としてとりあげているという現実は、著者の言うように「大変に憂慮すべきこと」である。多勢に無勢でかなわないことになるのだろうが、その違いを本書ではっきりとさせたのはよかった。月刊「寺と生活」（青樹舎発行）という雑誌の一九九八年七月号に播隆の特集があって、穂苅貞雄氏が対談で、こうした現象や播隆との関わりについて、さらにわかりやすく語っている。興味のある方の一読をおすすめする。また前回の本でおなじみだが、往昔の上高地の様子や、播隆の名がひろまるにつれて、ニセ者が現れて阿弥陀堂建立の資金をだまし取っていたなどという、いつの世にも変わらない話もあって、興味はつきない。

播隆は信仰の世界から笠ガ岳や槍ガ岳に登り、仏像を安置した。しかし、穂高岳の一角にも登っていたり、槍ガ岳から飛騨沢を下ったり、天保五年（一八三四）には五十三日も槍ガ岳で

参籠し、その間に笠ガ岳まで往復したりしている。こうした行動から、穂苅氏は、播隆のなかに信仰だけではなく近代的な探検・登山の精神をも汲み取っているようである。その視点は正しいと思えるが、信仰とはなんの縁もなく、群れをなして山に押し寄せる近年の風潮を見ていると、播隆の信仰の世界には、私たちが忘れ、置き去りにしてきたものがあり、そこから読み取らなくてはならないものがあることを教えられる。

今回の本には、播隆上人筆の「鎗ケ嶽繪圖」が色刷りの付録としてついているのはすばらしい。このことによって代表されるように、この三冊目は編集・造本の面でも上質で、近来の山岳図書のなかでの白眉といえる。

「世は滔々とした欧米化時代である。明治鹿鳴館時代も顔まけであろう。創刊される大雑誌の誌名はすべて欧米語（まがい）であり、山もヒマラヤやアルプスでなければ、山ではないかの如くである。そんな時に、播隆という坊さんの名前を出してみたところで、はたしてどれほどの人の耳目をひくであろうか。「開山」などという言葉になじみをもつ人がどれほどいるであろうか。こういう世相のなかで『播隆』のような本を書く人がい、またそれを出版する書店のあることは、激流に流されない篤実な人々がいることを改めて教えられて、素直に喜びたい」

これは日本山岳会の会報四六二号（一九八三・十二月）にのっている、前回の『播隆』の紹介である。これを書いたのは実は私自身なので、古証文をもちだすようでいささか気がひけるのだが、この一文を覚えていた「山岳」の編集担当氏が、三冊目もと、私にまた紹介のお鉢がまわってきたという次第。しかし、十五年前のこの二冊目の紹介文に改めて書き加える必要のあることは、いまでも本質的にはないと思う。このような内容のものの執筆と出版に情熱をささげる人のいることは、私たちのこころを明るくする。

（大森久雄）

ジョン・クラカワー著／海津正彦／訳
『空へ』



文藝春秋・刊
1997年10月10日発行
定価：本体1,762円
四六判／396ページ

一九九六年五月、「難波さんエヴェレスト登頂」という朗報がもたらされた直後、今度は下山中に遭難という知らせが飛び込んできたのはまだ記憶に新しい。当時の新聞や山岳雑誌による大まかな経緯は読んでいたが、その時の登頂者であり、生還したひとりが本を書き、訳本が出たというのを知ったときは、

是非この本は読まなければと思った。が、公私共に忙しくなってきた昨年末から三月までは気持ちにゆとりがなく、いずれゆっくり読もうと思いつつ、四月に入ってようやくこの本を手にすることができた。

書かれている内容は盛り沢山であり、複雑で、結局は夏に決まっていたカラコルム遠征に持参してゆっくり読み直すことにした。

痛ましい遭難の記録、悲劇の登山の実態は、現実の遠征の最中にベースキャンプで読むには気の重くなる内容であった。

ロブ・ホールほどの実績あるガイドに率いられた隊員達が、何故このような悲惨な事故に巻き込まれてしまったのか、山登りをする者としては何処にその要因が在ったのかを知っておく必要がある、そう思って暗くなる気持ちを冷静に、客観的な見方に変えて、読み改めてみた。

世界一の高度を誇るエヴェレストに想いを寄せる人は数多いだろう。この本の著者もその一人だったというが、八八四八㍍という高度は、たとえ酸素を吸ったとしても想像を絶する厳しさに違いない。登頂には人並み以上の体力と、ある程度の技術も持ち合わせ、高所登山の体験も多少なければ、かつ高度順化を順調にこなして、しかも天候にも恵まれなければ果たせるものではないだろう。

努力と経験で技術や高度順化はどうにかなるとしても、人間の力の及ばないところの自然現象、天候だけはどうにもならない。登山事故の中で圧倒的に多いのは下山中の事故というが、登りに体力を使い果たすと、どうしても下山の足がおぼつかなくなってしまう。そこに天候の急変となると事態は最悪を覚悟しなければならない。

九六年の五月十日、ロブ・ホール隊に限らずこの日はいろいろな要素が複合して、総てが悪い方向に進んでしまったらしい。それにしてもこの日の登山隊の行動には理解できないことが多くある。著者も指摘しているように、まず登山時間の短縮のため、シェルパを先行させてルート上の困難な箇所に固定ロープを張るという当初の計画がなぜ実行されなかったのか、ロブ・ホール隊長は顧客の中に登山の基本技術の怪しいものがいると分かっていながらである。

次は引き返すべき時間の設定である。五月十日登頂日にロブ・ホールは引き返すべき時刻を隊員に指示しなかったという。酸素の助けを借りて登山をする者にとって、その酸素の有効時間内に行動することが鉄則である。もしも、その酸素の有効時間内に行動が終了しない場合は、それはほとんど死に限りなく近づく事になる。そして気になったのは隊員達の歩行スピードの違いである。「全員が南東稜の稜上に出るまでは、一〇〇㍍以内に固まっていくこと。これは非常に大切だ。暗闇の中を上るのだから、ガイドたちの目の届く範囲にいてもらいたい」これ

は出発の前日にロブ・ホールが隊員たちを集めて言った言葉だというが、隊員たちの歩くスピードには相当の開きがあった。一団で登ることができればそれは理想だが、八〇〇〇㍍以上の高度で人を待つために一〇分、二〇分ならともかく、一時間以上を費やすということはどうだろう。骨を砕くような寒気のなかで貴重な時間と酸素の浪費、そのうえ隊員の体力をも奪うことになる。ガイドとシェルパを二分し、隊員も二隊に分けたほうが効率的だったろうにと思う。しかし、これも事故が起こった後で第三者が下す勝手な推論かもしれない。

著者ジョン・クラカワーはネパールから帰国して五週間後、『アウトサイド』誌に原稿を渡し、同誌の九月号に記事が掲載された。記事の執筆にあたっては、状況が許すかぎり正確に記したというが、締切り期限やスペースの関係から必要な素材を省かざるを得ず、内容にも何点か、誤りが見つかった。あの悲劇をきちんと述べるには、それはあまりにも短すぎた。あのエヴェレスト体験に、彼の人生は根底から揺さぶられ、攪乱と苦悩の只中にあって、あえて自分の気持ちをさらけ出すことによって得るものもあるだろうと、あの出来事をあますところなく、行数制限を受けることなく、書き残しておく必要に迫られて本書は生まれたという。その悲痛な努力のお陰で私たちは今、九六年の五月、エヴェレスト山頂を目指して登っていった人々の様子、還えらなかった人々の状況もつぶさに伺い知ることができる。八〇〇〇㍍以上の高所で繰り広げられるその凄惨なドラマは私たちの想像をはるかに越えるものであった。

低酸素症、酸素の稀薄な状態というのは、それを経験した人でなければ説明だけではなかなか分かりにくいと思う。思考能力も行動力も著しく減退してしまう。その上に疲労が加わったらもう生命の存在なぞは危ういものだ、

夜の闇が訪れ、益々激しくなるブリザードの中を、酸素も切れ、視界も数メートル以下となって、難儀しながらサウスコル近くまで降りてきた一行の描写は実に胸迫るものがある。その集団よりほんの十五分から二〇分くらいまえに著者ジョン・クラカワーはテントに辿り着いていたのだ。ほんの十数分の差がこれだけの重大な違いとなってしまう。そして、まだ帰らぬ仲間に向けての救出のための努力、自然のおそろしさ、山のおそろしさ、嵐はそんな人間たちを容赦なくたたきつけている。

一夜明けて、いまだ南峰から動こうとしないロブ・ホール。酸素もなく、着の身着のままで極寒の八七五〇メートルに生きていただけでもそれは驚くべきことだが、彼の友人たちの必死の呼び掛けも空しく、ロブ・ホールはその場からついに立ち上がることはなかった。これ程過酷な自然状況の中でも、必死に生きようとする人間の姿、奇跡的なベック・ウェザーズの生還、と、ジョン・クラカワーの筆は私たちに現状をありありと再現してみせる。実に臨場感溢れる描写である。

著者は終章で「エヴェレストの山上で犯した数々の過ちを分析することは、まったくの無駄というわけではないし、今後に予想される死を若干減らすことにもなると考えられる。しかし、一九九六年におきたあの悲劇的な出来事を微に入り細をうがって穿鑿すれば、将来の死を実際に減らせる――などと信じたら、それは希望的に過ぎる。――中略――真実を明かせば、エヴェレスト登山はこれまでずっとつねにとてつもなく危険な行為だったし、それは今後も決して変わらないだろう。ヒマラヤの初心者がガイド連れで登っても、世界レベルのクライマー同志がパートナーを組んで登っても、それは変わらない。一九九六年にガイド連れであの山に登っていた仲間たちの場合、ほとんどの者たちが、自分たちが直面している危険の大きさ――つまり、七五〇〇メートル以上の高度では、自分たちの生命がどれほどきわどいところで保たれているか正しく理解していなかった。いったん〈死の地帯〉まで登ったら、何か問題が起きても――そして、遅かれ早かれ必ず問題は起きるのだが、そのときは世界最強のガイドも無力で、顧客の生命を救うことはできないかもしれないのだと言う事を、エヴェレストの夢に取り付かれた英雄志願者たちは、しっかりと胸に刻みつけておく必要がある」ながい引用になったが、このように述べ、この様な事故の再発を防ぐための有効手段はないと述べている。一部理解しにくいところもあるが、登山という行為が安全なものでなく、常に危険と隣り合わせであり、それが高所登山の場合は判断力の鈍った低酸素症の頭で生死を分かつ重大決定を下さなければならない場面が非常に多いという事は納得できる。

登山の中で一番厄介なのは天候を読むことなのだ。ひとたび荒れ始めたら、どんな優秀なクライマーでも、その猛威に太刀打ちできるものではない。天候の急変を早めに察知し、行動を打切るか、最初から行動を控えるか、とにかく人間が自然に勝てるものではない。私たちのカラコルム遠征中も、今年は天候不順で、GI峰、GVI峰、ブロードピーク、とかなりの遭難者が出てしまった。そして私たちシルバー・タートル隊もGII峰の二次アタックは、悪天候に阻まれて、登頂を断念せざるを得なかった。

ジョン・クラカワーは自分の記憶を丹念に掘り起こし、辛抱強くインタビューを重ね、資料を集めて、ここに遠征隊の全容を描き出してくれた。この本により最近のエヴェレスト事情、営業遠征隊の様子もわかり、登山を志す者も、登山に関係ない人もこの本から得るものは多いだろう。そして日本語で手軽に読めるよう翻訳をしてくださった訳者にも感謝したい。

（渡邉玉枝）

フリッチョフ・ナンセン／著　太田晶秀／訳

『フラム号　北極海横断記―北の果て―』



ニュートンプレス・刊
1998年１月30日発行
定価：本体8,500円
A4判／418ページ

本書はFridtjof Nansen：Farthest North. 1897（英語版）の完全訳である。ノルウェー版の原名はFram over Polhavet. 1897で、翻訳をされた太田博士によれば、一〇〇年前のノルウェー語には、現在用いられている正字法が全体には使われていないため、現代のノルウェー語を理解するようなわけにはいかず、英語版を主原本としたということである。しかし、英文では例えば「スキー」という語は当時用いられておらず、「スキー」も「カンジキ」も英語では「Snow-shoes」と記述されており、用語の意味が文脈から判断出来ない場合はノルウェー版を参照されたとのことである。太田博士は地質学者で、一九七二年以降ノルウェー極地研究所に勤めておられ、スバルバール諸島の地質の権威でもある。その経歴は本書の翻訳に生かされ、例えば一〇〇年前の船乗りの言葉遣いや目上の人への丁寧語などはお年寄りの友人などに教示を受けたそうである。この本は単なる翻訳でなく、当時のノルウェーそのものの紹介という一面を持っているのである。

フリッチョフ・ナンセンの北極海横断探検（一八九三年～一八九六年）はこれまでに多くの人々によって（例えば加納一郎、一九八六）我が国に紹介されている。この良く知られた探検記の内容をここで改めて詳しく紹介するまでもあるまい。当時にあっては最も科学的合理性を持つ発想と果敢な探検精神の発露によって成功を収めたナンセンの探検は今でも、世界中の人々に変わらぬ大きな影響を与えているといえよう。

この探検が発想された当時の、北極探検に関る背景およびその中での探検実現へ準備の道筋を理解するには、太田博士の完全訳である本書をもって、初めて可能になったと言えるだろう。この本の読み方があるとすれば、今の時代では想像もつかない長期間（三年）を要し、想像を絶する過酷な自然下での探検の日々を読み進む前に、ナンセンがこの計画を実現させるための諸準備をいかに進めていったかを理解しておく事だと思う。

この北極海探検が成功した理由は、北極海を東から西に横断する海流の存在を確信した科学的洞察力と海氷の力に打ち勝つ船を建造し得た、経験、知識、自国の技術への信頼感をナンセ

ンが持っていたからである。しかし当時、ナンセンの計画に対して多くの批判や反対があったのも事実であり、それに彼がどう対処したかも興味深い。その上で、この大冊を探検の進行に合わせた時間で読み進むならば、この探検の時空間スケールを実感できるに違いない。

ナンセンがこの探検の構想を如何にして抱いたかについて第一章、序章の中で次のように述べている。ナンセンの探検に先立つこと十数年前、アメリカのデ・ロング大尉に率いられた、ジャネット号探検隊はベーリング海から北極海に突入し、ベーリング海峡からわずかに離れたウランゲル島の南東で船は氷に閉じ込められ、二年後の一八八一年六月一二日に新シベリア島の北東地点で浸水、沈没した。そして三年後にジャネット号のものと思われる漂流物が、ベーリング海の反対側にある、はるか離れたグリーンランドの南西海岸で発見されたのである。ノルウェーの気象学者、モーン教授は一八九四年に催された科学講演会で、この事実から北極海を真っすぐ横断する海流の存在を示唆し、しかも、不可能な事と断った上であるが、もし氷の圧力に耐える船があり、数年間の漂流に耐えるだけの準備が可能ならば、船を氷海に閉じ込めさせることによって、シベリアの北極海から北極点に向かう事が出来ようと述べたのである。偶然、このモーン教授の考えを新聞で読んだナンセンは、これこそが北極点に達する可能な方法であると直感したと記している。ナンセンはしかし、直感にのみ頼ったわけではない。北極海の海流に関して精緻な検討と考察を行っている。当時は北極点付近には陸地が存在するという考えもあった時代である。

ナンセンの考察を要約すると…

①海流について—ジャネット号の漂流物がグリーンランドに漂着したのは事実であるが、他にもその可能性を示す事実がある。その一つはアラスカのイヌイット人の使う〝投げ棒〟がグリーンランドで見つかったこと、またグリーンランドの海岸に漂着する流木にシベリア産の材木が含まれること、グリーンランドの海氷上で採取した泥に含まれる珪藻類がベーリング海付近で採集された種と一致することなどは〝北極点とフランツ・ヨセフ諸島の間のどこかの地点を通って、シベリアの北極海からグリーンランド東岸へ向かう海流がある〟という結論を導く。

②氷に閉じ込められての漂流について—グリーンランド東岸に向かう海流があるとすれば、海氷が緩む時期を選んで、シベリアの北極海の開氷域を出来るだけ北に進み、あとは海氷が船を締めつけるのを待つのである。氷の圧力が船を持ち上げた後、海氷上で固定すれば、船は居住棟となり、科学観測基地になる。北極海の冬の気候は周辺大陸より温かく、人の生存が不可能なほど厳しくはない。

③壊血病について—当時の極地探検隊の苦しんだ困難の一つであった。新鮮な食料が摂れないとこの病気が必ず現れることが

知られていた。ナンセンは多様な種類の缶詰食料を用意することによって、白熊やアザラシの狩猟によって、また海の幸から新鮮な食料を摂取することによって、この病気を予防出来ると考えた。

いくつかの仮定を必要とするが、ジャネット号の漂流物は一日3.2kmの速さで北極海を横断したと推定出来た。したがって、五年間に必要な食料と石炭を積み込めるだけの大きさの船があればこの探検は可能である。

丈夫な船とは氷の圧力に耐え得る構造を持つということであり、氷に挟まれた時には船が自然に氷の上に押し上げるような曲線を持つ舷側であれば可能である。こうした技術的な発想は海氷に閉じ込められた経験のある者には容易なことだとナンセンは述べている。しかし、こうした発想も当時の北極海探検の権威者達の多くに容易に受け入れられたわけではない。

ナンセンの計画は彼自身が述べているようにいくらかの無謀さは残っていたが、ノルウェー政府とノルウェー国王から力強い支援を受けることが出来た。一八九〇年六月、この探検がノルウェー国の事業であること、という条件のもとに計画に要する費用の三分二の援助が決定された。

そしてこの探検の最も重要な準備である、探検船の建造が始まった。設計は造船技師のコリン・アーチャー氏に依頼された。彼はナンセンの注文を完全に理解し、探検が必要とした要件を完全に満たした船として仕上げた。探検の成功の大部分は彼の功績であるとナンセンは述べている。

オスロにあるフラム号博物館にはその実物が保存されており、その船内に入ることも出来る。船には素人である筆者にも、それが如何に機能的な造りであることは容易に理解出来る。

「フラム（前進）号」と命名された探検船の特徴は——

①船の横断面は海氷の圧力に対して抵抗が生じない曲線形状を持ち、船体自体も頑丈な耐氷構造となっている。

②スクリュー、舵の二つの突起物は船体の穴を通って甲板に引き揚げられ、格納、修理、交換が容易に出来るようになっている。一般に船尾は氷海中では船のアキレス腱であり、しばしば舵を壊されるので、舵は深く下げ、浮氷が船尾にぶつかっても氷の圧力は船体で受け、舵に被害が及ばない。

船は三本マストの前後帆スクーナー船で、二二〇馬力の蒸気機関を装備し、荷が軽い時は六～七ノットの速度がだせる。船の大きさは、甲板の長さが38・4メートル、最大幅で10・8メートル、排水量は八〇〇トンあり、ボイラーを満水にした時の重さで約四二〇トン、したがってその差三八〇トンが積載量である。これは五年分以上の隊員および犬の食料、装備の他、全速力で四ヶ月機関を動かせるだけの石炭を積むことができる。

船には発電機が備えられ、動力源としては船の機関の他に、風力や人力によっても動かせるようになっていた。人力動力は

運動不足に役立つはずであった。

フリッチョフ・ナンセン探検隊長、スヴェルドルップ船長以下一二名の探検隊はノルウェー最北の漁港ヴァルデを一八九三年七月二十一日に離れ、探検行が始まった。同年八月の初め、ノヴァヤ・ゼムリア島付近の大陸岸にあるホヴァロバでロシア人が用意してくれた犬を受け取り、さらに東への航海を進めた。

九月十日にチェルスキー岬を越え、ラフテフ海に入った。この本の付図にはセベルナヤ・ゼムリヤ島が描かれていない。当時はまだ未発見だったのである。この島には、今ではエニセイ河の河口にあるディクソンからヘリコプターで十時間程で行くことができる。

九月末にフラム号は海氷に閉じ込められ、一八九六年八月までの三年間、海氷に閉じ込められての西への漂流が始まった。

フラム号はナンセンの予想通りフランツ・ヨセフ諸島やスピッツベルゲン島（スバルバール諸島）の北を通る海流に乗ったが、現在の知識ではシベリア沿岸をもう少し西に進んだ地点で氷に閉じ込められれば、北極点を通過する海流に乗ることができたかもしれない。

北極海の海流が詳しく明らかになったのは第二次大戦以降である。ナンセンの北極海探検の方法論は五〇年後のT3などの氷島漂流観測に生かされた。

一八九五年三月に北緯八四度〇五分の地点からナンセンはヨハンセンとともに犬ソリで北極点に向かった。二五日間の犬ソリ旅行によって、緯度にして二度ほど北極点に近づいた八六度一三分の地点で北進を断念した。帰途も困難な旅が続き、越冬した後にフランツ・ヨセフ諸島の南で英国の探検隊と出会い、彼らを迎えに来た船で無事ノルウェーに帰還した。フラム号もその六日後に本国に帰着している。

引用文献

加納一郎：フラム号漂流記、加納一郎著作集Ⅱ、一九八六、教育社

（渡辺興亜）

バードソル、エモンズ、ムーア、ヤング／著
山本健一郎／訳
『ミニヤコンカ初登頂』



ナカニシヤ出版・刊
1998年3月1日発行
定価：本体2,500円
四六判／258ページ

私は一九八〇年代半ばチベット通いを続けていた。四川省成都を離陸してラサへ向かう機窓から何回も雄大なミニヤ・コンカを眺めた。

純白な雪に包まれたピラミダルな山頂を持つこの山は、周囲の衛星峰を睥睨するかのように、一際高く聳え立っており、その美しさと厳しさを兼ね備えた山姿は、一瞬息が止まるような迫力で私の心を捉えて離さなかった。そして、八〇年代後半二度ミニヤ・コンカに接近した。さらに九〇年代に入り未知を求めて東面・北東稜からの初登攀を目指して二度この山と対峙した。二度目は若き友を失う結果となった。懐の深い大きな山であった。それはまさしく「山々の王」の名に相応しい存在であった。

さて、本書は戦前の一九三二年秋たった四人で、この名峰ミニヤ・コンカ（七五五六㍍）を西面・北西稜から初登頂を果したアメリカ隊の記録である。初登頂の三年後に出版されたものであるが、実に六十数年を経て日本語版が出版された。もっとも訳者の山本健一郎さんのお話しでは、訳出は随分前に終わっていたが諸般の事情で、この時期に陽の目を見たとのことである。日本語版がその時点で出版されていたらと残念に思うのは、私だけではあるまい。

この初登頂がヒマラヤ登山史上どのような位置を占めているかは、ミニヤ・コンカが登られるまでの七千㍍級の山の初登頂を見れば明らかである。即ち、一九〇七年ロングスタッフによってトリスルが人類初の七千㍍峰として登頂された後、十一年にケラスによるパウフンリ、十三年にイタリア隊によるクン、二十八年にレーニン、三十年にシュナイダーやマルセル・クルツらによるジョンソン・ピーク、三十一年にスマイスやシプトンによるカメットそしてハン・テンリ、三十二年のラキオト・ピークとミニヤ・コンカである。二十五年間にわずかにこれだけしかないのである。そこに登場する岳人はヒマラヤ登山史上に燦然と輝くキラ星である。

高さにおいてカメットに少々劣るものの、高さと山容とシェルパを使っていないことなどを考慮すれば、この登攀は当時としては随一と言って過言ではないほどの快挙であり、それをたっ

た四人でなし遂げたのである。

それにしても、一九三二年当時の中国の情勢といえば、国民党と共産党の戦いに加えて、日本軍の満州進攻もあり騒然とした時代であった筈だ。事実、この登山隊の四人が上海は揚子江の発動機船・宜昌号上でミニヤ・コンカの打ち合わせをしていたすぐ後には、国民党軍の蒋介石みずから五十万の大軍を率いて四回目の共産党軍包囲討伐に乗り出した時期である。このように中国全土が戦場になっている時に、よくも奥地への旅行許可が出たものだと、現代の私には当時の事情がよく分からない。しかし、考えてみれば姿・形と背景・スケールは違うが、現在我々が通うヒマラヤにも似たような現象はある。インドとパキスタンがカシミール問題で争っているシアチェン氷河のすぐ近くの、ガッシャーブルム峰へのアプローチ・マーチにはパキスタン軍が駐屯しているが、その横を通って行く登山隊にも登山許可が交付されているのである。そう思えば多少違和感も薄らいでくる。山へ登ろうとする行動力は何時の時代も変わらない貪欲ささえ感じる。

何故ミニヤ・コンカなのか？誰しもが疑問に思う。訳者が復刻版の紹介をしているが、それによれば、元々は中国西部に豊富な経験を持つジョセフ・ロック博士の「アムネマチンはエヴェレストより高いのではないか」という情報を頼りに、十二人でアムネマチンを目指してアメリカを出発した。しかし、満州事変が起きたためアムネマチンの許可は降りず、上海に滞在しているうちに上海事変が起きてしまった。隊は帰国組、アムネマチン固執組、そしてミニヤ・コンカ組に分かれたとのことである。

そこでこの快挙を成し遂げた四人の登山家とは、どんな人だったのか。A・B・エモンズ三世は、ハーバードの工学部の学生で、ドロミテ、アルプス、ロッキー、アラスカの山々を登った。その後三六年のアメリカのナンダ・デヴィ隊に関わり六二年に癌のため亡くなった。テリス・ムーアは、ハーバードのビジネス・スクールの学生でエクアドルのサンガイ（五四一〇㍍）の初登頂とチンボラソの第二登、アラスカのボナ（五〇二九㍍）とフェアーウェザー（四六六三㍍）の初登頂を行っている。ジャック・ヤングはニューヨーク大学の新聞科の学生で、広東出身の一族ながらハワイで生まれ、大型獣を担当。R・L・バードソルはスワースモア・カレッジ卒業のエンジニアで、アルプスとロッキーで登山経験があり、その後三九年アメリカのK2隊に参加、五三年アコンカグア登頂後遭難死した。ヤングを除く三人はヒマラヤ経験はないものの確かな登山経験を持っていたようだ。

ところで、この隊は「西康遠征隊」と名乗っているが、「西康」は当時の西康省を指しており、現在の四川省西部とチベット自治区東部にかけての地域を管轄していた。一九一四年に川

辺特別区が設置されて、二八年に西康省と改められ、その首都が打箭炉（ター・チェン・ルー）であった。西康省は五五年に廃止され、現在は金沙江（長江の上流）の東は四川省、西がチベット自治区となっており、打箭炉も康定と名が変わり、甘孜チベット族自治州の州都となっている。

本書は、計画から打箭炉を経てミニヤ・コンカ周辺の測量までをバードソルが執筆し、偵察・登攀・帰還をエモンズが執筆している。また、登頂日の記述はムーアの日記から引用されている。

現在では、四川省の成都から康定までジープで一日で行けるが、当時はバスと人力車を乗り次いで二日間で雅州（現在の雅安）へ、そこから八日間徒歩の旅で打箭炉に入った。かつてこの道は北京とラサを結ぶ主要な公路であり、チベットへの茶の道でもあった。その茶を運ぶ人夫は一人で百六二キロも担ぐと聞くと驚きである。

ミニヤ・コンカを探ることから登山が始まる。山の高度の測量や未知の谷への探査行などにしても、現代では経験できないことが沢山溢れている。例えば、現地での支払いに「ルピー」が使われていたとか、「一日に一メキシコドルを稼ぐ」と書かれているが、このようなことは今の若い読者にはピンとこないことかも知れない。

偵察行も面白いのであるが、なんといっても圧巻は北西稜の登攀記録である。まず、固定ロープが登場しない。「ステップを切る」、「麻の十五㌢のロープ」、「二人で一つの寝袋に寝る」、「各自食器一つにスプーンとナイフが一つ」などの記述から、当時の登山の様子を窺い知ることができる。もっとも一つの寝袋に二人では安眠が妨げられて、高所では不適当だったと反省もしている。

四人のメンバーの内、ムーアとバードソルの二人が登頂したのだが、頂上でアメリカと中国の国旗を掲げた。

深田久弥さんは、ヒマラヤの登頂で最初に国旗を掲げたのは、立教大学のナンダ・コットではないかとし、ミニヤ・コンカが狭義のヒマラヤから外れるからだとしている。

六七〇〇㍍の第四キャンプで、ナイフで指を切ってしまったため登頂を断念したエモンズが、下山中に凍傷を負いベース・キャンプから打箭炉を経て雅州までたどり着く逸話などは、アンナプルナのエルゾーグとラシュナルの下山を彷彿とさせる。もっともこちらの方が古い話なのだが。

最近出版された札幌山岳会の報告書には、北西稜から見下ろした「ハンプ」の写真が載っているが、本書にも六十数年前のほぼ同じ場所からの写真があり、その変化の激しさに驚かされる。

また、秋に二度ミニヤ・コンカ東面から登山した経験から感じるのは、アタック時によくぞ好天気が続いたものだ、という

ことであるが、それも彼らの研究の賜物であったのかも知れない。

彼らは北西稜の七千㍍付近から南西方向に三つの山群を見てその姿まで報告している。訳注にもあるようにこの山群は、私が一九八九年夏に登山した、雲南省境の近くミニヤ・コンカの南西約一九五キロに聳える「シャラリ（六〇三一㍍）」山群である。三つの山は、本文の記述の「巨大な鶏冠のような」山が、シャラリ、「ミニヤ・コンカに似た形」の山が、シャノドジ（五九五八㍍）、「ぎざぎさのくさび形」の山がヤンメイヨン（五九五八㍍）である。中国の地図では、この三山を「貢嘎雪山」と呼んでいる。

アプローチ・マーチの描写にも、偵察・登攀・帰還の記述にも読み手は、わくわくしながら引きずり込まれてしまう。訳者の手腕の賜物か久し振りに読み応えがあり、読後に爽やかさを覚える本に出合った。良書である。

（山森欣一）

串田孫一／著
『串田孫一集3　岩の沈黙　山行』



筑摩書房・刊
1998年1月24日発行
定価：本体6,500円
A5変型判・函入／518ページ

今年筑摩書房から『串田孫一集』（全8巻）が出版された。第3巻『岩の沈黙』は「山行」編である。串田氏の山に関する三〇冊に及ぶ単行本と氏自身が編集した雑誌『アルプ』などに発表された中から選ばれた作品で構成され、五〇〇ページを超える大冊である。ここで読者はいつか、どこかで読んだ串田作品と再会することになる。本書の大きな特徴は、なんといっても一九三〇年から一九九〇年まで、実に六〇年におよぶ串田氏の登山と思索の軌跡が編年体で構成されていることである。

これまで主題ごとのまとまりで串田作品を読んできた読者にとっては、新鮮な驚きとともに、串田作品を今までよりもっと人間的な観点から読み直す機会になるであろう。本書は人間が

生涯をとおしてどのように山とかかわってゆくのかを考えさせられる構成でもある。多くの作品の中から取捨選択して年代順に配列する仕事にあたった編者田中清光氏の労苦がしのばれる。五〇〇ページという分量にもかかわらず、『山のパンセ』で読んだ印象に残るエセーが入っていない場合もある。これはいたしかたない事なのかもしれない。それはまた串田作品の豊饒さを意味するものだからである。

『岩の沈黙』第Ⅰ部は一九三一年から一九四〇年まで、著者十七歳から三十五歳までの作品群である。「北鎌尾根」の中の「山の手帳」はほとんど一行詩のような形式で、のちの串田氏独特の断想の芽生えがある。例えば「いかつい黒い幹の間から白い肌が見える。白樺は山毛欅のお嫁さんだ。天井沢」などの爽やかなエロティシズムは微笑ましい。また「岩稜の一夜」（一九三五）は岩稜で友とビバークする登山者が、刻々と宇宙の底に更けてゆく夜を見つめた作品である。この作品では串田氏らしい宇宙感覚が働いている。「岩の中では驚く可き力が絶えず犇めき合っている」という思想は書名にもなった「岩の沈黙」（一九六九）の萌芽とも見ることができる。それは古代ギリシャの物活論にも通じる世界観である。また串田氏は風の唸りの中にピタゴラス派のいう「宇宙階音」を聞く耳の持ち主でもある。

第Ⅱ部は一九五二年から一九五八年まで。著者三十七歳から四十三歳までの作品群で孤独と不安、そして死の影が忍び込んでいる作品が多い時期でもある。第Ⅰ部とⅡ部のあいだには約十年の空白がある。第Ⅱ部には戦争で失われた山の友への鎮魂歌ではないかと思われる作品がある。例えば「薔薇の花びら」「孤独な洗礼」「旧い山脈」がそれである。

串田作品に時代性や歴史認識の乏しさを指摘するのは誤った見方であろう。確かに串田氏は真正面から声高に社会や時代を語ってはいない。しかし読者は、時代の中で苦悶しながら時代の本質を見抜き、自己探求の姿勢を貫こうとする著者の意志を作品の中に読み取るべきであろう。

この時期はまた、人はなぜ山に登るのかを繰り返し問い続けた時期でもある。例えば「孤独な洗礼」や「山での行為と思考」がそれである。しかしなぜ登るのかについて著者は答えない。ただそこには「神のいない孤独な洗礼」を受けるために風雪の山に向かう登山者があり、戦死した友を弔う登攀者の姿があるだけである。なぜ山に登るのか、これは愚問の石であると著者はいう。「愛するものに対してはただそれを愛し続ける以外に為すことはない」（「山に関する断想」）のである。

「歌と死」は鳥海山の春スキーで滝の小屋に泊まった折りのエセーである。滝の小屋は筆者の大好きな山小屋でもあるので、この作品は特に印象深い。ここではスキーの悦楽ではなく山での死が取り上げられている。また人間が山で感じる悲哀につい

て、それは「山が私たちに教えてくれる人間の宿命である」と串田氏は言う。そして登山者の情熱が求めているのは「山頂での歓喜や、雪の斜面での有頂天」ではなく、「山へ来る者の一層よく知ることの出来る宿命的な悲哀」なのである。(「歌と死」)

ところで、串田氏は「天辺」という響きのいい言葉が好きである。「天辺」は単純な地面の高まりである山頂や頂上と違って文字どおり天との接点である。この宇宙との接点で登山者は「宿命の揺籃」(「歌と死」)と共に揺れるのである。山の〝テッペン〟には開けっ広げな明るさとともに、どこか宇宙的な悲しみがある。

一人の山を好み、仲間と登ってもしんがりを自由に歩くのが好きで、山の同伴者を語ることの少ない著者であるが、息子との山に関する作品は、少々不器用な父親の愛情が滲んでいて思わず笑みがこぼれる。例えば山に登った息子を想う「不安の夜」、息子とザイルを結んだ「カタズミ岩KⅢ」。登攀を終えた「息子のひょろひょろの、髭みたいなものにも、霧のこまかい粒々が実にきれいだった」、と息子に男の顔を発見しているところが実に印象的である。

串田氏の山のエセーでは最後まで現実の地名が明らかにされない作品が多い。これは串田作品の大きな特徴ともいえる。登山中には所要時間、天候の変化、出会った動植物の名前を克明に書き留める習慣をもち、少しの時間があればスケッチブックを広げる著者であるが、著者自身がいうように山の紀行文はほとんど書かない。

『岩の沈黙』を読んでいて、ふと串田氏の山の手帳やスケッチブックを串田氏の背中から覗きこんで見たいという欲望に駆られるのは筆者だけだろうか。『もう登らない山』(恒文社)では串田氏の古い手帳を写真で見せてくれているが、本書にそうした読者サービスがないのは残念である。

串田氏は紀行文について次のようにのべている。「紀行文は、机に向かって綴られている。紀行文も他の文章同様に合成される。(中略)その文章がどういう合成の仕方で綴られているかを見抜く意地悪さをも失ってはならない」(「山の絵本　雲・岩・太陽」から)『岩の沈黙』Ⅳ)。これは恐るべき卓見である。

串田氏の文章に関してだけに言えることであろうが、現実の地名が明らかにされないことで文章の持つリアリティーが損なわれることはない。串田氏の描くいわば匿名の山や風景はむしろ匿名であるが故に不思議な現実感を獲得しているとさえ言える。読者は串田氏の山に自分自身の体験した山や風景を容易に重ねて追体験することができるからである。匿名の山が多い中で「鳥甲山」は数少ない紀行文的な作品である。鳥甲山は串田氏の久恋の山といってもいいだろう。鈴木牧之の『秋山記行』にも登場するこの山を語る著者の声は弾んでいる。懐かしい焚き火の匂いが読者を包む作品でもある。

第Ⅱ部の最後におさめられた「山と老人」はドラマチックな作品である。よろよろの老人をいたわりながら、吹雪の中を山頂を目ざす話である。現実の体験なのかも知れないが、なぜ三〇歳も年長の老人と二人で雪山に入ったのか、何も説明もない。確かに奇妙な二人づれの話である。この老人は登山者の〝未来の自分〟なのではないかとふと思ってしまう。著者が三〇年後の老いた自分と一緒に山に登るという設定は何か短編映画になりそうな作品である。第Ⅱ部に「私の山スキー」（一九五五）が入っていないのは、山スキーの愛好者としてはいささか残念である。

第Ⅲ部は一九五九年から一九六五年、著者四十四歳から五〇歳までの作品群。「三角の谷」では遭難者の死体を見た少年の一人が「三角の谷に星がいっぱいつまっている」という印象的な場面がある。それは串田氏の絵によくありそうな構図である。「三等三角点」では小さい山頂で突如感じる〝寂しさ〟について静かな口調で語る。串田氏は「その寂しさを宇宙のものとして感じ」てそれを甘受し、正しく学ばなければならないという。「雨飾山」も数少ない紀行文的な文章である。「憂鬱」と題する作品は息苦しく人間くさい憂鬱ではなく、山の中に登山者が求める「人の世を離れた彼方とのつながりの中で、感じられる」山の憂鬱について書いた美しい小品である。山に登る人の内部は暗く閉じたものではなく、宇宙（コスモス）に向かって開かれた内部である。

「山登りの恥ずかしさ」という作品はその題名の大胆さと同時に内面告白の素直さに驚かされる。「山に登らなくともすんでいる人間がいるのに、山へ出かけずにいられない自分が恥ずかしくなる」というような心情をこれまで誰か告白したことがあるだろうか。都会生活をしながら、山へしばしばやって来なければいられないものは弱い人間であるともいう。どんな不格好な虫でも山を歩くしっかりした理由があり、無駄がないのに登山者が山に求めているものは貧弱でとるにたらないものだと串田氏は言う。

「ひとり旅の北海道」は日記風の作品で旅情をそそる。「ただ寂しさが風にとけ込んでいるに違いないこのあたりの笹の丘陵を私は歩きたい」という宗谷岬の風の中に、読者は自分自身を置いてみたくなるだろう。

第Ⅲ部の中でも重要な作品は書名にもなった「岩の沈黙」であろう。登った山から持ち帰った小さな石ころを並べる趣味を持つ人は少なくない。著者が気まぐれに山から拾って来た「力の死骸」である岩の持つ徹底した柔順さ、決定的な死と尊さを人間と比較して、著者は言う。「岩を拾いあげる時、死せるものの徹底した柔順さが私の胸を打つ。なぜなら人間は死んでも柔順ではなく、死んでもなお生きているものを支配しようとするからである。それに比べたら、この屍はなんというすばらし

い死を迎えて来たことだろう」。このエセーは小品ながら一片の岩の中に宇宙のダイナミズムを見る壮大な作品である。著者の自然観をよく表している作品のひとつであろう。

「先蹤者の道」は少年時代の著者に山を教えてくれた槇有恒氏へのオマージュである。「花嫁の越えた峠」も現実の地名が明らかにされない。筆者の知り合いにも峠を越えてきた花嫁がいるので懐かしく読んだ。彼女は、草履のように薄く減ってしまったその時の下駄を今でも大切に持っている。「雷鳥」は人間の姑息な理論で自然を我が物にすることへの激しい怒りと悲しみをこめた文章である。

第Ⅳ部は一九六五年、著者五〇歳以降の作品である。脊椎の病からおそらく山に出かける回数も少なくなり、登り方にも変化がでてきた時期である。過去に登った山は純化され、行動の世界の彼方に形而上的な山が見いだされる。「光と水の戯れ」は秋から冬にかけての滝のある風景を描いた詩的な作品で、リルケの世界を思わせる。ただ著者は「山を歩きながら、あまり形而上学的な考えごとをするのはいい傾向ではない」と諫め、むしろそこに在るもの、そこに生きているものから直接悦びを紡ぎ出すことの大切さを述べている。(「霜柱」)

「谷底」という短い文章の最後は次のような言葉で終わっている。「何をしたところで、この深い谷底では、私は貧弱な存在である。うれしい存在ではないか」。憂愁の中にも清々しい楽観を見いだす串田作品の特徴がここにある。「花」も一度読んだら忘れられない小品である。大怪我をしながら一人で山を下りた人が、麓について意識を失いそうになり、がっくり座り込んだ草原に、一輪の黄色い花が咲いていた。その花が咲いていなかったら意識がなくなり、この世界と訣別してしまっただろうという話を「ただロマンティックな話だと思われては困る」と締めくくっている。弱々しく可憐な花という既成概念はここで見事に打ち砕かれる。「旅には終わりがない。旅が終わるときに私も終わるからだ」という書き出しで始まる「旅の終わりの雪道」に登場する「古い村」は串田氏が住んだ山形県新庄市荒小屋のことではないかとひそかに想像を巡らせている。

「科学が何かを教えようとしているのなら、それはしっかりと聴かなければならない。学ぶためでなく、その科学をできる限り遠くへ押しやるために」(「天と山との交渉」)という串田氏にはもう一つの分野である博物誌の世界がある。読者には『岩の沈黙』Ⅲに挟まれた「めぼそ」のような短い博物誌を楽しむ悦びも残されている。

以上、第Ⅰ部から第Ⅳ部までを概観したが、『岩の沈黙』を通読して気になったのは、串田氏の六〇年の登山活動のなかにあるほぼ十年間ほどの山を遠ざかった時期である。その十年間には串田氏が山形県に暮らしていた時期が含まれている。この一九四〇年代の山の空白期間は、前後の文章からも推察できる

ことであるが、明らかに戦争の影を読み取ることができる。山から遠ざかったいきさつについては多くを語っていないが、山の友人を戦場で失ったことに対して、戦場に赴くことがなかった串田氏の心の痛みがあったことは想像できる。

筆者はこの夏串田少年が槙有恒氏から初めて雪の山を教わった五色温泉六華倶楽部と、串田氏が戦時中疎開した山形県新庄市荒小屋を訪ねた。荒小屋の曾林寺住職後藤信而氏は、腰に手ぬぐいを下げて瓢々と歩く串田氏の姿をよく覚えていた。後藤氏の案内で串田氏の建てた家を訪ねた。家はよく手入れされ、現在も農家の住まいになっている。東と西に廊下をめぐらせた二階のガラス戸の奥には真っ白な障子があった。この二階からは月山や神室山がよく見えただろうし、外に出れば鳥海山も見えたはずである。しかし串田氏は月山については「登りたくなるような気持ちの動揺とは程遠く、その山は単なる存在でしかなかった」（「山に向けた思考」『日本の名山3　月山』博品社）といい、鳥海山に登ったのは戦後しばらくたってからのようである。荒小屋時代の串田氏は山に登るどころか、「うろうろしているのが目障りにならないように、小鳥たちの集まる森の下草を分けて歩いた」（前掲書）のである。荒小屋の帰りに新庄市最上公園の一角に建てられた串田氏の記念碑を訪れた。そこには雪面に注ぐ日光に春を感じた詩人の喜びが刻まれていた。「荒小屋記」の一節である。

（粕谷俊矩）

水越　武／写真　小野有五／解説
『水越武写真集　森林列島』



岩波書店・刊
1998年1月27日発行
定価：本体6,000円
A4変型判／200ページ

本書の著者、水越武さんから「生態系から見た日本列島」というテーマについて話を聞いたのは六、七年前だったと思う。そのときすでに水越さんには『日本の原生林』『雷鳥』『ブナ』などの写真集があり、次の目標に「生態系から見た日本列島」を志向する素地は充分に整っていた。ことし初め『森林列島』が出たとき、出版社が同じ岩波書店というだけではなく、カバーデザイン、本文レイアウトとも『日本の原生林』を踏襲していて、この二著は姉妹編となるように初めから企画されていたことを知った。

著者は本書のあとがきを「生態系から見た日本列島という視点で、列島を彩る多様な自然のなかから十二の生態系を取り上げ、一つの生態系について一つの地域を選んで撮影を進めてきた」と書き出し、その意図を明確にする。ここでいう十二の地域とは、琉球列島、西表島、屋久島、穂高、黒部川、富士山、尾瀬、白神山地、屈斜路湖、阿寒、大雪山、オホーツク海を指し、足跡は南から北上している。写真はサンゴ礁の海に始まり、黒々とした北海の波浪で終わる。

なぜこのような構成になっているのだろうか、という素朴な疑問を抱いて本書を開き始めたのだが、間もなく「これは手ごわい本だ」と気づいた。従来の多くの写真集は、一枚一枚の写真を切り離しても鑑賞の対象になり、それなりの価値判断もつき、巻末にまとめられている写真解説といちいち照合しなくてもおおよその用は足りた。ところが本書はそうはいかないのである。

暫く思案の末、北大教授小野有五氏が巻頭に書いている「列島断想」の各章が写真と対応しているのに気づき、該当する章を読みながら写真を見るようにした。いってみれば、美術館でイヤホーンガイドを聞きつつ絵を見るようなやり方である。これは正解だった。何より小野氏の明快な語り口にひかれた。例えば最初の琉球列島の一行目には「サンゴ礁は海のなかの森である」とある。サンゴ礁の生態系について全く素人の私は、なるほどなるほどと読み進んでから改めて写真に目を移すと、それぞれが立ち上がってきて、前後の密接な結びつきが理解できるのである。さらにいえば、潜水技術を身につけていない山男の水越さんが、なぜ素潜りでサンゴ礁を撮影したかの理由も自らはっきりしてくる。

もうひとつ山を例に挙げよう。富士山の章の書き出しは「日本列島の最高峰である富士山では、森林の生育する限界もまた、最も高い」とあり、これは素直に納得するもののつづいて「富士山の森林限界には、なぜカラマツが生えているのだろう？その上にはなぜハイマツがないのだろう？」といわれると、小野氏の思惑通り、当方は「？」のまま次を読むしかない。そこで富士山の歴史を知ってから、強風によってすさまじく変形したカラマツの写真を見ると、疑問は氷解するのである。

本書はこのような仕組みででき上がっている。写真集紹介なのに小野氏の文をより多く取り上げているようだが、これは水越さんの写真の軽重を問うているからでは決してない。水越さんが対象として取り上げた生態系について、いかに正しく深い理解を示したかを語っているのである。ここで思い出したことがある。前著『日本の原生林』の解説を書いた濱谷稔夫氏の文中に「森林と写真」の一項目があった。その結びに近い個所を抜き出して次に紹介する。

——いまこの写真集によって、森林が種類や場所によって実

に変化に富んだ美しい外観をもつことをさらに深く知った。しかもたいていは、それが何の種類の森林であるか、あるいはそのなかに目立つ樹冠が何の樹種であるかまで判るのである——

右の文には二つの指摘がある。写真の持つ美しさと記録の正確さである。水越さんの写真がその二つを併せ持っていることを、濱谷氏は語っているのだ。私は初めのところで、『森林列島』を手ごわい本と感じた、と書いたが、その原因はどうもこのへんにあるようだ。写真、特にカラーの場合、美しさを追求していけば記録としての正確さは二の次になり、逆に正確な記録写真を目指せば美しさはさほど要求されることはない。本来は融合することの困難な二つを一枚の写真に仕上げようと志したとき、水越さんの内部に何が起こったかは分からないが、あえていえばその両者のきしみが、私に手ごわさを感じさせたのではないだろうか。それにしても水越さんはむずかしい道を選んだものだ。

このように見てくると、本書は素人の手の及ばない専門書の書架に納められてしまいそうだが、一面で私は該博な知識を軽々と操る小野氏の語りに導かれて、いつの間にか水越さんと共に目の覚めるような思いで日本列島を北上している自分に気づいた。特に楽しいのは北海道に入ってからだ。ここでは四つの生態系が紹介される。屈斜路湖、阿寒、大雪山、オホーツク海である。小野氏、水越さんともに北海道の住人だと思うせいか、格別の親しみを覚える。屈斜路湖は水越さんの写真説明の中に「どんな吹雪の日でも私は妻と湖畔を散歩するのを日課としている」とあるほど住居に近く、湖畔に住む地の利を生かして細部まで眼が行き届く。水越さんが氷紋と名づけた何とも面白い氷の造形や御神（おみ）渡りができ始める直前に氷がキューキューと鳴く話などは、その場に居合わせた者にしか見聞できないだろう。

水越さんは長く山岳写真家の枠内で取り上げられ論じられてきた。最初の写真展は「穂高」（一九七一年）であり、講談社出版文化賞を得た写真集は『ＨＩＭＡＬＡＹＡ』（一九九三年）である。その見方が間違っているとは思わないし、私もしばしば同じカテゴリーの中で書いてきた。しかし書きながら徐々に「待てよ」と思考を押しとどめ、異なった見方をするように自分を仕向けてきたことも事実である。いま取材ノートによって振り返ってみると、その時期は九一年ごろになる。水越さん自身が写真集『ＨＩＭＡＬＡＹＡ』を準備しつつ、これを最後の山の仕事と考えていたことがメモしてある。翌九二年に私は写真雑誌に水越武論を書く機会を与えられ、その文を次の言葉で終えた。

——水越のプランの中には「生態系から見た日本列島」という壮大なテーマがあるようだが、確かな視点と技術によって、今の自然を写しとめておく必要は、何にも増して大切なことに

思われる。現代から最も遠くを歩いていたはずの水越が、最も先を見通した地点に立っている構図が、私の目には見えてくる

本書を手にしたときに、とっさに思い出したのは、若干の未来予測を含んだこの結語だった。『森林列島』を手ごわいと感じ、その手ごわさの意味を模索しながらページをくってみて、やはり水越さんは対象を山にとどめず、山も包括した自然環境そのものに向けつつあることを確かめ得た。

水越さんは軽々しく動く人ではない。山に住み、森を歩き、わが身を自然の一部に化したときにシャッターを切って作品を仕上げてきた。その体――あるいは本能――が森の異変を感じとり、異変によって対象が変容する前に、少なくともいま見る現実だけでもはっきりと記録し、表現しようと日本列島を歩き回った。その行動の軌跡が本書であろう。

日本列島を生態系から見る必然性もその姿勢から生まれる。ヤンバルの森が切られるとサンゴ礁は死滅し、山の森がなくなれば渓谷は涸れるのである。従って写真は一枚ずつではなく一連のものでなければならない。一冊の本が有機的なつながりをもって存在し、ページを閉じるとき、見ている者もまた日本列島を形づくる生態系の一部であることを確認するのである。

先に『日本の原生林』と『森林列島』は姉妹編として作られた、と書いたが、姉妹は二人ではなく三人になるかも知れない。そのきざしは本書の序文に出ている。ここで水越さんは最近五年間の仕事の中心は熱帯雨林にある、と書いている。世界の熱帯雨林は中南米、アフリカ、東南アジアに集中しているが、そのうち東南アジアのボルネオ、中南米のアマゾン奥地にはすでに踏み入っていて、私たちはその写真を見て話を聞くこともできる。そうした機会に聞いた言葉の中で「熱帯雨林は、ものすごい数の命を抱え込んでいます」は、強く印象に残った。果たして三人目が「熱帯雨林」になるかどうかは別にしても『HIMALAYA』を山の仕事の区切りにして、次に選択したテーマが一つ一つ写真集にまとまり、ようやく水越列島ともいえる姿を見せ始めるところまで来た。『森林列島』を、このような位置において鳥瞰すると、その内容と必要性の意味がはっきりしてくる。日本の森、湖、海、さらには熱帯雨林の変容に気づき、透徹した視点とそれを表現できる能力を持った者が、現実を正しく記録する仕事は、与えられたのではなく、やるべきことだからである。

（杉本　誠）

能海　寛著
『能海寛遺稿』



五月書房・刊
1998年２月発行
定価：本体6,000円
A5判／255ページ

歴史に「もしも……」は禁句であるが、能海寛（のうみひろたか）の人生には、この言葉を当てはめてみたくなる。彼はチベットを目指したが、恩師への手紙を最後に行方がわからなくなった。もし、彼が生きて再び日本の土を踏んでいたなら、河口慧海と同様の、あるいは河口以上の詳細なチベット情報をもたらしていただろうと思われるからだ。

本書は消息不明から十六年後、十七回忌の際に能海寛追憶会が出版したものの復刻版で、能海が旅行中に日本に送った般若心経の梵語、チベット語、漢語、英語対照訳と、恩師や交友会に寄せた手紙を中心に、追悼文や遺難を伝える新聞記事などからなっている。

明治元年島根県の寺に生まれた青年は、進取の気に富む人であった。京都西本願寺で得度ののち上京、慶応義塾で英語を、また南條文雄博士に梵語を学ぶかたわら、東洋大学の前身である哲学館で勉学を続けた。明治二十六年刊の『世界に於ける仏教徒』で「西蔵探検の必要」を説いていることから、この頃からチベット行きを志していたことがわかる。この全文は『チベット探検の先駆者　求道の師「能海寛」』（隅田正三著、一九八九年刊）に採録されていて、彼の思想を知る手がかりとなる。

西本願寺の援助を得て、結婚後わずか三カ月で妻を残して日本を発ったのは明治三十一年のことだった。ダライラマ十三世、つまり現世の一代前の時代である。最近映画化された『チベットの七年』の著者、ハインリヒ・ハラーに先んずること四十年である。そして三年後、南條に宛てた手紙が最後になってしまった。能海は旅の途中で河口慧海のチベット行きの報を得て、多分ポタラで会えるだろうと書き送っているが、慧海がチベットに足を踏み入れたのは翌年だから、日本人で最初にチベットに足跡をしるした人物は、能海と同行者の寺本婉雅（えんが）ということになる。

能海は三回チベット入りを試みている。一回目は寺本と二人で、重慶から成都を経て打箭爐（ダルツェンド）に到着。ここはすでにチベットの東端の町である。さらに西をめざしたものの、裏塘（リタン）から巴塘（バタン）までしか行き着くことができなかった。しかし、少しでも先に進もうと、「支那僧服にて只独り腰に二三個の焼餅を携へ、徒歩

にて巴塘より四十里西金沙江邊牛古渡(ニュークートー)を密かに見学」し「死地に入る心地」がしたという。心がはやりながらも進むに進めない悔しさ、もどかしさを「泥水にこがねの砂を流しゆく幅は三町岸は高山」「のぞめどもみやまの奥の金沙江つばさなければわたりえもせず」の二句に託して引き返したのだった。

打箭爐に戻ると帰国する寺本と別れ、再度チベットに小路経由で入ろうと、単独徳格(デルゲ)に向かうが「内地の物騒と雇人の蠻約により」このルートも突破することができなかった。止むなく打箭爐に引き返し、今度は青海からのチベット入りを試み西安、蘭州、西寧(シーニン)、青海、丹噶爾(タンカル)へと進むが、金品を盗まれ旅を続けることができず重慶に戻る。これが二回目の試みである。

そして三回目は一旦やや南下して、雲南よりの道をとろうと大理(タリー)に行き、麗江からチベットを目指す旨、南條宛に出発予定の前日（明治三十四年四月十八日）付けで手紙を出した後、消息を絶つ。

以上が能海の行動である。

能海は滞在先では言語を学び、道中の集落や訪れた寺院の規模や様子、産業などの詳細を書き送っているが、それが単に学僧の観察にとどまらず、民俗学を研究する者の姿に似ているのは、チベット行きの目的が教典を求めるだけでなく、その人種、言語、習慣、風俗、政体など、いわば文化人類学的な研究も必要であるとする、彼の思想の体現にほかならないからと思われる。こうした詳細な観察を見るにつけても、たとえラサにたどりつけなかったとしても、「もしも……」と考えたくなるゆえんである。

――打箭爐への途上、峨眉山（三〇九九㍍）に登り「絶頂に宿」して、山頂の寺院でチベットに行った僧と面談。「頂上は極寒にて、殿堂の四辺雪未だ解けず、戸を密閉して炉に火を起こし寒さを凌ぎ候。然るに下山峨眉県の地に至れば、最早養蚕も上蔟せる如くに非常に熱く」と、山上と麓の違いを観察している。

――ひとまず巴塘まで行き、様子をみてチベット入りを計ろうと、役人と馬夫各二人、四頭の馬と二頭のラクダで出発するが、途中でチベット犬に右足、右手それぞれ三箇所も噛まれ、「三枚の衣服を」突き抜けるほどの傷を負う。なおもチベットを目指すが、「途次不毛の地にして人家なく、只数百の牧牛羊、及び天幕内の牧人種帳房数戸見受けたるのみ」で、「打箭爐以西は風俗地理全く清国と異な」る風景を目にする。それもそのはず、そこはもうチベットの一部だったのだ。

――大所(タソ)から百里ほどは標高約四千㍍もある高地で、「前足後足に接し、人馬共に息殆ど絶し、……殆ど五千尺を直下に下」った所が巴塘だった。ここでさらに先に進む方法をさぐるが、チベット国境の乍了(チャーヤ)までは十日ほどかかり、途中の人民も険悪で泥棒を家業としていると書き送っている。地元の官憲は単独

での行動は難しいので、ゴルカ（ネパール）一行と共になら許可するといいながら、結局は前進することは許されなかった。

こうした記述は本文の随所に見られ、旅の苦労のほどがしのばれる。

打箭爐戻った能海は、次の行動に移るまでの間、チベット語を学びつつ般若心経を翻訳しているが、日本語との類似に言及し、「西蔵語と日本語とが如何なる関係を有するものかこれ御研究願度候」と他にも研究者が現れることを願い、他方で、この地の音楽が日本の「或田舎節に適合するもおかしく」と、いろいろ興味の尽きるところはなかったようだ。

また、チベットの文化について「支那人は西蔵人を蛮家（マンチャ）々々などと稱し候へども」、文字は千三百年も前に作られ、外国語を用いなくても不自由はしないのに、日本の文字は多くが漢字から作られた片仮名、平かなだけで、漢字がなければ意志を表すことができない。それに較べてチベット文字の美しさは「羨望に堪へず」と、高く評価している。同じ筆で、この地では「土司」を殺した匪賊の「サラシ首」があり、「至りて物騒」だと、高度な文化との落差を指摘している。

このように日本に届いたわずかな書簡から、能海のこまやかで鋭い観察の眼がうかがえる。

明治時代の文章、それも手紙となると昭和の戦後世代にとっては読むのに非常につらいところがある。しかし、いつしか能海の情熱に引きずりこまれてしまうのは、その気迫、旺盛な探究心、うまく事がはこばないもどかしさなどが、淡々と事実を述べるだけ手紙の行間から感じられて、大いに想像力がかりたてられるからだろう。

最後の手紙以後の能海に何があったのだろう。当時の新聞は国境で匪賊に殺害されたとか、民家の壁に短歌が残されていたと報じたが、いずれも確証はなかった。文章などから察するに、能海は真面目、几帳面、勤勉などの言葉がぴったりするような人物だったと思えるが、こうした人が異郷を旅する時はどうであろうか。能海の旅に現地でのトラブルはなかったのだろうか、行方不明と彼の性質にはなにか関係がありそうな、というのがもう一つの感想である。

本書は遺稿集であるため、これだけでは理解しがたいところがあるが、さきの隅田氏の書と共に、本書の巻頭で解説を書いている江本嘉伸氏の『西蔵漂白』（山と溪谷社刊）を合わせて読むと、能海寛像がより鮮明にうかびあがってくるだろう。

（泉　久恵）

平林克敏／著
『熱き心』



ぱるす出版・刊
1998年４月23日発行
定価：本体1,600円
四六判／276ページ

著者は本書の題名にもある様に生きることへの「熱い心」を原動力として、アピ、サイパル、エベレスト、ナムナニ、そして企業人として商品開発事業に多くの人を駆り立てた。登山家としても経済人としても生き、そして多くの成果を上げた「熱き心の人」である。本著は単なる山登りの本というより、著者が熱い心をもって如何に生きたか、そして更に如何に生きたいと願っているかの心の軌跡の記録である。内容は、はしがきとあとがきを入れて八章から成り、大町での思春期、京都生活としてアピ、サイパルの最初のヒマラヤ、そして日本山岳会エベレスト隊に参加し頂上への登頂、そして日中登山として大きなスケールのナムナニ峰登山を記している。

全篇に熱い心を大切にして生きている著者の人間性が溢れ、山も仕事も熱い心の対象として生きた記録であり、単なる山登りのことからもっと人が如何に生きるかに視点を据えた作品である。

平林さんが如何に生きたかの成果としてみれば、一九六〇年のアピ峰、一九六三年のサイパル峰の初登頂。その後西ネパールをヒマラヤ山脈に沿って六〇〇キロの横断調査。一九七〇年日本山岳会のエベレスト隊員として頂上登頂。一九八五年に初めての日中友好登山隊の登山隊長としてナムナニ峰を初登頂し新彊からチベットに至る三〇〇〇キロの学術調査の完結。登山にとどまらず関西電力の黒四建設事務所を経て㈱日本ダンロップ（住友ゴム工業の前身）に入社、非タイヤ部門の事業で業績を伸ばし取締役事業部長、常務を経て一九九四年住友ゴム欧州会社社長としてブリュッセル駐在。この間、専務取締役に就任しその後帰国し、現在はダンロップスポーツ代表取締役会長、中央ダンロップ㈱住友ゴム特品販売㈱の会長を務めている。山登りでも実業界でも立派な仕事をされている。

平林さんの別著に『青年に贈る十章』という小冊子があるが、誠に若い人への愛情と示唆に富んだ内容である。本著にみる平林さんの山登りも仕事も、自らを求心点として具体的な活動に対して熱い心の組織的なかたまりをつくっている。そして、それにかかわる人と共に山でも仕事でも夢を与え、夢に向かって行動し、夢をかなえて生きることへの大きな喜びを感じている。

山登りでも、仕事でも、命をかけてやりとげていくという人

の行為は「熱い心」以外にないと著者はくり返し本著の中で述べ、その具体的な行動を描いている。

アピの頂上でその姿を見て以来、何年にもわたって、これは「俺の山だ」と心を熱くしたナムナニの計画の発端から登頂に成功し帰還するくだりは、著者の登山観が多くの人と出会いつつ、くもの糸の織りだす華麗な織物の様に展開され圧巻である。

文中「……登ったということただそれだけのことでしかない。この僻地から開放され、生きて生活圏内の中に帰ること、それが登頂ではないだろうか」

「思想とそれを表現していく行動の過程こそ重要なのである。原点を見つめ、ものまねに対する戒めこそ現代にとって必要と考え『過程を大切にする登山』をやってみる……」

と著者は語っている。

単純に山と仕事を一つには考えられないが、著者の「熱い心」に依る生きざまをみると、生きざまが山にも仕事にも向かい、山でも仕事でも無く「熱い心」を持った平林克敏という一人の人間が如何に感じ如何に生きたかの記録が本著『熱き心』である。

（田邊　壽）

平山善吉／著
『エベレスト遥かなり』



悠々社・刊
1998年５月11日発行
定価：本体3,500円
A5判・函入／352ページ

この本は、日本大学山岳部の創立七十周年記念行事として一九九五年に行われたエベレスト登山の総隊長役で、当初から計画に参画し、隊の行動中にはエベレスト峯北側のロングブック氷河入口に設営された大本営（ベース・キャンプ、五一五〇㍍）で指揮をとっていた当時の日大山岳部長平山善吉会員（四四四〇番）の私的な報告書である。この隊の公式報告は、登山隊（北東稜からの初登頂に成功）と学術隊（高所気象学外六部門の調査）とが別冊で、仲々立派な内容のものが一九九六年に出版されている。

海外への登山報告は日本人の活動史の一駒として夫々が貴重

な記録であるが、我々の仲間の手による報告の多くが記録的なものに片寄りすぎていて、いささか人間不在の感があった。ところが「この本は、あくまでも私の個人的なもので、山で感じたことをその時々に感じで書き綴った一個人の記録である。（中略）ここで編まれたものは、あるときは美しい環境の中で悦に入り、時には疲れ果て、そしてまたあるときは泥酔し、こんな状況の中で書き留めたものである。」と著者は述べていて（あとがきより）、この本の「文と味」はたしかに人間臭に満ちていて、この頃では珍しい一本である。しかもその素材が、世界最高峯の登路として最後に残っていた未完登の北東尾根（東ロングブック氷河上流の前進基地・C_3から頂上までの高度差約二五〇〇㍍、距離八千㍍余）の完登・降という快挙を、ほぼ登山計画通りの諸行動によって成功した。洵に見事な日大隊の軌跡を、著者の「心」の視点に立ってのびのびと綴ってあって、一読してたいへん面白いというのが評者の読後感であった。更に、本書は海外での登山に関心や経験をもつ人々に有益な情報源であるだけではなく、海外登山を経験されていない多くの本会々員諸兄姉にとっても、日本の海外遠征登山の一つのスタイルを知るのに役立つと考えられ、多くの会員に一読をお奨めしたい。

私ごとになるが、私と平山さんとは古い仲間的間柄である。私たちは第一次南極観測隊・一九五六年に参加して共に昭和基地の発見と建設とに努力した。南極については第一章第四節「南極の想い出」に触れられている。ついで、私は日本山岳会のチョモランマ登山隊・一九八〇年に、平山さんはその一五年後の日大隊に、二人共隊の責任者として約二ヶ月間の大本営生活を経験した。そして幸いにも両隊ともに夫々に登山目的（北壁、北東稜の初登降）を果すことができた。私たちは同世代の者とはいえないが、同じような「海と山」を経験した二人の奇縁を感じないわけにはいかない。

本文三五〇頁の本書を詳細に紹介できないが、全七章（一エベレストへの遠い道、二登山隊の発足、三ベース・キャンプへ、四ベース・キャンプの建設、五高所順応とルート工作、六登頂、七エベレストをあとに）の各章の中で評者の注目したところを拾って本書を概説してみよう。第一章には著者と山・登山とのかかわりが述べてあるが、七節の「なぜエベレストなのか」が面白い。ここに日大隊の「山」への想い・気持が素直に集約されている。

著者にとっての初経験の南極行は、当時の日本全体にとっても「未知・未踏」の空間への探検的な計画と実践であった。しかし今回のエベレスト行は「未知・未踏」の登路ではなく、これまでに七隊の先蹤者が試登降していた、むしろ「既知」の空間で、著者たちはこの未知と既知の違いを正しく捕えて、先蹤者の情報を徹底して検討した結論が第二章六節「登頂のための

戦略―シェルパと酸素のこと」に詳しく述べられている。日大隊のこの流儀については批判的異見もあろうが、ヒマラヤの巨峯の尾根筋の登り方として、今回の日大流が正統派的な「思考と行動」であると私は共感をもって読んだ。

私はかねてから海外への登山で社会性をもった大規模な隊の場合に、その隊の行動地域の自然や文化・環境と隊員・主体との実態を科学的に研究する必要があると了解してきたが、今回の日大学術隊は、ただ各自の分担した分野の調査・観測を行うだけでなく、気象学と医学の二分野にあっては登山隊の現場における意志決定に寄与する情報を提供してきた。著者はこのことを集約して「事実、学術隊の助言が隊の安全と成功に大きく寄与した」と述べている。これは一大学の山岳部の計画した登山隊らしいスポーツと学問の協力であって敬意を払いたい。

第三章は、ネパール経由でチベット領域のエベレスト登山のベース・キャンプ地に至るヒマラヤ旅行のスケッチであって、私の知らない旅路の様子を楽しく読んだ。著者にとって「エベレスト初見」（六節）の場所であるパン・ラ（五一五〇㍍の峠の頂き）に対して、チベットの首都ラサから入った私はパン・ラを越える前日にカツオ・ラ（五二〇〇㍍）から遠いチョモランマ峯を経験した。エベレストの登山史の原点といってよいチベット側の山姿は、子供の頃からの私のイメージでもあって「これこそエベレストだ」と誰もが感激する景観である。

第四章からが日大隊の登山活動を隊長が描写する本番である。四章の前半にはベース・キャンプ諸風景のことどもが綴られている。「二カ月近くに及んだベース・キャンプでの生活も、不愉快なことは一度もなく、快適であった」と書かれてあるが、私からすると著者の大本営生活振りは羨しく感じられた。日大隊には隊長役で十五年前に私と同行した神崎忠男会員（六〇〇二番）が参加しているが、エベレスト北面の「自然と文化」の姿の変化を総隊長が隊長に尋ねる一節が欲しいと思った。七節「登頂日の検討」のところは、同じような経験をした私にとって面白い一節であった。八千㍍以上の巨峯の場合、ピーク・ハンターは数日後の登頂を予測して基地を出発することが多いから、気象、登路状況、隊員の調子とを含む総合的な予想を検討して登頂日を想定する。正に登山隊長の正念場である。

第五章はヒマラヤの高峯へ登山する場合に必ず伴う「高度順応とルート工作」の実態がかなり詳しく述べられている。普段は平地で生活している我々が、五千㍍以上の高地に急に移動すると必ず「心と体」の能力が急に低下する。諸行動が一段とむつかしくなることの多い高所で充分に安全で高難度の行動をとれるようにするには、本番の高所活動の前に隊員を高所環境に逐次馴らしていく必要がある。これが高所順応である。次に、ヒマラヤの高峯登山は日本の山に登るより日時がかかる。頂上に至るまでいくつかのキャンプ地を建設する必要がある。又雪

線以上の山地には登山道がない。隊員の登降路の建設と保全は高山登山活動の基本的な仕事で、これを「ルート工作」と呼んでいる。エベレスト北東稜のような長大で高い尾根筋の登降では、各隊員の高度順応とルート工作とが計画通りにいくことが、登山成功の基本条件であって、著者はこの点に力を入れて日大隊のやったことを解説している。

第六章の「登頂」はこの計画の目標であるが、登頂即登山成功とはいえない。しかし、著者が一段と心をこめて書いたように受取れる三節「天のとき—成功をかえりみて」は今回の日大隊の「計画と実践」の跡を集約した著者の想いが込められていて感銘を受けた。とくに、「この天の時をつかむ作戦こそ、気象と医療を登山の大きな支援要素と考えて活用した今回の科学的登山の成果だと思っている。」という感想には共感した。

昔から我々の間では海外遠征は本隊が日本を離れるまでが「仕事半分」だと言われていた。事実、本書の頁編成も、総隊長の著者が初めてエベレスト峯を望見するまでに約半分の紙数を使っている。日大隊はおそらく最後の伝統を守った日本の海外遠征登山隊かもしれない。

（渡辺兵力）

会報「山」図書紹介一覧―一九九七年度―

●四月号（六二三号）

橋本廣編『とやま山紀行』（桂書房）

ニコラス・オコネル著／手塚勲訳『ビヨンド・リスク』（山と溪谷社）

片岡秀郎編／著『フィールドガイド・阿寒国立公園を歩く』（コモンサイエンス・インスティテュート）

●五月号（六二四号）

東北大学シッキムヒマラヤ学術登山実行委員会編『東北大学シッキムヒマラヤ学術登山報告書』（東北大学艮峻山の会）

川村明夫著『キャラバン東ネパールを行く』（北海道新聞社）

山学同志会編『ザイルを結ぶ男たち』（山学同志会）

西前四郎著『冬のデナリ』（福音館書店）

石田兵七著『雲水伴侶』（私家版）

●六月号（六二五号）

中村進著『南極点スキーマラソン　未知への旅』（読売新聞社）

豊田和弘著『ひとりぼっちの叛乱―とうちゃん巻機山に生きろ―』（山と溪谷社）

N.Prejevalsky 著／E.D.Morgan 訳 "MONGOLIA" (Vol.I, II) (Asian Educational Services)

ピット・シューベルト著／黒沢孝夫訳『生と死の分岐点』（山と溪谷社）

●七月号（六二六号）

内田嘉弘著『京都丹波の山』上・下巻（ナカニシヤ出版）

ドイツ・オーストリア・南チロル山岳会編 "Berg '97" Band 122

板倉登喜子著『心に残る花の山旅』（実業之日本社）

田畑真一著『南アルプスの登山史』（芦安村役場）

●八月号（六二七号）

大蔵喜福著『彼ら〝挑戦者〟新進クライマー列伝』（東京新聞出版局）

池内紀編／解説『江上波夫の蒙古高原横断記』（五月書房）

麻布学園山岳部・第八号『岩燕』一九八六～一九九五（麻布学園山岳部）

●九月号（六二八号）

宮下啓三著『日本アルプス―見立ての文化史』（みすず書房）

北村節子著『ピッケルと口紅』（東京新聞出版局）

湯浅道男著『たかが山登り　されど山登り』（成文堂）

石井光造著『山を楽しむ地図読本』（東京新聞出版局）

岩田修二著　自然環境とのつきあい方1『山とつきあう』（岩波書店）

リヒャルト・ゲーデケ著／島田荘平・島田洋子訳『アルプス4000m峰登山ガイド』（山と溪谷社）

●十月号（六二九号）

目賀田嘉夫他編『神戸一中遠足部・神戸高校山岳部史』（私家版）

梅木秀徳著『九重山博物誌』（葦書房）

一戸義孝著『花の山旅・みちのくの山』（実業之日本社）

●十一月号（六三〇号）

"THE JOURNAL OF THE MOUNTAIN CLUB OF SOUTH AFRICA—1995 Nr.98"

鎌澤久也著『雲南・カイラス……四〇〇〇キロ』（平河出版社）

John Biggar 著 "THE HIGH ANDES A Guide for Climbers." (Andes)

若松林治著『インドネシアの山登り』（のんぶる舎）

桂俊夫著 写真集『京・北山四季讃歌』（求龍堂）

●十二月号（六三一号）

北陸電力地域総合研究所企画『北陸の湖沼』（橋本確文堂）

穂苅三寿雄・穂苅貞雄共著『播隆』—増訂版（大修館書店）

『富岳への路—林田正幹遺稿・追悼集—』（林田正幹遺稿・追悼集編集委員会）

宮澤邦一郎著『尾瀬一〇〇年 登山と自然保護』（焕乎堂）

THE ALPINE JOURNAL 1997 Vol.102 388pp.

CANADIAN ALPINE JOURNAL 1997 Vol.80

THE HIMALAYAN JOURNAL 1997 Vol.53

THE AMERICAN ALPINE JOURNAL 1997 Vol.39

●一月号（六三二号）

大森薫雄著『ひざの痛みを治す』（東京書籍）

三枝礼子編／著『ネパール語辞典』（大学書林）

稲本正著『木の聲』（小学館）

横山厚夫著『山書の森へ』（山と溪谷社）

●二月号（六三三号）

J・クラカワー著／海津正彦訳『空へ—エヴェレストの悲劇はなぜ起きたか—』（文藝春秋）

山口ゆき子、横山隆、高柳生雄、川越はじめ、岡村美邦共著『一等三角点の山々』（新ハイキング社）

奥多摩山岳会編『奥多摩の尾根と沢』（東京新聞出版局）

百武充著『上高地の谷から』（八坂書房）

小野有五著『北海道森と川からの伝言』（北海道新聞社）

●三月号（六三四号）

藤田弘基著『エベレスト花街道を行く』（講談社）

石間信夫著／永野敏夫編『弧高の先蹤者八十歳現役で死す』（私家版）

日本山岳会マカルー登山隊一九九五編『マカルー東稜報告書』（山と溪谷社）

岡島成行著『林野庁解体論』（洋泉社）

札幌山岳会編『貢嘎山』（札幌山岳会）
児玉茂著『多雨林と火山　インドネシアの自然と人々』（古今書院）
斎藤重一著『鳥海山』（なんば書房）
日本山岳会石川支部編『峯』創立五十周年記念号（石川支部）
田淵行男記念館編『岡田紅陽・田淵行男の世界』（田淵行男記念館友の会）



追悼

中澤眞二氏（一八九一～一九九七）

本会最高齢の会員であり、名誉・永年会員でもあった中澤眞二さん（会員番号六二三）は、満百六歳の誕生日を一ヵ月後に控えた一九九七年八月二十八日、逝去された。百五歳を迎えても、ますますお元気であったので、この調子では当分長寿の記録を更新されるものと期待されていただけに、多くの会員から氏の急逝は惜しまれた。

中澤さんは、一八九一（明治二十四）年山梨県の笛吹川畔の農村、加納岩村（現山梨市下神内川）において、名主でもあり熱心なクリスチャンとしても知られた中澤徳兵衛氏の次男として誕生した。クリスチャン一家の一員として育ったこともあって、十四歳の時に地元の日下部教会で洗礼を受けられた。日川中学を出て、一九一〇（明治四十三）年旧制第一高等学校に入学。一高の寮では菊池寛氏と同室であり、また二年後輩の本会元会長日高信六郎氏も在学中であった。

登山に興味を持つようになったのは、十七歳の時に富士山に登ってからで、一高に入ってからは、甲斐駒、八ヶ岳、金峰山、浅間山、白根三山等に登り、東大（当時東京帝国大学）に入ってからも木曽駒や槍ヶ岳などを友人と登っていた。本格的な登山は東大卒業の年の夏、東大電気工学科で同級の別宮貞俊本会元会長の勧誘により、小山憲次氏と三人で針ノ木～平の渡し～五色ヶ原～立山～剱岳と歩いてからで、本会には翌一九一八（大正七）年八月、梅沢親光・高野鷹蔵両氏の紹介で入会されている。

本会入会後は、登山を目的にした山行は少なかったが、仕事が発電所の建設ということもあり、積雪期も含め、送電線保守のために、関東・甲信越の山に入ることも多く、これらを合わせると入山の日数は決して少ないものではなかった。

東大では電気工学を学び、卒論のテーマは発電所の運転、送電の様子を参考にした「運転供給の継続」であった。水力発電に興味を持たれたのは、暴れ川で有名な笛吹川畔で育ったことが少なからず影響していたことと思われる。

一九一七年（大正六）年に卒業すると、東京電灯㈱（東京電力の前身）に入社した。その当時は電力の開発期で、電灯はもとより、モーターの便利さがようやく認められはじめた時代で、入社後在籍二十五年間のうち二十三年間は、電気の主任技師として、戦前の関東周辺の発電所の大部分ならびに付随する受電・

変電所九ヵ所の建設を手がけた。すなわち、笛吹川第一・第二・第三、中津川第二、利根川水系の小松、魚野川水系の湯沢、猪苗代第三・第四、小野川、秋元、信濃川の各発電所の計十一ヵ所がその代表的なもので、中でも一九二二（大正十一）年に信濃川の水力利用のための揚水発電を創案したこと、一九三九（昭和十四）年に猪苗代湖の水を汲み上げて湖水を二倍の発電に供するための湖面低下工事を行い、大きな成果をあげたことが特筆される。

尾瀬を守った中澤さんの功績

中澤さんの登山界での大きな功績は、何といっても尾瀬の自然を発電計画から守ったことである。この点について、以下に要約して説明することにしたい。

本会に入ってからは、後に本会名誉会員となった武田久吉氏と中澤さんの実兄毅一氏（動物学）が『科学知識』の編集を通じて旧知の間柄であったこともあって、武田久吉博士とは特に親交を持つようになった。一九二三（大正十二）年、その武田博士の紹介で尾瀬の平野長蔵氏が中澤さんの会社を訪れ、尾瀬に発電所を作らないようにして欲しいと要請した。このことが、中澤さんが尾瀬に係わりを持った最初であり、その翌年には一人で案内人を伴い、四日がかりで尾瀬ヶ原から鬼怒沼、八丁ノ湯と廻り尾瀬の状況を視察している。

ここで、尾瀬の発電計画について、それまでの経過を辿り、問題の核心について触れておきたい。

尾瀬が世の中に知られるようになったのは、一八九五（明治二十八）年であったが、一九〇五年には早くも「尾瀬ヶ原水力発電ダム計画」が計画され、その後も一九一八年、二二年と話題になり、一九三五（昭和十）年には東電の大規模ダム計画、三八年には商工省、四四年にも日本発送電が計画。一九四七年には尾瀬沼取水工事が再開され、翌四八年には折からの電力需要の急増に応えて、商工省と日本発送電を中心とする「総合利水計画に基づく尾瀬ヶ原の電源開発計画」が浮上した。

このような状況のもと、尾瀬を植物研究のフィールドとしている武田博士らの学者、日本の風景の保存に努力する国立公園協会の方々、自然を守ろうとする文化人らが立ち上がり、これに国立公園の保全を担当している厚生省や文部省の行政当局者も加わって、この計画に反対する関係者が一体となって「尾瀬保存期成同盟」が結成され、一九四九年の秋には活動が開始されていた。新宿御苑の敷地内にあった国立公園協会の中に事務所を置く期成同盟では、一九四九年十月二十七日に第一回、十一月三十日に第二回の会合が開かれ、尾瀬ヶ原という山上の過小の受水域だけでは貯水池を満水にするのは無理であり、どうしても他水系からポンプアップする必要があり、計画自体に無理があるという宣言文を発表し、既に請願書を提出していたが、データの裏付けもなく、決定的な反対理由が見つからず為す術

追　悼
OBITUARY



名誉会員
中　澤　眞　二氏
NAKAZAWA Shinji （Hon. Mem.）
（1891～1997）



名誉会員
今　井　友之助氏
IMAI Tomonosuke
（Hon. Mem.）
（1910～1997）



名誉会員
吉　沢　一　郎氏
YOSHIZAWA Ichirō
（Hon. Mem.）
（1903～1998）



伊　藤　紀　克氏
ITŌ Norikatu
(1911～1998)



那須川　　浩氏
NASUKAWA Hiroshi
(1907～1998)



片　山　英　一氏
KATAYAMA Eiichi
(1917～1997)



大 屋 悌 二氏
ŌYA Teiji
(1933～1997)



田 村 扇 一氏
TAMURA Sen'ichi
(1928～1998)



原 田 達 也氏
HARADA Tatuya
(1935～1997)



尹　　官 炳氏
YOON Kwan Byung
(1922～1997)



佐々木　豊　喜氏
SASAKI Toyoki
(1937～1997)



広　島　三　朗氏
HIROSHIMA Mituo
(1943～1997)



盧　　周　孝氏
RO Juhyo
(1943～1997)



高　見　和　成氏
TAKAMI Kazushige
(1945～1998)

のない状態にあった。

中澤さんは、この計画が持ち上がった一九四八年には、友人二人と娘さんの四人で、個人的に鳩待峠を越えて尾瀬ヶ原に入り、翌日は三条の滝を見て、帰途尾瀬ヶ原より流出する水の勢いの良いのに見惚れ、発電所を作る場合の位置を想像するなどして三平峠から下った。そして自分なりに、揚水発電をするのであれば、何も不便な山上に多くの人達の反対を押し切ってまでして作る必要もないのではないかとの思いで、尾瀬ヶ原にダムを作った場合、果たしてどれだけの発電効果が得られるか計算してみることにした。まず降水量は、過去に現地に出張して行った豪雪地の降雪量の研究から、尾瀬一帯の降水量を一二〇〇㍉と推定、五万分の一地形図から流域面積を計算すると七八七五万平方㍍、年間降水量九四五〇万立方㍍、すなわち平均毎秒三立方㍍。これを貯えて八〇㍍の落差で発電しても一八〇〇kW（一日五時間の運転で約八五〇〇kW）程度の発電しか期待できないことが判った。これならば送電ロスの少ない、東京近郊の丹沢あたりに揚水発電所を作った方がよいとの結論に達したので、一九五〇年の春、当時GHQに勤務していた武田博士にその旨報告したところ、大変喜ばれ、三月八日に開かれる第三回の尾瀬保存期成同盟の会合で発表して欲しいということになった。

この席上、通産省から出席していた山岡包郎水力課長からは、前提となる尾瀬一帯の年間降水量一二〇〇㍉は少なすぎるのではないかという意見が出され、後日、尾瀬に最も近い田子倉測水所の連続十年間の降水データをもとに、計算し直した上で結論を出すことになった。後日、田子倉測水所の年間降水量は一六〇〇㍉と判明したので、その結果を報告したところ、山岡課長は即座に尾瀬の発電所計画は止める旨の英断を下した。その際山岡氏は一瞬の間をおいて、「中澤さんは発電所建設を長い間やってこられた。今回のような抗議は以後やらないで下さい」と付け加えられた。

中澤さんは次の第四回会議にも出席したものの、自らこの結果を公表すると大騒ぎになり、財界や電気事業者の反発を買うことになり、その結果目下出願中の変圧器に窒素を封入して変圧器油の劣化防止をはかる特許にも影響があっても困る、黙していても尾瀬の自然が守られればそれでよいのではないかと思い、以降は質問があれば答えるという方針で沈黙を守ることにした（中澤眞二氏回顧録による）。

この尾瀬保存期成同盟は、その後日本自然保護協会の設立にもつながり、危機に瀕していた尾瀬の自然は守られた。

尾瀬はその後、一九五二年に米国海外技術調査団（OCI）が尾瀬ヶ原貯水池化の勧告を行ったり、五五年には福島県と新潟県から「尾瀬ヶ原大規模ダム発電計画」が出されたが、日本自然保護協会の強力な反対によって着手されるに至らず、尾瀬

問題の危機は解消された。一方電源開発の問題も尾瀬を離れ、その後黒部渓谷の方に進んだことはご存知のとおりである。

その後自然保護の運動は順調に推移し、日本自然保護協会も三十周年を迎えることになった。そして一九八五年六月の同協会機関紙「自然保護」二七七号のコラム「熊ん蜂」に、「尾瀬の保護に邁進した役人たち」という気になるタイトルの記事が掲載された。すなわち、三十年誌の編集を通じて感銘を受けたことが二つあるとし、「一つは、自然保護行政を担う厚生、文部両省の役人が長期的視野に立ち、しかも使命感をもって一生懸命に行政の遂行に邁進したということ、いま一つは、日本自然保護協会の設立にかかわり合った人々の、自然保護に対する、確とした思想と意志の強さ、そしてその果敢な行動力についてである」（原文のまま）と記されていた。現時点で一般の人がこれを読む限りではこだわりなく読める文章であるかも知れない。しかし尾瀬の問題に深い係わりを持つ中澤さんにとっては、タイトルが強烈であったこともあり、役人の努力だけが尾瀬を守ったように思えるこの表現を見過ごすわけにはいかなかった。「この問題には知られていない部分がある。この際事実は正確に伝えておく必要がある」と、尾瀬ヶ原をダムから守った知られていない記録をまとめて国立公園協会宛てに投稿した。しかし協会からは、参考にはするが「国立公園」誌には掲載できない旨の返事が届いた（一九八六年二月八日付）。

中澤さんは、尾瀬を守るための必死の努力とその結果をまとめた記録の投稿を理由なく断られたことについてもこだわった。これでは三十余年にわたる発電所反対の苦心の最後が有耶無耶に終わってしまうことになり、尾瀬のような特別の場所に関する正しい記録が消えることになってしまうと思い、事実を明らかにするためのキャンペーンが始まった。

まず一九八六年六月には本会会報「山」四九二号に「尾瀬ヶ原を残した記録」を投稿したが、島田巽名誉会員から、この話はぜひ日本山岳会で講演をされては如何かとすすめられたこと以外には反響はなかった。そうこうしているうちに生き証人の山岡課長が亡くなってしまった。そこで一九八九年七月には一高同窓会会報一八九号に「尾瀬を残した記録」を投稿、さらに一九九〇年十一月、十二月にご子息透氏により「自然保護」三四二、三四三号に「尾瀬を守った知られていない記録」が発表された。

その後一九九一年五月十三日付で、中澤さんより本会宛てに「尾瀬を残した記録」について説明する機会を作って欲しい旨の要望書が届いた。これに対し本会では五月二十三日早速関係者が集まって中澤さんの話をきくことにしたが、このことについては「山」五五四号に「永年会員中澤眞二氏をかこむ談話会（沢井政信）」として掲載されている。当日の出席者には、中澤さんが当時果たされた努力と、これを公表しなかった事情がよ

く理解され感銘を受けた。

しかし中澤さんにとっては、もう一つの問題が残っていた。前述した国立公園協会の返信についてであった。本会では、中澤さんから要望のあった国立公園協会理事長大井道夫氏との面談の機会を作るべく努力した。幸い本会自然保護委員会委員の池田剛氏が同協会に関係されていたこともあって、七月二十六日、国立公園協会において大井理事長と面談する機会を持つことができた。その結果、大井理事長にも中澤さんの気持が通じ、一九八六年以来、中澤さんとの間で蟠りのあった問題も氷解することができた。

本会ではこれらの点を踏まえて、一九九一年十二月七日開催の年次晩餐会において、時の会長山田二郎氏より、尾瀬を守った功労者として会長特別表彰を行い、その労に報いることにした。

翌一九九二年は中澤さんが百歳になった記念すべき年であった。この年の五月に発行された「国立公園」誌五〇三号には、大井理事長自ら「中澤眞二氏の活躍」と題して筆を執り、尾瀬問題で果たした中澤さんの活躍を評価され、これを以って中澤さんが提起した一連の問題はすべて解決し、中澤さんご自身も百歳にして漸く肩の荷を下ろすことができた。本会では、一九九四年の年次晩餐会において、満百二歳の長寿を祝し、ますますのご健康を祈念して名誉会員に推挙した。

長寿の秘訣、健康法

中澤さんにとってもう一つ特筆すべきことは、長寿の秘訣ともいうべき健康法であった。稿が長くなるが、百歳を過ぎてなお矍鑠としていたという人は極めて少ないだけに、このことについても触れておくべきであろう。

中澤さんは一九四一年、信濃川発電所建設の完了を待って、思うところあって東電を退社した。五十歳の時である。退社の後は友人の配慮もあって、電気局、特許局、東芝等数社の嘱託や顧問を務めていたが、これらも終戦を機にすべて辞め、戦後は相模湾に面した海岸で電気製塩を営んでいた。しかし、この仕事は皮肉にも電力不足のため止めざるを得なくなった。

その後変圧器油の補給油が窮していることを聞き、変圧器油の劣化防止方法の研究に着目し、二、三の発明・考案の出願をし、特許を得ていた。一方米国GE社でもこの方法を実用化し、GE社と技術提携している東芝がこれを日本国内で製造することになったため、中澤さんの特許に触れることになり、思いがけない多額の特許使用料が入ることになった。そのため以後の五十年間は、那須、霞ヶ関、保土ヶ谷、戸塚等名門コースの会員としてゴルフを楽しみながら悠々自適の生活を送ることができた。

だが百歳を越える長生きの間は必ずしも平穏ばかりではなかった。八十歳で喘息にかかり呼吸困難に陥ったこともあったが、

この時はモルヒネの注射で助かり、八十五歳の時には肺気腫にかかったが、ステロイド剤の服用で八日間で完治することができた。さらに九十歳の時には胆嚢の摘出手術、九十八歳の時にはふくらはぎの痛みのため二回にわたり脚の動脈の手術を行った。しかしゴルフをやっていたため、概ね健康を維持することができた。体調が悪くなるとゴルフですぐ反応が現れた。筋力を鍛えるために丸善でアイソメトリック・トレーニングというドイツのヘッティンガーの筋力鍛練の本を購入して勉強したこともあった。

九十歳で胆嚢炎の手術で入院した後は、筋力を鍛えるために、腰を掛けた姿勢で脚を水平にして足首に錘をかけ、漸次大きくして六kgを六秒間保持することを毎日三〜四回繰り返した結果、一ヵ月半後にはコースを廻ることができるようになった。ゴルフの球が飛ばなくなった九十三歳の時には、スプリング秤量計を腕力で伸ばし、初め五kg弱であったものが、三ヵ月後には一三・五kgになり、球を二割も遠くへ飛ばすことができた。このように九十歳になっても筋力は鍛えられるから常に鍛練に心がけるようにとのことである。しかし百歳になってからは無理はせず、好きなゴルフも百二歳で打ち切り、以後は木彫りを行うなどして、常に健康管理に気をつかっておられた（これらについては「山」五〇〇号「老いて筋力を鍛える」、『文芸春秋』一九九二年五月号「百歳のゴルフ」を参照されたい）。

木彫りは野田惟恵先生に師事して木彫レリーフの作り方の教えを受け、これを日課として続け、友人・知人の顔を彫って贈り喜ばれた。その数は二百五十を下らない。中澤さんの話では、木彫をやっていると時間が経つのを忘れ、手先に全神経を集中できるので、老人に適した健康法を兼ねた趣味であり、指先を使うことがボケ防止にもなり、長寿の秘訣だという。

中澤さんに感心させられたことは、百歳になっても外出は常に一人ででかけ、本会へ来られる際はいつも電車と徒歩であり、タクシーなど心配すると、そのようなものが必要になったら来ないと、きっぱりと断られた。

何事も他人の手を煩わさずに自分でやることには徹底しており、百五歳になったことを記念してご自身で出版された『私の技術の一生―発明の切掛けを掴む』は、中澤さんが技術開発と発明考案に生きた自分史であるが、九四頁・ハードカバーの本書を、原稿の執筆から割り付け、校正、出版まですべてご自身でやられた由である（「山」六三二号「本会最長老・中澤眞二名誉会員の近況」参照）。

最後に、この本にある「多摩川の洪水」という九十八歳の時に書かれた随筆が特に印象に残るので、このことに触れたい。先年、多摩川左岸の土堤が破れて狛江市が水害を受けたことがあった。その後の修復は、応急修理とも思える改修工事にすぎなかった。そこで中澤さんは「現在の状態では堤防は破壊され

ないまでも、狛江市に水害の起こることは必至である。何故に河川を管理している建設省は調査しないのか」と、ダム建設の専門家としての見解が説得力ある文章でまとめられていた。

このことについては、私も常に関心を持って眺めてきたが、本年になって、ようやく建設省も重い腰を上げてか、本格的な改修工事が行われている。小田急線で和泉多摩川の鉄橋を渡るたびに、この改修された様子を是非見ていただきたかったと、在りし日の中澤さんを思い出している今日この頃である。ここに謹んで中澤さんのご冥福をお祈りして追悼の言葉としたい。

百五歳まで生きられた本会最長老の追悼文を、四十年近くも若輩の小生が執筆することは誠に僭越であるが、他に適当な方がおられないという事情もあり、中澤さんの晩年に、副会長時代を含め十三年間程係わりをもったこともあり、執筆を引き受けた次第である。

（松田雄一）

吉沢一郎氏（一九〇三〜一九九八）

本会名誉会員の吉沢一郎さんは、一月二十二日、呼吸不全のため急逝された。享年九十四歳だった。

私が吉沢さんに最後にお目にかかったのは昨年の十二月の初めだった。軽い脳梗塞で倒れたと聞き、アンデスの仲間があわてて東横病院に駆けつけたのだが、その時はもう元気を取り戻しており、行きつけの喫茶店のご主人が届けてくれたコーヒーをおいしそうに飲んでいた。その後何回かお見舞いに伺った人々からも、順調に回復に向かっており、リハビリをめぐって主治医と大喧嘩したという武勇談まで聞こえてきて、この分なら退院間もないと確信していた。それが、食べたものが器官に入ったのが原因で呼吸不全のため突然亡くなってしまった。吉沢さんは、九十歳を過ぎてからは、さすがに足が弱り、歩くのが不自由になったが、それでも、読書と執筆のために毎日馴染みの喫茶店に杖をついて出掛け、本屋廻りも欠かさなかった。一年程前に会った時には、エプシュタインの『宋慶齢』を読みながら、中国近代史のおさらいをしていたし、「新聞を読んでもよくわからないものだから」と、複雑なバルカン半島の歴史を図にまとめていた。長命ではあったが、これから先やりたいことが山ほどあって、自分自身が一番無念だったに違いない。

吉沢さんが登山の面でもっとも精力的に活動したのは、大正の終わりから昭和十年代初頭にかけてである。わが国の近代登山の黎明期だった。自らも創立者の一人だった一橋大学山岳部（一九二二年創立）の現役、若手OBとして、あまり人の入っていない渓谷の沢登りや冬季のスキー登山で活躍し、幾つもの

初登攀記録を残した。一九三〇（昭和五）年には、剱岳東大谷左股を初めて登り、早月尾根の上部で今日まで残る「カニのハサミ」の命名をしている。しかし、吉沢流の言い方では、「私の登山は、事の大小を問わず、要するに山旅の域を出ていてない。極限に挑むなどという大それたことはやったことがない。いうならば、明治の先覚者たちの猿真似をしてきたに過ぎない」ということになる。

吉沢さんの登山人生を振り返ってみると、決定的な意味をもったのは、何と言っても一九六一（昭和三十六）年のアンデス登山だった。もし、あの時、吉沢さんが、母校一橋大学のアンデス登山隊の隊長を引き受けず、アンデスに行くことがなかったら、吉沢さんは、きっと、定年後の余生を好きな本と地図に囲まれて過ごす一好事家として別の人生を歩んでいたに違いない。しかし、吉沢さんは、五十七歳の働き盛りだったにもかかわらず、恵まれた地位にあった仕事を捨てて、アンデスに向かってしゃにむに走り出した。それが転機になって、もう一つの人生を切り開いた。私もその時の若手隊員の一人であった。アンデスでは、幸い、最後に残された六〇〇〇㍍峰と言われたプカヒルカ北峰（六〇五〇㍍）をはじめ、全部で十七峰に登頂、そのうち十一峰が初登という成果を収め、かつ、未踏査だったププヤ山群もその全貌を明らかにすることができた。私個人としては、吉沢隊長と二人でカカワイチョ峰に初登し、吉沢さんに喜んでもらったことが、懐かしい思い出である。しかし、この遠征（吉沢さんは遠征という言葉が嫌いだった）がもし成功したとすれば、そのほとんどが吉沢さんのリーダーシップの賜であったということが出来る。それほど、遠征そのものが吉沢色の濃いものだった。プカヒルカを目標にしたのも、吉沢さんが長年文通してきたアメリカの登山家ニック・クリンチ氏（後のＡＡＣ会長）の情報と示唆が決め手になったからだし、また、「地図の空白部」の踏査といった機会は滅多に得られるものではないが、ププヤ山群に目を付けたのも、一九四二（昭和十七）年に出版した二冊目の著書『北の山　南の山』で既に南米の山を紹介し、常に内外の文献に目を通していた吉沢さんならではの選択だった。こうして、三十歳以上年の離れていたわれわれ隊員は、初見参の若輩集団だったにもかかわらず、当時世界が注目していたアンデス登山の最先端の課題に挑戦し、登山の世界でのグローバル・スタンダードを身をもって知ることを通じて、かけがえのない経験を積み、その後のヒマラヤ登山への扉を開く鍵を得ることができた。

この時を契機に、吉沢さんの人生は様変わりした。「一生を山と生き、山に生涯を捧げる」生活に拍車がかかり、国際的な活動もどんどん加速していった。一九六八年から一九七二年まで日本山岳会副会長をつとめ、一九六八年と一九七七年の二回、国際山岳連盟の日本代表として出席している。また、登山家と

研究者をつなぐユニークな組織として、一九七〇年に日本ヒンズークシュ・カラコルム会議を主宰、発足させ、現在も活発な活動を続けている。これは、その前年に開催されたオーストリア山岳会主宰のHKTをヒントにしたものだが、吉沢さんのアドルフ・ディームベルガーとの長年に亘る交友と情報交換が下敷きになっていることはよく知られている。一九七四年には、奥アマゾン探検隊本部長としてベネズエラ、コロンビア、ペルー、ボリヴィアを訪問、一九七七年には、日本山岳協会のK2登山隊総指揮として、七十三歳の身で、自らも五二〇〇㍍のベースキャンプに二十日間滞在している。

この間に、吉沢さんは登山情報に関する内外の架け橋的存在として余人をもって代え難い役割を果たしたことが特筆される。吉沢さんは、豊富な人脈、優れた語学力を駆使して多くの海外の知友と文通を続け、かつ丹念に文献を渉猟し、海外の登山事情に精通しており、「吉沢情報センター」ともいうべきネットワークを構築していた。吉沢さんは、日本山岳会の名誉会員で一九六一（昭和三十六）年以来長年に亘って海外連絡委員を勤めていた他に、英国山岳会、アメリカ山岳会、カナダ山岳会、ヒマラヤン・クラブの各会員でもあった。訪ねてくる人は拒まず、誰に対しても快く情報を提供し、必要ならば知恵も貸し、海外登山をする若者たちの「駆け込み寺」の役割も果たした。情報の海外への発信という面でも大きな貢献をした。二回に亘る国際山岳連盟への日本代表としての出席もさることながら、一九七四年の英国山岳会報（AJ）に掲載された「日本の登山」という寄稿などは、他の誰も真似できない国際人としての優れた仕事であった。

研究、翻訳、執筆の活動は晩年まで積極的に続けられた。吉沢さんは「壮にして学べば、老いて衰えず。老いて学べば、死して朽ちず」（佐藤一斎）を正に地で行った人だった。一九八〇年に出版された自伝的回想録『山へ　わが登高記』は、本人にとって三冊目の著書であるが、吉沢さんの登山活動と登山観を余すところなく伝えている。訳書も九冊あるが、吉沢さんにとっては、七十歳を過ぎてからのG・モーガン『ネイ・イライアス伝』（共訳）とE・P・ヒラリー『ヒラリー自伝』の二作がもっとも愛着が深く、自信作だったようだ。客観的に見ても、本の選択といい、仕事の中身といい、吉沢さんの年輪を感じさせてくれる優れた翻訳である。

日本山岳会の会務としては、戦前から、長年に亘って、何度も理事、評議員を歴任し、日本山岳会の発展に寄与してきたが、『会報』、『山』、『山岳』への寄稿は実に多く、『山岳』への寄稿だけでも三六扁にのぼり、日本山岳会への愛着の深さをよく示している。月刊「会報」（第三八五号以降「山」と改題）については、昭和十三年四月（七五号）から十四年二月（八四号）までと昭和四十年六月（二四〇号）から昭和四十三年（二七五

号）までの二回、編集に携わり、今は廃刊になってしまった「山日記」も、第十輯（昭和十四年刊）から第十二輯（昭和十六年刊）の三年間分の編集代表を勤めた。こういった裏方での貢献が大きかったことを特記しておきたい。

吉沢さんはまた、蔵書家としても知られていたが、吉沢さんの死後、その蔵書約三千冊（洋書千五百冊、和書千五百冊）が、山と溪谷社のご好意で、散逸することなく全て「吉沢一郎記念文庫」（仮称）として保管され、一般にも閲覧に供されることになったのは大変喜ばしい。

吉沢さんは、四十年前にお目にかかった時から、既に亡くなって何年にもなる私の父より年長であったし、三十五歳の年齢差はいくら年をとっても変えようがない。幾つになっても、私にとっては、恐い父親のような存在だった。しかし、ここ数年は、歳の差がうんと縮まったような気がしていた。それは、吉沢さんも人並みに高齢になって子供に返るといった面が出てきたからでもあるが、それよりも、吉沢さんは、会えば昔のことよりこれから先のことばかり話すので、未来について共有する部分が多くなったからに違いない。吉沢さんは、酒を全く飲まず、そのかわりヘビースモーカーで、すこぶるつきのコーヒー愛好者だった。一本気の江戸っ子で、曲がったことは大嫌い、何でもずけずけ云うものだから、煙たがられたり、誤解を受けることも多かったようだが、年輩の人たちの間では、クマさんとか一ちゃんとかと、親しみをこめて呼ばれ、世の中の毀誉褒貶に関係なく、好きなことを好きなようにやって、まっしぐらに進んできた。とにかく、九十歳を過ぎても、その情熱と好奇心は一向に衰えず、常に自分のやりたいこと、やるべきことを追い求める姿勢を崩さなかった。書斎での小さな発見に心躍らせ、こだわった。チョモラリーに初登頂したスペンサー・チャップマンの代表作『ジャングル　イズ　ニュートラル』の翻訳は既に九〇パーセント以上完了して、出版を企図していたし、ダイネッリが八十一歳の時に出した『カラコルム登山史』の向こうを張るような中央アジアとヒンズークシュ、カラコルムをめぐる研究の集大成も進めていた。今や全て夢になってしまった。しかし、吉沢さんが播いた種子が時間を経ていろいろな形で開花することを期待したい。吉沢さんが常々言っていたのは「山登りは山に登るだけが能じゃない。真の登山者とは、山に登り、山の書を読み、常に山を考えている人のことだ。実践と研究と思索（反省）の三つを兼ね備えて、はじめて登山家と言える」ということだ。これが吉沢イズムの核心であり、吉沢さんが九十四年の一生をかけて育ててきた考え方だ。これだけは肝に銘じて心掛け、後輩にも伝えて行きたい。合掌。

略　歴

一九〇三（明治三十六）年十一月六日　東京・京橋区宗十郎町

（現在の銀座）に生まれる
一九二二（大正十一）年　東京商科大学（現一橋大学）予科入学。同時に同年創立の一橋山岳会に入会、活発な登山活動を開始
一九二五（大正二十四）年　日本山岳会入会。会員番号九三〇。紹介者は、『山へ　わが登高記』には「槇さんに推薦して頂いたと記憶する」とある。
一九二八（昭和三）年　大学を卒業、日本陶管入社（その後、太平生命、日本団体生命、電通各社に勤務）
一九六一（昭和三十六）年五月～十月　一橋大学アンデス登山隊隊長としてペルー、ボリビアに赴き、帰途、ＡＡＣで講演を行う
一九六八（昭和四十三）年　日本山岳会副会長就任（～一九七二年）
同　年十月　第二十八回世界山岳連盟総会（ロンドン）に日本代表として出席。その機会に世界各地の山岳会、岳人を歴訪（九～十一月）
一九七〇（昭和四十五）年三月　第一回ヒンズークシュ・カラコルム会議開催（裏磐梯）
一九七四（昭和四十九）年六月　奥アマゾン探検隊本部長としてベネズエラ、コロンビア、ペルー、ボリビアを訪問
同　年六月　山と渓谷社から山溪山岳賞受賞
同　年十月　「カラコルム・吉沢一郎古希記念文集」刊行
一九七五（昭和五十）年　日本山岳会永年会員
一九七七（昭和五十二）年五～八月　日山協Ｋ２隊総指揮としてＢＣに二十日間滞在、チトラル、ハイバー峠訪問
同　年十月　第三十九回世界山岳連盟総会（メキシコ・シティー）に日本代表として出席
同　年十二月　日本山岳会名誉会員に推挙される
一九九八（平成十）年一月二十二日　急性呼吸不全のため逝去

著訳書

一、著　書
『登高記』一九三〇年（古今書院）
『北の山　南の山』一九四二年（三省堂）
『山へ　わが登高記』一九八〇年（文藝春秋社）

二、訳　書
『ウィンパー伝』Ｆ・Ｓ・スマイス著　一九六六年（あかね書房）
『シルクロードの山と谷』Ｇ・Ｎ・カーゾン著　一九六七年（あかね書房）
『ティリッチ・ミール登頂』アルネ・ネス著　一九六七年（あかね書房）
『わが半生の山々』Ｅ・Ｅ・シプトン著　一九六七年（あかね

書房）

『赤道の雪』H・W・ティルマン著　一九六七年（あかね書房）

『そこに山があるから』W・アンスワース著（訳者代表）一九六八年（経済往来社）

『カラコルムの夜明け』W・M・コンウェイ著　一九六八年（あかね書房）

『南極大陸横断』W・G・ロウ著　一九七〇年（文藝春秋社）

『ネイ・イライアス伝』G・モーガン著（共訳）　一九七六年（白水社）

『ヒラリー自伝』E・P・ヒラリー著　一九七七年（草思社）

『マウンテン・ワールド』スイス山岳研究財団編・第一七巻　一九八八年（小学館）

三、監修書

『登山の技術』G・シュトルム、F・クレッテルン著　一九七二年（鶴書房）

『日本山岳地図集成』第一、二集　一九七五年（学習研究社）

『世界山岳地図集成』ヒマラヤ編　一九七七年（学習研究社）

『世界山岳地図集成』ヒンズークシュ・カラコルム編　一九七八年（学習研究社）

『コンサイス外国山名辞典』一九八四年（三省堂）

（中島　寛）

伊藤紀克氏（一九一一〜一九九八）

一九九八（平成十）年四月十二日付けにて伊藤君の訃報に接したが、元気に過ごして居るものと思っていた彼が小生より先立って逝くとは考えても居なかった。三年前の北大医学部同窓会誌に載せられた彼の消息を再記してみると、「戦前、戦中、戦後と生きのびて来た後、来年で卒業六十年になる。過ぎてみると早いものだ。『敗戦五十年の節目』とは何かと言われているが広島の原爆五十年をテレビで見て感慨深い。十六年間の大学教室の研究も治療も未完全の儘だ。戦争中の二十年間はポッカリ穴の開いた様だ。未だ六十歳であるかのような気持もその為かも知れない。週六日間午前中だけの現役勤務が続いている。先に患った狭心症の治療経過も良く週二回のゴルフを継続し、旅行好きで十数回の海外旅行も経験しているが最近は足腰も弱くなり、相棒が居なくてはと家内に止められている」と述べているが、その後勤務を中止し悠々自適で暮らしている筈であった。因みに次に彼の山歴に就いて回顧してみよう。

彼は小生より一年下級の医学部出身であった。入学後は直ちには山岳部へ入部していなかったが、同級生に故豊田春満（日本山岳会会員、会員番号一五七一）外一名が入部していた。又

彼の長兄義輝氏は北大山岳部報の表紙図案の原作者であった。氏は故伊藤秀五郎（日本山岳会会員、会員番号一〇七八号）等と共に「サトポロ」という文芸紙を発刊していた縁に由ったものであろう。

紀克君が登山に魅せられていった抑々は、一九三一（昭和六）年七月、小生は同僚と共に彼と他一名の新人を引率して十勝国戸蔦別川の懸崖の函を苦心して誘導遡行し支流のエサオマントッタペツ川を遡り、雄大なエサオマントッタペツ圏谷を通過してその頂点から新冠川上流に下り、更に幌尻岳への急峻な滝沢の困難な遡行の末、七ッ沼圏谷を経て登頂を果たし、更に戸蔦別岳から美生岳へと国境尾根を縦走し美生川へと降る相当に過酷な山行を行った。これが彼の最初の山旅であった。

国境尾根より沢頭へと降る残雪は多く、雪渓は急斜面の上、軟雪でありアイゼンの効果も不充分であって山馴れしていない新人にはバランスを取るのに困難であった。我々は新人一人宛てを確保して下降を試みたが遂に滑落の羽目に陥った。下方には滝口が轟音を上げている。跳転しては最悪の状態となるので尻滑りで転落を起こさぬ様抑えつけて確保するが滑降は数百㍍に及んで残雪の切れる滝の数百十㍍上の処で漸くかろうじて滑落を止め受け生命をとり止めることが出来た。この難儀な危険な登山を経験させたのであるから当然彼は登山に懲りたであろうと考えていたが、寧ろその時のスリルが登山の興味深い印象となってか、彼は翌月八月には大雪山より十勝岳への縦走を敢行し、更に武利岳をも登頂したのであった。

すっかり登山の魅力の虜（とりこ）となった彼の山歴を顧みると――

一九三一年二月　天塩岳、ニセイカウシュペ山
一九三一年五月　支湧別岳、武利岳、屏風岳
一九三一年十月　ニセイカウシュペ山
一九三一年十二月　芦別岳
一九三一年十二月～一九三三年一月　札内岳
一九三二年二月　芦別岳、夕張岳
一九三二年四月　空沼岳、漁岳
一九三二年五月　美生岳
一九三二年七月　礼文島、利尻岳
一九三三年十二月～一九三四年一月　愛山渓温泉より大雪山
一九三四年二月　後方羊蹄山
一九三四年三月　一八三九㍍峰―カムイエクウチカウシ山
一九三四年五月　芦別岳
一九三四年七月　美生岳―戸蔦別岳―幌尻岳―滑若岳
一九三五年三月　谷川岳、穂高岳
一九三五年五月　トムラウシ山
一九三五年七月　エサオマントッタベツ山―カムイエクウチカウシ山
一九三五年八月　イドンナップ岳

一九三六年二月　ピンネシリ山
一九三六年八月　イドンナップ岳
一九三七年十月　大雪山
一九三八年二月　芦別岳

以上登山と平行して冬山登山合宿には一九三一（昭和六）年十二月、二年班隊員として十勝岳、富良野岳、上ホロカメットク山、オプタケシケ山に登山、一九三二年十二月二年班のアシスタントリーダーを勤め一九三三年九月には庶務幹事を勤め、同年十二月合宿には三年班のリーダー、一九三五年十二月三年班リーダー、一九三六年十二月先輩班リーダー、一九三七年十二月先輩班隊員として参加して後輩指導に甚大な貢献を盡くしていた。

その以後は大学外科医局の勤務に引き続き大東亜戦争に徴用されたりして当分は登山から遠ざかっていたものと推せられるが、一九三五年二月日本山岳会に入会した（紹介者逸見真雄、徳永正雄）。会員番号一五七四号を附せられ一九八五年永年会員となり今日に至っているが一九九〇年六月北大山の会会報消息欄に「作年は朝比奈、太田、駒沢の何れも七十歳を越えた者だけでアポイ岳と富良野岳を登りました。一日の登りが一〇〇〇㍍が限度であることを知りました」と感想を述べられて居り、なお時々は登山を続けて居られたことが伺われる。然しその後脚力も落ち病院々長の職からも引退されていたのであったが、冒頭の如く逝去されて仕舞った。まあ年齢に不足は無いとは謂うものの哀悼極まりない次第である。君の山歴を回顧しつつ合掌。

（相川　修）

那須川　浩氏（一九〇七～一九九八）

那須川浩さんが、一九九八（平成十）年四月一日老衰とも言える自然気胸でお亡くなりになった。お齢は九十歳と五ヵ月であった。

追悼文を書くために、石神井町のお宅に伺った。仏壇で焼香を済ませ、山日記を見せて戴きながら、奥様から生前の那須川さんのお話を聴くことができた。

那須川さんは、日本山岳会に深い愛着を持っておられ、山に登れなくなってからは、『山岳』はもとより、毎月送られてくる「山」が届くのを楽しみにしておられたそうである。一冊の大学ノートを拝見し、びっくりする。「登山譜」と題され、山登りを始めて山に登れなくなるまで六十三年間、登山・スキーの場所、年月日、単独、もしくは同行者があった場合はその氏名、案内人等の名前までが、もれなく記載されてあった。並は

ずれて几帳面な方であったと思う。

那須川さんは、一九二一（大正十）年六月十四歳で郷里の山、高縄山（九八六㍍）に登る。最初の登山であった。石鎚山近代登山の先駆者の一人でもあった。石鎚山周辺のパイオニアワークは、松山高等学校・松山中学校の営為に負うところが大きい。那須川さんが石鎚山に登ったのは一九二二（大正十一）年七月、松山中学三年生十五歳の時であった。松山高等学校に在学していた兄、渡さんたち合計七名で登頂している。松山高等学校・松山中学校のアクティブメンバーの中に那須川兄弟の名前がある。

那須川さんは、スキーが上手であった。上達が早いことにも驚く。一九二五年三月、札幌郊外で初めてスキーを習い、その三月には、兄、渡さんたちとスキーツアーに行く。このスキーツアーというのが、中央小樽駅から、遠藤山―毛無山―蘭島駅。このコースは長く、アップダアウンも酷しく、知る人ぞ知るハードコースである。

会報「山」（一九七〇・七）「谷地平生活」の中で、昔、吾妻山に山小屋が何もなかった頃の春三月、一切経の硫黄製錬所小舎を根拠地として、東吾妻や家形山に一週間ばかりスキーツアーを楽しんだことがあり、私にとって四十二年ぶりの吾妻です、と回想されている。四十三年前とは、一九二八（昭和三）年三月のスキー行である。

一九三五（昭和十）年の一月から四月にかけて、十勝岳、上ホロカメットク、美瑛岳、富良野岳、室蘭岳、ニセコアンヌプリなど、実に十三回に及ぶスキー登山をしておられる。

この年の九月、立教ＯＢの奥平昌英さんと有珠岳に登る。奥平さんは大学卒業後北海道に赴任していたのである。那須川家と奥平さんとの縁に触れておこう。

那須川さんのご尊父は、お名前を良と言い弘前高等学校の英語の教授をしておられたことがあった。奥平さんは、一時期那須川教授の家に預けられたのである。奥平家は伯爵である。奥平家では、昌英さんに人間としての教育をみっちり仕込んでもらうため、弘前の那須川家に預けたと言う次第である。家に居れば、何人もの女中にかしずかれていた昌英さんは、中津の殿様の御曹司であっても、便所掃除までさせられたそうである。奥平さんは、那須川家での影響があってか、立教に入ると山岳部に入部する。立教山岳部では黄金時代を担う一人となる。

奥平さんは、一九三六（昭和十一）年の立教大学ナンダコート遠征隊に当然参加できると思っていた。ところが奥平家からきつく止められてしまった。せめて写真機だけでもヒマラヤで使って欲しい。隊員の山県一雄さんに貸すことにした。山県一雄さんはこの写真機で秀作を残している。ナンダコート隊が登頂に成功し帰国後、写真機は奥平さんの手許に戻った。奥平さんは、ナンダコートの頂上まで行ってきた写真機と言うことで、

以前御世話になったお礼の意を込めて、那須川浩さんに進呈することにした。那須川さんはこの写真機を大事に使用されていたそうである。だが、那須川さんは、この写真機は自分が持っているよりも、やはり堀田さんの所の方が納まりが良い。こう思って堀田さんに話したのだが、堀田さんは自分も歳だから、いっそ日本山岳会に寄付したらどうか、と言うことになり、写真機は、那須川さんから日本山岳会に寄付され、現在山岳会の飾り棚の中に納まっている。この写真機は、山口俊輔さんの手を煩わし修繕可能なところは手入れしてある。機種はツァイス・イコンである。

一九三六（昭和十一）年、那須川さんは趣味が嵩じて、室蘭岳裾野、輪西川の奥に有志七名でカムイタットヒュッテを設立する。春夏秋冬、小屋での生活を謳歌される。

一九三九（昭和十四）年四月、額田敏さん、渡さん等で富士山をスキー登山する。一九四一（昭和十六）年一月赤石岳登山。この登山は一九四一年の一月一日に、小渋湯入りから始まる。遭難事件があって人夫は全部かり出されて、傭うことができず単独行と覚悟する。主稜に出るまで途中で一回ラッセルして引き返す。一月四日、登頂日。手記には「午前二時起床、弦月既に没して薄曇りらしく星見えず。三時出発」とある。国境尾根に達すると、風は強く蒼氷が現れ緊張する。午前十一時二十五分遂に頂上を踏む。写真数葉を撮り直ちに下山。記録にとどめておくべき登山であった。

一九四五（昭和二十）年一月奥白根山登山、甥、長さん。一九四六（昭和二十一）年四月太郎兵衛平から薬師岳をショートスキーで往復、単独。五月剱岳、立山雄山、大汝山登山、単独。一九五二（昭和二十七）年五月吹浦から鳥海山往復。後藤幹次さん、金坂一郎さん他。「肺結核発病、左上葉区域切除手術」。一九五九（昭和三十四）年八月息子征馬さん、案内人、人上げ夫で飯豊連峰縦走。一九六〇年二月子持山、小野子山、十二ヶ岳、藤島敏男さん、望月達夫さん。七月空木岳、南駒ヶ岳。野口未延さん、征馬さん。

この年の五月、案内人中谷由松を連れた白山ショートスキー登山があるが、那須川さんのスキーは、どうやらこの時が店仕舞いだったようである。一九六二年「胸部補正成形手術」。

一九六五年六月から七月、スイスの山旅。ゴルネルグラートからケーブルでリッフェルボーデン駅。ストックホルン（三五三二㍍）登頂。マッテルホルンヒュッテ（ヘルンリーヒュッテ）往復。高度馴化をした後、いよいよマッテルホルンに挑戦する。ゾンメルマッテル　レオと言うガイドを付けての登攀であったが、標高三九〇〇㍍で引き返す。那須川さんは、登頂できなくても、このマッターホルン登山に大いに満足したことが、記念の写真とともに山日記に書き残されている。

一九七四年九月、那須川さんは、かぬか平の山々に登ってい

る。「山」（一九七五・三）に、遠島山、堺の神岳（ママ）、薬師岳を寄稿している。堺ノ神山（一三一九㍍）、このあたりの山は、「かぬか平（ディ）」の山と呼ばれている。堺ノ神山には、笠原潤二郎さんが同行する。同じ支部の佐藤敏彦ドクターの説明図によって害鷹森（一三〇四㍍）を越えて行く。害鷹森から堺ノ神山にかけては放牧地で、なだらかな尾根筋には芝生が広がり、ダケカンバの疎林が多く、明るい感じで気楽にどこまでも歩けた。かぬか平のよさである。

山日記には、害鷹森も堺ノ神山もなかなかいい山で嬉しかったとあった。笠原さんも佐藤さんも鬼籍に入れられてしまった。

那須川さんは、兄弟が十二名いた。ご子息二人の他に、孫、甥、姪がおられるが、よくスキーや山登りに連れて行かれている。めんどうみのよい方だったのだと思う。雫石鉱吉さんも弟さんの一人である。雫石さんには、『足で見る山』と言う感動的な著書があるが、この本の中に那須川さん兄弟のことが記されている。那須川さんは雫石さんと、一九二七（昭和二）年四月、三峠山。五月十文字峠、梓山、甲武信岳、国師岳、金峰山、と歩いている。一九三五（昭和十）年七月には笛吹川を遡行し甲武信岳、破風などに登っている。

那須川さんは、大病を患ったにもかかわらず、日本全国を隈無く、季節を問わず、高山から中山、低山まで山歩きをしておられた。那須川さんの登山は、あえて言うと単独行が特徴的だと言えると思う。いっしょに行った方の中では家人が一番多い。奥様のことである。前述したように、同行者には日本山岳会のお歴々が登場してくる。

那須川さんは、次第に東武東上線や秩父鉄道などを利用した山歩きが多くなってくる。最後の山となってのは奥武蔵山域の最北部にある登谷山（六六八㍍）であった。小川町からバスで打出。二本木峠から北上して愛宕山―皇鈴山―登谷山―三角点―東北尾根から寄居駅。冬の日のハイキングなので、天気がよければ両神山、赤城山、日光連山、関東平野の展望が素晴らしかったと思う。

最後は一九八四（昭和五十九）年十二月（この時七十七歳二か月）で、筆が置かれている。

那須川さんは、晩年、体重が三十五㌔まで落ちてしまい、体力も衰えてしまわれたが、それでも毎日、近所をカタカタと杖をついての散歩をかかさなかった。家では、テレビで大相撲を観戦したり、スポーツの中継放送を楽しんでおられたそうである。

心よりご冥福をお祈り申し上げ筆をおく。

略　歴

一九〇七年　十月十七日東京に生まれる
一九二四年　愛媛県立松山中学校四年修了

一九二七年　旧制松山高等学校卒業
一九三〇年　東京帝国大学法学部卒業
一九三〇年　株式会社日本製鋼所入社
一九四五年　日本鉄鋼連盟に移る
　日本山岳会入会には一九四一年入会。会員番号二〇七六番。紹介者は那須川渡、額田敏。一九九一年永年会員

（堀田弥一・中村太郎）

片山英一氏（一九一七～一九九七）

一九九七（平成九）年九月五日、肺ガンのため薬石効なく、八十一歳をもって生涯を閉じられました。知らせを受けた二ヵ月前の七月六日には、労作の『私のブータン・カメラ紀行』の出版記念会が開かれ、壇上でのにこやかなお姿、テーブルを廻りながら、出席者と思い出話や、苦労話に花が咲き、自席に戻る事もなく、出席者と歓談されておられたお姿からは、とても信じられない悲報でありました。

片山様は、一九一七（大正六）年神戸市に出生されました。一九三〇（昭和五）年兵庫県立第一神戸商業学校に入学、山岳部に入部。一年先輩の、生涯の岳友となった故前田浩氏（元兵庫県山岳連盟理事長・神戸山岳会々長）と出会われた。卒業後、県商山岳部ＯＢによる「嶺同人」の発足に参加。一九四〇年には、戦時下に登山団体の統合が行われ、神戸山岳会が編成された。顧問に藤木九三、津田周二両氏、会長に水野祥太郎氏を迎え、会の結成準備に奔走されました。一九四三年日本山岳会入会。同年応召、出征。その直前に、静かな上高地へ行かれたと聞く。一九四六年復員。物資不足の中、家業の再興、登山活動の再開とエネルギッシュな活動がはじまるのであります。一九四九年には、事業の本拠地を大阪に移し、㈱光陽社を設立し、社長に就任。この間、登山活動も活発に続けられ、神戸山岳会の中心メンバーとして活躍されるとともに、兵庫県山岳連盟結成への準備にも盡力されました。一九五二年には、国体の山岳部門に監督として参加された。以後、岳連、神戸山岳会の海外登山隊への参加・援助が続けられました。ブータンへの関心は、一九七九年のはじめての訪問以来、七回となり、ブータン協会を通じての親善活動と、得意のカメラで、美しい自然と、親しみやすい風俗の撮影は、数千枚のスライドとして、集められ、一九九七年に発行された『私のブータン・カメラ紀行』に集約されるのであります。

一方、事業においても、写真製版の秀れた技能開発者で業界の発展に盡くされた。大阪市・大阪府・中小企業庁などの多数

の表彰の受賞、一九七六年には藍綬褒章、一九八七年には勲四等瑞宝章の受章など業界のリーダーとして活躍されたのであります。

一九八九（平成元）年ブナを植える会の第四代会長に就任。一九九二年に、社長を辞任されるまでの数年は、自社の事業、業界のお世話と、多忙な時間をさいての会長職は、本当に大変だったと思いました。この間に、現役の企業家らしく、会の運営に企業経営感覚を持ち込まれ、今日の会の運営の基礎を作られた功績は非常に大きいものがあります。

一九九二年には、ブナを植える会の社会的認識を得るためめ法人化を提案され、定款の制定と、「ブナ基金」を設置されました。法人格取得を見ずに他界されたことは本当に残念であります。

一九九三年、沖縄で開催された全国植樹祭において林野庁長官表彰（国土緑化功労賞）を受賞、翌年は、兵庫県で開催され、知事より緑化功労賞を受賞、その年の天皇陛下のお手植の樹木の中に、ブナが含まれていたのは、私たちにとって、驚きとともに、大変な喜びでありました。

一九九四年には、浜坂町出身の加藤文太郎の名前を頂いた、浜坂町立「加藤文太郎記念図書館」が竣工。加藤文太郎を語る会、岳友中西健二氏らと協力して、覆刻『單獨行』加藤文太郎遺稿集を発行された。又、同図書館に多数の山岳図書を寄贈され、山岳図書コーナーの充実に協力されました。

一九九五年一月、阪神淡路大震災発生、会員の多くが、阪神間在住のためいち早く情報収集をはじめられ、会員の安否を確認された。その後、たびたび自宅を訪問した時に、いつもスライドを見ておられた。この作業が、一九九七年に発行された『私のブータン・カメラ紀行』の出版につながっていくのであります。数千枚のスライドより選ばれた写真は、ブータン全土の、自然と風俗を伝え、今では見ることも出来ない仏像なども含まれていて、貴重なブータンの紹介本となった。七月六日は、二百名近い人々が集まり、出版祝賀会が盛大に開催されました。しかし、九月五日、多くの岳友の待つ天国へ駆け足で行かれたのであります。

ここに、登山に事業に多大な功績を残され、豊かな自然の復元を願った岳父のご冥福をお祈りして、追悼文とさせて戴きます。

略年譜

一九一七（大正六）年　神戸市中央区旭通五丁目にて出生
一九三〇（昭和五）年　神戸市立生田川小学校を卒業
　兵庫県立第一神戸商業学校へ入学。山岳部へ入部
一九三五（昭和十）年　同校卒業。登山団体「嶺同人」へ入会
　家業「片山印刷所」の経営を継承する

一九四〇（昭和十五）年　「神戸山岳会」の設立に参画し「嶺同人」を解散
一九四三（昭和十八）年　日本山岳会へ入会（会員番号二三二一番。紹介者津田周二、島田真之介）
応召、出征。片山印刷所を廃業
一九四六（昭和二十一）年　復員、神戸へ帰る
一九四九（昭和二十四）年　大阪市に㈱光陽社を設立
一九七〇（昭和四十五）年　大阪府知事より「産業功労者賞」受賞
一九七六（昭和五十一）年　藍綬褒章を受章
一九七八（昭和五十三）年　㈶野間奉公会より「野間賞」（印刷出版文化功労）を受賞
一九七九（昭和五十四）年　はじめてブータンへ。以後七回訪れる
一九八三（昭和五十八）年　中小企業庁長官表彰を受ける
一九八七（昭和六十二）年　勲四等瑞宝章叙勲
一九八九（平成元）年　ブナを植える会の会長に就任
一九九二（平成四）年　㈱光陽社の代表取締役社長を辞任
一九九三（平成五）年　日本山岳会永年会員。林野庁長官表彰（国土緑化功労者）を受賞
一九九四（平成六）年　兵庫県知事より「緑化功労賞」を受賞。浜坂町立「加藤文太郎記念図書館」竣工。記念出版として復刻『単独行』加藤文太郎遺稿集を発行
一九九七（平成九）年　『私のブータン・カメラ紀行』を出版
一九九七（平成九）年　九月五日死去。享年八十一歳

（桑田　結）

今井　友之助　氏（一九一〇～一九九七）

同時代に生き、似たような体験を持つと、お互いに理解しやすい。そして時代が離れると理解はできても、愛着は少し薄れる。その限界が十五年から二十年だという説があるが、先輩に対する後輩の理解の程度、尊敬の念もこの時間の関数かも知れない。今、百名山を目指す中高年の人達に、今井友之助といっても、その人誰？ということになろうか。しかし、昭和十年代に少年期を過ごし、山に憧れていた、私にとって、今井友之助は忘れられぬ大先輩である。因みに年齢差は十三年、先にのべた限界の中に入っている。一九三二（昭和七）年、積雪期、剱岳八ッ峰の初登攀を慶應の谷口現吉らと競っていた時、綱を結んだ仲間の池野が三ノ窓側の雪庇を踏み抜いた瞬間、反対の剱沢側の斜面に身を躍らせて確保したという話を、神話ででもあるかのように読んだ年頃である。

そして、自分が同門の山岳部に身をおくに到って、一九三三（昭和八）年、三四年、積雪期の瀧谷、各尾根の初登攀の模様、長期にわたる槍平の生活などを知り、その時のリーダー今井に対する尊敬の念はますます篤くなったものである。しかし、今井は一九三四（昭和九）年大学卒業、私は一九四一（昭和十六）年の入学、戦時中という時代の流れの中では依然として伝説の人であった。初めての出会いは戦後大分経ってからのことである。一時期、日本山岳会が国体の登山部門を担当したことがあって、一九四九（昭和二十四）年十一月東京国体では富士山が会場に選ばれた。当然東京だけでは無理で、至急山梨支部を結成して共催で行うことになり、今井は甲府の有力メンバーとして入会した（会員番号二九一一）。一九四八（昭和二十三）年のことである。紹介者が槇有恒、谷口現吉の両氏であることも、その間の事情を物語るものであろう。この国体には私も参加し、ご挨拶した諸先輩の中に今井の姿もあった筈だが記憶ははっきりしない。醸造工場やご自宅が戦災で消失していたことも知らなかった。その後、暫くして、焼け跡から出たピッケルがあるがなんとかならないかという相談を受けることになった。たまたま、私は金属工学専攻で早大鋳物研究所に在籍していたので鋼の熱処理などは簡単にできた。火災の温度がどれ程かは分からなかったが、中炭素鋼であるピッケルの場合、表面層は脱炭していても、再熱処理すれば十分使えると答えて、焼き入れ焼き戻しを引き受けた。ともかく、温度だけは正確に、後、表面の硬度をチェックしてお渡ししたが、果たしてどうなったのか、確かめてはいない。この少し後、父上が亡くなって、相続の処理、事業の再建には大変なご苦労があった模様で、日本山岳会との関係も少し縁遠くなった。

しかし、我々の仲間は醸造家としての先輩に随分ご厄介になったようである。ここで、ぶどう酒醸造に関わる先駆的な業績のことも付け加えておきたい。戦時中はぶどう酒より酒石酸の需要が多く、ぶどうの樹から抽出を試みて、ぶどう畑をつぶしてしまいそうな動きがあった時、ぶどう酒から直接採取することを提案し、更に圧電素子の良質なロッシェル塩の製造にも成功してぶどう畑の温存を計ったこと、又、醸造用のぶどうの栽培には石ころだらけの山地が適していることに着目して、欧州から八十五種以上の苗を輸入してその適否を研究したこと、などである。昔の船便の時代である。長い航海のために苗が枯れたり、伸び切ってしまったりして失敗を重ね、やっと三回目に成功したという。しかし、植えてみると、スペイン、イタリア、ドイツ、スイスなどの品種は日本に適せず、ボルドーやローヌなどフランス系の品種だけが甲府で育つことを確かめたのである。この努力は戦後も引き続き、サドヤ醸造場の本格的なぶどう酒「シャトー・ブリヤン」として世の名聲を博したのである。この執念と努力は山に対する姿勢とも通ずるものがあるようで

ある。

もう一度山の話に戻して今井友之助の登山を振り返りたい。一九八〇（昭和五十五）年九月、八ヶ岳・編笠山山麓観音平グリーンロッジで催された古稀の祝いの記念写真と吉阪隆正のスケッチが拠り処である。一九二四（大正十三）年、旧制甲府中学校山岳部草創の時、二年生から参加し、甲府盆地を廻る山々を手始めに南アルプス、北アルプスまで足を伸ばした。その伝統は甲府一高山岳部に引き継がれ、その後輩達、鶴城山岳会の人々がこの会を催したのだ。彼等は背景のベランダの手摺りに思い思いの姿勢でよりかかり、最前列の椅子には今井夫妻を中心に、早大山岳部創設者の一人、井上寿三、今井少年が一九二八（昭和三）年早大山岳部に入る機縁をつくった大先輩である。そして少し先輩の後藤幹次、長島春雄、河合亨など、それから八ッ峰で競い合った慶應山岳部の先輩谷口現吉、金山淳二ら、後列には僚友池野信一、近藤克二、後輩としては関根吉郎、吉阪隆正、更に下は村木、飯野、高野ら、鶴城の責任者今沢寛や山村正光、永田秀樹らの顔も見える。瀧谷の仲間が一人も見えないのは寂しいが、戦争を挟んで戦死、病死など止むを得ない事情があったのであろう。吉阪のスケッチは今井夫妻を囲む賑やかな席の模様を描き「ハリホー、ハリホー　ヤーハリホー」とグリンデルヴァルトリードの一節が付記されていてる。吹雪の剱沢小屋で退屈しのぎに教えあったこの歌を後輩達にひやかされながら小聲で口づさんだ四人の大先輩の照れ臭そうな顔を昨日のことのように思い出すのである。それから十八年、今井を始めとして大方の先輩方が鬼籍に入ってしまったことに気付くのである。そして、昭和初期から戦後暫くの間、日本の登山界にかなり影響を与えた一つの世代がおわったのだという感慨に捕らえられるのである。しかし、この時代の先輩方が考えていたことは決して古びてはいないことにも気付くのである。未知の世界に憧れてパイオニアワークを競い、より困難な登攀を求めて遙かにヒマラヤの山々をも視野の中に入れていたことなど、情報の多寡、経験の蓄積の差を除けば、心情そのものは現在にも通じると思えるのである。マナスルの準備をしていた頃、谷口現吉がしみじみと今井の山登りの鋭さを語っていたことがある。八ッ峰のことではなく、その前年の冬、たまたま横尾の岩小屋で一緒になった三井、谷口らの慶應パーティーは北穂に向かい、今井は一人で奥穂北東稜や北尾根を登っていた時の話である。困難な登攀であればある程、綱を結んで助け会うことが常識であった当時、黙々として困難な単独行に励んでいた。今井の記述。「冬山の単独行は雪の深い処を登る時は、ラッセルが苦しいが、岩場に取りついてしまえばピッチは早い。ザイルで結びあって二人で登ると一人の場合の二倍か三倍の時間を見なければならない」と。昭和初期にこのような考え方、登り方をする人がいたということにはいささか驚きと尊敬を感じる

のである。

もう少し、今井友之助の晩年についても触れておきたい。サドヤ醸造場の経営については、更に徹底した考え方から、ご子息をフランスへ送り、ぶどう栽培技術者のメッカとも云うべき、南仏、モンペリエの国立高等農業学校へ留学させ、本場の勉強の成果を事業に定着させた。その後、会長職に退いて再びヒマラヤへ目を向けるのである。丁度、古稀の祝いの数年前のことであろうか。それから十五年、ネパール、カラコルム、シッキムなど、晩年のヒマラヤ行は十二回にも及んだ。昔から思い描いた世界の巨峰を自らの目で確かめるための旅であったのだろうか、この山旅のほとんどが単独でなさてれいたことを後で知って、再び今井友之助の精神の強靱さに驚嘆するのである。しかし、八十歳で胆のうを切除してからは静穏な暮らしに戻った。元来口数の多い人ではなかったが、昔の記録はきちんと整理されていたという。残念なことに米寿の祝いの計画を前にして一九九七（平成九）年六月入院、行き届いた治療と奥様の手厚い介護も空しく、九月十二日静かに生涯を終えた。ご遺族の心残りは当然としても、自分の思いを貫き通した幸せな一生といえるのではなかろうか。

日本山岳会との縁はどちらかというと薄い。一度も役職につくことはなかったが、一九九五（平成七）年、九十周年の記念の会で名誉会員に推挙された。贈られた一点の絵、山岳画の草分け丸山晩霞の「白馬雪田」が会議室に掲げられているのが唯一の接点とも云えるが……。徒らに衆を頼むことなく、己れ個人の力と思いを尽くして自然に対する、最も根源的な山登りを志した今井友之助の心情に共感を覚える人は会の中にも大勢おられる筈と信じている。

（文中諸先輩のお名前はすべて敬称を略しました。失礼の段お詫び致します。）

（村木潤次郎）

田村扇一氏（一九二八～一九九八）

一九五〇（昭和二十五）年九月末、田村さんと私（長尾）は、谷川岳一ノ倉沢本谷を目指して旧道出合のテントを出発した。この日は天候が悪く小雨が降り続いていた。右岸の高捲きを快調に登って一本松に着いた田村さんが、突然塑像のように動かなくなった。対岸を凝視したまま無言である。対岸の烏帽子沢のスラブは雨水が樋の中を流れるように流れ落ちていた。十分、十五分、いやもっと長かっただろうか。私も無言である。やがて田村さんがポツリと一言「帰ろう」と言った。この日、仲間のSさん、Tさんが隣の幽ノ沢で遭難した。

数年後、当時山岳部が指導を受けていたチャカさんこと高木正孝先生と田村さん、それに私の三人が銀座で飲む機会があった。私はその頃あまり酒が飲めず、豪快に飲む二人を感心しながら眺めていたが、突然「俺は、田村と長尾が引き返して、SとTが突っ込んでいったのが今でも信じられないんだ」とチャカさん、あの時の谷川岳のことである。「そうですね」と応ずる田村さん。やがて「慎重だったSとTが死んで、田村と長尾が生きているなんて……」とチャカさん。「そうですね」と田村さん。暫くするとまた「お前達二人が生き残って……」。「そうですね」。「TとSが死んで……」。「そうですね」。こりゃたまらんと、終電車になる時刻でもあったので私は退散したが、二人はなんと朝まで銀座のバーで飲み続けていたとのことであった。いったい何度「お前達二人が生き残って……」が繰り返されたことだろうか。チャカさんも田村さんも今は亡い。

田村さんは慈恵医大で私より二年先輩である。二人が現役の頃、山岳部はチャカさんの指導を受けながら戦時中の空白をとり戻しつつあった時代で、活動は活発であり、なかでも田村さんは最も活発に山行を重ねていた一人である。卒業後はいち早く日本山岳会に入会し、一九六三（昭和三十八）年東京農大のトゥインズ遠征隊にドクターとして参加した。海外遠征がまだ珍しい頃だっただけに、その時の土産話は後輩のわれわれには刺激的であり、ヒマラヤへの夢をかきたてられたものである。

二年後、田村さんの推挙があって私は明大のゴジュンバカン遠征隊に参加することになり、ヒマラヤへの夢が実現した。

田村さんは後輩の面倒見のよい人であった。屢々山岳部の現役を大勢自宅に招き、奥様手作りの料理でもてなしてくれたり、若いOBには小遣いかせぎに病院の当直を世話してくれたりしていた。

一九七九（昭和五十四）年、慈恵医大のガネッシュヒマール遠征計画が進行中のこと、田村さんから新宿に呼び出された。「お前隊長をやれ」とウムを言わせぬ膝詰め談判である。場所は何故か赤提灯ではなくフランス料理店であった。

ある時、「子供の下腿骨骨折が入院したから手術に来てくれ」と電話があり、それを契機に、週に半日田村さんが院長をしていた病院で整形外科を診療することになり、一昨年やめるまで十年余り毎週顔を会わせることになった。

田村さんの勤務はまさに超人的で、日本海軍の月月火水木金金どころではなく、正月休みもなく、元旦から出勤し、しかも毎日朝早くから夜遅くまで病院にいた。見兼ねて「当直医も居ることだし、そんなに病院に居ることはないだろう」と言っても、聞く耳持たずというか、頑固で、勤務態度を変えることはなかった。それだけに患者の信頼は厚く、田村教の信者といった患者達が居た。しかし、山に行く機会はなくなった。

晩年の田村さんの楽しみは、山岳会の仲間と病院のある川口

周辺で一杯やりながら山の話をすることであり、川上隆さん、高橋進さん、竹田寛次さん、広谷光一郎さん、そして私が常連であった。そんな時、へべれけになっても病院に戻って行くのが常であった。飲み仲間が何度となく海外へ誘い出そうと画策したが遂にウンとは言わなかった。

一九九六（平成八）年七月、肺癌が発見され、癌研附属病院で手術を受けたが、術後二十日で早くも退院、その翌日には病院に出勤するという一寸信じられない行動があった。肺葉切除といえば退院後一～二カ月は静養しても不思議ではない大手術である。責任感の強い田村さんとはいえ無茶苦茶なと苦言を呈したが、勿論聞きとどけてくれる筈もなかった。しかし、それまでは何度となく煙草をやめるよう進言してもきかなかったが、手術後はピタリとやめたとのことであった。

今年三月に脊椎への癌の転移がわかった時、全てを告知されていた田村さんは、最後に山岳会の飲み仲間と温泉に行って一杯やりたいと希望されたが、病状の進行の早さはそれさえもかなえてはくれなかった。

最後に見舞ったのは亡くなる三日前だったが、別れ際に握手を求めてやせ細った右手をさし出した。照れ屋で普段そんなことをする人ではなかったので、ああ死を覚悟されたなと胸がしめつけられる思いであった。

田村さん長い間いろいろお世話になりました。どうか安らかにお眠り下さい。

略　歴

一九二八（昭和三）年　北海道札幌市に生まれる
一九四五（昭和二十）年　東京都立第四中学校卒業
一九五二（昭和二十七）年　東京慈恵会医科大学卒業
一九五五（昭和三十）年　日本山岳会入会。会員番号四三二七
一九六〇（昭和三十五）年～一九六四年　日本山岳会理事
一九六三（昭和三十八）年　東京農業大学トゥインズ遠征隊に参加
一九九八（平成十）年五月十八日逝去。享年六十九歳

（長尾悌夫）

大屋悌二氏（一九三三～一九九七）

一九九七（平成九）年十二月二十五日、大屋さんは亡くなった。会の総務担当常務理事としての立場で、斎藤会長の下に新しい理事会が編成されて僅か半年あまりのこと、関係者はひとしく愕然たる思いであった。しかし、これは全く不測の事故、不幸という訳ではない。既に一年前に予測されたことではなかっ

たろうか。会の運営の上で大屋さんのような人材を手離したくないという思いと、ひょっとしたら会の仕事を生き甲斐にして元気を取り戻しまだ一年や二年頑張れるかも知れないという甘い希望的観測がない交ぜになって、それに大屋さんの会に対する熱意と誠意が相乗して生まれた誠に残念な結果とも云えるのである。

今、大屋さんのことを思いながらふと正岡子規の「仰臥漫録」を読み直して見た。なんで唐突に子規なのか説明に苦しむのだが、ひょっとしたら大屋さんの病室から見た風景の連想かも知れない。日本医大病院の本館B棟三六一号室の窓からは根津権現のよく茂った森が見えていたが、その森を越えて上野の岡の下は上根岸、子規が最後を迎えた子規庵があるなと、ふと思ったことを覚えている。そして子規の死を前にした一年間の記録を大屋さんの場合に重ね合わせようとしたのかも、——まさに写生を旨とした俳句論を地で行くような、自らを観察し尽くした重病人の生活の子細と、強烈な自己主張に溢れる「仰臥漫録」に圧倒されながら、大屋さんは全く正反対の人だったなと感じるのである。人前で声高に意見を主張するようなことは無かった。人柄は地味で控え目、しかし隅々まで目配りが行き届いていて、ひょうひょうとした態度、物腰が軟らかいのである。改まった会合で司会を務める時は、「私は総務担当の大屋と申します」と「大屋」の発音に一種独特な調子を交えて自己紹介をする律儀な態度に一種の滑稽味さえ感じ、一層会が和やかになるようにも思った。しかしもう一度考え直して見ると、大屋さんは外柔内剛、毅然たる闘志を内に秘めた剛気の人ではなかったかとも思えるのである。こんなことを書きながら自分は大屋さんのことをどれ程知っているのだろうかと迷い、寧ろ殆ど知らないことに気付くのである。大屋さんが育った信州麻績の里も、生家のお寺のことも知らない。

そして物心ついて山登りを志した松本・県ヶ丘高校のことも分からない。上京して山登りに励んだ法政大学山岳部の頃、OBとしての活躍ぶりも部誌『山想』か『法政大学山岳部の七十年』の記録から察するのみである。そして生涯の大半にわたって力を尽くしてこられたであろう運動具の販売のことも後で知ったに過ぎない。会の行事に関わることではあったが二人だけで旅行したり、一緒に山歩きしたこともあったが、その間お互いに飯の種の仕事の話をしたことは一度もない。しかし、僅か三年足らずではあったが目の前の大屋さんを観察し、意見を交わし、会の雑務を処理する間にお人柄を理解し納得するような事例は幾つかあった。

たまたま、九十周年の記念行事の実行の年に当たっていたので、前年から計画を進めていた藤平会長時代の人々にも実行に関与して頂き、定常業務と二本建てで運営した。そのため、常務理事、常任評議員の仕事は繁忙を極めた。お互いに議論し、

論争し、実行して行く中で、大屋さんに対してだけではなく皆が理解し合う機会は十二分にあったと云えるのである。

地方の記念行事はそれぞれの支部のご尽力で進められたが、東京の場合は全国、全会員に向かって開かれた会合で、晩餐会の他、三つのフォーラムを催すことになっていた。限られた予算と会場の中で、会場の配置はどうするか、会費は、どんな料理を出すか、招待者の選定、出席者の顔振れを見て席の配置はどうするか、など課題は山積、最近は出席者の数も増え雰囲気や新しい人達の考え方も少し違う。それに対して古い人達の不満や苦情もあり、時には雑音に振り廻され兼ねない。勿論この運営、実行は総務委員会、集会委員会の活躍に頼るしかないのであるが、そのような陰の仕事の要を大屋さんに務めてもらった。「自分が全部責任を負うから、あなた方は思う通り存分にやりなさい」と云ってもらって随分仕事がやり易かったという総務委員の人の言葉からも、大屋さんの並々ならぬ腹の座り方が分かろうというものである。日本山岳会は山登りの会であるから、登山、特に高所登山、それに関わる技術、医療、図書、資料、自然保護などが大切なことと考えられてはいるが、このような都会の雑事、外部との応接、集会の世話、事務局の運営など総務の仕事が少しでも忽せになると会の歩調はみだれてしまうのである。このような雰囲気で一年が過ぎたがその春、大屋さんは体調を崩され日本医大に入院、大腸腫瘍切除の手術を受けた。六月に退院、会の業務に復帰されたが、我々はその時一つの決断を迫られたのである。

手術の結果は万全とは云えないもので腫瘍は既に腹膜まで転移、医者は余命半年といっているが本人には告知しない。会に迷惑を掛けることになるから理事の職は遠慮した方がよいのではないかという奥様のご意向が内々伝えられたのである。私は瞬時に会の仕事はそのまま続けてもらう可きと思い定めた。しかし独断という訳には行かず、ごく一部の副会長と役員に諮った上、箝口令をしいたのである。勿論ご本人にも。しかし、大屋さんの気力が勝ったのか、奇跡か、一年は無事に過ぎた。肝心の私が不測の病に倒れ、大切なマナスル登頂四十周年の会は宮下副会長や大屋さん、松田さん達のお世話になって無事終わり、斎藤さんに会長をお願いすることになったのである。この間も大屋さん達に心労を掛けたことは計り知れないものがあった。そして次期理事会の編成について議論した時、大屋さんの決心は慣例通りもう一期総務担当を引き受けるというものであった。今となっては大屋さんの真意は誰も分からないが、それを聞いて私は不安を覚えると同時に、大屋さんの気力で病もなんとか持ち直すのではないかとさえ思った。そのことが冒頭に述べた甘い希望的観測である。

その後更に半年を経て大屋さんを送ることになったのだが、告別式でお別れのご挨拶をさせて頂いた時、口頭で申し上げた

のだが不覚にも一個所抜かしてしまったところがあった。しかし式の終わり、斎藤会長の挨拶の中で私の忘れた言葉が述べられてほっとしたことを覚えている。それは、「昨年退院されて、今秋再入院される迄の間、会の運営になんら支障を来すことはなかった」という意味の言葉である。この追悼文を書き終えて、大屋さんの腹の座った素直な生き方を誠にうらやましく思っている。

書いた人も、立場も悲劇的なので名前は伏せるが「如是而生　如是死（かくのごとくにしていき　かくのごとくしす）」この言葉を大屋さんに捧げたい。

（村木潤次郎）

［編者注］大屋悌二氏は一九三三年六月十七日生まれ。享年六十五歳。会員名簿では一九五九年入会、会員番号四八四〇であるが、これは法政大学を卒業してから入会されたものである。しかし、大屋氏は高校時代の一九五一年に入会、三九二九の会員番号も持っておられた。再入会に当たり、復活ではなく、新入会の手続きをとったため、会員番号を二つ持つという珍しいケースとなった。三九二九の紹介者は永田好行・赤羽孝一郎。四八四〇の紹介者は野田三郎・増田昌司。一九六七～六九年まで法政大学山岳部の監督を勤めた。

尹官炳氏（一九二二～一九九七）

筆者は尹官炳さんととりたてて深い係わりがあった訳ではない。正確にいえば、筆者が入会してまだ日が浅い頃、年次晩餐会の受付を手伝っていた時に接点があったのみである。五十音順の最後の方を担当することになり、その中に尹さんの名前もあった。受付を担当するからには、あらかじめ出席者名簿・名札に目を通して、どういう人が見えるのかを頭に入れておくべきは当然である。会籍の長い人であれば、その中の八～九割までは名前と顔が一致するから、さして苦労もなく受付くらいはこなせるのだが、新参者はそうはいかない。顔を知っている人はほとんどいないから、そのことにより緊張、あせりが増幅され、思わぬ失礼をやりかねないことになる。受付の担当者がそんな状態のところへ見えたのが尹さんだった。顔つきがやや厳つい感じの人が来て、「尹です」といわれた。ところが正確な読み方を頭に入れておかなかったものだから、瞬時に理解できず、「えっ？」ときき返してしまったのである。それに対して、「尹官炳です」と日本語読みで名前をいわれたので、すぐに解ったのであるが、このことによって尹さんに不快な思いをさせてしまったのではないかと後々まで気にかかったので、そ

の時のことは今もよく覚えている。

「袖すり合うも他生の縁」という。それからすれば浅からぬ縁ともいえなくはないが、その程度のご縁で追悼文を書くというのは、はなはだ僭越であり、適格を欠くのだが、尹さんのことを良く知っている方が見つからず、後述するように、誰よりも会を愛し、日本の山を愛された方なればこそ、不十分ながらもその一端を記しておきたいと思い、敢えて筆を執った次第である。

尹官炳さんは、本籍地は韓国忠清南道保寧で、一九二二年十二月二十一日の生まれである。お茶の水にあった昌平中学から慶応義塾大学医学部へ進み、整形外科を専攻、一九五四年卒業された。

日本山岳会には一九六三年一月入会、会員番号五五一七、紹介者は川崎隆章・坂倉登喜子両氏である。事務局に保管されている入会申込書の綴りを見ると、山行経歴欄に「日本国の山：山行一六一回、山数三九五座。韓国の山：山行三〇回、山数九座」とあり、この時点までにもずい分日本の山を歩いておられた。入会申込書には、別冊で登山経歴表を添付したとあるのだが、残念ながら綴りの中には見当たらない。入会時で四十歳。医学の勉強をされながら、山登りに相当な情熱を傾けておられたようである。

日本山岳会への入会後は、土曜会に足繁く通い、年次晩餐会には欠かさず出席して、クラブ・ライフを楽しんでおられた。

土曜会の記録ノートに最初に尹さんのサインがあるのは一九六三年五月十八日で、入会間もない頃である。その日には、五月連休には南アルプス前衛の山を歩いてきて「実に素晴らしかった」として、山伏岳、大谷崩ノ頭、十枚山、毛無山の名を記している。一九六四年四月十八日のところでは「新潟県の斉藤平七氏が来られ、飯豊連峰、魚沼三山について種々話をした」とある。因みに、この日の参加者は、神谷恭、村井米子、田部重治、牧野衛、今井雄二、松本熊次郎、折井健一、斉藤平七、古沢肇、石原憲治、山下一夫、他にアメリカ人と、錚々たる顔ぶれであり、往時の土曜会の雰囲気が窺える。

以降の土曜会の記録ノートにも登った山の名前が数多く出てくる。一九六五年八月十五日より九月三日の間に北海道山行を終え帰京した、として利尻山、羅臼岳をはじめ十数山を記し、六七年八月には折立―太郎平―薬師岳―雲ノ平―三俣小屋―鷲羽岳―湯俣、六九年夏には暑寒別岳、芦別岳、夕張岳、オロフレ山など、北海道の八山、七〇年夏にもペテガリ岳、アポイ岳など北海道の六山、七二年夏には北海道、東北の十六山に訪れた記述があり、夏休みを利用して毎年のように北海道の山に登っていたことが記されている。

この間、会報「山」にも寄稿しており、六五年十月号に「利尻岳から」、六六年九月号に「十勝三股にて」の記事が見られ

る。

土曜会ノートへの最後の記帳は一九九二年十月三十一日で、この時は氏名のみである。

奥さんの慶恵重（キョンヘイジュン）さんのお話によると、尹さんは奥さんともあまり口を利かない、無口な人だったという。山登りも単独が多かったようだ。土曜会においても、自らはあまり話をせず、もっぱらきき役に回って話を楽しんでいたようで、当時東京において土曜会によく出席しておられた、元静岡支部長の牧野衛名誉会員は「いつも静かな人だったのでエピソードのようなことは記憶に残っていない」と尹さんの印象を語っている。また、総会後の懇親会で、山中の大木を思わせる背筋をピンと伸ばした姿勢で一人静かにコップを傾けていた姿が印象に残っている、と語る会員もいる。

尹さんは糖尿病の持病があり、亡くなるまでの二十年ほどは自分でインシュリンを打ちながら山登りを続けていた。山岳会へ出かけられたのは九三年頃までで、年次晩餐会の出席者名簿を見ると、九三年が最後となっている。

山の話ばかりになったが、尹さんのもう一つの面についても触れておかなければならない。尹さんは慶應を卒業してから聖書神学校に通い牧師になる勉強をした。病院勤務の傍ら、新宿にある在日大韓キリスト教東京教会の牧師として奉仕活動をされ、最後は長老として教会の運営にも携わった。奥さんの慶恵重さんは一九七一年宣教師として来日し、尹さんと知り合って結婚された。したがって、それ以前のことは奥さんもご存知なく、日本に来た時期や山にのめり込むことになった動機といったことについては知る術はなかった。

慶応の医学部といい、土曜会といえば、すぐ思い浮かぶのは河野幾雄さんだが、河野さんはすでに故人なので、弟さんの之保さんに伺うと、早速医学部卒業生名簿を調べて下さった。前記の昌平中学出身、一九五四年卒業はそれによるものだが、さらに四年おきに出ているＯＢ会名簿から、尹さんは国立栃木病院、救世軍病院、豊島区昭和病院、最近時点では佐原中央病院に勤務していたことが判った。その合間にせっせと山登りをしておられたのである。信仰とともに、日本山岳会そして日本の山を心の依りどころとして最後まで大切にされた。

一九九七年七月二十二日逝去。享年七十六歳。

（南川金一）

原田達也氏（一九三五～一九九七）

原田達也氏の年齢から考えても今回のスキムブルムの雪崩遭難は惜しまれてなりません。私も何人もの友人を山で失ってき

ましたが、これ程悲惨でしかもあきらめきれない事故があっただろうか。夜中、テントで寝ているときに突然の雪崩爆風で吹き飛ばされ、生ける人、死する人、現地の地獄絵が思い起こされます。

正確には一九九七年（平成九年）八月二十日未明（午前一時三〇分頃）ベースキャンプをエンゼルピーク側から氷河雪崩の爆風が襲い、隊長の広島三朗氏、土森譲氏、菊田佳子さんは即死、永澤茂氏、中込清次郎氏は午前五時三〇分頃、そして原田達也氏は午前七時頃に息を引き取った。生存者も骨折等の重傷など何らかの痛手を被っていた。それにしても原田達也氏が事故後、約六時間も生きておられ、途中一人でシュラフから出だした様子を当時の同僚たちの手記から知るにつけ、何とむごい遭難であるかと感じると同時に、彼等の死が惜しまれてなりません。エンゼルピークのふもとのBCでの事故。天使に見離されたとは真にこのことなのか。

原田達也氏は一九三五年（昭和十年）北海道帯広に生まれ、帯広三条高等学校から京都学芸大学特修美術科に入学し、すぐ山岳部に入部して登山を志した。一九六七（昭和四十二）年山岳部時代の仲間七名で「アジア・中近東辺地移動調査隊」を編成して単車四台、ワゴンボックス車一台で神戸港を出港し、インド、パキスタン、アフガニスタン、イラン、イラク、ヨルダン、シリア、レバノン、トルコ、ギリシャ、イタリア、フランス、ベルギー、ドイツ、デンマーク、スウェーデン、オーストリヤを走破、途中のパキスタンのスワードでの登山、オートバイで越えたカイバル峠の生前の話には、私も興味をそそられました。その後、パキスタン、カラコルムのマルビティン峰七四五三㍍（一九七一年）、カンピレディオール峰七一四三㍍（一九七四年）、一九七七年には日本山岳協会の日本K2登山隊（八六一一㍍）に副隊長として参加。一九八一年には同じK2に今度は中国・チベット側から、日中友好チョゴリ峰登山隊に参加し、パキスタン側と中国側の両サイドを体験し、本隊の一年前の中国側からの偵察隊では、地図の全くの空白部に入り未知的登山に満足したという話も聞いたが、この偵察隊あっての本隊成功が導かれたとも聞いている。その後はカラコルムでの氷河の旅、スパンティーク峰（七〇二七㍍）の登頂など、原田達也氏の足跡はほとんどカラコルムであったが、一九九五年ヤング・ミドル・シルバータートル隊で、中高年の仲間とチベットからシシャパンマ峰に登山（一九九五年）。六十歳で八〇〇八㍍のジャイアント峰の登頂に成功している。そして、その二年後の一九九七年、再びパキスタン・カラコルのスキムブルム峰（七三六〇㍍）登山隊に参加して、翌日がBCを撤収して下山日という最後の最後の日に前述した遭難事故により一命を落とされてしまった。真知子夫人のご心境を察するに心が痛みます。

私は原田達也氏と日本山岳会国際部でのお付き合いが長かったわけですが、芸術家原田達也を知ったのはかなり最近のことでした。原田画伯は共同通信社に絵と文を寄稿されていて、日本全国の新聞を通して絵とコラムによる楽しい山……山の楽しさを伝えていました。その絵を見て芸術家原田達也を知りました。彼は学生時代、京都南禅寺となりの豆腐屋に弟さんと下宿をして、京都学芸大学（現京都教育大学）に通いながら絵の基本的な勉強をされたと聞き、真に登山の楽しさが伝わってくる、彼の心の暖かさがにじみ出る、美しい絵に感激もいたしました。

そして、一周忌を記念して、奥様の手で仲間達へ『山のスケッチブック』として画文集（遺作集）が発刊され、この本を見たときもその才能にびっくりいたしました。

彼の生涯は、いろいろなところで話に聞き、また文章でも見ていますが、仕事の話、職歴についてはあまりきいたことがありません。京都学芸大学を卒業して、奈良ドリームランドのデザイン開発事業に参画し、その後、横浜ドリームランド開園に際しても同じ様な仕事に携わり、開発事業の仕事も終わり、たまたま、帝人株式会社のレジャー海外開発事業進出のプロジェクトのお手伝いで入社。そこで真知子夫人と出合い結婚されたと聞いています。その帝人のプロジェクト開発事業も終わり、再び横浜ドリームランドに戻り、六十歳の定年を迎えて、名実共に中高年としての彼の登山が始まりました。時間を山登りに費やす生活環境ともなり、多摩市民企画講座の山歩き教室の講師として指導に当たりました。教室受講生ＯＢで多摩一二山歩会という中高年登山グループが出来て、原田氏の人柄から心の暖さが、山登りの技術の指導にとどまらず、人間性及び中高年者の生きがいにつながる貴重な刺激を与え、山の先生として誰からも親しまれ、愛されました。彼が登ってきたこれまでの厳しい登山ではなく、多摩一二山歩会は中高年の低山志向ではありましたが、健康を大切にし、山に親しみ、仲間とふれ合う山歩きに、「こういう楽しい山歩き（登山）もあるんやナー、オレ、皆と登る最近の山はほとんど初登攀や！……」と、先生、指導者らしくない無邪気で素直な心を開いて喜ぶ気持ちが皆から好感をもたれ、原田達也の人格というのか、人となりの良さが、まわりの人たちの心をとらえた。

また、一九八九年、スイスのエンゲルベルクで開かれた国際山岳連盟会議に一緒に出席した。当時、スイスは自然保護山岳環境の先進国として、スイス国民の環境意識の高いのをみて、「日本も見習わなくてはアカン！」と自然保護、山岳環境に熱弁をふるう原田達也氏の一面をも見ました。日本山岳協会国際部の活動においても、いつも目立たない素直で実直なひた向きな姿勢で、まわりから信頼され、信用され、そんな地味な彼の行動が毎年八王子大学セミナーハウスで開かれる海外登山研究会（海登研）を支え、続いて来た要因かも知れない。彼との思

い出は尽きることがありませんが、日頃、出来れば彼のように生きたいとも思っていた私が、追悼文を書けたことで、ご冥福をお祈りさせていただいた気持になりました。また一人よき山仲間を失い、安全登山の意味を深くかみしめました。合掌。

（原田達也氏は一九六八年日本山岳会入会、会員番号六四〇五。紹介者は吉沢一郎・松田雄一）

（神崎忠男）

広島三朗氏（一九四三〜一九九七）

夢を追いかけた男・広島三朗

男は夢を追いかけて壮大な自然の中に入り込んで行く。辺境の地はその歴史を辿りながら、そこに住む人々と交歓をしながらさらにその夢を大きく膨らませてくれる興奮の坩堝である。そしてそんな夢をかなえてくれるカラコルムにとりつかれた男達がいる。広島さんもそんな一人であった。

私が初めて広島さんに会ったのは一九七三年カトマンズである。第二次RCCのエベレスト南西壁登山隊に参加した私の前に現れたのが彼である。神奈川県山岳連盟のローツェ南壁隊に参加し、敗退した直後の事である。予定より早く登山が終了してしまったのでルピーが余って困っているとの事であった。渡りに船とはこのことである。先発隊としての我々の仕事の一つに条件の良いレートでの両替があり、両者の思惑が一致してめでたしめでたしとなった記憶がある。その次は七七年のK2登山隊に参加が決まってからである。

K2は新貝さんや原田さんや、広島さんなどカラコルムにつかれた男達のロマンを満たしてくれる山であった。私は隊の派遣が決まってから参加した外様であるが、広島さんは登山隊の誕生はもとより偵察、資金集めと四年間走りまわったバイタリティーの持ち主である。

K2での彼は獅子奮迅の働きであった。既にカラコルムでの登山を何回も経験している彼の口癖は「シゲちゃん、ネパールと比べてカラコルムのキャラバンは厳しいぞ、しかし楽しいぞ」であった。確かにネパールヒマラヤのキャラバンが長閑な田園地帯を通過し、点在する茶店でチャンやロキシーを飲みながら、おいしい食事をしながらであるのに比べカラコルムのキャラバンは、炎熱の砂漠から始まりアルコールも無い空しいものであるが、目前にはすばらしい山々が秀麗な姿を見せ、古き良き探検時代を振り返る事のできる夢多き場所である。広島さんのK2に注いだ情熱は八月九日八六一一㍍の頂上に立つ事によって報われた。頂上の滞在時間が長すぎて帰路極度の高度障害に見舞われた彼は、C4で迎えたときも、ベースキャンプに帰着し

た時も「良かった、良かった」を繰り返していた。そしてこの言葉に永年の労苦が報われた喜びの発露をみることができる。

K2登山が終了し登山隊が解散してからも「K2会」なるものを結成し、各地で懇親会が繰り返された。K2登頂の前後に期せずして二人とも長男が誕生していたので、南小谷の温泉でK2会が催されたときに二人の子供も参加し、ゴリラの様な新貝さんにじゃれ付いていた事など昨日のように思い出される。K2会は毎回、会の終了後原田さんが皆が飲んだビールや日本酒などの酒瓶の数を発表するような破天荒な会であるが、その時の楽しみの一つは広島さんの登山報告や、これから行こうとする地域の紹介を聞く事であった。

彼は一九七一年から二十六年間で五十七回パキスタンを訪れている。それも山登りだけではなく高原や砂漠、遺跡など多岐にわたりその足跡はパキスタン全土に及ぶ。我々はただ山を登るだけの凡人であるが、彼のすばらしいところは自分の見聞を山岳雑誌や新聞に繰り返し紹介した事である。『地球の歩き方・パキスタン編』等彼の手になる書物も多い。パキスタンを愛し、パキスタンにのめり込んだ男の大いなる遺産である。一九九七年はK2登山から二十年経った節目の年であった。K2会はパキスタン、ラワルピンディで開催される事が決まっていたし、記念登山はK2頂上から見る事のできた美しい花嫁の峰「チョゴリザ」で行うという事に決定していたが、国境紛争によりインド軍が近くに進駐しているとの事でパキスタン政府から許可が出なかった。そこでK2に連なるスキルブルムが新たな目標となった。

神奈川県ヒマラヤ登山隊とK2会メンバー三十人は幾つかの班に別れてパキスタン入りをした。仕事で都合のつかない私は妻を代理出席させた。七月十二日には、カラコルム山脈へ飛行機でむかい、二十年前登ったK2を懐かしみ、スキルブルムの偵察を行っている。その夜はイスラマバードのリージェンシーホテルでK2登頂二十周年記念、パキスタン独立五十周年記念レセプションが開催された。パキスタンの要人も多数出席したこの催しは広島さんのパキスタンでの信頼の深さを彷彿させるものであった。

八月十九日夜、無事登頂を済ませベースキャンプを翌日離れるという日、非情な雪崩が神奈川ヒマラヤ登山隊のベースキャンプを襲った。そしてK2会のメンバー広島三朗・原田達也・土森譲・中込清次郎、K2会準会員の菊田佳子、高校教諭の永澤茂さんが亡くなった。もし印パ紛争が無かったらと思うのは私だけではないであろう。

「若い人達に夢を」、ヒンズー・クシュを縦横無尽に歩き回った男を失った我々の悲しみと損失は大きいが、彼のことである、きっと先に逝った吉沢一郎総指揮・新貝勲隊長ら十一人と夢を語り合っている事であろうと思える事がせめてもの慰めである。

（広島三朗氏は一九六八年入会、会員番号六五八八。紹介者は本田圀雄、松永敏郎）。

（重廣恒夫）

佐々木　豊喜　氏（一九三七～一九九七）

昨年十一月二十五日、何十年来の山仲間であった佐々木豊喜さんが亡くなられた。そのことは彼の意志でしばらく伏せられていたため、支部の私たちも何日かしてはじめて知った。巷の儀礼に染まらず、意のままに自然に帰りたいといっていた豊喜さんらしい末期であった。

豊喜さんは、文字通り宮城支部の中堅会員として活躍され、私たちの会には無くてはならない方であった。支部の山行や行事には欠かさず出席され、しかも積極的に面倒な役割を買って出て、苦労を意に介することがなかった。日本山岳会に入って（一九七二年十月入会。会員番号七四三五。紹介者伊達篤郎・板橋元一）、はじめて多くの知己を得、本格的な登山を覚えられた豊喜さんには、支部における山登りや行事の一つ一つが新鮮で、全力投球でなければ気が済まなかったのだと思う。それはちょうど、宮城支部が独自の山行を頻繁にもつようになった時代で、県内のよく知られた山の他に、火打岳、祝瓶山、オボコンベ（宮城支部が選んだとっておきの山、第一号、この時豊喜さんはマンモス岩に登った）、五葉山、和賀岳、番城山などがあって、どの山も豊喜さんの想い出につながっている。

この頃はじまった南蔵王スキー登山や支部としての沢登り講習会は、豊喜さんが提唱され、そして担当されたりした行事で、いまも支部の中で続けられている。また、故渡辺徳会員のライフワークであった山岳地帯における昆虫調査の牽引役の一人が他ならぬ豊喜さんであった。

このようにして豊喜さんは年毎に支部活動とのかかわりを深められ、一九八五年からは支部事務局を担当されることとなった。また一九八五年から日本山岳会の評議員に推され、一九八八年まで活躍された。

当時、宮城支部の最長老であった平沢亀一郎翁は、台湾の山の開拓者の御一人としてよく知られた方であったが、九十歳を迎えられて『台湾の山と私』を出版された。それを機に名誉会員に向けての支部をあげての運動が起こった時も、本部との窓口として活躍されたのが評議員であった豊喜さんであった。私はこの年の年次晩餐会に平沢翁の車椅子を押して参加させていただいたが、この時の豊喜さんの満足気な顔が忘れられない。さらに一九九一年には、豊喜さんは宮城支部の初めての海外登山、中国四川省羊拱山登山隊の秘書長を務められ、初登頂へ貢

献された。

豊喜さんと山とのことについて触れてきたが、彼を語るときどうしても建築家としての仕事に触れないわけにはいかない。豊喜さんは一級建築士として仙台に事務所を構え、多忙な毎日を過ごされていた。勿論、一般住宅も手掛けられていたが、それよりも公共的な大掛かりな施設が多かったように思う。私の知る限りでも、「山元町歴史民俗資料館」「山元町ふるさと伝承館」「山寺山上院」「山元町立坂元中学校」、ふるさと桃生町の「桃生文化交流センター」「中津山第二小学校」、仙台では「仙台長生園」「仙台楽生園」などの老人ホーム、福祉施設「葉山ディサービスセンター」など多様な公共施設に及び、いかに豊喜さんが幅広く活躍されていたかを知ることができる。

私は、「山元町歴史民俗資料館」がつくられるとき、自然に関する展示内容の監修役を仰せつかって以来、館と関わりをもってきたが、夢殿をイメージしたとする外観の単純な美しさと、各展示室の有機的な配置に豊喜さんの卓越した建築家としての才能を感じてきたのであった。

しかし、これらの彼の作品群には、山との関わりを示すひとつの特徴が認められた。それは、どの建築物でもメインホールに当たる大屋根が三角形の山型をなし、虚空に聳えていることである。私は、そこに豊喜さんの「山」が見事に投影されているのを見るのである。豊喜さんは建築においても贅を好まなかった。どんな材料でも適正に使うことによって何十年も生かすことができる、設計から管理まで、がモットーであった。

彼の建築の仕事は山でも生かされたことがあった。一九八〇年二月六日、蔵王山の丸山沢で起こった大雪崩によってかもしか温泉の山荘が吹き飛んだ時、雪崩の衝撃力を計算したのである。そしてこのことから、相当に頑健な山小屋でも破壊はまぬがれないことを明らかにした。これらの資料は、その後同じ場所に山小屋をつくりたいとする人々を説得するすぐれた資料となった。

豊喜さんが肺がんが見つかって入院されたのは一昨年の六月であった。それから彼の闘病生活がはじまった。十一月には退院されたが、勿論山は無理であった。膨大な仕事もかかえておられた。

それでも秋になって、豊喜さんは久しぶりに支部の登山に顔を見せてくれた。船形山の後白髪山行の時であった。私たちは、ハードな登山ができるまでに彼の健康が回復していることを知って、心から喜んだ。この日は、まだ十月だというのに新雪が降って、山頂に近づくと霧氷の山となった。豊喜さんは独り黙々と先頭をきって歩き、私たちを一層驚かせた。山頂に立った彼は、いつもと変わらぬにこやかな顔で、ただうれしそうに微笑んでいた（別掲写真）。しかし、それが雪の上を歩く最後の登山となった。春になって七ヶ宿の有矢山に登ることができたが、こ

こで彼の登山は閉じられるのである。彼の生涯は、家族に支えられ仕事と山にすべてを没頭した五十年であった。

支部会員打ち揃って伺った桃生町寺崎の御実家からは、北上川の流れを距てて、涌谷の箟岳山がすぐ間近に眺められた。

（柴崎　徹）

高見和成氏（一九四五〜一九九八）

二月二十二日、大山北壁天狗沢で、高見和成が広島山の会の同僚、森田恭充とともに滑落、死亡した。それからしばらくたった今も、僕にはどこか、事実をそのまま受け入れがたい思いが残っている。まるで豊かな前途を約束されていた少年が、突然逝ってしまったときに感じるような。

高見は、間違いなく日本の登山史の中でも、最強の世代における最強のクライマーの一人だった。一九六〇年代後半から、高見は穂高や剱ばかりでなく、唐沢岳や奥鐘山などで次々と新ルートを開拓した余勢をかって、一昔前の日本人なら名前だけで恐れ入ってしまったようなヨーロッパ・アルプスの大ルートを、短時間で苦もなく登り切ってしまう。一九七〇年代に入ると、彼の視線は当然のようにヒマラヤに向けられていった。

そのヒマラヤでは、鉄の時代が幕をあけていた。八〇〇〇メートル峰の初登頂の時代は終わり、より困難な壁や稜への挑戦、縦走の試みなどとともに、いわゆるアルパイン・スタイルへの指向性も強まりはじめていた。けれども高見の場合、特定のスタイルにこだわるということはなかったし、あれだけの山歴を重ねながら、記録に対しての執着もほとんど見せなかった。むしろ対象がどんな山であれ、自分自身の能力を最大限に発揮できたと自ら納得すれば、それで満足するという、今どき珍しいと言いたいほどの古典的な職人気質を、最後まで持ち続けていたように思う。

たしかに登山家としての高見は強かった。そのことは山歴からも一目瞭然だが、ここではそれを辿る紙幅はない。既刊の遠征報告書や著書、そして刊行が予定されている追悼集などにゆずる。とすれば、僕が記せるのは、直接つきあった時間にすれば、決して多いとはいえない僕にとってすら、なぜ高見が仲間として、常に重い存在感を持っていたのか、ということぐらいだろう。

ところで、ヒマラヤでの強さとは、体力や技術などだけで決まるほど単純なものではない。たとえば、さまざまの環境に合わせて自分をコントロールし、誤解を招きかねないのを承知のうえであえていえば、適当に自分をいたわる能力といったものも、重要な要素になる。そして強いというだけなら、同じ世代

に限っても、高見と匹敵する男は、少なくとも何人かはいただろう。だがそのなかでも、高見ほど仲間に対して優しく繊細な心遣いをした男を、僕は知らない。ヒマラヤの高所で、強さと優しさを一身に体現してしまうというような芸当は、ただ体力があるとか、人が好いとかでやってのけられるものではないだろう。だが、どうやって自分を鍛えあげてきたのか、そんなことを僕は尋ねたこともないし、尋ねたところでまともな返事がもどってきたはずもない。

ナンダ・デヴィ登山の準備をしていたころ、高見とは何度か手紙のやりとりをしたことがある。ノートの切れはしやコピー用紙の裏などに鉛筆でなぐり書きした僕の手紙に、高見はいつも上質の便箋を使い、万年筆できっちりとしたためた返書をくれた。もう少し手抜きした方がいいんじゃないか、と思ったほどだが、あれも変えようのない、彼のやりかただったのだろう。

一九八四年にカンチェンジュンガ登山を計画したとき、メンバーとして真先に浮かんだ一人が高見だった。ナンダ・デヴィ以来の流れからいえば、隊の中核に、当然高見がいるべきだった。それでも結局声をかけなかったのは、ずっと後になっても、山の思い出ばかりではないつきあいが続くことを考えたからだ。それに長い眼でみれば山登りにしても、自分一人で、あるいは仲間うちだけでできるものではないということが、身に沁みてわかりはじめていた、ということもある。

こんなはずではなかった、今も痛切にそう思う。

略　歴

一九四五年　愛媛県生まれ
一九六七年　広島山の会入会
一九六九年　ヨーロッパ・アルプス（グランド・ジョラス　ウォーカー稜、ドリュー南西岩稜、同西壁他）
一九七三年　チョモランマ南西壁（RCCⅡ）
一九七五年　カンピレ・ディオール初登頂（広島山の会）
一九七六年　日本山岳会入会（会員番号八〇六一、紹介者　浜野吉生・梶正彦）
　　ナンダ・デヴィ縦走（日本山岳会・インド登山財団合同）
一九七九年　ラトックⅢ峰初登頂（広島山の会）
　　チョモランマ偵察（日本山岳会）
一九八〇年　チョモランマ北壁（日本山岳会）
一九八二年　チョゴリ北稜初登攀（日本山岳協会）
一九九一年　ナムチャバルワ（日本山岳会）
一九九三年　大山地獄谷で雪崩により遭難、生還
一九九八年　大山北壁天狗沢で遭難、死亡。享年五十二歳

著書に『雪の谷　山の声』。一九九四年悠々社

（鹿野勝彦）

盧（ロ）　周孝（ジュヒョウ）氏（一九四三～一九九七）

山肌はまだ冬の状態で、梢の先からようやく新芽の膨らみを感じさせる一九九一年三月のことである。友人の誘いで日本で最も早い山開きをする標高一三四二㍍の諸塚山に行った。山麓の寒村飯干村の公民館で村人の歓迎を受け、夜は懇親会が催された。

盧さんとの出会いはこの時で、以後山の友として親しい付き合いが始まる。四月になって、盧さんから酒でも呑みながらゆっくり話がしたいと誘いがあり、下関のとある飲み屋の小座敷で山友達も含めて杯を交わした。これがきっかけで、一緒に山にいくことなく飲み屋で会うことが多くなった。

一九九一年の夏、屋久島で遭難が発生し、盧さんを含む十六人の捜索隊を編成し屋久島に向かった。頂稜部の全沢を捜索したが、残念にも発見には至らなかった。当時の盧さんは他の山屋の追従を許さない体力の持ち主で、捜索用装備を人一倍担ぎ、隊員の食事や身の回りの世話を嫌な顔一つ見せないでてきぱきとこなしていた。

一九九三年十月、盧さんのひたむきな山への情熱は当時の福岡支部長吉村健児氏と私の心を動かし、日本山岳会に入会していただいた（会員番号一一五八七、紹介者吉村健児・太田五雄）。その後奥さんも入会されオシドリ会員となる。一九九六年、テレビ朝日の大谷映芳氏から屋久島を撮影したいとの話が有り、一般の人達に知られていない宮之浦川を遡って小楊子川を下る沢伝いの縦断をやることになった。報道スタッフ四名、鹿児島大学の米沢弘夫氏（本会会員）、当然盧さんにも加わっていただくことになり、四日で縦断を果たした。この記録はニューステーションで流され、彼はもとより、家族にとっても思い出深いものになった。

私の知る限り盧さんの山歴をみると、夏は毎年北アルプスで過ごし、一九九四年には双六岳周辺、翌年には立山三山、早月屋根から剱岳、一九九六年には常念岳、蝶ヶ岳等を歩いている。冬は伯耆大山が修練の場でもあった。また海外ではネパールヒマラヤを二度訪れヒマラヤの高峰にも憧憬の念を抱いていた。

そしてなによりも屋久島をはじめとして、九州の山をこよなく愛した人でもある。月に二度はフラッと山へでかけ、会うたびに新しい山行が増えていた。酒の肴（登山の話）はますます豊富なものになって楽しい話を毎度きかされたものである。

一九九七年の冬より、体調が優れないと言って酒を呑む機会が少なくなった。入院したことも知らない五月の始め突然盧さんの逝去が知らされた。まさか五十四歳の若さで亡くなるとは

とても信じ難いことである。日本山岳会福岡支部では大変信望が厚く、一九九四年九月から事務局長、一九九六年六月以降会計監査役を務められていた。

当時屋久島にいた私は、どうしても離せない所用があって葬儀や追悼会に出席できず、後日実家を訪れ御冥福を祈った。また今年の春にはご家族、ご親族の方々と盧さんの願いであった屋久島の山で散骨を行った。

水面に浮かび流れゆく花を見ていると過去の様々な思い出が蘇り、何ともやり切れない思いであった。私の屋久島の別宅には盧さんから送られた柱時計が息づいている。そして共にヒマラヤの山を登りに行こうとの約束は切れてしまった。今年の六月、私は聖域にあるナムナニの山頂に立った。天に近い山頂で「盧さん、一緒に登ったからな」と心の中で呟いていた。

温厚な人柄と情熱的な行動は皆から親しまれ愛されてきた。福岡支部でも今後ずっと役員を続けていただきたい一員でもあったし、本当に惜しい人を亡くした。福岡支部としてもその痛手は大きい。盧さんのご冥福を心から祈るばかりである。

（太田五雄）

会報「山」訃報・追悼文一覧

一九九七年六月号（六二五号）
追悼　徳島和男・涸沢に斃る（尾上　昇）

一九九七年七月号（六二六号）
追悼　クリシュナ・B・バルマ氏突然の訃報（神崎忠男）

一九九七年九月号（六二八号）
追悼　福田宏年先生を偲ぶ（中村太郎）

一九九七年十月号（六二九号）
追悼　中澤眞二名誉会員を悼む（中村純一）

一九九七年十一月号（六三〇号）
追悼　今井友之助先輩の死を悼む（飯野　亨）

一九九八年二月号（六三三号）
追悼　大屋悌二さんを偲んで（吉永英明）

一九九八年三月号（六三四号）
追悼　山と人と本と―吉沢一郎氏を悼む―（石原　脩）

支部だより

■北海道支部

北海道支部は昭和二十四年に設立したが、諸般の事情で休会し、再発足したのは昭和四十四年で、明年は再スタートしてから三十周年を迎えることになる。

支部員も二百十名を越し、広域地区だけにその運営に苦慮している。北海道を東西南北の四ブロック制にして、それぞれの地域から山行委員を選出し、年に一度各地域持ち回りで登山行事を行い、別に地区集会も催す計画である。若い新入会員を増やさなければ、高齢化に伴い支部存続も危惧される。日本山岳会百周年に向けて、北海道が東西南北の四支部に揃って独立して行くことが、よりきめ細かな運営ができ、会員サービスにつながる方策として考えられている。

平成十年度の支部総会で、支部長に新妻徹氏、事務局長・長谷川雄助氏、道東・高橋桓志氏、道南・横内泰美氏、道北・渋谷正己氏が選出された。また三十周年記念事業実行委員会委員長に向井成司氏、委員・植田惇慈氏が任命され、体制固めがなされた。

登山行事も五月の昆布岳（道南）、七月の羅臼岳・硫黄山（道北）、十月の久山岳（道東）、二月の目国内岳（道西）と全道各地で開催。行事間の隙間を埋めるべく前年から同好会行事を開催している。六月の手稲山パラダイスヒュッテでのグルメ山菜料理と音痴コーラスを愉しむ会、七月～九月は昨年に引き続き「絵画・写真同好会作品展」を、昼時間から開店している喫茶・酒房「つる」で、作品を入れ換えながら開催。秋の赤岩での岩登りトレーニング、冬の山スキーなど、言い出しっぺが世話人となって実施すべく、何でも開催を呼び掛け盛り上げている。

チャーター便で行くJACネパール・トレッキングには、支部三十周年記念同好会行事を兼ねて、多くの参加者を募っている。その成果が支部年次晩餐会の海外スライド映写会で賑わせてくれることを期待している。

道南地区集会は滝本幸夫会員の厚意で六月二十四日に「ハートピア函館」で開催し、期待に満ちた熱心な討議が行われた。道北地区集会は八月に旭川市。道東地区集会は十月に帯広市とそれぞれ開催を予定している。

三十周年記念事業として、平成十一年七月三～四日を中心に、大雪山・トムラウシ山・十勝岳と希望コースに応じた分散行事を計画中である。昨年の本部年次晩餐会での「わが支部とっておきの一山」パネル展は「大雪山」を、今年度は「十勝岳」を展示し記念山行の説明も併せて行っていく。

記念式典は平成十一年七月二十日、つまり三十年前の七月二十日に北海道支部再発足の設立総会が開催された日に、札幌市で開

催を予定している。共に「山」などでお知らせする機会があろうかと思うが、参加をお待ちしている。

（高澤光雄）

■岩手支部

八十名を越える会員の支部行事に対する要望は多様化して、それに沿っていくことは容易ではない。理事会の主催する中央行事の他に、支部主催の行事にも年一回でも参加してもらえるように企画している。

平成九年度委員会・総会を四月六日に盛岡市上田公民館で開催した。出席者は委員会十名、委任五名。総会の出席者十九名、委任二十二名であった。八年度事業報告、決算の承認及び九年度事業計画、予算を議決し更に支部委員の選出を行った。新委員の互選によって中谷支部長、菊池副支部長、事務担当松田、会計担当諏訪が選出された。何れも留任。

四月二十七日、月例山行。県南の室根山・束稲山・生城寺・雷神峠と一等三角点を四つ巡る山旅となった。幹事中谷、九名参加。

五月十八日、月例山行。前夜出発で鳥海山で春スキーを楽しんだ。幹事菊池、佐藤（英）十名参加。

六月一日、岩手支部通信第九号発行。六月二十一日、春の例会。葛巻町馬渕川源泉小屋、快適な小屋で地元・遠別山岳会の会員のお世話になった。六月二十二日、春の例会山行。遠別岳、安家森。美しい花を眺めながらの、のんびりした山行であった。幹事諏訪、十一人参加。

七月十三日、月例山行。八幡平草の湯コース。山麓の人達しか歩かない登山道で森林帯を過ぎ、高層湿原の中を辿って山頂に至る、昔の八幡平を偲ばせる四時間程の登りである。幹事中谷、立花、十三名参加。

八月二十二日～二十六日夏の例会と山行。木曽駒・空木岳・越百山。天候に恵まれて中央アルプスを楽しく歩いた。二十代から七十代の幅のある一行で先頭と後尾が離れてしまい、その対策を痛感した。リーダー菊池（修）サブ松田・諏訪、十七名参加。

十月四日、秋の例会。久慈市山根温泉。山村ムードの漂う宿に集い研究のため近くに住んでいる、阿部克弥会員による雑穀を中心に山根の端神物語をしてもらった。

十月五日、秋の例会山行。遠島山。かつては信仰の対象であったり、炭焼き、牛の放牧などの山であったが、今は何れも廃れてしまっている。下山後に阿部（克）さんの参加している端神の車市を見物して珍しい「ウキウキ・ストギ・ユカベ」などを賞味して解散した。幹事阿部（克）、中谷、十四名参加。

十一月二日、月例山行。大迫町飛内峠。宮沢賢治の「ドングリと山猫」の舞台といわれている地を尋ねる散策で、車道はあるが昔の峠道は無くなっている。それらしき所を藪を分けて登った。峠は賢治の描写とは少しイメージが違った。幹事松田、中谷、八名参加。

平成十年二月十日～十一日、月例山行。鞍掛山と黒倉山、網張

温泉泊。天候にも恵まれてスキー登山を楽しんだ。リーダ阿部陽子、サブ高橋タイ子、六名参加。

（中谷　充）

秋田支部

当支部における平成九年度の活動状況は、特に目立つ事業はなく、目標を各々の行動に重点を置く事として、それぞれが充実した内容のものとなっている。

支部山行については、古希も還暦も該当者はなく、お祝い山行はなし。春は秋田と青森、そして岩手の三県境に跨がる四角岳と中岳（ちゅうたけ）の一等三角点に二十一名が集い、夏は古里の山・月山（つきのさん）に雨天の中二十名が集う。そして、語呂合わせ最後の山として大白森の北方にある九九九メートル峰、併せて大沢森と内大沢森のヤブを楽しみ十六名が参加。秋は秘峰中の秘峰・三森山、眺望の優れることから古来より天下八方の異名をもち、快晴のもとに初冠雪の焼石連峰の雄大な眺めをもったいなくも十名で楽しんだ。

毎年実施されてきた小さな海外登山（しかし、交流は最大）は休み。代って礼文岳と利尻岳を選んで十一名が参加、全員登頂して所期の目的を果たした。

本会総会に先だって開催された支部総会は、二十九名の出席者のもとに開催。事業、決算、予算案などを審議、懇親会も併せて行った。

東北地区集会は、福島支部が主催され安達太良山において開催、当支部より十名が参加。また、本会の年次晩餐会には十二名の多数が出席し、翌日の懇親登山・扇山、有志が雲取山に登り、それぞれ親交を深めあった。

支部報「秋田山岳」は、本年も三回発行して通算第三十八号となり、四十号での合本を目指して力を入れている。尚、当支部報は予算上、支部関連記事のみに制限している。

その他としては、全国支部懇談会（越後支部主管）を始め、関連団体の各種会議・事業などへ参加し、例年の通り地域山岳界の発展のため、それぞれ支部会員が貢献していることは例年の通りである。

（佐々木民秀）

山形支部

平成九年度は支部総会ではじまる。上山市内の「山城屋」で二十二名の出席を得て四月二十二日開かれた。事業報告、予算決算と「ヒマラヤトレッキング」を含めて八年度の事業計画を話し合った。四月十九日には、総会記念登山として、蔵王山の展望台神山葉山に五名が登った。

五月二十五日には、雁戸山周辺で清掃登山を行う予定であったが、生憎の悪天候で中止となった。清掃登山は支部行事に毎年組み入れられてはいるが、最近の山は断然綺麗になった。

七月六日には、栗駒山と世界谷地に八名が出かけた。山形からの日帰りとなるときついが、出発の時の悪天候は頂上で晴れ上が

り、十分満足行く登山であった。七月十九日から二泊三日で、岩手県内の早池峰山・岩手山・七時雨山を七名が駆け巡った。年配者には、少々きつい山行ではあったが、花の美しさには満足した。

八月五日～六日は、山の鼻に一泊して至仏山を三名が登った。山の鼻コースが解禁になったばかりであったが、尾瀬が原と燧ガ岳が綺麗に見え、尾瀬を側面から見ることができた。八月三十日から秋田・岩手県境に横たわる和賀岳・真昼岳を一泊で登った。二つの山とも自然そのままで、登山道も藪に埋もれている味な山であった。そして懐の深い山であった。

九月に入って全国支部集会が、越後支部の主管で行われ、その登山が、九月二十一日に黒姫山で行われたのには、五名が参加した。そして支部集会終了後、一名を加えた六名が越後駒ケ岳と浅草岳を目指したが、悪天候のためいずれも登頂という目的は果たせなかった。

十月十四日から十五日間は、今年度最大の事業の「ジョムソン街道トレッキング」に十二名参加して行われた。勤務を離れての十二日は長いが、ヒマラヤのトレッキングには短い思いを残して終わった。三年続けて実施したヒマラヤトレッキングもこれで終わって、また別の計画に取り組むことになる。十月十一日～十二日行われた福島支部の五十周年記念東北集会には、主力メンバーがネパールに出かけたこともあって、一人の出席にとどまってしまった。福島支部にはあらためてお祝いを申し上げたい。十月二十五日～二十六日には、恒例の「清吉新道探勝」と今年初め亡くならられた佐藤俊一会員を偲んで追悼登山が行われた。地元を中心として、十二名の会員が参加した。

年も押し迫った十二月十三日～十四日には、支部恒例の「支部晩餐会」が蔵王温泉で賑やかに行われた。雪はまだ少なかったが、シーズン初めのスキーに精を出す会員も少なくなかった。

年が変わり、二月七日～八日には、「蔵王樹氷原を滑る会」が十五名参加して行われ、たまたま行われていた樹氷のライトアップを見たり、華麗に樹氷の中を乱舞して心行くまでシュプールを残して終了した。

三月十四日～十五日には、今年最後の行事である鳥海山の稲倉岳のスキー登山が九名参加して行われた。当日は春の嵐に見舞われたが、元気だけは嵐に負けない思い出を残して本年度を締め括った。

（梅津　博）

■宮城支部

一九九七年の支部行事は、四月十八日の支部総会からであるが、今年の総会は役員の改選の年でこれから二年間の活動を推進する役員が次のとおり決まった。支部長柴崎徹、副支部長千田早苗、総務・財務委員会千石信夫、会計委員飯塚とみ子、集会委員会三宅泰、高橋功、遠藤昭治、会報出版委員会木皿謙、庄司駒男、海外・高所・医療委員会西郡光昭、自然保護・科学委員会鈴木晃三、熊谷正志、指導・遭難・岳連対策委員会太田正、高橋二義、婦人

懇談会委員会佐々木まさ子、会計幹事佐々木郁男、蓬田三枝子以上十七名となった。

九七年の支部行事は、例年どおり活発に行われ、六月、自然保護山行・寒風山十二名参加。七月、夏山山行・剣岳六名参加。八月、ビールパーティー・二十七名参加。同八月、仙台山岳博物館構想ミーティング・十五名参加。十月、芋煮会山行高倉山・十六名参加。十一月、晩秋山行女神山（福島県）九名参加。十二月支部晩餐会・二十八名参加。九八年元旦、泉ヶ岳元旦登山・十名参加。同一月、厳冬期山行北面白山・六名参加。二月、冬山山行北雁戸山・四名参加。三月、スキー山行山形蔵王・七名参加。以上の行事を実施した。

今年の活動の中で特筆すべきことが三つある。まず残念ながら当支部の事務局を長く担当された元評議員の佐々木豊喜氏が亡くなられたことである。まだまだこれからと言う時だったので残念でなりません。あらためてご冥福をお祈りいたします。二つ目には、仮称仙台山岳博物館構想ミーティングと称して支部会員で宮城県にこんな博物館があったら良いなと思うような夢を語りあった。今日、仙台の岳人らが所有している山岳図書や、山内ピッケルといった様々な文化財的なものが、風化していくようで不安が残ることや、より活発な登山活動ができるように情報提供のための施設があっても良いなど様々な意見が交わされた。宮城支部も九八年で設立四十周年を迎える。支部の歴史が風化しないよう、少なくとも支部の資料など整理保存を考えていきたいと考えている。三つ目は、十二月の支部晩餐会において支部活動費の調達を目的にオークション形式のバザーを開催したことである。これは宮城支部では以前から行っているものだが大変楽しく盛り上がるので好評を博した。内容は、各人が最低一品、出来るだけ山に関するものを出品していただき、オークションにて売れた金額を支部に寄付していただくと言うもの。今年の極めつけは、一九五六年マナスル登頂記念メダルが柴崎支部長から出品され、落札金額は伏せておくがその他絵画、古い山岳図書など今ではとても手に入らないような品々が、次々と出てくるのでとても楽しい晩餐会であった。お蔭様で支部会計も大変潤った。前にも述べたが、宮城支部は、一九九八年五月で四十周年を迎えた。九八年四月の総会において記念山行として仙台の太白山に因んで韓国の太白山と小白山に登山することに決まった。九八年九月十一日から十五日までの五日間の予定で、同時に韓国山岳会との友好も図ることにしている。

（千石信夫）

■福島支部

福島支部は昭和二十二年十二月に設立され、今年十二月で満五十周年を迎える。前年度からの継続事業として、記念誌の発行と記念山行の実施に集中して取り組んできた。このため例年実施してきた夏・秋山の小集会、そばを食う会、新年会の行事は中止とした。

また、今年度福島支部が担当する東北ブロック集会を五十周年記念事業の一環と位置づけて実施することを定時総会（平成九年五月二十四日開催）にはかり了承された。なお、記念誌の発行は当初平成九年十二月の予定であったが、諸般の都合により、平成十年度に繰り越すこととした。実施した行事を以下に列記する。

一、総会等諸会議の開催状況

1　定時総会（五月二十四日）郡山市・郡山温泉において開催、前年度事業報告決算、新年度事業計画予算、五十周年記念事業計画等について審議した。出席者十名。

2　地区別記念山行（福島・二本松・郡山・白河・会津・いわき・の六地区）委員会を二回開催（四月十九日、郡山市薫地域公民館、五月七日、福島市「はりまや」）

3　記念誌編集委員会を四回開催（委員長鈴木嘉氏宅・五月十八日、八月六日、十二月十六日、十年二月十二日）。

4　東北ブロック集会実行委員会を二回開催「はりまや」六月二十七日・九月十七日。

二、支部創立五十周年記念山行

五月二十五日　郡山地区　安積山、額取山・三名参加。
六月一日　二本松地区　安達太良山・十名参加。
六月一日　会津地区志津倉山・三名参加。
六月八日　いわき地区　屹兎屋山・猫鳴山・十名参加。
七月二十七日　福島地区　一切経山、駕籠山稲荷・十名参加。
九月七日　白河地区　那須三本槍岳・九名参加。

三、平成九年度東北ブロック集会

十月十一日～十二日、二本松市岳温泉国民年金保養センター「阿多々羅」にて開催、東北各支部・首都圏、信濃、関西支部の会員、本部から斎藤会長・小倉副会長・吉永常務理事ら総勢五十八名の参加を得た。

ブロック会議の決定事項として、来年度ブロック集会は秋田支部が担当することとなった。

続いて懇親会では、佐久間支部長の歓迎の挨拶の後、斎藤会長より福島支部が創立五十周年を迎えたことへの祝辞と、ＪＡＣの近況が述べられた。

翌十二日の山行は、便宜上五班に編成（一班本部首都圏・二班岩手、山形・三班宮城・四班秋田・五班福島）、各班に二、三名づつ福島支部の会員をガイド役として付き添わせ、マイクロバス等に分乗、奥岳ゴンドラ乗場に移動。ゴンドラは強風のため運休、登山道を登ることに予定変更、奥岳を午前九時に出発。紅葉に彩られた登山道を登る。五葉松平へもう一息と思われたころゴンドラが運転開始されたがときすでにおそし。

五葉松平手前に差し掛かった辺りから時雨、やがて霙になり湿り雪に変わった。このため登山隊本部は、「安達太良山頂～くろがね小屋～下山」の予定を急遽変更。頂上手前一六〇〇㍍付近から引き返すことにした。一部はここから直ちに引き返してゴンドラ駅に向い、本隊も一六五〇㍍地点で視界不良のため引き返した。奥岳駅に全員が着いたのは午後一時十五分、奥岳駅前レストラ

ンで昼食後、午後二時記念写真を撮影して解散した。

四　安達太良スキーツアー（十年二月二十二日）薬師岳（ゴンドラ終点）～安達太良山頂～通称振り子沢～五葉松平～奥岳スキー場への滑降コースを楽しんだ。参加者十名。

五　西吾妻スキーツアー（三月二十九日）グランデコスキー場・リフトを利用～西大嶺～西吾妻小舎～西吾妻山頂～二十日平を経てグランデコスキー場への滑降を楽しんだ。参加者六名。

六　本部諸会議への出席

支部長会議二回・事務局担当者会議一回・支部長・担当委員それぞれ出席、年次晩餐会九名出席。

七　年次晩餐会に「わが支部とっておきの一山」パネル展示および説明のため一名出席。

（安藤　治）

■越後支部

越後支部は新潟県山岳協会事業に結集し活動する支部であるが、支部独自事業分を以下に報告する。

五月十日平成九年度越後支部総会を会津で開催。

本年から各地区を巡回する形で開催する運びとなり、会津地区担当支部委員の矢田目昇氏に開催宿、懇親登山等の一切の仕切りをお願いした。西会津町大山祇神社前の光盛館に三十名が集い、総会、懇親会、翌日鳥屋山（一等三角点）にて懇親登山を二十五名で実施した。会津の皆さんの暖かいもてなしで盛会裡に終えることができた。

七月二十五日、高頭祭を弥彦山大平園地の高頭仁兵衛翁寿像碑前にて開催した。第四十回目に当たり小倉厚氏をお招きし山の話をお聞きし、松明をかざし弥彦山を下り、越後一宮の弥彦神社～弥彦駅前まで松明行進し登山を終えた。

九月二十日～二十一日、第十四回全国支部懇談会を越後支部主管で東頸城郡松代町芝峠温泉を懇談・懇親会場として開催された。斎藤惇生会長、他本部役員がそろって参集。

本部二十三人、北海道一、岩手一、秋田一、山形五、宮城一、越後二十八、信濃五、山梨二、静岡二、東海十二、岐阜六、京都九、富山二、石川四、福井三、関西四、東九州二、の十七支部、総員百十一人で盛大に開催された。新しい試みとして、一般会員が、本部、全国の支部でどのような活動が行われているのか、懇談会を通じて理解と相互交流を図りたいというコンセプトで全国支部懇談会を設定した。

活動を参加者全員に理解していただくために予め各支部の活動状況報告書を提出していただき、一冊の資料として全員に配布、各支部代表から補足を含めた説明をお願いし、より一層理解を深めていただいた。懇談会第二部として懇親会が盛大かつ有意義な全国交流の場として繰り広げられた。

二十一日、懇親登山に刈羽・黒姫山（標高八八九・五㍍）にて懇談会第三部として見事なブナ林を楽しんだ登山隊と、地域の観光隊の二手に分かれ、楽しかったという声で終了した。

十二月二十三日、第八回支部年次晩餐会。会場、新潟市弁天・新潟東映ホテル白鳥の間。来賓新潟県山岳協会会長藤井信氏から中国・チァジャマ峰（五、九三〇㍍）へ日中合同登山を山岳協会五十周年記念事業として実施したことについて講演をいただく。登山活動期間は平成九年七月二十六日～八月二十三日（二十九日間）で、チァジャマ峰Ⅱ峰（五、八九〇㍍）へ八月十四日、阿部信一、知野勇人の二人が初登頂した。その前後の苦楽、意義などについて講演。小林智明副支部長の乾杯で宴。

新人紹介・横山征平、北村慎一両氏から入会に当っての抱負をいただく。出席者五十四人。

（田邊信行）

■山梨支部

昨年は、支部設立五十周年の節目を迎えるにあたり、記念事業を盛り上げようという機運が高く、支部一丸となって事業に取組んだ一年だった。その甲斐あって、十一月十五日～十六日、勝沼町「ぶどうの丘」に於て、本部斎藤会長、竹内副会長、信濃、越後支部の来賓の方々をお招きし、盛会のうちに記念式典及び記念事業を無事終了することができた。

一方、九八年の支部行事は一月十七日の古名屋ホテルでの新年会で開けた。

四月には、支部の協賛事業である故深田久弥氏を偲ぶ深田祭が、韮崎市の深田公園に於て開かれた。四月十一日、甲府市総合市民会館に小倉副会長をお迎えし定期総会を開催。当日は、山梨県の春の一大イベントである「信玄公祭り」の日で、市内は夕刻からの武者行列で大変混み合っていたが、その行列を横目に夜遅くまで歓談した。総会に於ては今年度目玉となる事業が少ないことから、支部山行に力を入れるとの方針が確認された。

五月二十三日～二十四日にかけ、金峰山の麓、金山平に於て、故木暮翁を偲ぶ第三十七回「木暮碑前祭」を開催。今年は例年より参加者は少なめであったが、祭典前夜は恒例のイワナの骨酒をはじめ、山菜料理に舌鼓を打ちながら参加者で盛り上がった。翌日はあいにくの雨となり山行予定を変更し、富士山麓の河口湖町で開催されている「足立源一郎山岳画回顧展」を皆で鑑賞した。

六月十八日～十九日には、甲府市に於て山梨県が主催の「第一回全国山岳トイレシンポジューム」が環境庁、県関係者及び全国からの山岳関係者等、延べ六百人が参加し二日間にわたり開催された。このシンポジューム開催のきっかけのひとつは静岡、信濃、越後、山梨の四支部が共催した「九十周年フォーラム」であった。支部では、この討論の成果を引継ぎ、支部として更なる討議を重ね、その成果を冊子にまとめ、昨年山梨県知事に「山梨県の山岳環境の整備について」と題して政策提言した。これらのこともきっかけとなり、県の環境行政を動かすこととなった。

このシンポジュームで話題となった、排泄物のテイクアウトの動きはまだ始まったばかりだが、今後行政も巻き込んだ形でどうなるか関心の向くところである。しかし、支部としては話題が水

質汚濁問題からトイレに偏り過ぎた感もあり、今後はハード、ソフトを含めた南アの問題を再度討論していこうと考えている。

（小宮山　稔）

静岡支部

静岡支部の担当地域は東西に長く、東海道新幹線駅が六駅もあり、南北は海抜〇㍍から、三、七七六㍍の富士山まで変化に富んだ支部である。支部会員の構成は、一団体と百十八名（男性百十四名、女性四名）で、平均年齢は五十八・一歳となっている。当支部も高齢化の例外ではなく、七十歳代十四名、八十歳以上八名で支部会員の一八・六%が七十歳以上である。

平成十年度支部通常総会は、五月十二日、静岡市珠賀美神社社務所に於いて開催された。

出席会員三十四名、委任状七十二名。開会を副支部長の水野公男が宣し、議長に大石惇支部長を選出。平成九年度の事業報告、会計報告がなされ、会員の承認を得た後議事に入り、平成十年度の事業報告案、平成十年度の事業報告案、平成十年度予算案が提案され、それぞれ承認された。

第三号議案に、①支部例会の件で本年試験的に年十回開催される例会のうち、九月例会を東部の富士市で、十月例会を西部の掛川市とそれぞれ一回づつ開催する事に決定。②支部創立五十年記念誌編集委員会の発足。西暦二〇〇〇年二月二十六日が支部創立五十年にあたり、今から準備に入る。委員長に西郷正郎氏を選出、委員五名も決定。③支部創立五十年記念準備委員会の発足。委員長に大石惇氏を、委員六名と、相談役に牧野衛氏を選出。

以上の議案が承認され支部総会は水野の閉会の挨拶で終了し、懇親会に移る。

静岡支部平成十年度の支部例会以外の事業は次の通り。

静岡支部通常総会（平成十年五月十二日）静岡市珠賀美神社
富士山須山口登山歩道散策（五月三十日～三十一日）日本山岳会
九十五同期会・裾野市山岳会企画、集会委員会・静岡支部協賛。
静岡県裾野市　旅館「大野路」。
秋期支部懇親山行「雨ヶ岳」（一、七七二㍍）
十一月十四日～十五日。富士宮市、民宿。
支部会報「支部通信」（第四四号）の発行・十月。
「支部通信」（第四五号）の発行・平成十一年三月。

（水野公男）

東海支部

平成九年度東海支部は予想もしなかった幕開けで始まった。五月五日、出発を十日後に控えたK2登山隊隊長の徳島和男が、奥穂高小豆沢で雪崩に遭い死亡するというアクシデントが発生した。徳島は雪蓮峰、クラウンの隊長として自ら先頭に立って初登頂するというクライマーであると共に、副支部長として支部の諸活動

にも積極的に参加する支部の重要なメンバーであり、まさに痛恨の出来事であった。

幸い、残された隊員は徳島の意志を継いで田辺治新隊長のもと、五月十五日、K2へ予定通り出発した。

同五月二十四日、環太平洋一周環境調査登山の打ち上げ懇親会を全山行に参加した主役の篠崎純一の一家を迎え、富士宮市のホテル白糸で行った。翌二十五日最終登山である富士登山を行い、三十三山、二年間の長期にわたる太平洋を巡る登山と環境調査を終えた。

五月末、スカルドに全隊員と全装備が集結したK2学術環境登山隊は六月十日、ゴッドウイン・オースチン氷河の五、一〇〇〇メートル地点にBCを建設。天候に恵まれない中、一進一退を繰り返しながらジリジリと前進した。幸い七月に入って天候は好転、七月十五日、西稜七、五〇〇〇メートルにC4を建設、その上部から西壁に移り、八、〇〇〇メートル地点にC5を建設、七月十九日、一次隊の田辺隊長、鈴木、中川の三名が西壁から北西稜、さらに北壁上部を廻って登頂に成功。悪天候のため全隊員が一旦ABCへ下ったが、天候の回復とともに二次隊も七月二十八日、滝根、山田、中島、小林とシェルパ四名が登頂に成功した。

一方、インドに向かった実年隊は、七月十一日、チャルン峰（六、五四六メートル）の初登頂に成功、続いて十三日、十五日と三次にわたり、鈴木総隊長以下女性三人を含む十名の隊員が登頂に成功し、実年の意気を示した。

派遣した二つの海外登山隊は、予定通りの成果を挙げることができたが、支部の国内登山も盛んで、毎年一、二回行われる例会山行には毎回多数の参加者を得て、盛況であった。

東海支部の設立者である石岡繁雄さんらによって、穂高屏風岩の正面壁（中央カンテ）が初登攀されて満五十年を迎えた。それを記念して、岩稜会と共催で記念山行と集会を穂高で行った。屏風岩に憧れた満六十歳以上の支部員による中央カンテ登攀は、悪天候のため失敗したが、他の山行は予定どおり行い、九月十五日、上高地西糸屋に六十八名の参加を得て記念夕食会を催した。

九月から十月にかけ、朝日新聞文化センターと愛知県労働協会の登山講座を受け持ち、新しく登山を始める人達に協力した。

十一月八日、九日、第三回伊吹山播隆祭を行い、播隆研究のシンポジュームも年々盛んになってきた。

隔年で行っている岳人写真展「山と自然のパフォーマンス」は第六回目を迎え、今回は会場を名古屋市の市民ギャラリーで行い、ヒマラヤから名古屋近郊の山まで世界中の山々の写真八十二点を展示、市民ギャラリー始まって以来最高の四千人余の入場者を迎える盛況であった。

平成十年度総会を東海支部ルームで五月三十日に行い、K2遠征をはじめ支部の主要行事の中心的役割を果たした尾上支部長が、実務多忙のため支部長を辞任し、代わって中世古隆司が就任した。

総会終了後、環太平洋一周環境調査登山隊の報告書「山は知っている」の出版記念会を行った。

十年度は来春早々に予定しているシベリヤ・ポベーダ峰遠征以外は大きな計画はないが、新支部長の方針は、第一に将来の山岳会をはじめ日本の登山界を背負っていく若い力を育てること、第二に山岳地の自然保護、第三に新しく登山を始める中高年の安全登山の手伝い、の三つを基本として運営していきたいと考えている。

（中世古隆司）

■岐阜支部

平成九年度末の岐阜支部会員数は、百五十六名（会員九十六名、会友六十名）である。

平成九年度岐阜支部総会を、平成九年四月十二日板取村杉島荘で、会員三十五名が参加し開催した。高木碕男支部長から「岐阜支部発足以来二十七年もの永い間事故もなく活動を続けてきた。今後も積極的に活動すると共に事故防止には万全を期したい」と挨拶。議事に入り役員改選では、組織の強化を図るため副支部長、総務を新しく設け、山行も国内と海外とに分けて担当することにした。委員も五名増やし、支部長他二十三名が委員に選ばれ、平成九年度事業を推進した。主な事業は次のとおり。

四月　春季懇親山行　総会の翌日、板取村島口から滝波山（一、四一二㍍）へ三十七名が登った。穏やかな登山日和に恵まれた。頂上近くは薮を漕ぎ五時間かけて頂上に立った。遠くの山は霞んでいたものの近くの屏風山、左門岳、平家岳など望むことができた。

五月　海外登山　高木碕男隊長他十四名は一日から八日にかけ台湾へ遠征し、能高山（三、二六一㍍）へ全員登頂した。中華民国山岳協会葵禮樂会長らの歓迎を受け両国の親善を深めた。

六月　春季現地小集会　美山町のクラソ明神（一、〇二三㍍）へ二十二名が登った。この山も登山道がなく、美濃自慢の薮を漕いで登った。両手で薮をかきわけ、頭を突っ込んで一歩登る。これを繰り返してしゃにむに、汗びっしょりになって全員頂上に立った。

九月　秋季現地小集会　板取村と大和村界にある標高一、九〇五㍍のゴンニャクへ十九名が登った。鉈隊が前に出て薮を切り払って登った。登る道中にカモシカの親子連れに出合った。

十月　海外登山　高木碕男隊長他二十四名は、韓国へ遠征し、済洲島ハルラ山（一、九五〇㍍）へ全員登頂した。下山後、大韓国山岳会を訪問し両国の親善を深めた。

岐阜・京都合同懇親登山　長野県南木曽町大妻籠の民宿「近江屋」へ両支部会員四十人が集まって懇親し、翌日、標高一、三七三㍍の伊勢山へ登った。

十一月　登山講演会　長良川スポーツプラザにおいて、前会長村木潤次郎会員を講師に招いて「山登り今昔・人様々」をテーマに講演会を開催した。会場へは会員・会友一般の方々も交えて八十人余が聴講し盛会であった。

翌日、村木講師と共に三十一名が能郷白山（一、六一七㍍）へ

懇親登山を行なった。参加した会員からは「村木講師の温厚な人柄に接し、親しく会話することができ有意義であった」と語っていた。

秋季懇親山行　御岳の麓、小坂町湯屋温泉「ニコニコ荘」で懇親し、翌日大ゾレ山（一、三六六㍍）へ三十七名が登った。

山の写真展　第一回山の写真展を、岐阜市長良の喫茶店「パウゼ」で、会員十五名が二十五点出品して開催し、好評であった。

一月　岐阜長良川会館において、三十三名が参加して新春懇親会を開催した。

この間、委員会を八回開催した。また、支部機関誌「岐阜山岳」第三十八号、第三十九号、第四十号を発行し、今年度の主な事業を終えた。

（清水芳彦）

■京都支部

昨年の十二月に、支部創立十周年を記念して「讃嶺」が発刊された。斎藤惇生会長の刊行のことばで始まり、支部十年の歩み、梅棹忠夫先生との記念対談、十周年記念山行記録、自然保護など、ページ数百三十四という記念誌が出来上がった。その編集後記には次のような文が書かれている。

「地球環境の破壊や温暖化がますます問題になる昨今です。日本の山々、世界の山々が、いつまでもわれわれが讃え、憧れる存在であってほしいと思います」この言葉を考え、踏まえて支部行事が組まれ実行されている。

四月に行われた第十三回支部総会では、川喜田二郎先生が「芝生の森と環境保全－私のヒント」という、テーマで講演され、自然保護の意義や自然の大切さを説かれた。

五月には剱岳の馬場島において、スケッチ山行が行われ、雪山を背景に風景画を描くことができた。また、笠ケ岳の穴毛谷において雪上技術講習会が行われた。

六月のウエストン祭には、徳本峠を越え、多くの支部員が参加。東大寺の特別拝観においては、大仏様の台座まで上がることができた。岐阜支部との合同山行では、国見から桧塚奥峰へ、支部間の懇親をより深めることができ。

七月は、京都支部スケッチ展が、寺町三条下ル「ギャラリーF」で行われ、第一回とは思えない程の多数の人々が鑑賞に訪れた。

八月は由良川の本流、芦生の長治谷において沢登りを行った。前夜はタイ料理に舌鼓を打つことができた。

九月は前年度より引き続き実施されている城江国境の江賀谷から伊賀谷山を歩く。

十月はお月見山行として、氷ノ山の鉢伏山に出かけ、お酒を飲みながら、楽しい月見山行を行う。

十一月は自然保護全国集会が、美山町の芦生の森において、行われる。

一月は新年会が行われ、オークション、新会員紹介などで、大いに盛り上がる。

二月は山スキーを美山町頭巾山で行われる。
三月は関西支部との合同スキーが行われる。
支部の主な行事は、前記した通りであるが、京都支部の特色としては、各々の専門的知識を持っているものが、行事を計画し、実行している点である。そしてお互いに刺激を受けることにより、より良い支部づくりがなされているのだと思う。
最後に京都支部を〝陰謀〟により設立された今西錦司先生が言われた「京都らしい野心的で素晴らしい登山を実施してほしい」という言葉からも、その教えは、京都支部員に脈々と受け継がれている。

（駒井治雄）

■富山支部

平成九年度は、四月十一日の支部総会で幕を開けた。会員数は七十六名で役員は昨年通り、水戸支部長の強力なリーダーシップで始まった。
四月十三日は播隆上人の生誕の地、大山町（旧河内村）でおおやまざくら三本を植樹。次いで五月十一日には、記念植樹をした播隆上人記念碑の下で、十五回目の播隆祭を会員外の人達の参加も加え盛大に取り行った。その後高頭山への山行は例年どおり実施した。高頭山にはワラビが芽を出しており、一般参加者は播隆上人のお恵みと喜こんでビニール袋につめた。
四月二十七日より五月二十二日までの長期間に亘り、支部設立五十周年記念事業の目玉であるヒマラヤトレッキングを実施した。参加人員は十五名で三コースに別れピケピーク等に登る（詳細は本支部発行の五十周年記念誌「山岳」参照）。
七月十二日～十三日の両日、尾瀬の燧ケ岳に登る。参加者は四名と少なかったが、雄大にして自然あふれる尾瀬を満喫して帰る。
九月十八日～十九日は、石川支部創立五十周年記念式典及び北陸三県合同現地集会に八名が参加。本支部の五十周年記念式典（三月予定）の参考にしようと最大漏らさず見させて頂く。帰路車中で、石川支部に負けない式典を開催するにはどうすればよいかと議論をしながら帰る。
十一月二日～三日は新雪積る立山天狗平山荘に六名が集合する。今後の支部のあり方を語り合う予定だったが、清酒立山があまりにも美味なので、その目的は達せられなかったきらいがある。また夜は、たまたま泊り合せた本部の写真クラブの羽田さん達と交歓する。翌朝は、日の出前に羽田さん達がカメラと三脚をかついで天狗山頂上に向かわれ、私たちは新雪をラッセルしながら一の越を経て雄山頂上に登る。雲一つない青空のもと新装なった神殿の前にぬかづいて、新しい年の支部の活動を誓い過去五十年の感謝を申し上げる。
三月二十二日、今年度最大のと言うよりは、過去五十年間の最大のイベントである記念式典を挙行する。場所は五十年前に支部の発開式を行った記念すべき富山電気ビルの大会場である。本部よりは、会長斎藤惇生、副会長小倉茂暉の両氏を迎え総数九十八

名。記念講演として南極観測越冬副隊長川田富大助教授より「探検と調査」について、本では得られない貴重なお話をうかがった。この席上支部の発展に多大な貢献をなさった五名、藤平正夫・若林啓之助・広瀬誠・石坂久忠・浜田文二の方々に水戸支部長より感謝状をお渡しした。

平成九年度の総集めとして今、富山支部は、①会員の高齢化対策、②中高年登山者への指導方法、③若者の加入について、④登山者の増加に伴う環境変化、などを考えている。（高柳清美）

石川支部

石川支部では支部行事として、「いで湯山行」と銘打ち一泊二日の温泉泊の山行を毎年行っている。今回は、富山支部の「わが支部とっておきの一山」の金剛堂山（一、六五〇㍍）に登った。

六月二十七日曇天の朝、一行十三名は金沢市の城北運動公園に六時に集合。富山県利賀村に向けて車四台に分乗し出発。時間のかからない東俣コースの往復を選ぶことにした。栃谷登山口に車を一台置き、東俣谷峠を経て林道を車で上り登山口まで行くが、勾配がかなり急なうえ道も余り良くないので、普通の乗用車はお勧め出来ない。

道標のある登山口には車の駐車スペースは一台分しかないが、登山口手前に三台位駐車出来るスペースがあり、そこに車を停めて九時三十分過ぎに登山開始。この頃になると怪しかった空からぽつりぽつりと小雨が降り出してきた。このコースは登山口が稜線に近く、アップダウンが少なく草原の快適な稜線漫歩が楽しめたが、あいにくの天気で眺望がきかなかったのは残念だった。

登山口からニッコウキスゲが咲く笹の尾根を足の速い人で一時間余り歩くと、最高峰の中金剛に着くことができる。そこには富山藩十代藩主前田利保がこの山に登って詠んだという歌碑があるが、すぐ前の前金剛には一等三角点や方位盤があるのでそこで昼飯にした。弱かった雨もこの頃になると雨風共に強くなり、寒くなってきたので早々に下山。

利賀村の民宿に着くと、強い雨にもかかわらず、元気な者は岩魚釣班と山菜採り班に別れ再び山に分け行った。岩魚班の釣果は短い時間にしては大漁だった。夜の宴会には、その岩魚が塩焼として一人一尾付くという豪華なものとなり、遅くまで大いに盛り上がった。

翌日は「曼陀羅の館」で大曼陀羅を鑑賞してから、露天風呂に入り名物のそばを食べ、ゆっくりとした時を過ごして現地解散した。（織田伸治）

福井支部

福井支部のメンバーは地域山岳会に所属している会員が大半を占め、特に三十代、四十代の会員はその会のアクティブ・メンバーなので支部活動には参加しにくいことはいなめない。ただし支部

総会には三十数名が参加し親睦を深めている。

福井支部が発足してから北陸三県の現地集会が前日泊で懇親会を行い、翌日山行という形式で、毎回二十五～六名の参加を見て和気あいあいの登山を行っている。

次世代に夢を託すという意味で、「夏休み親子白山登山」を開催、親子が自然の中で真剣に山登りをするという行為の中で「努力」ということが身につけられるのではないかという発想から毎年実施している。これは福井新聞社、FBCとの共催事業で総勢百五十名の参加を見ている。

海外の山は中高年独自では困難なので公募隊に参加という形式で、キナバル、台湾の山々、キリマンジャロ、アコンカグアの山行に毎年参加している。

井上泰利会員が環境庁長官表彰を受け、その記念登山に参加した。全国支部懇談会にも積極的に参加、北海道の夏山山行は毎年実施、五回目になっている。

四月二十三日　支部総会・懇親会（参加三十四名）。
五月三日～五日　火打岳～黒沢岳山スキー（参加二名）。
七月十八日～二十二日　北海道　羊蹄山、幌尻岳、十勝岳（参加四名）。
八月十日～十一日　97夏休み親子白山登山（参加百五十名）。
八月二十三日～二十四日　HAT－Jの世界青少年フォーラム尾瀬（参加二名）／八月三十日～三十一日　荒島岳清掃登山（田部井淳子氏）（参加十五名）。
九月五日～七日　志賀高原～草津白根岳～浅間岳～四阿山。
十月十一日～十二日　日光白根山～男体山／十月十八日～十九日　北陸三県合同現地集会（主管　石川支部）奥獅子吼　石川支部五十年（参加五名）。
十一月二日　井上泰利会員の記念登山、野坂山（参加五名）。
十一月二十日～二十四日　夜叉神峠～薬師小屋～鳳凰三山（参加六名）。
十二月六日～七日　日本山岳会年次晩餐会及び山行（雲取山・参加六名）／十二月二十日～一月十三日　アルゼンチン・アコンカグア登山、チリアンデス登山（参加六名）。
一月二十三日～二十四日　新年会　六呂師スキー場。
三月二十二日　富山支部五十周年　式典　祝賀会、三上山に登る（参加四名）。

（宮本数男）

■関西支部

支部創立が昭和十年。最も古く部員数も多く、古い会員は支部に愛着を持っており、年齢を重ねて山に出かけられなくなっても退会する人は少ない。最近入会する人も中高年が大部分で、従って支部会員の平均年齢は六十二歳となり、会員全体の平均年齢五六・二歳をかなりオーバーしている。中高年の支部会員は、登山経験豊富な人と経験の少ない人の二つの層に別れる。

今年の関西支部総会は会場を大阪駅前第一ビル、大阪凌霜クラ

ブとし、会員が集まりやすいところを選んだ。他の利を得て、定刻までに五十五名が参集、開催の運びになった。

支部長挨拶では、昨年から実施しているチロルスキーツアー（今年二回目）が好評で、今後も続けたい。また、ＪＡＣ本部企画としてネパールトレッキングの計画が進んでいることが紹介された。その他、支部評議員会を毎年開催し、支部活動の活性化に努める。「支部報」の充実を図り、増刊号の発行も考える。

例会山行は、魅力のあるものにしたい。そのため委員を一名増とした。京都支部との合同山スキーは恒例となり、毎年行われ好評である。スケッチ、写真等の趣味の繋がりを軸とした催しも活発にする。

山のスケッチ展は堂島グランドビル１Ｂ「ＭＵＳＩＣＡ」にて六月一日～二十七日まで開催した。

講演では、「関西登高会一九九七年ナンガパルバット登山隊」隊長梶浦正敦氏の登山報告があり、続いて副隊長山口忠夫氏の解説でスライド写真による説明があった。次いで懇親会となり、歓談の続く中、総会を終わる。

前述のチロルスキーツアーはことのほか好評で、今回は二十二名参加、年々参加者は増加する傾向で、今後も毎年続きそうな模様。以前から「一杯飲む会を増やすべきだ」など提案があった。会員同士のコミュニケーションにしても、人数を集めるにしても、飲み会が一番効果的らしい。よって今年は夏期懇親会を企画、八月二十六日建設交流会館で催す。

赤松滋氏による「赤道の山」、南勲氏による「セブンサミット」など紹介予定、古い会員の経験豊富なお話など聞かせてもらえれば幸いだ。

関西支部では自然破壊の問題はあまり大きく取り上げられていない。その代わり、自然を増やそうという動きが盛んだ。その元は、故人会員の津田周二氏・片山栄一氏が会長として熱心に続けておられた「ぶなを植える会」である。今は全国に同じような会が活動しているが、この会は昭和五十五年に創立され、最も歴史の古い会の一つではないか。幸い、片山氏の後を支部の桑田会員が会長を引き受けて運営を図っているが、植樹は兵庫県の北部を主として各地に広がりつつある。経済的な理由から針葉樹の植林を進めてきた日本の林業は、未だにその方向修正がなされていないが、広葉樹の重要さを再認識するときであろう。

（川戸昭三）

■ 山陰支部

山陰支部の創立は一九五〇年四月。間もなく五十周年を迎える。五一年（昭和二十六年）の第六回国民体育大会・広島大会の登山部門を鳥取西部の伯耆大山で開くことになり、その設営部隊として、山陰支部が発足した。山陰支部は、広島のおかげで、広島支部よりも長い歴史をもつことになったのである（実体としては、それ以前に存在した「大山山岳会」の改組であった）。

現在でも、会員総数四十四名のうち、鳥取県東部三名、中部五名、島根県二名。米子市を中心とする鳥取県西部が残余三十四名、という構成である。いま、「大山山岳会」と名乗っても、おかしくない位である。会員のなかには、伯耆大山北壁の大屏風岩初登攀の港叶、高田允克がいる。吉川暢一支部長は「第一〇次南極観測隊に参加して、やまと山脈の最高峰に登った」という岳歴をもつ。ほかに南極経験者二人、パキスタンの処女峰に初登頂した者のほか、マッキンレーやキリマンジャロに登った者などがいる。

毎月の例会には、会員の約半数が出席し、「岳歴」を誇る者も誇らぬ者も、自由活発に意見を披瀝している。今年二月二十二日、大山・天狗沢で広島の高見和成さんらが滑落死したあとの例会では、葬儀に参列した会員が、その状況を報告し、例会参加者一同、その死を悼んだ。また、日本山岳会青年部のカンチェンジュンガ隊の登頂成功と直後の悲劇については、支部の中井俊一事務局長が、谷川太郎隊長の大学の先輩ということもあり、とりわけ重々しく報告した。

大山を舞台とする行事として、毎年六月はじめの山開き前夜と、十一月はじめに大山寺部落にあるSOB小屋に集まって親睦を深める、ということを行っている。各自が御馳走を持ち寄る、という慣行が確立されていて、今年、山開き前夜にはイワナを何尾も釣り上げて持ち込んだ者がいた。串焼きだの、刺身だの、のほか、焼いた魚に五合位の日本酒を注ぎ、「ヒレ酒」と称して回し飲みしたりした。日本酒の銘柄は、もちろん「伯耆大山」であった。

その翌日、吉川支部長は、四谷の「たかはし」でつくった靴を履きならしがてら、大山頂上を往復した。ネパール・トレッキングに備えたのである。頂上に向かわないで、独自の大山ルートを楽しんだグループもある。山を降りて、里山に行った者もいる。

夏には「友の会山行」という行事がある。今年は、木曽駒ケ岳。千畳敷までのリフトが修復中なので、全部、歩かねばならない。参加する者たちは「静かな山行が楽しめる」などとヤセガマンしている。

支部では、創立五十周年を控えて、国際的・国内的・地域的に、どのようなアピールがありうるか、検討しながら、九八年度を終了しそうである。

（野島幹郎）

■東九州支部

東九州支部では、月に一度の定例山行を続け、既に十数年にもなる。毎年度、登る山の選定についてはテーマを決めている。例えば、支部の創立二十周年を記念して選定した「大分百山」を数年がかりで消化したほか、「県境を歩く」ということで、隣接する宮崎や熊本、福岡三県との境になる山々を片端から尋ねたこともあった。その結果が「大分百山」のガイドブック発行などの形で実を結んだが、最近はテーマの選択もいささか種が尽きるようになり、参加者も常連となって限定されるきらいも出てきた。そうしたこともあって、本年度は事務局の西孝子さんらの発案で

「別府湾リレー登山」を計画してみた。

ご存じのように、別府湾は瀬戸内海の西にある波静かな湾で、湾奥に大分市や別府市が立地している。その大分、別府の市街地を裏山から眺めると、左に国東半島、右に佐賀関半島が長く延び、まるで両腕で海を抱くような形である。計画では、この海から逆に大分や別府を見て、その背後にある山並みを完全に縦走してみようと考えたわけだ。

別府湾に流れ込む川は、一級河川の大野川や大分川をはじめかなり多い。最初はその水系の分水嶺を忠実に歩こうとの提案もあったが、短期間でのリレーは不可能に近い。ということで、時期は八月、期間は一週間ということと、湾内から眺められる山、つまり登っていて常に別府湾を展望できる尾根路に限定することにした。それでも山の数は結構に多い。南北両コースに分け、北は国東半島の先端になる国見町の亀崎、南は佐賀関半島の、これも先端の関崎灯台からスタートすることになった。まず二万五千分の一地図をつないでみた。これが十八枚になった。両半島の背骨に当たる尾根から大分市と別府市の背後の山々へと、できるだけ稜線を結ぶルートを選んだ。

結局、登らねばならない山が十二市町村にわたって四十座近くになったし、距離にしておよそ百六十キロ。縦走ともなれば既存の登山道をたどるだけでは済まず、かなりのルート開拓が要求された。リレー地点を決め、会員・会友に区間を割り振って、梅雨明けから下見とルートづくりに取りかかった。準備を終えて八月十七日未明、南北両端から会旗を先頭にスタート。雷雨の日もあったが天候はほぼ順調。リレーも順調で、会員・会友計約五十人の参加をみた。二十三日正午前に鶴見岳（一、三七五メートル）の山頂で両コースが合体した。乾杯、そして日本山岳会バンザイで締めくくった。

マスコミも注目してくれたが、リレー登山の狙いはまず、日頃から海外や日本アルプスなど高所を志向している会員に、ふるさとの低い山々をも再認識してもらうこと。できるだけ多くの会員の参加を得て、企画力や計画性を養い、共同行動で相互の理解と親睦を深めてもらうこと。さらに付け加えれば、低いヤブ山で真夏の三十度を超える暑さを体験してもらい、乾杯のビールの旨さを味わってもらうことだった。

（梅木秀徳）

■熊本支部

平成九年、支部設立四十周年を迎えた。本部の九十余年に比べると、まだ、その半ばにも達していないが、支部にとっては記念すべき節目の年となった。この記念すべき年を迎えることができたのは、支部会員の努力もさることながら、本部および九州の各支部等のご支援の賜物と深く感謝したい。四十年の歴史を振り返ってみると、本田支部長が述べているように、たいしたことは行っていないが四十年の歳月の重みを感じた、というのが大方の支部会員の実感のようだ。ともあれ、今後も福岡、東九州、宮崎の各

支部と力を合わせて日本山岳会の発展に協力しながら、次の成長へとステップを進めたい。

平成九年度の主な事業は次の通りであった。夏季例会は八月二十四日、熊本厚生年金会館で十九名が参集して開かれた。暑い夏は山よりビールだ、ということで始まった例会は、山の映画とビールの夕べの看板で、支部の行事の中でも人気がある。ビールで一息ついたあと、ビデオ作品「丑歳春―宮崎牛ノ峠を訪ねて」を鑑賞。恒例の夏山報告は、全国区で活躍する支部会員の報告が続いた。

冒頭でも述べたように、支部設立四十周年記念集会を十月四日、阿蘇で開催した。参加者は四十三名と、ささやかな集会であったが、私共、支部会員にとっては、誠に喜ばしい集会だった。祝宴に先立って、「山を語る」と題する斎藤会長の記念講演があったが、初めて会長と直に接した支部会員も多く、また、会長が本県出身という親しみもあって、講演は好評であった。翌五日は、阿蘇五岳のひとつで一等三角点の置かれた烏帽子岳へ記念登山を行い、親交を深めた。集会が終ってみると、あれもこれもと反省することばかりで、貴重な時間を割いて各地から駆けつけて下さった方々には、改めてお礼申し上げる次第だ。

明けて平成十年一月十一日は新年晩餐会。厚生年金会館に二十名が参集して開かれ、恒例の新年の挨拶を交した。春季例会は、当初、昨年に続いて干支の山登りを予定していたが、同じ日に宮崎支部の担当で九州四支部の集いが開かれることになり、急拠、四支部の集いへの参加に代えることになった。そこで、干支の山登りを特別例会として二月十五日に実施、十三名が参加して県南の虎石山（四〇四㍍）に登った。我々のような物好き以外には登る人は無いらしく、山頂もよくわからないヤブ山であった。先に述べた九州四支部の集いは、三月十四日、宮崎県の青島で開催され、支部から十名が参加、本部の小倉副会長はじめ九州各支部から総勢七十七名が参加する盛会であった。快晴となった翌日は、青島近郊の双石山に登り、四支部の交流を深めた。平成十年度支部総会は、四月二十六日、NTT熊本会館で十五名が出席して開かれた。役員改選では、本田支部長ほか全役員が夫々再選された。四十周年で一息ついた後の新しい活動としては、本県の県境踏破を今年から取り組む予定で、三年程度で達成したいと考えている。

（田上敏行）

■宮崎支部

前回の支部だよりでは（やっと七合目）と紹介した、我が支部創立以来の悲願である「みやざき百山」刊行も、いよいよそのピークが雲間に散見出来る場所にベースキャンプを設営出来たようである。月一回の定例山行は、もちろん百山に関する情報収集を中心として計画された。さらに刊行に関するみやざき百山の集いも月一回開催され、毎回二十人近くが参加している。

現在は、文章的検証がほぼ完了した九十山について、同時掲載

する写真の整理にかかっている。会員の思い入れのある作品を前にしての、批評を交えた選定は深夜に及ぶこともあるこのごろである。

また、宮崎支部は自分たちの山行例会を実施するばかりではなく、県民に広くふるさとの山々のすばらしさと、自然愛護の浸透と山へのいざないに願を込め、NHK文化センターの「山歩き入門（Ⅱ）」に協力を行っている。昨年に引き続き二年目となるが、講師を引き受けている支部長の、郷土の歴史から花の種類までというその幅広い内容に魅了されてか、次回への期待も抱かせ毎回参加者は四十人を超す盛況ぶりである。もちろん、会員のさりげないサポートも見逃せない。月ごとの山行計画はもちろん「みやざき百山」を選んであり、そのアピールも忘れてはいない。

さらに、最近のことであるが地元新聞社が、「みやざき百山」の完成間近と聞きつけ、週一回ペースでの新聞掲載を打診してきた。この申し出に対し理事会で検討の結果、月四座の掲載ペースで約二年半で終了するが、未執筆分及び写真（特に季節の花）撮影に馬力を上げれば何とか間に合うことと、自らにプレッシャーを掛ける意味合いも込めて掲載を承諾することとした。早速平成十年九月から連載が始まるが、慎重に論議を重ねた結果であるから、県民の期待に充分応え得るものと確信している。

会員の活動状況は、全国の例に漏れずベテランの活動が中心であるが、期待の若年層の強化も怠りなく、伝統のみに縛られずクラブライフの中で新鮮さを発揮してもらい、将来の方向を模索し続けている昨今である。

支部報の定着化、みやざき百山の刊行、と言った出来事を一つひとつの歴史として支部設立十五周年を目指して積み上げるため、今年もこのピーカンの真夏の下、ふるさとの山々に飛び込んでいる「日向かぼちゃ」と「いもがらぼくと」たちである。

（小島実照）



会務報告

一九九七（平成九）年六月～一九九八（平成十）年五月
一九九七年度役員・評議員・支部長

会　　長　斎藤惇生
副 会 長　小倉茂暉・大森薫雄・竹内哲夫
常務理事　田邊　壽・大屋悌二・吉永英明・熊崎和宏・伊丹紹泰・絹川祥夫
理　　事　宇田川芳伸・大蔵喜福・宮崎紘一・村井　葵・飯田　進・坂本正智・勝山康雄・増山　茂・森　武昭・鰺坂青青
監　　事　石橋正美・神崎忠男
常任評議員　穴田雪江・長尾悌夫・中村太郎・平山善吉・中川　武・平野眞市
評 議 員　大森弘一郎・山口俊輔・大倉昌身・吉田　宏・長坂　博・若林啓之助・村木潤次郎・中村純二・芳賀孝郎・山本健一郎・宮下秀樹・岩間弘雄・魚本定良・中谷充
支 部 長　野田四郎（北海道）・松島静吾（青森）・中谷　充（岩手）・岡田光行（秋田）・梅津　博（山形）・柴崎　徹（宮城）・佐久間高男（福島）・五十嵐篤雄（越後）・田中弘美（信濃）・古屋学而（山梨）・大石　惇（静岡）・尾上　昇（東海）・高木碕男（岐阜）・酒井敏明（京都）・木戸繁良（富山）・津田文夫（石川）・中村　義（福井）・阿部和行（関西）・吉川暢一（山陰）・松本種夫（福岡）・梅木秀徳（東九州）・本田誠也（熊本）・大谷　優（宮崎）

◇六月理事会　一九九七年六月十一日　本会会議室
出席者　二十六名
▽審議事項

一、常務理事委嘱と担当委員会委嘱の件　承認
二、画集『日本の名画』（郷土出版）推薦の件　審議未了
三、ウェストンに関する写真、資料撮影許可の件　承認
四、名義後援依頼の件　承認
五、演劇公演「K2」後援依頼の件　否決
六、会報記事転載許可願いの件　承認
七、名義使用・推薦状要請の件　承認
八、推薦状発行要請の件　承認
九、ルーム・事務局夏休みの件　了承
十、財務委員会より債権の件　了承
［報告事項］
一、第八次マッキンリー気象観測機器設置登山隊の件
二、マーキング・エベレストデーの件
三、ウェストン祭の件
四、委員会報告　フィルム・ビデオ、総務、山岳研究所運営、図書、図書管理、科学、医療、集会、学生部、指導
会報「山」六二七号参照

◇七月理事会　一九九七年七月九日　本会会議室
出席者　二十三名
▽審議事項
一、鳥海山テレビ放映協力の件　承認
二、ウェストン牧師姿写真撮影許可願の件　承認
三、第十回「森と自然を守る全国集会」後援依頼の件　不承認
四、「戸隠ミセス・ウェストン祭」出席要請の件　承認
五、ネパール・トレッキング計画の件　継続審議

六、「登山の日」共催団体参加依頼の件　承認
七、平成九・十年度海外登山基金運営委員会委員委嘱の件　承認
八、登山隊名義使用の件　承認
［報告・連絡事項］
一、日本山岳会・日本山岳協会交流懇談会の件
二、名誉会員を囲む会の件
三、評議員会の件
四、南極大陸展の件
五、報告「山岳界の現況」の件
六、山岳史懇談会の出席確認の件
七、新任理事「研修とレクチャー」の件
八、委員会報告　図書管理、会報編集、海外連絡、高所登山研究、遭難対策
九、全国支部懇談会の件
会報「山」六二八号参照

◇**八月理事会**　休会

◇**九月理事会**　一九九七年九月十日　本会会議室
出席者　二十七名
議事に先立ち、斉藤会長が新任理事研修会の開催に対して謝辞を述べた。
▽審議事項
一、インターネット・ホームページ開設許可願いの件　承認
二、カナダ山岳会会長、副会長の年次晩餐会招待の件　承認
三、映画「セブン・イヤーズ・イン・チベット」後援依頼の件　保留
四、積有恒元会長遺品資料などの撮影許可願いの件　承認
五、支部事業開催の件　承認
六、平成十年度「税制に関する要望書」の件　承認
七、九七年度自然保護全国集会の件　承認
八、ネパール国際山岳博物館協力支援要請の件　承認
［報告事項］
一、委員会報告　医療、青年部、総務、山岳研究所運営
会報「山」六三〇号参照

◇**十月理事会**　一九九七年十月八日　本会会議室
出席者　二十名
大屋常務理事欠席のため、司会進行は吉永常務理事が代行した。
▽審議事項
一、広島支部設立、発会の件　承認
二、ネパール国際山岳博物館募金委員会の件　承認
三、映画「セブン・イヤーズ・イン・チベット」後援依頼の件　見送り
四、推薦状交付要請の件　承認
［報告事項］
一、登山の日シンポジウムの件
二、平成九年度委員会予算執行状況の件
三、熊本支部設立四十周年記念行事の件
四、今西寿雄元会長を偲ぶ会の件
五、委員会報告　山岳研究所運営、総務、海外、学生部、青年部、資料、科学、自然保護
会報「山」六三一号参照

◇**十一月理事会**　一九九七年十一月十二日　本会会議室
出席者　二十四名
議事に先立ち、日本山岳会ダウラギリⅠ峰登山隊一九九七・松原隊長より、登山経過報告と、支援に対する謝礼の挨拶があった。

大屋常務理事欠席のため、司会進行は吉永常務理事が代行した。

▽審議事項

一、名誉会員の件　承認
二、永年会員の件　承認
三、秩父宮家ご遺贈金の件　承認
四、支部長会議・晩餐会の件　承認
五、ウェストンの写真掲載、貸出許可願いの件　承認
六、中高年登山者対策の件　継続審議

［報告事項］

一、平成九年度上半期決算の件
二、ネパール国際山岳博物館募金委員会の件
三、『山岳』『会員名簿』の件
四、尾瀬賞の件
五、全国支部懇談会の件
六、山陰支部晩餐会出席依頼の件
七、富山支部創立五十周年記念式典出席依頼の件
八、委員会報告　指導、学生部、資料、山岳研究所運営

会報「山」六三三号参照

◇**十二月理事会**　一九九七年十二月十日　本会会議室

出席者　二十三名

吉永常務理事より、年次晩餐会・支部長会議の報告があった。

▽審議事項

一、写真複写許可願いの件　承認
①ウェストン、槇有恒、冠松次郎の写真
②宇奈月町歴史民俗資料館特別展展示中の写真
二、「山」写真掲載許可願いの件　承認
三、平成九年度事業報告、十年度予算要求書の件　了承
四、秩父宮記念山岳賞の件　承認
五、海外登山基金の件　了承
六、ネパール国際山岳博物館募金の件　承認
七、高頭仁兵衛『日本山嶽志』の件　了承

▽討議事項

一、中高年登山者対策の件（前回より）　承認

［報告事項］

一、委員会報告　学生部、自然保護、山岳研究所運営
二、OAシステム（パソコン）導入について

会報「山」六三三号参照

◇**一月理事会**　一九九八年一月十四日　本会会議室

出席者　二十二名

議事に先立ち、十二月末に逝去された大屋常務理事に黙祷の後、斎藤会長より年頭の挨拶があった。

▽審議事項

一、事務局員補充の件
二、事務局コンピュータの件
三、会員サービスのためのネパール・トレッキング計画の件
四、登山隊名義後援要請の件
五、海外登山基金助成支給の件
六、会報等の掲載文転載許可願いの件
七、槇有恒元会長の写真掲載許可願いの件
八、サガルマータ登山隊推薦状交付要請の件

九、委員会委員委嘱依頼の件
十、常務理事委嘱の件

以上十議案承認

［報告事項］

一、委員会報告　総務、学生部、図書、資料、青年部、海外、医療、財務
会報「山」六三四号参照

◇二月理事会　一九九八年二月十二日　本会会議室
出席者　二十三名
議事に先立ち、逝去された大屋常務理事の道子夫人が出席され、遺志による本会への寄付があった。また生前の厚誼に対して謝辞を述べられた。

▽審議事項

一、秩父宮記念山岳賞の件　了承
二、ネパール・トレッキングの件　承認
三、推薦状交付要請の件　承認
四、ネパール国際山岳博物館建設募金の件　了承
五、ホームページ英語版の件　承認
六、展覧会後援の件　承認
七、中高年登山者対策シンポジウムの件
①シンポジウムへの問い合わせ依頼の件　承認
②シンポジウムの開催形式に関する依頼の件　見送り
③登山用品資料借用願いの件　承認
八、同好会からの依頼の件
①山の自然学講座に関する件　委員会専任事項
②ネパール・ラリグラス植林に関する件　報告
九、吉沢一郎名誉会員葬儀の件　伝達

［報告事項］

一、委員会報告　財務、海外、青年部、総務、指導
会報「山」六三五号参照

◇三月理事会　一九九八年三月十一日　本会会議室
出席者　十九名
議事に先立ち、ジャパン・ワイルドライフ・フェスティバル（世界野生生物映像祭＝実行委員長・藤平正夫元会長）の東京上映会開催にあたり、同会国際担当取締役の磯和氏より趣旨説明と鑑賞参加の要請があった。

▽審議事項

一、平成十年度収支予算（案）の件　承認
二、平成九年度事業報告書、平成十年度事業計画（案）の件　承認
三、秩父宮記念山岳賞（ご遺贈金顕彰事業）（案）の件　承認
四、ネパール・トレッキングの件　経過報告
五、北海道支部支部長交代の件　承認
六、展示資料借用期間更新願いの件　承認
七、名義後援要請の件　承認
八、『山岳』・「山」掲載文転載許可願いの件　承認
九、寄贈絵画受入の件　承認
十、北海道支部による後援依頼の件　承認

［報告事項］

一、委員会報告　総務、科学、自然保護、青年部、ネパール国際山岳博物館募金、山岳研究所運営、集会、資料、図書
会報「山」六三六号参照

◇四月理事会　一九九八年四月十六日　本会会議室
出席者　二十二名

▽審議事項
一、平成九年度収支決算および事業報告の件　承認
二、監査の件　承認
三、秩父宮記念山岳賞の件　承認
四、ネパール・トレッキングの件　承認
五、会長の発起人加盟要請の件　承認
六、議事録署名人の件　承認
［報告事項］
一、委員会報告　総務、集会、ネパール国際山岳博物館募金、青年部、指導、自然保護
二、第九次マッキンリー気象観測機器設置登山隊一九九八の件
三、マッキンリー気象観測機器設置登山隊の終了にともなう諸問題の件
四、寄贈絵画の披露
会報「山」六三七号参照

◇**五月理事会**　一九九八年五月十三日　本会会議室
出席者　二十四名
議事に先立ち、斎藤会長以下六名による中国登山協会表敬訪問の報告がなされた。また伊丹常務理事より、ブータン・チベット国境登山に対する打診状況の報告がなされた。
▽審議事項
一、助成金交付の件　承認
二、秩父宮記念山岳賞の件　了承
三、評議員会の件　了承
四、総会・支部長会議の件　了承
五、信濃支部支部長交代の件　承認
六、ネパール・トレッキングの件　承認
七、名義後援要請の件　承認
［報告事項］
一、委員会報告　青年部、海外連絡、山岳研究所運営、医療、会報編集、図書資料
会報「山」六三八号参照

◇**通常総会**　一九九八年五月十六日　東京グリーンホテル水道橋
出席者百五十四名
▽審議事項
一、平成九年度事業報告及び収支決算、財産目録承認の件
二、平成十年度事業計画案及び収支予算案承認の件
三、平成十年度除籍対象者の件
四、秩父宮記念山岳賞創設の件
五、その他　以上五議案承認
会報「山」六三八号参照

◇**登山の指導と奨励に必要な集会、研修会、講演会及び展覧会の開催**
（A）　集会
▽六月五日　ルーム
第三回夏山気象入門（科学）
▽六月八日　上高地
第五十一回上高地ウェストン祭（信濃支部）
▽六月十二日　ルーム
第四回夏山気象入門（科学）
▽六月十四日～十五日　磐梯山

探索山行（科学）
▽六月二十一日～二十二日　小川山
小川山集会（学生部）
▽六月二十六日　ルーム
海外登山研究会（学生部）
▽七月八日～十日　仙台
全国山岳遭難対策協議会（遭難対策）
▽七月十日　ルーム
海外登山研究会（学生部）
▽七月十五日　高尾山
写真・ビデオ撮影会（フィルム・ビデオ）
▽七月二十二日　学習院大学
ダウラギリ隊壮行会（青年部）
▽八月一日～二十五日　上高地
上高地インタープリテーション（自然保護）
▽八月一日　私学会館
ネパール王国観光大臣、在日大使との交流会
▽八月六日　ルーム
名誉会員を囲む会（総務）
▽八月二十七日　昭和女子大学
第二十六回山岳史懇談会（図書）
▽八月三十日～三十一日　富士学園
新任理事研修会（総務）
▽九月十四日～十五日　会津
キノコ山行偵察（集会）
▽九月二十日～二十一日　松代町
全国支部懇談会（総務）
▽九月二十六日～二十八日　谷川岳
谷川岳山行（青年部）
▽十月十八日～十九日　三岩岳・七ヶ岳
キノコ山行（集会）
▽十月十八日～十九日　鈴鹿市
自然保護全国集会（自然保護）
▽十月二十一日　ルーム
鳥海山イヌワシ現地調査打合せ（自然保護）
▽十月二十四日～二十六日　文部省登山研修所
岩登り技術研修会（遭難対策、指導、青年部、学生部）
▽十月二十四日　ルーム
第五回山を語る（図書）
▽十月二十四日　上高地
全国山岳博物館連絡会議（資料）
▽十月二十五日　ルーム
秋季新入会員オリエンテーション（総務）
▽十一月五日　ルーム
山とスキー映画の夕べ（フィルム・ビデオ）
▽十一月十五日　東京
大学山岳部監督会議（学生部）
▽十一月十五日～十六日　松本楼
監督会議・韓国訪日団との交流会（学生部）
▽十一月十六日　皇居外苑

マラソン大会（学生部）
▽十一月二十三日　藤野町
自然観察山行（自然保護）
▽十二月五日　東京
カナダ山岳会訪日団歓迎会
▽十二月六日　高輪プリンスホテル
カナダ山岳会訪日団会食会（海外連絡）
▽十二月六日　高輪プリンスホテル
支部長会議（総務）
▽十二月六日　高輪プリンスホテル
年次晩餐会（総務）
▽十二月七日　東京
医療委員会研究集会（医療）
▽十二月七日　扇山
年次晩餐会記念山行（集会）
▽十二月八日　東京
西蔵登山協会訪日団を囲む会（高所登山研究）
▽十二月十日　青森
白神現地調査（自然保護）
▽十二月十八日　ルーム
雪崩研究会（学生部）
▽一月十五日～十七日　磐梯沼尻
スキー集会（集会）
▽一月十七日～十八日　栂池
雪崩ビーコン講習会（学生部）
▽一月十七日　ルーム
青年部ＯＢ・現役委員懇談会（青年部）
▽一月三十一日～二月二日　八ヶ岳
アイスクライミング研修会（遭難対策、指導、青年部、学生部）
▽二月十七日　ルーム
第二十九回山岳図書を語る夕べ（図書）
▽二月十八日　私学会館
中国登山協会首席を囲む会（海外連絡）
▽二月十九日　ルーム
談話会「日本の分水嶺」（科学）
▽二月二十日　ルーム
ダウラギリ、マナスル報告会（青年部、高所登山研究）
▽二月二十一日～二十二日　グリーンホテル
全国支部事務局担当者会議（総務）
▽二月二十七日　ルーム
カンチェンジュンガ登山隊計画検討会（高所登山研究）
▽二月二十八日　東京
カンチェンジュンガ登山隊壮行会（青年部）
▽三月五日　ルーム
ビデオで楽しむスイス・アルプスの夕べ（フィルム・ビデオ）
▽三月十四日　ルーム
春季新入会員オリエンテーション（総務）
▽三月二十一日～二十二日　北八ヶ岳
初中級山岳スキー研修会（指導）
▽四月十日～十二日　白馬岳

中上級山岳スキー研修会（指導）
▽四月十八日～十九日　日向山、茅ヶ岳
探索山行（科学）
▽五月九日　顔振峠
古道を訪ねて（図書）
▽五月二十三日～二十四日　虎毛山
若葉会山行（集会）
▽五月二十四日　陣馬山
カメラハイク（フィルム・ビデオ）
▽五月二十三日～二十四日　山梨県須玉町
第三十六回木暮理太郎翁碑前懇親会（山梨支部）
（B）　研究会・講演会
▽七月十四日　ルーム
講演会「日本山岳会をとりまく国内外の環境」（海外）
▽十一月二十一日　ルーム
講演会「ヒマラヤを語る」（青年部、高所登山研究）
▽一月二十九日　ルーム
講演会「東部カラコルム」（高所登山研究）
（C）　シンポジウム
▽六月六日～八日　東京
第十七回日本登山医学シンポジウム（医療）
▽十一月二十二日～二十三日　藤野町
自然保護シンポジウム&コンサート（自然保護）
▽十一月二十九日　東京
山で役立つ天気の見方シンポジウム（科学）

◇登山施設の運用、その他登山のための適切な事業
▽上高地山岳研究所の運用、資料室開設
▽受入資料保管
▽各博物館、美術館との提携強化
▽海外遠征の記録、会合・行事等の記録、フィルムのビデオテープ化による保存

◇山岳遭難の予防とその対策に関する企画および指導

◇自然保護運動の推進
▽自然保護指導者の養成
▽自然保護委員会による年間山の自然学講座
▽自然保護委員会会報「木の芽草の芽」隔月刊行

◇機関紙等の発行
▽『山岳』第九十二年（一九九七年）号の発行
▽会報「山」第六二五号～第六三六号の発行

◇国内および外国山岳団体との情報交換
▽国内関係団体（日山協、都岳連、日本ネパール協会、日本ヒマラヤ協会、HAT－J、その他）との密接な連絡
▽海外登山団体との機関紙の交換及び情報誌の購入

◇海外登山
▽一九九七年六月八日～七月七日　第八次マッキンリー気象観測機器設置登山隊（科学）
▽一九九七年八月二十一日～十月三十日　ダウラギリI峰登山隊（青年部）
▽一九九八年三月八日～五月三十一日　カンチェンジュンガ登山隊（青年部）

◇その他目的を達成するために必要な事業
▽新刊図書目録資料調達

九

SANGAKU

The Journal of the Japanese Alpine Club

Volume 93 No.151 **Issued December 1998**

CONTENTS

Juji TANABE, his mountaineering and English literature
……Ikkou ISOJIMA……(7)
Kyuichiro SATOH ; excellent climber and artrist ……Jiro YAMADA……(41)
Reinhold Messner ; a unique figure in mountaineering…Jiro TAGUCHI…A27 (55)
That ice ax on the top of Mt. Alberta ……Mamoru TAJIMA……(64)

EXPEDITIONS

The Shining Smile of Mt. Minya Konka (7,556 m) Ascent by the Northwestern Ridge Route : Sapporo Alpine Club……Masashi HAGA…A28 (71)
Bravery is All You need to Challenge Mt. Dhaulagiri I, Mt. Gasherbrum I and Mt. Manaslu ……Hirobumi KONISHI…A30 (80)
The Ascent of Mt. Namunani (7,694 m) : JAC-Fukuoka Expedition ……Itsuo OTA…A32 (86)
The Ascent of Mt. Gasherbrum I, Mt. Gasherbrum II, and Mt. Broad Peak : The Gunma Karakoram Expedition, 1997 ……Shuji NATSUKA…A34 (94)
K2-Via the West Ridge Across the Untrodden West Wall : JAC-Tokai Environmental Research K2 Expedition 1997 ……Osamu TANABE…A36 (102)
The First Ascent of Geregeer Mustagh in Tienshan …Atsushi OOISHI…A39 (110)
1997 Fukuoka Mt. Ama Dablam (6,812 m) Expedition ……Keiji UEDA…A40 (117)
Returning Alive from Mt. Dhaulagiri I JAC Youth Section Mt. Dhaulagiri I Expedition, 1997 ……Masayuki MATSUBARA…A42 (122)
Meiji University Manaslu Expedition 1997……Toichiro MITANI…A45 (129)
JAC Youth Section Mt. Kangchenjunga Expedition 1998 ……Taro TANIGAWA…A47 (136)
The Solo Ascent of Mt. McKinley in Winter ……Masatoshi KURIAKI…A51 (144)

Book Reviews……(151)
In Memoriam……(191)
Reports from Branches ……(231)
Club Notes ……(251)
Catalogue of Mountain Books ……(A92)
A Chronological table of Juji TANABE……Ikkou ISOJIMA……(A73)
18 years of the Minami Alps forest road ; repeating landslides and repairs ……Syuichi OKAZAWA……(A55)
Change and Challenges in the HIMALAYAN HEIGHTS ……Prof. Ram Kumar Pandy……(A19)

ILLUSTRATIONS

Expeditions ……(80～81)
In Memoriam ……(192～193)

The Japanese Alpine Club

(Founded 1905)

Address : 5-4 Yonban-cho Chiyoda-ku, Tokyo 102-0081

Office Bearers and Committee

1998 (May 1998-April 1999)

President : SAITOH Atsuo

Vice Presidents : OGURA Shigeki
OHMORI Shigeo
TAKEUCHI Tetsuo

Chief Editor of SANGAKU : TANABE Hisashi

Auditor : ISHIBASHI Masami, KANZAKI Tadao

Committee

AJISAKA Seisei
IIDA Susumu
ITAMI Tsuguyasu
KATSUYAMA Yasuo
KINUGAWA Yoshio
KUMASAKI Kazuhiro
MASUYAMA Shigeru
MIYAZAKI Kohichi
MORI Takeaki
MURAI Aoi
OHOKURA Yoshitomi
SAKAMOTO Masachi
TANABE Hisashi
UDAGAWA Yoshinobu
YOSHINAGA Hideaki

Council

ANADA Yukie
HAGA Takaroh
HIRANO Shinichi
HIRAYAMA Zenkichi
IWAMA Hirowo
MIYASHITA Hideki
MURAKI Junjiroh
NAGAO Yoshio
NAGASAKA Hiroshi
NAKAGAWA Takeshi
NAKAMURA Junji
NAKAMURA Taroh
NAKAYA Mitsuru
OHKURA Masami
OHMORI Kohichiroh
UWOMOTO Sadayoshi
WAKABAYASHI Keinosuke
YAMAGUCHI Shunsuke
YAMAMOTO Kenichiroh
YOSHIDA Koh

Chairmen of Branches

Hokkaido : NIIZUMA Toru
Aomori : MATSUSHIMA Seigo
Iwate : NAKAYA Mitsuru
Akita : OKADA Mitsuyuki
Yamagata : UMEZU Hiroshi
Miyagi : SHIBAZAKI Tohru
Fukushima : SAKUMA Takao
Echigo : IGARASHI Tokuo
Shinano : YAMAURA Gentaro
Yamanashi : FURUYA Gakuji
Shizuoka : OHISHI Atsushi
Toukai : NAKASEKO Takashi
Gifu : TAKAGI Sakio
Kyoto : SAKAI Toshiaki
Toyama : KIDO Shigeyoshi
Ishikawa : TSUDA Fumio
Fukui : NAKAMURA Tadashi
Kansai : ABE Kazuyuki
San-in : KIKKAWA Yohichi
Fukuoka : MATSUMOTO Yukio
Higashi Kyushu : UMEKI Hidenori
Kumamoto : HONDA Seiya
Miyazaki : OHTANI Masaru
Hiroshima : IZUMIO Tadashi

Change and Challenges in the HIMALAYAN HEIGHTS
Mountaineering for the 3rd Millennium

Prof. Ram Kumar Panday
Tribhuvan University, Nepal

'Men go out to wonder at the mountain heights'
(1 st. Augustine:—Confessions, 399 A.D.)

This is my great privilege to have an opportunity to speak few words on the Nepal Himalaya and Japanese mountaineering. I would like to thank organisers both the Academic Alpine Club of Hokkaido and Hokkaido Branch of the Japan-Nepal Society. I feel at home when meet Japanese friends. To me this August gathering and meeting with Japanese friends is very valuable and rare opportunity. This type of seminar helps us sharing experiences and clearing our feelings. This will strengthen people to people relations between two countries. The beauty of Hokkaido is beyond imagination. This part of the rising sun was my dream land. I am very happy and highly tempted in observing this golden garden of the globe.

Introduction

Nepal was almost forbidden country till the dawn of democracy. It was really unknown before the exploration of the Mount Sagarmatha. The altitudinal differences of the physical feature of Nepal has created geo, bio, eco and ethno diversities. Thus altitude geography of Nepal is unique to explore and expose the mystery of mountains. Within the mountain slope of 1,000 m one can visualise sub-tropical to alpine vegetal variation, enjoy hot to cold climate and find man adjusting with various cultural differences. The Himalaya as the Third Pole part possesses distinct nature while the Buddha brought the finest human findings in synthesizing life and philosophy. Japanese people worked as the pioneer to introduce Nepal in both aspects since 1950 s. As a birth place of the Prince of peace and the best place heavenly Himalaya-Nepal attracted global aspirations and love to the places and people in this part of the earth. Any person having true human heart respects these two highest peaks of

nature and culture.

Nepal covers central part of the Himalaya ranges extended in the northern border which is more than one-third of the east-west elongated Himalayan part of Asia. These are about two dozens of peaks including 14 famous peaks above 8,000 m in which Nepal possesses almost two-third numbers including the eight highest eight thousanders. Mt. Sagarmatha 8,848 m, the 3rd. Kangchenjunga 8,586 m, the 4th. Lho Tse 8,516 m and the 5th Makalu, 8,463 m, Cho Oyu 8,201, Dhaulagiri I 8,167 m, Manaslu 8,163 m, and Annapurna, 8,091 m are famous eight thousanders located in the Nepal Himalaya. The Himalaya inside Nepal has more than 1 300 peaks above 6,000 m. The deepest (land to land) gorge of the Kali Gandaki, 5,967 m and many places of altitudinal extremities within the mountain had created Nepal a big country having longest border in the height dimension. The Himalayan height as such is always motivating and challenging man. Mountain of this part remained always majestic and mysterious. The Himalayan height has been taken as the 'measuring rod' in the past. In fact, the oldest river is flowing around the youngest mountain and oldest human thoughts Veda became source of newest knowledge in the Himalaya region. But due to lack of modern technology and efficient manpower the people of the richest country is becoming poorest in the world. Although human technology has been found highly developed in the past, the value system is dwindling due to the lack of leadership and training of man power with eastern visions and backgrounds. Japan in this respect has made vigorous efforts to keep Asian identity. Education and patriotism have been identified as a secrets of Japanese success a century ago but still we are missing practice. The first Japanese to enter Nepal was Ekai Kawaguchi who came in 1899 told these two things responsible for the Japanese development to the then king of Nepal. Almost after half a century of his event, distinguished Japanese visited Nepal for the first time were related to mountaineering. The Academic Alpine Club of Kyoto (established in May 24th 1931) took initiation for the mountaineering in the Nepal Himalaya. Reverend late K.B. Verma, a Nepali sportsman supported the JAC venture in getting successful ascent in the Mt. Manaslu in 1956. This sucess encouraged to establish the first formal contact and brought real beginning of the Japanese mountaineering in the Nepal Himalaya. Since then Japanese mountaineering and tourism took speed to achieve great success.

Mountaineering and Tourism

Himalaya mountain motivated much and mountaineering became very popular among Japanese people since 1956 which was also the year of establishment of diplomatic relations between two countries.

Mountain and religion are two major pulling factors but the 1996 data reveals

Japanese Tourist Arrivals by purpose of visit, 1996

Purpose	Number	Percentage
1. Holiday/pleasure	16005	53
2. Trekking/Mountaineering	8507	30
3. Business	1086	04
4. Pilgrimage	84	01
5. Official	1349	05
6. Conv./Conf.	115	01
7. Others	1777	06
Total	28923	100

that the holiday/pleasure trip lead the highest number in Japanese tourist arrivals by purpose of visit.

Japanese contribution in making Nepal Himalaya popular is praiseworthy. After U.K., USA and Germany, Everest trekking is popular among individual Japanese trekkers. First rank within Japanese tourists is related to pleasure trip. About 53 per cent of the Japanese tourists visit Nepal for holiday pleasure. Tourist arrivals in 1996 was 28,923 on which trekking/mountaineering is ranked second (about 30 per cent). The tourist arrivals in the past four decades were satisfactory. Japanese tourist has been in increasing trend.

Tourist Flow from Japan at a Glance, 1982-1996

Years	Foreign Tourist			Japanese Tourist			
	Total number	Change from previous period(%)	Annual growth to 1982(times)	Total number	Ratio of Japanese(%)	Change from previous period(%)	Annual growth to 1982(times)
1982—1986	965, 807		1. 1	50, 068	5. 4		1. 1
1987—1991	1, 301, 848	39. 1	1. 5	84, 511	6. 5	68. 8	1. 8
1992—1996	1, 714, 051	31. 7	2. 0	107, 589	6. 3	27. 3	2. 3

Sources : Statistical Year Book of Nepal, 1993, 1997

Above table shows inbound number by every five years from 1982 to 1996. Tourist arrivals from Japan in 1982 counted 9,488 have raised to 28,923 by 1996. Although ratio of Japanese to total inbound is steady, Japanese arrivals during 1992 -1996 increased up to 2.3 times of them in 1982 in an annual average. This fast growing trend demands some urgent of making plans and programmes from both countries to strengthen Nepal-Japan tourism sector.

Japanese prefers to come in the month March (4,130), Feb. (3,626), Nov. (3,586) and Dec. (3,217). The slack period lies in June (659), May (997), July (1,196) and Sept. (1,948). Among 28,923 total tourist, 24,076 Japanese came by air (1996) and other 4,847 by land.

Trekking permit issued from KTM to Japanese, 1996

Trekking Route	Number	
	Agency handed permit	Individual trekkers permit
1. Everest Trek	1774	504
2. Helambu, Langtang valley trek	435	187
3. Annapurna-Manag-Jomson trek	2874	1018 1258 (issued from Pokhara)
4. Dolpo trek	12	
5. Kangchanjunga trek	33	
6. Others	305	61
7. Controlled area		
—Mustang trek	19	
—Dolpa	6	
—Humal	3	
—Manaslu	18	
Total	5479	1770

Source : Nepal Tourism Statistics, 1996 p.53

Although trekking/mountaineering is under second priority, even visitors coming for other purposes also trek in some of the places. So trekking and mountaineering is becoming popular. After U.K. (13,829), Germany (9,757) and USA (9,659) Japan has highest number in the trekking and mountaineering sectors in 1996. In the agency handled trekking Japanese found much interested (highest number (1,774) in Everest trek.

Everest trek is less popular than Annapurna-Manang-Jomson trek. It might be due to degree of difficulties and facilities available in travel route. But Everest trek is also popular among many other remote areas.

Japanese Ventures in Mountaineering

As a first mountaineering team, Japanese mountaineers made an expedition to Mt. Annapurna in 1952. A successful first ascent of the Mt. Manaslu was made in May 1956. This expedition and exploration got great success and achieved welcome from the King and Government of Nepal. The Academic Alpine Club of Kyoto (AACK) made a history which led to the promotion of Himalayan Expedition till 1970.

JAC, during more than four decades, tried several Himalayan peaks and

succeeded renown summits. Japanese Alpine Club succeeded to climb Mt. Sagarmatha in 1970. AACK ascended about a dozen Himalayan peaks among which Ganesh (7,429 m) in 1964, Yarlung Kang (8,505 m) in 1973 were prominent in this venture. Late K.B. Verma, a reverend Nepali accompanied many Japanese leaders and tried to keep contact. Nishibori, Imanishi, Tatsunuma, Matsuda, Tokunaga, Yoda, Muraki, Kato and Ohara were in the Mt. Manaslu expedition team. Climbers such as Kawakita, Kihara, Hashimoto and Tabei became well-known in Nepal. Mr. K.B. Verma even sent his second brother Mr. Dilli Bahadur Verma to accompany Japanese attempts in the Mt. Manaslu and Ganesh Himalayan expenditions in 1953 and 1954. Mr. K.B. Verma as an academic administrator, sportsman and patriots was very active till his death bed. He worked as an ambassador to both countries. He was always stressing Japanese model for the development of Nepal. He opened Nepal-Nippon Research Centre and donated all his books and collections related to Japan. Mr. K.B. Verma's effort to begin Himalayan expedition from Japanese Alpine Club was a land mark not only in the Himalayan history of mountaineering but also a good beginning of Nepal-Japan relations. JAC recognised him after 40 years by offering honorary membership of JAC in Oct. 4, 1996, just six months before his demise. Here I would like to thank once again for this recognition.

Japanese mountaineers are visiting frequently since the first successful Manaslu attempt (1956) of the JAC which helped to develop Nepal-Japan relations too.

Japanese Records in the Nepal Himalaya

After the first human victory over the highest peak Everest (May 29, 1953) by the British team, about 750 mountaineers including about 200 Sherpas climbed to the top till May 1998. Japan became the 5 th country to climb Mt. Everest.

Some noteworthy first ascents evidence Japanese mountaineering. The great success which made history (The list of Japanese summitters in Nepal Himalaya, the Himalayan Association of Japan, 1996) in the field of Japanese mountaineering are the following :

—Manaslu (8,163 m) by Toshio Imanishi in 1956.

—The first ascent of Mr. Everest (8,848 m) from south by Japanese climbers (Naomi Uemura in 11 May 1970.)

—The first female success in Sagarmatha by Junko Tabei in 16 may 1975.

—China-Japan-Nepal Chomolungma Sagarmatha Friendship Expedition 1988 is one of the important events in this field. There were more than 250 members accompanied to this venture on which 14 got success to get the top. This was the first event to telecast live.

Japan is one of the leading countries to secure great success in Mt. Everest.

Japanese Everest expedition starts from the success in 1970. In addition to the above mentioned climbers, Noboru Yamada (1983 and 1985), Yasuo Kato (1973 and 1982) and Hideji Nazuka (1985 and 1993), have climbed two times.

In the decade of 80s, Japanese has kept records and Noboru Yamada climbed half a dozen eight thousanders (Dhaulagiri, Kangchenjunga, Lhotse, Manaslu, Annapurna and Sagarmatha). Highest number of Japanese mountaineers climbed Mt. Sagarmatha in 1980s.

Japanese Alpine Clubs of different prefectures have their own history of the Himalayan expedition and studies. The world first mid-winter ascent of the eight thousanders was achieved by a team sent by the Academic Alpine Club of Hokkaido. They succeeded in the ascent of Dhaulagiri 1 on 13 December, 1982.

All are outstanding achievements in the history of mountaineering of Japanese climbers. All have contributed much in popularising the Nepal Himalaya. Still there are many mountaineers whose experiences can be precious to the future generation. Field programmes of mountaineering and trekking for the students can contribute to shape the life. Trekking in the height is a kind of adventure which supports to achieve a successful life.

Conclusion

Nepal is observing "Visit Nepal '98". Mountaineering as a major source of tourism has been one of the important fields for the economic development.

Japan as one of the leading countries in contributing mountaineering, has not been known much in Nepal. Japan is also became a top donor in the development activities of Napel. People to people relation is a growing trend. It should be extended in the future. We lack some infrastructure development in the field of socio-cultural establishments.

Regarding the growing number of Japanese tourists, trekkers, mountaineers and others, mountaineering will be more challenging in the next millennium. To overcome complexities, some of the areas should be considered for the improvement of mountaineering in the 3rd millennium.

1. A study of Japanese mountaineering in the Nepal Himalaya felt most essential. This should be included in the priority list. Still I stress to do something in this area. I am personally interested in the study of Japanese Expedition Experiences in the Nepal Himalaya.
2. A contact should be developed between JAC and Nepal-Nippon Research Centre which was founded by the late reverend K.B. Verma.
3. The following schedule could be considered :

   —1999 is the 100th year of the first Japanese entering Nepal. A centenary

ceremony can be organised in Japan and Nepal.

—2000 is the year to observe Silver Jubilee of the first ascent of the woman to the top of the world. It can be an opportunity to encourage woman mountaineers.

—2006 is the year for JAC to organise Golden Jubilee of the first ascent of the Mt. Manaslu and also the establishment of diplomatic relations between two countries.

—2010 is the year to observe 40th anniversary of the Japanese ascent of the Mt. Sagarmatha.

Programs such as video adventure program following the Kawaguchi route and Manaslu adventure can be made. Publication of historical documents and exhibitions of photographs can be interesting programs. Award and fellowship program can be announced and launched.

The mountain will be more challenging in the coming days. Due to the growing height of global garbage in the expedition sites, increasing poverty in the Nepalese society and degrading environment and social values will be more complicated in the future. So all mountaineering organizations and mountaineers should rethink to start new step to the Himalayan peaks.

Mountaineering and trekking in the 21 century will take new direction. Along with mountaineering and trekking, adventure loving people will be interested to explore ethno culture, alticulture, art and crafts, Himalayan herbs, altitude change, Yeti mystery, biodiversities, thematic photographs, nature love, search of peace and paradise etc. The Himalaya is the last paradise of the world. All grief, pain, sorrow and depression release whenever one climbs the height and observes, touches and feels the changing colour of the Himalaya. One can feel some newness in the Himalayan heights. Everybody should try at least to trek in the Himalayan heights to observe and experience the beauty of nature and truth in life. Anybody who climbs the height experiences nearing heaven.

［編者注］

本稿は、本会名誉会員故 Krishna Bahadur Verma 氏の女婿（長女の）で、Nepal-Nippon Research Centre の General Secretary でもある Tribhuvan University 地理教育学科の Ram Kumar Panday 主任教授が、1998 年 7 月札幌の北海道立近代美術館で開催された Asia Print Adventure 1998（アジア 15 ケ国 64 名による現代版画展）にパネラーとして招かれて来日した折、北大山の会と日ネ協会北海道支部の共催により 7 月 11 日に行われた、歓迎講演会に於いて「ヒマラヤ高所への挑戦—新しい世紀の登山」と題して講演された講演要旨である。

本稿はパンデー教授が講演用の草稿として用意されたものであるが、パンデー教授の

許可を得て、北大山の会の厚意により、掲載することができたもので、記して謝意を表する次第である。

Altitude Geography の専門家であるパンデー教授は、岳父でもある K.B. Verma 氏のマナスル登山に対する協力が、その後のネ・日友好の礎を築いたとして、その功績を賛えるとともに、登山やトレッキングを通じての、ネパールの観光資源の活用が、ネパール国の発展のために如何に重要であるかを強調し、これをベースとして国際交流基金の Fellow ship により、更なる研究を続けることにも、大いに意欲を見せており、本会としても期待するところ大であります。　（松田雄一）



Reinhold Messner;
a unique figure in mountaineering history

Jiro TAGUCHI

—great things are accomplished when men and mountains meet. This is not done by jostling in the street. William Blake—

A veteran alpinist Jiro Taguchi, now retired, gives his thoughts on present day mountaineering from all aspects.

"Reinhold Messner was one of the first to climb solo without oxygen to the height of 8 000-meters. His personal climbing records are more literal and philosophical rather than covering the physical methods he personally developed.

By coincidence I came across the records of a Japanese alpinist, Masao Todaka, and recognized the similarity in their mental attitudes toward climbing. Todaka also climbed without oxygen and his records, too, concentrated on the literal aspects and not physical climbing details. The combined experiences of these climbers offer valuable hints concerning mentality and physiology on alpine climbing. What needs to be done is to envision Messner's experience and try to see through his eyes and hopefully we can learn more about his technique."

Taguchi's thoughts on Messner's climbing methods moves to an historical interpretation :

"Modern alpinism began at the time of the British industrial revolution and developed during the growth of imperialism. The aggressiveness of alpinism is the embodiment imperialism. The British were the pioneers of modern alpinism and were also the vanguards of imperialism. The rise of German imperialism followed 50 years later filling its role in destiny as the more aggressive force. The progress of German climbing was extreme and heroic. This reflected the character of a nation which followed in the wake of the earlier development of imperialism in other countries."

"After World War II Imperialism petered out and leading powers concentrated on the race into outer space. The defeated Germans could not openly participate in the exploration of the universe. However, the Germans still retained their strong inquisitive spirit. Messner was a perfect example of this.

Messner, a German from the Italian southern Tyrol, had an unprecedented, energetic style of climbing. His major feats in conquering the highest and most difficult mountains, served to inspire the German nation at a depressing time in their history. His accomplishments too, can be used as an historical comparison. Messner, a heroic alpinist, can also be seen as a German astronaut."

The Shining Smile of Mt. Minya Konka (7,556 m) Ascent by the Northwestern Ridge Route

Masashi HAGA

Prologue

An expedition party of the Sapporo Alpine Club consisting of seven men and women climbers whose ages ranged from 27 to 59 challenged Mt. Minya Konka (7,556 m) in March 1997. Historically about twenty climbers have been killed in their attempts to make the summit. In the past, five expeditions by Japanese climbers have been attemped only to fail. As we made a sixth attempt in March 1997, we tried to maintain the most genuine motivation of mountain climbers i.e. to climb a beautiful mountain rather than to put an end to the past failures. Throughout our climbing, we were always mindful of this aim and thought from time to time what we could do or what should do.

Route

We followed the same North-Western Ridge route taken by an American party which had accomplished the first ascent of this mountain in 1932. However, we approached from a foothold named Mosimien on the Yanzigou Glacier just to the northeast of the approach taken by the American party.

After two days' caravan, we set up our BC at Haizitang (3,850 m), C2 at the Glacier snout (4,850 m), ascended the runse of Hump, set up C4 at the col of Hump (6,300 m), and set up C5, the last camp, at the beginning of the Ridge (6,800 m).

The Summary of Our Ascent

Because the Glacier has been receding over the years, we were afraid of encountering some difficulties in our approach, Happily, we suffered little affect from high altitude disorder and were able to carry up loads as scheduled. At the runse at Hump we struggled through deep snow to ascend. Young members greatly contributed to the ploughing.

Since there was a good chance of meeting an avalanche we had to stay there for two days. As the temperature rose, we had several narrow escapes from falling rocks and collapsed seracs. Our original plan was to use C2 as our ABC, which required us to pass through an enormous long runse. As a result, we gave up the plan and had five members in excellent physical conditions gather at C4.

At the North-Western Ridge, it was very windy and cold in the morning which limited our activity significantly. Ice walls alternated with snowy ridges and the undulations were larger than we expected.

The summit party was chosen according to out policy that we would never cause any accidents. Because of their physical strength then, Yokoyama and Nagahara were chosen as the final assault party. Taking into consideration the rotation order, it must have been thought for them.

The ascent above C5 required repeated staccato. When their route was blocked, the final assault members moved round toward the north wall and continued to climb. After climbing across the uppermost narrow ridge, they finally stood on the wide plateau of the summit of Mt. Minya Konka (7,556 m) at 12:50 on May 2nd.

March 20th	Entered in Chengdu
March 26th	Caravan started
March 30th	BC established
April 2nd	C1 set up
April 11th	C2 set up
April 18th	C3 set up
April 25th	C4 set up
April 30th	C5 set up
May 2nd	Yokoyama and Nagahara achieved the summit
May 3rd	C3 broken and the party returned to C2
May 4th	C2 broken and the party returned to C1
May 5th	C1 broken and the party returned to BC
May 6th	Returned to Mosimien
May 13th	Left for home

Members

Masashi Haga (Leader, 39)
Takao Sasaki (Doctor, 68)
Akio Kawagoe (59)
Hideo Yokoyama (Attacker, 55)
Takatomo Nagahara (Attacker, 29)
Reiko Yoshida (31)
Yutaka Hagiwara (41)
Sichuan Mountaineering Association
Gao Min (Liaison, 34)
Chen Jun (33)
Li Biao (Interpreter, 27)

Bravery is All You need to Challenge Mt. Dhaulagiri I, Mt. Gasherbrum I and Mt. Manaslu

Hirobumi KONISHI

I decided to climb three Himalayan mountains in 1997: Mt. Dhaulagiri I (8,167 m) in spring, Mt. Gasherbrum (8,067 m) in summer and Mt. Manaslu (8,163 m) in autumn. For my partner, I chose T. Kitamura for the ascents to Mt. Dhaulagiri I and Mt. Gasherbrum I, and M. Yamamoto for the ascent to Mt. Manaslu.

Mt. Dhaulagiri I

On March 28th Kitamura and I flew from Pokhara directly to the Base Camp of Mt. Dhaulagiri I by helicopter.

From the next day, it began snowing and storming and perished for the next two weeks. On April 10th Kitamura toiled up French Pass and joined us. After that we began to climb with full-force.

We established C1 at a 5,800 m point and C2 at a 6,600 m point. On April 27th I reached a 7,350 m point with my Sherpa where we intended to establish C3. However, Kitamura's physical condition was not good enough to catch up with us and it took more time to reach up to the 7,000 m level. While we were waiting for him, the weather began to deteriorate. We were unable to attempt the summit until May 31st.

On May 31st three of our party members left C3 (7,600 m) heading for the summit. We trudged in deep snowfall. We traversed a steep, snowy slope and reached a snowfield on the top leading to the summit. The snowy wall at the foot of the ridge which led to the summit was covered with deep snow and we were not able to pass through it until 6:30 p.m. According to the records, parties that had achieved the summit in the past took an hour or an hour and a half to ascend from this spot to the summit. We didn't hesitate in continuing the climb.

Finally around 7:00 p.m. we were standing on the summit of Mt. Dhaulagiri I. After a transient joy looking down the beautiful landscape from the top just after sunset, we brew anxious about our descent and left the summit immediately.

We returned BC at 2:30 a.m.

Mt. Gasherbrum I

On July the 3rd caravan started from Askole. It usually takes ten days to reach the Base Camp of Mt. Gasherbrum I, but we had planned to reach there in five days.

Because of this tight schedule, porters had to walk more than ten hours a day and they kept on complaining.

On July 7th we arrived at BC, and on July 9th we left BC in the early norning. The affect of our hard-scheduled caravan weighed heavily on our body and every joint ached.

We established C3 at a 7,200 m point and on July 16th at 3:00 a.m. we left C3 for the summit.

In the beginning the snow was crusted, but the snow on the slope leading to the summit was unstable.

Despite strong winds, we kept on climbing and at 1:15 p.m. Kitamura, Rose (high porter) and I were standing on the summit of Mt. Gasherbrum I.

Mt. Manaslu

On September 6th we began to climb the mountain.

On September 21st we reached C3 (7,200 m) and waited for a lull in vain for two days. Because of strong winds, we were forced to return to BC.

On October 6th we climbed up to C3 again. It was foggy the next day, so we postponed our ascent to the summit until the next day.

On October 8th we left C3 at 5:30 a.m. The wind was strong and it was very cold.

We waited for a chance for four nights at the final camp, but the God of Mt. Manaslu never favored us with his permission to make the simmit this time.

Dewda

The Nepalese have a god they call "Dewda". Sherpas claim that strong climbers who have narrowly escaped death many times have "a strong Dewda," meaning he has a strong divine protection.

Over the wide world there are only five climbers who have conquered all fourteen mountains above 8,000 m on earth. Among the five, it was only R. Messner and E. Loretan who climbed all fourteen mountains without using oxygen. Needless to say they had extraodinary physical, mental and technical strength, as well as an uncommonly strong fighting spirit and tenacity to accomplish things which would survive even after their life time. In addition, I believe they had quite exceptional Dewda to achieve these extraodinary fourteen summits without using oxygen.

As I challenged the three 8,000 m mountains, I began to think that those great climbers must have been chosen by God. Many climbers must have wished for the same achievenment only to fail. Or they simply burnt out and stop challenging those peaks after only a few successes.

I believe in my strong Dewda, and will continue to climb.

The Ascent of Mt. Namunani (7,694 m)
The JAC-Fukuoka Expedition

Itsuo OTA

About Mt. Namunani

This Himalayan mountain is called "Mt. Gurla Mandhata" in the Sanskrit sphere of India and Nepal, but called "Mt. Namunani" in the Tibetan sphere. The only Japanese who had ever visited this remote backcountry were Ekai Kawaguchi, a Buddhist monk (1900) and Denjiro Hasegawa (1927).

In 1978 the Treaty of Peace and Friendship between Japan and the People's Republic of China was signed. In 1985 a Japan-China friendship expedition consisting of mainly climbers from Doshisha and Kyoto Universities was formed, and thirteen Chinese and four Japanese party members succesefully achieved the first ascent of the mountain.

In 1990 a Swiss party ascended the mountain, while we made a new route and became only the third party to attempt this summit.

A Trip to Base House via Tibet

The four members of our expedition left Kansai International Airport and arrived at Kathmandu on May 6th. Because it was a small party, we rented all equipment and procured all food in Kathmandu except for food especially intended for eating at high altitudes.

On May 9th after we finished all our preparation, we left Kathmandu. We travelled along the China-Nepal Friendship Road and passed the customs house at Kodari and Zhangmu to enter Tibet.

On May 10th we left for Base House in two Land Cruisers and a Chinese truck. We were planning to take a southern route via Barga and arrive at Base House in Segang on May 16th. On our way, however, we experienced a variety of obstacles including acclimatizing, truck failure, the Tongba desert, crossing the Na-su-ko river, and being caught in a swamp. We arrived at Segang on May 22nd, that was six days behind schedule. We established our Base House at the 4,700 m level above the sea.

Making a Route and Setting up the Advance Camp

On May 25th we carried our loads up to BC which was set up just at the base of Zalongmalongba Glacier. To reach there, we climbed the northwestern ridge at a

5,000 m level and ascended the gorge consisting of debris and snow. We set up our BC at a 5,600 m point.

On May 28th we chose a route and carried up our loads. We decided to avoid a route that ascended through seracs and crevasses on the Zalongmalongba Glacier and instead follow the same route taken by the Japan-Cina Friendship Expedition, i.e. to climb up along a path made of fragile debries at the foot of the northwest ridge. We set up C1 at a 6,180 m point.

On the next day we discussed the route with our Sherpa and decided not to follow the Japan-China Friendship Expedition's route via couloir but to traverse the middle part of the Zalongmalongba Glacier and reach another glacier lying on its right.

Just above C1 was an 80 m high icewall whose upper part was full of numerous tiny crevasses. We fixed a 100 m rope to climb the wall and reached a hallbert-shaped icefall which was standing as if intercepting the central part of the glacier.

Above the icefall was a vast zone of tall seracs as if overwhelming us. We ascended a snowfield, a 30-40 degree slope leading to the right glacier, then reached a col between the serac zone and the right glacier.

We crossed a 15 m high icewall.

On the top of the icewall was a snowfield with a 20-30 degree slope stretching between the right glacier and the left serac zone.

After we climbed through the snowfield and then traversed a slope of the glacier which was curving to the right, we set up C2 in the stable serac zone at a 6,800 m point.

On May 31st we climbed a snowfield stretching above C2. Because it hadn't snowed for a while, the surface of the snowfield was frozen, and we saw skavla frozen just as it was. Every afternoon a strong west wind never failed to blow, causing a blizzard which washed over our feet. The slope came increasingly steeper which along with the increased altitude slowed up our climbing.

We passed a small serac area and continued to climb the snowfield up to a 7,300 m point where we set up C3. From there, we saw for the first time the western ridge leading to the summit. The difference in altitude between C3 and the summit was 400 m.

Standing on the Summit

We descended to BC where we took two days rest before rechallenging the summit.

On June 5th the three members of the first assault party reached C3.

On June 6th the assault party left C3 at 7:30 a.m. roped together.

We climbed up a snowy slope of 30-40 degree. Due to strong winds, the surface of the snowy slope was in the skavla condition, and a wind-wrought pattern like a tiled roof had frozen to ice. Because of high altitude and an increasingly steeper slope, we felt our heaviness each step.

after 10:00 a.m. we reached the foot of a 100 m high rock face leading to the west ridge. It was a 60 degree slope. Occasional gusts washed the rock face causing blizzard conditions. The rocks were fragile and "röckseite", but it was not so difficult to climb.

In preparation for our descent, we fixed a 100 m rope that reached a 50 cm-1 m wide ridge piled with debris. Due to wind the rocks were exposed. The south side of the ridge was rocky cliff descending 1,000 m and the north side was also a rocky cliff descending 200 m. When we reached a peak which we had thought to be the summit, we saw another higher peak just ahead of a suspending ridge.

We were standing on the real top of Mt. Namunami at 13:15.

The Ascent to Mt. Gashebrum Ⅰ, Mt. Gasherbrum Ⅱ, and Mt. Broad Peak
The Gunma Karakoram Expedition, 1997

Shuji NATSUKA

As we selected the destination mountain for this expedition, we set some criteria i.e. ⅰ) this expedition must be a good training opportunity for young climbers as well as seasoned Himalayanists and therefore we wouldn't stick to climbing in winter, ⅱ) all participants in the expedition should be able to stand on a summit over 8,000 m and ⅲ) we should experience the joyful part of climbing in a Himalayan Range. If we have only one destination mountain, there is a risk that climbers inexperienced with Himalayan mountains wouldn't be able to make the summit because they wouldn't be able to acclimatize, their physical condition wouldn't be up to it, or bad weather. This is why we chose three mountains for this expedition. They are Mt. Gasherbrum Ⅰ, Mt. Gasherbrum Ⅱ and Broad Peak, all standing in Karakoram (Pakistan). The government of Pakistan permitted one party member to ascend two over-8,000 m mountains in a season. Whith this in mind, we planned to climb three mountains in one expedition.

Party A	Gasherbrum Ⅰ and Gasherbrum Ⅱ
Party B	Gasherbrum Ⅰ and Broad Peak
Party C	Gasherbrum Ⅱ and Broad Peak

With this arrangement, even if one party failed to reach the top, there was still a

possibility of another party making all the way.

Mt. Gasherbrum I

On June 19th Party A and Party B arrived at BC, Several other parties had already been to Mt. Gasherbrum I and Mt. Gasherbrum II, but all were still lingering around C1. The route to climb along the crevasses zone just up at the exit of the plateau, which looks Gasherbrum Glacier on its south side had not yet made. So we fixed the route anew.

We began our climbing activities on June 22nd. The weather was fine, and we could extend the route further up. However, around 27th the weather began to deteriorate and all of us had to return to BC. When we began to climb again, we were favored with a long spell of fair weather except for two days, July 4th and 10th until we successfully ascended to the summit. According to the record, such a long spell of fine weather was unusual; usually three or four consecutive fine days were followed by two bad weather days which sometimes delayed ascents to the end of July or even into August.

On July 2nd Party A set up C2 at 6,400 m and on July 3rd began to fix a route to the Japanese Couloir which was the core part of Mt. Gasherbrum I. A long spell of fine weather had left many rocks exposed. We saw old unretrieved ropes fixed at two to three m above us. Hoshino had done all the work of fixing rope to C3 by himself in only two days. Usually it was proper that we would go down to BC to take a rest before challenging the summit. Because of the unpredicatable weather thereafter, however, we decided not descend to BC for a rest, and set up C3 at a 7,300 m point on July 6th and attempt the summit the next day.

One July 7th Natsuka, Ezuka, Hoshino and Shinagawa left C3 at 3:30 a.m. The slope just under the summit was steeper than it looked. Setting four ropes, we were able to reach the summit by 14:26. On our way down, we descended 26 pitches by staccato, so it was closed to 20:00 before we finally reached to C3.

On the next day (July 9th) Miyazaki successfully climbed to the summit with two sherpas. Baba and S. Iwasaki whose acclimatization were delayed decided not to challenge the summit of Gasherbrum but to concentrate on Gasherbrum II.

Ascent to Gasherbrum II and Broad Peak

Many of the members of Party C had become physically in bad condition, and it was only Goto and Ogata who could work on fixing the route. Thses two set up C2 (5,800 m) on July 4th, C3 (7,400 m) on 7th, and left C3 for the summit at 3:50 a.m. on July 8th. They reached the summit with a sherpa at 11:32 a.m.

Watanuki and Tajima of Party C whose acclimatization had been delayed could

make the summit together with the members of Party A on July 14th.

Party B used the same route taken by Shizuoka Alpine Club Party which had arrived at Gasherbrum Ⅱ a little ahead of us only to encounter a serious disaster. We set up C1 (5,450 m) on June 21st, and C2 (6,200 m) on June 23rd. As we began to fix the route further up, the weather deteriorated and we had return to BC.

On July 4th we attempted to ascend to a higher point, but were caught by bad weather and forced to return to BC. With the Shizuoka Party's bitter experience as our lesson, Party B patiently waited for the return of better weather which forced us to adhere to BC for ten days. This delay influenced Paty B's later itinerary.

On July 25th Yoshida, F. Yoshida and Fukumoto reached C4. Sato, Yanase and Y. Iwasaki too climbed up from C2 to C4 in one day. The next day (July 16th) eight party members and two sherpas began the ascent to the summit. Nakajima whose acclimatization was delayed had to be left at C4. The wind was strong and it became stronger by the time Sato who was way ahead reached the central peak, where he waited for the arrival of the rest of the party. Though the wind was still very strong, but feeling it had become a bit more moderate, we began to head for the summit which was visible just ahead. Between 11:30 and 13:30 members of the assault party stood on the top of Mt. Gasherbrum Ⅱ.

Broad Peak

After Party C successfully reached the summit of Mt. Gasherbrum Ⅱ, we moved to the BC of Broad Peak on July 17th and 18th in two parties. On July 20th we left C4 with a sherpa at 3:00 a.m. and stood on the summit of Broad Peak at 9:26 a.m.

K2-Via the West Ridge Across the Untrodden West Wall JAC-Tokai Environmental Research K2 Expedition 1997

Osamu TANABE

In 1994 the Tokai Branch of the Japanese Alpine Club started its exploration of new routes to the summit of K2. After a long exploration, we concluded that the best route was to take the West Ridge course of the 1981 Waseda University party up to the 7,800 meter point, then climbing up toward the left, we would turn round onto the West Wall at the altitude of 8,000 meters. We expected the greatest difficulty would come in this transition point. We calculated that, once we scaled the upper part of the West Wall, we would be able to reach the North Ridge just beneath the summit by climbing from one snow wall to the next. The new route was estimated to be about

800 meters difference in altitude at about the 7,800 meter point.

On May 5th only ten days before our departure from Japan, Kazuo Tokushima, who was to be our expedition leader, was killed in an avalanche. This occurred while he was walking along the Karasawa Valley of Mt. Hotaka in the Japan Alps. It was then we decided that Osamu Tanabe should take his place and become our leader.

On May 16th our party left Japan as scheduled, and on June 4th, our caravan started from Tongal. While in Paiju, we stopped to help the Himalayan Green Club members with their afforestation activities.

On June 10th we set up our BC at the 5,150 meter point on the K2 normal route. We had planned to make our BC site at the 5,500 meter point on Savoia Glacier, but troubles with our porters compelled us to choose another site.

On June 14th we set up ABC at the 5,500 meter point, and began our reconnaissance to find a route up the mountain. We were soon forced to halt our reconnaissance, however, when we received a call for help from the Shizuoka Broad Peak Expedition team. They had met with an avalanche on June 16th. We aided them in their search for survivors, and were able to recover two bodies on June 18th.

On June 20th we resumed our climbing, but were unable to advance very far because of inclement weather. With the beginning of July, however, the bad weather changed and the Baltro Area was blessed with what many felt to be the finest weather in twenty years. Taking the advantage of this blessed weather, we were able to advance at a faster pace. We proceeded up to the 7,800 meter point, taking the Waseda university West Ridge route with the exception of avoiding the rock which was at around 6,900 meters. There we chose to take a right-hand course since we thought it would be easier to carry our baggage along this route.

On July 16th we managed to pass the tunnel-like gully, less than 50 centimeters wide, in the "Snow and Ice Fall Area." From this point, we climbed along an unknown route. Referring to Saburo Hiroshima's aerial photographs, we stretched our route towards the left, and found an ideal C5 site on the shoulder of the West Ridge pinnacle area at a height of 8,000 meters. From the shoulder, it was possible to dangle down to the snow-covered West Wall with only two pitches.

On July 18th the first advance party (Tanabe, Suzuki and Nakagawa) set up C5, and on July 19th we started for the summit. Climbing leftward from one unstable wall to the next on the West Wall, we reached a col, on the North-West Ridge at an altitude of about 8,000 meters. Fear of avalanches would have made this area the most dangerous leg of our climb if we had encountered bad weather as is often the case in this region.

From the col up to the uppermost point of the North Ridge, we climbed about 200 meters across a slope, which was covered with unstable, loose rocks. One more careful

pitch of traverse brought us to the round snow dome, and the summit. At this time, we were able to lay to rest the ashes of two mountaineers who have been most eager to stand on this summit. They were Kazuo Tokushima, who was to have been our leader, and A. Yamazaki, who was an earnest climber of our club and had passed away on Ultal II after reaching the summit.

After twenty consecutive days of fine weather, inclement weather arrived on July 21st, preventing the second advance party from reaching the summit. On July 28th, however, eight members, Taking, Nakajima, Yamada, Kobayashi, Dawatasl, Gyarbu, Mimma, and Pembadolge, stood on the top. Thus, our expedition ended successfully.

For our climb, we took the "Polar Method."

Members

General leader: Noboru Onoe (54)
Leader: Osamu Tanabe (36)
BC manager: Hiroaki Kanada (49)
Other members: Masamiki Takine (46)
Akira Nakajima (32)
Ryoji Yamada (34)
Masami Kobayashi (32)
Nanabu Miyoshi (31)
Mikio Suzuki (30)
Kunihiko Nakagawa (28)
Shouichi Yamabe (34)
Asahi Shimbun News Reporter
10 high altitude porters from Nepal

Summary of Climbing Activites

BC (6,150 m) Established on June 10th
ABC (5,500 m) Established on June 14th
C2 (6,400 m) Established on June 27th
C3 (7,000 m) Established on July 6th
C4 (7,500 m) Established on July 15th
C5 (8,000 m) Established on July 18th
First ascent: Reached the summit on July 28th
C1 was not set up, as we wanted to avoid the danger of falling rocks and avalanches.

The First Ascent of Geregeer Mustagh in Tienshan

Atsushi OOISHI

In the summer of 1997 a party composed of members of the Academic Alpine Club of Shizuoka (AACS) and the Shizuoka University Alpine Club (SUAC) were the first to climb Mt. Geregeer Mustagh (5,250 m) in Yilianhabiergashan of the Tienshan range in China. This expedition had planned to train together with the members of SUAC and AACS in order to achieve foreign expedition since 1987. The party started from Urumuqi to Boltong on Aug. 4th. They started with three jeeps and a truck.

On Aug. 5th we began a caravan with eighteen horses and crossed over two passes of 3,700 m. We reached the BC (3,260 m) on Aug. 7th. We had fine weather during the caravan.

On Aug. 8th all members carried loads through the right bank of Geregeer Glacier to set up C1 (3,900 m). C2 was established at the 4,120 m level in the sanctuary of the glacier on Aug. 10th.

On Aug. 12th the five members making the final ascent started from C2 at 7:05 a.m. and climbed to the crevasse valley toward the col of the tributary ridge. We passed through the col at 9:15, and climbed to the col between Geregeer Mustagh and the 5,129 m Peak, arriving at 11:35. We could not see the summit of Geregeer Mustagh from the col. Yusuke Sakuraba was the first to stand on the summit at 12:30. and he was followed by Hajime Yoshida, Takashi Sato, Hisakazu Fukazawa and Eiji Hiraki at 13:35. They descended from the summit at 13:50 and arrived at C2 at 17:00.

On Aug. 14th the party descended from C2 to BC. During the next day, we returned to Boltong using the same route. It took us three days.

The party completed the expedition without any injuries or sickness. All members returned to Japan on Aug. 22nd.

1997 Fukuoka Mt. Ama Dablam (6,812 m) Expedition

Keiji UEDA

On September 22nd we reached the BC. The weather was still under the influence of the monsoon. We hoped to reach the BC ahead of any other parties in order to secure the best route, but when we arrived we found a Russian party which had arrived there just before us. The BC area was a vast meadow with even a stream running through it. The BC satisfied a number of conditions. We set up a large tent which we purchased in Kathmandu. It was going to our kitchen and living room. In addition to this tent, all party members had individual tents. We had a good cook (our familiar sherpa) and abundant food. Even a beach umbrella was standing which gave an air of perpetual summer. Life at BC was comfortable. Although we were young climbers who carried a slogan of "simple and economical," it turned out that none of us were frugal so far as food at BC was concerned. Thanks to the amenities at BC, we had little frustration and I believe that contributed greatly to our concentration on climbing.

It was a total of twenty-five days climbing. The monsoon passed without any lingering. The climbing days would be divided into three periods.

The first period was spent acclimatizing and carrying loads up to C1. There were only two parties at BC: the Russian party and ours. The difference in altitude between BC and C1 was more than 1000 m. Therefore, we set up DC at a 5,050 m point to get well acclimatized. The area where we set up C1 was one of the narrow terraces sporadically available along the ridge. At the maximum, seven or eight tents could be set up tightly there. The load for each carry was between 13 and 15 kg. We set up C1 on September 28th, on the same day as the Russian party. However, they were ahead of us in fixing a route for C2.

Our goal in the second period was to attack the summit. Ueda and Shigekawa left C1 to set up C2 and fix a route further up. A rocky ridge extended between C1 and C2. The core part of the ridge was a rock face called Red Tower. Usually no snow stuck on the route, but this year the condition was a mixture of snow and rocks. Pitons were effective to fix the route on such a face. From the previous day we fixed five pitches on the wall of ice and snow. On October 6th Ueda and Shigekawa left for the summit before 5:00 a.m. The weather was fair. After the fixed point, they climbed up to a point just four pitches below the summit, when they found it was already 2:00

in the afrernoon. It was too late to continue to climb, make the summit and descend. They radioed BC saying they would descend after 2:00 p.m. On the same day, the Russian party set up C4 at a plateau just off the Mushroom Ridge, and the next day they successfully made the summit and descended employing Alpine style climbing througout the ascent.

We reflected on our failure, and decided to set up C3. Seki and Ozawa left first for C2. The next day, Seki extended two pitches on Mushroom Ridge. Ozawa's physical condition was not good enough to join him. On October 12th all other party members reached C2, and on October 13th we broke C2 and constructed C3. On the same day, a German party and the second Russian party set up their tents there. On the next day (October 14th), we borrowed ropes from the German party and extended six pitches up to the top of a suspended glacier to prepare for the final ascent on the next day. Next morning at 5:30, Ueda and Shigekawa left for the summit. Only on that day the weather was cloudy and windy with clouds spreading high in the sky. After they had extended two pitches, the German party extended five more and successfully made it to the summit. It was 9:00 a.m. In addition to the German party, a total of twenty climbers from Russian and American parties made the summit on that day.

When we descended, we carried all except for fixed ropes. By the time we broke our BC, there were more than ten expedition parties there. The BC looked like a resort camping site. We had been favored with good weather throughout the expedition until we broke up the caravan.

Summary of Record

Activities

Sept.	10th	Left Fukuoka and arrived in Kathmandu. (Ozawa joined the party in Kathmandu)
	16th	Caravan started from Kathmandu to Lukla
	23rd	Nakmura descended from BC
	24th	Opening of our BC
	28th	C1 set up
Oct.	4th	C2 set up
	6th	Ueda and Shigekawa fixed a route to the summit, but were unable to reach it.
	15th	Successful ascent
	18th	BC broken
	20th	Returned to Kathmandu
	23rd	The expedition party broke up at Kathmandu

Members

Takeshi Seki (Leader, 26)
Keiji Ueda (25)
Eisuke Shigekawa (22)
Miki Ozawa (26)
Masaomi Nakamura (Support member, 22)

Returning Alive from Mt. Dhaulagiri I
JAC Youth Section
Mt. Dhaulagiri I Expedition, 1997

Masayuki MATSUBARA

On September 10th we began an ascent of Mt. Dhaulagiri I. We established our BC on the glacier at a 4,700 m point where we could see the North Wall just in front of us.

After crossing the glacier, we took a small ridge leading to the North Ridge. It was extremely meager ridge consisting of only gravel and loose stones. It was very risky because we had to depend on those unreliable loose stones when we needed belay points to secure us. Still we managed to make a route on that meager ridge. On September 15th we set up C1 at a 5,450 m point. Just ahead of C1 was a serac zone, where ice as tall as a two-story structure were bristling and leaning over us. Passing around huge icicles hanging over us as if they were ready to fall at any time, we traversed to the right. We were able to pass through the serac zone with a dozen pitchess and reached the edge of a vast plateau. Beyond this point there were chances of encountering an avalanche at any time and it seemed there was not a single place which was absolutely safe from an avalanche. We established C2 (6,000 m) on a tiny ridge leading to the North Wall called "Pear."

Everyday while the weather was fine in the morning, clouds always rose and snow fell in the afternoon. In general, however, the weather was stable during September. We extended the route to the wide snowy slope of the North Wall, and established C3 at the base of the Pear at a 6,700 m point. We cut out the snowy wall and made a cave to set up a small tent just good for two people. We had to hold ourselvess by a rope to urinate.

From the end of September to the first week of November, a depression repeatedly approaches and it keeps on snowing. Uusally it is a season of a beautiful weather after the monsoon.

In the morning of October 7th all members of C2 gathered in a tent to discuss

whether or not we should return to BC. Suddenly we heard a boom outside the tent and just a few seconds later an avalanche attacked our tents. We managed to evacuate the half-collapsed tent. The upper tent where Itaya and I were staying before the avalanche was crushed and buried under the snow.

We established a new C2 about a hundred meter below the previous site, and decided to continue our challenge to the summit.

Because our time was limited, we decided to continue to establish a route until we were ready to attempt the summit without returning to BC. Fortunately, we were favored with a fine day, the best one in our entire climb. We established C4 at a 7,050 m point on the upper part of the Pear. Again, we had to set C4 on a steep snow wall where no one would ever wish to set up a tent. From the uppermost part of the Pear to the Nort-Western Ridge streched a zone consisting only of rocks and ice where it was very difficult to secure belay points as we climbed.

On October 18th we could finally pass through the North Wall by traversing a snowy belt stretching rightward to the horizon. As we reached the North-Western Ridge, a new landscape which was not visible from the other side of the Ridge appeared dramatically in front of us. We extended the route up to a 7,500 m point on the North-Western Ridge. For the first time we had a close look at the rocky ridge leading to the summit, which meant that we had finally made the approach to the summit. We wished to extend the route more, but we managed to control our hasty exuberance and began to descend. On the next day (October 19th) the long spell of fine weather ended. If we had one more fine day, a party led by Tanahashi would have ascended to C4 to extend the route further. For the first time after ten days all party members descended to BC.

According to the plan we made then, Matsubara, Matsumoto, Okuda and Itaya were to ascend first and fix the route on the rocky ridge leading to the summit up to a 7,750 m point, while Tanahashi, Shiina and Kawataka were to climb later and set up an attack camp at a 7,500 m point. And then we would challenge the summit on the next day. This was the only possible plan at that time, since we were running out of time and food. We wished to take only the sheer opportunity we might still have.

On October 23rd it began to snow quietly in the afternoon. It was as if winter were returning. It snowed increasingly harder all day the next day. We encountered an avalanche at C2 on October 7th due to the heavy snowfall, but the snowfall at BC was only 10 cm. Now, the snow fell over a meter at BC, and our tents would be buried easily under it if we didn't remove it. We had no idea how much snow fell up there. All of us knew that such a heavy snowfall in this season would definitely make it impossible for anyone to make the summit. However, considering all the efforts we had made to reach this point, we wished to persevere.

On October 26th, taking a last chance, we left BC. We had to plough hard through the snow all the way. Under normal conditions, we could have made the climb between BC to C1 in four hours. However, we were unable to reach C1 even after a whole day's ploughing. Anyway, we managed to reach C1 next day, and continued ploughing above C1 in the afternoon when it began to snow. We felt that it was not practical to try to make a trace while it was snowing.

On October 28th snow continued to fall in the morning. The trace which we had made the day before with great difficulty was gone. I heard that the snow had fallen 50 cm at BC. There was nothing to do but to give up the attempt to make the summit. I made the decision and announced it to all the party members.

Summary

Name of the Expedition	The Japanese Alpine Club Youth Section Mt. Dhaulagiri I Expedition, 1997
Promoter	The Japanese Alpine Club Youth Section
Period	From the end of August 1997 to early November 1997
Goal	To reach the summit of Mt. Dhaulagiri I by the North Wall "Pear" route
Climbing Members	Masayuki Matsubara (32) (Leader) Yasushi Tanahashi (34) (Deputy leader) Nobuo Matsumoto (32) Masakazu Okuda (31) Atsushi Shiina (27) Yu Kawataka (23) Kosuke Itaya (22) Megumi Matsumoto (32) (BC Manager)

Activity

Aug.	21	Left Japan for Kathmandu.
	28	Moved from Kathmandu to Pokhara by surface
	30	Moved from Pokhara to Jomsom by air, and then to Marpha.
Sept.	3	Caravan started from Marpha.
	8	BC (4,700 m) was established.
	10	Climbing activity began. Made round about climbing to a 5,200 m point.
	15	C1 (5,450 m) was set up.
	20	C2 (6,000 m) was set up.
	29	C3 (6,700 m) was set up.
Oct.	7	C2 collapsed due to an avalanche.

13 C2 (5,950 m) was set up newly again
16 C4 (7,200 m) was set up.
18 Reached a 7,500 m point on the North-Western Ridge.
28 Decided to give up the attempt to make the summit.
Nov. 1 All climbing activities stopped.
4 Broke BC and the party returned to Kathmandu by helicopter.

Meiji University Manaslu Expedition 1997

Toichiro MITANI

The Meiji University Alpine Club and its alumni association, the Robata Kai (the Fireside Club), has climbed three 7,000 m summits in the Himalaya. Following those ascents, the club has attempted Mt. Everest (also known as Sagarmatha or Chomolungma) twice but both attempts ended in failure. While several club members have ascended 8,000 m peaks, the club itself has not yet succeeded in doing so. This time, the club sent an expedition to Manaslu (8,163 m).

The eight expedition members departed from Japan on August 23rd. After packing supplies in Kathmandu, the expedition flew to Kermo Kharka (3,800 m) at the base of Manaslu on August 31st and September 1st three large Russian-built helicopters. The expedition members and eight Sherpas (including a cook and a kitchen boy) together with all of the supplies made the trip in 45 minutes, saving a ten-day approach march.

Since the monsoon had not yet lifted at Kermo Kharka, it was surrounded by grassy meadows with alpine wild flowers. Porters were hired in the village of Sama to pack supplies to Base Camp at 5,000 m. The trip took only a day. The porters' wages were 900 rupees (increased to 1,000 rupees for the descent). They carried about 135 loads to Base Camp. While this was going on the expedition members acclimatized by climbing a nearby mountain and making round-trips to and from the Base Camp. An international expedition as well as another Japanese expedition had already established their base camps. Our expedition members finally climbed to Base Camp and stayed in two groups, on September 4th and September 5th.

A ceremony to open Base Camp was held on September 8th, and climbing started on September 10th.

By September 14th, Camp 1 was set up at 5,800 m on black rock. It was a good campsite with views of Larkya Peak (6,427 m) to the north and Ganesh Himal (7,429

m) to the southeast. From Camp 1 to the main snowfield the route crossed an icefall which threatened avalanche.

On September 19th Camp 2 was established at 6,350 m, where the route opened up onto a broad snowfield. It was a scary campsite, which faced avalanche danger when heavy snow fell, so we used it mainly as a depot for supplies. We hoped to spend no more than one or two nights there. From there we climbed toward the North Col along the base of Manaslu North Peak (7,157 m). The other parties set their tents up immediately below the North Col, but we carried our tents to the North Col.

On September 23rd we established Camp 3 at 6,900 m. We set our tents directly in the path of the wind on the North Col. It took two days for us to fix ropes up the route to the high plateau, coming out on a flat ground at the northern end of the plateau after which we descended to Base Camp to rest.

On Sepember 30th we entered Camp 1 on what we intended to be our summit assault, but as snow continued to fall we returned to Base Camp on October 1st.

On October 4th the members of the first assault party left Base Camp again, and entered Camp 1.

On October 6th we established Camp 4 which consisted of two tents, at a small col at the northern end of a high plateau at 7,500 m. That would be our last camp. We used oxygen both to sleep and during the summit assault. From Camp 4 we could see the summit cone of Manaslu and the pinnacles at the southern end of the high plateau.

On October 7th the planned first summit assault was postponed because of bad weather. Snow fell also at the lower camps.

On October 8th the six-man first summit assault party (five expedition members and the Sirdar) left the high camp at 5:05 a.m. They climbed, roped up, in the dark using headlamps. When it became light, they unroped and continued to struggle through deep snow toward the summit. At 9 a.m. they arrived at the col directly below the summit, with views of Peak 29 (7,871 m) and Himal Chuli (7,893 m). At 9:50 they roped up again, in two teams, for the climb up the snow ridge to the summit. The final snow ridge fell steeply on both sides. On the east side it was corniced. It was so cold on the summit that they could do no more than take a few photographs for the record, They postponed the radio report to Base Camp until they had arrived back at the col below the summit. Then they unroped and descended to Camp 4 at their own pace, passing Basque and Slovakian parties on their way up. They continued past Camp 4 to Camp 3, and from there struggled through deep snow to reach Camp 1.

On October 9th the second summit assault party consisting of five climbers (three expedition members and two Sherpas) left Camp 4 at 5 a.m., reaching the

summit at 9:15 a.m. On the way down they broke Camp 4, and continued to Camp 3. On the way to Camp 3 they discovered the dead body of one of the members of the Slovakian party, that had been climbing on October 8th, on the fixed rope below Camp 4.

On October 11th, Camp 1 was broken, ending all climbing activities above Base Camp. In all, activity above Base Camp lasted about a month.

On October 13th the porters from Sama broke Base Camp, and the group returned to Kermo Kharka, now ablaze with fall colors.

On October 14th the expedition members and some of the Sherpas began its return march, crossing the Larkya La (5,105 m) toward the Marsyangdi River on the western side of Manaslu. It took six days for the group to reach Bensishahar, from where they took a chartered bus to Kathmandu. The supplies were carried by Sherpas down the Buri Gandaki River.

The expedition owes its success to this use of Sherpas and oxygen, so its members did not become exhausted. Ropes were fixed between Camps 1 and Camp 2, and between Camp 3 and Camp 4 so that supplies could be carried up safely. It was the expedition's good fortune that all eight members were able to reach the summit. Altitude acclimatization was greatly assisted by the previous high altitude experience of seven of the eight members: three above 8,000 m, two above 7,000 m and two above 6,000 m.

Their next objective should perhaps be an ascent by a more difficult route. This will require more in terms of climbing ability of the individual expedition members.

Members:

Toichiro Mitani (41) (Leader), Atsushi Yamamoto (34), Akiyuki Harada (31), Manabu Hirose (30), Kazuhiro Takahashi (23), Tadaaki Toyoshima (22), Yoshinobu Kato (21), and Yuichi Seki (22).

JAC Youth Section
Mt. Kangchenjunga Expedition 1998

Taro TANIGAWA

Our expedition arrived at the village of Ghunsa by helicopter. Caught in a heavy snowfall which was unusual for the season, we were forced to stay for six days at this remote village at a 3,400 m above sea level. Then after a three day caravan and a day of rest, we arrived at our BC site (4,960 m) on March 29th. The weather was

at mid-winter severity with 40 cm-deep snow still remaining. After two days' rest and preparation, we set off to climb the mountain on April 1st by reconnoitering Kangchenjunga Glacier for starters.

The move from BC to C1 was not difficult in terms of technique. In fact we had no use for ice axes or crampons. It was, however, a long way, and we had to walk mostly on a monotonous flat glacier. Although we felt prepared, it was not easy trudging back and forth under the glaring sun carrying heavy loads. However, this going back and forth surely helped us become acclimatized to the 5,000 m altitude and also helped us to recover from the exhaustion caused by our rather hasty trip to BC—a big shift in altitude (1,500 m) in four days.

On April 7th Tanigawa, Akasaka and Okuda reached C1 and began to fix the route. By turning around to the Twins side, they broke through the icefall area without meeting any trouble. While they were heading straight for the North Wall of the Kangchenjunga through a vast snowfield, Tanigawa, the lead climber, stepped on a hidden crevasse and dropped ten meters. Akasaka, the second climber, was dragged down with him, but managed to hold on and avoid a serious accident.

These three members continued their efforts to make a route for the next two days (April 8th and 9th) and successfully ascended through the serac streching 100 m at the foot of the North Wall. The next day (April 10th) they set up C2 at a 6,500 m site.

On April 17th Tanabe, Hirose and Shiina reached C2. On the same day they managed to extend the rope with nine-pitches reaching an ice wall that stretched under the Northern Ridge. On April 18th they extended the rope six pitches further as they slowly climbed a very steep (50 degree) ice slope as hard as glass. The next day (April 19th) they extended the rope three pitches further along a slope slightly less steep and reached the Northern Ridge, which marked the border line between Nepal and India (Sikkim). On the same day the three of them advanced another seven pitches further across a ridge laced with intricate crevasses. At 7,400 m, they established C3.

Thanks to the unusually fine weather which continued throughout April in Eastern Nepal we were able to climb on schedule. Three members who had never climbed Himalayan Mountains were also able to adjust themselves and catch up with the other members though sometimes they felt difficulties. The seven of us who did have Himalayan experience duly performed their roles as expected, and our eagerness to make the summit grew increasingly stronger.

On April 27th, Tanabe, Hirose and Shiina successfully broke through a rocky eight-pitch slope called the Castle. Climbing this rocky Castle required employing many mountain climbing techniques with some five degree difficulties. However, the

route was clear enough for them to pass the difficult part in a day. They continued climbing westward on the third snowfield and established C4 at the base of the summit (7,900 m) which is shaped like a huge pyramid. C4 is to be the assault camp.

When we planned our climbing strategy, we considered the key to make the summit might be the climb to C4. So, we planned to stay at C3 (7,400 m) and have each member carry about a 10 kg load to C4 which is almost at the 8,000 m point. This kind of climb might be as hard as or even harder than an ordinary ascent of an 8,000 m peak. We thought that if we were unable to do this, reaching the summit of Kangchenjunga (8,598 m) might also be impossible. In other words, if we were strong enough to do this, we could make the summit. It was hurdle set by ourselves for the purpose of decreasing risks as much as possible. Despite our fear of some dropouts, all members were able to accomplish this task beautifully, thus our expectation that all members would make the summit became more and more intense.

Members were divided into two five-member attack parties and waited for an opportunity until May 5th, forty-five days after we had begun climbing.

The Ascent to the Summit

On May 15th at 3:40 a.m. the five members (Tanigawa, Akasaka, Okuda, Hirose and Shiina) of the first ascent party left C4. Each member took oxygen (0.5 liter) the previous night before they slept. Thought deep sleep was impossible, they could sleep anyway and ate a substantial breakfast thanks to that oxygen.

Using headlamps they advanced in the dark, and by the full daylight, they were already at the entrance of a couloir. A three-pitch rope was fixed for further climbing and a two-pitch rope was fixed to be used on the descent.

The weather was fine but there were lots of clouds and occasionally snow fluttered in the air. It was not going to be an ideal day for attempting the summit. After we passed a couloir, we encountered an uneven snowfield with some frozen icy parts hidden under the snow. We became very cautious as we advanced through the snowfield. We were almost tempted to use rope, but we managed not to use it and hurried forward.

At 10:15 we crossed an unstable snow wall and came to the West Col. At this height, breathing was very difficult and our bodies felt as heavy as lead. But we reached this point earlier than scheduled, so we took a long rest.

Then Tanigawa and Shiina, who had arrived there earlier than other members began to fix the route. The two ascended a steep wall of rock and ice on the side of the Yalung Glacier trying to find a route. It was their first time to see this Glacier. They climbed the wall, dragging their tired bodies heavily. The condition of the snow on the wall was unstable; at some places it was soft, and at other it was frozen. It was

not easy to find an appropriate route under such conditions.

Three pitches for the last fifty meters brought Tanigawa to the summit at 13:30. At 14:20 Hirose, who brought up the rear, reached the summit. All five members of the first party stood on the top of Kangchenjunga and shared the pleasure of a successful ascent under a big blue sky dotted with clouds. The weather was calm with no wind.

After taking photographs for the records, we began to descend at 15:00. It would take four hours to return to C4, and the party wanted to reach the tent before we needed to use a headlamp.

Just after the party began to descend, Shiina's physical condition, which had been regarded as being the best among all members of the expedition, became extremely bad, and he could walk only at a very slow pace. At the same time the weather began to deteriorate as dusk approached. It became difficult to find the route. Five members tied themselves together and began to descend.

At 22:00 Shiina became unconscious. We tried to awaken him only to fail. Tanigawa had to bivouac with Shiina, and Akasakaa, Hirose and Okuda continued their descent to C4.

At about 3:00 the next day Tanigawa confirmed Shiina had died. The three members who had descended strayed, became separated and were lost. Hirose alone was able to return to C4.

At around 5:00 Tanigawa left the spot he had bivouacked and joined with Akasaka who was injured and looked terribly exhausted. He might have fallen down somewhere. A transceiver contact came in from Okuda who had lost his sight because of hight altitude disorder and was waiting for help at an unknown spot.

At 9:30 just after Tanabe from C3 joined Tanigawa, Akasaka was spent and passed away. Tanabe, Hirose, Yamamoto and Nagakubo continued their search for Okuda.

At 16:00 Okuda was rescued safely. Yamamoto and Nagakubo returned to C3 and Tanigawa, Tanabe, Okuda and Hirose stayed C4.

On May 19th Tanigawa, Okuda and Hirose who were frostbitten were picked up by a helicopter at C1 and flew back to Kathmandu. From there they boarded a direct flight to Kansai International Airport that evening.

On May 23rd the Headquarters at home decided to have the rest of the members including Tanabe return to Kathmandu by helicopter together with Nepalese staff. Thus the expedition ended.

Acknowledgment

After the accident, thanks to the warm co-operation and quick reactions and

medical treatment of the local Nepalese staff, Cosmo Treck (the agent), the Japanese Embassy in Nepal, Headquarters at home and many other kind people, the three frostbitten members were able to return home quickly just five days after they made the summit. They healed with only slight physical damages. We are very grateful to those people for their kind help and co-operation.

Members
Leader Taro Tanigawa (30)
Vice leader Kenzo Akasaka (29)
Other members
Masakazu Okuda (31)
Osamu Tanabe (29)
Shigehisa Yamamoto (29)
Koji Nagakubo (29)
Kenta Hirose (29)
Atsushi Shiina (27)
Kazusada Nakamura (24)
Ryuhei Ohashi (24)

The Solo Ascent of Mt. McKinley in Winter

Masatoshi KURIAKI

February 13th, 1998. I was standing alone on the dark Kahiltna Glacier. Because daylight is short and the sun's position low in winter, no sunshine reaches Kahiltna Base Camp (2,130 m) during winter. The weather was fair with a weak southwest wind, temperature at −20°C. I could hear the sound of an avalanche occuring at the Northeastern Wall of Mt. Foraker.

This was my second time to see the South Peak of Mt. McKinley (6,194 m). It was only a year since I last saw it, but looked up toward the Summit with acute nostalgia.

I had learned from my last year's experience and prepared about two months for this year's climb. The extension of the climbing period necessitated an increase in supplies, and the load (food, fuel and equipment) weighed 100 kg. I had to carry the heavy load entirely by myself.

February 15th, at 8:00 p.m. at BC (2,200 m). The weather was fair, with a gentle

wind from east-northeast, temperature at −25°C. I stuck my face out of the tent and looked up at the night sky. It was different than the sky in summer with its midnight sun. Though I couldn't see the aurora which I was looking forward to seeing, the sky was a vast treasure house of shimmering stars and meteors.

February 22nd at 9:00 p.m. at C3. The weather was fair with a medium wind from east-southeast, temperature at −20°C.

I toiled with my load to C4 (3,340 m). It was so cold (−25°C) with the wind against me that I had to warm my hands and feet every ten minutes as I climbed. I saw wisps of snow rising at the top of Mt. McKinley and the wall of Mt. Foraker. I surmised that a strong southeast wind was blowing up there.

February 26th at 7:00 p.m. at C4 (3,340 m). It was snowing lightly with dense fog and a medium west-southwest wind, temperature at −33°C.

Because of poor visibility, I had been staying at C4 for the past four days. Just above my camp I expected to encounter three or four hidden crevasses. I had to be careful in moving under such white-out conditions. When the weather deteriorated last year, I had to stay five nights. So, I judged it would be best to be patient. The radio reported that the weather at Anchorage was recovering that morning.

March 1st at 8:00 p.m. at C5 (3,700 m, a grotto in the snow). The weather was fair, with an east-southeast wind, temperature at −28°C.

The weather was fair enough to carry my load to C6 (4,300 m, another grotto in the snow). Two crevasse belts just under the Windy Corner (4,000 m) laying almost at the same place as the previous year, and I could pass them without trouble. I left red flags at those crevasses. From there up to C6 there were numerous crevasses or hidden crevasses. On my way up, I stepped through a hidden crevass and was scared to death. It was a hard climb ploughing through deep snow carrying a load over 40 kg.

On March 3rd at 7:00 p.m. reached C6 (4,300 m, another grotto in the snow) safely. It was cloudy and the direction of the wind was unstable, temperature at −26°C. Yesterday the wind was strong enough to erase the trace. So, I had to walk forward ploughing hard in the snow. On my way dense fog occurred and it began to snow a bit. I encountered a blizzard just before C6. I couldn't see Mt. McKinley above 5,000 m because of dense fog. It took three hours and a half to make a strong two-meter high grotto. My left toe had severe chilblains.

March 5th at 8:00 p.m. at C6 (4,300 m, in my snow grotto). The weather was fair, with a weak north wind, temperature at −26°C.

I climbed West Buttress carrying a load to a 5,050 m point on the West Ridge. The wind was weak on the West Ridge. It was an ideal day to challenge the summit. I climbed the ice wall just below the shoulder of West Buttress using double ax

technic.

March 6th at 11:00 p.m. at C7 (5,200 m, another grotto in the snow). The weather was cloudy with a medium soultheast wind, temperature at −30°C. I had finally reached my attack camp.

The weather was fair in early morning, but clouds began to rise at around 9:00 a.m. around the summit. Fortunately the turbulent air stream and dense fog at the top didn't come down to the West Ridge. So, I could continue my ascent. If there were a sudden change in weather while I was attempting to reach the summit, the result might be fearful. Just the thought scared me.

At the crevasse zone, the lower part of the ice wall I fixed an 8 mm-diameter rope for 40 merters. I just passed the depot spot, and ascended to the site of C7, where I looked for an appropriate place to set up the attack camp. Then, I came back down to the depot spot to fetch my load, which I safely restored and carried to C7.

Because the snow and ice were hard, it was very difficult to make a grotto at C7.

March 8th at 7:50 a.m., 24th mornings after I began the climb. I left C7 heading for the summit. The weather was fair with a gentle south wind, temperature at −27 °C.

I'd noticed several ominous signs that predicted a deterioration in the weather as I left attack camp: the morning glow, a Brocken phenomenon, sheer hovering of the clouds at the south side of the summit.

I began my traverse for Denali Pass (5,500 m). I was in a cold sweat as I passed three hidden creavasses on the way. After an hour and forty minutes, I passed Denali Pass as I had scheduled. A south wind became stronger gradually, which reminded me of the clouds I saw at the south side of the summit in the morning. The sight made me nervous.

After I climbed the last part of the Ridge leading to the South Peak passing a vast plateau at 5,900 m level, four hours had already passed since I began my final ascent. Now the ominous south wind was sending gray clouds toward not only the top but also toward its south side and even the North Peak of Mt. McKinley. A white veil covered them. It was easy to judge that the weather was deteriorating. To continue the ascent or not, that was the serious question. "Hurry, The summit is so close to you" I said to myself, while another self tried to persuade me "Be calm! If you are surrounded by dense fog at the top, you would have to bivouac there which could lead to your death." I compared the speed of my climbing with the speed of the weather deterioration. I also took into consideration the visibility on my way down after making the summit.

I made up my mind to go. Because of the severe cold, the right lense of my eye glasses, where the frame had broken while I was digging a grotto at C7, was frozen

with frost on it. I managed to pass a zone of hidden crevasses just under the Ridge leading to the summit with only left eye visibility. When I cleared the last big cornice, the figure of the Mt. McKinley's South Peak came into view.

I reached the summit at 1:06 p.m. on March 8th. The weather conditions were dense fog, strong south wind, temperature at −37°C, atmospheric pressure 466 hectopascal.

南アルプス林道の現状と課題

—開業から18年、繰りかえす崩壊と補修—

岡　澤　修　一

明治大学エコロジー研究会は、南アルプス林道および周辺地域の地形、植生、気候調査と人文地理的調査を1975年（昭和50年）から続け、その中でこの地域では凍結融解作用による道路法面の崩壊、さらにそれに伴う森林破壊が著しいことを指摘、1984年（昭和59年）に、細田　浩氏が「山岳」第79年に「山岳と山村の変貌」と題して弊害を発表したが、その後15年間にわたり何の改善策もとられていない。

本稿は、その後の研究成果を世に問う続編であるが、日本の林業の殆どが経済的に成り立たない現状では南アルプス林道に限らず林道の大部分が本来の林業振興に役だっておらず、崩壊と自然破壊の温床となっている。

南アルプス林道も白峰三山、甲斐駒、仙丈岳へ登るためのバス道路となっているが、たとえば1989年（平成元年）の長野県側長谷村村営バスの運賃収入は2,707万円、林道管理費2,142万円、同年の長野県側林道補修費は7,617万円、差し引き7,052万円の赤字である。その補修工事が山村に与える経済効果をあげる向きもあるが、長谷村の人々を潤すのは、労賃などほんの一部に過ぎない。この20年の間に長谷村の人口が4分の3に減少していることこそ、この事業が山村振興に殆ど役に立っていないことを証明している。明大エコロジー研究会が粘り強く23年間にわたり、調査研究を続けてきた命題は、自然破壊を伴わない、しかも山村振興策として、もっと効率のよい公共事業の方策はないか、を世に問うているように思える。（山岳編集委員会）

はじめに

南アルプス林道（当初はスーパー林道）は山梨県中巨摩郡芦安村と長野県上伊那郡長谷村を結ぶ全長57.6 km、道幅4.6 mの多目的林道である。林野庁の事業で森林開発公団が1967年に着工した。しかし全体の97%が完成し、国立公園の第一種特別地域に指定されている北沢峠付近（1.6 km）の工事が始まる段階になって、自然保護団体や有志による建設反対運動が高まり、1972年に工事が中断された。1974年には国会において建設中止の請願が採択されたが、森林開発公団は計画を進めた。我々は明治大学エコロジー研究会（明治大学の大学院生と学生を中心とする）として1975年より林道及びその周辺地域の地形、植生、気候調査、また人文地理的調査を進め、反対意見を表明

した（生井・中村、1978. 細田、1978）。

当時、我々が反対した理由は、①開通によって、崖崩れや植生の枯死などで貴重な自然環境が破壊される　②林業や山村振興の役には立たない　③斜面の崩壊が多く危険であるうえに維持に金がかかる、という点であった。一方、この計画を推進する側の主張は　①林業経営と治山管理が容易になる　②植生は立派に復元し、災害はない　③行き止まりの道路を山梨、長野両県に通すことで過疎対策と地域振興に結びつく、というものであった。反対の議論の多くが、自然破壊を懸念するものであったため、特に②が強調されていた。また反対論者の多くが、外部の都市生活者であったため、③の立場も強調されていた。

このような中で、1975年に環境庁は自然環境保全審議会に意見を求めた。審議会は結論を出すことができず、1978年に賛成・反対の両論を併記した意見書を提出した。建設反対の世論が高まる中で工事は再開され、1980年6月に林道は開通した。しかし、林道主要部の広河原―北沢峠―戸台大橋間は一般車両の通行は禁止され、登山者や観光客は芦安村と長谷村が北沢峠まで運行するマイクロバスを利用することとなった。また林道開設の目的に反して、林業関係車両の通行も少なく、工事用車両の利用が著しく多い道路となった。1982年と1983年には林道は台風によりズタズタに損壊し、マイクロバスの運行もストップした。

我々はその後も調査を続け、細田浩は「山岳」第79年（1984）において林道沿いの地形・気候・植生の状態と長谷村の状況を報告している。そこではこのような自然破壊を繰り返したくないという強い姿勢が見られる。しかしその後も日本各地で自然破壊が繰り返されてきた。そこで我々は今一度この地域で調査を行い、この林道が我々にもたらした警告を総括し自然保護について考えてみた。

南アルプス林道の現状

我々は南アルプス林道の現状を捉える目的で、1997年7月、8月、11月、12月、1998年3月、5月、8月にマイカーの乗り入れが禁止されている広河原―北沢峠―戸台大橋間の南アルプス林道沿いで現地調査を実施した。また、長谷村での聞き取り調査も行った。林道沿いの調査結果をまとめたものが図1である（植生の状態は主として細田浩・松永和子によってまとめられた）。

1. 林道沿いの植生の状態

山梨県側では広河原より約1kmほど上流の西広河原沢付近（標高1600m）で、ブナなど落葉広葉樹林からシラビソ、コメツガなどの亜高山帯針葉樹林に変わる。写真1は山梨県側、標高1700m付近の林道の状態である。写真の左手（野呂川右岸）は急斜面だが針葉樹林に覆われ、崩壊は見られない。これに対して林道のある写真の右手（野呂川左岸）、特に林道の下方は植生のない砂礫地となっている。この付近は林道建設後、30年ほど経っており、一部では保全のために植えられたカラマツが見られるものの、大部分が砂礫地となっている。砂礫の移動がなければ、森林もしくは草地になっている

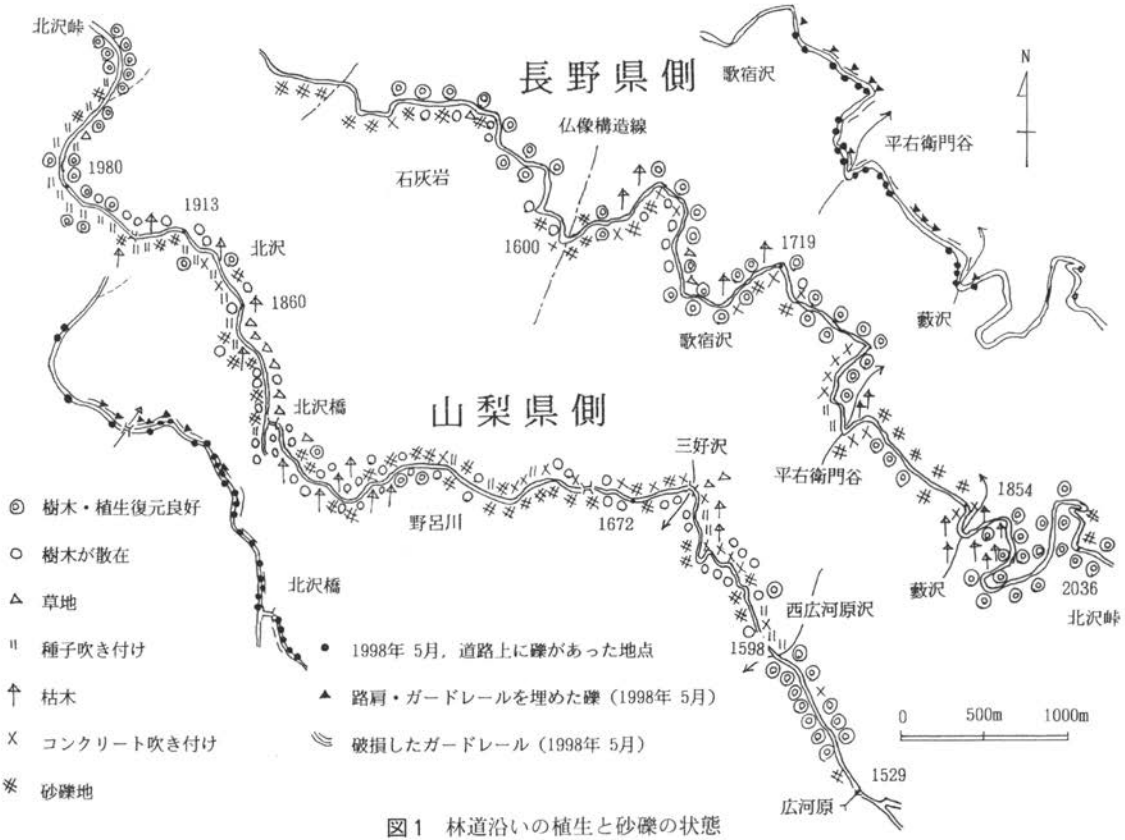


図1　林道沿いの植生と砂礫の状態



写真 1　山梨県側、標高 1 700 m 付近の林道。写真の左手（野呂川右岸）は急斜面だが針葉樹林に覆われ、崩壊は見られない。これに対して林道のある写真の右手（野呂川左岸）、特に林道の下方は植生のない砂礫地となっている



写真 2　長野県側、標高 1 800 m 付近、平右衛門谷北方の林道

はずであり、20年前の植生の復元はみごとに進んでいるという林道推進派の主張に反して30年間の努力にもかかわらず砂礫の移動が止められないことを示している。そのため建設省富士川砂防工事事務所では、西広河原沢付近に「砂防ダム」としての広河原第二ダムを建設中である。この「砂防ダム」工事の説明文の中で建設省自らこの地域は非常にもろい地質であり、河川は急流でさらに降水量も多く、土砂災害の多い地域であることを認めている。これは我々がこの点でこの林道が自然破壊になると主張していたものである。この砂礫地は標高1 600 m以上の亜高山帯で目につき、1 600 m以下の落葉広葉樹林帯では植生の復元は良好である。

長野県側でも標高1 600 m付近で落葉広葉樹林から亜高山帯針葉樹林に変わるが、国有林から外れるおよそ標高1 400 m付近以下の所は、ほぼ全山カラマツの造林地となっている。写真2は長野県側、標高1 800 m付近、平右衛門谷北方の林道の状態である。山梨県側に比べて林道の下方でも樹木が見られ安定しているようにみえる。しかし樹木の間の谷状の所は砂礫地になっており、植生が着いていない。また手前には枯木が見られる。さらに非常にもろい基盤岩の法面はコンクリートの吹き付けによって落石を防いでいるが、この写真の所ではほぼ法面全体がコンクリートの吹き付けになっている。これによって現在は法面からの砂礫の生産は抑えられているが、春先にはコンクリートの剥がれもみられる。長野県側が山梨県側に比べて安定しているようにみえるのは、標高1 600 m以上の亜高山帯の区間が短いことと共に、地質が反映していると考えられる。古生層と中生層の境界をなす断層線である仏像構造線より東側の地域は中生代の四万十帯と呼ばれる地域だが、このうち北沢峠より西側の長野県側は砂岩を主とする仙丈岳帯、東側の山梨県側は粘板岩を主とする北岳帯となる。小泉武栄は『山の自然学』(1998)の中で北岳～間ノ岳間の地形と地質の関係にふれている。その中で、泥岩や粘板岩は現在の高山帯の気候で風化がすすみやすく、凍結破砕作用を受けて崩れやすいと述べている。松岡憲知と上本進二は日本アルプスの主稜線部で詳しい調査を行い、起伏と岩質の関係を明らかにした。それによると、起伏は岩盤中の節理の発達程度(密度・結合度)に対応し、突出部ほど節理の発達が少ない。例えば、赤石山脈の堆積岩地域では、チャートや砂岩などの節理の発達が少ない岩石が突出部を構成し、節理の発達の著しい頁岩が鞍部を構成するという対応関係を見出した。また凍結破砕作用が卓越する現在の日本アルプスの高山地域では、凍結破砕作用に対する抵抗性の大きさは、主として岩盤中の節理の発達程度に依存するので、現在の凍結破砕作用の進み方は、現在みられる稜線上の起伏の状態と調和的であり、組織地形がより際立つと述べている。林道沿いは高山帯ではなく亜高山帯であるが、林道建設によって亜高山帯針葉樹林が剥された所では凍結破砕作用が卓越し、高山地域と同様な岩質と崩壊地の関係が認められる。このことが砂岩を主とする長野県側と粘板岩を主とする山梨県側の植生の状態の違いに反映していると考えられる。なお仏像構造線の西側は石灰岩、その西側はチャートになる。北岳・塩見岳・悪沢岳などはチャート・火山岩層よりなり、周囲より突出した山頂部を構成している。

北沢峠付近は斜面の傾斜が緩やかであり、また林道建設反対運動の影響もあって、植



写真 3　北沢峠の長野県側、標高 2 000 m 付近、国立公園第一種特別地域の林道
上は 5 月、下は 8 月の同じ地点、5 月にあった砂礫は取り除かれ、崩壊地は補修されている





写真 4　北沢峠の山梨県側、標高 2 000 m 付近の第一種特別地域を外れた林道
上は 8 月、下は 3 月の同じ地域、3 月では凍結・融解による砂礫の移動が進行し法面上部の樹林にもおよんでいる



生の復元は良好である。写真3は北沢峠の長野県側、標高2 000 m付近の国立公園第一種特別地域の林道の状態である。上は5月、下は8月の同じ地点の写真だが、5月にあった砂礫は取り除かれ、崩壊地は補修されている。11月の調査でこの地域で霜柱による砂礫の移動を確認しているが、この状態では凍結・融解による砂礫の移動が進行し法面上部の樹林にもおよぶと考えられる。写真4は北沢峠の山梨県側、標高2 000 m付近の第一種特別地域を外れた林道の状態である。上は8月、下は3月の同じ地域の写真だが、3月では凍結・融解による砂礫の移動が進行し法面上部の樹林にもおよんでいる。マイクロバスが運行される夏には砂礫は取り除かれ、林道は補修されているので、凍結・融解による大量の砂礫の移動が毎年繰り返されていることは登山者や観光客には隠されている。

2. 林道沿いの砂礫の状態

高山地域において凍結融解作用により砂礫が移動することは良く知られている（岩田, 1997など）。この地域でも松岡憲知が間ノ岳で1980年代はじめより詳しい調査を続けている（松岡、1991. 1992など）。松岡の地温観測によると間ノ岳山頂付近（標高2 925 m）では、10月から5月にかけて0°Cをはさむ上下変化（凍結・融解サイクル）が頻繁に発生し、とくに10月下旬～11月下旬、5月中旬～6月上旬にその頻度が高いという。3月下旬～5月上旬に地温の日較差が極めて小さくなるが、積雪が15 cm以上あると地中凍結がほとんど進行しなくなるので、これは積雪が15 cm以上あったためと考



写真5 山梨県側、標高1 800 m付近、北沢橋下流（3月26日）

えられている。また松岡は岩壁温度の観測により10月から5月にかけて凍結・融解サイクルが頻繁に発生すると報告している。岩壁は積雪に被われないので4月は凍結・融解サイクルが頻繁である。また陽のあたらない北東向き岩壁では1月～4月には凍結・融解がおきていない。林道の標高は間ノ岳山頂付近より1 000 mほど低いので11月から5月上旬に凍結・融解サイクルが頻繁に発生することにともなう砂礫の生産移動が予測された。そこで11月下旬、3月下旬、5月上旬、中旬、下旬に砂礫の状態を調査した。5月の状態を図1に示す。

11月下旬には霜柱の発達とそれによる礫の移動が見られたものの、林道上に目立つような礫はみられなかった。写真5は山梨県側、標高1 800 m付近、北沢橋下流の3月下旬の林道の状態である。3月下旬の山梨県側の林道は北沢橋付近より上流では道路も法面も積雪に被われている。しかし南向き斜面となる北沢橋下流や写真4の地点では法面は雪がなく、砂礫の移動がみられる。写真5の地点では午後になると融解が進み落石が頻発していた。粘板岩を主とする山梨県側の林道沿いの植生の状態が北沢橋の上流と下流で異なり、下流側では砂礫地が多く不安定となっている。この原因として下流側は南向き斜面で積雪に被われている期間が短く、それだけ凍結・融解サイクルが頻繁に発生して砂礫の生産と移動が多いことが考えられる。写真6は長野県側、標高約1 850 m、平右衛門谷の3月のものである。雪崩のデブリが谷を埋めている。ここでは底雪崩による砂礫の移動もある。長野県側の林道も標高1 800 m付近より上部では道路も法面も積雪に被われていた。標高1 800 m付近より下部で岩壁が露出している所では小規模だが



写真6　長野県側、標高約1 850 m、平右衛門谷（3月27日）

岩壁から落下した砂礫の堆積が見られた。

昨年までは山梨県芦安村、長野県長谷村の村営マイクロバスは6月15日から11月5～15日まで運行されていたが、今年（1998年）は長谷村の村営マイクロバスは4月25日より歌宿（標高約1 700 m）まで運行されるようになった。また5月の連休には北沢峠の山小屋は営業しており、関係する車が北沢峠まで入っている。3月下旬に歌宿まで除雪されていたが、今年は4月に入って急速に消雪が進み、5月には林道に雪はほとんど見られなかった。このため5月には長野県側の林道は良く整備されていたが、春先の凍結融解作用による砂礫の生産と移動をみることができた。写真7は北沢峠の長野県側、標高2 030 m付近の状態である。車が通れるように砂礫が片づけられているが、金網が掛けられた法面より凍結融解作用により砂礫移動があったことがわかる。写真8も長野県側、標高約1 800 m、写真2と写真6の中間付近の林道の様子である。ここでは法面から落下した砂礫が道路脇に集められている。写真9と写真10はいずれも長野県側、標高1 870 m付近、藪沢と平右衛門谷の間の林道の状態である。凍結融解作用による砂礫の移動は法面だけでなく、道路下方でも発生し、路肩の崩壊、ガードレールの破損につながっている（写真9）。ガードレールの補修は夏の間に行われ、新しくなっているが、5月の時点では図示したように、多くの所で破損がみられる。その原因としては、上記の道路下方での凍結融解作用による砂礫の移動のほかに、法面からの落石、雪崩や雪の緩慢な移動も考えられる。写真10では路肩に砂礫を積み上げて、ガードレールが機能していない様子がみられる。毎年生産される砂礫でガードレールが埋もれてしまった箇所や路肩に砂礫を積み上げてある箇所も多くみられる。山梨県側では砂礫が舗装道路の上を覆い非舗装の道路のようにみえる箇所もある。これらは道路工事の時点では無造作に道路下方に捨てられていた砂礫が自然破壊や土砂災害につながるとの批判を受けて下方投棄ができなくなったこともあるが、それだけ砂礫の生産が多いことも示している。また工事中からの砂礫の下方投棄で砂礫が堆積している所の多くは、北沢の北沢橋上流部のように、現在も砂礫の移動する砂礫地となっており植生は回復していない。

写真11はほぼ写真5と同じ地点、山梨県側、標高1 800 m付近、北沢橋下流の5月上旬の林道の状態である。中径約2 mの巨礫が道路を塞いでいる。長野県側では中礫（粒径4～64 mm）・小礫（粒径2～4 mm）が多いのに対して、山梨県側では大礫（粒径64～256 mm）や巨礫（粒径256 mm以上）が目につく。写真12は山梨県側、標高1 950 m付近の5月上旬のものである。1997年の秋に補修された法面が1年で崩壊している。

山梨県側については下川和夫が1976年7月に法面の状態を調査してルートマップを作成している。我々は1997年7月に同様に調査を実施し、20年を経た林道の状態を比較検討した。その一部を図2に示す。図2によると5月に道路上に砂礫があった地点は二つのタイプがある。一つは基盤岩の所で破砕帯などの節理密度の高い所で、20年前にも落石がみられた所である。特にもろく落石の多い箇所はコンクリートが吹き付けられていたが、そこでも落石がみられた。もう一つは崖錐でこれも20年前にも崩壊があった所である。また落石によると思われるガードレールの破損があった。砂礫でガードレー



写真 7　北沢峠の長野県側、標高 2 030 m 付近（5 月 4 日）



写真 8　長野県側、標高　約 1 800 m 付近（5 月 23 日）



写真 9　長野県側、標高 1 870 m 付近（5 月 4 日）



写真 10　長野県側、標高 1 870 m 付近（5 月 4 日）



写真 11　山梨県側、標高 1 800 m 付近、北沢橋下流（5 月 4 日）



写真 12　山梨県側、標高 1 950 m 付近（5 月 4 日）

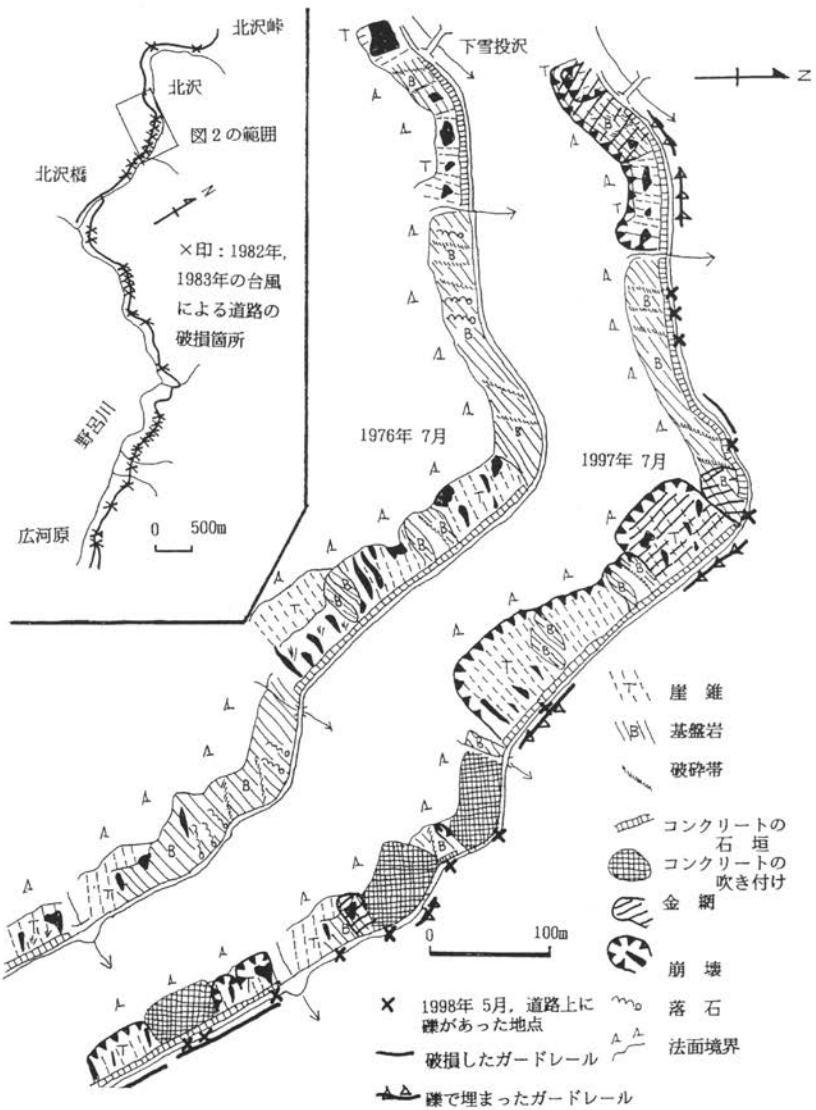

北沢峠
北沢
図2の範囲
北沢橋
×印：1982年，
1983年の台風
による道路の
破損箇所
野呂川
広河原
0 500m
下雪投沢
1976年 7月
1997年 7月
N
崖 錐
基盤岩
破砕帯
コンクリートの
石 垣
コンクリートの
吹き付け
金 網
0 100m
崩 壊
落 石
法面境界
1998年 5月，道路上に
礫があった地点
破損したガードレール
礫で埋まったガードレール

図2 法面の状態

ルが埋められている箇所がいくつかあるが、これらはいずれも崩壊のみられる崖錐の下である。これらの崖錐は斜面上方にむかって崩壊地を広げている。この崩壊の原因は凍結融解作用だけではなく、夏期の豪雨も関与していると考えられる。さらに 1982 年、1983 年の台風による道路の破損箇所を図示したが、その多くは沢が道路を横切る所であり、凍結融解作用による砂礫の移動や崖錐の崩壊とは異なるタイプの崩壊が多い。

凍結融解作用による砂礫の移動が林道におよぼす影響については、細田浩によっても強調されていたが、今回の調査でさらにそのことが確認された。林道の今後を考える時この点を充分考慮する必要がある。

南アルプス林道と長谷村の現状

生井貞行と内田博幸は長谷村での聞き取り調査をもとに、南アルプス林道の利用状況と長谷村の変容をまとめ、林道の「効果」について考察している。彼らの調査をもとにしてこれらの点について簡潔に報告する。

1. 南アルプス林道の利用状況

1) 利用車両

図 3 は長野県側の資料だが、それによると 1981 年を除いて工事用車両の利用が著しく多い。それはいままで述べてきたように、春先の凍結融解作用、夏期の豪雨・台風などによる林道の崩壊が頻発し、補修工事なしには林道が維持できないためである。次に多いのは観光用の村営マイクロバスである。林業経営を担う営林署や林業作業用車両の通行は僅かである。つまり南アルプス林道は林業経営に比重が置かれた林道ではなく、観光マイクロバスを運行するために、終わることなく工事をし続ける「金喰い」道路である。

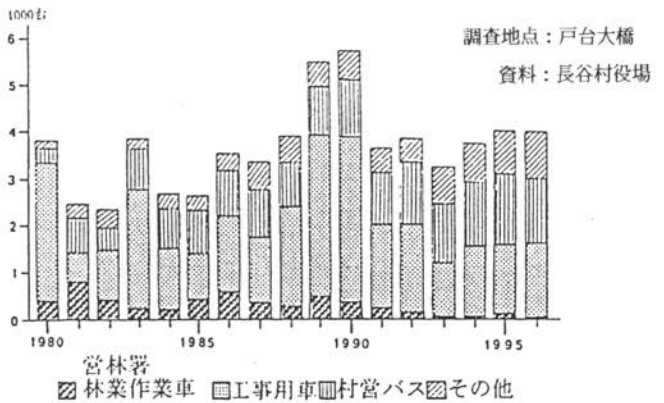


図 3　南アルプス林道通行車両台数（往路）

2) 村営バスの運行状況

図4は長谷村、図5は芦安村のバス乗車人数の推移である。1982年と1983年は台風で道路が損壊したため乗車人数は落ち込んだ。長谷村では最近は旅行業者によるバスツアー（長谷村側のマイカー駐車場がある、長谷村村営仙流荘まで大型観光バスでやってくる）や地元伊那谷の学校関係の登山教室などの利用により乗車人数は増加し、約4万人（1994年以降）ほどになっている。

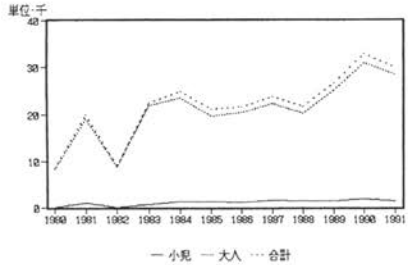


図4 長谷村営バス乗車客数の推移

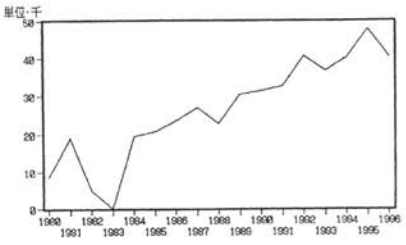


図5 芦安村営バス乗車客数の推移

長谷村の村営バス事業は企業会計として行われている。運送収入は約2,707万円（1989年度）である。また林道の管理は一般会計で行われており、1989年度の林道管理予算は2,142万円、林道補修予算は7,617万円であり、村営バス事業との収支決算では比較にならないほど林道管理・補修予算の額は高い。

2. 長谷村の変容と林業の展開

1) 人口と地区の変化

林道が開通した1980年当時の長谷村の人口は2,724人であったが、年々減少し、1996年には2,357人となり23.5%の減少をみた。人口減少が著しい地区として浦がある。浦の人口は1980年の50人から1996年には16人に（減少割合60.8%）、世帯数は同じ期間に15から9へと減少した（減少割合40.0%）。また林道が開通する以前はJRバスの終点で南アルプス登山の基点であった戸台では1980年当時四軒の山荘と一軒の食堂が営業していた。林道開通後JRバスは廃止され、現在は開店休業状態の一軒の山荘があるのみになった。戸台の人口は1980年の30人から1996年には14人に（減少割合53.3%）、世帯数は同じ期間に10から6へと減少した（減少割合40.0%）。

2) 長谷村の林業経営

素材生産量の推移（図6）を見ると、年々生産量は減少している。1978年は林道建設工事での樹木の伐採により生産量が多くなったと考えられる。森林組合の作業員は1980年の61人から1997年には35人に減員した（減少割合57.0%）。

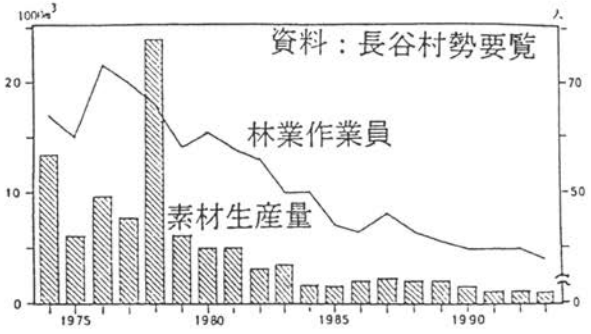


図6　長谷村における素材生産量と林業作業員数の推移

3.　南アルプス林道の「効果」

森林開発公団や地元市町村が結成した「南アルプス林道推進協議会」は林道の開設は地域の振興にも、林業の振興にも大きな効果があると述べている。自然破壊というマイナス面を過少に評価し、地域振興、林業の振興とのプラスの効果を過大に評価して建設を推進してきた方々は、林道開通後の林道と長谷村の状況をどうみているのだろうか。林道建設事態が目的ではじめから効果については期待していなかったのか。そう考えなければ開通後すぐに期待とは反対の方向に状況が進行していく理由が説明できない。プラス面としては村営バスの利用者増加・観光客の増加が地域振興につながるという点があるがそのために自然破壊が進行し，林道管理・補修工事に多額の税金が注ぎ込まれるというマイナス効果はあまりにも大きい。

おわりに

南アルプス林道は毎年補修工事が行われているが、毎年多量の砂礫が生産され移動し林道上の砂礫を取り除くという、人為的な砂礫の再移動によって、新たな砂礫の生産を促している。また本来の林道という役割はほとんどはたされていない。観光道路としての役割がみられるが、そのために毎年多額の税金が注ぎ込まれている。さらに現在のように、村営バスが北沢峠と麓の間を往復するのみで、峠を通過する車両がないという林道の利用形態ならば、あえて国立公園第一種特別地域を通すことはなかったのではないか。高山地域の自然については、まだまだ知られていることは少ない。より確かな科学的な自然の認識に立った自然破壊を食い止める対策を早急に考える必要があるのではないだろうか。

参考文献

岩田修二（1980）：白馬岳の砂礫斜面に働く地形形成作用、地学雑誌 89-6
岩田修二（1997）：自然環境とのつきあい方1、山とつきあう、岩波書店

河内洋佑・湯浅真人・片田正人（1983）：市野瀬地域の地質、地域地質研究報告（5万分の1図幅）、地質調査所
小泉武栄（1998）：山の自然学、岩波書店
生井貞行・中村恵子（1978）：南アルプス・スーパー林道と長谷村、地理 23-6
生井貞行（1985）：続・南アルプス林道と長谷村、地理 30-10
長谷村編（1975）：南アルプス・スーパー林道早期完成の訴え
長谷村（1997）：長谷村村勢要覧
細田浩（1978）：南ア・スーパー林道に反対、朝日新聞・論壇、1978年6月3日
細田浩（1984）：山岳と山村の変貌―南アルプス・スーパー林道が示すもの、山岳第79年
細田浩（1998）：南アルプス林道20年の教訓、朝日新聞・論壇、1998年8月7日
松岡憲知・上本進二（1984）：日本アルプス主稜線部の組織地形、地理学評論 57-4
松岡憲知（1991）：赤石山脈の高山環境における地温の通年観測、地形 12-1
松岡憲知（1992）：凍結融解作用の機構からみた周氷河地形、地理学評論 65-2
三沢功博（1978）：南ア・スーパー林道に期待、朝日新聞・論壇、1978年6月17日
林野庁編（1975）：南アルプス・スーパー林道概要



田部重治　略年譜

西暦	元号	年齢	主な事柄および山行	主な著書・訳書の刊行
	明治			発刊書の符号
1884	17	0	8月4日　富山県上新川郡山室村字東長江（現富山市長江）の地主南日喜平・ミンの三男（男5人，女7人のうち第8子）として生まれる（注2）。40戸ほどの小さな村で，約3分の1が南日姓であった	☆印　初出著書または初出篇の多い著書 ★印　編著 ※印　訳書 □印　既刊書を選択し，増補，削除を加えて再録した選集 ♣印　既刊のもので叢書の一冊 ・印　『山岳』への寄稿
1891	24	7	・小学校に入学するまで2度も医者に見放されるほどの重病にかかる。高等小学校2年ごろから健康を損なって，秋になると滑川から2里ほど山へ入った大崎野村の農家で、母の実家である石坂家へ転地療養に出かけた。大日岳の麓の山村で毛勝三山がよくみえる村である。その頃『八犬傳』や討伐物語をよく読む ・中学入学するためには高等小学校2年を終了していなければならない。病気のため半年以上も休学したため村の高等小学校2年に入り数日の授業を受けてから終了試験を受けた	
1897	30	13	・富山県立富山中学校入学。中学では心臓が悪く医師より無理な運動は禁止された	
1898	31	14	5月　中学の漢文の先生で，数カ月の草鞋旅行など先駆的な登山を行った破天荒な登山家小杉復堂から金沢へ6泊の遠足に出かけた時、白山のことや山の話を聞く	
1899	32	15	・夏　長兄南日恒太郎（重治より13歳年上，後に英文学者となる）が芝区にある正則中学の教師になっていた関係ではじめて上京した。富山から岩瀬まで父と2里歩き、岩瀬から直江津まで汽船に乗って東京へ向かった	
1900	33	16	・中学では，学科で英語，国語，漢文に興味をもつが，心臓が悪いため体操は不得意で，5年間競争者としての運動会には出場していない ・この頃から『文庫』『新聲』『明星』『文學界』『帝國文學』などを読みはじめ，短歌・新体詩を作って文学雑誌などに投稿したり，同人雑誌も出した ・『文庫』の小島烏水の紀行文，特に『扇頭小景』を最も愛読した。その他幸田露伴の『枕頭山水』や久保天随，大町桂月，田山花袋の紀行文などに興味をもった	
1901	34	17	・将来国文学をやろうと志していたが，『明星』『帝國文學』などを読んでいるうちに，英文学を専攻しようという気持に変わり，中学5年頃には決定的なものになった	

1902	35	18	3月　富山中学校卒業 3月頃　母ミンが肺結核にかかっていることがわかる 9月　金沢の第四高等学校入学。次兄田部隆次（重治より9歳年上，後にラフカディオ・ハーン研究で知られる英文学者）の紹介により西田幾太郎教授が塾長の「三三塾」（寄宿舎のようなところ）に入塾する ・次兄隆次と山に登っている先駆的登山家で英語の教授林並木から縷々山の話を聞く（注3）
1903	36	19	・母がすすめてくれた親類筋の田部家との養子縁組がきまる 5月4日　母ミン病没。重治には大きな心の痛手となり肺炎カタルにかかる ・母の死後，叔母（母の妹）が継母として南日家の世話をやいたが，叔母も翌年秋に病気で死亡
1905	38	21	6月1日　許嫁である田部家の次女エイが肺結核のため17歳で急逝した 7月　第四高等学校卒業 7月　2人の兄，恒太郎，隆次が重治の失望を慰めるため，富山から神通川，高原川沿いに高山までの旅を行う。重治にとっては，はじめての旅であった 8月　大学入学のため上京し，長兄恒太郎（正則中学から三高の教授となり，後に学習院の教授となった）のいる大久保の家に滞在した 9月　東京帝國大學英文科入学。教授に夏目漱石，上田敏，級友に一高出身の中勘助，野上豊一郎，山崎良平がいた。後に中勘助を通じ安倍能成とも知り合いになる ・長兄の家から妹夫婦，義兄とともに牛込新小川町の借家に移った ・借家の真裏に中学の頃から愛読し，投稿もした『新聲』を発行している新聲社（後の新潮社）のあることを知り，木暮理太郎と結ぶ縁となる
1906	39	22	・新潮社の主人佐藤儀助の紹介で『新聲』の編集者であった高須梅溪を知り，高須より『ハガキ文学』の編集者木暮理太郎を紹介される ・本郷の下宿に移り，木暮の本郷4丁目の下宿紅葉館に足しげく通う。ただし木暮が登山家であることは1年余も知らなかった ・金子薫園をしばしば訪ね，『帝國文學』に詩を寄せる。また上田敏を訪ねてキーツやスィンバーンの話を聞いたり，ペーターを読むように勧められた
1908	41	24	7月　東京帝國大學英文科を2番で卒業 7月　卒業したものの就職する気持もなく千葉県

			の北条で3週間過ごす。この頃は山よりも海を好んだ 8月　目白に引越した長兄の家に入る 8月　富山へ帰る途次，昇仙峡の渓谷美に接し，野尻湖畔を歩き，赤倉温泉より弁当も持たず下駄と書物を脇に抱えて妙高山へ登りはじめ，途中下駄と書物を置き草履で登る。頂上で越後の村役場の人から，お握りの配分にあずかる。初めての登山であった。いままでせき止められていた流れが堰を切るような勢いをもって登山に邁進するようになる 11月　次兄隆次の紹介で明治大学夜間部の英語専修科教師として1週6時間を講ず ・目白の長兄の家を離れて本郷の木暮理太郎の下宿紅葉館に落ちつく 11月　木暮（「余に登山の趣味を注入し呉れし人」）と初めての山登りとして高尾山に登る
1909	42	25	1月　本郷の郁文館中学の英語教師になる 4月　天台宗大学中学部（のちの本郷中学）の英語教師，中央大学夜間部英語講師を兼任する 5月　木暮と浅川から景信山に登り，陣馬峰を経て西原村から大羽根峠を越え小菅川，多摩川の合流点から川野に達する。川野から雲取山を往復し氷川から青梅に至る。国境山脈に初めての野営経験をした 7月　2人の弟と3人の甥と2人の案内人で早月川より立山へ登り，弥陀ヶ原から立山温泉に下り，再び弥陀ヶ原から稲名滝を眺めて藤橋へ下山した 8月　飛騨の高山へ向かう街道から1人の弟と3人の甥を連れて，大多和峠を経て有峰に入り小畑尾峠，太郎兵衛平を経て薬師岳を往復。この頃日本山岳会機関誌『山岳』を愛読しはじめており、山頂では日本山岳会幹事辻本満丸の名刺を見つける。高山地帯へ第一歩を踏み出すと同時に当時日本の登山者が感じていなかった森林美にうたれる 10月　木暮と栃本（このときに限り小林区署のかんばんのある大村宅には泊めてもらえないと思い山中茂六宅に泊まっているが，以降大村宅を常宿とする）より十文字峠を越え甲武信岳と三宝山に登り（案内人は猟師の油井安十郎）つづいて川端下から金峰山に登って黒平鉱泉へ下山し御岳，昇仙峡，和田峠を経て甲府に至る。秩父の核心地帯を突破し登山者が秩父に足跡を印した記念碑的山旅であるとともに荒川，千曲川，笛吹川の水源地帯をめぐる山旅で，山々の樹林

			は燦然と色とりどりに紅葉しており，その美しさにうたれる ・８月の薬師岳山頂で見た名刺の辻本満丸邸を訪れ，山の話でひとかたならぬ喜びを抱く ・暮れに辻本からの招待に応じて，木暮と共に再び辻本邸を訪れ，日本山岳会幹事の小島烏水，中村清太郎，三枝威之助，高野鷹蔵，辻村伊助に会う 12月　日本山岳会に入会（会員番号243番　次兄隆次は明治39年12月入会，会員番号106番），木暮に入会をすすめ，木暮は漸く1913年９月に入会（会員番号319番）	
1910	43	26	4月　病死した許嫁の妹田部キヨ（18歳）と結婚する。田部家に入籍し，本郷の千駄木林町に新居を構える ・國學院大学に出講 5月　美術学校の助教授鶴田機水，洋画の小出楢重らと武州御岳，大岳山へ登る 7月　前年の薬師岳行のメンバーと上滝より水須を経て東笠山を越えて有峰に入り，薬師岳に登る。父喜平は護身用に１本の日本刀を重治に持たせた。山頂で針ノ木峠からきた中村，三枝と会い有峰より立山温泉に着く。その後奥大日岳と立山に登り立山温泉に戻る（案内人・山崎吉次郎）。さらにザラ峠，平から針ノ木峠を越えて大町に至る（案内人・宇治長次郎）。つづいて白馬尻より白馬岳へ登り，鑓ヶ岳を往復し，蓮華温泉へ下り（案内人・丸山広太郎），糸魚川を経て富山へ帰る。念願の越中から信州への旅を成し遂げる 8月　弟２人と奥平沢村から片貝川東又，アブキ谷を遡って毛勝山に登る（案内人・谷口弥八郎）。剱岳北方の開拓を行う(注４) ・２年後輩の土居光知や田中秀央，市河三喜，新カント派の四宮憲之と知己になる ・哲学者紀平正美から田中王堂を紹介され，氏よりウォルター・ペィーター研究を薦められる 12月　妻が胃の病気になり重治はかなり衝撃をうける ・重治は胸を侵されており，医者より登山中止の勧告を受けるが，生きることの幸福は登山を多くすることであると思い，それを続けると肺のラッセルが少なくなる	・越中毛勝山（5-3）
1911	44	27	・春　病弱の妻と妻の母を千葉県の知人宅に１カ月間転地させる ・日蓮宗大学に出講 5月　木暮と秋川より浅間尾根を経て，数馬から	・十文字峠を越え信州梓山より甲武信，三寶，金峰の三山に登る記（6-1）

			三頭山へ登り小河内へ下る 7月　岩波茂雄，安倍能成，市河三喜，藤村操の弟の作（のちの東洋大学学長）と大町，高瀬川から烏帽子岳，野口五郎岳，黒岳を経て赤牛岳を往復し，東沢を下り平ノ小屋からザラ峠を越え立山温泉に至る（案内人・大西又吉，勝野玉作，遠山品右衛門の長男作十郎，他1名）
1912	45 大正 1	28	3・4月　中村と丹波山村から飛竜山へ登り，翌日大菩薩峠で柳沢峠へ抜けるコースを案内人に聞いて，案内人を下山させた。3月31日2人で大菩薩嶺から柳沢峠へ向かっている途中，雪が6尺近くあって歩きづらく大黒茂谷に迷いこみ雪中洞穴で一夜をあかし，翌日洞穴を出て歩きだしたが，田部は空腹に耐えきれず，中村の持っていた煉歯磨を甘いと思ってなめてしまい，まもなく人事不省に陥った。同行の中村が青梅街道にたどり着き，馬子からこの上の炭焼小屋へ行って頼むよう教えられ，炭焼小屋の芦沢伴作がまず救出に出向き，つづいて4人の男が救出に出かけた。この芦沢伴作という猟師に炭焼きを兼ねた機敏な男により一命を取りとめる。村で3，4日滞在し体力を取り戻してから柳沢峠を越え塩山に至る 4月　東洋大学の教授に就任し，英語を教え，のちに文学概論や欧州文芸思潮をも講じた 7月　神田錦町のカバン屋でルック・ザックを作る（日本では築地の片桐で作った三枝・中村に続く3番目のものであろう） 7・8月　木暮と笛吹川に沿って尾根伝いに，かつて誰も通ったという記録のないところを雁坂峠へ登り破風山，木賊山，甲武信岳への初縦走に成功し，梓山へ下った。その後単身にて八ヶ岳の本沢温泉から硫黄岳，横岳，赤岳に登り茅野へ下る。さらに汽車に乗って上松へ行き，寝覚ノ床から王滝口を経て御嶽へ登り，黒沢口から木曽福島へ下る。 　さらに8月に入ったが松本より徳本峠を越え，神河内（上高地）に滞在して，槍ヶ岳や焼岳に登る。その後田部家の仏事のため妻や妹が富山に行っているので阿房峠（安房峠），平湯，船津を経て富山へ帰る ・秋　本郷の蓬莱町から都下豊多摩郡西大久保村に移転する 10月　岩波茂雄と塩原から尾頭峠を越えて川股から今市に至る 11月　海軍経理学校の英語教師（文官教授）となる。心理学，論理学も講ずる

			11月　木暮，中村と塩山から柳沢峠を越えて多摩川に入り，唐松尾，牛王院山に登り将監峠から飛竜山，雲取山に登り，大血川へ下って長瀞を見物する	
1913	2	29	5月　木暮，中村と案内人なしで甲府から昇仙峡，黒平，御室川を経て，金峰山，朝日岳，国師岳，甲武信岳に至り雨のため一旦梓山へ下った後，再び十文字峠より三宝山を廻り，甲武信岳に登り木賊山，雁坂峠を経て栃本に至る。金峰山より雁坂峠へのガイドレス縦走に成功した ・5月の山旅後，中村の主唱で「秩父会」（木暮，田部，中村に日本山岳会の創始者の一人梅沢親光に武田久吉，小島烏水，高野鷹蔵が加わることがあった）をつくり，当初雑司ヶ谷の「あやめ」に集まって酒を酌み交わした（注5）。（この会は長く続いたが中村が画家に転身，1926年1月1日梅沢の死去により自然消滅した） 8月　木暮と徳本峠から上高地に入り，槍ヶ岳から双六岳，三俣蓮華岳，黒部五郎岳，薬師岳，越中沢岳を経て五色ヶ原から立山温泉までガイドレスの縦走に成功，その後五色ヶ原で落ち会った中村が加わり，案内人を伴って立山温泉から別山，立山，龍王を回ったあと，別山下から剱岳へ尾根伝いに登り，登山としての剱岳は4登目となり，別山尾根から登ったのは初登である。その後大雨であったが早月川を下る。案内人宇治長次郎は雪渓からは剱へ登っていたが，尾根伝いから剱岳は初めてであった（案内人・長次郎，佐伯春蔵）。この山行は「槍ヶ岳から日本海までのガイドレス縦走」として登山史に燦然と輝いている	
1914	3	30	・夏　上高地の清水屋に妻や妻の妹と3週間近く滞在してペィーターの『ルネッサンス』の翻訳および研究に没頭した。滞在中に来た甥2人と5人で徳本峠を越えて松本に至り，戸隠に寄って土居光知を訪れた ・國學院大学英語講師辞職	
1915	4	31	5月　木暮，中村と塩山より笛吹川東沢からホラノ貝で野営し，信州沢を遡り，尾根の頂上に出て梓山へ下る。笛吹川東沢の初遡行に成功。その後十文字峠を越えて栃本へ下山する 7・8月　木暮，甥の南日実（第四高等学校生）と片貝川南又から釜谷を遡って最高点（釜谷山と名付ける）に登り，毛勝山を往復したあと猫又山，赤谷山を経て，大窓で食糧不足のため小黒部鉱山事務所に下り，米五升を分けてもらい，池の平を経て剱岳に登った。剱岳北方からのルー	※ペィーター著『文藝復興』5月（北星堂書店）

			ト開拓に成功。剱岳頂上より長次郎谷を経て，立山から浄土山に至り野営した。8月に入って御山谷を下り黒部の本流から東沢を遡って赤牛岳，黒岳，野口五郎岳，烏帽子岳から高瀬川へ下り大町に至る。この登山も飛騨山脈における探検登山史上を飾るものであった（案内人・長次郎，長次郎の義兄弟宮本金作，片貝の沢崎源次郎）	
1916	5	32	5月　木暮と塩山から笛吹川東沢の釜ノ沢をめざしたが，途中より尾根へ逃げ，国境尾根から甲武信岳へ登り，真ノ沢を下って栃本に至る 7月　海軍経理学校5期～8期の有志11名と山岳部創立打ち合わせ 7月　海軍経理学校生徒6名と上高地から槍ヶ岳へ登り，その後田部は20日間ほど上高地に滞在し読書にふけった 9月16日　海軍経理学校に山岳部「梓会」を創立。梓会の命名は7月に行った上高地の梓川に感動した生徒の希望による	※ベィーター著『全一生活』6月（不老閣出版） ・秩父の旅（11-1） ・秩父の印象（11-1） ・秩父旅行の思ひ出（11-1） ・槍ヶ岳から日本海まで（11-2）
1917	6	33	5月　木暮と再度笛吹川東沢の釜ノ沢を試み，初遡行に成功して，甲武信岳に登り，真ノ沢から栃本に至る 7・8月　木暮，森喬と泊町から小川谷，イブリ谷を遡り，朝日岳，白馬岳から鹿島槍を経て針ノ木峠まで縦走し大町に至る（案内人・長次郎，長次郎の義弟，山本岩次郎）	
1918	7	34	8月　海軍経理学校生徒9人と中房温泉から燕，大天井岳，槍ヶ岳へ登り，上高地に入る。4，5日滞在し，単身徳本峠を越え，島々から寄合渡を経て境峠から藪原に至る 11月　東洋大学学生の沢田，青山，木村と甥の石坂修一（後に最高裁判事）と修一の弟の谷安正（後に帝大の教授，日本大学理学部長）を伴って，塩山から柳沢峠を越え，落合から将監峠を経て三峰神社へ至るが，途中で闇になり，提灯をともしながら夜半に神社へ到着する 12月　甥の石坂修一と塩山から柳沢峠へ，雪のため道がわからず秩父行きをあきらめ，丹波山村へ行き，大黒茂谷で救ってくれた芦沢伴作に会う。再び柳沢峠を越え塩山に至る	
1919	8	35	6月7日　慶応義塾山岳会第5回大会の講演会で「山は如何に予を影響しつつあるか」と題して講演する 6月　日本山岳会幹事に就任（1931年まで，その後評議員を含め27年間継続して役員に就任） 7月　甥の石坂修一と柳沢峠，将監峠を経て滝川谷から栃本へ，さらに十文字峠，梓山を越え続	☆日本アルプスと秩父巡禮　6月（北星堂）

			いて八ヶ岳の裾野の野辺山ヶ原を経て長坂に至る 7月　海軍経理学校生徒10名と上高地から焼岳へ登り，白骨温泉から藪原に至る ・山に対する嗜好は徐々に変化する。縦走や前人未踏の地を歩く忙しい気持ちではなく，落ち着いて静かに人生を観照するような態度で，山のもつ一切を眺め，体験する気持ちになる	
1920	9	36	4月　木暮，松本善二と大宮駅から歩きはじめ白糸の瀑などを眺め，毛無山に登り，本栖，精進，西，河口湖を巡る。木暮との山行の最後となる 4月　単身秋川上流から御前山に登り，数馬の山崎屋に一泊し，三頭の大滝を往復して上野原に至る 7月　東洋大学学生の清谷，谷岡と木曽の寝覚ノ床で遊び，沢渡峠を越えて王滝口から御嶽に登り，飛騨側へ下って，上ヶ洞から乗鞍岳を往復，さらに野麦峠，槍峠を越えて白骨温泉から上高地に至り徳本峠を越えて下山した 8月　中西，馬場と山田温泉，万座温泉から白根山に登り，渋峠を越え中野に至る	☆渾沌より統一へ 5月（博文館） ・秩父行（15-2）
1921	10	37	7月　妻，甥の田部正太郎と中房温泉に数日滞在。帰途別所温泉に泊まり，追分の油屋に寄る。さらに中仙道を歩いて軽井沢に至る。はじめての追分訪問（注6） ・府立第一高等女学校高等科に出講	
1922	11	38	4月　法政大学に法文学部が設置され，英文学の教授に就任（漱石門下の野上豊一郎，森田草平，田部などが集まって文学部を新設）（注6）	
1923	12	39	4月　法政大学にスキー部が創設され部長に就任 9月　追分の油屋に滞在して軽井沢へ行き，戻ろうとした刹那関東大震災が起こる。即刻帰京。想像とは違い家も家族も無事であった	
1924	13	40	4月　法大スキー部がスキー山岳部となり，法大内に組織的な山登り活動が始まった。田部は部長を継続する ・春，法政大学の学生と先生20数名にスキー山岳部部員数名が付き添って日光湯本から金精峠越え追貝までに同行し，学生の登山を指導する 6月　東京女子大学に英語の教員として就任 9月1日　前年の関東大震災の日にちなんで，その日に西大久保から阿佐ヶ谷に新築した新居へ移る	
1925	14	41	1月　法政大学スキー山岳部のスキー場となった野沢温泉で初めてスキーをはく（注8） 1月28日　父喜平83歳で死去 2月19日　法政大学スキー山岳部から山岳部が分	

			離した。4月に山岳会（のちの体育会山岳部）を創立し，田部は部長に就任 3月　野沢で10日間のスキー 7月　日光湯本に滞在，奥白根山に登り，菅沼，切込湖，刈込湖などを訪れた 10月　菅沼達太郎（後に法大山岳部OB会である山想会の発起人）と軽井沢から草津温泉を経て花敷温泉へ行き，野反池を往復し，渋温泉に至る	
1926	15 昭和 1	42	1・2月　野沢でスキー。スキーにこり，鹿沢温泉，熊の湯へと範囲を広げた。そしてスキーをやってから風邪を引かなくなった 7月　大村，田中，松村他1名と四谷より白馬岳へ登り，大池に至り、森上に下山。その後小谷温泉から乙見山峠を経て笹ヶ峰牧場より湯ノ沢に至る 10月　法大の山の詩人野沢一ら一行7人うち女性2人で増富鉱泉から信州峠を経て梓山に至り，十文字峠から栃本に至る	
1927	2	43	1・3月　野沢でスキー。野沢近郊の山へスキー旅行 2月　法大山岳部の角田吉夫，松室秀夫（地蔵峠より小林三郎，菅沼達太郎合流）滋野駅からスキーで地蔵峠を経て鹿沢温泉へ，その後岩屋観音を経て上田に至る 5月　菅沼達太郎，法大山岳部員と塩山より柳沢峠，将監峠を経て無理を承知で栃本に夜中に着き，大村宅に2泊した。1泊増えたのは大村のお婆さんがねぎらいの餅をついてくれたため 7月　法大山岳部の田中菅雄，柳澤貞治，横山高輝と新田宇一郎，日本歯科医専の長尾一郎および未知の4人で，案内人5人を雇い，青木鉱泉から鳳凰山，仙丈岳，甲斐駒ヶ岳を経て日野春に至る。初めての南アルプス山行であった	
1928	3	44	1・3月　野沢でスキー。 2月　菅沼達太郎，法大山岳部の小林三郎，高橋榮一郎と野沢でスキー。「法政焼」を賞味す（田部のお気に入りである野沢の毛無山の地形図が法大山岳部の部員章のデザインになる） 3月　東京女子大学英語教員辞職 7月20日　長兄南日恒太郎（富山高校校長57歳）岩瀬浜で水死 8月　甥の石坂修一と鰍沢黒沢，西山温泉から農鳥岳，間ノ岳，北岳を縦走して飯富に至る（案内人・深澤義近）（注9）	□ペィター著『文藝復興』（全訳） 5月（北星堂書店）
1929	4	45	1月　野沢か富士五合目でスキー 3月　法大山岳部熊ノ湯スキー合宿に参加，熊ノ湯へ行く途中道がわからなくなり発哺温泉の中	☆□山と溪谷 5月（第一書房） □山と溪谷

			間あたりに出る。志賀山，横手山に登る ・夏法政大学の仲間と中房温泉から上高地か，単身徳本峠を越え上高地へ行ったと思う ・信州追分に横浜の原善一郎から12～13人で2,000坪の土地を買い取り，それを分けて3部屋の家を建てる。2～3年後に1間を建て増し，戦争中そこへ疎開した	6月（第一書房）
1930	5	46	1月　次兄の田部隆次の長男正太郎　剱沢小屋で1月9日の雪崩のため窪田他吉郎など東大山の会メンバー3名と慶応義塾予科生1名，ガイド2名が圧死，山想会員の貴堂武時（重治の甥，後に日本山岳会富山支部長）捜索に協力 7月　単身上松より木曽駒ヶ岳へ登り伊那に至る 7月　大村郡次郎（大村書店主）と茅野より蓼科山に登り，湯川に至る 10月　塩山から上日川峠を経て大菩薩峠から嵯峨塩鉱泉に至る。入山前に中央線の塩山を通り越し，日下部で下車するときに大切な杖を忘れる。仕方なく杖は阿佐ヶ谷駅へ，身体は塩山へ送り返してもらう。田部の今までにない出来事だった 11月　山想会の角田吉夫，小林三郎と入山辺より美ヶ原から上和田，霧ヶ峰，角間新田を経て上諏訪に至る 12月　大村郡次郎と秋川の本宿より甲武国境の三国峠を経て上野原に至る	★スキーの山旅 11月（大村書店） ※ジョン・アディングトン・シモンヅ著『ダンテとプラトーとの愛の理想』 12月（人文書房）
1931	6	47	1月　松村保とスキー旅行を企て田中より鹿沢，新鹿沢を経て，渋沢より自動車，電車で大門に入る。大門峠より山想会の菅井達雄が加わり湯川へ行ったが雪が少なくスキー旅行ではなくスキーを背負った旅に終わる 4月　五日市町から神戸岩を眺めて氷川に至る 4月　法政大学の教授田村寛貞，山想会の菅沼達太郎と与瀬，上野田を経て蛭ヶ岳，丹沢山に登り案内者を帰して塔ヶ岳に登って渋沢に至る（案内人・太田仙） 4月　中西悟堂と軽井沢より八風山を越え神津牧場に到り，牧場の花見会に加わる。その後物見山，初谷鉱泉に至り，荒船山に登り，黒滝不動を経て富岡に至る 5月　大村郡次郎，中西悟堂，松村保と茅野より大河原峠を越えて野沢に着き，内山峠を越え下仁田に至る 5月　山想会・法大山岳部合同懇親会，高水山，岩茸石山，惣岳山行に参加する 6月　日本山岳会幹事を退任し，評議員となる（1946年6月まで）	※ジョン・アディングトン・シモンヅ著『歐洲文藝復興史』 2月（人文書房） □ペィター著『ペーター論集』（『全一生活』改題）　4月（岩波書店） ☆峠と高原 7月（大村書店）

			7月　上高地と思う	
1932	7	48	1月　野沢でスキー 6月　大村郡次郎と茅野より大門峠を越え，新蓼科牧場を過ぎ協和牧場を経て，湯沢鉱泉に至る。帰途信濃追分の油屋へ寄ったが，幕末の歴史をよく知っている名物のおじいさんが本年2月，87歳で亡くなっていた 7月　大村と八千穂から白駒池，渋鉱泉を経て上諏訪に至る 10月　飯田橋近くの若山病院で盲腸炎を手術するが，手遅れだったため完全に直るまで半年かかる ・東洋大学山岳部の顧問となる	□山と溪谷　普及版 6月（第一書房） ☆中世歐洲文學史 12月（第一書房）
1933	8	49	1月　野沢でスキー 2月　霧ヶ峰 5月　大村と小菅川を遡って大菩薩峠より塩山に至る 7月　大村，松村，甥の石坂修一と葛ノ湯から烏帽子岳，野口五郎岳，赤岳を越え鷲羽岳に登り，双六池から穂高温泉，平湯温泉へ行き，安房峠を越えて中ノ湯から松本へ出る。田部は胃が思わしくなく，石坂が盲腸の手術の後でもあり，念願の笠ヶ岳へは登ることができなかった	☆♣英国の自然詩人（「岩波講座世界文學」第9巻） 1月（岩波書店） □心の行方を追ふて（『渾沌より統一へ』を改題増補） 8月（第一書房） （※）ウエストン『日本アルプス登山と探検』校閲　12月（梓書房） ・山岳文學について (28-1)
1934	9	50	5月　大村，松村，東平と下部温泉から湯之奥峠を経て井ノ頭村から上井出で滝や神社を見る 7月　岩波書店の小林，岩波茂雄の長男，安倍能成の次男，松村保と大野川より乗鞍岳へ登り野麦村，上ヶ洞を経て小坂町に着き，御嶽に向かって登ったが，原八町で激しい腹痛により1人で落合を経て帰るときに20年この方携えた杖が見当たらなく，関西のお客10人が引っくるめてもって行ったらしいということで，下呂温泉の水明館まで行き杖を見いだして翌日帰京した 10月　下諏訪より小諸へ行き，菱野鉱泉，小諸峠，大笹，鳥居峠を越えて上田に至る	□ジョン・アデイングド・シモンズ著『文藝復興』（『歐洲文藝復興史』に『ダンテとプラトーとの愛の理想』を併載 1月（第一書房） ☆♣英文學と大陸文學（「英語英文學講座」第9回）　2月（英語英文學刊行會） □心の行方を追うて（普及版）3月（第一書房） □峠と高原（普及版） 4月（大村書店） ☆紀行と随筆 6月（大村書店） ※シモンヅ著『アルプスへの思慕』（第一書房）
1935	10	51	1月　野沢でスキー，松村保と毛無山スキー旅行 2月　大村他1名と甲州側の富士五合目でスキー 7月　藤原，菊地四十二，佐藤啓子と王滝口から	☆山への思慕 10月（第一書房）

			田ノ原小屋を経て御嶽へ登り，三ノ池の方へ向かう途中，霧とみぞれのため道がわからず二ノ池の小屋へ着く。その後岳ノ湯から高山へ行き平湯から安房峠を越え上高地に至る	
1936	11	52	1月　野沢でスキー，毛無山へ登る 2月　富士五合目でスキー 2・3月　鹿沢，熊ノ湯でスキー（他にスキーは水上，湯沢へも行った） 7月　河野不二子姉弟，菊地四十二と八木沢，神楽峰より苗場山へ登り赤湯ノ温泉，浅貝，三国峠を経て笹ノ湯へ下る 11月　単身中之条より暮坂峠を越えて暮坂牧場，湯ノ平温泉，草津を経て信濃追分へ立寄る	☆♣ベーター（「研究社英米文學評傳叢書」60）　1月（研究社） ☆♣山の文學（「山岳講座」第4巻）　2月（共立社） ☆涯てしなき道程　11月（第一書房）
1937	12	53	1月　野沢でスキー 5月　ウェストンが保福寺峠から槍ヶ岳や乗鞍岳を遠望し，日本アルプスを登るきっかけとなったところにひかれ保福寺町よりその峠へ登る。その後，小諸へ出て信濃追分の油屋に泊まり，浅間高原を歩く 7月　発哺温泉から岩菅山を往復する 10月　露伴の『酔興記』を読んで木曽路の旅を試みた。奈良井より鳥居峠を越えて藪原へ出る。続いて中津川を経て島崎藤村の郷里馬籠村を訪問し，その後妻籠，清内路峠を越え飯田に着き天竜峡を往復する 11月　田中菅雄と藪原方面を歩く 11月30日　実母のように愛していた義母（数え80歳）急逝 ・日支事変がますますはげしくなって年の暮れや正月にスキーを携えている人達は，上野駅で制裁を受けるのでスキーをあきらめた	※ディ・クィンシー著『阿片常用者の告白』　2月（岩波書店） □山を語る（『紀行と随筆』改題）　5月（大村書店） □ベーター著『文藝復興』　10月（岩波書店）
1938	13	54	5月　上野原から鶴川を遡り，小菅川に出て数馬に至る 7月　飯田から神坂峠，馬籠に至り，永昌寺を訪れ，島崎藤村の旧居に至って島崎藤村の長男楠雄に会う。その後中津川より恵那山に登り奈良井へ戻って桔梗ヶ原を歩く 10月　山想会の杉崎恵義と中山道を洗馬より奈良井まで歩き，権兵衛峠を越え高遠から上諏訪に至る	□峠と高原　8月（新潮社） ※ワーズワース詩集　9月（岩波書店） ☆山路の旅　10月（新潮社） □人生の旅（『涯てしなき道程』改題）　12月（第一書房） □山に入る心　12月（新潮社）
1939	14	55	3月　松崎と女街道にある和美峠を通り信濃追分に至る ・日本大学および東京女子大学に出講 5月　東京女子大の教え子6人と身延山から安倍峠を越え梅ヶ島温泉に至る	□四季の随想　5月（新潮社） □山と溪谷（戦時體制版）　6月（第一書房） □山と随想（『紀行と随

			7月　5月のメンバーと須砂渡より常念岳，蝶ヶ岳，大滝山より上高地を経て，中ノ湯経由バスで平湯より高山に至る 8月　酸ヶ湯から八甲田山を往復し，バスで十和田湖，盛岡を見物する。東北の山へ初めて登る ・妻キヨ腎臓結核となる 10月　東京女子大学生3人と樋ノ口から檜原湖へ往復し，磐松軒，磐梯山を経て会津若松，飯盛山を見て若松に戻る	筆』改題補稿） 7月（新潮社） ☆萌え出づる心（随想） 8月（第一書房）
1940	15	56	4月　田部が尊敬していた日本山岳会名誉会員辻本満丸死去 7月　東京女子大の卒業生1名，外1名と戸倉から富士見峠を越えあやめ平を往復し，尾瀬に出て檜枝岐に下り，会津駒ヶ岳を往復し，再び沼山峠から尾瀬に戻って沼田へ出た 8月2日　妻キヨ，3年間の病床生活ののち死去 9月　越後湯沢から八木沢を経て清津峡を通り，小出温泉から石打へ出る（注10） 10月　松村保と湯本より那須岳から三斗小屋温泉を経て大峠を越え楢原へ出る。帰京の途中飯盛山の白虎隊の墓を訪れる 11月　紅葉見物に袋田温泉から袋田ノ滝，月居山を廻り，温泉に戻って帰途偕楽園を見学 11月　山下助四郎（故妻の教師）と湯檜曽から上ノ原を経て湯ノ小屋温泉，宝川温泉から水上に至る	□J. A. シモンヅ著『文藝復興・他一篇』 2月（改造社） ※ワイルド著『獄中記』 3月（新潮社） ※テニスン著『イノック・アーデン』 3月（新潮社） ★溪谷・随想と紀行　田部重治編 7月（三省堂） □峠と高原 7月（新潮社）
1941	16	57	3月　法政大学は軍人総長を迎え英文学科廃止のため教授を辞職。その後第2次世界大戦終戦直後の1945年10月まで法大山岳部部長を継続した（1967～72には大学院に出講） 4月　鬼怒川より川治を経て，箒川渓谷に入り塩原に至る 8月　玉造温泉，松江を巡り大山村より大山に登り，皆生・三朝温泉，城ノ崎温泉を巡る 10月　松村保と二本松から岳温泉を経て安達太良山に登り（案内人・佐藤定五郎）中ノ沢温泉に至る 11・12月　奈良の古寺を巡礼ののち高野山へ向かい，長谷寺を見学する	☆青葉の旅・落葉の旅 5月（第一書房） □ふるさとの山々（『山路の旅』改題） 8月（第一書房）
1942	17	58	3月　東洋大学の教職を辞任 4月　伊賀上野から宇治，京都の古寺を巡る 6月　教え子森寿雄と高湯より蔵王山の数町前まで登り，天候悪化のため下山し立石寺を見学 7月　大和の洞川より山上ヶ岳へ登り，吉野に至ってそこを見学した 7月　川治より会津街道を田島から檜枝岐へ出たのち湯ノ花温泉に至る。続いて弥五島へ移り	※ギャスケル夫人短篇集 4月（改造社） □山と随筆 5月（新潮社） ☆わが散文詩 7月（第一書房） ☆旅への憧がれ 10月（新潮社）

			「塔ノへつり」から東山温泉へ行く 8月　富士吉田より富士山へ登り，御殿場へ下る。はじめての富士登山 8月　岡沢と土湯から鷲倉温泉を経て土湯峠を越え会津若松，東山温泉へ行く 11月　一人旅で熊野の瀞八丁を見てから不動峠を越え東熊野街道へ出て大台ヶ原山，日ノ出岳に登り柏木を経て上市に至る 12月　月ヶ瀬より香落渓を経て笠置山へ登る	☆詩と断章 11月（七丈書院）
1943	18	59	2月　一人旅で謡曲や歌舞伎で有名な道成寺などを訪れてから，那智滝を見て本宮にわたり，熊野三山を巡って新宮，湯ノ峰温泉より五条に至る 3月　一人旅で宇治山田，松坂の神社を巡り，波瀬より紀州街道を高見山に登り鷲家に下り，榛原より鈴鹿峠を越えて関町に至る 3月　篠ノ井から新町までバスで行き，大町まで歩いて久しぶりで対山館に泊まり百瀬慎太郎と歓談，さらに山清路，差切峡を経て松本から浅間温泉へ行く 4月　山陰の根雨から四十曲峠を越し，新庄へ出て柏木から伯母峰峠を経て尾鷲へ行く	★北アルプス 2月（文藝社） ☆旅路　7月（青木書店） □中世歐洲文學史 8月（第一書房） ☆随想・山茶花 10月（七丈書院） □心の行方を追うて 10月（朱雀書林） □わが散文詩 12月（朱雀書林）
1944	19	60	・戦争激化のため山旅ができなくなる 5月7日　山友木暮理太郎元日本山岳会会長死去	□青葉の旅落葉の旅 1月（六合書院） □山と溪谷　随筆篇 3月（新潮社） □ふるさとの山々 7月（六合書院） □山と溪谷　紀行篇 9月（新潮社）
1945	20	61	5月　信濃追分の持ち家へ疎開。留守宅は八雲書店に賃貸し，唯一の収入となる。追分では農夫仙夫として働く 8月頃　小諸に山室静，掛川長平らによって中等学校以上の学力をもつ帰還兵を教える学校「高原学舎」という学校が設立され学舎長になる 10月　法政大学山岳部は，学生課長の桂田利吉に部長をお願いし再建をはかった。田部重治は名誉教授の身で、自動的に部長を辞することになった 11月　海軍経理学校山岳部「梓会」ＧＨＱの指令によらず自発的に解散	
1946	21	62	4月　再度東洋大学講師就任、のちに教授。追分より同校へ通う。東京の家は貸しているので東京で泊まるときは友人や教え子の家に泊まり歩いた ・山室静、掛川長平らの創刊した雑誌『高原』（1946年8月創刊）に関わる	☆♣日本の山(「日本叢書」76)　8月（生活社） □山への思慕 11月（鳳文書林） ♣山ゆく心（「養徳双書」23）　12月（養徳社）

				♣山路の旅（「山溪山岳双書」6巻） 12月（山と溪谷社）
1947	22	63		☆文藝の理念 6月（八雲書房） ☆高原のあけ暮れ 7月（東海書房） □憧れの旅路 8月（地平社）
1948	23	64	8月　作並温泉へ出かけたのち，森寿雄と月山に登る。頂上の小屋に泊まり，翌日腹痛のため背負われて羽黒山に下る。丁度来山した武田久吉に会う 秋　孫娘和の夫，田部弘（都立大講師・建築家）が肺炎性チブスで死去 12月　山友小島烏水死去	□四季の随想 2月（松和書房） □青葉の旅・落葉の旅 3月（東西出版社） □文藝復興 4月（日本社） □山と溪谷（紀行篇） 5月（東西出版社） □山茶花の咲く頃 6月（鳳文書林） □山と溪谷　随筆篇 11月（萬葉出版社）
1949	24	65	8月　秋田県より招かれて，佐藤利吉と八幡平，男鹿半島を巡り秋田へ行く	・追悼　文藝批評家としての小島君（44-1） □わが散文詩 6月（白塔書院） □心の行方を追うて 7月（白玉書房）
1950	25	66	4月　日本山岳会名誉会員に推薦される 4月　武蔵野女子学院に出講 秋　栃本より中津川に出て，赤岩峠を越え神流川に至る。25年ぶりの秩父であった	□峠と高原 8月（角川書店）
1951	26	67	秋　笛吹川の上流の山小屋主人，日原近丸の招きにより塩山から広瀬を経て笛吹小屋，徳和に至り乾徳山に登る	□ワイルド著『獄中記』 1月（角川書店） □心の行方を追うて 2月（第一書房） □心の行方を追うて 4月（角川書店） □山と溪谷（紀行篇） 8月（角川書店） □山と溪谷（随筆篇） 8月（角川書店） □テニスン著『イノック・アーデン』 10月（角川書店）
1952	27	68	7・8月　東洋大学から依頼の北海道講演旅行 11月12日　脳血栓になり，左足，左腰が不自由になる	□青葉の旅・落葉の旅 9月（角川書店）

1953	28	69	・養子（姉の子）である甥田部武重が死亡 ・家族づれの旅となり，以降草津白根，乗鞍岳，御嶽等に登る	※アーヴィング著『スケッチ・ブック』 9月（角川書店）
1954	29	70	1月　二木謙三博士の教えに従い玄米を食べ始め，旅に出る時も，それを石臼でひいて粉にして携えた	♣憧れの旅路（「民族教養新書」7） 4月（元々社） □山はふるさと（『紀行と随想』改題） 7月（三笠書房）
1955	30	71		□人生の旅 3月（角川書店） ♣□山をたたえる心「山溪山岳新書」の1冊） 7月（山と溪谷社）
1956	31	72		♣わが山旅（「コマクサ叢書」第2巻） 8月（朋文堂） □若き日の山旅 11月（河出書房）
1957	32	73	初夏　田口の高校の講演会に招かれ，仏法僧の名所鳳来寺を右手に寒狭川沿いに田口町に至り岩古谷山の麓で一泊する 8月　家族で岐阜の白川郷より富山へ旅行する	☆♣旅・人間・自然 2月（東京ライフ社） □ワーズワース詩集 5月（岩波書店）
1958	33	74	1月　東洋大学英文学科の学会誌『白山英文学』創刊。この機関誌に定年退職後も非常勤講師として，毎号執筆する 7月　東洋大学の研究室の助手たちと白川郷より天生峠を越え高山へ，続いて上高地に入り浅間温泉へ行く 7月　家族づれで草津より万座温泉へ行く	
1959	34	75	3月　東洋大学定年退職 4月1日　東洋大学名誉教授（第1号）となる。非常勤講師 7月　妹（63歳）娘（36歳）孫娘2人（14，11歳）と家族旅行。三留野から木曽路を黒澤口に至り，御嶽へ登る 11月　高尾山薬王院の山本秀順の招きで高尾山へ登る	□忘れえぬ山山 1月（第二書房） ・追悼　林並木氏（54）
1961	36	77	5月　山想会総会出席。山想会の会合にはその後「駒形山想会」への出席のみとなる 11月11日　法政大学山岳部創立35周年記念祝賀会に出席 9月　梓会のメンバー25名と高尾山へ登る ・日本ペーター協会が設立され初代会長となる。この頃ルーテル神学大学教授を勤める	♣山と溪谷（「世界教養全集」22） 8月（平凡社）
1962	37	78	6月　秩父山岳連盟に招かれて三峯神社、栃本、長瀞などを訪問する（案内，東洋大学の教え子	□日本アルプスと秩父巡礼（「日本山岳名著全

			高野秩父高校教頭，小池秩父農業高校教諭と秩父山岳連盟の千島兼一氏） 8月　海軍経理学校山岳部が母体であった「梓会」が復活し，名誉会長に推される	集」第2巻） 5月（あかね書房）
1963	38	79	11月3日　雲取山頂上付近に秩父電鉄によって田部のレリーフが建立され除幕式が行われる。重治は降雪と低血圧のため欠席したが，生前に歌碑が建ったことを自慢していた	
1964	39	80	3月　東洋大学大学院非常勤講師を終える 8月　孫の和，曾孫の廸子，幸子が同行して三峯口から雲取山へ登り，田部のレリーフを見て七ッ石山を経て鴨沢に至る	☆わが山旅五十年 5月（桃源社）
1965	40	81	9月　梓会の25名と日の出山を登る	☆山旅と随想 4月（世界文庫） □山旅と随想（自筆短歌及び署名入り） 5月（世界文庫） ☆ペィーターの作品と思想　9月（北星堂書店）
1966	41	82	4月　実践女子大学に新設の大学院で文学部教授として就任 9月　梓会の30名と大猶峠へ行く	□中世ヨーロッパ文学史（『中世歐洲文學史』の再刻）　11月（法政大学出版局）
1967	42	83	4月　法政大学大学院に出講 9月16日　駒形山想会に出席。おそらく「駒形山想会」には最後の出席であった 10月　梓会の50名と氷川の愛宕山へ行く 10月　山友中村清太郎死去	
1968	43	84	2月　法大山岳部部員総会に欠席「寒い頃の夜の会には一切出席いたしません。あしからず」との返事を受け取る 3月　東洋大学非常勤講師を終える	□ふるさとの山々（「日本岳人全集」第6回配本） 12月（日本文芸社） □忘れえぬ山旅 12月（三笠書房）
1969	44	85		□アーヴィング著『スケッチ・ブック』（改定初版）　11月（角川書店）
1970	45	86	3月　家族とともに九州地方を旅行し，その途次腰に痛みを生じて急遽帰京，自宅にて療養 8月　小康を得て信州追分の別荘に滞在 9月　慢性膀胱炎にて東京医科大学附属病院に入院 ・前年まで毎年出席した有志閑談会に「神経痛のため4月初から学校も欠席しています。残念至極です」と便りを寄せて欠席した	
1971	46	87	3月16日　富山市山室小学校の歌碑除幕式。田部は出席できず	□わが山旅五十年（「山岳名著シリーズ」）

			3月　実践女子大学大学院教授を辞任 4月　病状好転して退院。7月再び入院 10月　退院。次第に健康を回復し，散歩ができる程度になる	8月（二見書房）
1972	47	88	3月　法政大学大学院出講を終える 8月　病状が悪化し，河北病院に入院 9月22日　いつもの朝を迎えたが，やがて胸苦しさを訴え，酸素吸入後，10時45分息絶える 9月24日　阿佐ヶ谷の自宅で葬儀が行われる 11月10日　社団法人日本山岳会が武田久吉，鳥山悌成氏と共に赤坂のOAG会館で追悼会を執り行う	
1973	48	—	6月　栃本に秩父山岳連盟によって田部重治の歌碑が建立され，吉日に除幕式が行われた 6月　雲取山近くの田部重治レリーフの前で第1回「田部祭」が催され，その後，毎年6月第3土曜日の夕方田部祭が行われている ・日本山岳会機関紙『山岳』第68年に茶谷東海氏（梓会）が追悼文を載せる	
1974	49	—		☆田部重治詩歌集　わが詩わが歌 6月（田部重治先生詩歌集刊行委員会，教育出版センター発行）
1990	平成2		5月　笛吹川広瀬に三富村によって田部重治の文学碑が建立され，27日除幕式が行われた	

注1　アンダーラインは山登りを中心にその主要事項を示す。

注2　1884年：ほとんどの資料は富山県東部のほぼ全域を示す「新川郡生まれ」と表示されている。1878年（明治11年）に新川郡が「上新川郡」と「下新川郡」に分かれ，1896年（明治29年）に上新川郡が「上新川郡」と「中新川郡」に分かれた。したがって「上新川郡」が正しい。

注3　1902年：林並木教授は『山岳』第1年第3号（明治39年11月発行）に「笠ヶ岳焼岳穂高岳紀行」，第54年に「登った山々の覚書」を著す。

注4　1910年：田部は案内人を田口と記しているが『立山とガイドたち』（1973年7月　北日本新聞社出版部発行）によると「田部重治の案内をつとめた人がいた。明治43年夏に田部が初めて毛勝岳に片貝川の東又から登った時，炭焼きをしていた片貝村山女の猟師で谷口弥八郎（当時58歳）である。田部重治の記録には田口弥八郎となっているが，『谷口』と『田口』の聞きちがいだろう。この谷口弥八郎は片貝きっての名猟師であり，その息子の谷口勝次郎も足の親指がかかれば，どんな絶壁をも登ったという山歩きの強い猟師だった」と載っており，毛勝岳は毛勝山の間違いであろうが，この本の記述の「谷口」は間違いないものと判断した。

注5　1913年：日本山岳会で1950年5月18日に行われた木暮の7回忌の小集会に田部は「木暮理太郎氏を偲ぶ」と題して講演を行った。そこでは「秩父へ行った頃は世上まだ知らず，小島君にしてその例にもれなかった。中村（清太郎氏）・梅澤（親光氏）・武田（現会長）と私を加えた4人で秩父會なるものを作った」と話しているが誤りである。

注6　1921年：『ふるさとの山々』序などでは「大正八年の夏だったと思う」と書かれているが，『わが山旅五十年』では「はっきり覚えていることは，大正十年の夏妻と……これが後に追分で……

ここが私に取って切っても切れない場所となるに至ったのである」「山と民謡」には「初めて追分へ行って読書し始めたのは大正十年頃だった」と書いてあり，大正10年が正しいようだ。

注７　1922年：法政大学における文学部は1922年（大正11年）法学部の中に文学科と哲学科設置によって法文学部として発足した。法学部と文学部が独立の学部となったのは1947年である。しかし，創設以来法学部・文学部と通称し，それぞれに法科主任・文科主任がおかれ，教授会も別々に運営されて独自性をもって運営していた。したがってほとんどの記述は「文学部教授に就任」したとなっているが，正しくは法文学部である。

注８　1925年：法大スキー部の練習場が赤倉から野沢へかわり，スキー山岳部マネージャー市川の強引なすすめでスキーをはいた。この時の宿が桐屋旅館で，後に野沢での常宿となる。法大山岳部は1926年の１月より関でスキー合宿を行っていたが，27年３月から熊ノ湯をベースとして志賀高原の開拓を行っている。田部は『山想』に掲載されている以外に野沢で山岳部部員とスキーをやり毛無山などに登っている。

注９　1928年：他の略年譜の一部に「石坂豊一」と明記されているが，甥の江上幸夫氏（重治の実弟の子）は「豊一氏は伯父であり，また義兄にあたりますが，山歩きをした人とは聞いておりません。石坂修一ではないでしょうか」という指摘をうけ，当時の山旅記録を参照し修一とした。

注10　1940年：この山旅は『わが山旅五十年』では東京女子大の教え子が同行していることになっていたり『山想五号』では法大山岳部の石原博和，泉谷駿一，福島元康が同行している記録がある。ただし，田部が1940年９月に発表した「清津峡」には単独行で，途中に「河原で焚火をしている学生数人が，土地の人と話してゐるのに遇う。何れも知っている連中だ」と書いている。その他１カ所の記述から，この「知っている連中」とは法大山岳部部員のことであろうと推測する。

当年譜は主として田部重治の山登りの著書，田部が所属していた山登り団体の機関誌，学問の研究領域に関する著書の他，数校の大学の年史，文学碑などの建立に伴う解説などをとりまとめた。しかし，疑問箇所があったので，８校の大学への問い合わせなどを行ってそれを集約した。ただし脚注に記載以外に一つの山行で，田部自身が書いた文章に二つ以上の異なった内容の記載がある。その場合は，最初に書かれた文章のものを選んだ。また参考とした資料によっては，一つの事項で異なった記載もみられたが，その場合は所属団体が記載しているものを選んだ。

年齢は著書には数え歳表示が多いが，当年譜は満年齢で表示した。なお，1975年以降に発刊された復刻版・文庫本などは，年譜に表示してある著書が底本になっているので記載を省略した。

（五十嶋一晃）

山岳図書目録

「山岳図書目録について」

日本山岳会図書委員会

「山岳図書目録」を本年も継続掲載します。この種の目録は、いまのところ各種山岳・アウトドア関係の定期刊行物でも整理・記録の対象とされていないので、この「山岳」掲載のものだけがわが国でのただ一つの資料です。山の本以外に自然環境のものも拾ってありますし、昨年分でもれていたものも収録してあります。また締切り時間の都合で、一部に収録できなかったものがありますが、多種多様な本が出版されていることがわかります。どうか有効にご利用ください。

＊記載は，日本で出版された日本語（または外国語）の図書と，外国で出版された英語の図書です。紙面の都合で改訂版は省略してあります。
＊日本語のものは発行年月日が 1997 年のもの，英語のものは 1996 年と 1997 年のものです。
＊記載は整理番号，書名，著者名，発行所，価格，判型，発行地（英語のみ）の順です。
＊定価，判型は日本語図書のみ掲載しました。判型が数字で表示されているものの単位は mm（天地×左右），価格は原則として税なしですが，ごく一部税込みになっています。
＊記載の配列は，和書が書名の五十音順，洋書はアルファベット順です。
＊整理番号のうち，N は日本語，E は英語です。N 97 とは，日本語図書 1997 年発行の意味です。
＊このリスト作成は図書委員会の有志が担当しました。

山岳図書目録——日本語　1997 年

No.	書名	著者	発行所	価格	判型
N 97-001	ああ南壁　第二次 RCC エベレスト登攀記	藤木高嶺	中央公論社	￥ 629	文庫判
N 97-002	合言葉はノー・プロブレム—自閉症の子ら、カナディアン・ロッキーへ	阿部よしこ	岩波書店	￥1500	B6
N 97-003	アイスクライミング—全国版	廣川健太郎／編	白山書房	￥1900	B6
N 97-004	アイヌ語地名　1　網走川	伊藤せいち／編・著	北海道出版企画センター	￥3000	A5
N 97-005	OUTWARD No.3	モンベル広報室／編	モンベル広報室		B5
N 97-006	青いケシの咲くところ　II WHERE THE BLUE POPIES BLOOMS II	千葉盈子	光村印刷	￥3000	200×220

N 97-007	赤城山　花と渓谷—沢あるき／滝めぐり30選	青木　清	上毛新聞社	¥1200	四六判
N 97-008	秋を楽しむ中高年からの山歩き	主婦と生活社／編	主婦と生活社	¥1150	B5
N 97-009	浅間高原の野鳥—バードウオッチングノート	高橋東士	ほおずき書籍 星雲社／発売	¥1238	B6
N 97-010	あした、晴れたら森へ行こう—ぼくが出会った森の巨樹たち	平岡忠夫	リヨン社	¥1600	四六判
N 97-011	吾妻・安達太良・磐梯山 森ガイド	高山の原生林を守る会	歴史春秋出版	¥1429	B6
N 97-012	吾妻連峰山スキー遭難事故報告書　1994年２月	坂根グループ友人有志／編	坂根グループ友人有志		B5
N 97-013	阿蘇・宇宙—火と神々の棲む山	長野良市	熊本日日新聞社　熊本日日新聞情報文化センター／発売	¥2800	B5
N 97-014	あたまを雲の上に出し	小林健一	小学館	¥2300	210×240 ＊写真集
N 97-015	あっ、富士山	あっ、富士山実行委員会／編	メイセイ出版 プロトギャラクシー／発売	¥3600	210×260 ＊写真集
N 97-016	姉崎一馬の自然教室	姉崎一馬	山と渓谷社	¥1400	B6
N 97-017	アマゾンには森がない	原後雄太	実業之日本社	¥1700	B6
N 97-018	雨男、お花畑をゆく	塚谷裕一	NTT 出版	¥1400	B6
N 97-019	荒ぶる自然	高田　宏	新潮社	¥1500	四六判
N 97-020	あるサラリーマンの山	芳村宗雄	白山書房	¥1600	四六判
N 97-021	アルプス記	松方三郎	平凡社	¥1000	HL 判
N 97-022	アルプス・チロルの鉄道—ヨーロッパの屋根をめぐる50の鉄路	三浦幹男・原口隆行・三上泰彦	JTB	¥1700	A5
N 97-023	アルプス鉄道夢紀行—氷河急行からPTTバスまで	桜井　寛	東京書籍	¥2200	A5
N 97-024	アルプス・花と氷河の散歩道	小野有五	東京書籍	¥2000	A5
N 97-025	アルプス4000m峰登山ガイド	リヒャルト・ゲーデケ／著　島田荘平・島田洋子／訳	山と渓谷社	¥1900	B6
N 97-026	石鎚山と瀬戸内の宗教文化	西海賢二	岩田書院	¥5900	A5
N 97-027	一期一会の渓—魚止滝を越え頂稜へ	高桑信一	つり人社	¥1800	A5
N 97-028	一等三角点の山旅55コース—東京周辺	安宅国雄・桑子　登／編	山と渓谷社	¥1700	A5
N 97-029	一等三角点の山々—高度順一等三角点100座	山口ゆき子・横山　隆・高柳生雄・川越はじめ・岡村美邦	新ハイキング社	¥1600	A5
N 97-030	イヌワシ保護—千日の記録	菅家博昭	はる書房	¥3000	A5
N 97-031	いのちの源・緑の森林—国有林の再生は国の手で	星野光衛／編・著	ジャパン・プレス・フォト	¥2000	A4 ＊写真集

N 97-032	いのちの山—飯豊・朝日連峰	高橋金雄	山形新聞社	¥2400	＊写真集
N 97-033	癒しの森—ひかりのあめふるしま屋久島	田口ランディ	ダイヤモンド社	¥1600	B6
N 97-034	インドア・クライミング	東　秀磯	山と溪谷社	¥1200	A5変
N 97-035	インドネシアの山登り	若松林治	のんぶる舎	¥2000	A5
N 97-036	ウォーキング研究　2	江橋慎四郎／編	不昧堂出版	¥3200	A5
N 97-037	失われた世界をいく—グレートジャーニー人類5万キロの旅　4	関野吉晴	小峰書店	¥1262	A5
N 97-038	美しき信州—NAGANO In Four Seasons	佐々木信一／写真　川崎史郎／文	信濃毎日新聞社	¥2762	280×220 ＊写真集
N 97-039	海山のあいだ	池内　紀	角川書店	¥ 480	文庫判
N 97-040	裏磐梯自然ハンドブック—ブナ帯に神秘の湖沼を訪れる	富田国男／編	自由国民社	¥1300	新書判
N 97-041	雨竜沼・暑寒別岳—花と水の楽園	岡本洋典	北海道新聞社	¥1800	A5
N 97-042	ウルタルⅡ峰—さくっと登ってきます	日本山岳会東海支部・岐阜大学雷鳥クラブ／編	ウルタルⅡ峰編集事務局	¥1500	A5
N 97-043	麗しの大地　Ⅰ—信州心の故郷	松本フォトアカデミー／企画	松本フォトアカデミー	¥1500	＊写真集
N 97-044	雲上の槍ケ岳	穂苅貞雄	光村印刷	¥1000	170×190 ＊写真集
N 97-045	雲南・カイラス…四〇〇〇キロ	鎌澤久也	平河出版社	¥3000	四六判
N 97-046	永遠なる山嶺—スフバートル峰(4204m)	モンゴル・アルタイ山脈学術登山隊／編	福島県山岳連盟	非売品	B5
N 97-047	エゾシマリス—大雪の天と地に生きる	愛　高行	講談社	¥1456	180×200 ＊写真集
N 97-048	江戸時代「古地図」総覧	吉成　勇／編	新人物往来社	¥2000	A5
N 97-049	エベレスト花街道を行く—ヒマラヤに咲く花の競演	藤田弘基	講談社	¥1600	A5
N 97-050	欧州アルプス—その計画と実践	九十九山の会／編	九十九山の会		A4
N 97-051	黄土高原とオルドス—中国西北路寧夏・陝北調査記	勉誠社／編	勉誠社	¥2000	A5
N 97-052	大いなる山	山口峯生	山口ふみ		230
N 97-053	大峯こぼれ話	銭谷武平	東方出版	¥2000	四六判
N 97-054	岡田紅陽・田淵行男の世界—歩き続け撮り続けたその生涯	田淵行男記念館／編	田淵行男記念館友の会		B5
N 97-055	岡山を歩く—精選80コース	岡山徒歩の会／編	山陽新聞社	¥1524	B6
N 97-056	奥多摩の尾根と沢	奥多摩山岳会／編	東京新聞出版局	¥1500	四六判
N 97-057	奥秩父・奥多摩・奥武蔵を歩く	磯貝　猛	山と溪谷社	¥1748	A5
N 97-058	奥秩父・両神の谷100ルート—全踏査！	奥秩父渓谷調査団	山と溪谷社	¥2000	A5

N 97-059	奥日光自然ハンドブック—代表的な箱庭の景観を歩く	宮地信良／編	自由国民社	¥1300	B6
N 97-060	奥飛騨　北アルプスと山里の暮らし	小池　潜	山と溪谷社	¥2000	190×250 ＊写真集
N 97-061	奥飛騨山河紀行	田草川譲	日本芸術出版社	¥3800	260×260 ＊写真集
N 97-062	奥穂高岳の旅—憩いの山の画文集	鹿野隆男	新風舎	¥1200	B6
N 97-063	尾瀬を守る—自然保護運動25年の歩み	尾瀬の自然を守る会／編	上毛新聞社	¥1400	B6
N 97-064	お花畑—北アルプスの花園を訪ねて	花畑日尚	山と溪谷社	¥2000	190×250 ＊写真集
N 97-065	温暖化に追われる生き物たち—生物多様性からの視点	堂本暁子・岩槻邦男	築地書館	¥3000	四六判
N 97-066	女ひとりドケチ旅—中国・パキスタン・イラン・トルコ・東欧へ	辻みゆき	BOC 出版部	¥1500	B6
N 97-067	海外旅行と健康—必要な予防接種と健康上のアドバイス	世界保健機関／編	法研	¥1500	A5
N 97-068	回想一高旅行部	一高旅行部縦の会／編	一高旅行部縦の会	非売品	B5
N 97-069	快楽登山のすすめ	原　真	東京新聞出版局	¥1700	B6
N 97-070	鹿児島県の山—分県登山ガイド 45	鹿児島山岳会	山と溪谷社	¥1700	A5
N 97-071	鹿島槍・針ノ木岳を歩く	中西俊明	山と溪谷社	¥1750	A5
N 97-072	風の冥想ヒマラヤ	根深　誠	中央公論社	¥ 762	文庫判
N 97-073	神奈川県立丹沢登山訓練所31年のあゆみ	川井英憲／編	神奈川県山岳連盟	非売品	A4
N 97-074	神々の山嶺（いただき）　上	夢枕　獏	集英社	¥1800	四六判
N 97-075	神々の山嶺（いただき）　下	夢枕　獏	集英社	¥1800	四六判
N 97-076	上高地・安曇野・黒部	実業之日本社／編	実業之日本社	¥ 880	B6
N 97-077	上高地（第３集）—河童橋考	上條　武	独木書房	¥3200	A5
N 97-078	上高地自然ハンドブック	百瀬斐敏／編	自由国民社	¥1300	新書判
N 97-079	上高地の谷から—パークレンジャーと歩く国立公園	百武　充	八坂書房	¥1800	B6
N 97-080	神顕つ山—立山	原槇春夫	光村印刷	¥4381	270×300 ＊写真集
N 97-081	神の国・ネパールヒマラヤ—世界初!!　超大型カメラ（8×10）でとらえた“エベレスト街道”	内野克美	新潮社	¥5800	235×290 ＊写真集
N 97-082	カラコルム氷河紀行“エベレスト街道”	井上重治	井上重治　山と溪谷社／発売	¥3800	A4 ＊写真集
N 97-083	彼ら「挑戦者」—新進クライマー列伝	大蔵喜福	東京新聞出版局	¥1359	四六判
N 97-084	川喜田二郎著作集　8—移動大学の実験	川喜田二郎	中央公論社	¥8544	A5

N 97-085	川喜田二郎著作集　9—国際技術協力と地球環境	川喜田二郎	中央公論社	¥8544	A5
N 97-086	川喜田二郎著作集　10—ヒマラヤの文化生態学	川喜田二郎	中央公論社	¥8544	A5
N 97-087	川喜田二郎著作集　11—チベット文明研究	川喜田二郎	中央公論社	¥8544	A5
N 97-088	川喜田二郎著作集　13—創造と伝統	川喜田二郎	中央公論社	¥8544	A5
N 97-089	関西周辺ハイキング	昭文社／編	昭文社	¥1333	A5
N 97-090	関西ハイキング　'97秋冬号	山と溪谷社／編	山と溪谷社	¥ 667	A4
N 97-091	関東・甲信越　花ウォーキング四季の24コース	山と溪谷社	山と溪谷社	¥1300	A5
N 97-092	関東周辺アウトドアマップ　東京／神奈川／千葉／埼玉／群馬／栃木／茨城／山梨	法研／編	法研	¥1300	B6
N 97-093	関東周辺ハイキング	昭文社／編	昭文社	¥1333	A5
N 97-094	冠松次郎と黒部谿谷—平成9年第5回特別展1997. 8/9—11/9	宇奈月町歴史民俗資料館／編	宇奈月町歴史民俗資料館	非売品	B5
N 97-095	奇跡の鳥ライチョウ—フォト・ドキュメント	森　勝彦	森　勝彦　山と溪谷社／発売	¥3000	250×260
N 97-096	基礎雪氷学講座　4　氷河	藤井理行・小野有五／編・著	古今書院	¥8500	A5
N 97-097	北の民族誌—サハリン・千島の民族	谷川健一／編	三一書房	¥11000	A5
N 97-098	気づけば風が吹いている	菅生雅文	ミリオン出版	¥1300	B6
N 97-099	木の盤	稲本　正	小学館	¥1700	A5
N 97-100	きのこの森の歩き方	赤沼博志	実業之日本社	¥2000	B6
N 97-101	岐阜の山歩きベスト55コース	八代竜也	風媒社	¥1505	A5
N 97-102	九州歌碑の山旅	井上　優	西日本新聞社	¥1900	B6
N 97-103	休息の山	沢野ひとし	角川書店	¥ 440	文庫判
N 97-104	京・北山四季讃歌	桂　俊夫	求龍堂	¥5000	A4 ＊写真集
N 97-105	郷愁の八ヶ岳—山のエッセイ	新田次郎	小学館	¥1200	SL判
N 97-106	京都丹波の山　下　丹波高原	内田嘉弘	ナカニシヤ出版	¥2000	四六判
N 97-107	京都山歩き一周トレール—東山・北山・西山ガイドブック	鈴木　元／編	かもがわ出版	¥1300	A5
N 97-108	極地の科学—地球環境センサーからの警告	福田正己・香内　晃・高橋修平	北海道大学図書刊行会	¥1800	四六判
N 97-109	巨樹紀行—最高の瞬間に出会う	芦田祐文	家の光協会	¥2300	A5
N 97-110	〈巨匠が描く〉日本の名山画集　4　日本アルプス編	鈴木　進／監	郷土出版社	¥18000	A4変 ＊画集

N 97-111	九重山博物誌	梅木秀徳	葦書房	¥1800	四六判
N 97-112	九重・祖母・大崩を歩く	五十嵐賢・日野和道・藤田晴一	山と溪谷社	¥1750	A5
N 97-113	グレートジャーニー　3—人類400万年の旅・中米・北米編	関野吉晴	毎日新聞社	¥3800	A4
N 97-114	クロカンマップ　2	澤田　啓／編	白山書房	¥1700	A5
N 97-115	クロスカントリースキー・ハイキング	桐沢雅典	山と溪谷社	¥1200	
N 97-116	群馬県碓氷郡志		千秋社　多田屋／発売	¥14500	A5 ＊復刻
N 97-117	渓谷散歩—土佐の沢を歩く	谷山省一郎	高知新聞社　高知新聞企業／発売	¥2300	A5
N 97-118	渓流紀行	水野丹石	京都新聞社	¥1600	B6
N 97-119	賢者の山へ	遠藤ケイ	山と溪谷社	¥1600	A5
N 97-120	興亜一路井上雅二　伝記・井上雅二	永見七郎	大空社	¥40000	A5
N 97-121	高山植物の生態学	増沢武弘	東京大学出版会	¥3800	A5
N 97-122	河野兵市アドベンチャーワールド—北極点を踏んだ男	愛媛新聞社／編	愛媛新聞社	¥ 933	A4変
N 97-123	神戸一中遠足部・神戸高校山岳部史	目賀田嘉夫／編	大島輝夫		B5
N 97-124	荒野へ	ジョン・クラカワー／著　佐宗鈴夫／訳	集英社	¥2000	B6
N 97-125	孤高の先蹤者—80歳現役で死す	石間信夫／著　永野敏夫／編	石間富江	¥1800	B6
N 97-126	心が豊かになる山歩き術—のんぼー山歩きのすすめ	鈴木澄雄	山海堂	¥1500	A5
N 97-127	心に残る花の山旅—とっておきの花の山・エーデルワイス咲く山	坂倉登喜子	実業之日本社	¥2200	A5変
N 97-128	五五歳のときに登った山山	本多勝一	朝日新聞社	¥2000	A5
N 97-129	5万分1地形図作成・所蔵目録	国土地理院地図部／編	日本地図センター	¥3143	A4
N 97-130	最終氷期の自然と人類	野尻湖発掘調査団	共立出版	¥3502	A5
N 97-131	砂塵の彼方へ—崑崙山脈ハーン・ヤイリク峰初登頂の記録	山岡人志／編	山岡人志		B5
N 97-132	里山の自然	田端英雄	保育社	¥2400	B6
N 97-133	サバイバル・スキルズ　3	ホビージャパン／編	ホビージャパン	¥2800	B5
N 97-134	砂漠の果ての楼蘭	西　墩	朝日ソノラマ	¥1800	B6
N 97-135	さわやかな笑顔にナマステ—前橋足利銀行経友会ネパール学校支援報告書	前橋足利銀行経友会	前橋足利銀行経友会		B6
N 97-136	さわやかに山へ	田部井淳子	東京新聞出版局	¥1500	A5
N 97-137	山岳　第92年	日本山岳会／編	日本山岳会	¥3500	A5
N 97-138	山書好古	上田茂春／編	日本山書の会	¥4000	菊判

N 97-139	山書の森へ	横山厚夫	山と溪谷社	¥1545	四六判
N 97-140	3000mのドラマ　穂高	小川　誠	東京新聞出版局	¥3800	250×260 ＊写真集
N 97-141	山村芹沢の仕事言葉―山に暮らした古老の書き残し	阿久津満	随想舎	¥1000	B6
N 97-142	山野草	小山征男	誠文堂新光社	¥1400	B6
N 97-143	山野草ガイド―四季の草花をたのしむ	新星出版社／編	新星出版社	¥1200	新書判
N 97-144	山・野草ハンドブック671種	山口昭彦	婦人生活社	¥1920	B6
N 97-145	山雷の古希	朝日カルチャー山村教室有志／編	朝日カルチャー山村教室有志		190
N 97-146	志賀・浅間を歩く	古瀬恵一	山と溪谷社	¥1750	A5
N 97-147	四季富士山の撮影―必ず撮れるテクニック＆撮影スポット	中村　修	世界文化社	¥1500	
N 97-148	じじ・ばばアウトドア放浪記	水谷　郷	新風舎	¥1500	B6
N 97-149	静岡県とその周辺の日帰り滝めぐり	静岡新聞社出版局／編	静岡新聞社	¥1600	B6
N 97-150	静かな山60―マイペース登山ガイド	石井光造	白山書房	¥1900	B6
N 97-151	自然環境とのつきあい方　1　山とつきあう	岩田修二	岩波書店	¥1400	B6
N 97-152	自然環境とのつきあい方　2　森とつきあう	渡邊定元	岩波書店	¥1500	B6
N 97-153	自然環境とのつきあい方　3　川とつきあう	小野有五	岩波書店	¥1400	B6
N 97-154	自然環境とのつきあい方　4　湿地といきる	樋口広芳	岩波書店	¥1400	B6
N 97-155	自然環境とのつきあい方　5　海岸とつきあう	小池一之	岩波書店	¥1400	B6
N 97-156	自然環境とのつきあい方　6　むらの自然をいかす	守山　弘	岩波書店	¥1400	B6
N 97-157	自然環境とのつきあい方　7　まちの自然とつきあう	武内和彦	岩波書店	¥1400	B6
N 97-158	自然観察フィールドガイド―みなみ北海道の森・川・海	自然史研究ネットワーク2000	北海道新聞社	¥1300	四六判
N 97-159	自然と遊ぶ中高年の山歩きガイド―楽しさが基本はじめての山歩き	伊藤幸司	成美堂出版	¥1200	A5
N 97-160	自然を歩く東京周辺ハイキングコース―中高年・ファミリーにぴったりの79コース	浅野孝一／監	永岡書店	¥1200	A5
N 97-161	実践アウトドア・ロープワーク	鳥海良二	地球丸	¥1000	B6

N 97-162	知っておきたいアウトドア危険・有毒生物安全マニュアル	篠永　哲／監	学習研究社	¥1500	A5
N 97-163	私鉄沿線ハイキング—関西周辺	中村圭志／編	山と溪谷社	¥1600	A5
N 97-164	自分流山登り虎の巻—山を三倍楽しむ	羽根田治	雄鶏社	¥1460	A5
N 97-165	首都圏滝＆渓谷ハイクベスト100	旅行読売出版社／編	旅行読売出版社	¥ 857	B5変
N 97-166	樹木　秋冬編	永田芳男	山と溪谷社	¥2300	四六判
N 97-167	樹木　春夏編	永田芳男	山と溪谷社	¥2300	四六判
N 97-168	旬を見つける山菜・木の実	平野隆久・他	永岡書店	¥1648	四六判
N 97-169	上州山歩—Gunma	読売新聞前橋支局／編	読売新聞社	¥1600	A5
N 97-170	植物保護の事典	本間保男・佐藤仁彦・宮田　正・岡崎正規／編	朝倉書店	¥17000	A5
N 97-171	女子高生・汗と涙の初登頂—立川女子高校山岳部未踏峰コングールⅣ峰への挑戦	高橋清輝	大日本図書	¥1400	四六判
N 97-172	女性スポーツのパイオニアたちの実態調査	北志賀会／編	北志賀会		A4
N 97-173	白神山地の入山規制を考える	井上孝夫	緑風出版	¥2200	四六判
N 97-174	白瀬中尉探検記—伝記・白瀬矗	木村義昌・谷口善也	大空社	¥13000	A5
N 97-175	第9回　白簇史朗賞—日本山岳写真コンテスト入賞作品集	山梨県早川町役場／編	山梨県早川町役場		240×250
N 97-176	白簇史朗の THE GREAT KARAKORAM	白簇史朗	東京新聞出版局	¥35000	380×540 ＊写真集
N 97-177	知床半島　最後の秘境	兼本延夫	求龍堂	¥9800	300×300 ＊写真集
N 97-178	新・美しい自然公園（第14巻）—十和田八幡平国立公園「八幡平」	自然環境研究センター	自然公園美化管理財団	¥1000	340
N 97-179	新サハリン探検記—間宮林蔵の道を行く	相原秀起	社会評論社	¥2000	四六判
N 97-180	信州の希少生物と絶滅危惧種	長野県自然教育研究会／編	信濃毎日新聞社	¥1800	A5
N 97-181	新編　渓語り—険谷幽渓でのテンカラ釣り秘話	瀬畑雄三	つり人社	¥1800	A5
N 97-182	針葉樹—県立千葉高等学校山岳部創部50周年記念誌	千葉高等学校山岳部事務局／編	千葉高等学校山岳部OB会		B5
N 97-183	森林生態系の生物地球化学	F. H. ボーマン／著 伊藤昭彦／訳	シュプリンガー・フェアラーク東京	¥3200	A5
N 97-184	森林美	石橋睦美	平凡社	¥4800	217×285 ＊写真集

N 97-185	森林野生動物の調査	森林野生動物研究会／編	共立出版	¥3400	B6
N 97-186	スイス・アルプス	弘済出版社／編	弘済出版社	¥1524	A5
N 97-187	スイス・アルプス展望の旅—アルプスの山懐に至福の時を求めて	池田光雅	光人社	¥2000	四六判
N 97-188	スイス・アルプス花の旅	宮本和郎	新日本出版社	¥4700	A4 ＊画集
N 97-189	スイスアルプスを歩く	佐古田辰世	日本図書刊行会　近代文芸社／発売	¥1456	B6
N 97-190	スキー登山　ヤマケイ登山学校　20	柳澤昭夫・北田啓郎	山と溪谷社	¥1456	A5
N 97-191	鈴木牧之の生涯	磯部定治	野島出版	¥2400	A5
N 97-192	図説雪形	斎藤義信	高志書院	¥3200	A5
N 97-193	生と死の分岐点—山の遭難に学ぶ安全と危険	ピット・シューベルト／著　黒沢孝夫／訳	山と溪谷社	¥2600	A5
N 97-194	生物の大宝庫大雪山—日本自然探検の旅　2	松岡達英	大日本図書	¥3000	A4
N 97-195	世界探検家事典　1—古代～18世紀	ダニエル・B・ベイカー／編　藤野幸雄／編・訳	日外アソシエーツ　紀伊国屋書店／発売	¥9800	A5
N 97-196	世界探検家事典　2—19・20世紀	ダニエル・B・ベイカー／編　藤野幸雄／編・訳	日外アソシエーツ　紀伊国屋書店／発売	¥9800	A5
N 97-197	雪嶺—雪嶺会45年の記録	雪嶺会／編	雪嶺会	¥5000	B5
N 97-198	説話—異界としての山	説話・伝承学会	幹林書房	¥3000	四六判
N 97-199	セブン・イヤーズ・イン・チベット—チベットの七年	ハインリヒ・ハラー／著　福田宏年／訳	角川書店	¥ 940	文庫判
N 97-200	1997貢嘎山—ミニヤコンガ7556m北西稜登攀の記録	札幌山岳会／編	札幌山岳会	¥2800	B5
N 97-201	全国大学山岳部監督会議'96—大学山岳部の指導の現状と問題点	日本山岳会青年部／編	日本山岳会青年部		A5
N 97-202	全国地名読みがな辞典	清光社／編	清光社　大阪人文社／発売	¥8400	B5
N 97-203	千山漫歩—小さな小さな大記録	高木　忠	高木　忠　山と溪谷社／発売	¥1456	A5
N 97-204	先蹤者に捧ぐ—遥かなり南アルプス：石間信夫の山旅たどる	児平隆一	静岡新聞社		四六判
N 97-205	仙台マタギ鹿狩りの話	毛利総七郎	慶友社	¥2000	四六判
N 97-206	草原と氷河を越えて—モンゴル・フィティン峰登山隊報告書	若林英郎／編	三重県高校登山部		B6
N 97-207	続・利根川流域の五十山	我孫子登山倶楽部／編	我孫子登山倶楽部		B5
N 97-208	続　富士を見る山歩き	工藤隆雄	小学館	¥1600	A5

N 97-209	空にいちばんちかい町—アラスカ・アウトドア休日	河野　遥	山と溪谷社	¥1700	A5
N 97-210	空へ—エベレストの悲劇はなぜ起きたか	ジョン・クラカワー／著　海津正彦／訳	文藝春秋	¥1762	四六判
N 97-211	大雪山のナキウサギ裁判	大雪山のナキウサギ裁判を支援する会／編	緑風出版	¥2400	B6
N 97-212	大草原の国モンゴル	日本モンゴル親善協会／編	日本モンゴル親善協会		310 ＊写真集
N 97-213	大草原モンゴル	三増雅一	光村推古書院	¥1000	310 ＊写真集
N 97-214	大旅行記　2	イブン・バットゥータ／著　イブン・ジュザイイ／編　家島彦一／訳・注	平凡社	¥3000	B6変 ＊東洋文庫
N 97-215	多雨林と火山—インドネシアの自然と人々	児玉　茂	古今書院	¥9500	菊判
N 97-216	高尾山の春にいだかれて	谷　哲朗・谷　静代	光陽出版社	¥ 953	160×220 ＊写真集
N 97-217	高尾の森から—平成の都民へ呼びかける	米澤邦昌	山と溪谷社	¥1800	B6
N 97-218	たかが山登りされど山登り	湯浅道男	成文堂	¥2500	A5
N 97-219	滝をゆく	宇野　薫	高知新聞社	¥2800	A5
N 97-220	立ち枯れる山	宮下正次	新日本出版社	¥2500	B5変
N 97-221	谷川岳	緑谷哲明	日本図書刊行会　近代文芸社／発売	¥1165	四六判
N 97-222	谷川岳を歩く	竹内真一	山と溪谷社	¥1750	A5
N 97-223	探検家としてのわが生涯	スウェン・ヘディン／著　山口四郎／訳	白水社	¥4000	四六判
N 97-224	淡彩の尾瀬—スケッチとエッセイ	唐沢恭二	日貿出版社	¥2200	A5
N 97-225	丹沢四季行	渡辺千昭	かなしん出版	¥1200	170×180 ＊写真集
N 97-226	丹沢自然ハンドブック—都会のオアシス・その魅力をさぐる	古林賢恒／編	自由国民社	¥1300	新書変
N 97-227	地球環境と自然保護	東京農工大学農学部「地球環境と自然保護」編集委員会／編	培風館	¥2500	B5
N 97-228	地図で歩く鉄道の峠	今尾恵介	けやき出版	¥1500	B6
N 97-229	秩父・奥多摩花登山	岩尾香三ほか／編	幹書房	¥1800	A5
N 97-230	秩父宮記念学術賞記念誌	日本学術振興会／編	日本学術振興会		A4
N 97-231	チベット研究文献目録　2　1978～1995	貞金綾子／編	高科書店	¥12000	B5
N 97-232	チベット巡礼	永橋和雄／写真　小野田俊蔵ほか／文	KDD クリエイティブ	¥3398	A5
N 97-233	中央亜細亜より亜拉比亜へ—福島将軍遺績　続	福島安正／著　太田阿山／編	大空社	¥13000	A5

N 97-234	中央アメリカをかける—グレートジャーニー人類5万キロの旅　5	関野吉晴	小峰書店	¥1300	A5
N 97-235	中高年登山「なんでも」百科	福島正明	東京新聞出版局	¥1500	四六判
N 97-236	中高年の楽しい山歩き	河村茂保	けやき出版	¥ 800	A5
N 97-237	中高年のための安全登山—熟年万歳	堀田弘司	家の光協会	¥1600	A5
N 97-238	中高年のための百名山	主婦と生活社／編	主婦と生活社	¥1150	B5変
N 97-239	中高年のための山歩きが楽しくなる本—これから始める人・再び始める人への親切ガイド	石井光造	日本実業出版社	¥1300	B6
N 97-240	中高年の山散歩—いで湯と味覚を訪ねながら	国際地学協会／編	国際地学協会	¥1400	A5
N 97-241	中高年の山旅—関東の低山50コース	馬場渓二	日地出版	¥1400	四六判
N 97-242	中高年山歩き100の危険	ビーアンドエス／編	新紀元社	¥1600	B6
N 97-243	中高年、山と出会う—登山ブームの考現学	藤田健次郎	山と溪谷社	¥1700	四六判
N 97-244	中国魅惑の雲南—一万二千キロの風景	川野和子	新評論	¥4000	四六判
N 97-245	中国歴代西域紀行選	渡辺義一郎／編・訳	ベースボールマガジン社	¥2200	四六判
N 97-246	中四国・兵庫の山百選	守屋益男／編	山陽新聞社	¥1600	A5
N 97-247	中部山岳国立公園立山ルート緑化研究報告書・第3報	立山ルート緑化研究委員会	立山黒部貫光		B5
N 97-248	鳥海山	斎藤重一	なんば書房	¥3000	A5
N 97-249	鳥海山—自然・歴史・文化	式年遷座記念誌刊行会／編	鳥海山大物忌神社		A5
N 97-250	鳥海山・花と生きものたちの森	斎藤政広	無明舎出版	¥1800	B6
N 97-251	頂稜の散歩—重たくなった山靴の詩	市川　忠	市川　忠　山と溪谷社／発売	¥2600	A5
N 97-252	チロルからウィーンへ—旅のエッセイ	新田次郎	小学館	¥1200	SL判
N 97-253	追悼—ゴーキョ谷に逝った方々へ捧ぐ	ゴーキョ谷山の会（遺族会）／編	ゴーキョ谷山の会（遺族会）	非売品	A5
N 97-254	追悼・土倉九三	追悼文集編集委員会／編	土倉事務所		A5
N 97-255	定年からのマイカー登山ふたり旅	篠原郁夫	西日本新聞社	¥1800	B6変
N 97-256	ディラン峰南面登山の記録—1996山梨岳連ディラン峰登山隊報告書	山梨県山岳連盟／編	山梨県山岳連盟		B5
N 97-257	手作りエネルギー大全	家の光協会／編	家の光協会	¥2718	A5
N 97-258	出羽三山	伊藤　武	みちのく書房	¥7000	A4
N 97-259	出羽三山の信仰と伝統	阿部良春	東北出版企画	¥3500	A5

N 97-260	天山ボゴダ山群4410M峰登山隊報告書(1997. 7. 31—8. 16)	堀口徹夫／編	岩手大学山の会	非売品	B5
N 97-261	天葬の国チベット	丹羽基二	芙蓉書房出版	¥2600	四六判
N 97-262	東京周辺山のいで湯＋ハイキング	弘済出版社／編	弘済出版社	¥1190	四六判
N 97-263	東京都地学のガイド—東京都の地質とそのおいたち	東京都地学のガイド編集委員会／編	コロナ社	¥2600	B6
N 97-264	東京付近のんびりゆったり山歩記	新妻喜永	実業之日本社	¥2000	A5
N 97-265	東京辺境—東京の野生を探険する	探険倶楽部／編	ワールドマガジン社　青人社／発売	¥1429	200×200
N 97-266	東洋大学山岳部1995年度冬山合宿事故報告書　I—戸隠連峰・西岳	東洋大学体育会山岳部／編	東洋大学山岳部		B5
N 97-267	遠野物語考	赤坂憲雄	筑摩書房	¥1200	
N 97-268	戸隠—上信越国立公園	小川秀一	ほおずき書籍　星雲社／発売	¥1300	170×190　＊写真集
N 97-269	登山の文化史	桑原武夫	平凡社	¥ 760	HL 判
N 97-270	登山・ハイキングバス時刻表—'97夏秋号・関東版	本の出版社／編	書苑新社	¥1143	B6
N 97-271	登山・ハイキングバス時刻表—'97夏秋号・近畿版	本の出版社／編	書苑新社	¥1143	B6
N 97-272	登山・ハイキングバス時刻表—'98冬春号・関東版	本の出版社／編	書苑新社	¥1143	B6
N 97-273	登山・ハイキングバス時刻表—'98冬春号・近畿版	本の出版社／編	書苑新社	¥1143	B6
N 97-274	栃木の自然をたずねて	「栃木の自然」編集委員会／編	築地書館	¥1800	四六判
N 97-275	栃木の山 120	栃木県勤労者山岳連盟宇都宮ハイキングクラブ／編	随想舎	¥1800	A5
N 97-276	利根川上流紀行	新井幸人／撮影　伊藤信吉／文	時事通信社	¥2600	210×240　＊写真集
N 97-277	富山でバードウォッチング！—探鳥地ガイド	日本野鳥の会・富山県支部／編	桂書房	¥2000	A5
N 97-278	中里介山と大菩薩峠	桜沢一昭	同成社	¥1900	四六判
N 97-279	流れに沿って—穂高から上高地	里村良一	光村印刷	¥4286	250×240　＊写真集
N 97-280	ナキウサギ　In Lake Shikaribetsu	坂下康裕	北海道新聞社	¥1600	190×190
N 97-281	南極パラダイス	有馬清徳	光村推古書院	¥1000	170×190　＊写真集
N 97-282	2時間登頂の山	森田秀巳／編	山と溪谷社	¥1553	A5
N 97-283	日台友好　玉山・雪山親善登山報告書	佐々木民秀・鈴木裕子／編	日本山岳会秋田支部		B6
N 97-284	日光近代学事始	近代日光史セミナー／編	随想舎	¥1000	新書判

N 97-285	日本アルプス―見立ての文化史	宮下啓三	みすず書房	¥2500	四六判
N 97-286	日本アルプスの登山と探検	W．ウェストン／著　青木枝朗／訳	岩波書店	¥ 660	文庫判
N 97-287	ニホンザルの山	伊沢紘生	フレーベル館	¥1500	270
N 97-288	日本山岳会・熊本支部設立40周年記念誌	日本山岳会熊本支部／編	日本山岳会熊本支部		B5
N 97-289	日本山岳ルーツ大辞典	池田未則／監　村石利夫／編・著	竹書房	¥19000	B5
N 97-290	日本三百名山	荒井　魏／編	毎日新聞社	¥2900	B5
N 97-291	日本森林紀行―森のすがたと特性	大場秀章	八坂書房	¥1800	四六判
N 97-292	日本チョーオユー学術登山隊1995報告書	山本正嘉	山本正嘉	非売品	B5
N 97-293	日本登山大系　1　北海道・東北の山	柏瀬祐之・岩崎元郎・小泉　弘／編	白水社	¥4700	A5
N 97-294	日本登山大系　2　南会津・越後の山	柏瀬祐之・岩崎元郎・小泉　弘／編	白水社	¥4700	A5
N 97-295	日本登山大系　3　谷川岳	柏瀬祐之・岩崎元郎・小泉　弘／編	白水社	¥4300	A5
N 97-296	日本登山大系　4　東京近郊の山	柏瀬祐之・岩崎元郎・小泉　弘／編	白水社	¥4200	A5
N 97-297	日本登山大系　5　剣岳・黒部・立山	柏瀬祐之・岩崎元郎・小泉　弘／編	白水社	¥4400	A5
N 97-298	日本登山大系　6　後立山・明星山・海谷・戸隠	柏瀬祐之・岩崎元郎・小泉　弘／編	白水社	¥4400	A5
N 97-299	日本登山大系　7　槍ケ岳・穂高岳	柏瀬祐之・岩崎元郎・小泉　弘／編	白水社	¥4200	A5
N 97-300	日本登山大系　8　八ケ岳・奥秩父・中央アルプス	柏瀬祐之・岩崎元郎・小泉　弘／編	白水社	¥4400	A5
N 97-301	日本登山大系　9　南アルプス	柏瀬祐之・岩崎元郎・小泉　弘／編	白水社	¥4500	A5
N 97-302	日本登山大系　10　関西・中国・四国・九州の山	柏瀬祐之・岩崎元郎・小泉　弘／編	白水社	¥5200	A5
N 97-303	日本の巨樹・老樹	小笠原隆三	西日本法規出版　星雲社／発売	¥1700	A5
N 97-304	日本のクラシックルート　アルパインクライミング・ルート集	山と溪谷社／編	山と溪谷社	¥2600	B5
N 97-305	日本の自然　'97年版	朝日新聞社／編	朝日新聞社	¥4000	B5
N 97-306	日本の自然　地域編　2　東北	小島圭二・田村俊和・菊池多賀夫・境田清隆／編	岩波書店	¥4200	270
N 97-307	日本の自然はなぜ荒れたのか―非自然の風景	向　一陽	共同通信社	¥1400	四六判
N 97-308	日本の滝紀行　上巻　東日本編	奈良本辰也／著　坂本チクロー／写真	舞字社　星雲社／発売	¥3800	B5
N 97-309	日本の滝紀行　下巻　西日本編	奈良本辰也／著　坂本チクロー／写真	舞字社　星雲社／発売	¥3800	B5

N 97-310	日本の地名		谷川健一	岩波書店	￥ 630	新書判
N 97-311	日本の美林		井原俊一	岩波書店	￥ 630	新書判
N 97-312	日本の名山 2 岩手山		串田孫一・今井通子・今福龍太／編	博品社	￥1600	四六変
N 97-313	日本の名山 4 谷川岳		串田孫一・今井通子・今福龍太／編	博品社	￥1600	四六変
N 97-314	日本の名山 5 浅間山		串田孫一・今井通子・今福龍太／編	博品社	￥1600	四六変
N 97-315	日本の名山 6 白馬岳		串田孫一・今井通子・今福龍太／編	博品社	￥1600	四六変
N 97-316	日本の名山 8 立山		串田孫一・今井通子・今福龍太／編	博品社	￥1600	四六変
N 97-317	日本の名山 9 槍ケ岳		串田孫一・今井通子・今福龍太／編	博品社	￥1600	四六変
N 97-318	日本の名山 10 穂高岳		串田孫一・今井通子・今福龍太／編	博品社	￥1600	四六変
N 97-319	日本の名山 12 八ケ岳		串田孫一・今井通子・今福龍太／編	博品社	￥1600	四六変
N 97-320	日本の名山 13 富士山 Part 1		串田孫一・今井通子・今福龍太／編	博品社	￥1600	四六変
N 97-321	日本の名山 14 富士山 Part 2		串田孫一・今井通子・今福龍太／編	博品社	￥1600	四六変
N 97-322	日本の名山 16 甲斐駒ケ岳		串田孫一・今井通子・今福龍太／編	博品社	￥1600	四六変
N 97-323	日本の名山 17 北岳		串田孫一・今井通子・今福龍太／編	博品社	￥1600	四六変
N 97-324	日本の名山 別巻1 丹沢		串田孫一・今井通子・今福龍太／編	博品社	￥1600	四六変
N 97-325	日本の名山 別巻2 高尾山		串田孫一・今井通子・今福龍太／編	博品社	￥1600	四六変
N 97-326	日本百名山えちご駒ケ岳山小屋つれづれ日記		米山孝志	コマガタ 星雲社／発売	￥2300	200×230 ＊写真集
N 97-327	ネイチャースキー—スキーで楽しむ雪の森のハイキング		橋谷 晃	山海堂	￥1748	A5
N 97-328	ネーコル—チベット巡礼		伊藤健司	毎日コミュニケーションズ	￥1748	A5変
N 97-329	熱汗山脈—八重山列島単独登頂の記録		高橋敬一	随想舎	￥1300	A5
N 97-330	熱帯雨林からの声		ブルーノ・マンサー／著 橋本雅子／訳	野草社 新泉社／発売	￥2600	A5
N 97-331	ネパール		トニー・ハーゲン／著 町田靖治／訳	白水社	￥5800	A5
N 97-332	ネパール—暮らしがわかるアジア読本		石井 溥／編	河出書房新社	￥2000	B6
N 97-333	ネパール紀行 文化人類学の旅		三瓶清朝	明石書店	￥2500	四六判
N 97-334	ネパール語辞典		三枝礼子	大学書林	￥36000	220

N 97-335	嶺呂讃歌	蓮實淳夫	随想社	¥1200	A5 ＊句集
N 97-336	登一三木慶介作品集	三木慶介	光村印刷	¥2000	350×256 ＊写真集
N 97-337	野山を歩く100コース—群馬の山歩き130選姉妹編	安中山の会／調査・執筆　上毛新聞社／編	上毛新聞社	¥1000	新書判
N 97-338	ハイキング12カ月	山と渓谷社大阪編集室／編	山と渓谷社	¥1553	A5
N 97-339	白山昆虫誌	富樫一次	十月社	¥1500	B6
N 97-340	白山を歩く	林　正一・中村和男・山本健二・山口光男	山と渓谷社	¥1750	A5
N 97-341	パソコンで楽しむ山と地図—マルチメディアの山旅	山と地図のフォーラム／編・著	実業之日本社	¥2000	A5
N 97-342	パトニーヴェイルからの風	日本山岳会信濃支部／編	日本山岳会信濃支部	¥1800	四六判
N 97-343	花山稜・白馬連峰	中村至伸	銀河書房	¥1238	165×190 ＊写真集
N 97-344	花の北アルプス—高嶺に咲く花々	永田芳男	ブルーガイドセンター　実業之日本社／発売	¥1500	200×230 ＊写真集
N 97-345	花の谷川岳	宮前俊男	ほおずき書籍　星雲社／発売	¥1000	新書変
N 97-346	花の百名山	田中澄江	文藝春秋	¥2857	A5
N 97-347	花の百名山・登山ガイド上	山と渓谷社／編	山と渓谷社	¥1700	A5
N 97-348	花の百名山・登山ガイド下	山と渓谷社／編	山と渓谷社	¥1700	A5
N 97-349	花の山旅50コース—東京周辺	紀村朋子／編	山と渓谷社	¥1650	A5
N 97-350	花の山旅・みちのくの山	一戸義孝	実業之日本社	¥2200	A5変
N 97-351	花を求めてハイキング—この時期・この花を探しに・この山へ	大内尚樹	主婦の友社	¥1200	B5
N 97-352	遥かなる高みをめざして—関西岩峰会創立35周年記念誌	関西岩峰会／編	関西岩峰会		B5
N 97-353	英彦山と山麓物語	白石直典	西日本新聞社	¥2000	四六判
N 97-354	ひざの痛みを治す—中高年者、登山・スポーツ愛好家に贈る	大森薫雄	東京書籍	¥1300	四六判
N 97-355	ピッケルと口紅—女たちの地球山旅	北村節子	東京新聞出版局	¥1400	四六判
N 97-356	ひと目でわかる美ケ原の四季	山本峻秀	栃の葉書房	¥1680	B6
N 97-357	ひとりで山を歩く—単独山行の知恵と楽しみ方	石井昭子	山と渓谷社	¥ 950	新書判
N 97-358	ヒマラヤの自然誌—ヒマラヤから日本列島を遠望する	酒井治孝／編・著	東海大学出版会	¥2000	A5

N 97-359	ヒマラヤのスパイ	シドニー・ウィグノール／著　三浦彊子／訳	文藝春秋	¥2667	四六判
N 97-360	ヒマラヤを駆け抜けた男—山田昇の青春譜	佐瀬　稔	中央公論社	¥ 686	文庫判
N 97-361	氷雪テクニック　ヤマケイ登山学校　19	木本　哲	山と溪谷社	¥1456	A5
N 97-362	氷層の山	森下博三	新樹社	¥1800	四六判
N 97-363	比良の父・角倉太郎—比良登山今昔ものがたり	角倉太郎／著　佐々木信夫／編	ナカニシヤ出版	¥2200	四六判
N 97-364	風景の成立—志賀重昂と『日本風景論』	山本教彦・上田誉志	海風社	¥2500	A5
N 97-365	ブータンの民話	クスム・K・カプール／編・著　林　祥子／訳	恒文社	¥1800	B6
N 97-366	夫婦で登った百名山	金子紀雄・金子敬子	日本エディタースクール出版部	¥1800	四六判
N 97-367	フォトスケッチの山旅—山のモチーフ12ヵ月	川井靖元	実業之日本社	¥2500	A5変
N 97-368	富岳への路—林田正幹遺稿・追悼集	林田正幹遺稿・追悼委員会／編	林田正幹遺稿・追悼委員会	¥3000（送料¥500）	A5
N 97-369	福岡チョモランマ登山隊1996報告書	福岡市山岳協会／編	福岡市山岳協会		310
N 97-370	福島将軍遺績　伝記・福島安正	福島安正／著　太田阿山／編	大空社	¥12000	A5
N 97-371	富士山365日	百木説男	ディーディーエヌ	¥4800	B5 ＊写真集
N 97-372	富士山天地	浜口タカシ	日本カメラ社	¥4800	215×300 ＊写真集
N 97-373	富士山のマツタケ	岡村稔久	岡村稔久　山と溪谷社／発売	¥2000	A5
N 97-374	富士の見える風景—かながわ53選	浜口タカシ	東京新聞出版局	¥2100	240×250 ＊写真集
N 97-375	仏和山岳用語集—登山、クライミング、山スキーのフランス語とカタカナ日本語の語源研究	村西博次／編・著	京都山の会出版局　ナカニシヤ出版／発売	¥2200	B6
N 97-376	ブナの森から都会が見える—みちのく朝日連峰山だより	西沢信雄	山と溪谷社	¥1600	四六判
N 97-377	冬のアイガー北壁初登攀	トニー・ヒーベラー／著　横川文雄／訳	ベースボール・マガジン社	¥1900	四六判
N 97-378	冬山　ヤマケイ登山学校　10	近藤和美	山と溪谷社	¥1500	A5
N 97-379	ふるさと宮ケ瀬—渓谷の村から	ふるさと宮ケ瀬を語り継ぐ会／編・著	夢工房	¥ 952	A5
N 97-380	古元一弘君奥沢谷遭難事故報告書	鈴蘭山の会運営委員会／編	鈴蘭山の会運営委員会		B5
N 97-381	ブロード・ピーク1988—ガッシャーブルム1994報告書	富山県山岳連盟／編	富山県山岳連盟		A4

N 97-382	変貌するアルピニズム	栗林一路	栗林一路		B5
N 97-383	北越雪譜	鈴木牧之／著　荒木常能／訳	野島出版	¥6180	220
N 97-384	牧之と歩く秋山郷—越後・信州境の大自然	島津光夫	高志書院	¥2500	A5
N 97-385	北陸の湖沼	北陸電力地域総合研究所／企画	橋本確文堂	¥1000	B6
N 97-386	北海道の旅	串田孫一	平凡社	¥1000	HL 判
N 97-387	北海道の山—分県登山ガイド　0	伊藤健次	山と溪谷社	¥1700	A5
N 97-388	北海道森と海の動物たち	エコ・ネットワーク／編	北海道新聞社	¥2000	A5
N 97-389	北海道森と川からの伝言 Messages from nature	小野有五	北海道新聞社	¥1600	四六判
N 97-390	北海道山の花図鑑　利尻島・礼文島	梅沢　俊	北海道新聞社	¥2350	B6
N 97-391	北極圏の居候	街道憲久	NTT 出版	¥1600	四六判
N 97-392	北極点はブルースカイ—日本人初の 780 キロ単独踏破	河野兵市	愛媛新聞社	¥1800	A5
N 97-393	北極の日本晴れ—氷を歩いて 2 千キロ	大場満郎	光文社	¥1400	四六判
N 97-394	本多勝一集　26—アイヌ民族	本多勝一	朝日新聞社	¥3800	A5
N 97-395	マイカーで行く湯旅・山旅ハイキング—東日本・中部編	小出正一	主婦と生活社	¥1200	A5
N 97-396	マイカー登山ふたり旅	篠原郁夫	西日本新聞社	¥1800	B5変
N 97-397	まいづる　40—福岡まいづる山岳会創立40周年記念特集号	福岡まいづる山岳会／編	福岡まいづる山岳会	非売品	B5
N 97-398	マカルー東稜—日本山岳会マカルー登山隊1995報告書	日本山岳会マカルー登山隊／編	山と溪谷社	¥4000	A4変
N 97-399	マクリーンの渓谷—若きスモーク・ジャンパー（森林降下消防士）たちの悲劇	ノーマン・マクリーン／著　水上峰雄／訳	集英社	¥2200	B6
N 97-400	マチュ・ピチュ山頂	パブロ・ネルーダ／著　田村さと子／訳	風書房	¥2300	A5 変
N 97-401	松浦武四郎　伝記・松浦武四郎	横山健堂	大空社	¥15000	A5 ＊復刻
N 97-402	松之山郷の歴史散歩	関谷哲郎	野島出版	¥1810	B6
N 97-403	幻の山、カカボラジ—冒険家族、ミャンマーの最高峰初登頂	尾崎　隆	山と溪谷社	¥1900	A5
N 97-404	見知らぬオトカム—辻まことの肖像	池内　紀	みすず書房	¥2800	A5変
N 97-405	水と樹へ—埼玉の滝・名水・巨樹めぐり	大久根茂	幹書房	¥1800	A5
N 97-406	御岳山わくわくハイク	自然教育研究センター／編	のんぶる舎	¥1300	A5

N 97-407	緑深き森へ遊学行	今井通子	日本放送出版協会	¥1700	四六判
N 97-408	南アルプスの将来像—フォーラム報告（1995－97年）	日本山岳会山梨支部／編	日本山岳会山梨支部		B5
N 97-409	峯—日本山岳会石川支部・創立50周年記念号	樽矢導章／編	日本山岳会石川支部		A5
N 97-410	美濃の山　第２巻　揖斐川水系の山　２—長良川水系の山	大垣山岳協会／編	ナカニシヤ出版	¥2200	四六判
N 97-411	妙高・戸隠を歩く	磯貝　猛	山と溪谷社	¥1750	A5
N 97-412	見る知る信州の自然大百科	「見る知る信州の自然大百科」刊行会／編・著	郷土出版社	¥11000	A4
N 97-413	明治大学ワンダーフォーゲル部・六十年のあゆみ	明治大学ワンダーフォーゲル部／編	明治大学ワンダーフォーゲル部	非売品	270
N 97-414	もっとも長い塩の道—日本海・アルプス・太平洋350km	竹内宏ほか／編・著	きょうせい	¥2600	A5
N 97-415	森案内	細川　剛	小学館	¥3900	220×310
N 97-416	森からの贈り物	天野礼子／編・著	東京書籍	¥1600	四六判
N 97-417	森と人と環境	野口俊邦	新日本出版社	¥1700	B6
N 97-418	森の自然学校	稲本　正	岩波書店	¥ 660	文庫判
N 97-419	森のめぐみ	姉崎一馬	リブロポート	¥1900	B5変
N 97-420	森を楽しむ山登り—木を見て森を見て山を知る	松倉一夫	山と溪谷社	¥ 950	新書判
N 97-421	森を守る文明・支配する文明	安田喜憲	PHP研究所	¥ 657	文庫判
N 97-422	モンゴル	小長谷有紀	河出書房新社	¥2000	200
N 97-423	モンゴル　風のような物語	松田忠徳	中西出版	¥1600	A5
N 97-424	文部省登山研修所30年の歩み—昭和41年～平成８年度	文部省登山研修所／編	文部省登山研修所		B5
N 97-425	八重山手帳'98	奥沢秀一／編	南山舎	¥1286	187×120
N 97-426	屋久島—世界遺産の自然	青山潤三	平凡社	¥3800	A4変 ＊写真集
N 97-427	屋久島花草木—世界自然遺産の島	川原勝征	八重岳書房	¥2000	四六判
N 97-428	屋久島を歩く	吉川　満	山と溪谷社	¥1750	A5
N 97-429	野生のうたが聞こえる	アルド・レオポルド／著　新島義昭／訳	講談社	¥ 980	文庫判
N 97-430	八ケ岳—風のスケッチ	渡辺隆次	筑摩書房	¥ 600	文庫判
N 97-431	薬効もある山野草カラー百科—自然の恵み、健康を摘む	畠山陽一	パッチワーク通信社	¥1429	B5
N 97-432	柳田国男の本棚　５　山の伝説	青木純二	大空社	¥10000	A5
N 97-433	山—ミシュレ	ジュール・ミシュレ／著　大野一道／訳	藤原書店	¥3800	A5
N 97-434	山歩きの愉しみ	串田孫一	角川春樹事務所	¥1000	文庫判

N 97-435	山里そのまま	岡本良治	山と溪谷社	¥1600	B6 ＊写真集
N 97-436	山里の食物譜	手塚宗求	恒文社	¥1700	四六判
N 97-437	山スキールート図集 '98～'99　第1集	白山書房編集部／編	白山書房	¥1600	四六判
N 97-438	山スキールート図集 '98～'99　第2集	白山書房編集部／編	白山書房	¥1600	四六判
N 97-439	山DAS　山歩きデータバンク	石井光造／編・著	白山書房	¥1800	A5
N 97-440	山旅湯旅ふたたび—信州の秘めたる名山・名湯めぐり	丸山晴弘	ケイシイシイ	¥1800	
N 97-441	山でピンチになったら—思わぬ危機防げる危険	上村信太郎	山と溪谷社	¥ 950	新書判
N 97-442	山に癒される—裁判官を支えた山	清　雄策	清　雄策　山と溪谷社／発売	¥1600	四六判
N 97-443	山に寄すエッセイ	小川　博	日本図書刊行会　近代文芸社／発売	¥1500	四六判
N 97-444	山に寄せる心	徳久球雄	玉川大学出版部	¥2800	B6
N 97-445	ヤマネ—森に棲むもの	西村　豊	光村印刷	¥1190	200×220
N 97-446	山の楽想	石田喜八	石田喜八		A5 ＊詩集
N 97-447	山の神々いらすと紀行	とよた　時	東京新聞出版局	¥1500	四六判
N 97-448	山の句集—冬木群	川崎精雄	茗溪堂	¥2500	B6
N 97-449	山の心木の心人の心	かつみゆきお	池田出版　星雲社／発売	¥2857	210×210
N 97-450	山のこぼれ話	関本快哉	大日本絵画	¥1300	四六判
N 97-451	山の自然学現地講座・第63回—ヨセミテ紀行	日本山岳会自然保護委員会／編	日本山岳会自然保護委員会		A4
N 97-452	山の写真塾—自然を見る撮る楽しむ「分割法」	佐藤篤志	実業之日本社	¥2500	A5変
N 97-453	山の花手帳—高原・湿原・高山の花	畔上能力／監	婦人画報社	¥1648	A5
N 97-454	山の花の歌—短歌で綴る山の花図鑑　第4集	山下潔子	ストーク　星雲社／発売	¥2800	210×300
N 97-455	山の響き	田畑吉雄	ナカニシヤ出版	¥2500	四六判
N 97-456	山登りのプランと準備　ヤマケイ登山学校　5	松倉一夫	山と溪谷社	¥1456	A5
N 97-457	山の民俗誌	湯川洋司	吉川弘文館	¥1700	B6
N 97-458	山はいのちをのばす—老いを迎え討つかしこい山の歩き方	田中澄江	青春出版社	¥1300	四六判
N 97-459	山を想う—学習院山岳部・三つの訓え	舟橋明賢	学習院山桜会・有志		A5
N 97-460	山を楽しむ山名辞典	石井光造	東京新聞出版局	¥1500	四六判
N 97-461	山を楽しむ地図読本	石井光造	東京新聞出版局	¥1300	四六判
N 97-462	槍ケ岳開山　播隆	穂苅三寿雄・穂苅貞雄	大修館書店	¥3800	A5

N 97-463	やんばる・亜熱帯の森—この世界の宝をこわすな	平良克之・伊藤嘉昭	高文研	¥2800	A5
N 97-464	雪と氷の科学者・中谷宇吉郎	東　晃	北海道大学図書刊行会	¥2800	四六判
N 97-465	雪と氷のスポーツ百科	高橋幸一・野々宮徹／編	大修館書店	¥2400	240×180
N 97-466	雪の尾根　読書の山	川見博美	川見博美		四六判
N 97-467	雪を読む—『北越雪譜』に沿いながら	高田　宏	大巧社	¥1200	新書判
N 97-468	ヨーロッパの火山紀行	小山真人	筑摩書房	¥ 660	文庫判
N 97-469	ラスキンの文明論	井伊玄太郎	井伊玄太郎　雄松堂出版／発売	¥3000	A5
N 97-470	リーダーは何をしていたか	本多勝一	朝日新聞社	¥ 600	文庫判
N 97-471	利尻—山の道花の道	宮本誠一郎・杣田美野里	北海道新聞社	¥1100	A5
N 97-472	利尻・知床を歩く	梅沢　俊	山と溪谷社	¥1750	A5
N 97-473	林野庁解体論—そのシナリオと森林再生への道	岡島成行	洋泉社	¥1600	四六判
N 97-474	霊山と信仰の世界	伊藤清郎	吉川弘文館	¥2678	四六判
N 97-475	霊峰立山の賦—平成の立山神殿御遷宮	北日本新聞社／編	北日本新聞社	¥1429	200×200
N 97-476	65歳北極熊を追う—イヌイットとともに犬ゾリ冒険旅行	佐藤富雄	中経出版	¥1000	B6
N 97-477	六〇歳の記念に登った山山	本多勝一	悠々社	¥2300	A5
N 97-478	ロッキー山脈踏破行	イザベラ・バード／著　小野崎晶裕／訳	平凡社	¥1100	HL 判
N 97-479	ROCKY MOUNTAINS	白簇史朗	山と溪谷社	¥20000	B4
N 97-480	六甲山博物誌	玉起彰三	神戸新聞総合出版センター	¥1500	B6
N 97-481	六甲の山—京阪神ベストハイク	小鯛叡一郎	七賢出版	¥1500	B6
N 97-482	和賀岳の四季	高橋喜平・小野寺聡	岩手日報社	¥2140	190×220 ＊写真集
N 97-483	和州吉野郡群山記—その踏査路と生物相	御勢久右衛門／編・著　東　謙吉・岩野和彦／著	東海大学出版局	¥10000	B5
N 97-484	私でも登れた百名山—58歳からの攻略	高橋哲雄	東京新聞出版局	¥1400	四六判
N 97-485	わたしの高尾山—自然観察ハイキング・ガイドブック	高尾山自然保護実行委員会／編	アイ企画／発売	¥ 824	B6
N 97-486	私の登山人生—高尾山からヒマラヤまで	柴田初子	日本の名山を選ぶ会		A5
N 97-487	私のブータン—カメラ紀行	片山英一	片山英一		310

山岳図書目録——英語　1996年

No.	書　名	著　者	発行所	発行地
E 96-046	Cape Rock	Julian Fisher	Nomad Mountain Publications	
E 96-047	Central Apennines of Italy—Walks, Scrambles & Climbs	Stephen Fox	Cicerone Press	London
E 96-048	Defying Gravity—High Adventure on Yosemite's Walls	Gary Arce	Wilderness Press	
E 96-049	Descent into Chaos —The Doomed Expedition to Low's Gully	Richard Connaughton	Brassey's	
E 96-050	Free Climbing with John Bachar	J. Bachar and S. Boga	Stackpole Books	
E 96-051	The High Andes —A Guide for Climbers	John Biggar	Andes	
E 96-052	Scrambles Amongst the Alps in the Years 1860-69	Edward Whymper	Dover Publications	New York
E 96-053	Skye and the Hebrides—Rock and Ice Climbs Vol 1 The Isle of Skye	John R MacKenzie & Noel Williams	S. M. C.	
E 96-054	Skye and the Hebrides—Rock and Ice Climbs Vol 2 The Outer Hebrides, Rum, Eigg, Mull & Iona	Dave Cuthertson, Bob Duncan, Graham Little & Colin Moody	S. M. C.	
E 96-055	Walking in Cornwall	John Earle	Cicerone Press	London

山岳図書目録——英語1997年

E 97-001	Above the Horizon	Rosemary Cohen	Allison & Busby	
E 97-002	Against the Wall	Simon Yates	Jonathan Cape	London
E 97-003	Alps 4000—75 Peaks in 52 Days	Martin Moran	David & Charles	Newton Abbot
E 97-004	Annapurna—The First Conquest of an 8000-metre Peak	Maurice Herzog	Pimlico	
E 97-005	Annapurna Circuit—Himalayan Journey	Andrew Stevenson	Constable	London
E 97-006	Arran, Arrochar and the Southern Highlands—Rock and Ice Climbs	Graham Little, Tom Prentice & Ken Crocket	S. M. C.	
E 97-007	Britain's Highest Peaks—The Complete Illustrated Route Guide	Jeremy Ashcroft	David & Charles	Newton Abbot
E 97-008	Chomolungma Sings the Blues—Travels around the Everest	Ed. Douglas	Constable	London

E 97-009	The Climb	Anatoli Boukreev & G. Weston de Walt	St. Martins Press	New York
E 97-010	Cornish Rock—A Climbers' Guide to Penwith	Rowland Edwards & Tim Dennell	Cicerone Press	London
E 97-011	Dark Shadows Falling	Joe Simpson	Jonathan Cape	London
E 97-012	The Death Zone—Climbing Everest Through Killer Storm	Matt Dickinson	Random House	London
E 97-013	Deep Play—A climber's odyssey from Llanberis to the big walls	Paul Pritchard	Bâton Wicks	London
E 97-014	The Duke of the Abruzzi—An Explorer's Life	Mirella Tenderini and Michael Shandrick	Bâton Wicks The Mountain -eers	London Seattle
E 97-015	Epic —Stories of survival from the world's highest peaks	Ed. Clint Willis	Thunder's Mouth press	New York
E 97-016	50 Best Scrambles in the Lake District	Bill O'Conner	David & Charles	Newton Abbot
E 97-017	50 Classic Routes on Scottish Mountains	Ralph Storer	David & Charles	Newton Abbot
E 97-018	The First Descent of the Matterhorn—A Bibliographical Guide to the 1865 Accident and Its Aftermath	Alan Lyall	Gomer Press	
E 97-019	Hamish's Mountain Walk & Climbing the Corbetts	Hamish Brown	Bâtom Wicks	London
E 97-020	Heart of the Himalaya—Journeys in Deepest Nepal	David Paterson	Peak Publishing	
E 97-021	High Altitude Medicine	Herb Multgren	Multgren Publications	California
E 97-022	Into Thin Air—A Personal Account of the Everest Disaster	Jon Krakauer	Macmillan	London
E 97-023	Mountain Memories—Wolverhampton Mountaineering Club 1951-1996	Hilary Clark		
E 97-024	The Mountain Weeps	Ian R. Mitchell	Stobcross Press	
E 97-025	The Munros in Winter—277 Summits in 83 Days	Martin Moran	David & Charles	Newton Abbot
E 97-026	On Foot in the Lake District 1—Northern & Western Fells	Terry Marsh	David & Charles	Newton Abbot
E 97-027	On Foot in the Lake District 2—Southern & Eastern Fells	Terry Marsh	David & Charles	Newton Abbot
E 97-028	The Ordinary Route	Harold Drasdo	The Ernest Press	Holyhead Wales
E 97-029	Oz Rock—A Rock Climber's Guide to Australian Crags	Alastair Lee	Cicerone Press	London

E 97-030	Planning a Wilderness Trip in Canada and Alaska	Keith Morton	Cordée	London
E 97-031	Recent Research on Ladakh 6	Ed. Henry Osmaston and Nawang Tsering	Motilal Banarsidass	New Delhi
E 97-032	Rescue—True Stories from Lake District Mountain Rescue	John White	Constable	London
E 97-033	Spirits of Place	Jim Perrin	Gomer Press	
E 97-034	Trekking in Bolivia—A Traveller's Guide	Yossi Brain, Andrew North & Isobel Stoddart	Cordée	London
E 97-035	Trekking in Nepal—A Traveller's Guide	Stephen Bezruchka	Cordée	London
E 97-036	Vaud—Guide to Lac Léman-Lake Geneva, Jura and Alpine Regions	Elisabeth Upton-Eickenberger	Cordée	London
E 97-037	Visions of Snowdonia—Landscape and Legend	Jim Perrin	BBC Books	
E 97-038	Walking in Italy's Gran Paradiso	Gillian Price	Cicerone Press	London
E 97-039	Zen Explorations in Remotest New Guinea	Neville Shulman	Summersdale	